
魔法少女リリカルなのはVivid ~ World Infinity ~

IKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity

【Nコード】

N8747S

【作者名】

IKA

【あらすじ】

事件が終わり、4年経った。

新たな部隊『陸宙管理本部』が設立され、相良翔は総裁となる。

4年経った今、新たな事件が始まる。

事件を通して知ることとなる、様々な事実と真実。

そして育まれる愛。 様々な想いを経て見つける結末とは・・・。

魔法少女リリカルなのは ～トライアングル・マジック～の2期。

超多数コラボな作品となっています。

オープニングみたいなもの（前書き）

かなり混ぜ込んでいるので、変な内容になるかもしれませんが、頑張ります。

オープニングみたいなもの

事件は終わり、4年経った。

相良ヴィヴィオが始める物語

一人の少女と、ヴィヴィオは出会う。

お互いの拳をぶつけ合いながら、お互いの想いを知る。

そして少女は恋をして・・・運命を変える。

でも・・・なぜ彼!?

他にも、多くの恋が交錯する。

過去最大の恋模様が描かれる。

そして時空戦士並みに鈍感な彼、翔も参戦する。

そして一人の少年の登場が、運命を大きく変える。

動きだす陸宙管理本部。

様々な世界の人がいる管理本部も、遂に動き出す。

そして事件は始まる。

大きな敵に、皆は新たな力と技と武器を得る。

だが戦いは大きな展開を見せることになる。

その結末は・・・そして襲い来る敵の目的は・・・

新たな主人公「ヴァン」スカイ」も登場。

更に数多くのオリキャラが数々の恋模様を描く。

相良翔とヴァン」スカイの物語が今・・・始まります。

謎の転校生

ヴィヴィオ「ん・・・ふにゅ」

ね・・・寝みゆい。

寝みゆいよう・・・早く起きにゃいと・・・起きにゃい・・・
t、Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z・・・

??「いい加減に起きろ！」

ゴツンッ!!!

ヴィヴィオ「はう!?!」

私は拳骨されて起こされました。

・・・痛いけど、目は覚めました。

ヴィヴィオ「・・・んひゃ!?!」

??「良いから服着ろ」

私は大人モードのまま、服を一枚も着ない状態でした。

そ、そう言えば昨日夜は激しい事をしたんだよね／／／／

??「もう朝食は出来てるんだ。さっさとしないと学校遅刻するぞ
」

ヴィヴィオ「う、うん！分かったよお兄ちゃん！」

そう。私を起こしてくれたのはなのはママ達の夫の相良翔お兄ちゃん。

何でパパじゃなくてお兄ちゃんなのかというと、お兄ちゃんがパパと呼ばれるのがいやだからです。

私は学生服に着替え、1階に行き、テーブルにつきました。

なのは「おはよう。ヴィヴィオ」

フェイト「おはよう」

ヴィヴィオ「なのはママ！フェイトママ！」

二人が先に席に付いて朝食をとっていました。

相良「さつさと座って飯食え〜。・・・さて、俺はもう出るか。行ってきます〜」

お兄ちゃんは私が座るテーブルの上にホットミルクを置いて、鞆を持って走って出ていきました。

なのは・フェイト・ヴィヴィオ「行ってらっしゃい〜！」

その後、私は朝食を食べて、学校へ向かった。

学校に着くと、私のクラスには友達がいます。

私はここ、「St・ヒルデ魔法学院」私は初等科四年生です。

??・??・??・??・??・??・??・??・??・??「ヴィヴィオ（ン）おはよう！」

ヴィヴィオ「おはよう!・・・ん？」

今・・・一人だけ、私の名前の最後に「ン」を付けた気がする。

銀髪のツインテールで青い瞳をした女の子と紫色の短髪で抹茶っぽい目をしたのが「コロナ・ティミル」と「リオ・ウエズリー」という二人と、最近この学校に転入してきた、紅いロングテール髪に紫の瞳をした女の子と緑色の短髪の髪をして、瞳が黄色い男の子の「リオナ・カミナ」と「ヴァン・スカイ」の二人がいる。

リオナ「（*^o^*）オハー ヴィヴィオン」

リオナか！私の名前の最後にンを付けてたのは!？

コロナ「リオナ。あんまりヴィヴィオをいじめちゃダメだよ」

リオナ「大丈夫。大丈夫。ヴィヴィオンはいじめられている時が、一番輝いている時だから」

ヴィヴィオ「誤解を招くようなことを言わないでよ！！」

そう。リオナは悪戯とかが大好きな子で、私だけじゃなくてヴァン君にちょっかいを出したりしてる。

リオ「相変わらずだね。リオナは」

ヴィヴィオ「ははは・・・らしいけどね」

今リオナはコロナと口喧嘩している。

私たちからすれば仲のいい女子にしか見えないけどね。

ヴィヴィオ「ねえヴァン君」

ヴァン「ん？どうしたヴィヴィオ」

このヴァン君は、私達の中で唯一の男子です。

だからたまに一人で読書をしてたりしてて、私たちで話しかけたりしてます。

ヴィヴィオ「実は昨日、お兄ちゃんにデバイス貰ったんだ」

ヴァン「！本当か！？」

ヴィヴィオ「うん だから、ヴァン君と今度一回勝負したいんだけど良いかな？」

ヴァン君は既に何年か前からデバイスを持っていたらしくて、戦うことができる。

お兄ちゃんが働いている陸宙管理本部に入隊することが目標らしいです。

ヴァン「いいけど、ヴィヴィオは格闘技ストライクアーツだっけ？」

ヴィヴィオ「うん」

そのほうがいってお兄ちゃんにすすめられたからだから、本当に私に向いているのが何かはわからないけど。

ヴァン「そうか。 だったらヴィヴィオの兄さん、相良翔さんの刀をヴィヴィオは一回戦ったら良いよ」

ヴィヴィオ「？何でそんなことをしないといけないの？」

普通にOKしてくれば良いのに……

ヴァン「いや、僕は格闘技“だけ”じゃないからさ。 一度は一番強い人と軽く戦ってからのほうがいいと思うんだ」

だけ……ヴァン君は格闘技以外にも、何か出来るのかな？

ヴァン「後は技でも増やしてから……大体3つくらいは欲しいな」

ヴィヴィオ「それって、ヴァン君が本気を出しただけじゃないの？」

そう言うとヴァン君は舌をぺろっとだして

ヴァン「バレた？」

ヴィヴィオ「バレバレだよ!!」

ヴァン君は苦笑いしながら言った。

ヴァン「ま、最近強い奴に会えなくてつまらないんだ。ヴィヴィオだったら僕を本気にさせてくれるはずだから期待してるんだよ」

ヴィヴィオ「それ本当!？」

ヴァン君が私を期待してくれてる。それは嬉しい。

元々ヴァン君は強い。

喧嘩も強いし、実力がある。

だから、そんな人に期待されるのは嬉しい。

私は彼の両手を握っていった。

ヴィヴィオ「私、がんばるから!だから、今度全力の勝負しよう!」

ヴァン「お、おう／＼分かったからその手を離せ」

ヴィヴィオ「ふえ！？あ、ご…ごめん！」

わ…私、何で握ったんだろう！？

私は素早くその手を離れた。

するとリオナ達はニヤニヤして私とヴァン君を見ていた。

リオナ「あんたら二人いい感じじゃない」

リオ「恋の予感？」

ヴィヴィオ「ち、違うもん！私はお兄ちゃん命ラウだもん！！！」

ヴァン「流石ブラコン…しかも兄好きって重傷だぜしかも年の差かなりあるし」

ヴィヴィオ「恋に年の差なんて関係ないよ！！！」

コロナ「この年でその言葉は早い気がするんだけどな…」

ま…周りの目が酷い…

いいもん！私は絶対にお兄ちゃん以外は好きにならないもん！

そう思いながら、私は席について授業を受けた。

相良 Side

一方その頃、噂をされまくっているヴィヴィオの兄こと相良翔は？

相良「はつくしゅん!!」

盛大にくしゃみをしていた。

ギンガ「翔さん、大丈夫ですか？」

そう言っただけにティッシュを渡してくれた。

俺はそれを使って鼻を拭いた。

ルチア「風邪でもひいちゃった？」

相良「分かん。取り敢えずジェイルのここに行って検査してくるよ」

そう言っただけ俺は書類のいくつかを持って、ジェイルがいるところに向かっていた。

ヴィヴィオ Side

今日、私達のクラスに転校生が来るらしいです。

何でも家庭の事情で引っ越してきた男子だって言ってた。

私はクラスの真ん中の席に座っていて、右隣にヴァン君がいる。

リオナ達は少し離れてて、リオナは一番後ろの窓際の席で寝ていた。

先生「それでは転校生を紹介します。入ってください！」

そう言うと、教室のドアがあいて、一人の男子生徒が入ってきた。

ヴァン「！」

パシイイイン！！！！！！！

ヴィヴィオ「!?!」

突如、ヴァン君は動いたと思ったら一瞬で教室に入ってきた転校生に殴りかかった。

転校生の彼はそれを両手で止めた。

先生「ヴァン君!？」

先生も慌て出した。

もちろんクラスの全員も、何が何なのか謎だった。

リオ「ちょっとヴァン!どうしたのよ!？」

コロナ「ヴァン君・・・」

ヴァン君はそのまま転校生の彼とにらみ合った。

そして話し出した。

ヴァン Side

ヴァン「お前、何者だ？」

静かな声で、クラスのみんなには聞こえないような声でそう聞いた。

転校生の奴は表情ひとつ変えず、無表情で答えた。

????「俺の事、お前にはどう見える?」

ヴァン「見たと言うよりも、お前からは残酷な風と血の臭いがする。

まるで、人殺しのような・・・そんな感じのな」

そう言うと奴はニヤリと笑い、言い始めた。

???「人殺しか・・・確かに、殺したことはある。だが安心しろ。殺したのは、“殺されるべくして殺されたクズ”しかない」

まるで罪人を裁いた人の意見だ。

それじゃこいつは・・・

ヴァン「・・・お前は、ジャッジメント断罪者なのか？」

???「断罪者が・・・間違っていない。確かに、俺の力は裁く為の力。だから・・・悪は潰すし。正義は生かす」

ヴァン「！」

今、一瞬だけ、こいつの空気が変わった。

こいつ・・・取り敢えず悪い奴じゃないみたいだ。

裁いた奴がどんなやつか、聞いてみないとただけどな。

俺は拳をしまい、手をさしだした。

ヴァン「俺はヴァン＝スカイだ。宜しく」

芳乃「俺は芳乃零よしのれいじだ。宜しく」

髪は黒く、僕と身長が同じくらいな奴は、そう言った。

そして僕達は握手をした。

握るときに、少し力をいれたのは、挨拶変わりだ。

ヴァン・芳乃「これから、宜しく頼むぜ」

僕と零二はそう言った。

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「・・・ヴァン君・・・」

二人は何かこそと話して、気づいたら握手して挨拶をしていた。

そしてヴァン君は席に戻って座った。

先生もホッとしたよう。

そして挨拶はすすめられた。

先生「そ、それでは自己紹介をお願いします」

そう言うと彼はチョークを持って黒板に自分の名前を書き始めた。

芳乃「俺の名前は芳乃零二。違う地球ってところからやってきた。好

きな食べ物は何でもかき混ぜるが、辛いものと食べない。嫌いな食べ物は特
にない（が、“サクラ”のカレーだけは・・・二度と食いたくねえ）
。得意な事は喧嘩と動くこと。苦手なことは基本的にはない。他に
質問があるやつは後で聞いてくれ。そんじゃ宜しく」

礼儀正しい・・・訳ではないけど、しっかりとした挨拶をした彼。

一体ヴァン君は何を考えて殴りかかったんだろう・・・

先生「それでは芳乃君の席は・・・カミナさんの隣でお願いしま
す」

芳乃「わかりました」

そう言って彼は一番後ろのリオナの右隣の席に座った。

その時、リオナは起きていて、真剣な眼差しで彼を見ていた。

リオナ Side

芳乃「宜しく。カミナだったけ？」

リオナ「ええ。リオナで良いわ。それよりも、あなた・・・一体何者？」

芳乃「・・・ヴァンと同じことを聞くんだな」

やっぱり。突然彼が殴りかかったから私も驚いたけど、この芳乃零二つて人・・・何かある。

リオナ「まあ聞かなくても、あなたの目を見れば分かったわ。あなた・・・何人か人を殺したことがあるわね？」

芳乃「・・・ああ。裁いてきた」

裁いた・・・ということは、ジャッジメント断罪者

でも、地球って魔法がない世界って聞いたことがあるけど・・・どうして？

リオナ「あなた、どんな魔法が使えるの？」

芳乃「それは内緒だ。別に戦いに使えるものじゃない。ま、戦う力もあるけどな」

どっちよ・・・

リオナ「まあ良いわ。ヴァンが握手をしたってことは、あなたの事を信じてるってことだものね」

芳乃「そうなのか？」

リオナ「ええ。だから、私は取り敢えずはあなたを信じる。別に裏切られても、戦ってなんとかするわ」

芳乃「お前も・・・強そうだな」

リオナ「別に。強くなりたくてなったわけじゃないわ」

芳乃「？」

リオナ「あなたには関係の無い話よ。ま、これからも宜しくって」と

芳乃「・・・ああ」

ヴィヴィオ Side

リオナも、あの芳乃さんに話をしている。

一体・・・何があったんだろう？

そして・・・彼は、なんなんだろう？

謎の転校生（後書き）

彼は言った。

自分のことを断罪者だと。

それはつまり、悪を制裁してきたこと。

だとするならば、別に悪ではない。

裁き方にもよるけど・・・少なからず彼は悪ではない。

そう・・・ヴァンとリオナは信じている。

小さな事件と出会い（前書き）

謎の転校生が現れたその日、陸宙管理本部では小さな事件を調べていた。

その事件は、ひとつの出会いとなる。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty } 始まるよ

小さな事件と出会いと

相良 Side

俺達は今、会議室にいる。

会議室には俺、ジエイル・ルチア・ノーヴェ・ウエンディ・ディエチ・チンク・シュテル・ギンガがいる。

俺は皆の真ん中に立ち話し始めた。

相良「今回の内容は連続傷害事件になりそうな事件だ」

そう言つてモニターに映像を出した。

相良「犯人はヴィヴィオ達がいる学院の学生で、被害者は主に格闘系の実力者、そういう人に街頭試合を申し込んで」

ノーヴェ「フルボッコにしてる？」

相良「そういうこと。目的は不明。そんで彼女は自称「霸王」イングヴァルト。古代ベルカの聖王戦争時代の王様の名を名乗っている。本当にそうなのかは分からないけど、ま、実力は確かだ」

ノーヴェ「ま、あたしだったら逆フルボッコだな！」

相良「何言つてんだ。相手は学生だ。実力行使しないとイケないとは決まってるない。ま、もしもの時は俺が戦う」

シユテル「翔さんが行かずとも私が消しますよ?」

相良「待て。消しちゃ駄目だから。だから二人は行かせたくないんだよ」

チンク「だけど、今どきの子供が話して分かってくれるか?」

そう。なぜか今どきのガキはOH・A・NA・SIをしないと理解してくれないらしく、普通のお話はきかない。

そして最近の事件は若者の容疑者が多い。

命の重みを理解できないクソったガキがいる。

相良「ま、最悪の場合は実力行使になるけど、バインドで拘束すれば大丈夫だろう」

ギンガ「翔さん。私も手伝いますけど・・・」

ルチア「そうよ。何も総裁のあなたが行く必要ないでしょう?」

まあ確かにそうだ。でも・・・

相良「俺さ、妹がいるせいかしらんけどさ、学生の事件は俺が解決させたいんだ」

子供はわがままで。その原因は周りの環境だったり、過去の傷が原因だったりする。

その傷を、俺が知らないでいるのは辛い。

だから・・・知りたいんだ。

彼女たちの想いを・・・皆の上に立つものとして・・・

ジェイル「彼女の居場所は既に調べは付いている。いつでもOKだよ」

速！？流石だな・・・

相良「分かった。みんな。今日はさっさと帰れ。俺は今から街を歩いて彼女を探してくる」

全員「わかりました」

そうして会議が終わる。

そして俺は今、夜の街を歩いていた。

相良「ロード。反応は？」

ロード「近くにいます。武装しますか？」

相良「いや、今回は俺一人で戦う。ロードは待機モードだ」

ロード「了解しました。マスター。ご武運を」

そう言っただけロードはスリープモードに入った。

相良「さて……そろそろか」

???「陸宙管理本部総裁の、相良翔とお見受けします」

現れた。

薄い緑色の髪をし、紫と蒼のオッドアイの彼女は落ち着いた様子で俺に話しかけた。

相良「……そうだけど？君は？」

取り敢えず何も知らないフリを試してみた。

イングヴァルト「カイザーアーツ正統「ハイディ・E・S・イングヴァルト」……「霸王」を名乗らせて頂いています」

相良「イングヴァルト……本人が聞いたら悲しむぞ。こんな通り

魔なことして」

イングヴァルト「通り魔・・・否定はしません」

相良「君の目的は？」

イングヴァルト「私の目的は聖王オリヴィエのクローンと冥府の炎王イクスヴェリアの所在についてです」

相良「！」

なるほど。ヴィヴィオとイクスカ・・・

イクスは現在聖王教会だ。ヴィヴィオはなのは達という。

相良「悪いけど、教える訳にはいかない」

イングヴァルト「そうですね・・・なら、もう一つ伺いたいことがあります」

そう言っただけで彼女は、拳を構えた。

イングヴァルト「私の拳とあなたの拳・・・一体どちらが強いかです」

相良「へえ・・・話は聞いてくれないみたいだな」

そう言っつて俺も構えた。

イングヴァルト「行きます！」

そう言っつて彼女は素早いステップで俺に接近し、一撃をいれた。

相良「おお・・・」

俺はそれを右手で逸らし、逸らした勢いで回転し、回し蹴りをした。

イングヴァルト「っ!!」

彼女は両腕で防御したが、防御しきれず3mほど蹴り飛ばされて着地した。

相良「（あの歳でいい腕してる。結構鍛えてるな・・・）」

イングヴァルト「!!」

俺は一瞬で彼女の目の前に行き、左拳で殴りかかった。

彼女はそれを見切り、紙一重でかわした後俺の懐に入り込み、アッパ―をした。

そして俺は上に飛ばされた。

相良「うお・・・っと」

俺は何もなかったように着地した。

イングヴァルト「(今、拳を避けられた・・・)」

彼女は驚きを隠せずにいた。

全ての攻撃を避けられている。

かすりもしない。

今までの相手が弱かったからか知らないが、今の相手に本気で戦えると思った。

相良「強さを知りたいのか？」

イングヴァルト「はい。私は・・・強くなりたいんです」

相良「へえ(そう言えば、六課にいた頃のスバルもそんなことを言ってたな・・・)でもさ、こんなことしなでもさ、他にもジムに行くとかどうかすれば出来るだろう？俺、結構いいジム知ってるから教えるぞ？」

イングヴァルト「ご厚意痛み入ります。ですが、私の確かめたい強さは、“生きる意味”は“表舞台”にはないんです」

表舞台・・・生きる意味？

そんな考えをしているとき、彼女はある構えをした。

相良「!?(あの構えた・・・この距離でだぞ!?空戦か?射砲撃か?)・・・ち!」

考えている途中で彼女が近づいてきた。そして攻撃してきた。

俺は考えながらよけ続けた。

相良「突撃してきた!?しかもこいつ速い!ストライクアーツとは違う動きだ!」・・・くそ!」

俺は仕方なく彼女の一撃に自分の拳をぶつけた。

相良「くっ!」

イングヴァルト「っ!」

お互い、衝撃に吹き飛ばされ、着地した。

イングヴァルト「列強の王達を全て倒しベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべき事です!」

相良「・・・悪いが今は王様とか聖王とか霸王とかの時代じゃない。皆死んでっつたし、末裔とかクローンとかは皆普通に生きてるんだよ」

イングヴァルト「弱い王なら、この手でただほふるまで」

相良「させないよ。この俺が!!--!」

イングヴァルト「なぜですか?」

相良「お前は、何も知らないんだな。歴史の裏には、必ず悲しみが
あるんだよ!!光に影があるように、コインの表と裏があるように、
ベルカの戦乱も、聖王戦争も、得るものは領地とか土地とかで、終
われば幸せかもしれないけどな、失ったものの数は、それ以上なん
だよ!その重さも、その悲しさも、その苦しさも全部・・・得たも
のより多いんだよ!!もう・・・終でいいじゃないかよ!!あんな
悲しみを・・・また生まないといけないわけないだろう!!」

俺は彼女の目の前まで走り、左拳をぶつけた。

だが、それをくると回転してかわされ、彼女は俺の右隣で構えた。

イングヴァルト「まだ・・・終わってないんです。私にとっては・・・
・・・まだ、何も」

そして・・・

イングヴァルト「霸王断空拳!!!!!!」

彼女は俺に手刀を放つ。

俺は近くの電柱に背中をぶつけた。

相良「ぐっ！」

イングヴァルト「弱さは罪です。弱い拳では……誰も……誰の事も守れないから……」

そう言って彼女は去ろうとした。

相良「それってさ、本当に罪なのかな？」

イングヴァルト「!？」

先ほど電柱に倒れた彼が、彼女の目の前にいた。

何があったのか、彼女は理解できないようだった。

相良「本当に、強くないといけないのかな？」

イングヴァルト「当然です！失うんですよ!？弱いと・・・大切な者をいくつも失って・・・後悔して・・・」

悲しそうに、そう言った。

相良「強かったら、何も失わないのか？」

イングヴァルト「そうです！」

なんの迷いもなくそう言った彼女の瞳は、潤っていた。

相良「強くても、失うんだよ。強いから・・・失うことだって・・・あるんだよ」

イングヴァルト「嘘は言わないでください!!霸王・・・断空拳!!」

相良「嘘じゃないよ・・・」

そう言って俺は手刀を放つ彼女の腕を掴んだ。

イングヴァルト「な!？」

相良「だって・・・皆、強いのに、悲しみを背負ってるんだから」

そう言って俺は左拳に白銀の魔力を集めて・・・

相良「ソニック・ダスト」

イングヴァルト「がっ・・・」

拳を彼女の腹部に叩き込み、気絶させた。

相良「一体・・・何があつたんだ?そこまで強さを求めて・・・手に入れたいものってなんだよ」

その声は、誰の耳にも届かず、ただ夜の風にかき消された。

小さな事件と出会いと（後書き）

求める強さと、失うことへの恐怖。

俺も、失うことは怖い。

でも、逃げちゃ駄目だって知ってるから・・・

スバル「事情聴取にはカツ丼が基本だね！」相良「刑事が食べるものじゃないぞ
戦いの意味は生きる意味と言った彼女。

目的は、守ることと強くなること。

強くなれば、次は守れるからと・・・必死でいた。

でも・・・本当にそれでいいとは、俺は思わない。

そのままだと・・・大切なものを失うことになるから・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infini
ty 始まるぜ！

スバル「事情聴取にはカツ丼が基本だね！」相良「刑事が食べるものじゃないぞ

イングヴァルト？ Side

イングヴァルト「・・・あれ、ここは・・・」

私は気づくと、真つ白な布団に仰向けで寝ていた。

右にはりんごを綺麗に桂剥きしている人がいる。

??「あ、気がついたか？」

えっと・・・この人は確か・・・

イングヴァルト「はい。ここは？」

相良「陸宙管理本部にある医務室な。あ、君の荷物とか制服とか生徒手帳はこちらで預かってる。悪いなかってに」

イングヴァルト「いえ・・・」

彼はりんごを向き終わり、白い皿に盛り、フォークに指して私に渡した。

相良「取り敢えず食べる。昨日から何も食べてないだろう？」

イングヴァルト「あ・・・(ぐううう)(／／／／／／／／」

お・・・お腹が勝手に／＼／＼／

相良「お腹は本当に正直者だよな。遠慮せずに食べな」

彼は笑いながらそう言った。

イングヴァルト「はい／＼／＼では、お言葉に甘えて／＼／＼」

そう言っただけ私はいんごを食べ始めた。

相良「食べながらで良いから話を聞いてくれ。君はこれから事情聴取を受ける・・・と言っても君がしたことにかんして被害届は出てない。そして昨日は俺から手をだしたことから無罪。だから、正直に答えてくれればすぐに返すよ。学校には俺から話は通してある。昨日事故にあって病院にいますっつてな」

あ・・・そんなことまで、してもらっていたんですか。私・・・

イングヴァルト「あ、ありがとうございます」

相良「そういうところはしっかりしてるんだな。アインハルト・ストラス」

！？私の名前・・・

相良「悪いな。事件の調査の段階で既に君の名前は調べさせてもらってる。Stt・ヒルデ魔法学院の中等科1年だろ？調べればこんなすぐわかるんだぜ？」

アインハルト「・・・すみません」

私は諦めて、謝った。

相良「ねえ、君はさ。聖王や冥王を・・・ぶっ飛ばしたいのか？」

アインハルト「いえ、私はただ・・・古きベルカのどの王よりも、霸王のこの身が強くなること。それを証明できればいいだけです」

相良「なるほど・・・良かった。殺したりする訳じゃなくて・・・兄として安心したな」

別に殺そうなんて考えてはなかった。戦いで死ぬのは覚悟してますが・・・ん？

アインハルト「あの・・・兄ってどういうことですか？」

相良「え？あ、そうだったな。俺、相良翔は相良ヴィヴィオ・・・聖王のクローンの兄なんだ」

アインハルト「え・・・えええええ！？」

そ・・・それじゃ・・・

相良「あ、いや、別に俺の遺伝子には聖王はないぞ」

あ、そうでしたか・・・

相良「悪いな。妹達がほふられるのはまっぴらごめんだったからつい本気だしそうになっただ」

ロード「とか言いつつ、マスターは右利きなのに左手だけで戦っていましたよね」

アインハルト「そうなんですか？」

相良「あ・・・えと・・・まあな」

つまり・・・あれでまだ半分も力を出してない・・・

まだ、私は弱いんですね。

相良「どうだ？強くなりたいか？」

アインハルト「それはもちろん！！」

強くなれるのなら、何だってする！

相良「・・・どうしてもか？」

アインハルト「はい。私は・・・強くなりたいです」

ロード「・・・」

相良「ロード。良いよな？」

ロード「構わないと思います。別に隠している訳でもないですし」

相良「分かった。そんじゃアインハルト。ちょっと来い」

アインハルト「あ・・・はい！・・・／／／／／／／／」

あ・・・あれ？下が／／／／

相良「あ、ごめん。スカートそこ」

アインハルト「は／／／はい！！」

私はスカートはいてない状態だった。

テーブルの上に置かれていたスカートを慌てて履いて私は彼を追いかけた。

相良 Side

俺はアインハルトを巨大な空間に連れてきた。

アインハルト「あの・・・ここは？」

相良「ここは訓練所。俺の部隊は皆ここで訓練をしている」

アインハルト「ここで・・・ですか？」

相良「ああ。何もない空間で、皆一人一人自分の弱点を克服するために努力している」

アインハルト「弱点・・・」

考えてるな。いいことだ。

この歳であれだけ悩めば、速いうちに強くなるだろうね。

相良「そんじゃ、今日は何度でも相手してやる！やるぞ！」

アインハルト「え！？良いんですか？」

相良「強くなりたいって気持ちは分かるからな。俺が君の師匠にでもなってやるから、色々叩き込んでやる」

アインハルト「・・・ありがとうございます！」

頭を下げ、彼女は構えた。

アインハルト「武装形態」

彼女はBJを着て、オトナモードになった。

アインハルト「行きます！」

相良「来い……」

アインハルト Side

そしてこの日は、私がヘトヘトになるまで戦い続けた。

アインハルト「はあ、はあ、はあ、はあ」

相良「アインハルトは結構体力あるな……びっくりしたよ」

アインハルト「い……いえ。はあ……はあ」

結局、一回も勝てなかった。

しかも翔さんは左手だけで私を倒した。

相良「動きは全然悪くない。でも、やっぱりまだまだ中等科で学生

だ。学生なのにここまで強いとびっくりだよ」

アインハルト「あ、ありがとうございます」

そして私は時計を見ると、時刻は午後23時を過ぎていた。

相良「あ、と……やりすぎたな……」

アインハルト「クスツ……そうですね」

私と翔さんは笑っていた。

相良「しゃーねえ！。今日はここに泊まってけ。ここは部屋も完備されてるから」

アインハルト「え！？良いんですか？」

相良「ああ。夜ごはんとかは俺が作るから、行くぞ」

アインハルト「は……はい……あっ」

私は立とうとしたとき、疲れで足が上がらず、その場に倒れそうになった。

相良「おっと。大丈夫か？」

アインハルト「は／／／／はい／／／大丈夫です／／／／」

私は翔さんに抱きとめられる形となった。

相良「よいしょっと」

アインハルト「え!?!」

私は彼におんぶをされた。

アインハルト「え／／／あ／／／あの／／／」

相良「このままでいる。疲れてる時くらい、正直になれ」

アインハルト「・・・はい」

そのまま私は顔を赤くした状態で翔さんの部屋まで運ばれた。

相良「少し待ってる」

アインハルト「は／／／はい／／／」

私は翔さんの部屋のソファアの上に座っていた。

男性の部屋に入るのは初めてだから、何か緊張するし、ソワソワする。

翔さんは隣の台所を使って何か料理を作っている。

私は、それを待ちながら部屋を見回していた。

すると私は一枚の写真を見つけた。

ウェディングドレスに身を包んだ女性たちと、スーツを着た翔さんの姿。

相良「それ、俺の妻達と結婚した時の写真だよ」

そう言っつて翔さんはお盆の上に二つの井を置いて持ってきた。

アインハルト「すみません。勝手に見て・・・」

相良「いや良いよ。さて、どうぞ」

そう言っつてテーブルに置いたのはカツ井だった。

相良「取り敢えずここは警察みたいなものだからそれにちなんでカツ井です」

アインハルト「・・・警察？」

初めて聞いた言葉ですね。

相良「あ、そうか。ごめんごめん。ミッドでは管理局や地上本部の事なんだ。地球ではそれらを総称して警察って言っんだ」

アインハルト「そうなんですか・・・」

詳しいですね。

相良「ま、いいや。取り敢えず食べよう」

アインハルト「はい！」

そう言って私は夜ごはんを食べてた。

アインハルト「あの・・・別にそこまでして頂かなくても・・・」

相良「いや、学生なんだから甘えなさい」

私はその後、湯までお借りして、今はベットまで貸してくれるとのこと。

でも、それでは翔さんはソファで寝なければいけません。

アインハルト「ですが、翔さんはこの本部の総裁なんですよ!？」

相良「いや、別にそんなこと気にしないけど」

アインハルト「気にしてください。皆が、必要としているんですよ?」

この若さで総裁になって、皆から期待されている人が、私なんかのために疲れては私も困ります。

相良「ははは。そう言ってもらえると嬉しいけどさ、女の子にベツト譲るのってさ、男の仕事なんだ。だからこの行為に甘えてくれな
いか?」

だったら・・・何か方法は・・・あ／／／／／

アインハルト「・・・で、でしたら・・・その・・・」

相良「?」

アインハルト「私と／／／一緒に寝ませんか?」

相良「・・・へ!？」

アインハルト「わ、私は別に困りませんし／／／翔さんに迷惑をかけるわけにはいきませんし／／／」

相良「あ、いや／／別に、君さえよければ／／俺もそれでいい

けど／／／」

アインハルト「はい／／／／」

私と翔さんはその日、一緒のベッドで眠りをついた。

相良 Side

相良「(ね・・・寝られねえ・・・)」

まさに事件だ。

アインハルト「すう・・・ふにゆ・・・」

ぐっすり寝てる・・・相当疲れてたんだな。

いや、でも俺は寝れない・・・非常に寝れない。

寝てる間に変なことをしないか不安で寝れない!!!!!!

つまりは、この小説を俺が寝ている間にR - 18にはしたくないと言っことだ!!--!

相良「はぁ・・・どうしよう・・・っ!?!?」

アインハルト「うにゅ・・・」

な・・・なんてこった!?

彼女が背後から抱きついてきやがった!?

う・・・動けない・・・

今の状態。

俺はアインハルトに背を向けている。

アインハルトは背後からピッタリとくっついている。

俺は抱き枕かなにかか?

寝られねえ・・・

結局その日、俺は寝ることができませんでした。

アインハルト「んん……………むにゃ……………」

スバル「事情聴取にはカツ丼が基本だね!」相良「刑事が食べるものじゃないぞ
強くなりたいという純粋な想い。」

その想いに答えてやろうと思った俺。

彼女には、正しく強くなってもらいたい。

まだ、心の中に持っている悩みが彼女にあるはずだ。

それを解決させたい。

だけど・・・それは、俺にはできない。

俺は、聖王とかでも無ければ冥王でも霸王でもないから・・・

きつと、分かってあげられるのは・・・

ティアナ「冥王って冥王星から来た人ですか？」相良「そんなわけねえだろうっ
強さを求める子との出会い。

それは、ひとつの物語の始まりとなる。

そして少年とその妹は、一人の冥王に会いに行く。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty はっじまるよう！

ティアナ「冥王って冥王星から来た人ですか？」相良「そんなわけねえだろうっ」朝になり、アインハルトは転送魔方陣部屋に向かわせ、転送魔法で家に行った。

俺は取り敢えず昨日は誰の家にも行かなかったので、アリシア・リニス・キャロ・エリオ・ルーテシア・メガーヌ・カリム・シャツハのいる家に向かった。

さて・・・

相良「転送！」

そう言っただけ俺は転送魔法陣に乗り、自分の家の玄関まで転送した。

相良「よっと。ついた〜」

????「あれ？翔さん？」

相良「あ、リニス」

耳としっぽを隠すような服装をしたリニスが買い物袋を持っていた。

相良「あ、ひとつ持つよ」

リニス「ありがとうございます」

俺はひとつの買い物袋を持って家に入った。

アリシア・レヴィ「……(ぷしゅ~~~~~)」

相良「な……何だこれは？」

アリシアとレヴィが頭から煙をだしてショートしてる!?

シャツハ「あ、翔さん！」

カリム「おかえりなさい！」

相良「あ……ああ」

エリオ達は保護地区にいるのかな……

メガーヌさんはきつと母さんと一緒に仕事に行ってるかな……

相良「あのさ、アリシアとレヴィに何があった？」

カリム「シャツハが二人に勉強を教えていたら二人が燃え尽きたみたいですよ」

そう言うとシャツハは顔を真っ赤にした。

シャツハ「ふ、二人の覚えが悪いんです!!」

相良「は・・・ははは・・・」

相当厳しいのかな？

相良「ああ、そうそう。カリム。今日、イクスに会いたんだけど良いかな？」

カリム「彼女にですか？」

相良「ああ・・・」

冥王イクスヴェリア。彼女はついこの前、マリアージュ事件と呼ばれる事件解決後、聖王教会で寝たきりになっている。

週に2〜3回は会いに行ってる。

ま、俺とヴィヴィオが言いたいこと言いまくってるだけだけだな。

カリム「わかりました。では、早速行きましょう。シャツハ。二人を頼みます」

シャツハ「はい。行ってらっしゃいませ。騎士カリム。翔さん」

相良「あ、その前にヴィヴィオを呼ばないと」

カリム「そうですね。では早速」

相良「ああ」

俺とカリムはショートした二人の屍？を無視してヴィヴィオがいる
であろうなのは達の家に向かった。

なのは・フェイト・アリサ・すずか・アイン・ヴィヴィオ・シュテ
ル・アーチェ・ルチア「……」

相良「……えと……」

俺は家に着くと、正座にさせられた。

そして全員にバインドでぐるぐる巻にされた。

首からはバインドで埋まっている。

ある意味ミイラ状態だ。

なのは「昨日、部屋に女の子泊めたらしいね」

もうバレてるし……

フェイト「一緒に寝たらしいね？」

それもバレてるし……

アリサ「あなた、私たちという存在が居ながら、良い度胸ね。風穴
開けるわよ？」

声の人が同じだからってセリフはパクっちゃいかんって。

すずか「私たちじゃ満足できないの？」

そんなわけないじゃないですかマイ八二一

アイン「悪いが、正直に言わない限り動くことはできない。そして、徐々に締め付けていくぞ」

ああそうだね。凄く締め付けられていたいよ。

シュテル「もっと大胆になるべきですか？」

いや、シュテルがこれ以上つてもはやR-20だよ。

アーチエ「まさか、貴様はここまで我で遊んで次の女に手を出すとは……」

人聞き悪すぎだろう……

ヴィヴィオ「前に私としたのに、もう飽きたの？」

止めてえええ!!!それ以上言わないでえええ!!!

ルチア「私たちというのがありながら……あなた、ブラックホルメテオ・ブレイカーでも喰らいたいの？」

あんたマジで悪魔化すんな!!!

カリム「翔さん……本当ですか？」

相良「違つからね!! いくつか間違いがあるからね!!」

それから5時間。妹と妻達に説明をして、何とか許してもらった。

そしてようやく聖王教会についた。

相良「まだバインドの痛みが・・・」

ヴィヴィオ「お兄ちゃんが悪いんだもん」

カリム「注意するようにと言われてたのに・・・」

相良「あんたらは腕にひつついた状態で言うな」

カリムとヴィヴィオは俺の腕に抱きついてあるいている。

ここって神聖なる場所じゃないの!?

・・・もう良いよ・・・

そして俺達はイクスががいる場所にたどり着いた。

相良「おーいイクス！会いに来た・・・・・・・・ぞ」

ヴィヴィオ「！」

カリム「嘘・・・」

俺達は衝撃を受けた。

部屋には、寝たきりでいたはずの彼女イクスが上半身を起き上げながら、窓から外を見ていたのだ。

イクス「あなたは・・・相良翔・・・でしたね」

相良「イクス！！！！！」

俺は喜びのあまり彼女を全力で抱きしめた。

イクス「か／／／翔殿！？／／／」

彼女は顔を真っ赤にさせていた。

ヴィヴィオ「……（何かイライラするな……）」

カリム「（し……仕方ないですね。今回は多めに見れば……）」

相良「良かった。本当に良かった!!!!!!」

イクス「あ／／／／あう／／／／」

それから俺は10分ほど彼女を抱きしめ、頭を撫で続けた。

イクス「／／／／／／」

相良「すまん」

取り敢えず俺は離れて今、彼女の隣の席に座っている。

カリムとヴィヴィオも座っている。

カリムは俺たちに為に紅茶を出してくれた。

カリム「どうぞ。落ち着きますよ」

相良「ありがとう。……うん。美味しい。流石カリムの入れる紅茶はうまい」

カリム「そうですね／＼ありがとうございます／＼／＼」

ヴィヴィオ「(わ……私だって紅茶くらい……)」

相良「それでイクス。どうだ、落ち着いたか？」

イクス「はい。あのときは、すみませんでした」

相良「いやいや、謝らなくていいよ。君が大丈夫ならそれでいい」

イクス「……はい」

あ、そう言えばこれで聖王と冥王が揃ったな。

そんじゃ話すか。

相良「今日はさ、ヴィヴィオとイクスに關係する話なんだ」

ヴィヴィオ・イクス「？」

相良「実は昨日、霸王イングヴァルトの遺伝子を持つ子に出会ったんだ」

イクス「！本当ですか!？」

相良「ああ。彼女は二人に会って、戦いたいと思っているらしい。ま、俺が止めるけど」

ヴィヴィオ「その人強い!？」

おい、食いつくなよ……

相良「ま、ヴィヴィオよりは強いな」

ヴィヴィオ「ぶ〜!!そんなことないもん!」

相良「じゃ、今度会って戦ってみろよ。俺の訓練受けるから最初よりも強いぞ」

ヴィヴィオ「そ……そうなの!？」

イクス「翔殿の訓練は、楽しいのですか？辛いのですか？」

ヴィヴィオ・カリム「辛いです!!!!!!!」

おい。そんなに厳しいか？

相良「ただたんに訓練所1522周に腕立て+腹筋を5000回を毎日やらせてるだけだけどな・・・」

ヴィヴィオ・カリム・イクス「辛すぎです!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

相良「・・・マジ？」

そんなことないと思うんだけどな・・・。

カリム「それで、イクスはこれからどうするんですか？」

相良「いや、家で預かるけど」

イクス「本当ですか!?!」

嬉しそうだな・・・

相良「ま、家族が増えるなら嬉しいし」

イクス「そ……それでは、父上とお呼びしたほうがいいですか？」

相良「いや、俺は父には向いてないから兄でいいよ。ヴィヴィオも俺の事を兄と呼んでるし」

カリム「そろそろ父と呼んでもいいんじゃないですか？」

相良「いやいや、俺マジで父さんとか無理。こんな父ありえないから」

イクス「そ……そうですね。それでは、お、お兄様と呼んでもいいですか？」

相良「兄様って……」様「つけるんだ」

それって何かのエロゲにありそうだな。(おにいさまぁ〜みたいな感じ?)

カリム「やつぱり翔さんってロリコン」違っからね!!!」いえ、ここまで来たら説得力ないですよ」

相良「マジか……」

それは困った……のだが、もう仕方ない!

相良「ま、まあいいや。そんじゃ、家に行くか？」

イクス「……はい!お兄様!」

うっ!ドキッときた……

イクス「あ……あれ？」

相良「あ！」

俺は立とうとして立てず、倒れそうになったイクスを抱き止めた。

相良「ふう……そう言えばまともに歩いたことないんだっただな」

イクス「はい……申し訳ございません」

相良「敬語はいいよ。家族なんだし。それより、おぶってやる」

俺はそう言っただけでイクスをおんぶした。

イクス「あ／／／／ありがとうございます／／／／」

ヴィヴィオ・カリム「（が……我慢我慢。夜になったら相手してもらうんだから……）」

女の嫉妬とは怖いものだ。

俺達は家に帰っていった。

今日はカリム達の家に戻った。

アリシア・レヴィ「ぶじゅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

シャツハ「えっと、この問題はですね・・・」

相良・ヴィヴィオ・カリム「こ・・・これは・・・」

イクス「？」

ティアナ「冥王って冥王星から来た人ですか？」相良「そんなわけねえだろうっ」
何はともあれ、家族が増えた。

それは喜ばしいことで、幸せなことだ。

そしてイクスが目覚めることで、すべての準備が整った。

そのはじまりは、俺たちをどんな運命に連れていくのか……

エリオ「初対面の人に言う最初の一言いえばなんですか？」相良「初めまして」
家族がひとつ増えた。

一人の家族が増え、学院で増えたクラスメイトも呼んで、皆でパーティー！

仲良くなれることを祈りながら、皆を集めた。

それが吉と出るか凶と出るか・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty はっじまるよー！

エリオ「初対面の人に言う最初の一言いえばなんですか?」「相良」初めまして」

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「ねえなのはママ」

なのは「ん?どうしたのヴィヴィオ?」

私の家には今、なのはママとフェイトママとルチアお姉ちゃんとアインママがいる。

ヴィヴィオ「私のクラスにね、転校生が来たんだけど、イクスが目覚めた事を祝うのと一緒にパーティーをしたいんだけど・・・良いかな?」

フェイト「私は構わないよ?」

アイン「私も良いが?」

ルチア「転校生って男?女?」

ヴィヴィオ「男の人で、何か少し怖い人」

なのは「怖い?」

そう。ヴァン君が突然攻撃するほどの何かがあるような人。

なのはママや皆にあわせて、それがどんなものか少し調べてみたい。

ヴィヴィオ「初めて来たとき、ヴァン君が突然攻撃した人なんだ」

ルチア「へえ。ヴァンがそんなことを・・・（ヴァンほどの実力者がそんなことをするってことは、その転校生には何かあるみたいね。ヴィヴィオも、それを知るために私たちにも紹介するつもりなのかな？）」

アイン「（そのことは、主翔にも伝えなければな）・・・準備はこちらで行おう」

ヴィヴィオ「本当！？ありがとう！！！」

何か、ルチアお姉ちゃんとアインママが考えてるけど、嬉しい！

それに、お兄ちゃんが来るなら、ヴァン君も喜ぶだろうし・・・

って、どうしてヴァン君の事考えたんだろう？

相良 Side

一方その頃、俺はカリム達の家でパヤパヤした後でソファアの上で俺は休んでいた。

相良「いっつっ。あいつら、本気でやりやがって・・・腰痛えええ」

楽しかったは楽しかったが、終わったあとの脱力感がハンパねえな。

ロード「マスター。アイン殿から通信です」

アインから？

相良「分かった。つなげてくれ」

そう言うとロードからモニターが出てきて、モニターにはアインが映っていた。

相良「アイン。どうかしたか？こんな夜遅くに」

今は深夜2時。どう考えても夜が遅い。

アイン「そう言う主翔も、こんな時間まで彼女達とやっていたのか？」

（。。。）ギクッ

相良「ま・・・まあな・・・」

アイン「ふふっ・・・そうだろうと思った」

うっ・・・流石俺のユニゾンデバイス。

何でもわかるな。

相良「まあそんなことよりも、何か用か？」

アイン「ああ。明日・・・いや、今日ヴィヴィオのクラスの転校生を転入祝と、イクスが目覚めて家族に入った歓迎会を行いたいと言っているんだが・・・」

相良「ああ、別に構わないぞ？それで、それがどうかしたか？」

何か、少し困ったような顔をしているから、気になる。

アイン「・・・その転校生なんだが、どうやら地球出身の人で、何か裏があるそうだ」

ルチア「ヴァンも何か引つかかるみたいよ」

相良「ルチア!？」

ルチアがアインの横に現れた。

アイン「・・・気配を消しながら来るな」

ルチア「癖なのよ」

そう。ルチアは基本的に犯人逮捕の為、気配を消しながら行動するのが得意になっている。

相良「それでルチア。ヴァンが引つかかるってことは・・・」

ルチア「ええ。多分その人、相当な実力者の可能性がある。私たち

も知る必要があるんじゃない？」

ヴァンは俺の弟子で、かなりの実力がある。

まあ初めて会った時から凄かったけど、今はかなりある。

そしてあいつには俺と似て、他人のオーラや雰囲気とかを調べることが出来る。

もう一つ・・・ま、それは後に話そう。

そんなあいつですら疑うということは、何かあるな。

相良「・・・ああ」

それもついでに、調べてやる。

・・・そうだ。アインハルトも連れてこようかな？

ヴィヴィオ Side

翌日

学校・・・

ヴィヴィオ「ねえ芳乃君！」

芳乃「ん？お前は確か・・・相良ヴィヴィオだっけ？」

ヴィヴィオ「うん。ヴィヴィオでいいよ。それで、今日家に来ない？」

芳乃「え！？俺がか？」

ヴィヴィオ「うん！お兄ちゃんもママ達もOKしてくれたから」

芳乃「俺が・・・か・・・」

芳乃君は少し考えて、

芳乃「分かった。でも、料理は辛いカレーで頼む」

ヴィヴィオ「うん！そう伝えとく！ヴァン君もリオナもリオもコロナもくるでしょ？」

ヴァン「翔師匠も来るのか？」

ヴィヴィオ「うん！来るよ」

ヴァン「なら行く」

相当会いたいんだね。

カミナ「私も良いよ」

リオ「私も！」

コロナ「うん！」

メンバーは揃ったかな？

ヴィヴィオ「それじゃ放課後に行こう！」

リオ・コロナ・カミナ「おう！！！！」

芳乃「お・・・おう」

ヴァン「……………」（翔師匠が来るってことは、師匠は零二の事を調べたつもりか……………）

芳乃「あ、行くときに一人連れていきたい奴がいるから、そいつも呼んでいいか？」

ヴィヴィオ「良いよ！」

芳乃「サンキュー。（サクラの奴、絶対に喜ぶな。美味しい飯食えらだろっからな）」

そしてそれから授業は進み、放課後私たちはなのはママ達の家に向かった。

相良 Side

相良「アインハルト？」

アインハルト「あ、翔さん？」

俺はアインハルトの家を訪れていた。

既にパーティーの準備は整っている。

ヴィヴィオに言われたとおり、辛口のカレーも作った。

相良「今日、お前の会いたい二人を家に呼んでるんだ。来るか？」

アインハルト「！ホントですか！？」

おお、食いついてきた。

相良「ああ。お前がしたいことはわからないけど取り敢えず会えば良いだろう？」

アインハルト「でも・・・良いのですか？」

相良「良いよ。俺の家族はお客様大歓迎だしな。パーティーは多い方がいいし」

アインハルト「はい」

お、くるみたいだな。

相良「よし。そんじゃ掴まれ」

アインハルト「え？あ・・・はい・・・」

アインハルトとは俺の差し出した腕を掴んだ。

相良「転送魔法発動」

そして俺とアインハルトは白銀の光に包まれた。

アインハルト「え・えええ!？」

そして家にメンバーは揃った。

エリオ「初対面の人に言う最初の一言いえばなんですか?」相良「初めまして」

ここに聖王と冥王と霸王が揃う。

そして謎の少年とその連れ。

その者達が、陸宙管理本部総裁の家に揃う。

そして少しずつ、物語が動く。

キャロ「パーティーって何人位呼べば良いんですか？」相良「多ければ10人以上
始まる歓迎パーティー。」

波乱の幕開けの気がするのは気のせいだろうか？

そして物語は始まるうとしている。

そして、何と彼は彼女の知り合い！？

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinite
ty } 始まりますよ？

キャロ「パーティーって何人位呼べば良いんですか？」相良「多ければ10人以上

ヴァン Side

なのは・フェイト・アリサ・すずか・アイン・ヴィヴィオ・シユテル・レヴィ・アーチェ・ルチア・カリム・アリシア・スバル・ティアナ「いらっしや〜い!!!!!!」

僕達が家に着くと、ルチア先輩達が玄関で出迎えてくれた。

ヴィヴィオ「ほら！入って！」

カミナ・リオ・コロナ「おじゃましま〜す!!!!!!」

・・・あれ？おかしいな。

ヴァン「あれ？師匠が見当たらないんですけど・・・」

ルチア「大丈夫。そろそろくるわよ。今は客をもう一人呼びに行っているはずだから・・・ほら、帰ってきた」

そう言うと玄関の前に白銀の光が発生し、光から二人の人が現れた。

相良「よつと。悪い。遅れた！」

アインハルト「あ・・・あの、お邪魔します」

ヴァン「師匠！・・・っと、誰ですか？（何か、強そうだな。彼女を纏う風に覇気を感じる）」

アインハルト「私は、アインハルト・ストラトスです。中等科1年です」

カミナ「中等科！？通りでいい体してるわけだあ」

ああ、リオナが獲物を見つけた豹の目をしてる・・・

さて、アインハルトは大丈夫かな？

カミナ「ええい！」

アインハルト「きゃ！？な／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

リオナはアインハルトに抱きついて体のあちこちを触り始めた。

そう言えば僕と一緒に入学した日、ヴィヴィオの体を早速触りまくって遊んでたな。

アインハルト「ちょ、ちょっと／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

カミナ「キャ！この子可愛い！あちこちスبسベエ」

このままだとアインハルトはこの小説をR-18にしてしまうな・・・

・

相良「ま、そんなことよりも」

ヴァン「師匠！？そんなことってどういうことですか！？この小説が18禁になるピンチですよ！？」

相良「二人の行為は書かなければ大丈夫だ」

ヴァン「そ・・・そうですか」

相良「ああ。さて、二人はほっというて中に入るうぜ」

ヴァン「は・・・はあ」

僕は渋々、師匠の指示にしたがって中に入った。

アインハルト「そ／／／／そこは／／／／」

カミナ「あら？ここも可愛い！！！」

ここから先は18禁の小説ゾーンで見てください。

シュテル Side

今日は多分、彼等がここにくる。

ヴィヴィオが言っていた転校生って多分、彼だから。

芳乃「悪い！！遅れた！！」

???「遅れてごめんなさいなんだよ！」

一人の男子とクリーム色のツインテールの少女が来た。

やっぱり二人だ。

ヴィヴィオ「あ、芳乃君！・・・つと？」

芳乃「あ、こいつは俺の魔導兵器あしほうじの「サクラ」だ」

サクラ「宜しくなんだよ！」

ヴァン「・・・へえ」

カミナ「君も可愛い！！！！」

サクラ「あ、ありがとうなんだよ」

少しはにかんで笑ったサクラ。

相良「なるほど。君が芳乃零二か。相良翔と言う。妹のヴィヴィオがお世話になってるみたいだな」

芳乃「いえ、陸軍管理本部の総裁にあえて光栄です。それと・・・
そう言つて彼は私の目の前に来た。

芳乃「シュテル。取り敢えず来てやつたぜ」

シュテル「ええ。ご苦労さま」

全員「え・・・ええええええ!？」

翔さん以外の全員が驚愕していた。

アインハルト・イクス「？」

二人は分からないみたいです。

シュテル「この芳乃零二とサクラは私の部隊に所属している人です。実力は確かにありますが、まだまだ未熟者。その為アインハルトの登場を利用して、彼を入学させました」

相良「なるほどね」

ヴァン「そ・・・それじゃ零二は・・・」

芳乃「ああ。俺はヴァン。お前の敵じゃない。味方だ」

ヴァン「ま……じかよ。だったら何で初めから言わない?」

芳乃「いや、シュテルに言うなって言われてたからよ」

シュテル「ええ。面白そうだったので」

アイン「お前……分かってはいたが、黒いな……」

ルチア「私よりも闇なんじゃない?」

し……失礼な!!

シュテル「そこまで言わなくても……」

相良「ま、シュテルなりの祝いだと思えば良いじゃない?」

シュテル「か……翔さん……」

やっぱり優しい。

相良「よし!そんなじゃ次はイクスの歓迎会だ!!!!!!」

全員「おーう!!!!」

皆……楽しそうですね。

相良「《シュテル。詳しい話は後で二人きりで聞くとするよ?良いな?》」

シュテル「《はい。分かっています》」

相良 Side

イクス「は、初めまして。相良・・・イクスと、申します」

緊張気味でそう言ってイクス。

カミナ「え！？何今日は！？こんなにくawaii子達で遊べるの！？えい！！！！！」

イクス「え？きゃ！」

イクスもまた、リオナの被害者となったな。

アインハルト「あれが・・・冥王」

相良「違うよ。彼女は普通の女の子だ」

アインハルト「普通・・・ですか」

相良「ああ。まだ戦うことはできない。昨日まで長い眠りについて、体が言うことを聞かない。だけど・・・ヴィヴィオ！ヴァン！」

ヴィヴィオ「何！？お兄ちゃん！」

ヴァン「師匠。なんですか？」

二人が俺の前に来た。

相良「二人とも。こいつが霸王インヴァルトの遺伝子をひく人だ。少し、相手してやってもらっていいか？」

ヴィヴィオ「本当！？」

ヴァン「良いんですか！？」

すげーやりたそうだな。二人とも。

相良「ああ。アインハルト。彼女が聖王の子で、このヴァンは「空の騎士アムール」の遺伝子を持っているんだぜ？」

アインハルト「！？」

空の騎士アムール。彼は聖王と霸王の付き人だったとも言われている。

または執事の仕事もしていたとされている。

実力は聖王と霸王ともひけを取らなかつたらしい。

お、体から戦いたいってオーラを3人が出してる。

相良「早速庭でやれよ」

アインハルト「ありがとうございます！」

ヴィヴィオ「ありがとう！！」

ヴァン「僕は先に、零二と戦うよ」

芳乃「俺か？」

ヴァン「ああ。一度戦ってみたいんだ」

芳乃「……俺は構わないぜ。売られた喧嘩は買うほうなんでね」

ヴィヴィオ「それでは私はアインハルトさんと！」

アインハルト「よろしくお願いします（彼女が……聖王の……）」

イクス「あ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

カミナ「うゝん。良いわねゝ。その声も、この体も。私のものにし

たいわー!!」

ルチア「あんた・・・本当に女好きね」

なのは「はやてちゃんに似てるね」

はやて「私はそんな変態やないで!？」

フェイト「説得力ないよ・・・」

ヴァン Side

相良「さて、はじめ!」

ヴァン「行くぜ!」

芳乃「ああ!」

僕と零二はただ、まっすぐ立って魔力を込め始めた。

ヴァン・芳乃「はあああああ!!!!!!!」

僕と零二の全身から蒼と緑のオーラが湧き出てきた。

そしてお互いに右拳を構え、走り出し・・・

ヴァン「ストームストライク神風討つ拳鳥の緑槍！！」

芳乃「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍！！」

二人の膨大な魔力を込めた拳が激しい火花を散らした。

ドゴオオオオン！！！！

巨大な爆発に俺達は巻き込まれた。

そして爆風の中から、距離をとった僕と零二がいた。

ヴァン「はああああ！！！！」

僕は全身の魔力を右手に集め、抜刀術の構えに入った。

そしてそのまま零二に向かって走っていった。

芳乃「はああああ！！！！」

零二は全身から出した蒼き魔力をだし、右手を空に上げ、巨大な魔
方陣を出した。

そして 二人の大技がぶつかりあった。

芳乃・ヴァン「はああああああ！！！！！！！！！！」

アインハルト Side

アインハルト「行きます！」

ヴィヴィオ「はい！」

私とヴィヴィオさんは拳を構え、戦い始めていた。

隣で繰り広げられている芳乃さんとヴァンさんの戦いも気になりますが、こちらの戦いに集中します。

ルールはバインドなし、射砲撃無しの格闘技だけの真剣勝負。

ヴィヴィオさんはステップを踏み始める。

そして私の懐に入り込み下から右を打ち上げる。

私は多少驚きましたが、ガードした。

そしてヴィヴィオさんはガードされても果敢に攻めた。

私はなんとか避けながら彼女を見る。

相良「（ほう。ヴィヴィオはデバイス無しでもここまで強いんだ・
・流石だな。だけど、アインハルトはその上を行ってる。今のヴィ
ヴィオでどこまで行けるかな・・・）」

アインハルト「・・・（まっすぐな技。まっすぐな拳。まっすぐな
瞳。きつとまっすぐな心だけど・・・だからこそこの子は・・・
私の戦うべき「王」ではない・・・）」

私はヴィヴィオさんの攻撃を避け、彼女懐に入る。

そして左手の張り手を打ち込む。

打ち込まれたヴィヴィオさんは後ろに吹き飛ばされ、そのまま柔ら
かい芝生の上に落ちる。

ヴィヴィオ「い・・・いたた・・・（すごい！こんなに・・・強い
なんて！）」

アインハルト「!?!」

相良「ひゅ〜。ガキのころは本当に容赦ないな・・・」

ヴァンさんと芳乃さんの大きな声と共に巨大な爆発があつた。

相良「引き分けみたいだな。悪い。今日はヴァンとはやれなさそう
だ。ま、また次に俺と訓練するときに来い。そうすればいるだろう
し。訓練は明後日からだ。受けたいなら、陸軍管理本部に来るとい
い」

アインハルト「・・・はい。わかりました。それでは」

そう言っつて私は家に帰っていった。

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「私・・・弱いな」

私は、完敗だつた。

そして、終わったあとのインハルトさんは・・・悲しそうな、辛そうな表情をしていた。

私が弱いから・・・私が、甘い考えで戦ったから。

別に手を抜いたわけじゃないのに・・・

相良「ヴィヴィオ。大丈夫か？」

お兄ちゃんだ。私に手を差し伸べてる。

でも・・・私は腕で両目を隠していた。

ヴィヴィオ「お兄ちゃん。大丈夫だから・・・本当に、大丈夫・・・だから」

本当は大丈夫じゃない。

だって・・・

相良「悔しい時には、泣いて良いんだぞ？」

ヴィヴィオ「え・・・」

なんで・・・どうしてなの・・・

相良「今は、俺しか見てない。なのは達はイクスとヴァン達のことにいるし、俺は生憎今日疲れてて目が疲れてるから、ちゃんと見ることはできないぜ？」

嘘だ・・・本当は、元気に決まっているのに・・・なのに・・・

どうして・・・どうしてお兄ちゃんはいつも・・・

ヴィヴィオ「うわあああああん！！！！！」

私はお兄ちゃんに抱きついて大泣きした。

全ての悔しさを、この声に乗せた。

相良「悔しいか？」

ヴィヴィオ「うん！」

相良「強くなりたいか？」

ヴィヴィオ「うん！！！！！」

相良「だったら、もっと頑張れ。彼女を、本気にさせれるように」

ヴィヴィオ「うん！うん！！！！！」

私そのまま、つかれ果てて寝るまで、ずっと泣き続けた。

本当に、どうしてお兄ちゃんはいつも、私の我慢している悲しい気持ち、解放させるの・・・

本当に・・・私には、悲しい気持ちとか、辛い気持ちとか見せて

くねないのじ・・・

キャロ「パーティーって何人位呼べば良いんですか？」相良「多ければ10人以上ぶつかりあつた拳で理解した思い。

強くなりたい。

ただ、それだけだけの思いなのに・・・その思いは、自分の無力さを痛感するだけ強くなっていく。

だから・・・もう我慢できない。

私は、全力で・・・この拳を、あの人に届かせてみせる！！

出会う方(前書き)

一度終わった戦い。

だけど、終われない。

お互いに納得できないから。

お互いにとっての終わりは・・・まだ。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty } 始まるよん!!

出会う方

戦いが終わり、芳乃とヴァンは俺とルチアの治癒魔法を受けていた。

ルチア「全く、男子ってどうしてこう無茶をするんかね〜」

相良・ヴァン・芳乃「うっ・・・反省してます」

そう言いながら俺を見ている。

何故俺まであらまらにやいかん？

ヴィヴィオはなのはとフェイトが面倒見てくれる。

サクラ「これ美味し〜！」

サクラと言う人は芳乃をスルーして飯を食うことに集中してるって・・・あいつも結構食べるな・・・

芳乃「わりい。サクラは食費がかかるんだ」

相良「別に。ま、お前の能力も少しばかり見せてもらえたし、ちょうど良かった」

芳乃「あ・・・ああ。それにしても、やっぱりヴァンは強いな」

ヴァン「お前もな」

相良「とか言いつつお互いに本気を出してなかったらう・・・」

そう。力は本気だけど、能力は本気ではなかった。

芳乃「・・・ばれてたか」

ヴァン「流石です」

相良・ルチア「はい。治療終わり」

ヴァン「ありがとうございます」

芳乃「サンキューな。ルチアさん」

ルチア「ええ。それより、あなたはサクラでも止めたら」

そう言っつて俺達はサクラの方を見る。

サクラ「バグバグバグバグ・・・」

まだ食べてました。

芳乃「ったく、あのダメ兵器め・・・」

そう言っつて頭を抱えながらサクラの所に向かって止めに行った。

ヴァン「・・・師匠」

相良「ん？」

ヴァン「零二。あいつ、かなり強いですね。これからもっと鍛えれば、もしかしたら……」

相良「俺を超えるってか？」

ま、見てれば分かる。

相良「安心しろ。俺はそう簡単には負けないし、これからも俺よりも強い奴が出てても負けない」

ヴァン「？自分より強い敵が出てきたら……勝てないじゃないですか？」

相良「俺には、仲間がいる。彼女たちと戦えば勝てない敵はいないだろう……。それに、ヴァン。お前もいる」

そう。ヴァンは見込みがあるし、これからもっと強くなる。

あの芳乃零二だって、これからもっと強くなる。

ヴァン「……俺、もっと強くなります。だから、教えてください。僕に……戦いを」

相良「分かっている。手を抜く気はない。明日からまた練習再開だ。明後日はアインハルトとの試合だぜ？」

ヴァン「！はい！」

結局その後、イクスはリオナに色々され気絶し、俺たちが治療をする形になり、それ以外はパーティーは滞りなく進んだと思う。

そしてみんなは自分たちの家に帰っていった。

アリサ「にしても、最近の男子ってあんな無茶するの?」

すずか「ははは。元気でいいじゃない?」

相良「悪いな。片付け手伝わせて」

俺とアリサとすずかは皆が戦ったあとの地面を元に戻していた。

アリサ「あれ?そう言えばほかのみんなは?」

相良「なのはとフェイトはヴィヴィオのとこ。それ以外は急な出撃で外に出てる」

シュテルとカリムは食器などの片付けをしている。

アリサ「大変ね。皆・・・」

大変か・・・それは別に俺たちだけじゃない。

相良「お前もな。毎日家事やって、サンキューな」

アリサだって、すずかだって忙しい。

俺が告白したから、家から出て俺たちのところに引っ越してきた。

そして今日まで頑張ってきた。

それには、感謝しないとな・

アリサ「当然よ。もっと褒め称えなさい！」

相良・すずか「調子に乗らない」

そう言っただけで笑いながら作業を続けた。

相良「そんじゃシュテル。話してくれ」

シュテル「はい」

今、片付けを終えて俺とシュテルとカリムは話をしていた。

アリサとすずかも近くで聞いている。

シュテル「あの芳乃零二と言う少年とサクラと言う魔導兵器は、私が以前地球に任務で行ったときに発見しました。彼は犯罪者を見つけては、魔法を使って倒していたんです」

相良「！」

地球人で魔法を使いこなす少年と少女の存在……

本当に地球つてのは魔法使いを何人も生むな。

シュテル「私は彼に話しかけて、詳しい経緯を聞くと、とある島で魔法使いのバトルロワイヤルが過去にあったそうなんです」

相良「！ちょっと待て！バトルロワイヤルだと！？魔法使いが、何人もいるってことか……」

しかもそれで殺し合いか……

シュテル「戦う人たちは皆、彼の親友だったそうです。そして彼は最後の敵まで倒し、見事勝利し平和を手に入れたと言っていました」

相良「なるほど。だからあいつ、血の臭いがしたのか」

アリサ「血の臭い？」

すずか「そんなのした？」

相良「いや、何というか・・・服とかにはついてないんだけど、染み付いているっていうかさ。長年の勘だけど」

カリム「なるほど。それで、彼らが手にした平和と言うのは、どういう意味ですか？」

そう。平和と言ったって、魔法のない世界で魔法を使わないと手に入らない平和っていうのが分からない。

現戦争なんてまだ終わっていない。

シュテル「・・・彼等は、自分たちの力を使って魔法使いのバトルロワイヤルをなくしたんです。そして、倒してきた親友たちを生き返らせ、平和に暮らしているというわけです」

相良「なりほど・・・そういうことか」

ルールそのものの破壊に成功したのか。

シュテル「ですが、その反面彼ら自身が悪を裁く断罪者にならなければならぬという条件があります。彼らはとある島からはなれ、旅を続けて罪を背負っている者に罰を与え続けていたんです」

相良「おう……で、そのとある島の名前は？」

シュテル「……月読島です」

相良「……ん？月読島……あ」

そう言えば……

カリム「どうかありませんか？」

相良「いや、陸宙管理本部ってさ、次元漂流者とかも集めているんだけどさ、その中に月読島っていう変わった島出身の人がいたような気がしてさ」

シュテル「！その人の名前は？」

相良「確か……鈴白なぎさと黒羽紗雪だったな」

シュテル「！その人たち、芳乃零二が探している人たちです！」

相良「……ワオ」

運命ってすげーな。

こんな再会があるなんて……

相良「そんじゃ、明日にでも会いに行くか？」

シュテル「はい。私は芳乃零二を連れてきますので、翔さんは二人をお願いします」

相良「ああ」

明日はヴァンの訓練に芳乃たち再会か。

アリサ「あんた、いつまで経っても何かに巻き込まれるわね？」

すずか「大変だね」

相良「あはは。ま、性分だからな」

カリム「なにかありましたらいつでも話してください！手伝いますから」

相良「ああ。ありがとう」

そう言つて、今日一日は終を告げたが、俺はその後、ある意味瀕死状態のイクスの看病をしたのだった。

イクス「////////////////」

相良「顔あつかいな・・・」

出会いと再会・・・巻き込まれフラグ立ったな。(前書き)

戦いが終わり、幼き彼らが決めた想い。

強くなりたい。

ただそれだけの強い欲。

俺に出来ること、それを全力で教える。

そして今日は、二人の少女の再会と新たな人達との出会いの物語。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty) 始まるっす！

出会いと再会・・・巻き込まれフラグ立ったな。

ヴィヴィオ Side

朝6：30分。

家の庭に、私はヴァン君といた。

私とヴァン君は魔法なしの格闘で戦っていた。

ヴァン「はあ！」

ヴィヴィオ「えい！」

ヴァン君の拳と私の拳がぶつかり合う。

魔法無しだから痛いけど、しっかりとぶつけることができる。

一撃を打つごとに昨日の敗北がよぎって苦しい。

でも、その分だけ強くなりたいてって思って、体に力が更に入る！！

ヴィヴィオ「はああ！！！」

ヴァン「お！？」

私は右拳で隙が空いた顔面めがけて殴りかかった。

ヴァン「ふっ！」

ヴィヴィオ「うえ!?!」

けれどヴァン君はその右手を避けて右手で私の右手首をつかみ、左手で私の胸ぐらを掴んで背おいなげをした。

ヴィヴィオ「きゃ!」

強く地面とぶつかると思った。

けれど、彼は力抜いてくれたのか、ふわっとぶつかるといふよりは乗るような感じだった。

私は体育座りの形になった。

ヴァン「僕の勝ち」

ヴィヴィオ「うわ〜ん負けた〜」

私は大の字でその場に倒れた。

ヴァン「っ／／／あ・・・えっと、出来ればその格好止めてくれるかな?見えるんだけど・・・」

ヴィヴィオ「え?・・・っ／／／／／」

汗のせいで白いTシャツが透けて下着が見えてしまっていた。

ヴィヴィオ「わきゃ!」

私は飛び跳ねて両手で胸を隠した。

ヴィヴィオ・ヴァン「／／／／／／／／」

お互いに恥ずかしくて、目を合わせられないよ……

相良「お前ら何してんだ？」

ヴィヴィオ・ヴァン「うわ!?!」

お……お兄ちゃん!?!

相良「どうした。……もしかして、ヴァン……貴様、俺の妹に手を出しやがったのか……」

お……お兄ちゃんから真っ黒なオーラが……

ヴァン「いいいいいいいい、いいえ!!!!!!別に、やましいことやいかがわしい事は何一つとしてしてません!!!!!!」

ヴァン君が顔を真っ青にして弁解してる。

ヴィヴィオ「そ、そうだよお兄ちゃん!別に何にも無かった!」

そう言つとお兄ちゃんからオーラがどんどん消えていった。

相良「そ……そうか。(´・`・´) 3 フウ」

ヴァン「よ……良かった……（後少しで僕の人生が最終回だった……）」

ヴァン君の顔から赤い色が蘇ってきた。

相良「まあいいや。それよりヴァンとヴィヴィオ。さっさと飯食え。学校だろう」

ヴィヴィオ「え……あ！」

時計を見ると時刻は何と7:30分。

あと少しで8時だった。

アリサ「もう朝食出来てるから、早く食べちゃいなさい！」

アリサママがそう言った。

ヴィヴィオ「は〜いい〜！」

ヴァン「あの、僕も良いんですか？」

相良「構わねえよ。って言っても、俺が作った訳じゃないけどな」

すずか「私は大歓迎だよ！」

ヴァン「そ、それじゃお言葉に甘えて」

そう言って皆、家の中に入って朝食をとりました。

そして学校へ登校しました。

相良 Side

俺は今、いつものように書類整理を進めていた。

ルチア「翔。芳乃達がくるの、そろそろじゃない？」

相良「え、ああ。そうだな」

ギンガ「芳乃？・・・ああ、シュテルの部隊にいる彼ですか」

相良「あれ？ギンガ知ってるの？」

ギンガ「ええ。彼の魔導兵器が大食いなもので・・・その・・・」

ああ、同じように大食いで有名なギンガはサクラと知り合ってその流れで芳乃に出会ったというわけか。

相良「なるほど。それじゃちょっと行ってくる。何かあったら通信で呼んでくれ」

ギンガ・ルチア「はい!!」

俺は今、次元漂流者だけで構成された部隊の本部にいた。

相良「おーい！なぎさと紗雪！いるか！」

なぎさ・紗雪「はい！」

二人の少女が俺の声に気づいて近づいてきた。

なぎさ「翔さん！何かようですか？」

相良「二人とも、芳乃零二って知ってるか？」

紗雪「！？兄さん！？」

あ、兄なんだ・・・苗字違うけど、兄妹なんだ。

なぎさ「何で翔さんが芳乃君のことを？」

相良「この後こっちにくるんだ。二人とも、地球に帰りたいたらろう？」

紗雪「・・・どうでしょう」

なぎさ「えっと・・・」

あれ？微妙みたい・・・

まあ、結構ここには長く居るからな。

相良「ははは。まあその答えは今じゃなくてもいいや。とにかく芳乃に会いに行くぞ」

なぎさ・紗雪「はい！」

そう言っただけで俺と二人は芳乃に会いに向かった。

芳乃「！紗雪！・・・！」

紗雪「兄さん！」

訓練所に着くと、二人は抱きしめあった。

紗雪に関しては大泣きだ。

相良「よかったな・・・」

次元漂流者が自分のいた世界の家族に会えることはまず少ない。

記憶をなくしたり、大切な記憶がかけたりするからだ。

だが、こうして再会出来るのはとても良いことだ。

よかったな。紗雪。芳乃。なぎさ。サクラ。

サクラ「良かったんだよ！」

なぎさ「サクラも久しぶり」

サクラ「うん！元気そうで何よりなんだよ！」

シユテル「感動の再会ですね」

翔「お前、どこから現れたんだよ」

何故か天井からぐわっと現れた。

相良「それで、何かようか？」

シユテル「今、こちらに飛行船が向かってきてます」

相良「!数は!?!」

シュテル「1です」

・・・?

相良「あれ?1・・・か」

シュテル「はい。それも、人が4人ほどしか入れないほど小さな」

・・・それって次元漂流者?

相良「ま、まあいいや。そんじゃシュテルは芳乃達を連れて皆に念のため待機命令をだせ。俺は見てくる!」

そう言っつて俺は走っつて船の来る方向に向かっつて走っつた。

はやて「翔くん!」

相良「はやて!」

着くと、はやてがそこにいた。

相良「状況は!？」

はやて「今、こっちに来てるよ。どないする?。」

相良「ま、1つだけってことは戦うことはないと思う。次元漂流者の可能性もある。だから、中に入れよう」

はやて「ほな、開けるで!。」

そう言うてはやては船などを収容する所の巨大な扉を開けた。

相良「さて・・・どんなやつがくるのやら・・・」

そして開けた所に、その飛行船が入った。

着陸すると、中から4人の人が出てきた。

相良「誰だ!？」

?????「あ、良かった。すみません!勝手に入って」

金髪で赤い服をした女子が話しかけてきた・・・って、スバルと声似てるな・・・

エミリア「あ、私はエミリア。エミリア・パーシバルって言います」

自己紹介を終えると、同行していた人が怒っていた。

「????」つたく、エミリア！亜空間航行理論は問題ないって言うてたじゃないかよ！」

白い短髪の髪に藍色の目をした少年。

エミリア「いや・・本当に問題は無いと思ったんだけどな・・・」

青く短髪でとんがったような髪をしている男子は、呆れた様子で怒っていた。

「????」まあ＋思考で考えればいいじゃないか。今回の失敗で学ぶことがあるからな」

黒く長い髪に蒼く、宝石のように綺麗な薔薇のような華を着けてある女性。

「????」ま、エミリアのことだから、こうなることは分かっていたけどね」

茶髪で青と白の制服を着た女性。

相良「えっと、皆名前を教えてくださいませんか？」

音使「俺は音使奏多おとつかそった」

ナギサ「私はナギサという。よろしく頼む」

あれ？フェイトと声が似てる気が・・・

ルミア「私はルミア・ウエーバーといいます。宜しくお願いします」

相良「へえ。俺はここ、陸宙管理本部の総裁を努めている、相良翔と言つ。宜しく」

エミリア「あ、よろしく……って!？」

ルミア・奏多「ええええええ!？」

ナギサ「……(こいつ、強そうだな)」

はやて「私は八神はやて。よろしくなあ」

相良「まあ話は奥で聞くよ。ついてきて」

そう言つて俺とはやては4人を誘導した。

そして、この4人の出現により、物語が動き出そうとする。

出会いと再会・・・巻き込まれフラグ立ったな。(後書き)

出会いとは、事件を起こすひとつの要因だ。

この出会いが・・・全ての始まりのきっかけとなる。

キャラ設定 1

翔・高町・ヴォルケンリッター・T・ハラウン・アルピーノ・ル・ルシエ・ナカジマ・ランスター・バニックス・月村・八神・相良・又エラ・グラシア 24歳 AB型

陸軍管理本部「総裁」

魔力値 Unknown (一度記憶をなくしているので魔力値が断定できない)

技数現在進行形で増えている。

デバイスのモードも進行形で増えている。

> i 2 7 9 4 5 — 3 6 1 8 <

・シスコン・ロリコン・マザコン・ファザコン

・仕事よりも家族優先

・本気を基本的に出さない。

・理解力が高い。

・分析力が並外れている。

・ユニゾンデバイス以外ともユニゾンできる。

- ・一度見た技を自分なりにオリジナルで使える。
- ・諦めが基本的には速いが、大事なことはすぐに諦めず、最後までやる。
- ・面倒見がいい。
- ・ちょっと忘れ物の癖がある。

想い、迷い・伝え（前書き）

突如現れた次元漂流者。

彼らとの出会いは、全ての始まりのきっかけとなる。

それはゆっくりと、だが確実に進んでいる。

そして俺が選ぶ道と、彼女が悩む感情と、少女が伝える・・・強い
想い。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty 始まるよ。

想い、迷い・伝え

俺達は突如現れた次元漂流者、エミリア達を総裁室に連れてきた。

ギンガ「翔さん。次元漂流者が来たと聞きましたが……その人たちですか？」

相良「ああ。こちらエミリアにナギサに音使にルミアだ」

エミリア「すみません。こっちのミスでここに泊めさせていただき
ます」

ギンガ「あ、ええ。どうも。私は翔さんの補佐をしているギンガ・
ナカジマです（声がスバルに似てる……）」

ギンガも疑っているような表情をしているが、まあそれは無視して
・
・

俺は自分の席につきPCを起動させた。

相良「それで、みんなはどういう世界のどつ言う理由でここに来た
？」

ルミア「私達は、「亜空間航行理論」に基づいて、この次元世界に
きました」

ルチア「亜空間航行理論？」

俺の隣の席で仕事をしていたルチアが気にして聞いてきた。

音使「俺達は、謎の生命体「SEED」って敵と戦ってきた。そのSEEDとの戦いはまだ終わってない。けれど、大分集結してきてる。ただ、その戦いの傷跡がでかくてな。資源枯渇が深刻な問題になってるんだ」

相良「そうなのか・・・」

まるで戦争が終わった後だな。

戦争が終わると、その傷跡が深く残って資源枯渇になるからな。

エミリア「私たちの世界では、外宇宙・つまり別の宇宙や次元に飛んでそこを新たな住む場所にするなどのことを可能にする理論・
・亜空間航行理論が提唱されて、その実現の為に私たちがここに来たわけ」

ルミア「そしてここに着いたのは良いものの、故障などがあって・
・エミリアが頑張っても故障の原因が分からず、今のままです」

相良「なるほどな・・・結構大変だったんだな」

ナギサ「私は別に問題無いが、体を動かすことがなかったから鈍っているかもしれん」

ギンガ・ルチア「(フェイト(さん)と声が・・・同じ!?)」

ん?何か二人が頭を抱えているがどうしたんだろっ?

相良「まあ取り敢えずあの飛行船は研究科に見てもらって修理して
るから、多分すぐに治ると思うよ」

エミリア「本当ですか!？」

相良「ああ。その間はこつちの世界を見て回ってもいいし、好きに
すればいい。部屋はこの施設内にあまりがいくつがあるから、それ
を使って貰っても構わない」

音使「そうか。それは助かる」

ルミア「ありがとうございます」

ナギサ「感謝する」

相良「ああ別に良いよ感謝しなくても。ここには、君たち以外にも
次元漂流者って何人もいるんだ」

そう。何だかんだで次元漂流者の数ってのは少なくない。

中には行方不明になっていた次元犯罪者もいたし、有名だった人も
いた。

ヴァンもまた・・・次元漂流者なんだよな。

ルチア「・・・あ、翔。ヴァンが来たよ」

相良「え？ああ分かった。そんじゃこっちに連れてきて」

ルチア「ええ」

少しすると、俺たちがいる総裁室にヴァンが制服の状態できた。

ヴァン「失礼します！」

清々しい声でそう言い、俺の所に来た。

にしても今日は一段と元気がいいな・・・何かいいことあったのかな？

相良「よ！これから訓練をしたいと思うんだけどな、その前にここにいる4人。この4人は今日こっちに来た次元漂流者だ。取り敢え

ず覚えといってくれ」

ヴァン「あ、はい。僕はヴァン＝スカイと言います。宜しく」

エミリア「私はエミリア・パーシバル」

ルミア「私はルミア・ウエーバー」

ナギサ「私はナギサと言う（こいつも、中々強いな・・・）」

音使「俺は音使奏多。宜しく」

ヴァンは人と握手をかわした。

ヴァン「・・・？」

相良「どうかしたか？」

ヴァン「・・・いえ。別に、何でもありません。それよりも訓練を始めましょう」

相良「・・・ああ」

ヴァンの表情が、音使を見た瞬間に変わった気がした。

何故かしらんけど、ヴァンは人を見抜く力を持つてる。

人間の肉眼では捉えきれないオーラや殺気や臭いを感知する能力を持っている。

そのヴァンが反応したとするなら・・・あの音使って奴もワケありか・・・

相良「それじゃ4人とも、ルチアに部屋を案内してもらって今日はゆっくり休んでくれ」

エミリア「はい！」

相良「よし！ヴァン！行くぞ」

ヴァン「はい！」

そう言っただけでヴァンは全力疾走で総裁室を後にした。

ギンガ「本当にあの二人、よく似てる・・・」

ルチア「ある意味兄弟よね！」

そう言っただけで俺たちが居なくなっただけ、俺たちの話で持ちきりだったらしい。

それから約3時間ほど前・・・

ヴィヴィオ Side

放課後・・・

ヴィヴィオ「はぁ・・・」

リオナ「珍しいわね？ヴィヴィオンがため息ばっかつかくなんて」

ヴィヴィオ「私はヴィヴィオンじゃなくてヴィヴィオだよリオナ・・・はぁ・・・」

リオ「何かあったの？」

ヴィヴィオ「うん・・・分からない・・・はぁ」

リオナ「今のでちょうど1000回目」

リオ「数えてたの!？」

私も中では驚いてたけど、何か調子がでない。

今日の朝のヴァン君との訓練のときから何故か調子がわかない。

下着見られてからかな？

ヴァン「……！」

私はふとヴァン君の顔を見つめていると、ヴァン君は私の視線に気づいて手を振ってくれた。

ヴィヴィオ「~~~~っノノノノノ」

私は何故か分からないけど急に恥ずかしくなって無視するように彼とは反対の方をむいた。

どうして……そんなことをしているんだろう……私……最低。

そして……どうして、ヴァン君の事を考えると……胸が苦しくなるんだろう……

ヴァン Side

ヴァン「……………(。—|—|)(」

芳乃「お前、高町に何かしたか？」

ヴァン「な・・・何も」

僕は零二とサクラの話しを聞いていると、ヴィヴィオが僕の方をむいたので手を振ってみた。

何故かふいっと無視された。

・・・マジで凹みます。

コロナ「ねえヴァン君」

僕が凹んでいるとコロナが右から声をかけてきた。

ヴァン「あ、コロナ。どうした？」

コロナ「うん。ちょっと・・・良いかな？」

ヴァン「ああ。別に構わないよ。それじゃ零二。また後で」

芳乃「ああ。そんじゃまた明日」

ヴァン「おう。また明日」

コロナ「それじゃ着いてきて」

ヴァン「ああ」

ヴィヴィオ「・・・」

そう言っつて僕とコロナは教室を後にした。

男子生徒「ヴぁ．．．ヴァンが「リア充の世」かみのりゅうじょうに入るうとしてる！
？」

芳乃「お前らな．．．（でもま、ヴァンとティミルの二人．．．お似合いじゃねえかよ．．．？ヴィヴィオ．．．あいつ．．．ヴァン達の後を．．．。そういうことか。結構モテるんじゃないかよ。
ヴァン）」

所変わって屋上。

ヴァン「どうした？こんな所に呼んで．．．」

誰も居ない。人の気配は．．．ん？あれ？何か．．．殺気がする？
気のせいかな？

コロナ「ん？どうかしたの？」

ヴァン「え？あ．．．あぁ、何でもない」

そして屋上の奥に着くと、コロナは校庭を見ながら、僕に言った。

コロナ「私ね……ヴァン君に、伝えたい事があるんだ」

ヴァン「？伝えたいこと？」

そう聞くとコロナは、僕の方を向き顔を赤くして言った。

コロナ「わ／＼私／＼／＼その……」

何かを言いたそうにいる。

口を開けては閉じて、開けては閉じて……

僕は、心の中で「頑張れ」と何故か応援していた。

コロナ「わ……私……」

ヴァン「うん……」

気づくと、空の夕日の光が彼女……コロナを照らしている。

光に照らされたコロナの姿は、暖かく……美しいように見えた。

コロナ「私、ずっと／＼／＼／＼ずっと好きでした……」

ヴァン「！」

好き

その単語だけが、僕の脳内でグルグル回っていた。

え？コロナが・・・僕のことを？

コロナ「私、ヴァン君に一目惚れで、ずっと好きで！！だから・・・いつか、告白しようと思っていただけ、勇気がでなくて・・・でも、やっぱり諦めきれなくて、我慢できなかったから・・・私・・・」

夕日の熱でなのか、恥ずかしさでなのかは分からないけど、コロナの頬は赤く染まっっていて、涙目だった。

止めるよ・・・それじゃ、僕が泣かせているみたいじゃないかよ・・・

コロナ「私・・・私と、付き合っただけなの。お願い！」

そう言ってコロナは目を強くつぶって頭を下げた。

ヴァン「・・・」

どうすればいいのかわからない。

コロナのことは、確かに好きだ。

でもそれは、LikeなのはLoveなのか分からない。

僕にとって、コロナは大切な存在で・・・優しく、温かい存在だ。

いつも俺に何かくれて、僕が困った時や悩んでいる時はいつも声をかけてくれて、相談に乗ってくれて・・・

だから・・・

ヴァン「・・・コロナ」

コロナ「？・・・ヴァン君・・・んん！」

僕は、コロナを全力で抱きしめて、顔をあげたコロナの唇を奪った。

大体10秒頭で数えて、数え終わったら離れた。

コロナ「え／／／ふえ／／／あ／／／あう／／／／／」

あゝあ。何か更に顔を赤くした慌ててる。

ヴァン「良いよ。僕は、コロナの彼氏になってやる」

そう言って僕はコロナをしっかりと抱きしめた。

コロナ「ヴァン君・・・ありがとう」

優しい声でそう言って、コロナも抱き返してくれた。

うん。・・・本当に、温かい。

コロナ「ヴァン君」

ヴァン「ん？どうした？」

コロナは潤った瞳で、赤い頬で、上目遣いで言った。

コロナ「もう一回・・・私に、キスして」

ヴァン「・・・ああ」

そう言って僕達は・・・僕たちの影は・・・

コロナ「ん・・・」

一つに重なった。

ガチャ！

ヴァン・コロナ「！」

そのとき、ドアがしめる音がした。

誰かに・・・見られてしまった。

まだ・・・風が残ってる・・・誰だ？

僕達は離れ、僕はドアの前に立った。

ヴァン「・・・・・・・・・・！あいつか・・・・・・・・」

コロナ「？誰が見てたの？」

ヴァン「・・・・・・・・・・ヴィヴィオだよ」

見られちゃったな・・・恥ずかしい。

コロナ「・・・・・・・・・・ヴィヴィオも、ヴァン君のこと・・・・・・・・好きだったんじゃないかな」

ヴァン「ヴィヴィオが？僕を？なんで？」

コロナ「女の子の勘・・・・・・・・かな？」

ヴァン「・・・・・・・・ま、今はコロナがいるから他の女とは付き合わないな」

コロナ「つ//////////そ//////////そんなこと、何の恥じらいもなく言わないでよ//////////」

あゝあ、また真っ赤っかになってやがる・・・・・・・・可愛いな。

ヴァン「さて、帰るぞ！」

「コロナ」・・・うん、うん」

そう言っただけで僕とコロナは手を繋いで、学校を出ていった。

ヴァン「（ヴィヴィオ・・・お前、本当にどうしたんだ？纏う空気が、変わっている。悲しくて・・・辛いと言っているような風だった。辛いなら・・・皆を頼れよ）」

それから数時間後、ヴァンは陸軍管理本部に向かい、訓練をした。

その日の訓練は、いつもより気持ちの良いものだったらしい。

想い、迷い・伝え（後書き）

伝えられた少女の想い。

迷い苦しむ少女の想い。

幸せを手にした少年。

変わった二人の関係。

悪い気がしない。

これが・・・幸せなのだろうか。

空の騎士VS霸王 ～試合準備～（前書き）

僕は、コロナの想いに答えた。

僕も、彼女と居る時が幸せで、忘れられなくて・・・大切だから・・・

いつまで、それが続いて欲しいから・・・続けたいから、守りたいから。

僕が戦うもう一つの理由。僕が強くなるもう一つの理由。

それが・・・彼女という、かけがえのない存在。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty 始まるからな。

空の騎士VS霸王 ～試合準備～

翌日。

ヴァン「・・・ふああ～」

今日は気分がいい。

いつもだったら前日の訓練の疲れでだるいが、今日はスッキリとした感じだ。

布団から目を覚ますと、僕は制服に着替え、何も食べずに何も作らずに外へ出た。

今の時間は午前6時30分。

そして僕は制服を着たまま、学校ではないところへ向かった。

それはというと・・・

コロナ「あ、ヴァン君！」

ヴァン「おはようコロナ！」

学校から近くにある公園に向かって、芝生の上に座る。

コロナはカバンの中から弁当箱を取り出す。

そう。これから朝食を、コロナと一緒に食べるのだ。

ヴァン「悪いな。弁当作って貰って」

コロナ「ううん！良いの！私、料理を作るの好きだから」

そう言っつてコロナは弁当箱を開けた。

ヴァン「おおお！」

弁当箱中には綺麗に敷き詰められたサンドイッチの数々。

コロナはサンドイッチを一つ持ち、

コロナ「は、はいヴァン君／＼／＼あ／＼／＼あ／＼／＼」

ヴァン「！？」

な・・・そ、それは伝説の「あ〜ん」だとう！？

コロナも恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして俺にしている。

ヴァン「・・・あ、あ〜ん」

パクッ

一口食べた。

ヴァン「(´・`・´) モグモグ・・・うまい！」

コロナ「ほ、本当!？」

ヴァン「うん! 凄い美味しい! やっぱりコロナは料理上手だな！」

コロナ「えへへ／＼／＼／＼」

コロナは何度か僕にクッキーやケーキを作って食べさせてくれたことが何度かあった。

どれも絶品だったな。

ヴァン「あゝうまい! バグバグ!！」

コロナ「もう、そんなに急がなくても食べ物には逃げないよ」

ヴァン「ははは。あまりにも美味しいもので」

コロナ「えへへ。また作ってあげるね」

ヴァン「おっ」

そう言って、僕とコロナは幸せな時間を過ごし、学校へ向かった。

ヴァン「おはようー!」

芳乃「よう!おはよう!《ほう。とうとうリア充になったんだな》」

ヴァン「《まあな》」

僕とコロナは周りの目も無視して手を繋いで登校した。

もう見せつけてますね。

リオナ「へえ〜。コロナン、ヴァンと付き合ってるんだ」

あまりこいつには知られたくなかったが、もう仕方ない。

コロナ「うん!」

リオ「二人とも、お似合いだよ」

ヴァン「ありがとう」

コロナ「えへへ〜」

男子生徒全員「ヴァン!スカイ!...貴様...貴様ああああ!

!...!!」

芳乃「うわぁ...まだ根に持ってやがる...」

ヴァン「何だ皆、零二。あいつらから何故か恐ろしい殺気を感じるんだが・・・」

芳乃「あいつらな、ティミルのファンクラブなんだとき。お前にコロナを取られてムカついてるんだとよ」

ヴァン「そうだったんだ・・・」

やっぱり、コロナってモテるんだな。

コロナ「ヴァン君！」

ヴァン「ん？何だコロナ」

コロナ「これ、今日のお弁当」

ヴァン「ああ。ありがとう」

男子生徒全員「お・・・お弁当だとうおおおおおおおおおおお
おお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

芳乃「うるせえ・・・ぶっ飛ばそうかな・・・」

そう言うと零二の全身から蒼いオーラが・・・

ヴァン「零二。止めとけ」

芳乃「畜生。あいつら、卒業式には確実に終わらせるぜ・・・」

ヴァン「は・・・ははは・・・」

卒業式に向けて男子生徒全員に死亡フラグが立ったところで僕は席に着いた……？

ヴァン「あれ……ヴィヴィオが居ない……」

ヴィヴィオの席は僕の左隣なのだが、席にはカバンもない。

リオナ「ヴィヴィオンなら今日、風邪だって」

ヴァン「風邪？」

僕の席の隣に現れたリオナがそう教えた。

ヴァン「ヴィヴィオにしては珍しいな。あいつ万年無病のイメージ高いのに……」

リオナ「……きつと、あの子なりに悩んでるのよ」

ヴァン「え？」

悩んでる？何にだ？

リオナ「貴方を好いているのは別に一人とは限らないってこと」

そう言っつてリオナは席に戻っていった。

ヴァン「……」

それから授業は滞りなく進み、昼休みになった。

僕とコロナは屋上に行き、座り弁当を食べた。

ヴァン「うん。美味しい！」

コロナ「うん ありがとう！」

幸せな時間。一生手に入らないと思っていただけに入るとこんなにも幸せで、大切なものなんだって実感する。

ヴァン「あ、そうだ。今日さ、アインハルトと試合するんだけどさ」

コロナ「え？ヴァン君が？」

ヴァン「ああ。それで・・・その、もしよかったら応援してくれないかな？・・・なんて」

コロナ「え／／／／／」

やばい。照れくさくなってきたな・・・

ヴァン「その、さ。コロナが来てくれて応援してくれればさ、負ける気しないっていうかさ／／／／」

コロナ「う／／／うん／／／わ／／／私なんかで良かった／／／良いよ／／／」

ヴァン「ありがとう／／／」

何か恥ずかしくてうまく目を合わせられないな・・・

じ・・・ジロ。

ヴァン・コロナ「つ／／／／／」

じろつとコロナを見ると、僕と目が合ってしまったて恥ずかしくて目を逸らしてしまった。

やっぱり・・・まだ慣れないな・・・

二人は気づいていないが、この状況を隠れて見ていた男子生徒と女子生徒は皆、砂糖を大量に吐いていたらしいです。

芳乃「ははは・・・あいつら見せつけるね・・・」

リオナ「ああ」。今のコロナン堪んないわ・・・食べたい・・・(ジユルリ)」

リオ「リオナ・・・ヨダレ、ヨダレ・・・」

芳乃「こつちも大変だな・・・」

そして教室に全員が戻ったとき、ほぼ全員が体調不良で倒れたらしい。

一方その頃、ヴィヴィオは・・・

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「・・・はあ・・・」

私は今日、ママ達に嘘をついて学校を休んでいる。

今は自分の部屋のベットでうずくまっていた。

食欲がわかなくて、元気がでなくて、苦しくて・・・

どうしたら良いのか、分からない。

昨日、ヴァン君とコロナが屋上に向かったとき、跡を追いかけて見たら・・・二人が・・・

キスをしていた。

アリス「ええ。帰り、良かったら家で食べていってください」

火澄「あら？良いの？」

すずか「お父様もお連れして、皆でどうですか？」

火澄「ありがとう。ではお言葉に甘えるわ」

そう言っつて私と火澄さんは外へでた。

火澄「どうかしたの？今日は学校休んじゃって」

ヴィヴィオ「……分からないんです」

火澄「え？」

私は、今に至る経緯を話した。

昨日、朝にあった事故からヴァン君の事を意識してて、でも目を合
わせるのが恥ずかしくて……それで、友達のコロナがヴァン君に
告白して……それで、それで……

二人がキスをして……

それから、頭の中が真っ黒になって……

火澄「なるほどね……」

全部言い終わると火澄さんは嬉しそうに表情で頷いていた。

ヴィヴィオ「あの……」

火澄「若いから、やっぱりそう言う気持ちは何なのか、分からないのね」

ヴィヴィオ「え？」

気持ち……気持ち……

火澄「ヴィヴィオちゃんは、ヴァン君のこと……好きになっちゃったんだと思うの」

ヴィヴィオ「……ふえ!?!」

す……すすすす、好き!?!?!?!?!?

私のリアクションに火澄さんはくすくす笑い始めた。

火澄「うふふつ……本当に面白いわ。そう言う時のリアクション」

ヴィヴィオ「で……でもでも、私はお兄ちゃんの事が好きなわけ

で、ヴァン君が好きなんてこと・・・」

火澄「だから、翔の事もヴァン君の事も、両方を好きになっちゃったのよ」

ヴィヴィオ「え・・・えええええええええええ！?!?!?!?!?」

更に私の大きなリアクションで火澄さんは大笑いしていた。

もう・・・笑い事じゃないのに・・・

火澄「良いわね。そうやって色々な人を好きになって・・・」

そして突然、羨ましそうな表情でそう言った。

ヴィヴィオ「え・・・」

火澄「私は、右蕪さん一筋って生き方をしてきたから、他の人を好きになるなんて、考えたこともなかったわ。でも、そういう生き方も・・・あるのよね」

ヴィヴィオ「火澄さん・・・」

私のこの気持ちは・・・火澄さんにとっては、羨ましいことなんだ・・・

火澄「私はね、そう言う気持ちを大切にしていくなきゃだと思ってる。もしかしたらヴィヴィオちゃんはいつかヴァン君に告白するかもしれない。翔に告白するかもしれない。どっちかにしようかと悩むこと、今のその歳で出来ることは、すごく大切なことよ。だから・・・

もっと悩んで良いと思う。もっと迷っても良いと思う。でも……これだけはしないで」

ヴィヴィオ「？」

そして火澄さんは真剣な眼差しで言った。

火澄「絶対に、二人の事を諦めようなんて考えちゃ駄目よ」

ヴィヴィオ「え……でも……ヴァン君はもう……」

もう、コロナに取られて……あれ！？私、本当にヴァン君の事好きなの！？

火澄「取られたのなら、奪えば良いのよ。恋愛は、どんなに親友と呼ばれる人でも奪い合ってしまう。古代ベルカの時代も、王様同士がたった一人の女をかけて奪い合い、戦争まで起こしたことだってあるんだから」

ヴィヴィオ「えええ！？本当なんですか！？」

火澄「ええ。それは、今の時代になっても変わらないわ。近代ベルカ式やミッド式が生まれた今でも、一人の人の為に全力で戦いなんてよくあることよ。私だって、右無さんを手にするまでは戦ったし、何度も挫けそうになったけど、諦める……いえ、逃げることだけはしなかったわ」

ヴィヴィオ「逃げる……」

火澄「ええ。諦めるのは、逃げるってことよ。それに、その程度で

諦めちゃったら、所詮その程度って事だしね」

そう・・・そうだよな。コロナにヴァン君を取られたけど、奪い返すことだって出来るよね！

ファーストキスは逃したけど、それでも構わない！

だって・・・

火澄「うん。良かった。それじゃ、私はちょっと仕事があるからこれだね」

そう言っただけで火澄さんは、全てを悟ったかのように去っていった。

火澄「あ、そうそう。今日は陸軍管理本部でヴァン君と霸王の子が戦うらしいわね。それじゃ」

そう言い残して去っていった。

ヴィヴィオ「・・・アインハルトさんと、ヴァン君が・・・」

気づくと、全身がプルプル震えていた。

今すぐ、見に行きたい。

ただ、それだけの欲が私の全身を駆け巡っていた。

ヴィヴィオ「ありがとう・・・火澄さん」

そう言って、私は陸宙管理本部に向かった。

火澄「翔。言われたとおり慰めてあげたわよ」

翔「ありがとう。母さん」

火澄「本当にヴィヴィオちゃんは翔に似てるわね」

翔「え？どこが？」

火澄「恋愛になると、凄く悩んで苦しむ所」

翔「あ・・・あはは・・・」

火澄「さて、それじゃ私は戻るわよ。後で家に行くから」

翔「ああ。分かった。本当にありがとう」

そう言って、二人は別れていった。

そして 時は満ちて、

相良「試合……始め……!!」

ヴァン・アインハルト「はあああああ……!!……!!……!!」

二人の拳は　ぶつかり合う。

空の騎士VS霸王 ～決戦開始～（前書き）

気づくことができた想い。

そして始まる戦い。

想い積もる中、少年と少女が拳をぶつけ合う。

長い時間をへて、戦いが始まる。

魔法少女リリカルなのは Vivid World In infinity
ty） 始まるんよ！

空の騎士VS霸王 〱決戦開始〱

アインハルト Side

私は今、陸宙管理本部到着し、訓練所で準備体操をしている。

私が着くと、既にヴァンさんは来ていて準備体操を始めていた。

そして見学席ではコロナさんと・・・ヴィヴィオさんがいた。

相良「お〜。みんな早いな。まだ開始30分前なんだけどな」

ヴァン「あはは。つい我慢出来ず」

アインハルト「私もです」

相良「そうか。そんじゃ準備が出来次第始めるか」

ヴァン・アインハルト「はい!!」

もうすぐ、ヴァンさんと戦える。

それが、嬉しくてたまらなかった。

前に翔さん宅に訪れた時にヴァンさんと芳乃さんの戦いを見て、ヴァンさんと是非戦ってみたいと思った。

だから・・・この戦い、全力でやります。

ルールは、バインドの使用が無し。それ以外は空を飛んでも射砲撃を打ってもありの実力勝負。

私はB Jを着用。

大人のような慎重になった。

ヴァン「ニルヴァーナ。セットアップ！」

ヴァンさんは緑色のブレスレットの形をしたデバイスに指示をし、ダークグリーン色のB Jに黒いズボンを履き、デバイスは両手にグローブの形で装着されている。

そして姿が大人の姿になった。

ヴァン・アインハルト「……………」

そして私たちはまっすぐ見つめ合い……

相良「試合……………始め!!!!」

その掛け声と同時に、走り出した。

アインハルト「ふっ!!!!」

私は全力で右の拳を前に突き出した。

ヴァン「はっ!!」

彼は同じように左の拳を突き出し、ぶつけ合った。

そして私はそのまま右に回転して回し蹴りをした。

だが・・・

スカっ!!

アインハルト「なっ!?!」

私の蹴りは何故か彼から逸れるように流れた。

何故・・・まるで、風の影響を受けたような感じでした。

ヴァン「行くぞ!」

そう言って彼はまっすぐ立ち、両手をクロスさせ、足元にミッド式の緑色の魔方陣を展開させた。

すると彼を中心に巨大で緑色の竜巻が発生した。

ヴァン「ストームトルネード神風息吹く神鳥の翼撃!!!!」

そして竜巻は彼の拳を突き出すとその方向、つまり私めがけて放たれた。

アインハルト「！霸王断空拳！！！！！」

私は手刀で真つ向勝負に出た。

そして二つはぶつかり合う。

ヴァン・アインハルト「はあああああああ！！！！！」

そして巨大な爆発を起こす。

アインハルト「！？」

私は目を疑った。

まだ、爆風が残っているのに、彼は右手に魔力を練っている。

砂煙のせいで視界が悪すぎるのに・・・

ヴァン「ストリーム・スラッシャー神風纏う翼の斬撃！！！」

アインハルト「！？」

巨大な緑色の翼が横に垂直に私に向かって放たれた。

アインハルト「・・・ならば！」

私は真っ直ぐ彼に向かって走り込んだ。

そして私に当たる直前でしゃがみながらスライディングをし、彼の目の前まで滑り込んだ。

ヴァン「何!？」

そして私は真下からゼロ距離で、拳に魔力を練り、

アインハルト「霸王断空拳!!!」

彼の腹部に強烈な一撃をいれる。

そして彼は天井近くまで飛ばされる。

アインハルト「はあ、はあ、はあ……」

これで終わったと確信した。

なぜなら、今のが私の最大威力だったから。

だが……

ヴァン「ストーム・ウイング鳳凰の風装」

彼は……

まだ、本気を出してはいなかった。

ヴァン「行くぜ。ニルヴァーナ」

そう言うと、彼の両手にベルカ式の小さな魔方陣が表れ、更に彼を中心に緑色のオーラが渦を巻くように被っていた。

彼はそのまま私に向かって突っ込んできた。

アインハルト「く！」

ヴァン「魔力全開、鳳凰ストームの……」

アインハルト「霸王……」

私はもう一度、いえ、最後の力を拳に込め、彼との一騎打ちを選んだ。

彼も魔方阵を両手を重ねることのでひとつにし、右手の拳に為込み、私に向いながら構えた。

そして……

コロナ「ヴァン君……!!!!」

ヴァン「コロナ……はあああああ……!!!!」

アインハルト「はあああああ……!!!!」

ヴァン「疾風爆裂拳！！！！！！！！」
バーストストリーム

アインハルト「断空拳！！！！！！！！」

二つの最大出力の魔力を纏った拳がぶつかりあった。

そして、大きな爆発が起こった。

私は、彼に抱かれている状態で意識を失っていた。

ヴァン Side

ヴァン「・・・ふう」

戦いは終わった。なんとか僕が勝つことができた。

相良「大丈夫か？」

師匠が心配そうに僕達の所によってきた。

ヴァン「はい、師匠。彼女は気絶してるみたいですが、命に問題は
ありません」

相良「当たり前だ。誰が命懸けの戦いをしろだなんて言った！」

あ、怒ってる・・・こ・・・怖い。

相良「まあいい。取り敢えずアインハルトをこっちに渡せ。今すぐ
治癒魔法をかける」

ヴァン「あ、はい！」

そう言っつて僕は師匠に彼女を渡した。

師匠は彼女に膝枕をし、両手を額に重ねるよつに置き、

相良「ヒーリング・ダスト」

空気中の魔力が両手に集まり、白銀の光が彼女を包み、傷口を癒していった。

コロナ「ヴァン君！」

ヴァン「コロナ！」

ヴィヴィオ「ヴァン君！」

ヴァン「ヴい、ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオまで僕の所に来た。

コロナ「ヴァン君。大丈夫？」

ヴァン「大丈夫大丈夫。かすり傷程度だから……っつゝゝゝ」

そう言っつとコロナは僕の右腕をがしつと掴んだ。

僕はあまりの痛さに声をあげた。

コロナ「ほら！どこがかすり傷よ！大怪我じゃない！」

ヴァン「は……はい」

今の僕、正座の状態で立っているコロナ様に説教を受けております。

相良「ははは。尻に敷かれてるな」

し……師匠。言わないでくださいよ〜！

ヴァン「あ……えっと、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「……大丈夫？」

そう言っつてヴィヴィオは僕の左頬を右手で触れた。

顔と顔の距離が近い……

ヴァン「ヴィ、ヴィヴィオ!？」

ヴィヴィオ「動かないで。今、治癒魔法をかけるから」

ヴァン「え……」

ヴィヴィオはそのまま、右手に魔力を込めて僕に治癒魔法をかけた。

ヴァン「ヴィヴィオ……お前」

治癒魔法。使えるようになったのか……

ヴィヴィオ「昨日は、ごめんなさい。だから、これはお詫び」

そう言った時のヴィヴィオの表情は、いつもの明るい表情だった。

ヴァン「……ありがとう」

コロナ「……（やっぱり、ヴィヴィオもヴァン君のこと……
それじゃ、私も負けてられないな）」

相良「（ヴァンはやっぱりモテるな。俺みたいに一夫多妻制になる
か、一人を選ぶか、楽しみだな……）よし。取り敢えずヴァンとア
インハルトは医務室に行つて体を見てもらおう。行くぞ」

ヴァン「は……はい！」

そう言つて僕達は師匠について行つた。

ヴァン「ねえコロナ」

コロナ「ん？」

ヴァン」おっき、叫んでくれてありがとう。嬉しかったよ

「コロサ」うん／＼／＼

空の騎士VS霸王　　↓決戦開始↓（後書き）

戦いの結果は空の騎士の勝利だった。

だが、まだ全ては始まったばかり。

これからどうなっていくかは・・・まだわからない。

結果が、変わるかもしれないからだ。

けど、今回は・・・彼の勝利になった。

キャラ紹介 2

ヴァン＝スカイ 10歳 血液型A B型 身長160cm(どっこ考
えても4年生にしてはデカすぎる)

所属、陸宙管理本部「囑託魔導士」

ベルカ・ミッド両方

魔力ランク EX(測定不能)

魔力色「薄い緑」

魔力変換資質「風・空気」

戦闘スタイル ストライクアーツブレイドアーツまだまだあらしい 格闘技・剣士・Unknown

デバイス 「ニルヴァーナ」

形態 グローブ・Unknown まだまだあらしい

技

・ストーム 神風討つ拳鳥の緑槍 ストライク

全身に魔力を纏い、攻撃する。

攻撃以外にも、防御を上げることが可能。

ただ、魔力を放出し続けるため、長続きはしない。

・ストーム 神風息吹くトルネード神鳥の翼

竜巻を拳で放つ技。

当たるとその竜巻に飲み込まれて、風で切り刻まれる。

・ストリーム 神風纏う翼の斬撃スラッシュャー

空気と魔力を片手に翼を形成するように集め、斬るように放つ。

隙が出来やすいが、威力が高い。

・ストーム 鳳凰ウイングの風装

ストーム 神風討つストライク拳鳥の緑槍の防御形態。

相手の攻撃を逸らす目に見えない風の防御壁。

これも魔力を放出し続けるため、長続きはしないため、その時そのときで発動する。

・ストーム 鳳凰バーストストリームの疾風爆裂拳

使用者を中心に魔力と竜巻を発生させ、巨大な力を発生させ、それを両手に集め、両手でそれを収縮。

その後、利き手である右手に左手の分を集め、そのまま相手に当てる。

これは拳でしか使用できないが、溜めた魔力を一つの砲撃として放つことも可能。

拳で放つときのそれは簡単に言えば収束砲撃フレイカーの圧縮 + 打撃のような感じ。

まだまだあるが、それはのちの話で発表します。

容姿

緑色の短髪の髪をして、瞳が黄色い。

服装は学院の制服。

私服は白いTシャツに茶色の振袖を着て、黒いズボンでいる。

BJはダークグリーンの上着に黒いズボンを履き、デバイスは両手にグローブの形で装着されている。

性格

・真面目

・色んな事に挑戦しようとするチャレンジ精神がある。

・負けず嫌い。

・物事を常に冷静に考えて行動する。

・諦めが悪い。

・鈍感（相良翔譲らしい）

・物事はできる限り一人で解決させようとする。

・友人、彼女、親友の類は大切にする。

リオナ「カミナ 10歳 血液型A型 身長145cm（本当に4年生？）

所属 陸宙管理本部「囑託魔導士」

近代ベルカ式

魔力ランク AA+

魔力色「紅」

魔力変換資質「雷・磁力」

戦闘スタイル

ロングシューター
レイクシューター
射撃・砲撃手

デバイス「不屈の刀」
レイジングソード

形態 日本刀・ライフル

技

共通技

・充電
ライトニング・チャージャー

・雷見せる防壁
ライトニング フィールド

・雷の翼
ライトニング

・雷の導き
ライトニング

刀技

・雷討つ刀虎の一閃
ライトニング スラッシュ

・雷切り裂く刀虎の斬撃
ライトニング ザンパー

・全てを切り裂く雷
ツール スラッシャー

銃技

- ・雷撃つ銃虎の魔弾
ライトニングシュバルツ
- ・雷放つ銃虎の砲弾
ライトニングキャノン
- ・トール全てを打ち抜く砲撃
ブレイカー

まだまだあるが、それはこれからわかります。

容姿

紅いロングテール髪に紫の瞳をしている。

BJは赤い浴衣。

性格

- ・不真面目
- ・可愛い者・物には目がない。
- ・隠れて何かをするのが好き。

・三度の飯より女の子。

・GL（ガールズlove）精神

・人の名前の最後に「ン」をよく付ける。（元タンが付いている人には付けない）

・友達、親友は大切にする。

・テンションが普段から高いが、戦いになると静かな人になる。

音使奏多 おとつか そうた 年齢18歳 血液型O型 身長165cm

Unknown

詳細は今後投稿する。

容姿

・ 白い短髪の髪に藍色の目をしている。

・ 服装は白と青の軍服。

キャラ紹介 2 (後書き)

変更があるかと思いますが、今の所こんな感じですよ。

期待（前書き）

戦いが終わり、少女と少年の戦いは少年が勝利した。

少年の勝利の裏側には、一人の少女の力があつた。

そして休む少年の元に、一人の決意を持った少女が来る。

彼女が言う、少年への頼みとは・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
t y } 始まります。

期待

場所が変わって現在医務室。

相良「シャマル」

シャマル「あら？翔くん……って、二人ともまた怪我したの？」

医務室に着くと早速シャマルが二人を見つけて心配した。

相良「取り敢えず二人の検査お願い。ヴィヴィオはちょっとヴァンとともに話がある。コロナはちょっと悪いけど席を外してくれないかな？」

コロナ「……はい。わかりました」

そう言ってコロナは医務室から出た。

シャマル「それじゃ先にアインハルトちゃんから検査しましょうか」

アインハルト「はい」

そう言って二人は奥に進み、奥の扉を開けて進んでいった。

相良「・・・で、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「ん？何？」

相良「お前、ヴァンに言いたい事があるんじゃないか？」

ヴィヴィオ「！」

ヴァン「？」

ヴァンが何も理解できない表情してる。

相良「俺がいたら邪魔っばいから取り敢えず席を外す《言いたいことがあるなら、ちゃんと見えよ。後悔すんぞ》」

俺は念話でそう言っつて医務室から出た。

コロナ「あ、翔さん・・・」

相良「今、ヴィヴィオとヴァンを二人だけにさせた」

コロナ「はい・・・」

やっぱり不安そうな顔をした。

相良「彼女になると、やっぱり心配するの？」

コロナ「！？な・・何でそのことを？」

相良「さっきヴァンがアインハルトと戦っていた時の最後の大技勝負の時、コロナがヴァンの名前を呼んでたよな。あれのおかげか知らないけど、その瞬間にヴァンの魔力値が結構上がったんだ。もしかしたらヴァンの勝利の背景にはコロナがいたと思ったからだ。それに、ここに来るまでずっとお二人さんは手を繋いでいたからな」

コロナ「あ／／／／あはは／／／／」

頬を赤くして恥ずかしそうにはにかんだ。

相良「二人が恋人同士なのはもう大体の人は知ってるだろうな」

コロナ「はい。だって、自慢の彼氏だから・・・自慢したいんです」

幸せそうな表情になり、そう言った。

相良「そうか。そんじゃ、コロナには知っておいた方が良さよな。ヴァンのこと」

コロナ「？」

相良「ヴァンな、昔・・・ちょっとあつてな。本当は・・・生きて
いることが奇跡なんだ」

コロナ「え・・・・・・・・」

そのとき、コロナの両手がだらんとたれた。

コロナ「それって・・・・・・・・どういう・・・・・・・・」

相良「・・・・・・・・」

こうして俺は、ヴァンの過去を話し始めた。

ヴァン Side

ヴァン「それで、俺に何かようなのかな？」

ヴィヴィオ「えと・・・うん」

師匠が言っていたヴィヴィオの話とはなんだろう？

ヴィヴィオ「あのね、私・・・ヴァン君の弟子になりたいんだ」

ヴァン「・・・はい!？」

思わず声を上げてしまった。

てか、僕が師匠!？ヴィヴィオの!？

ヴァン「ど、どうして?それだったら、僕の師匠の相良翔師匠に頼めばいいだけじゃないか」

ヴィヴィオ「そうなんだけどね。でもお兄ちゃんは忙しくてあまり練習に付き合ってくれないと思うの。だからヴァン君にお願いしたくて」

ヴァン「・・・」

確かに、師匠はこの総裁だ。

忙しい中で僕の訓練を手伝ってくれるだけでも大変なのに、師匠が

これ以上忙しくなれば必ず仕事に支障をきたすことになる。

でも……

ヴァン「悪いけど、僕はヴィヴィオの師匠にはなれない」

ヴィヴィオ「どうして!？」

ヴァン「僕とヴィヴィオはライバルだからだ。アインハルトも、コロナモリオもリオナも……僕達同世代がライバルなんだ。僕が師匠に弟子入りしたのは、リオナにだってヴィヴィオにだって負けなくて、守れる力が欲しいからだ。でもヴィヴィオの目的は違う。ヴィヴィオは僕の事を信頼して弟子入りしたいといったと思うけど、僕ヴィヴィオに何も教えられない。僕の魔法は、他人に教えてはいけないから」

ヴィヴィオ「それって……どういうこと？」

ヴァン「僕の本領は拳じゃないってことだ。ま、最後に決着付けるときは拳だけだね。だから、拳を使うヴィヴィオに拳以外が本領の僕が教えられることなんてない」

ヴィヴィオ「それじゃ……私はどうすればいいの？」

ヴァン「……いるでしょ？お前と同じ、ストライクアーツ格闘技の人。ヴィヴィオの近くには、色んな戦闘スタイルの人がいるんだよ？」

ヴィヴィオ「え……あ！」

お、気づいたみたいだね。

ヴァン「僕が言えるのはここまでとして、後は自分でなんとかする。それで僕と戦いたい時はいつでも声をかけていいから。相手になつてやる」

ヴィヴィオ「本当!？」

ちよ・・・顔近い。

ヴァン「あ、ああ・・・僕が暇だつたらな」

目を合わせられないな・・・

ヴィヴィオ「ありがとう。ヴァン君」

ヴァン「ああ」

それからしばらくして僕達はそれぞれ解散した

相良「ヴァン」

コロナ・・・それを師匠に言ったのか!?

相良「あゝ、コロナもそれ言って顔赤くしてたな・・・今のお前みたいな感じ」

ヴァン「・・・参りました」

相良「何に!?!」

色んなものにです。

相良「まあいいや。それで、そっちは何の話をしたの?」

ヴァン「ヴィヴィオが僕の弟子になりたいとか何とか」

相良「・・・え?お前が師匠!?!」

ヴァン「え、ええ」

そのとき、師匠から悲しみのオーラが漂っていた。

相良「そうか・・・とうとう弟子が遠くに行くのか・・・このショックな気持ちって父親の感覚なのかな・・・」

あれ・・・なんか、暗い・・・

ヴァン「あの・・・一応断りましたけど・・・」

相良「・・・え!?!」

一瞬でオーラが去っていった。

相良「何で？」

ヴァン「・・・僕とは戦闘スタイルが合わないんで教えられないこと
がありません。そもそも僕の戦いは危険です。間違えれば、気を抜
けば人を殺してしまいます。そんな戦いをヴィヴィオに教える訳に
もいきませんし・・・」

相良「なるほどな。お前なりに真剣に考えた結果か。ま、悪くない
かな」

ヴァン「はい・・・」

相良「それでさ、アインハルトの動き・・・どうだった？」

ヴァン「はい。面白い戦闘スタイルですね。あれがカイザーアーツ霸王流ですか。
最後の一撃同士のぶつけ合いが中々面白かったですよ」

そう。あの一撃が一番ドキドキして面白かった。

そもそもあの動きをする人を初めて見た。

どんな攻撃を仕掛けてくるか予測不能だったな。

ヴァン「ストーム鳳凰の風装ウィングを使わなかったら負けてたかもしれません」

相良「嘘つけ。そもそもあれを最初から最後まで使っていればインハルトの攻撃は何一つ当たらなかっただろう？」

ヴァン「あ……えと、まあそうですね」

そう。この鳳凰の風装は風を纏い防壁を作るものにある。

例えば相手の攻撃が僕の向かってきたらこれで攻撃を受け流すことができる。

打撃も逸らすことが出来るのが良いところ・…なんだけど、魔力消費が難であるので前半からはあまり使いたくない。

だが僕はそれなりに魔力量になら自信があるので、長持ちはする。

ま、今回時々にしかならなかつたのはただの様子見だったただけだけだな。

ヴァン「ですが、彼女はもっと強くなれるでしょうね。まだまだ伸びを感じますし」

相良「そうか。にしても・・運命ってすげーな。古きベルカの聖王と霸王に空の騎士の3人を揃えるなんてな」

ヴァン「あはは・・僕にはそんなものは関係ないですが、この出会いは大切にしたいですね」

相良「ああ」

そう言って、僕達は会話を続けて、その後、家に帰っていった。

「みんなさいともっつ

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「ノーヴェー!!」

ノーヴェ「?何だヴィヴィオ?」

私はノーヴェのいる家に訪れた。

ヴィヴィオ「えっと、私を・・・強くして欲しいの」

ノーヴェ「え?あたしが!？」

私の言った言葉の意味を、ノーヴェは理解してくれている。

ノーヴェ「あたし・・・か。ま、まあ別に構わねえけど・・・」

ヴィヴィオ「本当!?ありがとう!!」

ノーヴェ「あ・・・ああ。・・・まさか、本当にくるなんてな・・・」

「

ヴィヴィオ「え?何か言った?」

ノーヴェ「あ・・・いや、何でもない。あたしに出来ることなら、ストライクアーツ同じ格闘技だから教えてやるよ」

ヴィヴィオ「うん!宜しく!」

こうしてヴィヴィオの特訓は始まった。

それから少し前

ノーヴェ Side

ノーヴェ「え！？あたしが!？」

相良「ああ。ヴィヴィオの師匠を頼みたい」

ノーヴェ「え・・・いや、いいのかよあたしで・・・」

相良「いや、正直なところお前しかいない。ギンガは忙しいからさ」

そうか・・・それじゃ姉・・・

ノーヴェ「分かった。あたしがやるよ」

私は全てを悟ったように了承した。

相良「あ……あはは……分かってくれて助かる」

そう。スバルという姉がいないこともないが……教えるってことがちゃんと出来そうにみえねえからな……

相良「来週にでもアインハルトと再戦をさせてみたいからさ」

ノーヴェ「ああ。分かったよ」

それから1週間

相良「それでは、始め!!」

アインハルトとヴィヴィオの戦いが始まった。

場所は陸宙管理本部の訓練所。

ここにはヴァンと芳乃とノーヴェがいる。

アインハルト「（綺麗な構え・・・前とは違い、油断も甘さもない。師匠や仲間に囲まれて、この子は格闘技を楽しんでる。私とは何もかもが違うし、霸王の拳わたしを向けていい相手じゃない・・・）」

ヴィヴィオ「（前とは違って威圧感、一体どれくらい、どんな風に鍛えたんだろう・・・。勝てるなんて自信はない。だけど、だからこそ、一撃ずつで伝えなきゃ!このあいだは、ごめんなさいって!）」

そしてアインハルトが先手を打ち、ヴィヴィオに殴りかかる。

ヴィヴィオは腕でガードする。

アインハルトの連打を避け、アインハルトの腹部に一撃を入れる。

ヴィヴィオ「（私の全力、私の格闘技ストライクアーツ!!!）」

アインハルトは後ろに吹き飛ばされる。

体勢を立て直した所に、ヴィヴィオが更に追撃する。

アインハルトはそれを防ぎ、反撃する。

ヴィヴィオ「ぐう!!」

ヴィヴィオは顔を歪めながらも反撃する。

攻撃がアインハルトの顔を掠る。

芳乃「よしっ！」

ヴァン「あと少しだけど……」

相良「ここからだな」

アインハルト「この子は・・・いや、この子はどうして」

ヴィヴィオはアインハルトの一撃により、地面に片膝をつく。

ヴィヴィオ「くっ!!」

地面に片手をつき、アインハルトに蹴りを放つ。

アインハルトはそれを避け、反撃しながら再び考える。

アインハルト「こんなに一生懸命に・・・翔さんが組んでくれた試合だから？友人が見ているから？私にリベンジするだけのため？・・・」

アインハルトの質問のような考えにヴィヴィオは答えるように考える。

ヴィヴィオ「・・・大好きで・・・大切に・・・守りたい人がいるの!!!」

ヴィヴィオは過去にゆりかごで相良翔に助けられた時の記憶を思い出した。

ヴィヴィオ「（私が受けるはずの痛み、代わりに受けてくれた。そして、私を守ってくれた!!幸せにしてくれた!!そんなお兄ちゃんや、いつも笑顔でそばにいてくれるママ達・・・皆が私を、幸せにしてくれた!!!）」

気づけばヴィヴィオの頭のなかは、そんな幸せな記憶でいっぱいとなっていた。

ヴィヴィオ「だから・・・そんな大切で大好きな皆を・・・今度は私が幸せにしたい!! 笑顔にしたい!! だから私は・・・もっと・・・」

そして

ヴィヴィオ「私はもっと・・・強くなりたい!!!!!!!!!!」はあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ヴィヴィオは渾身の一撃をアインハルトに放つ。

しかし、それはアインハルトに防御され、顎を掠めることしかできなかった。

アインハルト「霸王・・・断空拳!!」

ヴィヴィオ「ぐっ!!!!」

そしてヴィヴィオの懐に、アインハルトは一撃を放ち、ヴィヴィオは吹き飛ばされた。

ヴァン「ストーム・ラン神速」

ヴァンはとっさに両足に緑色の魔力を練り上げ、その力を使って物凄い速度でヴィヴィオの落下地点に向かい、キャッチした。

ヴィヴィオ「きゅ・・・」

目をくるくるさせて気絶していた。

ヴァン「ふう・・・」

芳乃「治癒魔法は俺がやる」

ヴァン「ああ。頼む」

相良「お疲れ。アインハルト」

アインハルト「はい・・・あっ」

相良「おっと！」

アインハルトは突然ぐらつとして倒れた。

俺はそれを何とか抱きしめるような形でキャッチした。

相良「最後のヴィヴィオの一撃が時間差で効いてきたな・・・少しこのままで休め」

アインハルト「で／／／ですが／／／」

相良「その体で立つたら事故るぞ」

アインハルト「はい／／／わかり、ました／／／」

そう言ってアインハルトと俺はそのままだった。

相良「断空拳ってさっきのが本式なのか？」

俺は「断空拳」という技をそもそも知らない。

見たのが初めてだったしな。

アインハルト「『足先から練り上げた力を拳足から打ち出す』技法そのものを『断空』と言います：

相良「へえ……」

アインハルト「私はまだ拳での直打と打ち下ろししか撃てませんが」

相良「なるほどね……それじゃ俺もやってみようかな……」

アインハルト「翔さんなら、すぐにできると思いますよ」

相良「はは……ありがとう」

そう言われるとちょっとやる気出てきたな。

相良「ま、それはよしとして、ヴィヴィオはどうだった？あれでもまだ、遊びや趣味でやっていると思うか？」

そう聞くとアインハルトは無言で首を横に振った。

アインハルト「私は謝らないといけませんね。前回の考えは訂正します」

相良「ああ」

きっと、ヴィヴィオも喜ぶだろうな。

アインハルト「ですが、彼女は霸王わたしが求めていた聖王女ではないです」

相良「うん・・・」

ま、そろそろだなんて思うけど・・・

アインハルト「ですが、アインハルト私はこの子とまた戦いたいと思います」

相良「うん。それで良いと思う。ヴィヴィオの事・・・頼むな」

アインハルト「はい」

相良「よしみんな！帰るぞ！」

全員「はい！」

不思議な事 始まる事件（前書き）

二人の戦いが終わり、一人の新たなライバルと友達が出来た。

そしてこの日、小さな事件が始まる。

それは、いくつかの答えを出す事件となる。

鍵となるのは数字と生贄と闇と・・・歴史。

更にそれは、新たな物語に繋がる重要な事件となる。

魔法少女リリカルなのは Vivid World In infinity
ty 始まります。

不思議な事 始まる事件

陸軍管理本部 捜査会議室。

相良「それでは執務官から、フェイト・T・ハラウン執務官。ティアナ・ランスター執務官。お願いします」

フェイト・ティアナ「はい！」

会議室に俺、フェイト、ティアナ、ノーヴェ、スバル、ギンガ、ルチア、シユテル、アーチエ、ウーノ、ジエイルがいた

フェイト「最近ミッドチルダ全域で発生している謎の失踪事件に関するのですが、今までに男性4人女性14人計18人にも上っています」

ティアナ「誘拐された方々の共通点・犯行現場の関係性などは今だ発見に至っていません。犯人からの要求などは一切なしです」

相良「そうか・・・」

ヴィヴィオとアインハルトの戦いから早くも1週間が過ぎた今日、最近地上で頻発している誘拐事件についての会議をしている。

相良「この中で何かこの誘拐についての情報がある人はいるか？」

そう聞くが、誰も手をあげない。

相良「そうか……。現場から見つかったものを教えてくれ。ギンガ・ウーノ」

ギンガ・ウーノ「はい」

ギンガ「現場からは被害者の鞆やデバイスが見つかっています。それ以外には血痕がありません」

相良「その血は被害者のか？」

ウーノ「はい。ですが、その中に被害者以外の血がありました」

相良「他の血……。その血から特定できたのは？」

ウーノ「その血からは犯人は男性であることが特定できました……。ですが……」

相良「？」

ウーノの表情が重いものとなった。

ウーノの代わりに言うようにジェイルが話し始めた。

ジェイル「その血は何故か活発に動いてるんだよ。まるで生きているみたいに」

相良「い……。生きてる……」

それって……。血液に何か混ぜてるのか……

相良「その血液を見て、ジェイル自身はどう思う?」

これはあくまで個人的な意見だった。

ジェイル「……はつきり言おう。これは人間ではない。人間とモンスターを混ぜたような感じた。だが、モンスター以外にも何かある……そう思う」

相良「……」

モンスターとは、一部付近で大量発生する巨大生物のことだ。

空を飛ぶモンスター・地面の潜るモンスター・透明になるモンスター……などなど。

俺達は4人組みのチームで何度もクエストに向かっているが、未だにその数が減らない。

新種の発生や亜種の発生……様々だ。

だが……今回はそれと人間が混ざってしまった可能性がたかい。

しかも新たな何かが混ざっているらしい……

??「それはきつと、「ダークファルス」の欠片だと思う」

全員「!」

皆が扉を見た。

扉には、彼がいた。

相良「音使……」

音使「奏多でいいよ。それよりも、今の話を聞かせてもらった。俺の世界が関係してるかもしれないねえ」

相良「……詳しく教えてくれ」

音使「ああ」

音使「前にも言ったが俺たちの世界では「SEED」という闇と戦ってきた。その根源は「ダークファルス」って言うんだ。俺やエミリアや……俺たちの世界では「イーサン」っていう英雄も戦い続け、何度もダークファルスの破壊には成功してるんだ。だが、闇は粉々に散りばめられ、ひとつになり……また新たなダークファルスになっていった。もしかしたらこの世界にもそれが来たのかもしれない」

相良「それが人に感染するなんてことがあるのか？」

音使「あるよ。あのナギサも、SEEDに関係して生まれている。俺達は種族があるんだ。「ヒューマン・ニューマン・キャスト・ピ

「スト」この4つが今までだった。だが、SEEDに感染して生まれた新しい種族「デューマン」があるんだ。ナギサはそのデューマンなんだ」

シユテル「彼女からダークファルスが生まれる可能性は？」

音使「無い。一度あいつもダークファルスと戦って倒したからな」

倒した・・・か。

それでもまだ増えるのか・・・

相良「なら、今起こっている事件の事は分かるか？」

そう聞くと、奏多は静かに首を横に振った。

音使「分からない。だけど、もしかしたら何かの儀式をしているのかもしれない」

相良「儀式？」

音使「ああ。この被害者の性別・・・比較的に女性が多いけど、男性もいる。これは、男性も必要だったこと・・・そして近づく合計数が「20」。男性4人に女性14人・・・次に2人が誘拐されて・・・何かが起こる可能性だってある」

全員「!!!!!!」

待てよ・・・この話がもし本当だとしたら、自体は急を要することになるぞ!!!!!!

相良「まさか・・・強大な魔法でも使う為に、20人を使うのか・・・」

20人もの大人数だ。これは相当デカイ魔法になるぞ・・・

相良「これからの活動方針の発表をする！！ウーノ・ジエイルは引き続き血液の鑑定。ギンガとアーチェとノーヴェは警備の協力を地上本部と管理局から貰ってきて欲しい。ティアナ・スバル・ギンガは今のところ待機だ。シュテル・フェイト・ルチアは俺と来てくれ。奏多。お前も手伝ってくれ」

全員「はい！！」

音使「分かった。助けてもらった恩もあるからな。それに、SEE Dが関係するなら、俺たちも黙っちゃいない」

相良「ああ。助かる」

そして各自解散した。

そして会議室にはフェイト・ルチア・シュテル・音使・エミリア・ルミア・ナギサ。そして俺がいる。

相良「みんなを揃えたのはほかでもない。これからいくつかチームに分けて捜査を行おうと思う。メンバーの発表をするぜ」

Aチーム 相良・ルチア・音使・ナギサ

Bチーム フェイト・エミリア・ルミア・シュテル

相良「以上だ。このチームのリーダーはAチームは俺。Bチームはフェイトに任せる。良いな？」

フェイト「了解」

相良「うん。それと、皆リミッターが各自あるようだけど、リミッターは全員解除許可を俺が出す。だから好きなだけ暴れて欲しい」

全員「了解！」

相良「よし！それでは、Bチームにはこの地方に行って欲しい。もしかししたら何かあるかもしれない」

そう言っただ俺は一枚の紙を渡した。

フェイト「うん。分かった」

相良「無茶するなよ。危険だと判断したら、逃げてきても構わない」

フェイト「うん。絶対に帰ってくる」

そう言っただフェイト達は会議室を出ていった。

相良「・・・さて」

ルチア「少し無茶な方法を選んだわね。翔」

相良「いや、今の状況で最善の選択だと思ってる」

そう。今の段階で大人数を使っても危険だ。

なぜなら相手は強大だからだ。

俺が一番信頼できる仲間を選んだつもりだ。

スバル達は新たな情報が入った時の為に置いておくことにした。

音使「それで翔。これからどうするつもりだ？」

相良「取り敢えず今ある情報の中で出来ることをしたいが……」

ロード「マスター。ヴィヴィオ殿から緊急に通信が入ってきております」

相良「緊急？ああ、つなげてくれ」

ヴィヴィオ「お兄ちゃん!!」

相良「ヴィヴィオ？どうした？そんなに慌てて」

なにやらただ事ではないらしい。

ヴィヴィオ「さっき、アインハルトさんとコロナが……」

相良「……なっ……!!」

今のヴィヴィオの言葉に、俺達は衝撃を受けた。

ヴィヴィオ「アインハルトさんとコロナの二人が……誘拐されたの!!!」

ルチア「嘘!？」

音使「まさか……2人……」

ヴィヴィオ「それで、今ヴァン君と芳乃君の二人が急いで助けに行
くって……」

相良「!」

二人が！？あの馬鹿……

相良「分かった。ヴィヴィオは家にいる。絶対になのは達から離れるな！それと、アインをヴァン達の所に連れて行け！俺も向かうから、合流して叩く！」

ヴィヴィオ「う、うん！分かった！！」

そう言ってヴィヴィオは通信を切った。

相良「よし。俺たちも行くぞ！」

全員「ああ！！（うん！！）」

そう言ってオレ達は転送魔法陣に乗り、ヴァン達がいる場所へ向かった。

??? Side

???「・・・よし。これで20の生贄が揃った・・・」

男性の喜びながらそういう声。

そして両手足をバインドで縛られ、ガムテープで口を抑えられている二人の少女。

その横には何人も男女がいた。

彼女たちは必死にもがいていた。

???「くくくつ・・・無駄だ。このバインドは貴様ら程度では解けない。だが・・・まさか、霸王の血を持つ者を見つけたとは運がない・・・さて、魔法を発動させるとするか・・・」

そう言うと一人づつ、被害者の足元にベルカでもミッドでもない魔方阵が表れ、彼女達から魔力を吸い始めた。

アインハルト・コロナ「(助けて!!!!!!)」

ヴァン「急ぐぞ！」

芳乃「ああ!!!!!!」

二人は真夜中のマンションの屋上をいくつも飛び回っていた。

アイン「急がねば!!!主と・・・主の友人がピンチなのだ!!!」

そう言って夜空をかけていた。

相良「急げ・・・急げ!!!」

俺たちも、全力疾走で向かっていた。

助けを待っている、彼女達の元へ・・・

不思議な事 始まる事件（後書き）

動き出した事件。

そして動き出す仲間たち。

奪われた大切な彼女達を救うために・・・最悪の結果を打ち砕くために・・・

終焉のカウントダウン (前書き)

近づく儀式。

それにより、最悪の結果が訪れるかもしれない。

そして誘拐された大切な2人。

彼女たちを助けるために、俺達は向かう。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty } 始まります。

終焉のカウントダウン

ヴァン Side

ヴァン「もうすぐだ！」

芳乃「ああ！」

僕と零二は両足に魔力を練ってその力で地面を踏み込み、空高く飛んで移動していた。

コロナの携帯のGPSのおかげで場所は分かっている。

あと少しでたどり着くんだ。

・・・早くしないとコロナとアインハルトが危ない！

ヴァン「！あそこだ！！！」

芳乃「行くぞ！」

そこはミッドチルダの街からかなり離れ、森を走っていた。

そこの近くにある謎の教会。

芳乃「ここにいるのか？」

ヴァン「GPSはここを表示してる」

芳乃「よし。なら行くぞ」

ヴァン「ああ！」

そう言つて僕達は勢い良く教会の扉を蹴り開けた。

芳乃・ヴァン「!!!」

そして僕達が見た光景は、絶望だった。

大体20人ほどの人が倒れているのだ。

奥には一人の黒い服を着た男性がいた。

コロナ「う……うう……」

ヴァン「！コロナ！！」

コロナも、その中に倒れていた。

芳乃「アインハルト！」

アインハルト「く……………」

二人に駆け寄ると、二人はまるで悪夢を見ているように汗をかき、
魔されていた。

そして……更に

ヴァン「！コロナ達の魔力が全部抜き取られてる……………」

そう。コロナ達から魔力反応がないのだ。

魔力ゼロ…………でも、リンカーコアは生きてる。

芳乃「だけど…………ここまでリンカーコアが傷ついていると、普通
の治癒魔法とかじゃ治らねえな」

ヴァン「な!?!」

つまり…………コロナ達は魔法が使えなくなる…………

????「おや?君たちは誰だ?」

ヴァン「……てめえこそ誰だ？」

僕は低いトーンでそう聞いた。

欠片「私は「ダークファルスの欠片」だ。名前などない」

ヴァン「？ダークファルス？」

欠片「貴様らには関係の無いこと。すでにその小娘らの魔力を頂いた。これで終焉のカウントダウンの生贄が整った」

芳乃「！？まさか……てめえ、あの破滅魔法を使う気か！？」

ヴァン「？零二。何だその終焉のカウントダウンってのは？」

芳乃「それは数字で20になるように生贄となる人を集め、その者たちの魔力全てを一点に集結させることで強大な破滅魔力砲を完成させれるんだ。だが、その魔法の対象は人1人が限界じゃなかったか！？」

欠片「よく知っているな。その通り。私は相良翔の抹殺。それだけが望みだ」

！師匠が狙い……

……ふざけるなよ……

ヴァン「まさか……たかがそのためにコロナが……生贄にされたのか……」

欠片「そうだが？」

こいつ……反省のいろ無しだな。

僕の……大切な彼女を傷つけやがって……こいつ……

そして 僕は全身の魔力を身に纏った。

欠片「!？」

ヴァン「零二。皆を頼む」

芳乃「俺も戦うぜ」

ヴァン「いや、こいつは僕に殺^やらせてくれ」

芳乃「！（こいつ・・・魔力と殺気を混ぜて纏ってやがる・・・）
・・・ああ。任せませ」

そう言つて零二は二人を抱えて僕たちから距離を取るように離れた。

欠片「おやおや良いのかい？1対2の方が分があると思うが？」

ヴァン「お前は僕が殺すつて決めた。だから僕だけで殺る。・・・
それだけだ」

そう言つて僕は右拳の魔力を集中させた。

欠片「ほう・・・良い度胸だなガキ」

奴の声のトーンも変わった。

相手は全身に闇の魔力を纏った。

そして

ヴァン「ストームストライク風討つ拳鳥の緑槍!!！」

欠片「ブラックブラスト!」

二つの拳がぶつかり合い、大きな爆発を起こした。

ヴァン「ストーム・スラッシャー風纏う翼の斬撃!!!!」

爆風の中から、魔力で翼を作り出し、切り裂くように振り下ろした。

欠片「くっ!!!!」

奴は両腕で防御するが、押され、地面に両足がめり込んでいった。

ヴァン「はああああああ!!!!!!」

そのまま力を増やし、押しつぶすつもりで振り下ろした。

欠片「ぐうううう・・・ガキ、中々やじゃないか?」

だが、奴も余裕だった。

ヴァン「ソニック・シューター!」

空いた左手に魔力の弾丸を練り上げ、投げ飛ばした。

奴はそれはジャンプしてかわした。

そしてそのまま素早く僕の背後に回った。

ヴァン「！」

欠片「ダークヘル・フレイム！」

奴の右手は何と竜の顔になっていて、その竜の口から青紫の炎が放たれた。

僕は驚き、それを受けながら地面に叩きつけられた。

欠片「ふはははははははははは！！！！素晴らしいだろう！この火力！この力！闇の力はやはり素晴らしい！！」

そう言いながら奴は僕が落下した場所に容赦なく大量の炎を放ち、その教会を焼き尽くすように放ち続けた。

倒れていた人は皆、零二が運んでいったみたいだ。

そして好きなだけ放ち続けた奴は地面に着地し、青紫の炎の海の中から僕を探していた。

欠片「ふむ・・焼けて死んでしまったか・・だが、これで邪魔者はいなくなつた。今こそ、あの忌まわしき光と闇の力を持つ相良翔

を殺す時がきたのだ！！」

ヴァン「たかが……たかがそれだけのために、僕の女を傷つけたのか？」

欠片「!？」

そのとき、青紫の炎が一つの竜巻を発生させ、その中心から僕が出てきた。

欠片「ガキ!?!?どうして生きている!?!?あれだけの炎を喰らって、傷一つ無いだと!?!？」

そう。僕の全身には怪我の後などは何も無い。

別にB Jを着ているからじゃない。そもそも僕はデバイスを「起動

させていない」。

先ほどからずっと私服で戦っていたさ。

ヴァン「どうした？その程度がお前の本気か？」

挑発気味の発言に奴はキレて両手を出した。

・・・こいつ、両手が竜の顔になってやがる。何があったんだ・・・

そして竜の口を僕の向けた。

欠片「これが私の本気だ。今までの炎だと思っなよガキ！！！！」

そう言うと奴の竜の口に大量の闇の魔力が収束し始めていた。

そして奴は放った。

欠片「ダークネスフォトン・フレイム！！」

青紫の膨大の炎が僕に放たれた。

ヴァン「ストーム・ウイング鳳凰の風装」

ぼそつと僕はそう言って、炎に包まれた。

欠片「ほう・・・避けずに受けたか。だが、これでおしまいだ。我が最強の奥義を喰らい、生きているはずが・・・」

ヴァン「へえ・・・その程度が本気か」

欠片「何!？」

僕はもう一つの竜巻を発生させ、無傷で炎の海から現れた。

ヴァン「悪いが、僕には一切の攻撃は効かない。だから・・・ここで死んでもらう!」

そうやって僕は先ほどからあった二つの青紫の炎を纏った竜巻を操り、奴に向けてはなった。

ヴァン「ストーム・カウンター神風返す風拳の竜巻」

欠片「ぐ……ぐわあああああ……!!!!!!」

奴は炎の竜巻に飲み込まれ、

グルグル回りながら天井まで飛ばされ、そのまま地面に叩きつけられた。

ヴァン「……」

これで終わった。

そう思い、僕は教会を後にしようとした。

欠片? 「漆黒の帳下りし時、冥府の瞳は開かれる。舞い降りる闇よ
! 《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》!
「ヴァン」!

だが、奴は倒れていない。

そして……姿が変わっている。

声も変わっている。前よりもワイルドっぽくなってる。

奴の姿は徐々に大きくなっていき、全長4mほどの巨大な龍となった。

特徴は、頭の方にある大きな目に、全身にある目だ。

真っ黒で、全身に目がある。

もう・・・人の姿がないな。

ヴァン「それがお前の本来の姿か？」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「我が名はワンハンドレッド・アイ・ドラゴン。この姿を見せた以上、貴様を生かすことはできない」

ヴァン「・・・そうかよ」

そんなこと関係ない。

僕は、絶対にてめえを許さねえ。

僕の大切な女を傷つけたんだ。

絶対に殺す！！

ヴァン「ストーム・スラッシャー風纏う翼の斬撃!!!!!!」

両手で巨大な魔力の翼を作り、それで奴に切りかかった。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「インフィニティ・サイト・ストリーム!」

奴は口から青紫の炎を放った。

そして二つがぶつかり合う。

ヴァン「ぐううう!!!!!!」(「いつ……さっきよりも強い!」)

僕はすぐにその攻撃から逃げるように距離をとった。

ヴァン「はあ、はあ、はあ……いつ……強い」

本気で戦わないとやられるな。

ヴァン「ニルヴァーナ。セットアップ」

ニルヴァーナ「分かったわ」

僕は大人モードになり、BJを着た。

ヴァン「行くぞ！」

そう言っつて僕は足に魔力を込め、素早く奴の懐に入った。

ヴァン「風討つ拳鳥ストームストライクの緑槍！」

魔力を込めた拳が奴の懐に入る。

奴は懐を押さえ込み、後ろに下がった。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「ぐうううう！！貴様、いい度胸だ・・・な！！！」

そう言っつと奴の全身の目が紫色に光だし、その全ての目から紫色のレーザが放たれた。

ヴァン「何！？」

僕はそれを直撃で受けて、吹き飛ばされた。

ヴァン「ぐはっ！」

地面に転がり、壁に背中をぶつけ、僕は全身傷だらけになった。

体のいたるところから血が流れている。

ヴァン「ぐう・・・防御しきれなかった・・・」

これが・・・奴の本気・・・

やばい・・・今の一撃で体が動かない・・・

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「これで・・・最後だ！」

そう言うと奴は口に青紫の炎を集め始めた。

ヴァン「く・・・そ・・・」

ここまでか・・・コロナの敵討ち取れなかったな・・・くそ！

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「インフィニティ・サイト・ストリーム！」

そう言って、青紫の炎を放った。

そして僕は、その炎に包まれた。

だが

「……」「全く、どうして一人で全てやろうとするかな……」

ひとりの男性の声。

「……」「そっね。ヴァンらしいと言えたらいいけどね」

ひとりの女性の声。

??「今、治すからな」

そして戦友の声。

3人が、僕の前に立っていた。

ヴァン「師・・・匠」

そう言って、ヴァンは意識を失った。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「貴様ら、何者だ!？」

??「簡単だ。ヴァンの仲間・・・戦友だ」

そして少年は素早く動き、奴に拳をぶつけた。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「何!？」

奴は驚き、後ろに下がった。

芳乃「よくも……俺の戦友を傷つけたな!……!」

蒼きオーラが、彼の全身を包んでいた。

芳乃「お前は……俺が裁いてやる!……!」

終焉のカウントダウン (後書き)

拳に込める、友の想い。

放つ一撃が、勝負を分ける。

そして遂に明らかになっていく、彼の能力。

罪と罰の一撃（前書き）

俺はただ、大切な仲間がやられたから、だから裁く。

俺のこの想いを魔法に乗せて・・・

その罪を、受ける。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

罪と罰の一撃

芳乃 Side

芳乃「七つの大罪^{グリモワール}」

そう言うと、俺の周りに7色の宝石が表れ、浮遊していた。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「何だ・・・その石は？」

芳乃「てめえには教える必要ねえよ。ここで裁かれておしまいなんだから」

そう言つて俺は紫色の宝石に魔力を集中させた。

芳乃「Luxuria^{アスモデウス}」

そして紫色のレーザーを放った。

それをワンハンドレッド・アイ・ドラゴン?・・・長い名前の龍にあたった。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「ふん!痛くも痒くもないわ!」

そりゃそうだ。「痛くならない」攻撃だからな。

芳乃「Ira^{サタン}」

次に黄色の宝石から黄色いレーザーを放つ。

それも奴は受けた。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「貴様・・我をバカにしているのか？その程度の攻撃が我に効くとでも！？」

芳乃「アスモテウス（さて・・あと何発撃てば良いか・・・）サタン 『i r a』・ 『l u x u r i a』ル」

そう言つて俺は先ほど放つた二つのレーザーを同時に何発も放つた。だが奴には効いていない・・・いや、効いているように感じないつて言えば良いかな？

それからしばらく、俺は奴の攻撃をよけながらそれを放ち続けた。

相良 Side

相良「あれが・・・ダークファルスの欠片を受けた奴か・・・」

音使「あの姿は俺も初めて見たぜ・・・」

遅れて奏多・ルミア・エミリア・ナギサ・シュテル・アイン達 came 来た。

ルチア「あれ・・・どうみても竜だよ？」

相良「ああ。あの姿の竜は初めて見たな。・・・奏多。あいつはもう助からないのか？」

音使「無理だな。完全に乗っ取られてる。あれはもう倒すしかない」

相良「そうか・・・」

哀れな人生の最後だな。

エミリア「って言うかさ、あの子・・・大丈夫なの？敵さん余裕そうなんだけど？」

相良「そりゃそうだ。芳乃の罠に引っかった奴は皆あなる」

エミリア「え？」

ルチアとシュテル以外は？マークが出ている。

相良「あいつの放っているレーザーはそもそもダメージを与えるだ

けが目的じゃない。あれは威力はあるんだけど、敵がそれを感じる
ことができないんだよ」

ルミア「?できない・・・ですか?」

相良「そう。あいつのレーザーの紫色は「痛覚」を奪うからな」

エミリア「それってつまり、敵は痛いつて感覚がないの!?!」

相良「そうだよ。だから自分の体の限界に気づけない」

ルチア「それを何発も受ければもはや麻酔を受けたような感じよね。
・・・ほんと、あの力は鬼畜だわ・・・」

ま、あの目玉だらけの竜は負けが決まってるな。つか死亡フラグだ。

シュテル「ですが、あれが彼の本気ではないですね」

相良「ああ。でもま、ヴァンも実は本気を出してないんだけどな」

アイン「なぜわかるのです?」

相良「この教会が粉々になってないからだよ。あいつの本気は建物
ひとつは砂の様に粉々にできるからだな」

ナギサ「ほう・・・一度戦ってみたいな」

お・・・ここにもいたか。バトルマニア。

しかも水樹奈々・・・げふんげふん!!!フェイトとアリシアと

レヴィと声同じ人でいたよバトルマニア。

相良「さて・・・そろそろフィニッシュかな」

そう言い、俺達は芳乃の戦いを見ていた。

芳乃 Side

芳乃「よし・・・これで終わりだな」ラスト！『i r a^{サタン}』」

黄色いレーザーを今までよりも大きめにして放った。

それが奴の全ての目に当たった。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン「な・・・に・・・」

別に奴を倒したわけではない。

ただ・・・奴には重い罪を背負ってもらった。

しかも2つ。

その一つ目の効果。

奴の視覚は……全て無くなった。

今の奴には何も見えない。

そしてもう一つ……痛覚を無くす。

芳乃「さて……仕上げだ」

そうやって俺は7つの宝石を両手に纏めた。

そして7色光を一点に集中させる。

芳乃「悪いがこの戦い……この一撃でケリをつけさせて貰うぜ
」！

そうやって光は徐々にその大きさを増していった。

そして

芳乃「我に仇なす罪、浄化してやるよ
断罪せし裁きの虹ひかり
その身に受ける」

放たれた、最強の砲撃。

芳乃「ジャッジメント極光の断罪者」

その言葉を発した瞬間、奴は光に飲み込まれて消し飛んでいた。

芳乃「お前の罪・・・死をもって償え」

消し飛んだ後、蒼く禍々しい石が表れ、粉々に砕け散った。

芳乃「・・・ふう。ありがとう。」「七つの大罪^{グリモワール}」

そう言つと、7色の宝石は消えた。

そして俺はヴァン達の元へ歩いて行った。

芳乃「ただいま戻りました」

相良「ああ。お疲れ様」

芳乃「それで、ヴァンは大丈夫……ですか？」

相良「ああ問題ない。風の鎧を纏っているだけあってダメージもそうでかくない」

芳乃「そう……か」

「たく、心配かけやがって……」

ヴァン「……ん……はあ」

お、目を覚ましたな。

相良「起きるの早いな。もう戦いは終わったぜ？」

ヴァン「そう……ですか」

そう言ってヴァン上半身を精一杯上げた。

相良「おっと、無茶をするな」

そう言って翔さんが背中を抑えた。

ヴァン「あはは……すみません」

暴走している可能性がある・・・」

そしてそこから何か呼び出してはいけない何かを呼び出された可能性が・・・

ルチア「！それじゃ・・・」

相良「ああ。まだ・・・何か現れる」

相良 Side

そして、巨大な足音が近づいて来ているのが分かった。

相良「足音？……巨大な……！！！！まさか!？」

アイン「主。何が接近してきているのですか!？」

相良「この巨大な足音からして、相手は巨大なやつだ。多分……」

俺の記憶の中に……2〜3体ほど、巨大なモンスターの名前を知っている。

この足音も、聞いたことがある。

地面を歩く、巨大で、何百年も生きている……そして山の様に巨大な古龍種。

相良「

「ラオシャンロン老山龍」

そして、もう一つの戦いが・・・始まる。

罪と罰の一撃（後書き）

戦いの後にまた戦い。

今日の1日は、くじつから舞くなりそつだ。

ラオシャンロンと闇（前書き）

迫り来る新たな闇

それは元々は闇の生物ではなかったのだ。

でも、迫り来るのは闇。

戦うべき闇。

今日の一日は・・・かなり長くなりそうだ。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
t y } 始まります。

ラオシャンロンと闇

相良「まったく、こんな森の中じゃなかったら今頃もつと大変な事態になってたな」

ラオシャンロンの接近がどれほどの災害を意味するか・・・思い出すのもいやだ。

まああいつの攻撃は主に咆哮と立ち上がったの体当たりとか尻尾とかそのくらいだけだな。

それでも威力は計り知れない。

ヴァン「僕も戦いに・・・つく！」

ヴァンは立とうとしたが、両足に来る激痛により立つことができなかった。

相良「その怪我で何言ってるやがる。お前が来ても何も守れないし、守られるだけになる。だからお前は下がってろ」

悔しそうに唇を噛み締めた。

ヴァン「・・・はい」

そう言って、ヴァンは体の力を抜き、壁に背中をあずける形になり、目を閉じた。

ヴァン「すみません。頼みます」

相良「・・・任せとけ」

悔しそうなのが伝わってくる。

そう。それでいいんだ。

後悔や悔しさなんて、この先進めば腐るほどある。

今のうちに耐えて、苦しんで、将来に腐らない奴になるんだ。

相良「さて、そんじゃシュテル、アイン。俺とユニゾンだ」

アイン・シュテル「はい」

そして俺はアインから順番に唇を合わせた。

アイン「ん・・・」

白銀の光を俺とアインを包み込んで、中から白銀の髪をした俺が現れた。

相良「シュテル」

シュテル「はい……ん」

そして俺とシュテルも唇を合せた。

今度は焰が俺たちを包み込んだ。

そして中から夕焼色の髪に焰を思わせる翼を生やした俺が出てきた。

（「灼眼のシャナのシャナみたいな感じ」）

相良「よし。芳乃は被害者の治療に専念してくれ。それ以外の皆は俺に着いてこい！」

全員「はい！」

芳乃「分かった」

そう言っただ俺達はヴァンを置いて全速力でラオシャンロンのもとへ向かった。

ヴァン Side

ヴァン「何やってるんだよ・・・俺は」

全身がヒリヒリ痛む。

でも、それよりも・・・心が痛む。

僕は、何を守るために戦ったんだ？

何の為に・・・さつき戦ったんだ？

コロナが倒れていたから？敵だったから？闇だから？師匠が狙われていたから？

・・・分からない。

ただ、コロナが倒れていた時、凄く怖かったんだ。

大切な人が・・・目の前で倒れているなんて・・・想像したくもないから・・・

なのに僕は・・・コロナを傷つけた奴に本気で戦わなかった。

何を考えてるんだよ・・・僕は。

ヴァン「畜生・・・畜生・・・」

僕は地面を傷ついて右手で何度も殴った。

それでもしないと・・・自分を傷つけないと、許せないから。

どうして僕は・・・こんなに弱いんだ。

情けは弱さだ。

あの相手に情け何か要らない。

なのに僕は・・・本気を出せなくて・・・いや、出すのが怖かったんだ。

情けない・・・僕が、こんなに弱いなんて・・・自分のことなのに知らなかった。

「その怪我で何言つてやがる。お前が来ても何も守れないし、守られるだけになる。だからお前は下がってろ」

ふと、師匠の言葉が頭を過ぎった。

あの時、師匠ははっきりとは言わなかった。

僕は・・・足でまといになるだけだったことを。

僕は、守る為に強くなりたいのに・・・何で守ることができないんだよ・・・。

????「ヴァン君？」

ヴァン「コロナ！」

僕の後ろから、倒れていたはずのコロナが現れた。

ヴァン「コロナ！お前、体大丈夫なのか！？」

コロナ「うん。芳乃君の魔法で助けて貰ったの」

あいつ・・・そんな治癒魔法持つてるなら先に言えよ・・・ったく。

ヴァン「ごめん。コロナ・・・助けられなくて」

コロナ「ううん。ありがとう」

そう言って、コロナは僕を抱きしめた。

ヴァン「！こ、コロナ！？」

コロナ「良かった・・・生きててくれて・・・本当に、良かったよう・・・」

コロナの声と体が震えている。

泣いているのか・・・

僕が・・・コロナを泣かせてしまった。

ほんと・・・なんで僕はこんなに馬鹿なんだろう。

ヴァン「ごめん。心配かけて」

そう言って僕はコロナの頭を撫でてあげた。

コロナ「うん・・・うん」

僕はそのまま、コロナを抱きしめて・・・コロナが泣き止むのを待ち続けた。

相良 Side

相良「・・・は!？」

敵を見つけた瞬間の一言が「は!？」ですみません。

ですが・・・これは・・・

ルチア「ラオシャンロンの色が・・・」

そう。俺が驚いているのはラオシャンロンの色だ。

ラオシャンロンは今まで紅色の通常体に亜種で存在する蒼色のラオシャンロン。

この二つが発見されて討伐されていた。

だが、目の前にいるのは蒼でも紅でもない。

相良「真っ黒・・・」

そう。まるで闇に飲み込まれたように真っ黒である。

音使「あいつも、ダークファルスの欠片を体内に入れているな・・・

「
ナギサ「それが暴走して、生体までもを変化させてしまったようだ
な」

相良「マジかよ・・・」

こいつ、体力が非常に多いから面倒いんだよ・・・

ルチア「ていうか、あれどう倒すのよ・・・」

相良「簡単だ。あいつは「炎」と「龍」の力に弱い。シュテル！」

シュテル「はい！」

俺はロードの形を白銀のレイジングハートに変え、ラオシャンロン
に向けた。

そして先端に魔力を溜めた。

相良「様子見てワンショットでいいか？」

シュテル「最初から本気で行きたいところです」

相良「ま、それでもいいけどな」

そうやって俺は単発の弾丸ではなく、砲撃に切り替えた。

相良・シユテル「ブラストファイアー!!!」

焰を纏った砲撃が、ラオシャンロンの背中に直撃した。

ラオシャンロン「~~~~~!!!!!!」

大きな声をあげた。どうやら効果はあるようだ。

ルチア「なるほど!なら私も!!!」

そう言うとルチアは漆黒の刀に魔力を込め、放った。

ルチア「行くよ!!!ムーン・スラッシュ!!!」

そう言って刀を振るうとラオシャンロンの顔面が何故か爆発した。

アイン「今のは?」

ルチア「闇の斬撃。目には見えない斬撃を高速で放って、あたった場所は爆発するの」

相良「へえ。なら、俺もしっかりとやらねえとな!」

そう言って俺は空に上がり、雲の上から真っ直ぐ・・・ラオシャンロンの背中に向かって突っ込んだ。

相良「行くぜ!!!!」

ルシフェリオンの形をしたロードは魔力で先端を槍の様に変化させ、そのまま突っ込んでいった。

相良「スパイラル・スターダスト!!!」

その攻撃はラオシャンロンの背中を貫き、地面に着地した。

相良「!?!」

そのとき……こいつの腹の中に、蒼い石が見えたような……

アイン「!主!」

相良「!」

こいつ……そのまま咆哮をしゃがった。

相良「くっ!スターダスト・ディフェンサー!」

ロードの先端から魔力の障壁を張った。

相良「ぐううう!!!」

俺は防御するが、強力な咆哮に押されていった。

相良「おいおい……いつものラオシャンロンのパワーじゃねえぞ!」

今まで何体ものラオシャンロンと相手してきたけど、ここまでパワーがあるラオシャンロンは初めてだ！

音使「欠片のせいで、パワーが上がっている・・・」

俺は一度下がって奏多の元に向かった。

相良「さて・・・どうする・・・」

音使「体力にパワー。やっかい過ぎる・・・」

ラオシャンロン「！！！！！！」

全員「！？」

奴は口に漆黒の焰を集め始めた。

ルチア「ラオシャンロンに、そんな技なんて無いはず！！」

音使「欠片の影響で至る部分に変化が出来るのかもしれないな」

それが本当なら、さっさと決着をつけるべきだな。

相良「シュテル。アイン。やるぞ」

シュテル・アイン「はい！」

音使「さて、俺も攻めるか！」

ルチア「私も行きます！」

相良「よし。なら二人は攻めろ！俺が砲撃で隙を開ける！」

音使「分かった！」

ルチア「お願いね！」

相良「ああ！」

そう言つて二人はラオシャンロンに向かって切りかかった。

音使「ヴォイス・ブレイド」

音符のような形をした白い鎌が姿を表し、それを持って切りかかった。

ルチア「ムーンライト・スラッシャー！！！！」

音使・ルチア「はあああああ！……！」

二人は二手に別れ、両サイドから切り裂いた。

ラオシャンロン「~~~~~！……！」

奴は両足が斬れて前に跪いた。

音使「翔……！」

ルチア「今だよ！」

相良「ああ……！」

既に魔力のチャージは終わっている。

アイン「疾れ！」

シュテル「明星！」

相良「すべてを焼き消す炎と変われ！」

そう。なのはと同じスターライトブレイカーのオレ達の使うブレイカー。

相良・シュテル・アイン「スターファントム・ブレイカー！！！！！」

焰を纏ったスターダスト・ブレイカー。

それが、ラオシャンロンを包み込んだ。

そして、奴は消し飛び、蒼い石だけが残った。

音使「斬！」

その石を奏多が切り裂いて破壊した。

相良「……（　　）フウ……」

終わった。やっと終わった。

こいつ……地味に強いんだよ。

一撃で屠れたのは皆のおかげだな。

相良「ありがとな。みんな」

ルチア「翔・・今、治癒魔法をかけるね」

そう言つて彼女は俺の額に手を置いて治癒魔法を発動させた。

相良「ああ。ありがとう」

ルチア「うん」

相良「よし。ユニゾン解除」

そう言つと二人が俺の中から出てきた。

アイン「お疲れ様です。主」

相良「ああ」

シユテル「うまく決まりましたね。あの技」

相良「ちょっと疲れたけどな。つか2人とユニゾンしたのに全力での一撃じゃないと倒せないってどういうことだよ」

そう。基本的に俺は2人以上のユニゾンで負けたことがないのだが、今回は俺だけだったらちよっときつかっただろう。

相良「あれが・・・闇」

ここまで強くなるとしたら・・・知能の高い生物に侵食された時、想像するだけ怖い。

相良「・・・んま、そんなときにどうかするか・・・。それじゃ、戻るぞー！」

全員「はい（おう！）！」

そう言っただけ俺達はヴァン達のいる壊れた教会に戻っていった。

??? Side

「へえ。流石総裁ね。これだけじゃ殺せないかあ。でも・
・まだ始まったばかりだよ。お兄ちゃん」

そう言って、隠れていた一人の人影も姿を消した。

ラオシャンロンと闇（後書き）

闇により生まれた生物の強さは異常だった。

これが、これから戦う敵。

立ち向かう敵。

芽生える想い（前書き）

新たな戦いが始まろうとしている。

初めて芽生える想いに戸惑う少年と少女。

自分の弱さに後悔する少年と少女。

様々な想いが交錯するなかで、また新たに芽生える想い・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty 始まるよ

芽生える想い

相良「よし・・・それじゃ被害報告は後日また話すとして、今日はお疲れさま。各自帰宅後、休んでいつも通りで頼む」

全員「はい！」

戦いが終わり、被害者の人たちを地上本部や陸宙管理本部の医療施設にあげ終わり、俺達は解散した。

そして終わった俺は病室の個室であるヴァンの病室を訪れた。

ヴァン「師匠。お疲れ様です」

相良「ああ。怪我、もう大丈夫か？」

ヴァンはベットで寝ていたが、上半身を起こして俺と会話をした。

ヴァン「はい。魔力量には自身がありますから、すぐ回復しました」

基本的にオレ達、魔法使いの体は魔力の量によって身体の回復速度が変化する。

魔力量が多ければ多いほどその回復速度は速くなる。

ヴァンは治癒魔法を受けたのと異常な量の魔力を持つのですぐに回復する。

相良「と言っても、お前は今日、陸宙管理本部の医務室で寝ろ。明

日まで安静だ」

ヴァン「はい」

実は俺は、わざとヴァンを個室にあずけた。

理由をシャルマルに話すとシャルマルもくすくす笑いながら了承してくれたしな。

相良「つうことで、今日はお疲れ」

ヴァン「はい」

そう言っただけ俺は病室を後にした。

さて・・・後は二人きりにさせておきますか。

そう思いながら、俺はもう一つの部屋を訪れた。

そして俺は次に女性用の個室を訪れた。

ノックを2回してから入った。

相良「失礼するぞ。起きてるか？」

アインハルト「あ、翔さん……」

アインハルトも上半身を起こして俺に一礼した。

どうやら元気みたいだ。

相良「どうだ？体調のほうは？」

アインハルト「はい。とくに問題はありません。明日も学校には行けそうです」

相良「うん。そうか」

そう言っただけ俺はアインハルトの寝ているベッドの前に置かれている椅子に座った。

でも、まさかアインハルトまでもが誘拐されるとは思ってもみなかったな……

アインハルト「すみません。私のせいで、みなさんに迷惑をおかけしてしまって」

相良「何言ってるんだよ。誰も悪くない」

アインハルト「でも、私が捕まらなければこんなことには・・・」

こんなことと言つのはきつと、ヴァンや芳乃達が戦ったことだろう。

相良「違うよ。確かに捕まらないに越したことはない。けれど、俺達は人間だ。失敗や間違いなんかいくらでもする。それをいつまでも引きずるのは良いことじゃない」

俺も、何だかんだで色んなことを引きずって生きていたからな。

アインハルト「・・・ありがとうございます」

深々と頭を下げた。

相良「頭を下げるな。俺達は、ただ大切な人を・・・アインハルトやコロナを助けたくて来んだ。感謝されることをしたって、誰も思っていない。結局犯人逮捕とはいかなかったしな」

そう言つてはははと笑ってみせた。

するとアインハルトは言った。

アインハルト「あの・・・私にも、事件の調査に・・・協力させてもらえないでしょうか」

相良「!?!」

正直なところ驚いた。

まさか協力させてくださいとくるとはな・・・

でも・・・

相良「気持ちは嬉しいけど、敵はもっと強い奴らがくるかもしれない。今のアインハルトが入っても、正直・・・足でまといになるぞ」

そう。それが真実。

あいつが主犯格とは到底思えない。

それに、終焉のカウントダウンで集めた魔力でたかがラオシャンロ
ンを出した。

これはどう考えても様子見だ。

そう考えると、これからもっと強い敵が現れる可能性が高い。

今のアインハルトの実力じゃ、到底勝てない。

アインハルト「私はもっと強くなります！どんな辛い訓練でも耐え
てみせます！だから、私に協力させてください！」

すげー熱意だな・・・

相良「どうして何だ？どうして、そこまで協力したいんだ？」

ここまで本気で協力したい理由が俺には分からない。

アインハルト「それは・・・」

アインハルトは黙り出した。

・・・ま、何となくわかるけどな。

相良「怖いなら、そう言えよ」

アインハルト「！」

おっと、凶星か。

相良「ま、怖いのと、焦り・・・だと思っけど、そんなに焦る必要はないと思う。今焦ったら、この先やっていけないしな・・・」

アインハルトは既にヴァンや俺との戦いで負けている。

そしてライバルであるヴィヴィオ。

どンドン置いて行かれるのではないかという焦りだと思っ。

・・・六課にいたときのティアナにそっくりだな。

その結果・・・

「私はもう、誰も傷つけたくないから！！！！！！！！！！」

「失いたくないから！！！！！！！！！！」

「だから……。強くなりたいんです！！！！！」

あの時のティアナも、証明したい思いや後悔、そして焦りで周りを見失っていた。

あの時のティアナと同じ奴を、俺が見ている場所では2度と起こらせたくないんだ。

相良「だから、焦る必要はない。まだアインハルトには時間があるんだ」

アインハルト「私にはあっても、翔さんたちにはない！！私は、翔さんと一緒に戦いたい！もっと強くなりたい！！もっと・・もっと・・。そうすれば、翔さんの背中を守れるはずです！」

！……そこまで、どうして俺にこだわるんだよ……

……そう言えば、なのは達が六課にいたときなのはが言ったな。

「私たちは、翔くんの真っ直ぐな背中を守れるのを最終目標にしてるんだよ」

「……何で俺なんだ？」

「それはね……」

そのときの答えがアインハルトと同じだとは思えないけど、想いそのものは同じだ。

アインハルトも守りたい何かがあるんだ。

その道を、俺が手伝ってあげれるのなら・・・

相良「・・・分かった。良いだろう」

アインハルト「！ありがとうございます！！」

「たく、俺も甘いな・・・」

相良「だけど、二度と引き返せない。それだけは理解して欲しい」

アインハルト「はい！」

相良「よし。それじゃ明日から特訓を始めるか」

アインハルト「はい」

相良「あ、そうだ。ちょっと良いか」

翔さんは私の胸に手を当てた。

アインハルト「あ／／／／つ／／／／／／／／／／／」

相良「変な声出すな。集中できない」

そ、そんなこと言われて／／／

すると翔さんは当てている手に魔力を込め始め、私の中に魔力を流し込んだ。

アインハルト「あ／／／／ん／／／／／」

魔力を注ぎ込まれる感覚が／／／／気持ちいい／／／／

それから10分ほど・・・

相良「だ、大丈夫か？」

アインハルト「は／／／／はふう／／／／／」

私は顔を真っ赤にしてのぼせたような状態になっていました。

相良「えっと、取り敢えずお前のリンカーコアの修復は終わったから、魔法が使えると思う。さっきまで魔力反応が薄かったからな」

アインハルト「は／／／ひゃい／／／」

相良「呂律回ってねえな・・・」

アインハルト「ふにゆ／／／／」

相良「ダメだこりゃ」

そう言っつて翔さんは私の額に手を当てた。

相良「うわ・・・スゲー熱。明日訓練大丈夫かな・・・」

アインハルト「らいりょうぶれふ／／／」 翻訳「大丈夫です」

相良「・・・えと、どこが大丈夫なんだ？」

そう。何が大丈夫なのかさっぱりわからない。

それは私も分かっていますけど、頭がうまく回転しなくて・・・

相良「……！？45°！？温度計が臨界点突破したあ！？」

こりゃ今日一日看病して上げたほうがいいな……

アインハルト「すう……すう……」

ぐっすり寝てるな……

相良「今日は、怖かったのかな……」

突然誘拐されて魔力抜かれたりしたから疲れたんだろう……

相良「今日は、ゆっくり休んでくれ」

そう言っただけ俺は一度食べ物を取りに行くために部屋を出ようとした。

アインハルト「ま……って、くだ……さい」

相良「！？」

アインハルトは目を瞑りながら俺の右腕を掴んで話そうとしない。

相良「起きて……は、いないみたいだな……」

無意識か……夢か……

アインハルト「側に……いて、くだ……さい」

相良「……どうして俺なんだ？」

寝ている人に質問するのも変なものだが、俺なんかを必要とする意味がわからん。

アインハルト「好き……だから……」

相良「!？」

俺が……好き!？」

ロード「マスターはよくフラグが立ちますね」

相良「フラグ? 『俺、この戦いが終わったらあいつと結婚するんだ』
……なんて言っただけ?」

ロード「それは死亡フラグですマスター」

相良「じゃなんのフラグなんだ?」

ロード「恋愛フラグですよ。今までマスターが何百、何千、何万と立ててきたものですよ」

相良「いやいや、そんなに立ててないだろう!？」

ロード「いえいえ、街中を歩くだけでフラグが立つマスターなんですから万超えてても不思議ではないです」

相良「・・・お前、マスターへ対する扱い酷くないか？」

ロード「あなたが悪いんですよ」

相良「（。。。）。グハツ!!」

ま、まあそんな事を無視して・・・

相良「まさか、アインハルトまで俺の事が好きなんて・・・」

ロード「何を今更。私は最初から気づいていましたよ」

相良「・・・知らぬは当人のみか・・・」

俺の鈍感、いつになったら治るのかな・・・（；；；）

アインハルト「どこにも・・・いかない・・・で」

あれ？丁寧語じゃなくなった・・・

つか、こんなに甘えるような子だったっけ？

相良「・・・大丈夫。俺は、君の前からいなくならない。俺はずっ

と、側にいるよ」

結婚とかは別だけどな。

ロード「全く、ここまでカッコ付けるからマスターはカッコいいんですよ」

相良「・・・別に、かつこいいなんてないさ・・・。そうだロード。検索魔法＋転送魔法の魔法使いたいからさ、プログラムの構成をお願いできるか？」

ロード「了解しました。少々時間が掛かりますのでアインハルト殿の様子を見て待機しててください」

相良「分かった」

俺は今まで、色んな人の魔法まじを見てきた。

その魔法のプログラムや構成、型などを記憶してそれをデータ化、自分流のオリジナルの魔法を作ることができる。

実は俺が治癒魔法や転送魔法など、様々な魔法が使えたり技が増えたり、ロードのモードが増えるのはこのためである。

常に進化していこうと努力する俺にとって、情報とは一つの武器だ。

その情報から新たな魔法を作り、これからの戦いを有利にする。

今行なっているのはそのデータとデータを足して新たな魔法を作り

出しているのだ。

・・・これは秘密のことだが、俺はミッド式の魔法とベルカ式の魔法二つを融合した魔法も使うことができる。

二つの融合魔法の事を俺は「オーバー スター ロード 新たな星の誕生」と名付けた。

ま、それはいつか見せてやる。

ロード「マスター。魔法が完成しました。ネームと発動をお願いします」

相良「ああ」

そして発動するのはミッド式とベルカ式を混ぜた魔法。

名前な・・・どうしよう・・・

相良「オーバー スター ロード 新たな星の誕生。『スター ワープ 星移動』」

シンプルな名前だけど、深い意味にするよりはましだと思った。

これは捜査魔法で求める物体の位置を特定。転送魔法でその位置にある物体を俺のもとに転送することができる。

うまく応用すれば戦闘で役立つものだ。

そして発動させると、俺の両手に林檎が二つの落ちてきた。

相良「う……結構魔力使ったな……」

初めて使う魔法だけに、少し慣れないな……

ロード「もう少し調整したほうがよろしいかと」

相良「たしかにな。それじゃ頼むわ」

ロード「了解しました」

そして俺は腕を掴まれていて移動ができないので、俺は取り敢えず林檎をペティナイフで切り始めた。

今日一日、こいつの側にいないといけないみたいだな……

アインハルト「すう……すう……」

相良「ったく、いい顔で寝やがって……」

凄く幸せそうな表情で寝ている所は、まだ子供なんだなって思う。

大人みたいに振舞ってるけど、結局はまだまだ子供だ。

たまには正直になることだって、必要だよな……

早く事件を解決させて……今度はアインハルト達も連れて楽しいことができたらいいな……

その為には、俺が・・・頑張らないといけないんだ。

こんな俺だけど、必死になって彼女達を守りたいから・・・

芽生える想い（後書き）

更に固める決意に、少女が伝えた想い。

再び困惑する中で決めた決意を、彼は実現させるため努力する。

彼女は彼を 彼は彼女を（前書き）

戦いが終わり、お互いに休むべき場に戻る。

そして彼、彼女らの知らないところで知らない思いが交錯していた。

そのことが、更に物語を進めていくこととなる。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

彼女は彼を 彼は彼女を

ヴァン Side

ヴァン「ニーナ。大丈夫か？」

ニルヴァーナ「あんたよりはマシよ。全く、本気を出さないで戦って負けて、それで守れなかったなんて・・・あんたホントカツコ悪いわ！」

ヴァン「(; ; ;) ウツ・・・」

僕は病室で仰向けになり、天井を見ながらブレスレットの状態のニルヴァーナに話しかけた。

すると女性の声とグサグサ刺さる「ニーナ（ニルヴァーナの愛称）」の発言。

ニルヴァーナ「あんた、本当に何を守りたいのかを忘れないで。あなたの助けを待ってる女コロナがいるんだから」

ヴァン「ああ。だから、次は「解放」もするつもりだ」

僕の力は風を使った戦闘だ。

そして拳と・・・もう一つ。

その戦いを、次は使う。

ニルヴァーナ「それはいいとして、お客が来てるわよ」

ヴァン「え？」

そう言つと病室のドアが開いた。

リオナ「来たよ。ヴァン」

ヴァン「リ、リオナ!？」

以外にもリオナが来た。

リオナ「コロナンから聞いたよ。何があったのか」

コロナンからか・・・相変わらず人の名前の最後に「ン」を付けるの好きだな・・・

リオナ「ヴァンは、私が殺すんだから、絶対に死んじゃダメだよ」

ヴァン「・・・」

実はリオナと僕は古き頃からのライバルだ。

僕は風。リオナは雷を使う。

二人は風神と雷神の力を持つものとして、古き頃から決着を付ける戦いを何度もしてきた。

何千年経っても決着がつかず、今の僕たちの代になったというわけだ。

ヴァン「ま、リオナに殺されるのも悪くないかもな」

リオナ「っ／／／／ね、変なこと言わないでよ！／／／（っ全く／／／ドキッとしたじゃない／／／）」

ヴァン「？」

何で顔が赤いんだろう？暑いのかな？

リオナ「そ、それよりも！ちゃんと本気で戦いなさいよ！私のデバイスだって、ヴァンとの戦いはいつも楽しみなんだから」

そう言うところリオナは左腕に付けてある真っ赤な腕輪を見せた。

彼女のデバイスは不屈の刀レイジング・ソードといい、僕と同時に作られた双子の様なものだ。

愛称は「レイド」

レイジング・ソード「お怪我が軽くてとても安心いたしました。お嬢様も心配でしよすがなかったようでしたから」

リオナ「こら！レイド！そんなこと言わないでよ！！／＼／＼／＼」

ヴァン「ははは・・・」

リオナ「んもあゝ！」

焦ってる焦ってるうゝ！

リオナ「それじゃ、私はもう帰るね」

ヴァン「ああ。ありがとう。リオナ。レイド」

レイジング・ソード「いえ。お大事に」

リオナ「さっさと元気になって、リベンジでもしなさいよ！」

そう言って彼女達は部屋を後にした。

ヴァン「ははは・・・リオナらしいな」

ニルヴァーナ「あんたの事を心配してるからよ。だからさっさと元気になってあたしと戦いなさい

！！！」

ヴァン「ああ。分かってる」

そう言って僕は電気を消して眠りについた。

リオナ Side

リオナ「・・・ふう。緊張したあゝ」

レイド「お疲れ様です。お嬢様」

私はロビーの椅子に座って大きく息を吐いた。

レイド「お嬢様はヴァン様との会話ではいつも緊張なさいますね」

リオナ「うるさいわよ。私だって分かってるもん」

そう。私は昔からヴァンと会話をすると、何故か緊張してしまう。

だから会話が終わると溜息をついたりする。

だって、ヴァンってかっこいいから・・・

それに、私の・・・初恋の人だから・・・

私とヴァンとの出会いはこの遺伝子で導かれた運命って言うのもあるけど、私とヴァンは一緒に見つかった。

そもそも私とヴァンは次元漂流者だった。

それを現在の陸宙管理本部総裁の相良翔さんに拾ってもらった。

そして一緒の部屋で何年か過ごした私とヴァンは兄妹とあまり変わらない関係になっていた。

でも、ヴァンは凄く優しく、いつも私の手助けをしてくれた。

そんな彼に惚れて・・・でも、コロナンがヴァンと付き合ったって聞いたから正直悔しい。

だから、今でもこの想いには正直にいたい。

リオナ「コロナンには、負けたくないな」

レイド「頑張ってください。私は影ながらサポートいたしますから」

リオナ「うん。ありがとう」

この機もいるから・・・大丈夫。

・・・だと思つ。

芳乃 Side

芳乃「ふう・・・疲れたな」

サクラ「マスター！お帰りなんだよ！」

家に着くとサクラが俺のもとにきた。

芳乃「ああ。ただいま」

俺は家に入り、早速台所に向かった。

芳乃「カレー。まだ残ってるか？」

サクラ「うん。マスターの分は残ってるんだよ！」

芳乃「そうか」

俺は台所にある鍋からカレーをだし、更に盛り付けてテーブルに置き、食べた。

芳乃「頂きます」

辛口のカレー。俺の好物だ。

サクラ「・・・」

芳乃「？サクラは食べねえのか？」

サクラ「さっき食べたんだよ」

芳乃「そうかよ・・・」

こいつは基本的にはぐーたらしている駄目兵器だ。

すぐに戦うと半端なく強いくせにすぐにガス欠になるし普段は体力回復・・・もとい、日向ぼっこをしているだけだ。

ダメ兵器の烙印を俺が押すのも仕方がないことだ。

ま、そんなこいつも、いざというときは役にたつただけだな。

芳乃「ごちそうさん」

そう言っつて俺は皿を片付けた。

サクラ「マスター」

芳乃「どうした？サクラ？」

サクラ「・・・ううん。何でも無いんだよ。おやすみなさい！」

そう言っつてサクラは逃げるように走り去った。

芳乃「何だあいつ？・・・ま、変なのは今に始まったことじゃねえしな」

そう言っつて俺は片付けを進めた。

サクラ Side

サクラ「・・・はあ」

私は部屋に戻ってベッドに寝っ転がって枕に顔を埋めている。

サクラ「マスター・・・」

私は、マスターが帰ってきたことに安心した。

私死ぬとき、マスターも死ぬ。

逆に、マスターが死ぬとき、私も死ぬ。

私とマスターは二心同体の関係なんだよ。

だけど・・・私は、マスターの事が・・・

そう・・・好きなんだよ。

サクラ「マスター・・・マスター・・・」

知らないうちに求めていたマスターの存在。

ただの兵器ではなく、一人の女性としての想い。

ただ・・・主が好きという想い。

サクラ「マスター・・・私は・・・」

口に使用とすると、固まって・・・動くことができなくて、あと一

歩が動かない。

そんな駄目な自分がいやでたまらない。

・・けれど、いつかは伝えることができると信じて・・・

サクラ「マスター。私、一緒にいるから・・・」

届かない気持ちを言ったサクラは、瞳を閉じて眠りについた。

音使 Side

音使「ナギサ。お疲れ」

部屋に戻った俺とナギサは話しをした。

ナギサ「ああ。今日は久しぶりに骨のある奴と戦えた」

本当にこいつは・・・戦うのが好きだな・・・

音使「まだ、エミリア達は帰ってきてないみたいだな」

ナギサ「ああ。（二人きりと言うのだったな。この状況を・・・）」

音使「・・・」

ナギサ「・・・」

無言だった。

何を話せばいいかが分からない。

基本的にはエミリアが何か話題を持ち出してくれるから助かるけど、
今はないからな・・・

・・・あ、そうだ。

音使「ヴォイス・ブレイド。モード「弦楽器・ファースト」」

そう言うと音符の形をした鎌が表れ、それが姿を変え、ヴァイオリンの玄と弓になった。

ナギサ「？何をするつもりだ？」

音使「暇だし、静かだから・・・ちよつと一曲」

そう言うと俺は静かに構え、ヴァイオリンを引き始めた。

最初は弱く入り、段々と強くさせていく。

音の強弱をうまく付け、落ち着く音を流した。

ナギサ「・・・」

ナギサも目を閉じて、気持ちよさそうに聴いていた。

それからしばらくの間、ヴァイオリンの心地よい音が、室内に響きわたっていた。

ナギサ Side

ナギサ「・・・」

いい音だ。

音使は前から私たちにヴァイオリンと言う楽器を使って音を聴かせてくれる。

いつも、こんな心地よい音を聞かせてくれるの音使は、本当にいい人だと思う。

私をいつも守ってくれて、助けてくれた。

私の中にいたダークファルスとの決戦も、音使は私と一緒に戦ってくれた。

それまで、一人で戦ってきた私にとって、音使を始めとしてエミリア達の出会いは、本当に奇跡だと思っている。

一期一会と言う言葉があるのだから、この出会いは・・・最後まで大切にしたい。

だが、最近になって音使の事をよく考えるようになった。

食事の時、戦闘の時、休んでいるとき、鍛錬をしているとき、会話をしているとき、寝ているときなど、様々なときに音使の事を考えるようになった。

そのたびに胸が熱くなって、心臓が激しく動く。

この感覚は……何だろうか？

……だが、悪い感覚はないな。

そして音使の演奏が終わる。

音使「ふう……」

ナギサ「いい音だった。流石だな」

音使「ありがとう。ナギサ」

気づくと私と音使は笑いあっていた。

音使に出会うまでは、こんなに笑うことなど・・・無かったからな。

ナギサ「やっぱり、私は音使のヴァイオリンは好きだな」

音使「ああ。ありがとう」

そう言って、私と音使は眠りについた。

ナギサ「（何故だ？好きと言ってから、心臓の鼓動が速くて止まらない・・・眠れるのだろうか？謎だ・・・）」

結局この日の私はこの不思議な感覚のせいで眠るのが遅くなるのだった。

彼女は彼を 彼は彼女を（後書き）

それぞれが抱える想い。

それは、いつか伝わるのだろうか？

伝えることが出来るのだろうか？

その想いが・・・いつか奇跡を生むことになる。

焦る気持ちと日常と（前書き）

一日が終わり、普通の日常に戻る。

だが、一度生まれた闇は、簡単には消えない。

いつか大きくなって、また蘇る。

例えば・・・そう、人の心の編みを吸収して・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World In infinity
ty } 始まります。

焦る気持ちと日常と

ヴァン Side

ヴァン「・・・」

朝になり、僕は病室を後にして、家に戻った。

家に戻ると、ちょっと変わった感覚が僕を襲った。

ヴァン「何だろう・・・この感覚・・・」

不思議だ・・・何か、暗い。

ヴァン「電気を消してる訳じゃ・・・無いんだよな」

ニーナ「あなた・・・あの時何かされた？」

あの時・・・！

ヴァン「昨日の戦い!？」

ニーナ「あたしからは何とも言えないわ。でも、あなたの事なんだから分かるんじゃないの？」

ヴァン「なるほど・・・」

相変わらずこの砕けた口調は便利だな。会話がしやすい・・・ま、性格があまりよろしくないがな。

二ナ「あんたが頼りないからよ。風神だか福神漬だか知らないけど、神の名を持つなら少しはマシな男になりなさいよ！」

ヴァン「何故福神漬なのかは聞かないでおくとして、別に神の名も力も欲しくてあるわけじゃないんだ。マシな男と言われてもどうすればいいかなんてわからないしな」

そう言いながら僕は制服に着替えて家から出ようとした。

待つてよ・・・

ヴァン「！」

背後から、静かに聞こえた声。

僕は勢い良く振り返った。

ヴァン「誰もいない・・・」

気のせいだと思い、ドアノブに手をかけた。

お兄ちゃん・・・

ヴァン「!?!」

また、同じ声が背後から聞こえて、後ろを振り返った。

けどそこには、誰もいない。

ニナ「?どうしたの?何度も振り返って・・・この家にはあたしとあんただけよ?」

ヴァン「ああ。分かってる」

今の声は・・・一体?

僕は部屋に戻り、周りを見渡した。

だが、そこには何もなく、今までと変わらない部屋だった。

風の流れもいつも通り・・・気配もない。

ヴァン「何だったんだ・・・念話・・・ではないんだよな・・・」

耳に聞こえたから・・・

ニーナ「そのことは後にして、さっさと行かないとあなたの女が寂しがるわよ?」

ヴァン「へ?・・・あ!」

時計を見るといつもの時間よりも10分近く遅れていた。

ヴァン「やべ!ソニック・ダッシュユ!」

僕は両足に魔力を込めて爆発する力で物凄い速度で家を出て、待ち合わせ場所に移動した。

アインハルト Side

アインハルト「・・・ん」

私は目を覚ました。

目を覚ますと広がったのは病室と思わしき真っ白な天井。

そして……

相良「すう……すう……」

アインハルト「え!？」

翔さんが私の左手を握って座りながら寝ていた。

何で？

ロード「昨晚、マスターはアインハルト殿の看病をしておりました。今寝ているのはその疲れでしょう」

アインハルト「は、はあ……」

翔さんのデバイスから話を伺うと、私が熱を出してしまい、翔さんは私の看病をしてくれたそうです。

……ほかの人にやらせれば良い筈なのに、どうして……

相良「すう……すう……ふにゃ……」

普段のしつかりとした表情とは違い、だらしない表情をしているのが少し面白かった。

ロード「今のうちにマスターにキスをするのも良いかと」

アインハルト「つゝ／＼／＼／」

そ、そそそ、そんなこと／＼／／

ロード「冗談です」

アインハルト「ふう・・・」

それはそれで安心したような残念だったような・・・って、どうして残念に思うのですか私!?

ロード「混乱している所申し訳ございませんが、現在の時刻は8時丁度です。今すぐに支度しなければ学校に遅刻すると思われます」

アインハルト「!?!」

本当だ・・・もう8時すぎてる!

私は急いでベットから出て制服に着替え始めた。

相良「・・・ん。あ、アインハルト・・・」

アインハルト「あ、翔さん。すみません。起こしてしまつて」

相良「あ、いや。別に構わないよ。今から学校か・・・」

そう言つて翔さんはロードさんを右手に持つて支持した。

相良「ロード。今すぐシャツハに連絡して、アインハルトは俺の事

情で学校には少し遅れるって連絡してもらえるか？」

ロード「了解です」

そう言っつてロードさんはシャツハさんに連絡を入れ始めた。

アインハルト「すみません。迷惑をかけてしまって・・・」

相良「迷惑？違うよ。俺のお節介だ」

アインハルト「いえ！お節介なんてとんでもない・・・」

凄く助かります。けれど、私何かの為にそこまでしていただかなくても・・・

相良「いいさ。妹や弟子がお世話になってるし、君も俺の弟子のひとりだからな」

相良さんはウィンクしながらそう言った。

アインハルト「・・・はい。そう言っつて頂くと嬉しいです」

これは素直な気持ちでした。

本当に感謝しているからこそ言える。

相良「ま、総裁の権力を使えば学校にいかなくても無欠席にできるがな」

わざとらしくそう言って見せた翔さん。

アインハルト「くすっ……嘘でもそんなこと言っては駄目ですよ」

相良「はは。そうだな。それじゃ朝飯の準備してくるからさっさと着替えて食堂に來い」

アインハルト「あの……もう8時すぎてるんですが……」

相良「何度も言うが総裁の権力を使えば「冗談は止めてください」すまん。本当はカリムとシャツハに事情は話したからいつ行っても今日は遅刻扱いされないんだ」

アインハルト「……良いんでしょうか……」

そんな、ズルをしてしまって……

そう考えていると、翔さんはとんでもないことを言ってきた。

相良「たまにはルールから外れた事をするのも悪くないと俺は思うよ」

アインハルト「!?そ、それは……総裁が言ってもいいのでしょうか!？」

あまりの衝撃発言に驚いてしまった。

相良「あ、いや、犯罪をしろって訳じゃなくてな？たまには解放されろってこと。いつもより多めに寝てみたり、ダイエット中で食べなかった甘い物を食べるとか、どこかに遊びに行ったりとか、自分の中にあるルールをたまには破って好きな事をする。それって、一見簡単そうに見えて、実はとても難しいことなんだ。そして、とても大切なことだと俺は思う」

アインハルト「自分のルールを・・・破る・・・ですか？」

確かに、一見簡単そうに見えて凄く難しそうなことだと思う。

普段からしていること・・・ランニングなどの練習をしないで、遊んだりして過ごす・・・

そんなこと、した記憶がないから・・・

相良「ま、今日がその日だと思ってさ？いつもより遅めに学校に行くってのも良いんじゃないかなって俺は思うな」

アインハルト「・・・」

総裁程のえらい人からそんなことを聞くとは思ってもみなかった。

私の中にあるイメージの総裁とは、ルールに厳しくて、厳しいと言うものだった。

でも、目の前にいるこの人はルールにとらわれず、柔軟な思考で平等な人だと思った。

アインハルト「……そうですね。たまには……いいですよね？」

相良「ああ。俺が許すから！」

そう言っつて翔さんは部屋を後にした。

その後、私と翔さんは一緒に食事をして私が学校に向かった。

学校にたどり着いたのは、ちょうど2時限目が始まる時でした。

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「はあ、はあ、はあ……」

ノーヴェ「ちょっと休もうぜ？もう何分も休んでねえ」

私は学校を終えて帰ると、ノーヴェを呼んで特訓している。

ノーヴェ「ヴィヴィオ。今日は何か変だぜ？何焦ってんだ？」

ヴィヴィオ「別に・・・焦って何か無いもん」

ノーヴェ「嘘言つな。誰の目から見ても焦ってるようにしか見えねえよ」

ヴィヴィオ「・・・焦ってる訳じゃないもん。ただ・・・今のままじや駄目なの・・・」

そう。これが、今の私の本音。

昨日、コロナやインハルトさんが誘拐された時、私だけ家にいた。

助けるとか、守るとか、そんなこと・・・できなかつた。

私だけ置いていかれて、皆はどんどん先に進んでいる。

それがさみしいから・・・それを補いたくて・・・

ノーヴェ「・・・何考えてるかなんて聞かねえで置くけど、焦ると周りを見失うぞ？」

ヴィヴィオ「ノーヴェ・・・」

何故か、その言葉が私の心に響いた。

きっとそれは、大切な事だと思うから・・・

ヴィヴィオ「うん。ありがとう、ノーヴェ。でも、私は大丈夫。だから、練習続けよう！」

ノーヴェ「・・・ああ」

そう言って私とノーヴェは日が暮れるまで特訓を続けた。

相良 Side

場所は変わって陸軍管理本部の会議室。

フェイト「ただいま帰還しました」

相良「ああ。お疲れ様。そんでお帰り」

フェイト「うん。ただいま」

今日はフェイト達の隊が戻ってきた。

相良「それで、別世界ではどうだ？」

フェイト「ううん。特に問題は発生しなかったよ。モンスターの被害は未だに減らないけど、モンスター以外の被害は報告されなかった」

相良「そうか・・・」

収穫は無し・・・

相良「分かった。その他の情報とかある奴はいるか？」

会議はそのまま滞りなく進んで終わった。

皆が会議室を後にし、俺だけが会議室に残った。

相良「結局、何も手掛かり無しか・・・」

ロード「そうですね。無限書庫からの情報もありませんし、手詰まりですね」

相良「できるだけ、迅速に解決させたいんだけどな・・・」

これ以上被害者を出したくないからな・・・

ロード「焦りは禁物ですが、のんびりするわけにもいきませんね」

相良「ああ。・・・分かってる」

だけど・・・やっぱり急がないとな。

ロード「大丈夫ですよ。あの頃とは違って、マスターの周りにはとても心強い仲間がいます」

相良「・・・そうだな」

あの頃・・・俺がなのは達と再会した時だな。

あの頃の俺は何でもかんでも一人でどうにかしようとしてたからな。

そのせいで空回りしたりとか色々あったんだよな・・・

相良「そんじゃ、成長した俺に出来ることをしましょうか!」

ロード「了解です!相棒!^{マスター}」

そうやって俺はロードを首にぶら下げて会議室を後にした。

焦る気持ちと日常と（後書き）

一日で、自分たちの中にある気持ちが焦り始めた。

その気持ちが、影で闇を成長させていることに、その時の俺達は気づいていなかった。

初任務と問われる力 前編（前書き）

最初の闇の事件から早くも一週間が経った。

様々な思いが生まれ、交錯することとなったこの事件。

まだまだ未熟な彼らにとうとう彼は彼らを・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty } 始まります。

初任務と問われる力 前編

相良「さて……それじゃ全員集合！」

全員「はい！」

訓練が終わったヴァン、芳乃、紗雪、なぎさ、アインハルト、リオナ等はその場にペタンと座り込み、息を荒くしながら大きく息をすったり吐いたりを繰り返していた。

サクラ「マスター！お疲れ様なんだよ」

そして芳乃の相棒のサクラは訓練に参加せず、陸宙管理本部の太陽が差し込む窓側からこちらに近づいてきた。

芳乃「まったく、何でお前は訓練に参加しねえんだよ」

サクラ「私は訓練をする必要がないからなんだよ！」

芳乃「胸張って言うな！」

芳乃がマジでキレてる……

紗雪「ま、まあ兄さん。サクラは元々鍛えても意味が無いんだし……」

紗雪が抑えに入った。

こういう時に妹って役に立つよな。

相良「ま、取り敢えず皆話を聞いてくれ。今日で皆はだいぶ訓練にも慣れてきたと思う。だからそろそろみんなにも任務を受けてもらおうかなって思う」

全員「・・・」

皆の目が真剣その物になったな。

相良「任務内容はそんな高くない。後規則で先輩を2人、チームに入れるようになってるから、俺ともう一人呼んでるからそいつと一緒に行くぞ」

ヴァン「え！？師匠も同行するんですか！？」

相良「ああ」

アインハルト「お仕事はどうするんですか？」

ああ、聞いてくると思った。

相良「この皆の様な囑託魔導士達の育成の責任などは俺が全て受け持つてる。だから皆の成長を見届けるって役目も俺はあるんだ。だから、皆に同行するのも仕事ってこと」

簡単にいえばこれは一つのテストだ。

皆がちゃんと成長しているかを実戦で見定めるのと、もう一つ。

訓練ではなく、命懸けの実戦をすることで大きな経験値になる。

まだ年齢的にも危険なのではと言つ意見もあるが、俺は別に構わないと思うから。

相良「休憩と準備が出来次第出撃するんで、さつさと準備を終わらせるように」

全員「はい!!」

相良「それじゃ解散！」

相良「さて、と。さつさとあいつを探さなくては・・・」

俺が探しに向かったのは、今から向かう任務に俺と一緒に同行する奴なんだが・・・あいつを見つけるのってすごいめんどいんだよね・・・。

相良「・・・あ、いた」

以外にさつさと見つかった。

場所は食堂。

まあ昼時だから別に構わないか。

俺は取り敢えずカレーを頼んでお盆に乗せてそいつの座っている席に向かった。

相良「お〜い、谷島あ〜」

谷島「んあ？お、翔う〜！」

軽い返事と共に俺とハイタッチをする奴は「谷島^{やじま}芳樹^{よしき}」だ。

こいつは俺と同じ地球出身で俺と同じ学校にいた。

学生の頃、俺の唯一の友だったやつだ。

そしてもう一人、谷島の隣にいるピンク色のツインテールでどうみても子供の容姿をしている女性がいた。

相良「アリアも元気そうだな。今日は頼りにしてるぜ？」

アリア「当然よ。芳樹が頼りないせいで、私まで頼りにならない人にされちゃ溜まったもんじゃないわ」

相良「ははは・・・」

名前は「神崎・H・アリア」実は彼女も地球出身の魔導士で谷島と

何年も組んでいるらしい。

声がどこかしらアリサに似てるのだが、これは気にしたら負けというやつだ。

その他の事情はまあ後に語らせていただく。

谷島「俺、そんな役にたたねえか？」

アリア・相良・ロード「今更・・・」

いや、決して役に立たない訳ではないのだが、こいつは陸宙管理本部で「動く死亡フラグ」と言う異名を持つほど死にかけることが多いのだ。

そのたびにアリアや俺達でどうにかして回避してきたのだが、それが何度も何度も続いたためこんな異名がついてしまった。

アリア「まあ“いざって時”は役には立つけどね」

相良「まあな・・・」

そう。いざって時は凄く役に立つし、自分の死亡フラグをへし折るだけだな。

相良「今日の話は聞いてるな？」

谷島「ああ。後輩達の付き添い任務だろ？俺もアリアも最近はずっと戦ってなかったからな。たまにはいい運動になるぜ！」

アリア「新人達がしつかりとやってくれるといいけど」

その不安は仕方ない・・・か。

相良「ま、あいつらならなんとかするさ」

俺は、そう信じてる。

相良「それじゃそろそろ行くこうぜ」

谷島「ああ」

アリア「ええ」

そう言っただけ俺達は食堂を後にした。

相良「よし。揃ったな」

転送魔方陣の上に乗った。

谷島「俺は谷島芳樹。こいつは俺の相棒のアリアだ」

アリア「アリアよ。宜しく」

相良「挨拶の続きは後だ。これからの任務説明を移動しながら教える」

そう言っただけ俺達は魔法陣の上に乗れ、光が俺達を包み込んだ。

そしてしばらくして、俺達とはある所に到着した。

ヴァン「おお！」

リオナ「すごいねぇ〜！」

アインハルト「これが・・・違う世界」

俺たちがたどり着いたのは巨大な都市の中。

中心部には巨大な建造物があり、その先端を中心に光の輪っかが、

この都市そのものを囲んでいた。

サクラ「ここ、すごい魔力が空気中に漂ってるんだよ!」

相良「お、よく気づいたな。この都市は・・・いや、この世界はちよつと特殊なんだ」

そう言つて俺はこの世界の説明を使用すると・・・

???「お兄たん!」

相良「うを!?!」

背後から一人の少女が抱きついてきた。

アリア達ではない。アリアたちは前にいる。

・・・という事は、この世界にいる女の子。

そして聞き覚えのある声だから・・・

相良「ライナ・・・だな?」

そう言つて後ろを向くと、白髪ショートヘアで、アホ毛があるショートパンツとニーソックスを履いている女の子が元気な顔で俺を見た。

ライナ「久しぶりい！お兄たん！」

全員「お兄たん！？」

全員はジト目で俺を見てきた。

相良「え？何皆！？」

谷島「お前、妹好きにも程があるだろう・・・」

相良「ぐっっ！」

アリア「キモイわ」

相良「うっっ！」

ヴァン「ちょっと趣味の問題が・・・」

相良「ぬお！？」

リオナ「見損なっちゃった」

相良「ああ！？」

芳乃「流石にその呼ばせ方はなあ・・・」

相良「ぐっっ！？」

サクラ「キモイんだよ」

相良「ぐへえ!?!」

紗雪「私でもそんな呼び方はしないよ……」

相良「ぐはっ!?!」

なぎさ「翔さんがそんな人だなんて……残念です」

相良「ごほっ!?!」

相良「あれ?おかしいな……目から汗が大量にでて止まらないや」

何だろう……こんなに目から液体あせがでて止まらないや。

俺……母さんと父さんの息子として生まれて後悔してないよ。

さて……そろそろ逝くか……

ロード「マスター!!!!まだ逝つてはいけませんよおおおお!!
!?!?!?!」

相良「……っは!?!?お、俺は今……何をしようとして!?!」

ロード「よ、良かった。マスターが危うくこの小説を最終話にする
ところでした」

相良「・・・何か、三途の川が見えて・・・それで・・・」

全員「それは既に死んでいる!!!」

皆のツッコミに対応しきれなかった俺はただ驚くばかりだった。

ライナ「？」

彼女は首を傾げるだけだしな・・・

相良「あれ？ウィンはどうした？確かライナとウィンの二人が待ってるって聞いてるけど？」

ライナ「ウィンちゃんなら・・・ほら、あそこ」

そう言っつてライナは近くにあつた長方形の家の屋上を指さした。

そこには緑色の髪と瞳に、おとなしそうな容姿に髪はポニーテールにして纏めている女の子。

そう。彼女がウィンだ。

相良「お〜い！ウィン！」

ウィン「！」

ウインは俺の声に気づいたらしく、笑顔を俺に返して屋上から飛び降りて来た。

ヴァン「・・・」

ヴァンはウインの事を真剣に見つめていた。

ウインハふわつと地面に着地すると無言でとととと走って俺の腹当たりに顔を埋めるように抱きついてきた。

毎度毎度思うのだが、女の子って抱きつくの好きなのか？

まあそんなことは後にして。

相良「ウインも元気そうだな」

ウイン「・・・うん」

静かな声でそう言った。

ヴァン「・・・」

相良「？さっきからどうしたヴァン。ウインが気になるのか？」

ヴァン「うえ！？ち、違いますよ！ー！そうじゃなくてですね・・・」

ウィン「……」

ウィン何を感じたかは知らないが俺の背中に隠れるように移動した。

相良「ウィンまでどうした？」

ウィン「あの人……怖い」

相良「怖い？ヴァンが？」

ウィン「……」

ウィンは静かに頷いた。

それは……もしかして能力が似てるからかな？

相良「まあいいや。取り敢えず揃ったことだし、さっさと都市本部に行くぞ」

そう言っつて俺達は歩きだした。

そろそろ紹介するが、俺が総裁をしている陸宙管理本部だが、これ

は各世界に一つ設けている。

この魔法都市エンディミオンにもそれはある。

場所は中心にある巨大な塔の様なものの地下にある。

名前は「陸宙管理都市本部」。

この世界の者が入隊してる。

ここの部隊の総裁はこの都市の王でもある人なのだが、俺達はこれからその人に会いに行く。

ドガアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

全員「!?!」

突如、上空から巨大な大爆発が発生した。

相良「!ロード!」

俺は首にぶら下がっているロードを右手に掴んでBJを着て、空を飛んだ。

相良「ライナ!ウィン!お前たちは住民の避難を!ヴァン、リオナ、

紗雪、なぎさは俺に着いてこい！」

ライナ・ウィン・ヴァン・リオナ・紗雪・なぎさ「はい！」

谷島「翔！」

相良「ああ。谷島とアリアは芳乃達を任せた！」

谷島「了解！」

アリア「分かった！それじゃ皆、付いてきなさい！」

芳乃・サクラ・アインハルト「はい！」

そう言っただけ俺達は空に飛んで、谷島達は走って移動した。

そして試される、彼らの進化。

初任務と問われる力 後編（前書き）

とうとう彼らの実力が試される時がきた。

今まで学んだ力でどこまでいけるか・・・

俺は、皆が頑張って勝つと信じてる。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty } 始まります。

初任務と問われる力 後編

相良「……あれか……」

距離約5キロの地点に召喚魔法の気配を感じる。

使用者は……二人。

性別は……男女!?

おおお。カップルで犯罪ですか……子供大泣きだよ……

ロード「マスター。現実逃避しないで真面目にやりましょう」

デバイスにまで怒られちったよ。

ヴァン「……!」

上空を飛行しながら移動していると、地上から何かが目では捉えきれない速度で接近してきた。

ヴァンは誰よりも気づき、そいつに向かって行った。

ヴァン「ストームストライク神風討つ拳鳥の緑槍!!」

緑色の風の魔力の拳と、赤き炎の攻撃が……ぶつかりあった。

ヴァン Side

ヴァン「何者だ！」

爆風の中から僕ともう一人・・・僕とぶつかった奴が姿を表した。

両手に刃を持ち、人ではなく・・・確かドラゴノイド！

そしてそいつは喋り出した。

エグゼドライブ「俺の名前はエグゼドライブ。お前は？」

ヴァン「僕はヴァン」スカイ。そしてデバイスはニルヴァーナ。何故襲いかかってきた？」

エグゼドライブ「簡単なことだ。お前らを倒すことが俺を召喚したやつが命令したことだからだ」

ヴァン「・・・」

つまり、こいつは操り人形。そして、召喚された・・・

こいつ、速度が半端なく速い。きっと、師匠と同じくらいだ。

エグゼドライブ「お前、中々良い速度ものを持つてる。俺と戦たたかつに相応しい」

ヴァン「それは僕も今ちようど考えてた」

エグゼドライブ「ふん！気に入った！お前と俺。どちらが最速か・・・」

ヴァン「決めるか！」

ニーナ「行くわよヴァン！」

ヴァン「ああ！頼んだよ。ニーナ！」

そう言って僕と奴の拳と蹴りがぶつかりあった。

相良 Side

相良「速い・・・」

正直な感想だった。

素人だと、目では捉えることが困難な速度でぶつかり合っている。

きつとこれはマツハの世界の戦いだ。

リオナ「翔さん・・・」

不安そうな声で声をかけてきた。

相良「心配はいらない。ヴァンが負けるわけがないからな。それよりも、俺達は進むぞ！」

そう言うとりオナも信用したように表情を戻し、返事をした。

全員「はい！」

そして俺達はヴァンを置いて進んだ。

相良「！」

次は炎の球体が二つ、俺たちに向かって飛んできた。

紗雪「ゲート魔術・オープン兵装！」

紗雪の両手から黒と白の拳銃が現れ、黒と白の銃弾を放ち、炎を消した。

????? 「げんじゅうえんぶ幻獣炎舞！」

そして紗雪が炎が放たれたところへ行くと、俺たちのもとに獣の形をした炎が接近してきた。

なぎさ「ゲート・オープン魔術兵装！」

なぎさが俺たちの前に立ち、黒い剣をだし、左から右に振った。

そして炎で作られた獣を一刀両断した。

なぎさ「翔さん！リオナ！行って！」

相良「分かった！」

リオナ「お願いね！」

そうやって俺とリオナは更に奥に進んでいった。

相良「おいおい……」

ロード「これは……」

リオナ「凄い……」

俺たちの目の前に立ち塞がったのは、良太に巨大な刃がある真つ白な龍。

一体、何体召喚させたんだ……

召喚魔法つてのは、収束砲と同じくらい、魔力消費量が激しいんだ。

ロード「きつと使用者は魔力強化の魔法を使用していると思います」

相良「なるほど……」

リオナ「翔さん」

相良「ん？何だ？」

リオナが俺の前にでた。

リオナ「あいつは……私が倒します」

相良「……良いのか？あいつは流石に試験レベルの実力じゃないぞ？」

そもそもあの敵の量に召喚の時点で任務ランクは軽くAランク超えている。

俺と谷島とアリアで解決させる問題だ。

リオナ「それでも私は、戦いたいんです。興味とかじゃなくて、ただ純粹に……あいつを倒したいんです！！」

相良「リオナ……」

普段、不真面目なイメージを持つリオナだけど、こういう時は本気の目になる。

オーラでも分かる。

リオナは本気だ。

相良「なら、レイドと一緒に見せつけてやれ」

リオナ「！はい！！！！」

ロード「レイド。お前の力、リオナ殿と見せてやれ」

レイド「分かっております。お嬢様のサポート。しっかりとさせていただきます」

そう言っつて俺はリオナを置いて奥に進んでいった。

谷島 Side

俺達は走りながら、発生地点に向かって進んでいた。

谷島「敵は・・・召喚魔術師か」

召喚魔術師。しかも二人。

さっさと倒さないとどんどん召喚されるかな？

アリア「芳樹。久しぶりの実践だけど、行ける？」

谷島「あれ？心配してくれんの？」

アリア「な／＼／＼／＼芳樹が頼りないから、わざわざ心配してあげてんのよ／＼／＼／＼そ、それよりも行くわよ／＼／＼／＼」

アリアの顔はトマトの様に真っ赤である。

谷島「・・・可愛いな。全く」

誰にも聞こえないようにそう言って、俺は先に進むアリアを追いかけた。

・・・!

アリアの背後から全身に炎を纏った奴が殴りかかろうとしていた。

谷島「！エターナル・リヤン！！！」

俺は一瞬でアリアと敵の間に入り、奴の拳を片手で受け止めた。

アリア「！芳樹!?!」

???'「ちっ!」

奴は俺から離れ、走って姿を消した。

アリア「あいつ!?!?!」

アリアはスカートを少しあげ、太ももに付けている拳銃を両手に持って、敵が逃げた方向に銃口を向けた。

だが俺が両手をアリアの前に出して止めた。

アリア「！芳樹・・・なんの真似？」

谷島「ここで無理に体力使ってどうする？あいつは主犯格じゃねえ。主犯を倒せばあいつも消えるんだ。だったらあんな奴に時間を取られてる場合じゃない」

アリア「・・・でも、あいつは都市に行くかもしれないわよ？」

谷島「大丈夫。翔が作った本部があるのと、あいつが育てた弟子達がいるんだ。あんな雑魚が突破するのは不可能だ」

アリア「・・・」

アリアは納得したようで、銃をしまった。

谷島「よし。進むぞ」

芳乃「あいつを・・・止めたらな」

谷島「・・・」

そう言っつて芳乃は森の先を見つめていた。

確かに・・・なにかが近づいてる・・・

芳乃「皆は先にいけ。俺が殺る」

サクラ「マス・・・レイジ」

金髪の女性が一人、心配そうに見つめていた。

芳乃「安心しろ。俺とお前は、一心同体のパートナーなんだ。どこにいたって繋がってる」

おお・・・カッコイイこと言うね。

サクラ「・・・帰ったらいっぱいご飯食べたい」

芳乃「ああ。好きなだけ食わせてやる」

何かすげー会話だな。

・・・・・・死亡フラグって言ったらKYだよな・・・

谷島「なら、ここは芳乃に任せた。皆、行くぞ！」

そう言っただけ俺達は先に進んでいった。

芳乃「さて・・・相手になるぜ」

谷島「……マジかよ……」

初めて見たな……あの敵。

マグマの様な体をした獣で、背中には巨大な砲台があった。

マグマの砲撃獣……か。

アリア「全く。召喚を使う奴の考えが分からないわね」

谷島「都市の破壊だろう？そのためなら何でもありって感じだけだな」

にしても妙だな……さっきアリアを襲ってきた奴もそうだが、何故軍勢で責めずに単独行動を取らせるんだ？

一斉攻撃したほうがいいはずなのに……

ま、それよりも今前にいるあれをどうにかするべきか……

サクラ「あれは私が戦うんだよ」

芳乃「・・・出来るか？」

正直なところ、この子が戦うなんてイメージはない。

そしてあの獣は強い。

俺がアリアがやった方が勝てる気がするんだけど・・・

サクラ「ふう〜！！今絶対に失礼なこと考えてたんだよ！！！！」

口を風船のように膨らませ、俺に怒っている。

いや、だって、ねえ？

弱々しい見ためだから・・・

サクラ「私、これでもレイジの隣にいたんだよ！実力には自信があるんだよ！！！！」

デカイ胸を張っていった。

谷島「アリアとはおお違・・・げふっ！？」

アリアが回し蹴りを放った。

俺の・・・いや、男の象徴の先端から真っ直ぐ直撃した。

谷島「ぬおおおおおおお！……！！」

あまりの痛さに悶絶している。

アリア「あんたねえ！！！！ぺったんで何が悪いのよ！！」

谷島「誰もそんなこといってね・・・ぐはっ！！！！」

倒れている俺の顔面を普通に殴ってきた。

アリア「うっさい！！さっさと行くわよ！！」

そう言ってアリアは俺の胸ぐらを掴んで引っ張り出した。

アインハルト・サクラ「・・・」

アリア「サクラ。あの敵頼んだわよ？」

サクラ「任せて欲しいんだよ」

そう言って俺達はサクラを置いて進み始めた。

谷島「そう言えばアインハルト？」

いつのまに俺が復活してるんだと疑問を持つ人が何人もいる気がするが気にしたら負けだぜ？

アリア「あんた、何かツッコけてるのよ。かつこよくもないくせに」

谷島「（。。。）。グハツ！！」

言葉の銃弾が俺を貫いた・・・ガクッ

アインハルト「それで、私に用ですか？」

・・・アインハルトに俺のボケが効かない・・・

谷島「あ、ああ。あのさ、お前翔の事好きなのか？」

アインハルト「ふえ！？」

一瞬で沸騰したな・・・

谷島「へえ・・・まだモテるのかよあいつ・・・」

友人としてウザイ！リア充は滅べば良いのに・・・

・・・おっと、話題がそれた。

谷島「聞きたいのはそれだけだ。別に深い意味はないってだけは言
つとく」

アリア「芳樹」

喋り終わると、アリアが真剣な表情で俺を呼んだ。

谷島「・・・ああ」

俺はすぐにその意図を察した。

敵が近くにいる。

アインハルト「私が行きます」

谷島「・・・良いのか？」

アインハルト「はい。私の霸王流がどこまで通用するか、確かめた
いんです」

あ、そうか。この子は霸王の遺伝子の・・・
なるほどね。

谷島「分かった。死ぬなよ？翔が泣くから」

そう言うと彼女くすつと笑い。

アインハルト「わかりました」

俺とアリアはアインハルトを置いて進んだ。

そして、若き少年少女達の

命をかけた戦いが始まる。

最速VS最速 刃の龍VS刃の銃弾（前書き）

ぶつかり合うのは似た戦闘スタイル。

試されるのは実力と戦術の高さ。

勝たないといけないから、本気になる。

その本気と、お互いの想いがぶつかり合う結果は……

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty） 始まります。

最速VS最速 刃の龍VS刃の銃弾

ヴァン Side

ヴァン「はああああ！！！！！」

エグゼドライブ「ふっ！！！」

空中で回し蹴りVS魔力パンチのぶつかり合いは何と数分にも及んでいた。

それまでの間、数えるのをやめてしまうほどの連撃の繰り返しだった。

僕と奴は少し距離をとってお互いを睨み合っていた。

エグゼドライブ「お前、いい速度だ。マッハと同じ速度で戦える奴は初めて見た」

ヴァン「僕は初めてじゃないから慣れてる。お前と本気で戦う」

そう言う僕は両手に緑色の魔力を集めて、左手は刀の鞘を持って、右手は刀をも捕まえ。

そう。抜刀術にの構えだ。

刀はない。だが・・・これでいい。

エグゼドライブ「刀がないのに、何故抜刀術の構えを取る？」

その答えは簡単。

ヴァン「抜刀術を“放つから”だ」

エグゼドライブ「放つ？」

ヴァン「ああ！！これが・・・俺の本領だ！！！」

僕は拳で戦う以外もある。

そもそも僕の戦闘は拳を使った格闘技の他にも様々なスタイルがある。

それは、いつどんな状況に陥ろうとも対応できるなんでも屋になれるからだ。

そのために僕は、刀を使わずに刀の技を使える方法を考えた。

それは 拳と手刀を両手で合わせて、放つ収束刀。

ヴァン「風を斬り裂いて、風で斬り裂く」これが僕の奥義」

今まで使うことが無かった。

何故なら、敵は気づいたときには負けているからだ。

そして 僕の勝ちが決まっているからだ。

更に、戦ったやつは死ぬからだ。

ヴァン「お前　死ぬ覚悟くらいはあるんだよね？」

僕は念の為に聞いた。

エグゼドライブ「もちろんだ。だが、俺も本気だ。お前を殺す覚悟も、死ぬ覚悟は出来てるんだ」

そう聞いて安心した。

死ぬのが怖いのなら、少しは考えた。

でも、戦いとは死闘になることがある。

今の戦いなんかがそうだ。

・・・人じゃないのに、いい考えだ。

ヴァン「なら・・・僕の本気で決着をつけるぜ！！！」

エグゼドライブ「言われなくても！」

エグゼドライブは右足に炎を溜め始めた。

僕は抜刀術の構えをやめず、そのまま目をつぶって奴からせめて来るのを待った。

そして　　その時はきた。

エグゼドライブ「フレイム・キック！！！！」

上空ジャンプし、上空から右足でキックをしてきた。

そして当たるほぼ一瞬。

マツハを超えた蹴りと・・・

ヴァン「風林火山・風神・・・・・・・・抜刀」

刹那の一閃。

一瞬で 決着が着いた。

エグゼドライブ「ぐ・・・・・・・・」

何故なら、エグゼドライブは血まみれで地面に落下していった。

エグゼドライブ「……俺の負けだ」

そう言って奴は倒れた。

ヴァン「……終わったか」

速度だけで、攻撃威力がそれほどなかったのがあいつの短所だ。

スピードにだけこだわるのなら、それは戦闘向きじゃない。

それでも僕に本気で戦ってきたのは、あいつにも誇りがあるからだ。

それだけは……すごい度胸だと思った。

ニーナ「さて、さつさとロード達のもとに行きましょう」

ヴァン「ああ」

そう言って僕は進んだ。

リオナ Side

リオナ「くっ!!」

私は両手に刃を付けた龍と戦っていた。

奴は見た目に寄らず素早く、私の右腕に少し切り傷がある。

私に隙を与えない動きは、まるで流れる様に動いて、軌道が読めない・・・

奴の名前はマグナ・スラッシュドラゴン

マグナ「女の分際で俺の刃を超えるつもりか？」

リオナ「ええ。本気よ。レイド！」

私はレイドの形をそりは浅く、刃文は深い刀になった。

マグナ「ほう。それが貴様の刃か。どちらが上か・・・」

リオナ「行きます！」

そう言っつて私は奴に向かって切り込んだ。

マグナ「試させてもらおう！」

奴は右手の刃を振り下げた。

二つがぶつかり合い、金属が擦り合う音が響きわたった。

そして私は左手の刃が当たる前に後ろに下がった。

マグナ「ほう。いい動きだ。中々の力だ。

リオナ「ええ。それはどうも」

こいつ・・・本気だ。

私も、“本気”で戦わないと・・・

リオナ「レイド。B」お願い」

レイド「畏まりました。お嬢様」

そう言っつと、私の全身を真紅の魔力が包み込んだ。

マグナ「ほう。まだ奥の手があったとは・・・」

そして光が消えると、私の服装は真っ赤な和服に両手に刀を持っていた。

マグナ「む……（纏う空気が変わった……）なら、先手必勝」
そう言っただけは両手の刃に真っ白な光を込めて真っ直ぐ切りかかった。

リオナ「行きます」

マグナ「はあああ！！！」

奴の刃が私の喉元まで来たところで、奴の腹部に紅い銃弾が何発も当たって上に上がった。

マグナ「何！？（あの女、刀を持っていながら……銃弾を放った！？）」

何が起ったのか理解できていないような顔をしている……

リオナ「次……」

私は刃の先端を奴に向けた。

リオナ「刃の銃弾。『雷撃つ銃虎の魔弾』ライトニング・シュバルツ！！！！」

先端から紅き雷が弾丸となって放たれた。

奴はそれを切り裂いた。

が、切り裂かれた弾丸の破片は集まり、新たな弾丸へと変わり、奴の右腕を貫いた。

マグナ「ぐううう!!」

奴は苦しそうに悲鳴を上げた。

マグナ「止めよ」

リオナ「・・・」

私は目を閉じて、両手を前方にクロスさせた。

そして刀の刃に真紅の魔力を溜めた。

マグナ「スラッシュ・ラッシュ！！！」

クロスさせるように切りかかった。

リオナ「全てを打ち抜く砲撃」
トル・ブレイカー

刹那、奴は紅き雷によって切り刻まれた。

マグナ「くっ……」

奴の全身から大量の血が出た。

そして私が刀を仕舞うと、奴の全身に紅き雷が襲った。

その光景はまるで、全方向から紅き銃弾を食らっているかのように・
・

そして奴は地面に落ちて……命を引き取った。

リオナ「あなたに、神の加護がありますように」

そう言って、私は進んだ。

一心同体 正義も悪も無い ただ、守るために（前書き）

危険だらけの戦いはどうにか勝利した二人。

そして残る彼らの戦いも、そろそろ終結しようとしていた。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y 始まります。

一心同体 正義も悪も無い ただ、守るために

芳乃 Side

芳乃「・・・」

俺は今、ある奴と睨み合っている。

結晶で出来ていて、胴体と頭と右腕は黒い結晶。

左腕と腹と翼は紅の結晶。

下半身は蒼の結晶。

芳乃「お前・・・人間じゃないな・・・」

人間じゃない奴は初めて見たし、初めて戦う。

こいつに罪と罰は効かない・・・

なら、俺には・・・

芳乃「これしかねえよな・・・」

そう言っつて俺は素手で奴に殴りかかった。

?????」

奴は右手を握り締めて、殴ってきた。

俺の拳と奴の拳がぶつかりあった。

芳乃「ぐっ！？」

俺は力負けして吹き飛ばされた。

そして木に叩きつけられた。

芳乃「ぐはっ！」

つつ〜！あいつ・・・俺よりもいい拳もの持ってるな・・・いや、結晶が硬いのか・・・

すると奴は全力で走ってきて俺の懐を殴り、奥に木を倒しながら殴り飛ばした。

芳乃「ぐ．．．はあっ！」

おいおい、背骨何本折れた！？

腕も左がやられたか！？

右利きだからまだなんとかなるか。

後は10分あれば．．．ケガは治るかな。

???「．．．」

まずいな．．．

あいつが静かに歩いて接近してきた。

．．．余裕ってことかよ。

ふざけんな。

芳乃「くっ．．．」

俺は何とか立ち上がった。

芳乃「はあ、はあ、はあ．．．」

やべえ．．．立つだけで体力使ったあ．．．

でも、まあ動けるけど．．．なんとかしねえとな．．．

芳乃「仕方ねえ……」

俺は魔力を全身に纏い始めた。

すると俺の全身の傷はどんどん塞がってきた。

「?!?!」

奴は俺のしていることに気づいたらしく、走って俺のもとに来た。

そして俺を殴ろうとした。

芳乃「おせーよ……サクラ!?!?!?!」

それは、ここにいるはずのない、俺の最強の切り札の名前。

だが、俺の両手に発生させた魔方陣からサクラと・・・サクラがチヤージした、攻撃があつた。

サクラ「穢レーヴァテインれなき桜光の聖剣!!!」

桜色の超光熱の光の砲撃が放たれ、奴を包み込んだ。

そして 奴はそのまま遠くまで飛ばされ、更にサクラと戦つていたらしい敵にもレーヴァテインは当たり、一発で2体も倒すことができた。

そう。これが俺の戦術。

サクラのいる場所は常に俺の脳に送られてくる。

その場所と、俺の転移魔法でサクラをここに転移、そしてレーヴァテインを放って一撃で2体を倒せる位置を特定した。

そしてその時になって放った。

おかげで一網打尽に出来た。

芳乃「ま、疲れたけどな・・・」

俺はその場に座り込んだ。

サクラ「マスター！大丈夫？」

あれ？さっきはレイジって呼んでた気がするけど・・・

芳乃「ああ。ちょっと休むさ。どうせ谷島さんと翔さん達がいるんだ。どうにかなる」

サクラ「うん」

そう言って俺はサクラに膝枕をされながら、眠りについた。

紗雪 Side

紗雪「くっ！」

私は全身が炎の人型生物と戦っていた。

奴は炎の球体を即座に生成し、放ち続けていた。

私はそれを銃で破壊する。

その連続だった。

このままだと、私の魔力が先に無くなって負ける・・・！

なら・・・

紗雪「フリーユージェル・フリッツ瞬間魔力換装」

私は自らの魔力を中で爆発させることで、それを身体能力上昇に利用した。

こうすることで自らの移動速度を弾丸と同じかそれ以上にすることができる。

私はこれを使って奴の背後に回った。

紗雪「これで　　終わり！」

私は銃弾を放った。

それは頭部に貫通した。

だが・・・

????」「・・・」

紗雪「！」

私は再度身体能力を上昇させて奴から離れた。

紗雪「何で・・・」

確かに頭部を貫通した。

なのに、奴は死んでいない・・・

・・・まさか、あいつそのものは物体じゃなくて気体!?

それはつまり 炎

奴は炎そのもの!?

でも・・・それなら、もしかしたら勝てるかもしれない。

・・・少し時間がかかるけど・・・やってみる価値はある。

紗雪「ヴァイス・シユバルツ福音の魔弾!!!」

漆黒の弾丸と白銀の弾丸が、十字架を描くように奴に直撃した。

だが奴は倒れない。

でも、私は放ち続けた。

紗雪「ヴァイス・シユバルツ福音の魔弾!!!」

同じ技を何度も、何度も放ち続けた。

紗雪「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

もう、何発も打ち続けたけど、奴は倒れない。

私は、雲に弾丸を打ち込んでいるようなものだったんだ。

・・・でも、その雲にだって限界がある。

それに相手は雲じゃなくて炎。

炎に効くものと言えば・・・

そのとき、私達の所で地震が発生した。

そう・・・来た！

紗雪「これで・・・終わり！」

私は最後の福音の魔弾ヴァイス・シユバルツを放った。

それは奴では無く、奴の足元。

そこに当てた瞬間、地面から大量の水が出てきた。

奴はどんどんその形をなくしていき、最後は気体となって消えた。

紗雪「はあ、はあ、はあ・・・」

まるで噴水の様に高く上がった水は雨のように私にかかっていた。

さつきから熱かったから気持ちいい・・・

私の作戦はこうだ。

まず私の能力は音を聞き取ること。

様々な音を捉え、更に動きも音速を超える。

「音」が私の力。

そして私は音で湖の場所を特定してヴァイス・シュバルツでここまでの道を水が通れるトンネルを作った。

最後に奴に向かったその水を発生させれば、奴は水蒸気と化して終わる。

紗雪「少し・・・休まない」と・・・」

そう言っつて私は、木に背中をあずけて座り、休んだ。

なぎさ Side

私が今戦っているのは全身が真っ赤でしっぽがあり、緑色のたてがみがる炎の野獣。

そして彼の全身を大量の炎が覆った。

なぎさ」「・・・」

私は構えた。

私の一撃で・・・全てを終わらせるから・・・

????「幻獣炎舞！」

彼は全身の炎をまるで獅子の様に変化させ、私を食べるように襲ってきた。

そして私は炎に飲まれた。

・・・様に見えた。

なぎさ「お願い。スウアフルラーメ私に、力を貸して。ただ、大切な人を守るために・・・」

そう言うと、私の剣は応じたかのようにその姿を黄金の聖剣に変えた。

そして私の姿も変わり、髪はおろした姿になった。

なぎさ「テイルウィング黄金色の聖約！！！！」

黄金の光が剣を覆い。そのまま大きく振り下ろした。

そして彼は切られ、消えた。

なぎさ「これが・・・私の戦い」

剣道の様に、長続きせず、一撃が当たるだけで負け。

速攻の勝負。

なぎさ「・・・皆の所に、行かないと」

そう思い、私は剣をしまって、移動を開始した。

相良 Side

俺は召喚魔導士の元へたどり着いた。

相良「・・・いた」

谷島「翔！」

アリア「あんたも来てたのね」

二人が右から現れた。

相良「ほかのみんなは・・・勝ったみたいだな」

???「よくやったみたいだね」

??「でも、あの程度で浮かれるなんて・・・駄目ね」

相良・谷島・アリア「！」

声の聞こえた方を向くと、二人の男性と女性がいた。

男性は真っ黒の髪に真っ黒なB」

女性は対照的に真っ白なポニーテールに真っ白なジャケットにミニスカート。

そして二人の手には刀とライフルが手にあった。

アリア「あんたたち。大人しく降参しなさい！」

アリアが両手に銃を持ち、二人に向けてそういった。

だが彼らは怯えるどころか、むしろ笑い出した。

相良「何がおかしいんだ？」

その質問に男性のほうが答えた。

???「いや、君たちは何もわかってないと思ってね」

谷島「何も分かってない？」

その問いには女性が答えた。

??「私たちは、あの程度の召喚しかできないわけじゃない。既に・・・手はうってある」

その言葉と同時に、空気が重いものへと変わった。

谷島「何だ!?!?・・・この、威圧感は・・・」

アリア「何か・・・強いのが来るわよ・・・」

相良「ああ・・・」

俺達は何とか立ち上がり、武器を構えた。

そして現れたのは、全身が真っ黒で真紅の瞳をしている巨大な龍

谷島「おいおい・・・あれって!?!?」

相良「ああ。伝説の黒龍・・・」

そして二人は姿を消した。

アリア「あ、待ちなさい!!」

谷島「アリア! あいつらはどうでもいい! それよりも・・・」

俺たちの前に現れた、巨大な黒龍。

その名は

「レッドアイズ・ブラックドラゴン
真紅眼の黒龍」

一心同体 正義も悪も無い ただ、守るために（後書き）

俺たちの前に姿を表した巨大な黒龍。

これが・・・全ての始まりとなった。

霸王の拳が飛翔するとき

アインハルト Side

アインハルト「はああー！」

「????」

私は両手がナイフのような形をしている人型生物と戦っていた。

刃を使う相手に拳で戦う私が渡り合う方法。

それは、刃に触れずに峰や側面に拳を当てる。

それには集中力をかなり使う。

けれど、私は既に翔さんから刃と相手をする訓練を受けているから
・
・

私は目を閉じて翔さんの教えを思い出していた。

「アインハルトやヴィヴィオの行う格闘技を「徒手格闘型」
ヒューストライカー
余分だけど、その徒手格闘型にとっての斬撃の危険性が尋常じゃない。
まず同じ格闘型の奴と戦い方や考え方を同じにするな！」

アインルト「（まずは、相手が格闘の者ではないと言つことを理解して・・・）はあああー!!」

私は敵の正面ではなく、右にずれながら向かい、左手の刃の側面に強烈な一撃を打ち込んで即後ろに下がった。

アインハルト「（後は刃を破壊する・・・!）」

だが敵は右手の刃で私に接近してきた。

そして私はもう一度翔さんの教えを思い出した。

「後は、素手と武器の間合い差を持つ“意味”を絶対に忘れるな!」

それは相手が届く距離に私は届かないと言つこと。

だとするならば、私はその攻撃を耐えるか・・・または・・・

???? 「火の斬」

敵の右手の刃が炎に包まれ、そのまま私の首元まできた。

その瞬間、魔力光が私の首元にまるで障壁のように出てきた。

???? 「!？」

その魔力光が相手の刃を防いだ。

そして私はその隙に、右拳に魔力を込めて相手の懐に込めた魔力を砲撃のように放った。

アインハルト「霸王……旋翔拳せんじょうけん!!」

放たれた砲撃が敵の腹に貫通した。

???「ぬぅぅぅ!!」

敵は苦しからか、苦戦したの分かりませんが素早く私から距離をとった。

アインハルト「何故、こんなことをするんですか？」

???「俺は召喚された。それは、必要とされているからだ」

必要と……されている。

???「俺なんかを必要としてくれている人がいつ。俺が戦う理由なんて、ただそれだけで十分なんだよ。だから・・・本気でやらせてもらおう!!」

そう言つて敵は左手の刃に大量の炎を集めた。

アインハルト「ならば私も応えなければいけませんね」

そう言つて私は右手を後ろに。左手を相手に向けた。

そして右拳に魔力を込めた。

「相手と自分の距離がもし離れていれば、アインハルトは不利になる。だとするなら拳でだす砲撃がある。それを先に使つて、相手に「遠距離も使える」と思わせる。そうすれば相手は一撃で終わらせにくるかまたは新たな策を考えにはいる。その隙がお前の勝つ時だ!!!!」

だとするなら・・・この一撃同士のぶつかり合いが、私の勝利の夕

イミング。

「いいか。相手が距離をとって一撃の準備をしたとき、お前も動かずに拳に魔力を溜める。きっと相手は距離をとった技を使う。だけどアインハルトは先に動かず、相手が攻めるのを待んだ。相手はそう。これがアインハルトの新たな戦闘スタイル」

「???? クリムゾン・フレイムラッシュ!」

相手が全力の斬撃を放った。

そして私は相手の攻撃を放つほんの一瞬で足先に溜めた魔力を爆発させて、まるで抜刀術の様に素早く動いて、相手の攻撃も・・・相手にも拳を打ち込む・・・

アインハルト「はおうばしょけん霸王拔翔拳!!!!!!」

右拳を前方に打ち出すようにだして、巨大な砲撃をだした。

「カウンタメトライカーストラボクサー後手必倒と拳砲手の二つのスタイル」
「カウンター・シューティング・ストライク逆境を撃つ
霸王の拳砲撃」

そして敵と、敵の放った斬撃は、放たれた砲撃によって消し飛ばされた。

アインハルト「・・・」

爆風が消えるのをただ待ち続けた。

そして爆風の中から、ボロボロになった敵が出てきた。

ウレックス「俺の・・・名、は・・・ウレックス・・・」

アインハルト「私は、陸宙管理本部嘱託魔導士の「アインハルト・ストラトス」です」

ウレックス「・・・そう、か」

そう言って、敵は倒れた。

アインハルト「・・・終わりましたか」

なぎさ・ヴァン「アインハルト！」

二人が走ってこちらにきた。

二人も戦って、勝ったようですね。

アインハルト「お二人とも、お怪我は？」

ヴァン「問題ない」

なぎさ「私も。だから、早く翔さんの所へ行こう！」

アインハルト「はい！」

そう言って、私と二人は共に翔さんが向かっていった場所へ走っていった。

連携（前書き）

彼らの戦いが終わり、いよいよ俺たちの戦い。

目の前にいるのは真紅の瞳をした黒龍。

いざ、クエストの始まりだ！

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

連携

相良 Side

相良「始めるか。ロード！」

谷島「エルリヤ！」

アリア「レチタティーヴォ！」

俺達は共に武器をだした。

俺は白銀の刀。

谷島は真つ黒な「ドラグノフ」を出した。

アリアは「コルト・ガバメント・クローン」を2丁持った。

アリア「武偵憲章1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』」

相良「武偵憲章6条『自ら考え、自ら行動せよ』」

谷島「武偵憲章5条『行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし』」

そう言つてアリアは素早く走り出し、龍に銃を放ち始めた。

俺はアリアとは反対の方に走り出し、龍に切りかかった。

谷島はその場で狙撃銃を構えて俺とアリアが引きつけている間に龍の目玉に向かつて銃弾を放った

だが俺たちの攻撃全ては全く効かず、はじかれた。

相良「こいつ!?!」

アリア「硬い……」

真紅眼の黒龍「黒炎弾」

奴の口から放たれた漆黒の炎はアリアに向かって放たれた。

アリア「な……っ!!!!」

谷島「アリア!!!!!!」

谷島はアリアのもとに全力で走り、アリアをお姫様抱っこで抱えて炎をよけた。

谷島「ふう・・・」

炎が当たった地面は漆黒の炎で焼け消えた。

相良「大丈夫か!？」

谷島「こっちは大丈夫だ!」

いや、俺が心配してるのはアリアのほうなのだが・・・

アリア「//////////」

アリアは顔がトマトの状態になって慌てていた。

谷島「悪いアリア」

アリア「んむ!？」

相良「ひゅ〜」

谷島は何を考えたか不明・・・ではないが、アリアにキスをした。

・・・いや、普通のキスっすよ!?

すると谷島の雰囲気が変わった。

目はきりっとしていかにも真面目な人と言った目になった。

そして優しい笑になり・・・

谷島「アリア。大丈夫かい？」

アリア「あ、あああ、あんた!!!!勝手に私の唇を奪うな!!!!
////////////////////」

両手をあげて子供の様に怒るアリア。

そして完全にキャラが変わってしまった谷島がそれを笑いながら謝る。

谷島「ごめんごめん。別に悪気があった訳じゃないんだ。ただ君の唇が近くにあると思ったたらついでね」

谷島は少し変わった遺伝子を持っていて、女性とキスしたり性的な興奮をすると物事の優先順位付けが正しく出来なくなったり女性にキザな言動を取ってしまう「ヒステリアモード（ヒステリア・サブアン・シンドローム）。通称「HSS」になる。

相良「それ犯罪じゃないのかあ〜？」

そのツッコミは何故か誰も聞いてくれなかった。

アリア「あ、あんたのしたことは犯罪！！これはれっきとした犯罪なのよ／＼／風穴開けるわよ！」

ああ・・・マジでキレてる・・・今の状況わかってるのかなあ・・・

真紅眼の黒龍「黒炎弾」

空気を呼んでくれたのか、谷島のウザさに嫌気がさしたのか、奴は谷島とアリアに向かって炎を吐いた。

相良「俺を無視すんじゃないやねえ！！！」

俺は奴の口に向かって光の斬撃を放った。

その斬撃は奴の黒炎弾と当たり、口で爆発して、奴が自爆した形になった。

相良「よし！ロード！フォーム「拳」！」

そう言うとロードは光になり、俺の両手にナックルとして装備された。

相良「行くぜ！」

俺はボクシングの構えを取り、素早いステップで奴の懐に入り、右拳に白銀の魔力光を溜めて、アッパーをした。

相良「ソニック・ダスト！」

それは直撃し、奴は空高く打ち上がった。

相良「よし！今だ！」

谷島「分かってる。行くよ、アリア」

アリア「わ、分かってるわよ！／＼／＼」

谷島（変態モード）はヒステリアモードになると確かに変人になるが、それだけでなく、思考力・判断力・反射神経などが通常の30倍にまで向上する。

何でも血筋でそうならしい。

だから、今の谷島（変態モード）は普段のあの蹴られたりされている谷島（それでも変態）ではない！！

谷島「あまりフォローになってない気がするのは気のせいじゃないよな？」

アリア「事実だから仕方ないわよ」

そう言いながら谷島は狙撃銃から警棒ホワイトウルフに姿を変えた。

谷島「行くよ・・・」

静かにそう言い、赤い魔力光をホワイトウルフに溜めて奴の元へ走っていった。

アリア「行くわよ・・・」

そう言ってアリアは銃を奴に向け、緋色の魔力光を二つの銃口に集めた。

相良「はぁぁぁ………」

俺は右拳に白銀の魔力を溜め始めた。

そして 真紅眼の黒龍が上空から降りてきた時、俺達は動いた。

谷島「桜花！」

その瞬間、物凄い速度で谷島^{ロリコン}は奴に警棒でガガガと殴りまくった。

アリア「『緋弾のARIA』」

緋色の強力な二つの弾丸がひとつになり、奴の眼を破壊した。

後は・・・

相良「はあああああ！！！！」

上空から、俺が止めをさす。

相良「スターダスト・クラッシュユフィスト星屑の剛拳！！！！！！！！！！」

白銀の拳が奴を包み込んで、巨大な爆発を起こした。

相良「いっつう……」

右手が筋肉痛です……

谷島「……あれ？」

相良「あ、もとに戻ったか」

いつもの雰囲気に戻った。

谷島「ぐああああ」

そして鼻血を出して倒れた。

実はさっきの技「桜花」を使うと筋肉が疲れて鼻血を大量にだして、それが桜のようだから桜花なんだよな。

アリア「ネーミングセンスが良いと思ったのに、由来が残念よね」

相良「全くだ」

取り敢えず谷島はそばにある木に置いておいた。

真紅眼の黒龍「この程度で……」

相良「アリア「!?!」」

煙の中からあいつがボロボロになりながらも出てきた。

真紅眼の黒龍「黒炎弾!!」

相良「スターダスト・ディフェンサー星屑の障壁!!」

俺は急いで白銀の光の障壁を張り、防御した。

相良「おいおい……まだこんな力が残ってんのかよ……」

ロード「中々やりますね」

会話が軽いな……

アリア「翔！私が引きつけておくから次こそ決めなさい！」

相良「分かった！」

そう言っただけで俺とアリアは左右に分かれて走り出した。

アリア「ほらこっちよ……！」

そう言っただけでアリアは銃を何発も放って意識をアリアに向けた。

真紅眼の黒龍「ちっガキがあ……！」

アリア「うっさいわね……！何故か身長伸びないのよ……！」

そう言いながら何発も何発も放った。

相良「ロード！」

ロードは刀に姿を変え、俺は刀身に白銀の光を集めた。

そして抜刀術の構えをとった。

相良「白刀技・銀翔抜刀!!」

白銀の巨大な斬撃が放たれた。

真紅眼の黒龍「黒炎弾!!」

すぐに気づいて漆黒の炎を放って、俺の斬撃とぶつかりあった。

相良「はあああああ!!!!」

俺は押されながらも、何とか勝って奴は光に包まれた。

そして奴は姿を消した。

相良「……………終わった……………」

アリア「ふう……………」

ああ……………疲れたあ……………

結局、召喚魔導士には逃げられたな。

アリア「芳樹！」

アリアは谷島のもとに行った。

何だかんだで谷島もモテるんだよな……………

ヴァン「師匠！」

相良「お、ヴァン！」

他にもなぎさ、アインハルト、リオナが来た。

あれ？他のみんなは・・・

相良「ロード。皆の魔力感知をして欲しいんだけど」

ロード「すでに終わっています。大丈夫です。皆さんご無事ですよ」

よかった・・・

ロード「といたしますか、残りのみなさんは先に都市に戻られました。

相良「おお。なるほどね。分かった」

そんじゃ、後は帰るか・・・

相良「そんじゃ戻るか」

アリア「私は芳樹が目覚めるを待つから先に行つて」

相良「・・・ああ。分かった。それじゃ皆、戻るぞ！」

ヴァン・アインハルト・リオナ・なぎさ「はい！」

俺は4人を連れて、都市に戻っていった。

アリア Side

アリア「・・・」

私は芳樹が目覚めるのを、隣に座って待っていた。

何で待とうと思ったのかは分からないけど、ここにいたいと思った。か、勘違いしないで！いたいのはただいつ起きるか分からないからで、別に好きでいたいわけじゃないんだからね！！

谷島「それはツンデレだって・・・」

アリア「うつさい！！・・・って、あんたいつ目覚めたの!？」

気づくと目の前に目を覚ました芳樹がいた。

谷島「今起きた。終わったんだよな？」

アリア「あんたが寝てる間に翔が倒したわよ」

谷島「おお・・・すごいな」

アリア「何感心してんのよ！！全く、あんたいきなり私にキスした上に一番先に倒れるなんてありえない！！風穴開けるわよ！！」

谷島「起きたての人にそんなこと言うなって・・・」

アリア「うっさいうっさいうっさい！！！！！！」

そう言っ私は銃を持って芳樹に撃ちまくった。

谷島「うをつ！？待てこら！あぶね！？」

芳樹は走って逃げた。

アリア「待ちなさああああい！！！！絶対に風穴開けるんだから！！！！！！」

そう言っ私と芳樹は都市にもどるまで、ずっと追いかけてきました。

キャラ紹介 6 霊使い

今回、皆さんから「ウィンちゃんとライナちゃんのキャラ設定が知りたい!」つという感想が後を絶たないため、まだ全員登場してありませんが更新しようと思います!

共通事項

- 1、霊使いのみんなはカードと容姿は変わりませんが、性格などは作者のイメージです。
- 2、キャラクターボイスCVも作者のイメージです。
- 3、似合わないと思ったら、他に似合う声優さんを書いて送ってくれると助かります。
- 4、技はまだ秘密です。ただ畏カードにある奴は使います。
- 5、霊使いには皆、精霊が1体いますが、進化した時の名前などは作者の勝手に作ります。
- 6、5人。つまり女の子達は皆相良翔の事を兄と呼んでいるが、初恋の相手も相良翔である。

火霊使いヒータ CV・沢城みゆき 年齢10歳

相良翔の事は「兄貴」と呼ぶが、相良だけと一緒にの時は「兄おにい」と呼んで甘える。

精霊の名前は「狐火」

性格

・ツンデレ

・恥ずかしがり屋

・寒がり

・正直者

・本当は甘えん坊

趣味

・運動。よくエリアと競走をしている。

・サウナ

水霊使いエリア C V・川田 妙子 10歳

相良翔の事は「にーに」と呼ぶ。

精霊の名前は「ギゴバイト」

性格

・ちよつと大胆でエロイ

・甘えん坊

・方向音痴

・暑がり

・泣き虫

趣味

・女の子の体を触ること。よくヒータの体を触っている。

・水を飲むこと。一日に必ず4リットルは飲む。

風霊使いウイン CV・茅原実里 10歳

相良翔の事は「お兄ちゃん」と呼ぶ。

精霊の名前は「プチリュウ」

性格

- ・人見知りが激しい
- ・言葉数が少ないが、相良翔とロードにはよくしゃべる
- ・相良翔に抱きしめられるのが好きらしい
- ・冷静沈着。なのによくドジる
- ・天然
- ・大人しい

趣味

- ・料理。相良翔と一緒に作れるように勉強したらしい
- ・お菓子作りが大好き。相良翔に食べて欲しいから

・高いところで風を受けること

地霊使いアウス CV 千葉紗子

相良翔の事を「兄さん」呼んでいる。

精霊の名前は「デーモン・ビーバー」

性格

・真面目

・しっかり者

・賢い

・考えて行動するほう

趣味

・読書

光霊使いライナ C V・堀江ゆい

相良翔の事を「お兄たん」と呼んでいる。

精霊の名前は「ハッピー・ラヴアー」

性格

- ・天真爛漫

- ・何があっても笑う

- ・何でも楽しくやる

- ・相良翔に抱きつくのが好き

- ・プラス思考

趣味

・ ひなたぼっこ

・ 誰かに必ず一回話しかけること。このおかげで都市でライナと話せない人は居ない。

闇霊使いダルク CV 斎賀みつき

相良翔の事を「兄さん」と呼んでいる。

精霊の名前は「D・ナポレオン」

性格

・ 他の霊使い達とは対照的に、暗い

・ 一人で戦う

・ いつも先の先を考える

趣味

特になし

キャラ紹介 6 霊使い（後書き）

こんな感じですよ。

他に質問があればいつでも聞きますのでよろしくお願いします。

新たな仲間と妹好き！？（前書き）

戦いが終わり、彼らは再び都市へ戻る。

そして会う、都市の王。

彼との話で導かれる運命とは・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

新たな仲間と妹好き!?

再び都市に戻った俺達は都市の最上階に向かって歩きだした。

相良「おお〜い!!! ウィン! ライナ!

ウィン「・・・兄さん」

ライナ「お兄たん!!!」

二人が走って抱きついてきた。

谷島「ああ〜翔が浮気してるう〜!」

相良「浮気!? 何で?」

アリア「抱きつかれてるからよ」

つかいつのまに追いついてるんだよ・・・

ヴァン「流石鈍感師匠」

相良「ごめん。嬉しくない」

流石と言われても全く嬉しく無いな・・・

芳乃「戻ってきたか・・・」

サクラ「みんなあ〜！」

追加で芳乃やサクラも紗雪もいた。

良かった。戻ってきたか・・・

相良「無事で良かった・・・」

紗雪「はい」

相良「まあな。よし、それじゃエンディミオンに会いに行くか」

全員「おお〜！」

そういうことで俺達は塔に入り、最上階まで移動した。

所変わって最上階「王宮部屋」

相良「失礼します。陸宙管理本部総裁。相良翔です」

部屋に入り、そこにいたのはこの都市エンディミオンの王を務めている「神聖魔導王エンディミオン」だった。

エンディミオン「久しぶりだね。先程は感謝するよ」

相良「ええ。突然のことでしたので動揺しましたが、皆も素早く対応できましたから」

ヴァン「《師匠。この方が・・・》」

ヴァンが念話で話してきた。

相良「（ああ。この人がこの都市の王であり、この陸宙管理都市本部総裁のエンディミオン。俺の古い友人）」

ヴァン「《友人ですか・・・》」

谷島「（昔から翔は色んな人と仲良くなるからな）」

相良・アリア「（お前・あんたみたいのがいい例だ）」

谷島「（酷!?)」

そして俺はエンディミオンの近くに行き、話し始めた。

相良「俺がここに来たのはほかでもない。現在様々な地区で発生している「闇」についてです。情報は全てここにありません。そちらか

「は何かありますか？」

エンディミオン「こちらでも最近頻発しているな。と言うのも、先ほどの様な襲撃者からの奇襲もたまにあります。その敵が謎の闇に包まれた状態で襲いかかってくる」

なるほど・・・こちらでも事件が頻発しているみたいだな。

相良「俺はこれから合同捜査を行いたいと思っています。そちらから何名かお借りしたいのですがよろしいですか？」

エンディミオン「別に構わないよ。そもそも総裁は君だ」

相良「ありがとうございます。エンディミオン」

俺は一礼して部屋を退室した。

相良「ヴァン達はエンディミオンと少し話をしてくれ。谷島とアリアも頼む」

谷島「おう」

アリア「分かったわ」

そうやって俺は登を後にした。

所変わって俺は「王立魔法図書館」にやってきた。

ここには様々な歴史書が置かれており、いわば無限書庫のようなものだ。

相良「お〜い！アウス！」

俺はその名を呼ぶと、本を片付けてから俺のもとに来る茶色い髪にメガネをかけ、ボーイツシユな見た目をした少女。

アウス「兄さん。お久しぶりです」

相良「ああ。久しぶり。少し身長伸びたか？」

アウス「ええ。お陰様で」

アウスはウィンやライナ達と同じ霊使いと呼ばれる者だ。

俺は霊使いの皆を集めに来た。

相良「アウス。俺の捜査に協力してくれないか？」

アウス「え！？僕が・・・ですか？」

相良「ああ。他にもウィン達にも手伝ってもらっただけど、良いか

な？」

アウス「はい！僕も手伝います！」

おっし！仲間が増えた！！

その後、ライナとウィンにも相談し、仲間が3人増えた。

あと3人。

そして俺は所変わって温泉にやってきた。

男女混浴なのだが、俺達は水着を来ているので見えることはない。

ウィン「う／＼／＼／」

ウィン達が着替えを終えて来た・・・のだが、皆綺麗な体だことで。

白い素肌に成長した胸。

どこかのアイドルグループよりも全然可愛い。

ライナ「どうお兄たん！似合う？」

ライナは白いビキニを着て現れた。

相良「ああ。凄く可愛いよ」

ライナ「えへへ／／／／／」

嬉しそうだな・・・

アウス「あの、僕はどうですか？」

アウスは茶色いビキニで現れた。

相良「ああ。似合ってる」

アウス「あ、ありがとうございます／／／」

ワイン「うう／／／／／」

ワインは相変わらず顔を真っ赤にして俯いている。

相良「ワインも可愛いよ」

ワイン「うううう／／／／／」

更に赤くなった・・・

相良「まあいいや。それよりも・・・あ、いた」

俺が温泉にきた理由は二人を見つけるため。

その二人はいつも一緒にいるからな。

相良「お〜いい!! ヒータ!! エリア!!」

赤い髪に赤いビキニを着た少女がヒータ。

青い髪に青いビキニを着た少女がエリア。

ヒータ「あ／／／／兄貴／／／」

エリア「あ、お兄ちゃん!」

エリアは手を振って返事をして、ヒータは顔を真っ赤にして胸を隠す仕草を見せた。

俺達はエリア達のもとへ行って、話をした。

相良「と言っわけだから、二人にも手伝って欲しいんだけど、良いかな？」

ヒータ「ああ。構わないけど、あたしらでいいのか？」

相良「ああ。ヒータ達がいれば心強い」

エリア「なら手伝っよ！お兄ちゃんの頼みだし」

そう言ってエリアは俺に密着してきた。

相良「こらエリア。離れなさい。色々とまずいから」

そう言ってもエリアは更に体を密着させ、擦りつけてきた。

エリア「ええ〜久しぶりの再会なんだからもっと楽しくさあ〜。色んなことしようよあ〜」

色っぽい声でそう言った。

相良「や、やめろよ！」

そう言って俺は右手にパイロキネシスで炎を溜めてエリアに当てた。

エリア「ぎゃー！」

ヒータ・ウィン・アウス・ライナ「うわあ・・・」

エリアの髪はこげた。

だが、一瞬で元通りに戻った。

相良「相変わらず、その“体質”は怖いな・・・」

エリアは実はちょっと特殊な体質ををしていて、怪我の治りが異常なまでに速い。

エリア「これでお兄ちゃんの攻撃は痛くても耐えられるよ／＼／＼だから／＼／＼もつと／＼／＼／＼」

相良・ヒータ・ウィン・アウス・ライナ「エリア（ちゃん）がMに目覚めた!？」

この瞬間、俺達はエリアの将来に不安を抱くようになったのは、言うまでもない。

相良「・・・あれえ？」

俺達は何だかんだで最後の一人を探していた。

名前は「ダルク」

ルチアと名前が同じだが、決して血縁関係はない。

ライナ「ダルク君ならきつとこの先にいるよ」

そう言つて俺たちは暗い家を訪れた。

相良「ダルク！」

ダルク「あ・・・兄さん」

ダルクは一人、明かりもない場所で本を読んでいた。

相良「良かった。ここにいたか」

ダルクは本を片付け、俺のもとにきた。

ダルク「兄さん。俺に何か用ですか？」

相良「ああ。実は」

俺はダルクに今起こっていることを話し、手伝って欲しいとお願いした。

ダルク「別に良いですよ。でも、戦うのであれば一人で戦いたいです」

あ、そうだった。

ダルクは基本的に共闘を苦手とする。

まあ技からしてそうなのだが、まあこれは仕方ないか・・・

相良「ま、それは仕方ないもんな。分かった」

ダルク「すみません。兄さん」

相良「謝らなくてもいい。それがお前だもんな」

そう言っただけ俺はメンバー全員を集めた。

そして俺達は塔の王宮部屋に戻ってきた。

エンディミオン「ほう。やはり君たちを推薦したか」

相良「ええ。彼女達が、一番心強いと判断しました」

エンディミオン「そうか。なら、好きにすればいい。ただし、責任はきっちりとするように」

相良「はい。それじゃ皆、帰るぞ」

全員「はい！」

さらに6人増えたことで返事の大きさが凄かったのは喜ばしいことだな。

谷島「また賑やかになるだろうな・・・」

アリア「当然よ。ただでさえ手間がかかる子達だから『わあ〜!!』アリアちゃん!!』『エリア!』」

アリアにエリアは飛びつき、頬擦りを始めた。

エリア「うんうん……！やっぱりすべすべっとしてきもちい」

アリア「ちょっとやめなさい……！」

谷島「本当だ。賑やかになるな……」

相良「そつだな」

そう言って俺達は都市エンディミオンを後にし、陸軍管理本部に戻っていった。

雨が降り出す（前書き）

俺が与えるのは、皆の休み。

突然の戦いを終えた彼らに、俺は休む時間と考える時間を与えた。

それはきつと、彼らにとって・・・重要な意味を持つだろうから・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
t y } 始まります。

雨が降り出す

相良「それじゃ今日は皆、お疲れ様」

陸宙管理本部に戻ってきた俺達は総裁室に集まり、ギンガとルチアの二人がサイドで見ている。

相良「試験結果の発表は一週間待って欲しい。それはすぐに決めるとその後に影響をもたらすと判断したからだ。だから一週間は皆休暇をとって、経ったら発表しようと思う」

全員「はい!」

相良「うん。それじゃ解散」

そう言っただけは帰っていった。

相良「谷島もアリアも、今日は助かった」

谷島「何言っただ？お前は総裁だろう？俺たちに命令してこそだ。頭を下げるなっただ」

アリア「そうよ。そんなひ弱なリーダーじゃ皆が強くないわよ」

相良「・・・ああ」

俺達は話を終え、各自帰宅した。

相良「……はあ」

転送魔法陣の上で俺は悩んでいた。

一体誰がいる家に寄って行けばいいのか……

相良「……久しぶりにあっちに行くか」

そう言っつて俺は転送魔法陣の上に乗った。

相良「うわっ!?!」

?????「!?!」

着地失敗。着地点に既に女性が一人いた。

ピンク色の長い髪をした女性。

俺はその人を押し倒す形となって倒れた。

相良「わ、悪い!シグナム!」

そう。俺の嫁であるシグナムである。

押し倒してしまつてある意味イベントなのだが、この小説はR-15〜R-17までが限界だ。

ここでパパパパやしてしまうとこの小説が消えてしまうので、主人公の相良君には頑張つて我慢してもらつた。

シグナム「久しぶりに帰つてきたと思えば、私に襲いかかるとはノノノノ」

相良「いや、別にそんなつもりはなくてだな・・・」

何とか弁解をしたいのだが、シグナムは頬を真っ赤にして涙目でマジギレしているから俺の声が届かない……

シグナム「貴様／＼／＼覚悟はできているのだろうか／＼／＼」

あれ！？俺の話やっぱり聞かれていない！？

し……仕方ないな……

俺はシグナムを思いきり抱き寄せた。

シグナム「な／＼／＼／＼ななな／＼／＼何を／＼／＼んむ！？」

そのまま俺はシグナムの唇に俺の唇を重ねた。

そして10秒数えてから離れた。

相良「これで許してもらえるかな？」

シグナム「そ／＼／＼／＼そんなことで許されるとも／＼／＼／＼」

相良「だったら何をすればいい？もっと激しいのが良いのか？」

と、俺は悪戯気味に言った。

するとシグナムは沸騰寸前でした。

シグナム「そ／＼／＼／＼／＼そういう事ではやくてだな／＼／＼／＼」

噛んでるし・・・そろそろやめるか。

相良「冗談だよ。さっさとはいろっぜ皆が待ってる」

そう言っつて俺は沸騰しているシグナムの右手を握って引っ張っつて家に入った。

今日は久しぶりにはやてのご飯でも食べるか。

翌日

ヴァン Side

ヴィヴィオ「……」

学校が終わり、僕は家に帰ってから休もうと思っていた。

だがそこにヴィヴィオがやってきて、今僕は家にヴィヴィオを入れ、話をしている。

ヴァン「それで？僕に用？」

ヴィヴィオ「うん。大事な……話があるんだ」

ヴァン「？」

大事な話し？僕にか……

ヴィヴィオ「……私……私、ね？」

ヴァン「！」

その時僕は、“あの時”と同じ感覚に襲われた。

コロナが……僕に想いを伝えてくれた　　あの日。

あの時の……ドキドキとした感覚と、不安。

その二つが今　　襲いかかってきたんだ。

とじつじつとは・・・まさか!?

その時　　ヴィヴィオの姿が、あの時のコロナの姿と重なった。

ヴィヴィオ・(コロナ)「私　　ヴァン君の事が、好きです」

ヴァン「・・・」

今更、驚きはしない。

一度、告白されたからな。

僕の答えは決まっている。

ヴァン「ごめん。ヴィヴィオも知ってると思うけど、僕はコロナと付き合ってる」

ヴィヴィオ「それでも構わないよ？私は、ヴァン君の事が・・・好きだから」

その時のヴィヴィオの中には、何か迷いがあるように見えた。

何というか・・・コロナと違って、純粹な風が無いって言うか・・・別に何かあるって言うか。

ヴァン「ヴィヴィオ。もしかしてさ、“他にも”好きな人がいるのか？」

ヴィヴィオ「!？」

凶星みたいだな。

ヴァン「その人の方を選べば良いと、僕は思う。僕には、コロナがいるから・・・コロナだけを大切にしたい」

きっぱりと断ることにした。

曖昧な言葉で逃げるより、正面からぶつかって行くことと思ったから。

ヴィヴィオ「・・・そう、だよね　　ごめん」

ヴィヴィオは、走って僕の家から出ていった。

ヴァン「・・・」

罪悪感がある。凄い・・・罪悪感が。

でも、僕にはコロナがいるから・・・

ニーナ「あんだ、最低ね」

ヴァン「・・・分かってる」

最低だつてことくらいは分かってるんだ・・・

ニーナ「ふざけないで！あんたは、本当に分かってない！」

ヴァン「え・・・」

突然ニーナが本気で怒った。

ニーナ「あなたに女心が分かれなんて無理は言わないけど、少しくらいは理解しようと思わないの!？」

ヴァン「女・・・心・・・」

分からない。そんなの・・・僕には一生理解できない。

ニーナ「今、あなたがしたことをコロナに話しても、コロナは喜ばないわよ!」

ヴァン「!?!?どういう、ことだ・・・」

何で・・・何でなんでなんだよ・・・

ニーナ「取り敢えず、あなたはヴィヴィオを追いかけて、ヴィヴィオに謝りなさい!そうすればわかるはずよ!」

ヴァン「あ、ああ!分かった!」

僕は何も考えずに、外にでてヴィヴィオが進んだであろう道を走った。

気づくと空は、大量の雨が降っていた。

僕は傘をさしていない。

何か…… “あの時” の、師匠の言葉を思い出した。

「雨は、いつか止むのかな？」

ヴァン「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

結局、ヴィヴィオは見つからなかった。

きつと、師匠の家にいると思って行ったのだが、ヴィヴィオはどこかに出かけてまだ帰ってきていないらしい。

僕はそれから様々なところを走りまくった。

大量の雨が僕の服を濡らしていた。

ヴァン「……どうしてなんだよ……」

また、誰かを傷つけた。

傷つけることを恐れてはいけない。

そう決めたのに……また、僕は怖がっている。

ヴァン「……畜生……」

雨に打たれながら僕は、湖の側にいた。

そして、空を見つめながら……言った。

ヴァン「ちっくしょおおおおおおおおおおおおおおおお……」

その叫びは、
雨の音でかき消された。

その時の空は、
まるでヴィヴィオが泣いている姿に見えた。

そして
僕の意識はここで暗闇に染まった。

雨が降り出す（後書き）

何でわからないんだ？

僕は、どうして失ってからじゃないと気づかないんだ？

その人を傷つけたことを。

そして・・・後悔を

分からない事(前書き)

僕は、何も知らなかったんだ。

ヴィヴィオの想いを・・・

ヴィヴィオが、何と葛藤してきたのか・・・

そんなことも知らないで僕は、彼女を否定したんだ。

僕の・・・クソ野郎。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

分からない事

ヴァン Side

僕は、ある夢を見ていた。

僕が、ヴィヴィオと初めて出会った日のこと。

ヴィヴィオ「初めまして！私、相良ヴィヴィオ！よろしくね！」

転校初日、一番最初に声をかけてくれたのはヴィヴィオだった。

コロナ「は／／／初めまして／／／コロナ・ティミルです／／／」

ヴァン「ああ。宜しく。コロナ。ヴィヴィオ」

二人が話しかけてくれて、そのあとは流れでみんなと仲良くなった。

それから、ヴィヴィオ達に色々な所に連れてもらった。

例えば遊園地。

ヴィヴィオ「ほらヴァン君！あのジェットコースターに乗ろう！！！」

ヴァン「ジェットコースター？」

リオ「あれ？ヴァンってジェットコースター知らないの！？」

コロナ「凄い怖い乗り物なんだよ！！！」

そう言いつつも僕達はジェットコースターに乗った。

全員「ぎゃあああああ！！！！」

ヴァン「楽しいイイ！！！！」

ジェットコースターが楽しいことを教えてくれた。

それから、プールにも行った。

ヴィヴィオ達の水着に鼻血を何度も出しそうになったのは秘密だ。

でも、みんな綺麗で、可愛くて・・・ヴィヴィオは特に輝いていた。

子供の様に元気で、天使の様に綺麗な笑顔。

そんなヴィヴィオの事は、大切な人だ。

でも・・・

「私、ずっと／＼／＼／＼ずっと好きでした！！！」

その言葉を、僕は受け入れたんだ。

だから、僕はヴィヴィオの想いを否定した。

その結果、ヴィヴィオの中には雨が降り始めた。

僕は・・・僕は・・・

ヴァン「……ん、んん」

眼を開けると、広がる星達。

多くの正座が見える……

あれ……もう、夜なのか？

????「お、やっと気づいたな？」

あれ？男の人の声……つて!？

俺はガバっと起きた。

ヴァン「師匠!？」

師匠が僕の隣にいた。

つかここどこ!？

相良「ここは俺の隠れ家。プラネタリウムだよ」

ヴァン「プラネタリウム……これが……」

真っ暗な部屋に広がる星達。

その一つ一つが、今も輝いている。

それは、とても神秘的で、見惚れてしまうほどに美しかった。

相良「お前が雨の中で何故か叫んだ上に倒れたからビックリしたぞ？」

それじゃ、師匠がここまで連れてきた……

ヴァン「すみません。師匠に迷惑をかけてしまって」

相良「いいさ。それよりも、何があった？」

突然、師匠の目が鋭くなった。

ヴァン「……僕は、ヴィヴィオを……傷つけたんです」

相良「……」

そして僕は、僕がヴィヴィオの事を何も分かっていなかったことを

話した。

ヴァン「僕はヴィヴィオの気持ち何か全く考えず、ただ僕がコロナと付き合っていると言う理由でヴィヴィオの気持ちを否定したんです」

話し終わると、師匠は聞いてきた。

相良「それで、ヴァンはどうしたい？」

ヴァン「僕は……分りません」

そう。僕はどうすればいいのか分からない。

なんで……わからないんだ……

僕は、何を想って、どうしてんだ……

僕にとっての答え……真実が……分からない

ヴァン「師匠。真実って……何なんですか？」

不意にそう思った。

すると師匠は笑を作りながら答えた。

相良「無いよ。そんなもん」

ヴァン「え……………」

相良「そんなものは無い。真っ白だ」

ヴァン「そんなわけないでしょう!!」

怒鳴った声が、プラネタリウムに広がった。

相良「……………」

ヴァン「……すみません。つい、怒鳴ってしまっ……」

すると師匠は笑いながら言った。

相良「いいよな、お前は。暗ったいことがなくて、真っ直ぐくるだろう？ 変に勘ぐったり、駆け引きしないから……ああ、できないのかな？」

ヴァン「皮肉ですか？」

相良「違う。褒めてるんだよ」

ヴァン「え……」

褒めているように聞こえないんだけど……

相良「凄くいいセンスだと思う。ただ生きているだけなのに、ラッキーだな」

ヴァン「皮肉はいいですよ……」

相良「違うよ。羨ましいよ。すごくいいセンスだ。それは、お前のいいところでもあるんだから」

ヴァン「僕だって人並みに悩み事くらいあります」

すると、師匠はこんなことを言ってきた。

相良「分かっている。自信を持って。何も迷う必要なんてない」

ヴァン「え？」

相良「大丈夫。間違うことなんて恐れるな。永劫普遍の不滅の真理なんて無いんだ。俺はそう思うよ……あ、いや、怖がってもいいか。うん。怖がることは悪くないか……」

師匠は自問自答をして、言った。

相良「……真実が分からないのなら、それがお前の真実だ。それを、絶対に忘れるな」

ヴァン「僕の……真実」

その時、僕の中で何かが吹っ切れた気がした。

でも・・・まだ分からない事が一つあった。

プラネタリウムに響きわたる、雨が当たる音・・・

ヴァン「師匠」

相良「？」

ヴァン「師匠はいつか前に聞きましたね？」「雨は、いつか止むのかな？」「って」

相良「そうだな。確かに俺はそう聞いた」

ヴァン「・・・どういう意味ですか？」

相良「そのままの意味だ。雨は降り始めたら止むのかって聞いたんだ」

その通りだ。

ただ気になったのは、僕の中でその言葉が重たいものに感じるからだ。

ヴァン「・・・今のヴィヴィオには、雨が降っていると・・・僕は
思います」

相良「（・・・だからヴィヴィオは家に帰ってこなかったのか・・・）
・・・それで、だからお前はどう思うんだ？」

ヴァン「僕は師匠にそれを聞きたいんです。どうすればいいのか・・・
分からないから」

相良「・・・」

ヴァン「ニーナに言われたんです。女心が分かってない。どうして
理解しようと思わないのって。僕は男だから、異性の子の想いを理
解するなんて無理だと思います。それでも、僕は正直な答えを出し
たと・・・思っています」

相良「違うだろ・・・」

突如、師匠がそうやってきた。

そして師匠は立ち上がり、星を見ながら言った。

相良「今のお前は、何も分かってない。ヴィヴィオの想いを考えて
あげてないからだ」

ヴァン「考えました。そして俺は「僕よりもその人のほうが良いよ」
って・・・」

相良「だから、それが間違いなんだよ！！」

師匠がとうとう怒った。

ヴァン「間違い……」

何が間違っているのか分からない……

相良「ヴィヴィオはお前が好きだって言ったんだよ!!!他にも好きな人がいたのに、お前を選んだんだよ!!!ヴィヴィオの中には、きっと大きな葛藤があったはずだ!!!でも……それでもヴィヴィオはお前を選んだ!!!お前が好きだって言ったんだろ!!!?なのに、お前は葛藤して決めたヴィヴィオの答えを否定した。それが間違いなんだよ!!!」

ヴァン「あ……」

そうか……そうだ。

僕……最低じゃないか……

ヴィヴィオが俺を、何度何度も考えた結果に気づいたなんて……
何で分かったのに気づいてあげられなかったんだ!?

ヴァン「……僕、最低でした」

相良「ああ。今のお前は最低だ。でも、まだやり直せる」

ヴァン「どうすれば、良いですか?」

ただ、謝るだけじゃ僕が納得できない。

でも・・・それでも何を擦ればいいのかわからない。

相良「・・・今、ヴィヴィオの中には“雨が降っている”」

ヴァン「え・・・」

不思議なことを言ってきた。

相良「雨が降ったら、お前はどつする？」

ヴァン「それは　　！！」

今、全てが分かった。

僕がどうすればいいのか。ヴィヴィオに何を上げてあげればいいのか。

ヴァン「師匠・・・僕！」

相良「おっと。言つな。その“言葉”ことばは、ヴィヴィオに出すんだ」

ヴァン「・・・はい！」

相良「ヴィヴィオの居場所は、お前自身で見つけるんだ」

ヴァン「はい！」

相良「俺が出来るのはここまでだ。後は全て、お前が全てを解決させるんだ！」

ヴァン「はい！ありがとうございます……ございました！」

そう言って僕は、プラネタリウムを後にした。

相良 Side

相良「まったく、面倒かけやがって」

フェイト「翔らしいね」

相良「フェイト!?!」

物陰からフェイトが現れた。

フェイト「ごめん。全部聞いてた」

相良「執務官様が盗み聞きなんて・・・」

フェイト「ごめんごめん。でも・・・本当に翔は変わらないね」

相良「変わらない・・・か。でも、ヴァンは変わるよ。立派な人に」

そう。俺には、俺の“言葉”がある。

ヴァンの言葉は・・・ヴィヴィオを幸せに出来るかな？

フェイト「翔は、わかってたんでしょ？ヴァンも、ヴィヴィオも・・・
・答えを出すって」

相良「・・・さあ〜って、何の事やら〜」

そう言っただけは走って逃げた。

フェイト「え、あ、ちょっと待ってよお〜!」

そう言っただけで俺とフェイトはしばらく、子供のように走り回っていた。

相良「さて、後はヴィヴィオだけだ。ヴィヴィオのことは・・・
なのは。お前に任せませ」

想いと覚悟（前書き）

少年は言葉ことばを出した。

後は、少女だけ。

少女の答えが、少年も、少女自身も変えることになるかもしれない。

それでも・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty} 始まります。

想いと覚悟

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「・・・」

私は、家の中に引きこもっていた。

真っ暗な部屋で、雨の落としか耳に入らない部屋。

その部屋の中で私は、彼の事を思い出していた。

いつも彼は笑顔でいてくれた。

いつも彼は優しくしてくれた。

いつも彼は手を差し伸べてくれた。

いつも・・・いつも・・・

私を、幸せにしてくれた。

そんな彼を、知らないうちに好きになっていて……それで決意して告白した。

でも……結果は……

ヴィヴィオ「私は……フラれた」

フラれて……私は逃げてきた。

ヴィヴィオ「何で……どうして……」

フラれることは覚悟してた。

ヴァン君は、そういう人だから……

なのに、どうして迷ってるんだろう……

なんで……なんで……

その時、ノックの音が聞こえた。

なのは「ヴィヴィオ？入っていい？」

あ……なのはママ……

なのはママに、相談しようかな……

ヴィヴィオ「うん。入って」

なのは「それじゃ失礼します」

そう言ってなのはママは私の部屋に入ってきた。

なのは「何があったの？」

ヴィヴィオ「……」

私は、全てを話した。

ヴァン君に振られて、逃げてきたことも・・・何もかも。

お兄ちゃんのこと好きだけど、ヴァン君の事も好きだって言った。

それを、なのはママはただ黙って聞いてくれた。

なのは「そうだったんだ・・・」

ヴィヴィオ「うん・・・」

話終わると、なのはママが話し始めた。

なのは「ヴァン君にとっては、あまり嬉しくなかったんだと思うよ？」

ヴィヴィオ「それは、私が好きじゃないから・・・」

なのは「うん。違うよ。ヴァン君には、見えたんじゃないかなってこと」

ヴィヴィオ「見えた？」

なのは「うん。ヴィヴィオの中には、翔くんが好きって気持ちもあるってこと。そしてそれを、諦めきれないってことを」

ヴィヴィオ「あ・・・」

図星だったような気がした。

私は確かにお兄ちゃんの事が大好きで・・・大切な人。

それはヴァン君も同じだけど、決め手となったのはきつと一緒にいた時間。

お兄ちゃんといつも一緒にいたから、その記憶が深いから・・・どこか諦めきれなかったんだと思う。

だから・・・それが見破られて、恥ずかしくて逃げたのかな？

・・・じぶん。違う。

私は・・・

ヴィヴィオ「私は、卑怯者なんだね」

なのは「・・・」

ヴィヴィオ「私は、お兄ちゃんがいる。いつでも、お兄ちゃんを頼れるって、お兄ちゃんに甘えん坊で・・・逃げてきたんだね」

そう。もしヴァン君に振られても、お兄ちゃんがいる。

つまり、お兄ちゃんは保険の様に扱っていたんだ。

それがヴァン君に見破られて、自分の卑怯さが嫌になって、逃げてきたんだ。

私、ヴァン君の隣にいる権利なんてないよね。

ヴィヴィオ「私・・・ヴァン君の隣にいちゃ・・・だめなんだね」

それが、答えだった。

私は・・・ヴァン君も、お兄ちゃんも・・・好きになっちゃダメだよ。

こんなに卑怯で、最低な私にとなんか・・・

なのは「良いんだよ。卑怯で」

ヴィヴィオ「え・・・」

なのはママはいつもの明るい笑顔で、そう言ってくれた。

ヴィヴィオ「どうして・・・」

なのは「恋は、どんな手段を使ってもその人を自分の者になりたいと思うものだよ。私だって翔くんを手に入れるためだったら、何だって出来た。友達のフェイトちゃんだって、はやてちゃんとだって、誰だって戦える。それだけの想いと覚悟があるから」

ヴィヴィオ「想いと・・・覚悟」

その言葉が、私の胸に強く刺さった。

なのは「うん。私は、全てを敵に回してでも、翔くんを愛するって誓った。それが、私の全て。ヴィヴィオは、大切な人・・・いる？」

ヴィヴィオ「うん。お兄ちゃんも、なのはママも、皆大切」

なのは「にははは。ありがとう」

なのは「でも、それならもう・・・答えは出てるんじゃないのかな？」

ヴィヴィオ「え・・・あ」

今、ここの中に固まっていた何かがとれた気がした。

なのは「それじゃ、なのはさんの説教はこれでおしまい。後は、ヴィヴィオ自身で頑張って」

ヴィヴィオ「・・・うん！ありがとう。なのはママ！」

そう言って、私は家を飛び出していった。

大雨の中、傘も刺さずに。

なのは Side

なのは「ふう……」

何か、知らない内にヴィヴィオも大人になってたな・

嬉しいような、寂しいような……複雑な気持ちは、母親の感覚な
のかな・

アリサ「何しんみりとしてんのよ？」

すずか「お疲れさま。なのはちゃん」

なのは「アリサちゃん……すずかちゃん……」

今思えば、翔くんをかけて、二人とは何度も戦ったなあ……

学力勝負・スポーツ・喧嘩・口喧嘩・クイズ・大食い……

本当にくだらない物ばかりで、今思えばそれはただの楽しかった記憶。

私の……大切な記憶。

何だかんだで、何度も戦ったのに、今　こうして一緒に翔くんと結婚した。

そのことが嬉しくて……皆と一緒に幸せを手に入れられたから……

アリサ「それにしても、なのはも言うわね」

すずか「全てを敵に回してもかぁ……私もそうだけどね」

なのは「私は、今でも翔くんを独占したい気持ちはあるもん！」

アリサ「それはあたしだってあるわよ!!」

すずか「私だって負けないもん!!」

そうやって私と二人はいつもみたいに、仲良く喧嘩をしていました。

ヴィヴィオ Side

私は雨の中、傘も刺さずに走り続けた。

それはヴァン君に言いたいことがあるから。

伝えたい・・本当の思いがあるから。

でも・・・どこにいるか分からない。

さっき家に行ったけど返事が無かった。

今日は休みをもらっているはずだからいると思ったんだけど・・・

でも、諦める訳にはいかない。

伝えたいから・・・この、本当の言葉（想い）を・・・

「駄目・・・」

ヴィヴィオ「え？」

突然、私の耳に知らない少女の声が聞こえた。

辺りを見渡しても、何も無い。

でも・・・今の声って・・・

「お兄ちゃんに、手を出さないで……」

「ヴィヴィオ！」

そして突如、私の前から緑色の光が迫ってきた。

その色はまるで……ヴァン君と同じ、魔力光の様に……

「ヴィヴィオくっ！」

私はギリギリをそれをかわした。

「ヴィヴィオ……一体……何!？」

「聖王……あなたはお兄ちゃんの邪魔になるから……」

ヴィヴィオ「え……」

私の名前ではなく、私の墓の名前を言った。

それはきつと、その時代の関係者を意味する。

ヴィヴィオ「お兄ちゃんって誰！？私は、ただの人だよ！」

「違う……あなたは、お兄ちゃんを……お兄ちゃんを……」

そして上空から、巨大な光が私目掛けて音速をも超える速度で迫ってきた。

ヴィヴィオ「（駄目……よけきれない……）」

その時、私は悟った。

私はここで負けて死ぬ。

故に願うは、私が生き残る唯一の可能性。

ヴァン「 ニルヴァーナ。セツトアップ
」

現実では起こり得るはずのない、救世主の登場を。

ヴァン「僕の大切な人に 手を出すんじゃないねえ」

私が見たのは

悠然と拳を構える

ヴァン君の姿だった。

涙雨の答え 謎の光（前書き）

突如襲いかかってくる光と少女の声。

何も分からないけど、戦うしかない。

だって、僕の後ろには 守るべき女がいるから。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

涙雨の答え 謎の光

ヴァン Side

ヴィヴィオ「ヴァン……君……」

ヴァン「ここは僕に任せろ」

ヴァン「なんだ……誰なんだ!？」

僕はヴィヴィオに迫る攻撃を拳で破壊して、謎の声を正体をしろつとした。

「お兄ちゃん……」

ヴァン「!？」

お兄ちゃんって……僕に妹なんていないぞ？

……いや、両親がいないし、両親の記憶が無いから、本当にいな

いかなんて分からない。

ヴァン「それじゃ・・・君は・・・」

「覚えていなくても・・・いつかは思い出す。世界はそういうものだから・・・」

ヴァン「??どどういう意味だ!?!」

「意味も、いつか分かるよ。お兄ちゃん」

声が段々と小さくなっていった。

ヴァン「！待て！！まだ話は終わってない！！」

「また、いつでも会えるよ。だって……私たちは……」

更に声が小さくなった。

そして最後の一言で、何も聞こえなくなった。

「私^{せかい}達は

繋がってるんだから」

ヴァン「・・・クソ！何も感じない・・・」

ただ、雨しか降っていない。

そして、後ろにヴィヴィオがいる。

ヴァン「大丈夫か？ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「うん・・・ありがとう。ヴァン君」

ヴァン「・・・」

それから少しの沈黙が僕たちを襲った。

何から話せば良いのか分からない。

・・・いや、考えちゃ駄目だな!!

ヴァン・ヴィヴィオ「（ヴァン君・ヴィヴィオ）ごめんなさい！
！」

はもった!?

ヴァン・ヴィヴィオ「・・・くすっ。あははははは!!!!」

気づいたら僕とヴィヴィオは笑いあっていた。

ヴァン「でも、本当にごめん。僕、ヴィヴィオの事・・・分かってあげられなかった」

ヴィヴィオ「うん。私も、ヴァン君のこと・・・分かっていなかった」

そうか・・・お互いにわからなかったから、あんなに空回りしたんだ・・・

ヴァン「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「……」

僕は……僕の言葉^{こたえ}を伝える。

ヴァン「……やっぱり、それでも僕は　　ヴィヴィオとは付き合えない。だから、告白は断らせてもらおうよ」

ヴィヴィオ「うん。ありがとう」

ヴィヴィオの顔は、雨のせいか、または涙のせいなのか、水が大量にたれていた。

僕は、今も後悔している。

でも……間違っているとは思ってはない。

だって　　これが僕の言葉^{こたえ}だから。

ヴィヴィオ「あゝあ。フラれちゃった」

笑顔で、残念そうに言った。

ヴァン「ごめん」

ヴィヴィオ「謝らなくて良いよ。コロナの事・・・大事なんでしょ？」

ヴァン「・・・ああ」

そう。気づくと僕の人生の中心にいてくれたから・・・

でも・・・

ヴァン「ヴィヴィオも、師匠も、コロナと同じくらい、僕の人生の中心にいてくれるんだぜ？」

ヴィヴィオ「・・・ありがとう」

そう。これは本当のこと。

あの時、ヴィヴィオとコロナが声をかけてくれなかったら、僕は独りぼっちだったかもしれない。

ヴィヴィオ「…私の告白を断ったんだから、コロナの事、ちゃんと守ってあげてね」

ヴァン「…勿論」

ヴィヴィオ「うん。なら…私も安心かな」

そう言ってヴィヴィオは僕に背を向けて、歩いていった。

ヴィヴィオ「コロナは、良い人を見つけて羨ましいな…」

ヴァン「ありがとう。後、はいこれ」

そう言って俺は白い傘をヴィヴィオに渡した。

ヴィヴィオ「え…」

ヴァン「雨が降ってるなら、傘をささないと、駄目だろう？」

これが　もう一つの言葉。

僕なりの、言葉だ。

そう言って、ヴィヴィオはいなくなった。

ニーナ「へえ。あなた、よく考えたじゃない」

ヴァン「え？何が？」

ニーナ「今までのあなただったら『ヴィヴィオにだって、いい人見つかるよ』って言うと思ったけど、言わなかった」

ヴァン「・・・ヴィヴィオは、僕を一番って言うてくれたんだ。その事実を否定したくない。ただそれだけだよ。それよりも、帰ろう。服がびしょ濡れで・・・はつくしょん！！」

ニーナ「あなた・・・風邪ひいたんじゃないの？」

風使いが風邪をひくとは、何と酷い現実だオマジギヤケ・・・

ヴァン「そんじゃ、さっさと帰らねば・・・」

そう言って僕はブルブル震えながら、くしゃみを何度もしながら家に帰った。

相良 Side

俺達は少し離れた所から二人を見ていた。

相良「終わったみたいだな」

フェイト「うん。よかったね」

なのは「でも、まさか翔くんが気づいてたなんてね」

相良「え？何で？」

すると二人はため息をつきながら言った。

なのは「翔くんって恐ろしいほど鈍感だったから・・・」

フェイト「ほんと、どんなアプローチをかけても反応しないし、あの意味最強の敵だったような気がしたよ・・・」

最強の敵とは失礼な。

なのは「それよりも翔くん。さっきの光って・・・」

そう。ヴィヴィオを襲ってきた謎の光・・・

相良「分からない。ただ、ヴィヴィオを殺す気満々だったことは分かった」

フェイト「いきなり逃げたみたいだけど・・・また、ヴィヴィオが狙われるかも・・・」

相良「大丈夫。既に手は打ってある。はやてとアーチェとルチアとレヴィを向かわせた。レヴィは勉強があるけど、一応うちのメンバーでもあるからな。あの4人に任せればどうにかなるだろう」

なのは「それならいいんだけど・・・」

それでも、なのはの表情が良くなることは無かった。

それは・・・俺も、フェイトもだったのは、言うまでもない。

ルチア Side

ルチア「いた！闇の呪縛！！」
ブラック・ホール

逃走する光を、闇の光が覆うように拘束した。

はやて「あれは・・・何や？」

アーチエ「我也初めて見る光だな・・・」

レヴィ「僕も分からないなあ」

と言うことは・・・新たな闇・・・でも、何だろう？

何かが・・・間違っている気がする。

闇と決めるのは、まだ早いつてことかな？

・・・でも、とにかく、

ルチア「私達の娘を襲ったんだから、責任をとってもらおうよ」

そう言っつて私はワルキューレを刀にした。

そして刀身に漆黒の魔力を集め、放った。

ルチア「げつがてんしよつ月牙天衝！！！！」

漆黒の魔力を纏った斬撃が、謎の光に向かって放たれ、爆発を起こした。

「邪魔しないで」

その声と同時に、私の真上から魔力を纏った光が音速をも超える速度で落ちてきた。

ルチア「！ワルキューレ！モード・ソニック！」

ワルキューレ「OK!」

私はB Jを薄りフォルム（「THE IDOLM@STER」の「菊池真」の着ている真っ黒な衣装）にして、機動性を上げて、攻撃をかわした。

ルチア「ふう・・・危なかったあ」

はやて「ルチアちゃん・・・」

ルチア「ん？何？」

はやて「な・・・なんやその可愛い服は！・・・!」

・・・空気読もうよ。今話すことじゃないって。

「お兄ちゃんは、絶対に私のもとに戻ってくるから・・・」

ルチア「！」

その光は、私の呪縛から逃れて逃げようとした。

はやて・アーチエ「ディアボリック・エミッション！！！！！！」

二人の広域魔法が光を物凄い速度で追いかけるように広がった。

私とレヴィは上空に高く上がって、巻き込まれないようにした。

そして攻撃が終わって、当たりを見回した。

レヴィ「逃げられちゃった」

アーチエ「くっ！あの塵芥め……我を無視して逃げるとは……」

はやて「やられてもつたな・・・」

ルチア「・・・」

まさか・・・二人の魔法を受けてもなお逃げれたなんて・・・

ルチア「・・・私たちが相手する敵は・・・私達の想像よりも、遙か上の存在なのかもね」

そう
かったんだ。

私たちはまだ、
相手がどんな存在なのか

知らない

とある谷島家のちよいエロさん達（前書き）

ヴァン達の悩みも終わり、話は彼に変わる。

彼の家族？は中々荒々しい人たちがいる。

そんな彼に安らぐ休みは訪れるのか！？

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
t y } 始まります。

とある谷島家のちよいヒロさん達

谷島 Side

アリア「芳樹。お腹すいた」

谷島「はいはい。作りますよお」

めんどい・・・が、俺は台所へ移動した。

俺とアリアは同居している。

・・・いや、正確にはアリアが勝手に住み着いてるのだ。

こいつ、勝手に住み着いているくせに料理もまともにできない。

俺が飯作ったりして世話をしているような感じだ。

・・・にしても、今日は何作ろうかな・・・いや、あいつが来てくれれば・・・

ピンポン！！

お！来てくれたか！？

谷島「今でる!!」

俺は玄関に向かい、ドアを開けた。

そこにいたのは巫女服をきた黒い長髪の、大和撫子を絵に書いた様な容姿の女性。

こいつは俺の幼馴染の「星伽ほしあ白雪しろゆき」だ。

白雪「芳ちゃん。実はお夕飯作りにきたんだけど・・・良いかな・・・」

谷島「お、マジで!?!?ありがとう!?!?!」

白雪「ふや!?!」

俺はあまりの嬉しさについて力強く白雪を抱きしめた。

白雪「あ////あう////」

白雪は終始顔を幸せそうな顔になりながら真つ赤でいた。

アリア「こらあんた達なにやってんのよ!?!」

谷島「え?・・・あ」

白雪「////////」

白雪はその場にペタンと座り込み、両手で頬を抑え、幸せそうにぐねぐねしていた。

・・・壊れたな。

アリア「芳樹・・・あんたねえ・・・」

あれ・・・アリアの可愛らしいツインテールが逆立って鬼みたいに
なってる・・・

そしてアリアは銃を持って俺に向けた。

アリア「あなたに、デッサン風穴空けてやるんだから！！！！」

そう言ってアリアは俺の顔面めがけて銃を発砲した。

白雪「させない！！！」

気づくと、白雪が俺の前に立っており、刀を持ってアリアの銃弾全てを切り裂いた。

白雪「いつも芳ちゃんと一緒にいるアリアちゃんには・・・お仕置きしないかね」

あ・・・白雪の表情から光が消えた。

顔は笑っているけど、目の方は真っ黒で幽霊みたくである・・・

アリア「……」

アリアも怖いのか、苦笑いしながら後ろにじりじり下がっていた。

白雪「全く……アリアちゃんは羨ましい……私なんて……私なんて……」

谷島「し、白雪さん？その刀をしまつてくれませんか？」

白雪「本当に……アリアちゃんは羨ましい……」

刀を右手にもつたまま歩く白雪の姿が殺人鬼である。

しかも俺の声が届いていないときた。

このままではアリアが切り刻まれるな……

『それはそれで良いんじゃない？服がボロボロ……』とか考えているフアンの皆さん。甘い。

実に甘い。ガムシロップに砂糖を混ぜた位にあまい！！

白雪はヤンデレモードになると、服とか関係なく斬る。

これは止めねば……だが、止めるには……仕方あるまい。

谷島「白雪」

白雪「ん？・・・んん／／／／」

俺は白雪の顔を俺の方に向け、唇を唇でふさいだ。

やべ・・・血圧が・・・

白雪 Side

谷島「いけない娘だ。綺麗な君が刀なんて持つちゃ」

白雪「う／／／／うん／／／／」

私は気づいたら芳ちゃんにキスをされて、抱き寄せられてる。

そして芳ちゃんは私の刀を取り上げて私にお姫様抱っこをした。

白雪「え／／／／えええ！？／／／／／」

私は凄く混乱してもはや何を言えればいいのかも分からなくなっていた。

谷島「悪いことをした娘にはお仕置きだね」

そう言っつて私を持ったまま風呂場に連れていった。

お仕置きっつて何されるの／／／かな／／／

痛いことかな／／／気持ちいいことかな／／／それとも／／／
／／／／

そんなことを考えているうちに、私は寝室に連れて行かれていきま
した。

アリア「な・・・何が起こったの?」

確か・・・私が白雪に殺されそうになって、それで芳樹が白雪をお姫様抱っこして寝室に・・・って!?

アリア「あんたたち何するつもりなのよおおお!?!?!?!?」

「や../../../../芳ちゃん../../../../そんなところ../../../../駄目だよ../../../../はあん../../../../」

「白雪はここが弱いみたいだね。だったら狙うかな・・・」

「やあ../../../../意地悪../../../../やん../../../../」

アリア「な・・・な・・・」

私は声だけで顔を真っ赤にしていた。

寝室から聞こえる声・・・

アリア「あんた達なにやってんのよおおおおおお!!?!?!?!?!?!?!?!?」

私は怒号と共に二人を何とか制圧して、この小説をR - 18になる危機を阻止した。

谷島 Side

谷島「ああ・・・えと・・・すまん」

白雪「う、ううん／＼私を止める為だったんだから、私こそごめん／＼／＼」

谷島「あ、ああ・・・」

俺と白雪はその後、お互いに通常時に戻り、（誰だ？俺が元の変態に戻ったって言った奴は！？）二人で台所に立ち、料理を作り始めた。

お互いに作業を分担して作っているのだが、中々この空気が重くて・
・
・

何か話題をだしたいのだが、先ほどヒステリアモードになった俺が
酷い事をしてしまい、それが原因で話題を持ち出せない。

それからしばらく、無言のまま料理を作り続けた。

白雪「・・・ふふ」

すると突然、白雪が笑いだした。

谷島「どうした？何か面白いことしたか？」

白雪「芳ちゃん、いつのまにか料理上手になったね」

谷島「母かよお前は。俺だって人並みに料理くらいするさ」

白雪「そうなんだけどね。いつも私が作りに来てたのに、いつの間
にか一緒に作れるようになってまるで／＼／＼／＼ふ、夫婦みたいだ
なって思っ／＼／＼／＼」

谷島「あはは。俺とお前じゃ釣り合わねえよ」

そう。俺が地球の学校にいたとき、俺の成績は学年の中であまりよくなかった。

だけど白雪は才色兼備。

俺にとっては高嶺の花で、追いかけることだって無理だって思って生きてきた。

ただの幼馴染。それだけで十分だ。

白雪「ううん。芳ちゃんは・・・カッコイイし、優しいから／＼」

谷島「な／＼／＼」

やべ・・・ヒステリそうだ・・・

谷島「こゝこの話は終わりだ！さっさと飯作ってくうぜ！」

白雪「うん...」

こうして俺と白雪は共に料理を作った。

アリア Side

アリア「・・・」

何よ。二人で仲良くしちゃって・・・

あたしだって・・・料理が出来れば、芳樹の隣にだって・・・

・・・!?何で私・・・芳樹の事を考えたんだろう・・・

どうでもいい・・・筈なのに・・・

どうしてこんなに・・・苦しくなるんだろう・・・

この気持ちは・・・一体何？

この・・・胸を締め付ける感覚は・・・一体何なの？

早く、この感覚から解放されたい・・・

何かが・・・爆発してしまいそうだから・・・

谷島 Side

谷島「よっしゃ！そんなじゃ食べれるか！」

白雪「うん」

アリア「・・・」

？アリアの様子が変だな・・・

谷島「アリア？どうかしたか？」

アリア「・・・え！？あ、いや・・・何でもないわ。早く食べまし
よっ！」

谷島「あ、ああ」

そして俺達は食事を終え、片付けをした。

・・・そして最後の最後で事件が起こった。

白雪「アリアは地面で寝て！私が芳ちゃんと一緒に寝るの！！！！」

アリア「ふざけないで！！地面で寝たら体が痛いでしょ！！！」

白雪「知らないよ！！アリアの事なんて、これっぽっちも考える必要なんて無いもん！私は芳ちゃんの抱き枕になるんだもん！」

谷島「待て。誰が誰を抱き枕にするって？」

白雪「だ、だから／＼私が芳ちゃんの抱き枕になるんだよ／＼／＼／」

谷島「・・・俺をどうしたいんだ？」

率直な質問だ。

もしも・・・もしもだ!!!

もしも白雪を抱き枕としたとして、俺は平然と居られるだろうか？

答えは否だ。

そしてこの小説が最終回になってしまい、「Bad end」というやつだ。

谷島「白雪。よく考えろ!!!この小説はR-15だ!お前を抱き枕にしたらこの小説が終わりだ」

白雪「構わないもん!私と芳ちゃんの「Happy end」で終わりだもん!!!」

谷島「いやいや!ラスボス無視して最終回って最近の深夜アニメかよ!!!」

アリア「あんたらなんて会話してんのよ・・・」

アリアの呆れたツッコミを無視し、俺達はしばらく抱き枕がいるか
いないかで争った。

白雪「ねえ・・・駄目なの・・・」

そして止めは上目遣い + 涙目と言う殺人コンボで俺がノックダウンとなった。

それから後、何があったのかは読者の想像にお任せする。

初めてで分からない気持ち（前書き）

谷島の面倒で慌ただしい一日が終わった。

そして一日が経過し、話は別の人が変わる。

彼が描くのは音の物語。

彼はそれを、自らの力で作り上げ、完成する音とは？

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty } 始まります。

初めてで分からない気持ち

音使 Side

俺とナギサは訓練室で戦っている。

エミリアとルミアはそれを離れた位置で見学していた。

音使「はあああ!!！」

ナギサ「はあああ!!！」

俺は両手から赤い玄のような糸をだし、左右からナギサに襲いかかった。

ナギサはそれを刀を持ったまま全身をコマのように回転させ、切り裂いた。

音使「まだまだ!!！」

ナギサ「!?!」

俺は地面を右手で殴ると、ナギサの足元から大量の糸がナギサに襲

いかかった。

ナギサはそれを一度左から右に切り裂き、後ろに下がった。

音使「武玄^{むげん}!!」

音符の形をした鎌を持ち、俺はナギサの背後から力を込めて切り裂いた。

ナギサ「はあああ!!」

だが、ナギサは剣を地面に突き刺し、後ろに下がる力を無くし、両手を器用に使って剣の上に逆立ちしてかわした。

音使「流石ナギサ!」

ナギサ「お前もな!」

そして俺達はお互いに後ろに下がり、お互いに鎌と剣を構えたまま動きを止める。

そして 全ての音が消えた、その瞬間

ナギサ「インフィニティ・スラッシャー！！！！！！」

音使「スピリトーズ・スラッシャー！！！！！！」

二人の一閃はお互いの頬をかすめる程度で終わった。

音使「引き分けか・・・」

ナギサ「そのようだな」

するとエミリアとルミアがこちらにきた。

エミリア「今回復させるからねえ」

ルミア「また派手に戦いましたね」

そう言われた俺とナギサは訓練室を見渡した。

すると何とということでしょう（ビフォーアフター風）何もなかった訓練所がボロボロの廃墟のようになっていないでしょうか・

音使「しまった・・・翔に怒られるな・・・」

ナギサ「私も一緒に謝る。それで問題無いだろう」

音使「いやそういう問題じゃないから」

その後、俺とナギサは総裁室に行き、謝っておきました。

翔は優しく、「ああ。戦ってりゃそうなるさ。別に構わないよ」と言ってくれた。

・・・全ての世界に、そういう奴がトップに立っていてくれれば・
・世界は平和なのかもしれないし、戦争なんてなかったのかもしれない

ない・・・

なのに・・・世界は非情だと日々感じる。

ナギサ「?どうかしたか?」

音使「・・・あ、いや別に何でもない。飯食いに行くか」

ナギサ「あ、いや。私は少し用がある。だから先に行っててくれ」

エミリア「え?用事なんてあったっけ?」

ナギサ「ああ。だからすまないが先に言って欲しい」

そう言ってナギサは走って去っていった。

音使「(何だろう・・・ナギサが気になって仕方ないな・・・何ていうか、嘘をついてるって気がする。何故だか分からないけど・・・)」

エミリア「何か最近のナギサ、単独行動が増えたよね」

ルミア「確かに、最近変ですよね」

そう。理由がよく分からないけど、最近ナギサの様子がおかしい。

何かあったのだろうか・・・

音使「・・・俺、少し見てくる」

そう言っつて俺はナギサの向かっていった先に走っつていった。

エミリア「・・・奏多は、決めてるんだね」

ルミア「？エミリア？」

エミリア「ううん。何でもないよ。早く食べへに行」

ナギサ Side

ナギサ「はぁ……」

私は廊下を歩きながら、ため息をついていた。

そしてロビーに着くと、近くにある椅子に座り、考える。

なぜだかわからないが、先程から音使の事が頭から離れず、胸がキシキシ痛む。

嫌ではないが、やはり苦しい。

この気持ちを、口でどう表現すれば良いのかは分からない。

ただ、この気持ちを言ったらスッキリするだろう。そう感じた。

だから、何となく言ってみた。

ナギサ「私は・・・好きなんだ・・・」

好き？誰をだ？

・・・その答えも、出ていた。

ナギサ「音使のことが・・・きっと、好きなんだ」

その言葉を言った瞬間、私の心臓の鼓動は早く、激しいものになり、吐息も荒くなる。

今まで以上に、苦しくなった感じだ。

私は・・・どうしたんだ？

何か、病気で患っているのか・・・

誰かに相談するべきか・

????? 「あら？あんたは確か・・・ナギサちゃん？」

そうやって私に声をかけてきたのは金髪の髪に白衣を着た女性。

確か・・・相良の嫁の・・・

ナギサ「シヤマル・・・だったな」

シヤマル「ええ。隣良かったら？」

ナギサ「ああ」

そう言うとシヤマルは私の隣の席に座った。

シヤマル「何か、悩み事かしら？」

ナギサ「!？」

まるで、全てを見抜かれたような感じだった。

シャマル「ふふっ。凶星のようね」

ナギサ「まだ何も言っていないんだが・・・」

シャマル「ううん。顔に出てるわよ。さしずめ恋の悩みって所かしら?」

ナギサ「!?!」

こ・・・この人はエスパーか?それとも、人の心を読めるのか?

シャマル「悩んでるんだったら、私で良ければ相談に乗るわよ?」

ナギサ「・・・そ、それじゃ・・・」

そうして私は、今までの感覚を話した。

何故かドキドキして、その気持ちが好きって感覚だと気づいた。

そして、気づいたがどうしたらいいのかわからない。

この苦しい気持ちを、どうすればいいのかわからない。

全てを話すとシャマルは優しい笑で答えた。

シャマル「音使君に、全部話すべきだと思うわ。ナギサちゃんの気持ちを」

ナギサ「・・・」

そう。それは最も簡単で、すぐに出来るであろうこと。

シャマル「気持ちを伝えることって、簡単そうに見えて実は難しいけれど、それができればナギサちゃんも開放されるわ」

ナギサ「！それは本当か!？」

シャマル「ええ。私も、同じ時期があったもの。好きな男の子がいて、その子のために一生懸命アプローチをかけたたり、色んなことをした。そうして、最後には想いを伝えて、聞いて、今私は幸せよ」

ナギサ「・・・」

そうか・・・伝えれば良いのか。

だが、そう考えるだけで体が不安に満ちる。

シャマル「良いのよ。不安で」

ナギサ「え……」

また、私の考えが覗かれた様にして、シャマルは話し出した。

シャマル「伝えることに不安を抱くのは当然よ。不安になればなるほど、それだけ好きって気持ちが大きいから……だから、ナギサちゃんは自信も、不安も持って伝えれば良いのよ」

ナギサ「シャマル……」

シャマルの話を聞くと、何故だから伝えたいと言う欲が出てきた。

今からでも……遅くないはずだ。

音使「ナギサ……!」

ナギサ「！音使・・・」

私のもとに、音使が走ってきた。

確か・・・エミリア達と食事をとっていたのでは・・・

シャマル「私は邪魔みたいね。それじゃ頑張つて」

そう言い残してシャマルは去っていった。

音使「はあ、はあ、はあ、・・・ナギサ」

ナギサ「ど、どうしたんだ？エミリア達と一緒にじゃなかったのか？」

音使「・・・話が、あるんだ」

呼吸を整え、音使はそう言った。

ナギサ「話・・・」

私に・・・なんの話なんだ・・・

私も、伝えたいことがあるのに・・・

音使「ここじゃ人がいるから・・・ちよつと場所を変えよう」

そう言つて私の手をつかんで引つ張つた。

そして場所が変わり、総裁室の中に来た。

音使「ここなら人がいない」

ナギサ「相良がいるんじゃないのか？」

音使「皆、今日は早上がりなんだつて。だから、俺とお前だけだ」

ナギサ「そ・・・そうか」

二人きりという現実が、私を熱くした。

そして、今までよりも大きな緊張とドキドキとした感覚が襲ってきた。

そして・・・大きな恐怖。

今まで体感してきた恐怖の中で、一番だと思った。

音使「今、呼んだのは・・・さ、お前に、伝えたいことがあって・・・な」

頬をポリポリと掻きながらそう言った。

ナギサ「あ、ああ・・・」

そう言い返すことしかできなかった。

音使「・・・俺・・・お前の事ばかり考えて、気づいたんだ」

ナギサ「・・・」

音使「俺・・・俺さ!!」

そして音使は伝えた。

音使「俺・・・ナギサの事が好きだ!!」

ナギサ「な／／／／／」

私・・・が・・・好き・・・

そんな・・・私・・・私は・・・

音使「ナギサ・・・お前の答えを聞きたい。結婚を前提に付き合っ
て欲しい」

ナギサ「／／／／／」

答えは決まってるのに・・・ドキドキする・・・

不安に思ってもいい。だから・・・伝えよう。

ナギサ「私も・・・音つk・・・奏多の事が、好きだ」

そこから先、二人が何をしたかは皆さんの想像に任せよう。

守りたくて・・・傷つけたくなくて・・・（前書き）

二人の音は出来上がり、話は変わる。

次は、一人の少女の努力の物語。

少女の想いは叶い、彼の隣に立って歩くことができるのか・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

守りたくて・・・傷つけたくなくて・・・

相良「よっし！仕事終わり！！」

ギンガ「お疲れ様です。翔さん」

そう言っつてギンガがお茶を持ってきてくれた。

相良「ありがとう・・・」
「フウ。総裁になるとほんと大変だなあ」

ギンガ「そんなこと言っつたら持ちませんよ？」

相良「そうだな・・・」

そう言っつて俺はお茶を一気に飲み干し、席から立ち上がった。

相良「それじゃ俺はそろそろ帰るよ」

ギンガ「え？良いんですか？こんな時間に・・・」

今の時間は午後13時。

いつもならもつと遅いのだが、今日はいつもより少なめだったので早く終わった。

相良「これからやることが別にあるんだよ。だから先に帰るよ」

ギンガ「はい。分かりました」

相良「それじゃお先！」

ギンガ・ルチア「お疲れ様でした！」

そう言っ
て俺は帰った。

ギンガ「翔さん、こんな早く帰って何するんだろっ？」

ルチア「確か今日は……なるほど……」

ギンガ「え？ルチアは何があるかわかるの？」

ルチア「うん。今日は、彼女との約束の日だから……」

場所が変わって家（カリム家）

相良「ただいまあ〜」

メガーヌ「あら翔君。お帰りなさい」

リニス「お帰りなさい。翔さん」

アリシア「お兄ちゃん！お帰り！！」

家にはメガーヌとアリシアとリニスと・・・もう一人。

イクス「お兄様。お帰りなさい！」

車椅子に座っているイクスがいた。

相良「イクス。今日の調子はどうだ？」

イクス「いつもと変わりありません。それよりも今日は、お願いします」

相良「分かってる。それじゃ行くか？」

イクス「はい！」

そう言っただけ俺はイクスの車椅子を引いて、外へ出た。

向かった先は近くの室内プール。

俺とイクスはここでリハビリをする。

今日はそう約束されているのだ。

水なら抵抗とか色んな面でリハビリに向いている。　作者もリハビリの時にはプールに行っていました(どうしても良い

作者もリハビリ

イクスは既に服の下に水着を来ているので、脱ぐだけ。

相良「イクス。先に行って待っていてくれ。着替えてくるから」

イクス「はい」

そう言っただけイクスは先にプールに向かった。

相良「さて・・・と、俺は着替えるか」

そう言っただけ俺はカバンの中に入れてある海水パンツに着替えた。

その時、ジロジロと俺を見るキモイ男どもがいたので、そいつら全員は星屑にしてやったのは余談である。

イクス Side

イクス「一・二・三・四・・・」

私は一人、車椅子から降りて、座りながら準備体操を始めていた。

準備体操をきちんとしなければちゃんと覚えることはできませんから。

イクス「二十二・二十三・二十四・・・」

お兄様、遅いですね・・・
現在相良翔は男性達を星屑にしている最中です。

イクス「五十三・五十四・・・」

このままですと私、体がふにゃふにゃに・・・いえ、なりませんね。

男性1「おや君？一人かな？」

男性2「君可愛いね」

男性3「俺達と一緒に遊ばない？」

チャライと言う言葉がお似合いの20～30代ほどの男性3人が私に話しかけてきた。

イクス「私は一緒に来ている人がいるので、どうぞお引き取りください」

男性1「いいじゃん“そんな奴”俺達が“そんな奴”よりも楽しいことしてやるからな」

イクス「（ピクツ！）今・・・そんな奴って言いましたか？」

あれ？なんだろう・・・こんなにも体が熱くなるなんて・・・

男性2「だって君みたいな可愛い子を待たせるような“奴”よりも俺たちの方がってことだよ？」

奴・・・奴・・・

男性3「ま、そんなことよりも、一緒に遊ぼう・・・ぜ・・・

「

私の全身から白銀の魔力光が溢れ出てきた。

男性3「こ……こいつ、魔導士か!？」

男性1「や、やべえよ……」

私は無意識に、それを発現させていて気づいていなかった。

イクス「(？何故3人とも怖がっているのでしょうか?)」

男性2「恐るこたあねえ!こんなガキに負けるかよ!！」

イクス「！」

そう言っつて男性の一人が右手に茶色の魔力を溜めて殴りかかってきた。

イクス「きゃ！！！」

その時　　私は願った。

イクス「（助けて　　お兄様！！！！）」

????「せいけん星拳・断空拳！！！！」

男性2「ぐはっ!？」

一人の男性は50mあるプールの端・・・つまり50m以上も水面に叩きつけながら殴り飛ばされていた。

イクス「あ・・・」

私の目の前に見えるのは、がっしりとした綺麗な背中の男性。

そう・・・私が待ち望んでいた男性。

相良「今お前らが口説いてる女な、俺の大事な妹なんだよ。可愛いのはわかるが、君たちのようなガキには渡せねえ」

イクス「か／＼／＼可愛い／＼／＼」

その言葉が私を恐怖から喜びに変更させた。

男性1「だ、誰だてめえ!!!」

そう言って一人の男性は電流が流れる警棒を取り出した。

あれはかなりの電流が・・・

素肌のお兄様が掠っただけでもツライはず・・・

イクス「お兄様、ここは逃げてくださる。大切な妹置いて逃げるかアホ」え・・・でも・・・」

するとお兄様は私を笑顔で見つめて言った。

相良「あんなカスに負けるほど、俺は弱くない。ちゃんとイクス。君を守るから」

イクス「お兄様・・・」

男性3「カッコつけやがって！！それを死亡フラグって言うんだよ！！！！」

そう言ってもう一人の男性は雷を纏った銃をお兄様に向けた。

まずい！！お兄様はデバイスを持っていない！！

プールにいた客全員が逃げ去った。

このままじゃ・・・お兄様が・・・

男性1「おらああああ！！！！！！」

男性の一人が警棒で突きをしてきた。

相良「オーバー・スター・ロード新たな星の誕生」アクア・リヤン「彗星の加護」

お兄様の右手にプールの水が大量に集まり、水が徐々にその純度を増してゆき、その水がベルカ式の魔方陣の形をもした壁を作り上げた。

そしてお兄様の足元にはミッド式の魔方陣が展開されていた。

一体・・・この技は・・・

そして相手の攻撃はその壁によって防がれた。

男性1「何！？電気を・・・通さねえだと！？」

相良「この水はミッド式の力で純水にした。純粹は雷を通さない。そしてベルカ式の魔力で防御の壁を作り上げた・・・複合魔術」

男性1「そんな魔法・・・聞いたことがねえ!!」

相良「そりゃそうだよ。俺専用の魔法だからな」

そして水の壁がどんどん警棒を包み込み、男性の腕を飲み込んできた。

相良「気を付けたほうがいい。俺には「凍結」の魔力資質がある。

お前の全身に水が達した瞬間にお前がどうなるかは・・・言わずともわかるな?」

男性1「ぎゃ・・・ぎゃああああ!!!!!!」

男性が暴れ出した。

男性3「てめえ!!!!!!」

パアアアン!!!

雷を纏った銃弾がお兄様に向かって放たれた。

私はもう、無我夢中だった。

気づくと二人を殺す。そのことだけを考えていた。

相良「イクス!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

イクス「んむ!?!」

光が消えた……

お兄様の、そのキスで……

まるでそれこそ魔法のようだった。

ただ、凄く大好きな人に……キスをされて、抱きしめられているから……私は……

相良「もう、誰も殺さなくていいんだよ・・・俺達は、笑顔で生きていられればいい」

イクス「はい・・・」

私は大量に涙を流していた。

相良「君の名前は「相良イクス」もう、ベルカ時代に生きた「イクス・ヴァリア」じゃない。俺の大切な妹だ」

イクス「はい・・・」

どんな力があっても・・・私は、イクスは・・・相良イクスである
と・・・

相良「君はもう・・・俺にとって世界一大切な家族の一人だ。もう・・・命を奪わなくていい。誰も傷つけなくていい。誰も・・・不幸にさせなくていいんだ。俺が、イクスがこの世界に生まれて良かったって思えるくらい、幸せにしてやるから・・・」

イクス「はい・・・お兄様!!!!!!」

そう言って、私はお兄様を全力で抱きしめた。

それから数分後、私達はプールを後にし、外に出た。

相良「おいおい・・・」

イクス「」

私は気づくと、立って歩く事ができていて、私は今、お兄様の腕に抱きついて歩いている。

相良「ま、今日はご褒美ってことで」

イクス「は〜い」

立って見える世界は、とても良いもので、何よりもお兄様に、こんなに密着できる。

そして　　もう一つ、私の願い。

イクス「お兄様」

相良「ん？何だ？」

イクス「私を、陸軍管理本部に入隊させてください」

これが・・・もう一つの願い。

相良「・・・本気か？命懸けになることだって・・・あるんだぞ？」

イクス「大丈夫です。見ていたでしょう？私のあの力」

マリアージュとはまた別の能力。

きつとあれは、お兄様に助けてもらった時にお兄様が私のリンカー

コアに魔力を流し込んだためにお兄様と似たような力を手にしたからだと思っています。」

だとするなら、この力を誰かの役に立ちたい。

相良「別に、あの力があるつと、まだ若いのに命をかける戦いなんで……」

イクス「お兄様。ありがとうございます。ですが、決めたんです。私は……決断したんです」

相良「……なら、今週中、ずっと俺がお前の訓練を手伝う。デバイスも用意する。俺が戦いの基礎を全力で叩き込む！！悪いが、俺は本気で教えるから、逃げるなら今のうちだ」

イクス「私は、逃げないし、諦めません！！」

お兄様と張り合うように睨み合った。

そして負けたのは兄さんだった。

相良「負けたよイクス。それじゃ、明日から訓練開始だ」

イクス「はい！！よろしくお願いします！！」

相良「おし、そんじゃ帰るぞ！」

イクス「はい！！」

そう言って私はまたお兄様の腕に抱きついて、家に帰っていった。

番外編 なのは「夏だ!!」「フェイト「海だ!!」「はやて「水着だ!!」「ルキ

今回は夏なので、特別番外編。

皆さんのご要望もありましたので、取り敢えず作ってみます。

作者初の試みな訳で、どんな作品になるかちょっと不安ですが、取り組ませていただきます。

物語はイクスがあるけるようになってしばらくした時の話し。

俺達陸宙管理本部は休日を利用して海に行くことになる。

そこで繰り広げられる物語をどうぞご覧ください。

番外編 なのは「夏だ!!」「フェイト「海だ!!」はやて「水着だ!!」ルキ

相良・谷島・ヴァン・音使・芳乃「・・・はあ」

「男は辛いよ」と言う言葉が似合うこの状況。

つかすみませんね。男のため息が始まりで。

えっと、取り敢えず相良翔が説明させていただきます。

俺達陸宙管理本部は久しぶりに休みになり、俺たちには一日暇ができた。

せつかなのでどこかに出かけないか?という意見が出たので、海なんてどうだろう?

こんな感じになり、今である。

クラナガンの有名な海に俺達は今いる。

そして何故俺たちがため息をつくかというと、到着して、女子と男子の更衣室に別れ、男子である俺たちが先にできて準備体操をしていたときに起こった。

女子総勢40人「キヤー!!!」

相良・谷島・ヴァン・音使・芳乃「……………」

物凄い女性の軍勢が俺たちに襲いかかってきたのだ。

何だよこれ…………マジで勘弁してほしい。

きっと読者は「くそ!うらやましすぎる!」!」と思う人もいるのではないだろうか?

ですが現実の中々辛い。

何故なら俺達はリア充だから(うげえ…………)

全く、なのは達が見たらそくりミッター解除で殺されるな。俺たちと女性たち。

そして今、俺達はここである作戦にでた。

相良「（ヴァン！準備は良いな？）」

テレパシー
念話で話をした。

ヴァン「（はい！こっちは準備万端です！）」

音使「（ならばは一瞬の隙を見つけるだけだ）」

谷島「（それは俺が見つける）」

芳乃「後は俺が転送魔法で・・・」

そして その時はきた。

谷島「今だ！！」

相良・ヴァン「混合魔法！！」ライトエンドフエザー・トルネード
「光と風の龍巻！！」

緑色の魔力光と白銀の魔力光が混ざり合い、一つの龍巻を作り出し

た。

そして女性たちは後ろにどンドン下がっていった。

音使「よし！」「楽譜の道」クリエイト・ロード「！！」

音使が作った楽譜の黒い線の様な道に乗り、走り抜けた。

芳乃「復元ダ・カーボする世界！」

芳乃の魔法で俺達は遠くに避難した。

相良・谷島・ヴァン・音使「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、……逃げ切れた……」

死ぬところだったな。

なのは「大丈夫？」

相良「お！？なのは!？」

いきなり後ろからなのは声が・・・

相良・谷島・ヴァン・音使「おおおお〜！！！」

そして俺たちが見たのは絶景である。

水着姿の美女達。

なのは、フェイト、はやて、アリア、すずか、シグナム、シャマル、スバル、ティアナ、アリシアリス、カリム、チンク、ノーヴェ、デイエチ、デイド、シュテル、ルチア、ギンガ、アイン、エミリア、ルミア、ナギサ、サクラ、アリア、白雪・・・そして

ヴィヴィオ「海だ！！！」

リオ「やった！！！」

コロナ「準備運動してからだよ〜！！！」

リオナ「かわいい子いるかなあ〜」

アインハルト「何で私まで／＼／」

イクス「うう／＼／＼人がいっぱいいます／＼／／」

妹や弟子や友達やら、子供メンバーも中々可愛かったりする。

・・・・これなかった皆、かわいそうに・・・何かお土産買ってこ・・・

コロナ「ね、ねえヴァン君／／／わ、私の水着／／／／／どうか
？／／／／」

コロナは青と白のしましまのビキニだった。

ヴァン「あ、うん／／／凄く可愛いよ／／／／／コロナ／／／／」

コロナ「えへへ／／／／／ありがとう／／／／」

ヴァン「そ、そうじゃ／／／／／一緒に泳ごうか／／／／」

コロナ「うん／／／／」

そう言って二人は手を繋いで海に向かっていった。

相良「仲が良いことで・・・」

仲良きことは素晴らしきかな・・・（美しきかなじゃなかったか？

サクラ「レイジ。私の水着どうかな／＼」

サクラの水着は白いビキニを着ていた。

芳乃「あ、ああ。似合ってるぜ」

芳乃は綺麗なサクラの姿にドキツとしたのか、眼を逸らしまくっている。

サクラ「もうっちゃんと褒めて欲しいんだよ！」

やはりと言った感じが、サクラは怒っている。

芳乃「いや、んなこと言われても・・・」

そう言いながら芳乃は眼をキョロキョロさせていた。

目のやり場に困ってるんだな。わかるぜ・・・

ナギサ「どうする？ビーチバレーで戦うか？スイカ割りでもいいぞ？」

音使「うん・・・水泳で戦わねえか？」

ナギサ「ふむ。良いだろう」

エミリア「二人とも、遊びに来てるのにどうして戦うことになってるのかなあ？」

ルミア「無駄よエミリア。あの二人はもう二人の世界に入っちゃってるから」

ナギサ「よし！行くぞ！！」

音使「ぜってえに負けねえ！！」

相良「凄い速度で泳いでるな・・・遊ぶって言つより戦ってる・・・」

ロード「楽しそうですからいいんじゃないでしょうか？」

相良「まあな」

でも・・・程々にな。

谷島「それじゃ始めえ」

アリア「行くわよ！」

白雪「負けないもん！」

アリアがビーチボールを打ち上げた。

白雪「はああああー！！！」

パシイイイイイ！！！！！！

強烈なサーブがアリアの顔面に向かって放たれた。

アリア「うりゃああー！！！」

アリアが渾身のパンチでそれを返した。

・・・ビーチバレーって叩くんじゃなかったっけ？

白雪「まだまだあー!!!!」

更に続く白雪のサーブ・・・スパイクか？

だが、少しぶれたのか、威力が落ちてアリアにもチャンスが訪れた。

アリア「!!ここよ!!!!」

そう言つてアリアはその小さな身長とは裏腹に驚異的なジャンプ力を見せつけるかのように高らかに空を飛び、お返しをした。

白雪「きゃー!!」

白雪は突然のことながらも、何とかレシーブで返すことに成功する。

その時、白雪のその豊富な胸が大きく揺れたのは言うまでもない。

・・・!?

谷島「(。。(。。(。グハッ!!」

谷島が鼻と口から血を出している。

・・・あいつ、変態のくせにエロイもの見ると弱いんだよ・・・
可哀想な体だ。

つか、鼻血出す前にヒステない所がかわいそうだ。

ロード「いえ、ヒステリアモードになるならないの問題ではないと思います」

相良「そうか？」

ロード「それよりもマスターは自分の心配をするべきかと思います」

相良「・・・まあな・・・」

なのは・フェイト・はやて・アリア・すずか・シグナム・シヤマル・スバル・ティアナ・アリシア・リニス・カリム・チンク・ノーヴェ・デイエチ・デイド・シュテル・ルチア・ギンガ・アイン「私達の水着で一番可愛いのは誰!？」

相良「ええ・・・」

嫁を沢山持つ男の最大の問題はまさにこれだな。

えっと、一応説明すると、なのははピンク色のビキニ。フェイトは黒のビキニ。はやては青みがかかった黒のビキニ。アリサが黄色のビキニ。すずかが青紫のビキニ。シグナムが赤紫のビキニ。シヤマルが緑色のビキニ。スバルが青のビキニ、ティアナがオレンジのビ

キニ。アリシアが白のビキニ。リニス茶色のビキニ。カリムが白のビキニ。チンクが青のスク水。ディエチが白のビキニ。ディードが茶色っぽいビキニ。シュテルが夕焼色のビキニ。ルチアが蒼いビキニ。ギンガは紫色のビキニ。アインが白と黒が混ざった色のビキニ。……と言った具合である。

同じ色は何名かいるが、デザインが違って、水玉だったりするものもいる。

つかさ、この中で1番を選べたって？無理無理。全員可愛いから。

でもこの人達プライド高いからな……

絶対にランク付けして欲しいって眼をしてるよ……

ま、ここは逃げるに限るけどな。

相良「ロード！……バインド！……何！？」

俺の考えが読まれていたのかしらないが、全身を皆さんのバインドで縛られております。

しかも皆のだからパワーが違うからそれがまた格別に痛い！！

更にいらぬおまけと言うのだろうか。この人達バインドを徐々に締め付けてくるんですよ。

俺、Mじゃないんでこういうのだからなんすよ……

相良「ロード。どうにかならないか？」

ロード「すみませんマスター。出来たとしてもあと1時間は欲しいです」

あ、それまでには俺は星になってるかな？

なのは「翔くん・・・覚悟は出来てるよね？」

あ・・・魔王化してる・・・

フェイト「逃げちゃダメだよ・・・妻を置いて・・・」

死神化してる・・・いやそもそもこの状況なら妻とか夫とか立場関係なく逃げるっしょ！？

さて・・・どうしたものか・・・

ヴィヴィオ達に頼んでも勝てないだろうしな・・・

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「お兄ちゃん、ママ達のせいで凄いことになってる・・・」

「

アインハルト「あれが一夫多妻制の現状ですか・・・」

リオナ「何か、大変勉強になります・・・」

リオ「勉強しちゃったよ・・・」

イクス「それにしても、お兄様も大変ですね・・・」

あゝあ。お兄ちゃんに泳ぎを教えてもらおうかなって思ったのになあゝ。

ヴィヴィオ「まあいいや。それじゃ行こう!!」

リオナ・リオ「おお!!」

イクス・アインハルト「お・・・おう・・・?」

そう言って私たちは海に向かって走っていった。

谷島 Side

は・・・鼻血が止まらねえ・・・

アリア「はぁぁー!」

白雪「てい!」

二人の激しいラリーが・・・本当に激しいラリーが続いていた。

そのたびに白雪の・・・その豊富な胸が揺れ、俺の体に攻撃してくる。

なんとけしからん胸だ・・・ヒステラずに俺は血を出されるだけ・・・

つか・・・お前ら、何時になったらお互いに1点を取るんだよ・・・

まだ0対0って・・・あんたら国際大会でなさいよ・・・

谷島「さて・・・どうしたものか・・・」

ヴァン Side

ヴァン「よし！いいぞ！頑張つて！」

コロナ「ぶ・ふあ・ふあ・ふあ・ふあ」

僕はコロナに泳ぎを教えていた。

コロナは泳ぐのが苦手らしいので、この日を使って僕が教えることになった。

僕がコロナの両手を持って引っ張っていた。

ヴァン「さて、そろそろ手を話して、自力で泳ぐか」

そう言つて僕はコロナの手を離した。

コロナ「いやー！」

そう言ってコロナは僕に抱きついてきた。

ヴァン「こ、コロナ／＼／＼」

抱きついて来るって訳で、その素肌がかくつつく訳で……

そしてコロナは上目遣い＋涙目で俺に言った。

コロナ「手……繋いで」

ヴァン「分かった」

即答だった。完敗だった。

僕……コロナに弱いな……。一生勝てない気がする。

ヴァン「そ、それじゃ手を繋いで続けよっか」

コロナ「うん！」

そう言って僕とコロナは手を繋いで泳ぎの練習を続けた。

芳乃 Side

芳乃「・・・はあ」

今俺はサクラと一緒に海の家つつう店に来てる。

さっきからサクラがかき氷をむしゃむしゃ食っている。

周りの目がいてえ・・・

サクラ「美味しい！！・・・バクバクバク・・・」

芳乃「はあ・・・」

海に来て泳がずに食うだけってこいつ・・・何の為の水着なんやら・・・

つか俺の金足りるかな・・・

音使 Side

音使「ふう・・・泳いだなあ」

ナギサ「ああ。そうだな」

俺とナギサは海を泳ぎ始め、軽く20mほど泳いだ所で浮いている。

音使「にしても、まさか俺とナギサが付き合えるとはな。ナギサと恋愛に興味0のイメージがあつたからな」

ナギサ「むっ・・・それは失礼な。私だって恋くらいはする。現に今、お前に惚れているからな」

いや、そんな呆れた表情で見られても困るんだが・・・

音使「ま、いいや。そんじゃエミリア達の様子でも見に行くか」

ナギサ「ああ」

そう言つて俺達は一緒に泳いで陸に向かつていった。

相良 Side

相良「全身にバインドの跡が・・・」

その後、色々と言葉を駆使してピンチを乗り越えることに成功した俺は、取り敢えず妹達が気になったので、ヴィヴィオ達のもとに向かった。

・・・おい

男性1「なあ君たち」

男性2「俺達と遊ばね？」

まただよ・・・全く、最近の男性は無駄な事をよくする。

谷島「おお〜い翔・・・って・・・」

俺のもとに逃げてきた谷島は俺と同じリアクションをとった。

谷島「おい・・・」

相良「まあそうなるよな」

つかロリコン多過ぎー！！

ロード「マスターは人の事言えません」

相良「・・・あいつらよりはマシだよ」

谷島「まあな」

さて・・・あいつら星屑にしてやるか。

谷島「俺も手伝うぜえ〜」

相良「好きにすればいいよ」

つーことで、俺と谷島の二人で変態ロリコン男性の集団を滅多打ちを死に行きましょう。

ロード「文章内に死と言う単語が何故かあるのは・・・いや、もういいです」

相良「さて・・・殺るか」

アインハルト Side

私達のもとに話しかけてきた2人組みの男性たち。

私たちに話しかけてきた。

イクス「お断りします。残念ですが、貴方がたのような男と遊ぶ気には一生かかってもありませんので」

大人らしい様な雰囲気を出しながらそう言ったイクスさん。

男性1「おお〜そういうところも可愛い〜」

男性2「別に良いじゃないか。俺達と一緒に楽しいことしようぜえ〜!」

リオナ「あんたたちさあ、私達が興味ないのがわかってどうしてそこまで馬鹿なことを何度もしてくるの？あんた達に興味はないし遊ぶ気はない。分かったらさっさと消えて」

男性1「んだとこのガキ！！！！」

男性2「俺たちを怒らせるとどうなるか思い知らせてやる！！」

そうやって二人は剣と槍をだした。

アインハルト「デバイス！？」

ヴィヴィオ「嘘！？」

リオナ「はあ・・・（中にへえ・・・結構強そうだね）何でせつかくの実力をこんな無駄な所で使うかな・・・（それで、私一人じゃ勝てないんだよね・・・ヴィヴィオ達を巻き込むのも嫌だ）」

男性1「行くぜ！！」

そうやって剣を持っている女性が切りかかってきた

リオナ「レイド！！」

私は刀で応戦した。

男性2「隙あり！！」

そうやって私に槍を刺そうとした。

リオナ「!？」

相良 Side

相良「ああダメダメ」

俺はリオナに攻撃してきた槍使いの槍を魔力を纏った右手で掴んだ。

谷島「そんなことじゃ女の子は落とせねえぜ？」

そして谷島は剣を魔力を纏った素手で掴んでいた。

ヴィヴィオ「お兄ちゃん!？」

アインハルト「谷島・・・さん」

相良「まったく、馬鹿もここまでくれば才能だな」

男性2「なんだと!？」

男性1「てめえ!その手を離せよ!！」

お・・・こいつら、俺と谷島の事知らないのか？

・・・はあ。本当に馬鹿らしい。

相良「お前ら、取り敢えず生きて家に返す気が俺にあるかと質問されたらNOだから」

谷島「さて・・・エタリヤ！」

谷島の右手にサバイバルナイフの「アルマゲドン」を出した。

相良「ロード。モード」拳「」

俺はロードを両手に装備した。

そしてその槍を力いっぱい握り締めた。

相良「そもそも男が武器を使うなんて最低過ぎるだろう？野郎の喧嘩なんざ拳こいつで十分だろう？」

そうやって俺は奴の槍を握りつぶした。

男性2「何!?!」

谷島「さて、こいつも壊すか」

そうやって谷島はサバイバルナイフで剣を真っ二つにして更にそれを叩き潰した。

男性1「んな!?!」

そして谷島もナイフを戻した。

そして・・・

相良・谷島「怒りの・・・パンチ!!!!!!!!!!」

男性1・2「ぐはあああ!!!!!!」

取り敢えず二人とも海の遠くまで殴り飛ばした。

相良「大体120mか・・・」

谷島「まあまあだな」

「
ヴィヴィオ・アインハルト・リオナ・リオ・イクス」
・・・・・・・・

5人は啞然としていた。

相良・谷島「ん?どうかしたか?」

ヴィヴィオ「えと・・・」

アインハルト「何と云えばいいのか・・・」

リオ「翔さん達・・・強いね」

リオナ「流石・・・と言えば流石だけど・・・」

イクス「素敵です!!」

相良・谷島「・・・あはは・・・」

俺と谷島はお互いの顔を見合って苦笑いをした。

相良「それよりも、リオナ大丈夫か？」

リオナ「はい。大丈夫です」

ヴァン「リオナ!皆!」

お、ヴァンとコロナだ。お前ら・・・手を繋いで走ってくるなよ・・・

リオナ「ヴァン・・・」

あれ?リオナの顔が少し赤っばいが・・・日焼けか?

谷島「翔。俺達は離れようぜ」

相良「え・・・ああ。そうだな」

何か子供達に任せておけそうだし。

相良「・・・あ、そうだ。さっきの奴らを星屑にするの忘れた。ちよっと殺ってくるよ」

谷島「まだ殺る気だったのか!？」

それから夕方になるまで、俺は先程の奴らで色んな遊びをしましたとさ。

相良「さて・・・？」

ヴィヴィオ・アインハルト・ヴァン・イクス「・・・」

人気の無くなつた夕方の砂浜。

そこに戦乱のベルカ時代を生きた者達の遺伝子を引く者たちがいる。

その光景は、俺が実際にその時代にきて、彼らの子供時代を見ているような感覚だった。

あの時の時代、4人が世界を平和にできたら、今はどうなっていたんだろう？

4人は今、ここでめぐり会えたのだろうか？

そう考えて4人の姿を見ると、今のこの時間を奇跡に感じる。

こうして4人に出会えた事が・・・とても嬉しいと思った。

はやて「なにしてるん？」

更には夜天の主。

ルチア「まだここにいるの？」

二つの技術によって生み出された人。

フェイト「早くしないと日が暮れるよ？」

プロジェクトFによって生まれた人。

スバル・ギンガ「翔さん！」

人造魔導士素体によって生まれた人。

様々な人と出会って、今がある。

そんな今は・・・大切にしたい。

相良「さて・・・おゝい!!! ヴィヴィオ!!! アインハルト!!!
! ヴァン!!!! イクス!!!!」

大声で4人を呼ぶと、4人は笑顔で俺に返事をした。

ヴィヴィオ・アインハルト・ヴァン・イクス「はい!!!!!!」

そして4人は走ってこちらに来た。

相良「さて、帰るか!」

全員「はい!!!!!! (おっ!!!!!!)」

こうして俺達は家に帰っていった。

二人の相棒 前編（前書き）

歩けるようになった少女は一つの決断をした。

それは、戦うこと。

自らのその力を使って生きると決断した。

それに答える義兄のとする行動とは……

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinite
ty } 始まります。

二人の相棒 前編

翌日。

相良「よし！そんなじゃ今日はアインハルトもついでに呼んでお話だ」

イクス「お・・・お話ですか・・・」

おい・・・何故そこで後退りする？

相良「いや、別に怖い意味じゃないぞ？」

イクス「そ、そうでしたか。すみません」

相良「何か、イクスにまでお話って単語が怖いイメージになった事がとてもショックなんだけど」

イクス「えと・・・何かすみません」

相良「いや・・・いいよ。謝らなくて・・・」

今まで行いが悪かったからな。うん・・・そうだよな・・・

イクス「？」

それから数分後、俺とイクスは陸宙管理本部の研究科を訪れた。

相良「お〜いジェイル！」

ジェイル「おお、翔ではないか。私の実験台になりに来たのかい？」

相良「いい加減諦めろ。今日も勿論別の内容だ」

ジェイル「ぐうう・・・まあ仕方ない。それで、内容とは？」

相良「今日はデバイス作りを手伝って欲しいんだ。イクスの」

ジェイル「ほう。冥王の子のね・・・とても面白そうだ」

相良「だろう？だからお前をお願いしにきたんだ。頼めるか？」

ジェイル「もちろんだとも。なら早速いくつか行いたいことがあるからイクスはウーノのもとへ行って欲しい」

イクス「は、はい」

そう言っただけでイクスは奥の部屋に移動した。

相良「それで？何をやる気だ？」

ジェイル「シンプルに身体測定と魔力値を測るのさ。身体能力と魔力値に合わないデバイスはすぐ壊れるからね」

相良「なるほど・・・」

俺はデバイスを作る事はないのでそういうことはよく分からない。
だからこうして何かあればジェイルに頼るわけだ。

ジェイル「あとは、君にも大切な話があるんだ」

突然ジェイルが真剣な表情になった。

相良「・・・ああ」

ジェイルは何かの資料の紙を俺に渡した。

相良「これは？」

ジェイル「この前ヴァンを襲った謎の光と、今まで発生した闇の事件の闇を分析した結果さ」

それを聞いた俺は資料をパラパラと読み始めた。

相良「・・・・・・・・・・・・・・・・!?!?」

ちょっと恐ろしい結果が記されていた。

『二つの現象の関連性は無し。なお、一つの現象は原因及び発生方法、不明』

相良「つまり・・・・・・・・これは」

ジェイル「ああ。私たちは二つの勢力を相手していると言うことになるね。更に一つの現象は謎だらけ」

相良「これが本当なら、ちょっと厄介だぞ・・・」

今まで一つの勢力かと思いきや二つの勢力が一気に来てるのかよ・・・

さて・・・・・・・・どうしたものかな・・・

ジェイル「詳しいことはこれから調べるとしても、これが分かった以上は・・・・・・・・」

相良「ああ。今まで以上に慎重にかかるべきだな。それに、徐々に“真価”の片鱗を見せてる人が何人も出てきてる。早いところ鍛えてやらないとな……」

ジェイル「……」

真価が何かは、いずれ話すことにしましょう。

ジェイル「それと、君から頼まれていた例のデバイスが完成したよ」

相良「！本当か！？」

ジェイル「ああ。最終チェックを行いたいのだが？」

相良「ああ。今日だとイクスとアインハルトのことがあるけど……」

ジェイル「いや、二人は今行なっていることが終わったらすぐに暇になるはずだよ」

相良「そうか。なら後で早速やるか」

ジェイル「分かった。認証などもその時に頼むよ」

相良「ああ」

それからしばらくして、イクスは検査を終え、出てきた。

イクス「ふう・・・」

相良「お疲れさま。イクス」

イクス「あ、はい」

溜息をついたのが恥ずかしかったが、イクスは焦りながら返事をした。

ちょっと面白くて笑ってしまった。

相良「ははは。別に恥ずかしがる事じゃないだろうっ?」

イクス「うう／＼／＼／＼／＼」

笑ったのはちょっと失礼だったかな?

ウーノ「翔」

認でき」

ウーノ「アインハルトの検査は既に終わっているので確認の必要はないですよ」

・・・そつすか（見たかったな・・・

相良「ま、資料が無くても見ただけで大体の3サイズくらいはわかるんだけどな」

イクス「え・・・」

相良「？」

何故かイクスがorsな状態になっている。

ロード「何故だか分からないのですか？」

相良「自慢ではないが分からん！」

ロード「ほんとに自慢になりませんね（女性が自分の身体情報を他人に知られるのは嫌ですよ）」

念話でそう言ってきた。

相良「ああ・・・なるほど」

勉強になるな・・・つか、デバイスに勉強されてる持ち主って・・・

イクス「お兄様!!」

相良「何だ？」

急にグワツと俺に迫ってきた。

イクス「こんな体の私ですけど、ちゃんとお嫁にしてください!」

相良「待て。何故俺がお前を嫁にせにやあかんのだ？」

あまりの衝撃発言に声が変わってきた……

イクス「ふえ?……っ//////////」

突然イクスが爆発した。

そして頭から煙を……って大丈夫か?

イクス「わわ、私////い、いきなり告白を////で、でもお兄様なら//////////」

イクスが何かと葛藤しているみたいだ。

ここは兄としてそつと置いておこう。

相良「さて、後はデバイス作成だけか……」

ジェイル「彼女は古代ベルカの時代者だったね」

相良「ああ……あ、そうか」

ない。

ロード「いえ別に、マスターにされているから赤くなるだけですよ？」

相良「・・・それって俺のせいじゃん」

ロード「）そう言ってることにどうして気づかないのでしょうか・・・」

俺はとりあえずお姫様抱っこされているイクスを持ったまま、ある場所に向かった。

相良「転送魔法陣。設定は八神はやて・ヴォルケンリッターの現在所在地」

『了解しました総裁。設定が完了いたしました。転送します』

システムボイスが流れ、俺達は転送された。

相良「はいそういうことで狸ん家到着!!」

はやて「誰が狸や!!」

パシイイとハリセンが俺の後頭部に叩かれた。

相良「いったああ・・・くそめ・・・ためぐはっ!?!」

更に追い打ちのハリセンスマッシュ。

イクスを抱いているのでよける事ができない。

はやて「あら?イクスちゃんやないか?何でお姫様抱っこされてるん?」

相良「こいつがフリーズしたから」

はやて「それ翔くんのせいやろう・・・」

相良「？」

取り敢えずイクスを下ろしてやった。

イクス「えっと、すみませんでしたお兄様」

相良「いいよ。別に気にしないから」

はやて「今度は私を抱っこして〜！」

そう言っただけに俺に向かってジャンプしてきた。

ジャンプの体制が横だったため俺はお姫様抱っこ形で受け止める
しかなかった。

はやて「んふふ〜」

相良「はぁ・・・」

全く、甘えん坊なお嫁だこと。

相良「まあいいや。行くぞ」

はやて「は〜い！」

イクス「あ、えと、はい」

という事で俺とイクスと狸は家に入っていた。

アインハルト「あ、翔さん。こんにちは」

相良「俺達よりも先に来てたとは」

はやて「まあええやん」

相良「良いからお前は降りろ」

はやて「(、(、(」

渋谷狸は降りてくれた。

相良「さて、そんじゃ早速話しをはじめようか」

はやて「せやな」

取り敢えずこの家にははやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、アギト、アインハルト、イクス、俺がいる。

シャマルが俺たちにお茶を出してくれて、話は始まった。

相良「えっと、今日皆を呼んだのは、イクスとアインハルトのデバイス作りを手伝って欲しいからなんだ」

はやて「それはかまへんけど、デザインとかはどないする？」

相良「ヴァン達の公式魔法専用のデバイスだったけど・・・二人はどんなのがいい？」

イクス「どんなのと言われましても・・・」

リイン「装着型とか武器型とか・・・」

アギト「何でも相談に乗るよー」

相良「これ。二人とも割って入ってくるな身長30cmにすんぞ」

リイン・アギト「ごめんなさい(です)」

二人は正座でしゅんとしていた。

相良「まあそれは良いとして、取り敢えず二人はどうしたい？」

アインハルト「私は、格闘戦技を中心に戦いたいので・・・あの、翔さんが教えてくれた拳で放つ砲撃も、出来ればできるようにした

いで・・・」

ヴィータ「翔。おめえあれ教えたのかよ？」

相良「まあな。拳を使う人って絶対にどこかで詰まるからな。バリエーションを増やすのを意識したらそれが一番いいと思ってさ」

シャマル「でも砲撃って魔力も結構使うし、体へのダメージも大きいわよ？」

相良「ま、一応束砲は教えないつもりだ。で話はもどるけど、取り敢えず格闘だな」

はやて「まあmほんなら体の動きをできるだけ阻害するような装備はあかんよ」

相良「そうだな。確かスバルとかギンガの使うナックルとかキャリバーとかかなり重たいからな」

はやて・リイン「あゝ・・・」

何故か二人は懐かしそうに思い出していた。

まあ、二人が頑張っても持てなかったからな・・・

アインハルト「ですから、出来ればヴィヴィオさんのデバイスのような補助・制御型にしてほしいです」

はやて「なるほどなあ。ほんならクリスの性能を参考^{ベース}に真正古代ベ^{エンシメント}ルカのシステムで組むのがええかな？」

アギト「補助制御型か・・・それなら機体事態はすぐにできそうだな」

リイン「ですね。あとは性能設定と調整です」

はやて「ほんならアインハルト」

アインハルト「はいっ」

はやて「霸王の愛機。まずは軽く取りかかってみるな。八神はやてとリイン&アギトがノリノリで組んであげよ」

リイン・アギト「おまかせ(だ・です)！」

アインハルト「ありがとうございます」

相良「ありがとう。俺からもお礼を言わせてもらっよ」

はやて「ええよ。翔くんの弟子の頼みやからな。それに、何だかなで私たちに土下座でそういうの頼んでくる翔くんのお願いやからな」

相良「ばー！こら狸！！言っんじゃない！！」

はやて「さっきから狸ばっか言うからやよー！」

相良「ぐ・・・ぐううう・・・」

はやて「はっはっはあ〜」

イクス「はやて姉さま・・・悪ですね・・・」

シグナム「いつものことだ。あの二人の遊びのようなものだ」

イクス「は・・・はあ」

その後、俺はイクスを家に置いてゆき、アインハルトを家に送っていった。

アインハルト「あの、ありがとうございました」

相良「ああいや、別に大したことをしたわけじゃないさ」

俺は頬をポリポリしながらそう言った。

相良「まったく、こう言うのはバレないようになんてこそ意味があるのにな・・・」

アインハルト「いえ。本当に感謝しています」

相良「・・・」

俺はその感謝が素直に嬉しかった。

そして思い出したことを話し出した。

相良「そう言えば、お前・・・出場するの？」

アインハルト「・・・インターミドル・・・ですね」

インターミドル。若い魔導士達が自らの持つ力を駆使して戦う世界大会。

これには毎年色々な魔導士が参加している。

過去にメガーヌさんも出場していた。

・・・これは余談だが、俺も出場したことがある。

結果はあえて言わないが、まあみんなならわかるだろう。

アインハルト「出来れば出場したいですが・・・事件の方もありませんし・・・」

そう。事件がいつ発生するか分からないからな。

相良「でもさ、お前の目標ってさ、そわじや事件解決無いだろう？」

アインハルト「！」

「列強の王達を全て倒しベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべき事です！」

相良「目的を見失うな。迷いは時に人を弱くする。・・・俺の父さんの教えだ。そして自分の道に他の人を巻き込むな。自分でやれ・・・母さんの教えだ」

アインハルト「翔・・・さん・・・」

心配そうな顔で見つめられている俺・・・

相良「俺は、アインハルトの人生を変えてまで事件を解決させたいとは思わない。お前は好きなことを好きなだけやればいい。でも、それが俺の為なんてやめる。俺は、自分の人生を捨ててまで助けて欲しいなんて思わない」

アインハルト「・・・はい。分かりました」

渋々そう言ったという感じだった。

アインハルト「ですが！私の訓練は続けてください！」

相良「・・・もちろん」

アインハルトが、これからもっと・・・その翼を強く羽ばたかせられるようにするために、俺はこれからも教えていくから・・・

相良「デバイスはすぐに出来るから明後日にまたはやての家に来てくれ」

アインハルト「はい」

そして俺はアインハルトを家まで送り、帰っていった。

二人の相棒 後編（前書き）

二日経ち、俺達は再び八神はやて達がいる。

新たな相棒との出会い。

それが彼女たちをどのような道に進むのか？

俺はこの日、二人に大切な事を話す。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty 始まります。

二人の相棒 後編

二日後。

相良「よし到着」

俺とイクス、アインハルトの3人は再び八神家に訪れた。

何と本当に二日でデバイスが完成したのだ。

相良「流石だな・・・狸」

はやて「ええ加減にせえよ?」

後ろで殺気立てながらそう言ったためk・・・もとい、はやて。

はやて「もとくない、もとくない。それはどうでもええとして、皆上がってな」

俺が建てた家だ・・・と言いたかったが、まあいいだろう。

イクス・アインハルト「お邪魔します」

相良「ただいまあ」

リン・アギト「お帰りなさい!（です!）」

はやて「つうわけで、約束の霸王の愛機が完成したんでお披露目&

お渡し会とゆーことで！」

リイン・アギト「わー！ー！！！！！」

何かの祭りか何かか？

相良「で？どんな具合に出来た？」

取り敢えず中に入って、ソファに座った俺は質問を始めた。

リイン「いやーなかなか楽しいデバイス作りだったですよー」

アギト「おまかせしてもらおう範囲も広がったしな！気に入ってもらえつといいけど・・・」

相良「大丈夫だろう？」

俺も何だかんだで手伝った。

相良「そうそう。リイン達に頼んでおいた外装んだけど、「雪原豹」の形になったか？」

アギト「ああ」

イクス「雪原豹？」

相良「ああ。クラウド陛下下って豹を飼ってたってあったんだよ」

アインハルト「はい。雪原豹はシュトウラ地方では優秀な兵士でしたから・・・クラウド達も大切にしていました」

アギト「そんな訳でシュトゥラの雪原豹をモチーフに作ってみたんだ!!」

イクス「え？動物型？でも・・豹ほどのサイズですとサイズの問題があるのでは？」

・・・俺は別の不安があるんだが・・・

アギト「そのへんはノープロブレムだ!!リインツ！」

リイン「はいです!!」

そう言っつてリインはアインハルトの前に箱を置いた。

相良「・・・アインハルト。開けるんだ」

アインハルト「はい」

ドキドキとしたようすでアインハルトはゆっくりとその箱を開けた。

そして中から

寝ている豹・・・？

相良・アインハルト・イクス「

猫？」

心の中でそう思ってしまった。

それもそのはず。

中にいたのは両手サイズ程度の小さく可愛い猫っぽい豹の子供が寝ていたからだ。

アギトって見た目のわりに可愛いを作るな・・・

アギト「えええっ！？何だ今の3人の心の声！？」

リン「もしかしてイメージと違っていましたか！？」

二人とも涙目で言っている。

イクス「いえいえいえ!!!!」

アインハルト「いえ。そんな」

相良「ま、まあビックリするほど戦わせていいのかって不安を感じたのは事実だけだな」

はやて「あはは・・・せやけどぬいぐるみの外装はちよつとしたおちやめやつたんやけど性能はちゃんと折り紙つきやでー?」

相良「そつでなきや困る」

手伝った意味が無くなるからな。

すると箱で寝ていたねk・・・もとい、豹の子供がもぞもぞと動きだした。

アインハルトもそれに気づいて見つめた。

????「にゃあ?」

アインハルト「あ・・・」

イクス「か・・・可愛い・・・」

二人の女の子は頬を赤くして可愛いと思っている。

はやて「触れたげて。アインハルト」

アインハルトは箱にいるその機こを割れ物を持つように優しく包み込むように持った。

アインハルト「（ああ。温かい。ホントに生きているみたいだ・・・）
（こんなかわいらしい子を私が頂いてよろしいんでしょうか？」

相良「何言ってるんだ。そいつはお前の為に生まれてきたんだ。お前以外に使える人はいない。お前だけの・・・最高の相棒だよ」

アインハルト「相棒・・・ですか」

相良「ああ。まあペットとしても考えて良いし、家族としてでも何でもいい」

はやて「・・・あ、そや。マスター認証がまだやったから・・・よかったら名前つけたげてな」

アインハルト「はい」

リイン「認証は庭でやるですよー」

そう言ってアインハルトは庭に移動した。

相良「さて、次はイクスだな」

イクス「は・・・はい」

イクスはソワソワした感じでどこか落ち着けずにいた。

相良「別に緊張しなくてもいいぞ？」

イクス「いえ・・・その、私の大切な相棒ができると考えると緊張と
言うよりも嬉しくて・・・」

嬉しい・・・か。

するとロードが嬉しそうに念話で話しかけてきた。

ロード「（イクス殿と共にできる相棒は幸せですね。この様な優し
き心の持ち主に出会えるなんて・・・）」

相良「（そうだな）」

実は陸宙管理本部の中で一時期ある事件が流行った。

それは、デバイスを捨てるということ。

役に立たなくなつたと言う理由で今まで一緒に戦ってきた大切な相

棒を身勝手に捨てると言う事件が過去に何件もあったんだ。

俺はそれが許せなくなって、逆に不安にも繋がった。

俺達が作って、渡したデバイスも、いつかは捨てられてしまうのではないかという不安。

だったら作らない方がいいのではないか？

そう考えた事があった。

でも、相棒がいることって凄く大切で、それは一期一会と言っても過言ではないほど、大切なことなんだと気づいて、俺は諦めずにデバイス制作の協力などをしている。

そして今、アインハルトとイクスの二人がデバイスを持っている。

幸せにしてくれると信じてる。

いや、二人なら絶対に幸せにするはずだ。

リン「はい。これが、イクスのデバイスですよ」

そう言っただけ私はアインハルトの時と変わらない小さな箱。

・・・何の動物何だろう？

昆虫だったらアギトにはお仕置きです。

そしてイクスはその箱をゆっくりと開けた。

そして中から 小さな翼を生やした黄金色の小さなコンドル
が羽をたたんでスヤスヤと寝ていた。

イクス「と……鳥さん？」

相良「ああ。鳥だ」

鳥を選んだのには、実は意味がある。

イクスには、命の意味を知って欲しいから、鳥を選んだんだ。

はやて「鳥さんを選んだ理由は、翔くんが説明してな」

相良「ああ。イクス・・・しっかりと聞いて欲しい」

イクス「はい」

そして俺は、デバイスと命の話 시작했다。

イクス Side

相良「・・・イクスは一度鳥籠の中に入った小鳥が一生外に出れない。出してはいけない。一生を鳥籠で生きないといけない理由って知ってるか？」

イクス「はい？」

突然分からない事を聞いてきた。

何が言いたいのか・・・まだ分からない。

イクス「・・・分かりません」

相良「・・・・・・・・」

お兄様は静かに言った。

相良「・・・死ぬからだよ」

イクス「!?!」

死・・・死ぬ・・・

その言葉だけが私の頭の中を駆け巡っていた。

悲しき現実、苦しき現実。

相良「檻から一度でも外に出たら、死んじゃうんだ。すぐに・・・消えてしまうんだ」

イクス「・・・・・・・・」

重い。

私にとっての鳥のイメージってただ成長して飛ぶ。そして世界で綺麗に羽ばたく。

相良「きつと、イクスにとっての鳥のイメージは「飛ぶ」だと思う

けど、小鳥の時から大人になるまでずっと鳥籠のなかで生きていけば飛ぶすがたを見ることができない。だから覚えることができず、ただ足で歩くことしかできない。一步外にできれば、飛べないから落ちる。そして何もできずにそのまま動かず、死を迎えてしまう」

イクス「そんな・・・」

つまり私は、この相棒を大切にできなければ死なせてしまうことになる。

イクス「私に・・・そんな大変な命を背負って生きて・・・いくんですね？」

相良「ああ。だからこそイクスにこの機こを渡したいんだ」

イクス「・・・」

私は寝ている小鳥を起こさない様に丁寧に両手で掴んだ。

そして寝ているその姿を考えながら見つめていた。

イクス「（軽くて・・・温かい。こんな小さな命を、私が背負って生きていくのですか・・・私なんかに、出来るでしょうか・・・）」

相良「嫌なら別にその子じゃなくてもいいよ」

イクス「え・・・」

相良「別に俺はこの子にしるなんて強制させるつもりはない。ただ

俺が勝手に用意した命だ。受け取るか捨てるかはイクス次第だ」

イクス「……」

初めて見た、お兄様の冷たい目。

命の重さを誰よりも分かっていて、誰よりも大切にしているお兄様だからこそ、私を試しているのだと思う。

私が命と真剣に向き合える様について用意したのだと思う。

でも……それでも、私はどこか不安がある。

こんな小さく、弱々しい命と共に生きていく覚悟……

……でも、もしこの子が私を必要としているなら？

私は、この子が必要なんだ。

だったら……答えは一つ。

イクス「私は、この子と生きていきます」

相良「……良いんだな？一度選択すれば、二度と引き返すことはできないぞ？」

イクス「分かってます。でも私は、この小さな翼と生きて行きたいんです」

そう言うとお兄様は、いつもの優しい笑顔に戻った。

相良「・・・そうか。なら、イクスにそいつをプレゼントする。大切にしてくれ」

イクス「はい！ありがとうございます。お兄様」

そして私はアインハルトさんと同じように庭に出ていった。

はやて Side

はやて「やっぱり、翔くんは優しいなあ」

相良「・・・俺は別に優しく何かないさ」

そう言って頬をポリポリかいていた。

はやて「照れへんでもええよ。翔くんが優しいのは、皆がしつとるからな」

相良「・・・俺が優しいなら、世界の人全てが優しいさ」

はやて「せやから謙遜せんでええって・・・」

ほんまに翔くんは呆れるくらい鈍いわ・・・

せやけど、私はそこが好きなんだよね。

だから・・・

はやて「えい！」

相良「うわ!？」

私は翔くんに抱きついた。

相良「・・・はは」

翔くんは苦笑いしながら私の頭を撫でてくれた。

はやて「んん・・・やっぱり翔くんの手で撫でられるのは嬉しいな・・・」

相良「あはは。こんなのでよければいくらだってやるよ・・・」

そう言ってわしゃわしゃと荒っぽく撫でてきた。

はやて「ちょ．．．やあ．．．」

気持ちええけど、激しすぎや！

相良「あはは。本当に綺麗な髪だな．．」

はやて「勿論。翔くん専用の髪やからな」

相良「何だよ専用って．．．」

苦笑いしながらそう言った翔くん。

それから優しく撫でてくれた。

ライン「ずるいですう！ラインにもやってください！！」

アギト「私もだ！！」

そう言って二人は翔くんの両脇に抱きついてきた。

相良「仕方ねえな。でも3人もできないから．．．」

そう言って翔くんはわたし達3人をギュッと抱きしめた。

はやて・ライン・アギト「あ／／／／／」

いきなりやったからドキッとしてもらった。

結婚しても翔くんにはドキドキさせられっぱなしやな。

相良「これからも・・・よろしくな。はやて、リイン、アギト」

はやて「もちろんや」

リイン「はいです」

アギト「翔も頼むぞ」

相良「ああ」

そう言っただけで私たちは翔くんと唇を交わした。

アインハルト Side

私は相棒の名前付けを終了し、中に戻ってきた。

だけど、翔さんははやてさん達にキスをしている所を見たため、物影に隠れている。

はやて「んちゅ・・・ん・・・はぁ」

リン「ん・・・んふ・・・」

アギト「くちゅ・・・ん・・・んふう」

アインハルト「／／／／／／／／」

心の中にあるこの光景を見ている罪悪感とこの光景への恥ずかしさ。

これが・・・大人の世界ですか。

そして・・・私の胸が苦しく締め付けられる感覚・・・

私は、どうすればいいのでしょうか？

この気持ちは・・・きつと

イクス「アインハルトさん」

アインハルト「!?!」

背後からイクスさんが声をかけてきて気づかなかった私は体が跳ね

るほど驚いてしまった。」

イクス「す、すみません。驚かせるつもりはなかったのですが・・・」

アインハルト「い、いえ。私が考え事をしてただけですから・・・」

そう。私が・・・迷っていたから・・・

イクス「・・・お兄様は、凄い人ですよね」

アインハルト「え・・・」

何故か幸せそうな表情で、翔さんを見つめながらそう言った。

イクス「私は、お兄様の事が心の底から好きです。それは、私を助けてくれたから。何度も体をはって助けてくれた、そんな優しい想いと魔法を使うお兄様が大好きだから・・・一緒に戦いたいのが私の最終目標なんです」

アインハルト「・・・」

私はイクスさんのその大人のような言葉と素直さと真剣さに衝撃を受けた。

私も、正直な想いを言えば良いのに・・・正直に生きていれば良いのにと、何度も後悔する。

今からでもやり直せると思う。

だから・・・私も正直になろう。

アインハルト「……わ、私も、翔さんの事……好きですよ」

イクス「……知ってますよ」

アインハルト「え!？」

な……何で知っているのですか!？」

イクス「アインハルトさん。分かりやすいです。気付かないのはお兄様だけだと思いますよ?」

そ……それでは、はやてさんやほかの人も……私の気持ちに気づいてた!？」

アインハルト「そ……そうだったんですか」

何か、ビックリしたような、恥ずかしいような……私、そんなにわかりやすい人なのですか?

イクス「ふふふ。私はそれで良いと思いますよ。どんな時代でも「好き」と言う気持ちに変化はありません。全てが変化していくこの世界で唯一変わらずに存在するもの。それが「恋」なのですから」

勉強になる話だった。

後輩に教えてもらっているのが恥ずかしい気もしますが、それでもこうやって教えてもらえたのはよかったと思う。

イクス「私はいつか、お兄様から唇を奪って貰いたいですね／／／」

アインハルト「っ／／／／／／／」

そ、そんな大胆な・・・

イクス「アインハルトさんはどうですか？お兄様とは、どこまでの関係になりたいですか？」

アインハルト「ど、どこまでのと言われましても／／／／／」

わ、私はそんな、大人の階段を登るなんてこと／／／あ、いえ、でも／／／翔さんになら／／／／

で、ですが翔さんは既に妻を持っている身であるからして、私が翔さんを奪うような形は／／／

イクス「ふふっ。冗談ですよ。気にしないでください」

アインハルト「え・・・」

も、もしかして・・・遊ばれてた？

イクス「別に、まだそこまで意識する必要は無いと思います。ただ私は、いつでもお兄様に身も心も渡す用意は出来ている・・・とだけ言わせてもらいます」

アインハルト「あ、いえ……」

イクス「4人が唇を重ねている姿を凝視させていただきました」

はやて・リイン・アギト「う／／／／／／／／」

相良「やっぱり見られたか……」

アインハルト「すみません。その、見るつもりはなかったのですが……」

相良「もしかして、キスして欲しかったのか？」

アインハルト「そ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

め、珍しく翔さんに遊ばれている。

相良「冗談。それよりも、二人はネーム付け終わったか？」

アインハルト・イクス「はい」

相良「そうか。なら明日からデバイスを使った戦闘方を叩きつける。
覚悟しろよ」

アインハルト・イクス「はい！！！！！」

そして私たちは家に各自帰宅していった。

相良「よし。そんじゃ、始めるか・・・」

ロード「了解です。相棒」

この時、私達は気付かなかった。

翔さんは一人、戦っているってことを・・・私たちは知らなかった。

そしてそれを手伝う者も・・・

ヴァン「了解です」

命をかけて・・・努力していると言っことに・・・誰も気付かなか
った。

二人の相棒 後編（後書き）

覚悟を持って使う相棒。

その責任も覚悟を持って、これから戦っていく。

命懸けの魔法 心の涙（前書き）

二人の男は願う。

強くなって、大切な人を守る。

少女達が願う。

無茶しないで。必ず、帰ってきて。

一致しないお互いの思いがあるなか、二人の男は戦いを始める。

守るためなら、命をかけて戦う覚悟があるから……

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty） 始まります。

命懸けの魔法 心の涙

相良「白刀技・銀翔抜刀！！！」

ヴァン「ストーム・スラッシャー風纏う翼の斬撃！！！」

巨大な風の翼やこばと白銀の翼やこばがぶつかり合う。

相良・ヴァン「うおらあああああ！！！！！！！」

まるで野郎同士の喧嘩のような迫力。

師匠と弟子の訓練のはずなのが、しているのは命懸けの戦い。

訓練と言うのは本気を出しすぎず、出来る範囲の実力で行うのが訓練だ。

だが、ヴァンと翔が行なっているのはただの殺し合い。

そして爆風の中から、二人が抜刀術の構えで現れた。

相良「トライアングル……」

氷・炎・白銀の光を刀に乗せ、爆発させた力を一気に放つ。

刹那の一撃同士がぶつかりあった。

相良・ヴァン「……」

翔とヴァンがお互いの背中を合わせて立っていた。

まるで、“何もなかった”かのように。

ヴァン「師匠。一体何をしたんですか？」

相良「内緒だ。それを教える訳にはいかなくてな」

ヴァン「そうですか……」

こうして二人が命をかけた戦いは終わった。

コロナ・ギンガ「馬鹿!!!!!!」

相良・ヴァン「ごぶっ!?!」

二人のアップパーが懐にクリーンヒットした。

相良「ぎ、ギンガ……お前のパンチは……殺人的なんだから……やめる……」

ヴァン「コロナ……魔力を拳に溜めるのは……駄目だよ……」

二人は跪いて二人を見上げていた。

ギンガ「何を言ってるんです!! なんですか!?! あの決闘は!?!」

相良「あ……いや、あれは……」

見られてた……と翔は焦っていた。

それはヴァンも同じくであり、ヴァンと翔は同時に冷や汗をかいて

いた。

コロナ「ヴァン君！！無茶したら駄目だって言ってるじゃない！！」

ヴァン「あ……いや、それは……」

言い訳がきかないのは二人は百も承知なわけで、何をどう言っても無意味な訳なので、二人はかつてない恐怖に襲われていた。

相良「……」

何かを考えているせいか、翔の表情は何故か苦痛そうに見える。

それにいち早く気づいたのはルチアだった。

ルチア「何で……何も言わないのよ」

相良「え……」

翔は悲しそうにそう言ったルチアの顔を心配そうに見つめていた。

ルチア「私は……ううん。私たちは、そんなに無力なの？」

相良「……」

何も言えないという表情をしている。

コロナ、ヴァン、ギンガの3人は何も言えないでいた。

邪魔をする訳にはいかない。

そう言う想いで二人の話を聴いていた。

ルチア「私は・・・翔の力になりたい。だって、私を助けてくれたのが翔だから。あの時、私が闇に囚われていたとき“全て”をかけて私を助けてくれた。だから、私も全身全霊で翔を守りたいと思うの・・・それなのに・・・翔は・・・」

相良「（あ・・・涙・・・）」

翔は見た。

ルチアの・・・目には見えない涙を・・・

それは一言で言えば「心の涙」。

ヴァンにも、コロナにも、ギンガにも見えない。

ただ、誰よりも大切に思っている相良^{かれ}翔だからこそ見ることができ
る、心の涙。

ルチア「私は・・・翔を守れないの？」

相良「・・・」

ルチア「私は・・・翔の隣にいられないの!？」

相良「!それは
!！」

違う・・・そう言いたかった。

なのに・・・何故、喉が詰まったんだ・・・

ルチア「・・・私、今の翔の隣には・・・いられないんだね」

そう言っつてルチアは走って去っていった。

相良「!ルチア!!!!!」

翔は走っつてルチアを追いかけた。

ヴァン Side

ヴァン「・・・何で・・・」

僕は師匠の気持ち分かる。

師匠はただ純粹に、命をかけてでも守りたいんだ。

その為に、僕と命懸けの戦いをしている。

それは 失いたくないから。

失う事の怖さを誰よりも知っている師匠だからこそ・・・こんなに
も必死になるんだ。

なのに・・・どうして壊れて行ってるんだ!?

ヴァン「僕たちは・・・間違ってるのか!？」

一人で叫ぶように言った。

コロナ「・・・間違っではないと思うよ」

ヴァン「え・・・」

コロナは真面目な表情で僕に言い始めた。

コロナ「ヴァン君や翔さんが必死になる所は、私が好きな部分でも

あるの。でも・・・帰ってくるだけで良いの。それ以上は望まないよ？命懸けで強くなって欲しいとは思わないし、命懸けで守って欲しいとも思わない」

ヴァン「・・・師匠は、ただ自分の偽善の為に守るって言ってた」

そう。僕も過去に師匠が命を懸けてまで強くなる理由が気になって仕方なかった。

俺は、皆に助けられ続けた。なのに、俺は守れなかった。

俺だけ助けられて・・・誰も救えない！助けられない！！守れない！！だから・・・命をかけてでも強くなりたいんだ」

ヴァン「僕は驚いた。でも、それと同時に同じ感覚を覚えたんだ。俺も、守られてばかりは・・・もう嫌だから・・・今度は僕が助ける。守ってあげるからって・・・」

コロナ「／／／／／／／／」

恥ずかしいのかコロナは頬を赤くした。

ヴァン「師匠も同じなんだ。師匠は大好きで、大切なルチアさんだからこそ・・・守りたい。命をかけて・・・」

ギンガ「・・・何か、本当に翔さんらしい・・・」

そう。本当に・・・あの人らしいと思う。

だから、心の底から尊敬する。

・・・!?

ああ・・・そうか。そういうことなのか・・・

ヴァン「ごめん・・・そういうことだったんだね」

コロナ「え？」

ギンガ「何がどういうこと？」

ヴァン「師匠は・・・誰よりも必死な人だから・・・だから皆が心配するんです。それは、今まで一緒にいたからわかると思います」

ギンガ「ええ。翔さんは、私と言う存在をも認めて、好いてくれたから・・・」

ヴァン「そうです。でも、だから……師匠は正しい。それと同時に、間違っているんです」

コロナ「え？どういふことなの？」

ヴァン「それは……」

そして僕はその理由^{わけ}を話した。

相良「はあ、はあ、はあ……待てよ！ルチア！！！」

ルチア「来ないでよ！！！！一人にして！！！」

俺は走って逃げるルチアを必死に追いかけていた。

ルチアの考えが分からない。

何故逃げる？何故泣いている？

分からないけど……体が追いかけると言っているから追いかける。

ただ……それだけだ。

追いついたところでどうすればいいのかわからない。

俺は……何を言えばいいんだ？

何を……伝えれば良いんだ？

気づくと俺とルチアは転送魔方陣にも乗って更に雨の降る何も無い地上を走り回っていた。

相良「待てよ！！！！！」

ルチア「うるさい！！来ないでよ！！！！」

ルチアは左手に漆黒の魔力を集めて、野球ボールサイズの球体を作り出し、俺に投げつけた。

ルチア「ダークシューター！！！！」

相良「ぐあっ！！！！」

俺はそれをよけないで腹に直撃し、3m程飛ばされた。

ルチア「あ……」

ルチアはそんなつもりではなかったと言っような後悔の表情をして、歩みを止めた。

ルチア「……ごめん」

静かにそう言ったルチアは、走って俺の前から姿を消した。

相良「……何でなんだよ……」

仰向けに大の字で倒れていた。

雨が俺の全身に打ち付ける。

寒い……俺は、こんなにも寒い世界で生きていたのか？

俺は……ルチアも、なのは達も……皆を守るって誓ったんだ。

なのに・・・今のざまは何だ!?

一体誰を守るための努力だ!?

ルチアを泣かせてしまったじゃないか!?

何で泣いてるんだ!?

守る為の努力なのに・・・逆に泣かせてしまっている。

相良「ロード・・・俺は どうすればいい?」

ロード「マスター・・・」

ロードの声も、悲しそうだった。

目から垂れる水滴は、雨の水滴なのか・・・それとも、涙か？

・・・そんなことはどうでもいい。

相良「なあロード・・・教えてくれ・・・俺は・・・俺は、どうすればいいんだよ・・・ロードオ」

その声は・・・まるで泣き叫ぶかのような感じだった。

俺は・・・どうして駄目な人間なんだ・・・

相良「ちっくしょおおおおおおおおおおお……!!」

俺の……馬鹿やろ……

命懸けの魔法 心の涙（後書き）

守りたい・・・その想いで戦う俺は、大切な人を悲しませた。

雨に打たれ、何をすればいいのか分からず、空に怒りをぶつけた。

それでも晴れない空と想い。

雨は・・・いつになれば上がるのかな？

気づいたこと 忘れていたこと

相良「・・・」

俺は雨の降るクラナガンを歩いていた。

その後、ロードにその地区周辺の捜査を頼んだが、人の気配は無くなっていたので一度戻った。

そしてクラナガンにも雨が降っていた。

今日は、まるでルチアの心を表すかのように、俺に雨が当たる。

俺は傘も指さずに俯き、ポケットに手をつっ込んだまま歩いていた。

俺は総裁なので、周りの目が気になるため変装魔法で分からないようにしていた。

相良「くそ・・・くそ・・・」

俺は悲しみと苛立ちを持ちながら歩き続けた。

どろろと……どろろと……

俺の頭の中は、ルチアの事でいっぱいだった。

俺は、どうしてルチアを傷つけたんだ……

どうして悲しませたんだ……

私は……翔の隣にいられないの!?

相良「そんな訳……無いだろう……」

ルチアは、俺にとって世界を敵に回してでも必要な存在の一人だ。

ルチア一人でもいなくなったら・・・俺はきつと・・・

相良「俺は・・・馬鹿やろつにも程があるだろ・・・」

涙を流しながら、俺は歩き続けた。

気づくと俺は雨に打たれながら、湖に来ていた。

いつも一人で辛いことがあったときなどに訪れる場所。

って、ここ最近くることが多いな・・・

俺、こんな悩み事多いのか？

相良「いつの間にか・・・何も見えなくなってたんだな」

ロード「・・・すみません」

相良「何で謝る？」

ロード「いえ。マスターのお側にいながら、このような結果を生んでしまい、マスターのデバイスとしてみつももないです」

相良「いや、ロードは何も悪くない。それよりも、ありがとうな。

俺の言うこと、間違っけていても聞いてくれて・・・」

ロード「いえ・・・本当に、すみませんでした」

相良「だから謝らなくていいって」

全く。駄目な使用者だな。

俺は、デバイス相棒にまで迷惑をかけてたなんて・・・

あなたの側には、必ず誰かがいてくれます。

不意に、ロードが少し前、俺に言ってくれた言葉を思い出した。

回想

これは、俺が陸宙管理本部を設立する一日前に言ってくれた。

相良「ああ、緊張してきた・・・」

ロード「落ち着いてください。別にそんな緊張するようなことはないでしょう?」

相良「そうなんだけど・・・いやあ、何人くるかなあって思うと不安と緊張が・・・」

陸宙管理本部に入隊したいと言う人は設立当日に分かる。

もし来なかったらどうしよっかなって不安で仕方なかった。

・・・とはいえ、来なかったら来なかったらで、納得もする。

何故なら俺は、善人では無いから。

どちらかというと偽善者にあたる人だ。

そんな俺についてきたい人がいるのかどうか。

ロード「大丈夫ですよ」

相良「え……」

優しい声でロードはそう言ってきた。

ロード「マスターは、独りじゃないのですから……」

相良「……」

ロード「マスターには私がいいます。なのは殿がいいます。フェイト殿
がいます。はやて殿がいいます。それ以外にも、様々な人がマスター
の側にいます。大丈夫。マスターは……独りにはならない」

相良「ロード……」

こんなに優しくかったっけかな。ロードって……

・・・ま、父さんと母さんが作ってくれた相棒だしな。

当然と言えば当然か。

ロード」だから・・・忘れないでください」

その時に、ロードは言ってくれた。

ロード」あなたの側には、必ず誰かがいてくれます」

回想終了。

相良「・・・そうか・・・そうだよな」

ロード「?どうかしましたか?」

俺は気づくと、笑顔になっていた。

相良「何だよ・・・俺は本当に大馬鹿野郎だな・・・」

ロード「・・・何か分かったのですか?」

相良「ああ。分かったよ。俺がこれから・・・何をすればいいのか。どう生きていけばいいのか。ロード、付いてきてくれるか?」

ロード「もちろんです。私はあなたの相棒デバイスなのですから」

相良「ありがとう!」

俺は湖を後にし、走り出した。

大切な事に・・・気づいたんだ！！

ルチア Side

ルチア「・・・」

私は、翔と出会った場所に来ている。

翔と初めて出会って、初めて戦った場所。

あの日から、私の全ての運命が変わった。

私はそもそも、管理局と地上本部の裏の人間がプロジェクトFと人造魔導士素体と闇の書の残滓を使って作り出した究極の闇であり、最後の闇。

そして・・・最終兵器。

実験として、様々な世界を破壊してきた。

その記憶は、まだ残っていて・・・その悲しみも、未だに残っている。

でも・・・彼は・・・

私を救ってくれた。

そして・・・幸せにしてくれた。

自分の・・・全ての記憶を代償に・・・

ルチア「もう・・・守ってくれなくても良いんだよ・・・」

守られたくない。

だって、翔は守るたびに、大切な記憶を失ってしまうのだから・・・
私なんかの存在の為に、そこまでして欲しくないよ・・・
だから、私から彼と離れる道を選んだ。

私は独り、どこか旅に出ようと思った。

宛なんてない。

けれど、彼の側にいたくない。

彼の側にいたら・・・甘えてしまうから。守られてしまうから。

そんな迷惑・・・これ以上かけたくないよ・・・

ルチア「ワルキューレ。ごめんね」

私はワルキューレを陸宙管理本部に置いてきた。

そして私は転送魔方陣の上に立ち、陸宙管理本部を後にした。

そしてたどり着いたのは火山が噴火している山。

暑いけど、全身を魔力で被っているので大丈夫。

私は歩きだした。

「???」お前・・・何故ここにいる!?!?

ルチア「!？」

巨大な男の声。

でも・・・人の声じゃない。

すると私の前の山が突如動き出し、牛のような獣の姿になった。

背中は噴火している火山。

全身が一つの山になっていて、腹部はマグマの溜まり場になっていた。

ルチア「あなたは・・・なにものなの？」

メガロ「我が名は「メガロクラウザー」。ロック・ビーストという種族の者だ。お前は？」

ルチア「私は、ルチア＝ダルク。化け物よ」

メガロ「ほう。自らを化け物と言つとはな・・・面白い。お前をこころで倒してやるわ」

そう言つと奴は大きく咆哮し、口から溶岩を吐き出してきた。

ルチア「くっ……（今の私にはデバイスがない）」

そう。ワルキューレは置いてきた。

だからBJも無いし、武器もない。

……でも、無くても戦える。

だって……

ルチア「IS・ダーク・インフェルノ」

私の全身から大量の闇の魔力が出てきて、それを両手で前方に放ち、溶岩を破壊した。

メガロ「ほう……化け物と言うのは、本当のようだな」

そう……もう、今の私は化け物なんだ……

ISだって、人造魔導士素体の力だ。

化け物の力・・・

ルチア「撃ち抜け。夜天の雷!!」

右手を前に出すと、空から奴に目掛けて漆黒の雷が落ちた。

メガロ「ぬううう!!!!やるな・・・」

これは闇の書の力・・・

ルチア「はあああああ・・・」

そして左手に魔力を込め、その一撃を放つ。

ルチア「ブラックホール・・・キャノン!!!!」

拳を前方に突き出し、砲撃のように放った。

メガロ「ぐううううう!!!!!!」

そして奴に当たると大爆発を起こした。

ルチア「はあ、はあ、はあ・・・」

暑さ対策の為に全身に魔力を纏っている状況での砲撃。

正直言うと、これで限界。

デバイスがあれば話しは別だったけど・・・駄目だ。

ルチア「はあ、はあ、はあ……」

メガロ「これが、化け物の力か……」

ルチア「!?!」

私は、勝利を確信していた。

何故なら今の一撃は、最大出力だったから。

なのに奴は……生きている。

メガロ「次はこちらの番だ！獅子幻獣砲!!!」

奴の口から履かれた獣の口の形をした炎が私に襲いかかった。

ルチア「きゃあああ!!!」

全身が焼けるように暑い……

ルチア「う……く……」

そして体が言うことを聞かない。

メガロ「これで……止めだ!!」

そう言って奴は口から大量の炎を吐き出した。

それは、私と言う対象を燃やす為だけの炎。

迫り来る炎に、私は成すすべ無くして、全てが終わるのだろう。

・・・そう思っていた。

??? 「トライアングル・スラッシュャー!!!!!!」

メガロ 「何!？」

私の死を切り裂くように、その炎は3つの色の魔力によって消された。

そして私の前に立つ、一人の男性の姿。

そう。たいせつなひと救世主の存在が・・・

ルチア「な・・・んで・・・」

相良「忘れてたことが、いくつもあったからだよ」

そう言っただけは、奴と睨み合った。

相良「お前か！？俺の女に手をだしたのは？」

メガロ「ほう。お前の女か。残念だったな。もうすぐ死ぬぞ？」

そう。今の私は全身大やけどとかで重傷だ。

今すぐ治癒魔法を使わないと命が危ない。

けれど今の翔は戦わないといけないから、結局私は死ぬ。

相良「死なせない。何があっても……この俺が!!!!!!」

そう言って彼は刀身に白銀の魔力光を集め始めた。

ルチア「だ……め……だ……め……」

使ってはだめ。

そう伝えたいのに、口がうまく動かない。

声がない。

今すぐ声を出したいのに……じゃないと、翔の……記憶が……

相良「大切な女を守るためなら、記憶なんていらぬ。記憶は消えても増えるんだ。だから俺は」

そして彼は・・・刀を振るった。

相良「俺は！！！！記憶の全てをにかけて、皆と生きる！！！！！！」

そして白銀の光が奴を包み込んだ。

メガロ「く……ぐあああああ！……！！！！」

巨大な叫び声と共に、奴は山ごと消し飛んだ。

相変わらず……強いなあ……

ルチア「ごめ……ん……ね」

相良「何で謝るんだよ。ちょっと動くな……」

そう言うと翔は右手と左手で違う魔方陣をだし、それを重ね合わせ
て私の胸に当てた。

相良「オーバー・スター・ロード新たな星の誕生「ダ・カーボ・スター復元する星」」

そう言うと私の体はみるみる内に回復していった。

そして気づくと立ち上がることもできた。

ルチア「何・・・これ・・・」

相良「俺が、化け物になった証拠・・・みたいなものかな」

ルチア「え・・・」

化け物・・・さっきまで、私が言ってたこと。

相良「俺さ、みんなには隠してたけど、ベルカ式とミッド式の複合魔法が使えるんだ。正確にはミッドとベルカ。それぞれの部分と部分を切り取ってくっつけたみたいな感じなんだけど」

ルチア「どうして・・・」

相良「俺は、みんなの為の魔法を作るために努力してきた。結果として複合魔法が誕生した。そして俺はこれをしっかりと使いこなして、皆を守るって決めたんだ」

ルチア「……私は、守って貰いたくないよ」

相良「どうして？」

ルチア「もう、翔の記憶がなくなるところを見たくないからだよ！
！！翔が、大切な記憶を忘れていくなんて……嫌だよ……」

私の目から大量の涙が出ていた。

ルチア「翔が……私のせいで記憶を失うなんて嫌なの！！だから……もう……」

相良「俺から離れて、自分だけ傷つかない道を選んだってことか？」

ルチア「そうだよ……もう、翔が苦しむ姿なんて見たくなんだよ！！！！」

そう言っつて私は翔から逃げるために全力で走り出した。

だが、翔は私の手首を掴んでそれを静止せる。

ルチア「離して！！私……これ以上は、甘えん坊になっちゃうから……」

相良「離さないよ……」

ルチア「良いから!! 離して!!!!!!!!!!」

相良「離さない!!!!!!!!!!」

私の声に負けず、翔は大声でそう言った。

相良「絶対に離さない!!!!!!!!!! 何があっても離さない!!!!!!!!!!」

ルチア「やめてよぉ・・・私はぁ・・・甘えちゃっからぁ・・・」

相良「だっ たら甘えろよ」

そう言っ て翔は私を抱きしめた。

ルチア「!?!?・・・どうして・・・どうしてえ・・・」

相良「好きだから。大切で・・・守りたい存在だから。だから逃がさないし、離さない」

ルチア「やめて・・・本当に、甘えちゃっからぁ・・・」

相良「構わないよ。俺は、絶対にいなくならないからさ。何も忘れないし、消えない」

ルチア「本当？」

相良「ああ。俺は・・・絶対にルチアの前から消えないし、忘れてりはしない」

ああ・・・そうだね。翔は・・・そういう人だったね。

大切なことなのに、忘れてた。

相良翔と言う存在は、何があっても誰も見捨てないって・・・

相良「帰ろう。ワルキューレも、皆もルチアの帰りを待ってる」

ルチア「うん!!」

そう言っつて私は翔の右腕に抱きついて歩きだした。

相良「ちよっ!?!」

ルチア「言っただでしょ? 甘えちゃっつて」

そう言っつて更に体を密着させた。

相良「ちよ・・・更にくっついてくるんじゃないよ!?!」

ルチア「嫌だもん もっと擦りつけちゃっもん」

相良「それは止めてくださいお願いしますマジで!?!」

全て一言で言い切った!?!?

ルチア「うっん・・・それじゃ今日は私一人だけを抱いてね!」

相良「・・・ま、それしかないよな」

先に折れてくれた。

やったあ!?!?!

相良「はあ・・・まあいいか。帰るぞ」

ルチア「うん!?!?!」

そして私と翔は家に帰っていった。

そしてクラナガンの空は、清々しい晴天になっていた。

桜を想い出しながら

芳乃 Side

あゝ暇。

現在の俺は、特に何もすることなく、部屋でのんびり休んでいた。

俺の部屋は陸宙管理本部にある個室に寝ている。

個室といっても・・・

サクラ「マスター！お腹空いたんだよ！」

このヘッポコ兵器が一緒だけだな。

サクラ「マスター！聞いているの!？」

芳乃「あゝはいはい！そんじゃ食堂行くぞ」

サクラ「はい！なんだよ！」

そう言って俺とサクラ（へっぽこ兵器）と共に食堂に移動した。

芳乃「あ、紗雪。鈴白」

二人が飯を食っていた・・・って

芳乃「鈴白は・・・相変わらずだな」

パンが大量に置かれたテーブル。

一人で占領するとは・・・

紗雪も若干苦笑いしてるし・・・

鈴白「こ、これは運動したあとだから!!」

焦っているが、まあ言い訳は基本的に効かないわけで・・・

芳乃「まあいいや。取り敢えず隣良いか？」

紗雪「うん。どうぞ」

そう言っつて紗雪は隣の席を引いてくれた。

俺はそこに座った。

紗雪「あれ？兄さん、ご飯は？」

芳乃「サクラに俺の分も持ってこいって頼んだ」

紗雪「兄さん・・・もしかして、パシリにしてる？」

芳乃「ま、罰ゲームみたいなもんだ。ここに来る前にじゃんけんでどっちかが負けたら勝った人の分も持つてくるってな」

鈴白「あはは・・・サクラご愁傷様で・・・」

サクラ「マスター。持ってきたんだよ」

そう言っただ俺のテーブルにカレーが置かれる。

サクラはナポリタンと牛丼・・・なぜ！？

いや、まあいいや。

芳乃「ちゃんと辛口にしたよな？」

サクラ「もちろんだよ」

芳乃「よし。んじゃ食うか」

サクラ「はい！」

そう言っつて俺達は飯を食った。

芳乃「さて・・・どうするかな・・・」

飯を食ったあと部屋に戻るとまたやる事が無くなった。

一人寂しく訓練にでも行くかな・・・休みだけど。

そんなことを考えつつ、俺は訓練室に向かった。

芳乃「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍！！」

前に用意した巨大な岩に向かって拳をぶつける。

すると岩はどんどん拳をぶつけた部分を中心に壊れていく。

芳乃「ふう……」

あまり手応えがない。

ヴァンとぶつかり合う方が、もっと良いんだけど……

今頃あいつはコロナと一緒にデートかなあ……

サクラをどっかに誘うのも良いけど……あいつは金を大量に使うからな……（主に食費）

ま、サクラとは金があったらと言うことで……

芳乃「もう一発・・・」
神討つ拳狼フェンリスヴォルフの蒼槍!!」

それからしばらく、俺は拳を振るっていた。

芳乃「・・・ふう」

自主練も終わり、一人で部屋で仰向けで寝ている。

サクラは多分、紗雪達部屋にいるだろう。

芳乃「・・・」

天井を眺めていると、自然と眼を閉じていた。

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

懐かしい夢を見た。

それは、一本の巨大な桜の木。

年中問わず咲き続けた桜の木。

あの島からでて、陸宙管理本部に入隊して結構な時間が経った。

何だかんだでいいライバルが出来て、これからもっと強くなりてえ
と思えるようになった。

そしてこれから、今起こってる事件を調べて・・・主犯の野郎をぶっ

飛ばす。

・・・でも、少し胸騒ぎがする。

何があるのか分からないからか・・・それとも、何かを失ってしま
うからか・・・

さて・・・そろそろ夢から覚めよう。

芳乃「・・・ん？」

後頭部に柔らかい物が・・・？

つか・・・

芳乃「サクラ・・・」

サクラの顔が近い・・・あ、そうか。

芳乃「何故俺に膝枕をしてるんだ？」

サクラ「えへへ。マスターの寝顔が面白かったからだよ」

面白ってどういうことだ!？

芳乃「あ、悪い。すぐ起きるから」

サクラ「ううん。このままでも良いんだよ」

ん？サクラの頬が少し赤いんだが・・・まあいい。

芳乃「そんじゃ、お言葉に甘えて・・・」

そう言っただ俺は再び、眠りについた。

「こう言うのも・・・悪くないな。」

サクラ Side

サクラ「・・・」

私はマスターに膝枕をしている。

マスターの寝顔は普段からでは想像できないほど間抜けな顔になっている。

ちょっと面白いんだよ。

面白そうだったのでマスターの鼻を指で突っついてみた。

芳乃「ん……」

少し動いたけど、また眠った。

……どういふとは……

今キスしてもバレない

その考えにたっした瞬間、首を大きく降った。

サクラ「だ……駄目だよ！」

そ……そんな恥ずかしいこと……

・・・でも・・・私は、マスターの事が・・・

だったら・・・一度くらい・・・

サクラ「ますも・・・レイジ。ごめんなんだよ」

そう言っつて私は徐々にその唇を近づけ・・・

サクラ「ん・・・」

マスターの唇と合わせた。

芳乃 Side

芳乃「・・・んん」

サクラ「ま、マスター！」

サクラが急に声を上げた。

・・・どうかしたのか？

芳乃「それより、今何時だ？」

サクラ「午後の18時なんだよ」

6時か・・・丁度いいな。

芳乃「そんじゃ、飯食いに行くか」

サクラ「うん！」

そう言って、俺とサクラは部屋を出た。

芳乃「（サクラ・・・どうしたんだ？）」

サクラのテンションの高さがいつもより高い事が気になる俺だった。

桜を想い出しながら（後書き）

隠れた幸せと、伝えられない想い。

いつかは伝えられると信じ、見守ることを選んだ少女。

そして願わくば、その想いが伝えるときがくることを・・・

総裁の休み（前書き）

話は陸宙管理本部総裁の相良翔になる。

彼は総裁を初めて休んだ回数は一回のみ。

今回の物語は、二回目の休みを過ごす相良翔の一日。

いつも何かをする彼の休みの過ごし方とは……

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinite
ty } 始まります。

総裁の休み

相良 Side

相良「・・・暇だあ」

どうも。何となくこの小説のメインキャラの相良翔です。

本日の俺は自宅（なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、シユテル、レヴィ、アーチエ、ルチア、アイン家）のベットで一人寝っ転がっていた。

なのは、フェイト、はやて、シユテル、レヴィ、アーチエ、ルチアは仕事で家にいない。

今いるのはアリサ、すずか、アインの3人だ。

ヴィヴィオ達は学校だしな・・・

相良「暇だなあ・・・」

毎日仕事に明け暮れていた俺にとって、何もしない日と言うのはある意味で拷問である。

さて・・・何するかなあ・・・

とりあえず俺は部屋をでて、アリサ達のもとへ行った。

相良「おはよう」

アリサ「やっと起きたわね」

すずか「凄くぐっすりしてたみたいだね」

二人が朝食を作って待っていてくれた。

アイン「主翔。おはようございます」

相良「ああ。おはよう」

そう言つて3人にキスをして、俺は朝食を食べた。

相良「ふう・・・本当に暇だなあ・・・」

俺は庭にでて、アインに膝枕をしてもらっている。

アイン「毎日働き詰めだったので、当然でしょう」

相良「まあな。いやあ、今までバタバタしてたからこうやってのんびり出来るって本当にいいな」

アイン「良いと言いつつも、内心皆がどうしているか不安なのでしようっ」

相良「・・・お前、エスパーかよ」

たしかにそうだ。

今、皆どうしてるかなあ〜って心配だ。

皆がただいまと言えるかどうか・・・それを知りたい。

だから総裁室には毎日いるようにしている。

・・・でも、皆は強い。

だから信用できる。

相良「ま、皆を信じてるから・・・のんびり待たせ」

アイン「・・・そうですか」

そう言っつて俺とアインは空を眺めていた。

・・・

・・・？

相良「あ・・・ね？」

アイン「あ、眼を覚ましましたか？」

気づくと俺は寝ていたらしい。

夕焼け空になっている。

・・・結構寝てたな俺。

アイン「疲れが出てきたのでしょうか。大分ぐっすり寝ていましたから」

相良「そうか・・・悪いな。太もも麻痺してるだろう?」

そう言っただ俺は起き上がった。

アイン「いえ。このくらいなら大丈夫です」

相良「そうか。ありがとう」

そう言っただ俺は座っているアインに手を差し伸べた。

相良「そろそろ皆が帰ってくる時間だ。夕飯作るの手伝わないとな」

アイン「はい」

そう言っただアインは俺の手を握って中に戻った。

ヴィヴィオ「ただいま!!」

相良「お帰り。ヴィヴィオ」

玄関に向かうと、ヴィヴィオは走って俺に飛びついてきた。

相良「おうっ!?!」

腹部に入ってくるからちよつと痛い・・・

ヴィヴィオは俺の胸に頭をこすりつけていた。

ヴィヴィオ「んん〜 お兄ちゃんのニオイ〜」

まずいな・・・妹が変態になってしまった。

ロード「人聞き悪いですよマスター・・・」

相良「すまんすまん。そんじゃヴィヴィオは手を洗って着替えてこい。ご飯にするぞ」

ヴィヴィオ「うん!」

そう言っつてヴィヴィオは元気よく返事をして自分の部屋に向かっていった。

全く、元気な妹だな・・・

なのは・フェイト・はやて「ただいまあゝ!!！」

相良・ヴィヴィオ「お帰り！」

3人も帰ってきたな・・・

相良「3人とも今日はお疲れ様」

なのは「うん！」

フェイト「今日、翔のお父さんに会ったよ」

相良「父さんに？」

フェイト「うん。翔達が調べてる事件に関係することらしいけど？」

相良「へえ・・・」

やっぱり父さんも動いてるのか・・・

いつか父さんと一緒に事件解決つてのも夢だな。

はやて「私は逆にお母さんにあつたで」

相良「どうだった？」

はやて「元気そうやったよ。メガーヌさんと漫才してるみたいやっ
たし」

あゝ、何か想像つくな・・・

どうせ母さんがツッコミでメガーヌがボケだろうな・・・

本当に仲良いな、あの二人。

相良「元気そうで何よりだな。そんじゃ3人とも夕飯出来るから
さっさと着替えてこい」

なのは・フェイト・はやて「うん！」

そう言つて3人とも自分たちの部屋に向かつていった。

シュテル「ただいま戻りました」

レヴィ「ただいまあゝ！」

アーチエ「今戻ったぞ」

相良「お帰りなさい」

残りの3人も帰ってきた。

シュテル「翔さん……」

シュテルは抱きついてきた。

レヴィ「あゝ！ずるいゝ！！」

アーチエ「貴様！塵芥の分際で我より先に抱きつくくな！！」

そう言って二人も抱きついてきた。

相良「はいはい。お疲れ様」

そう言って3人の頭を撫でてやる俺。

相良「さて、3人も早く着替えて夕飯食うぞ」

シユテル・レヴィ・アーチェ「はい・はい・うむ」

3人は渋々離れ、部屋に戻っていった。

相良「ルチア……遅いな……」

少し……心配だった。

ちゃんと帰ってくるのか……それだけが心配だった。

しばらく玄関の前で待っていると、ヴィヴィオが来た。

ヴィヴィオ「お兄ちゃん。ご飯食べないの？」

相良「え？・・・ああ、俺はまだ食べないから先に食べててっってみんなに言っておいて」

ヴィヴィオ「うん。分かった」

そう言っってヴィヴィオは戻っていった。

相良「ふう・・・まだかな・・・」

ロード「そう焦らずに。マスターが焦っても何も変わりません」

相良「・・・そうだな」

でも、もう時間は20時になる。

いくらなんでも・・・心配だな・・・

相良「ルチア・・・」

俺って・・・こんなに心配性だったんだな。

でも、やっぱりルチアもだけど・・・皆がしつかりと帰ってきてないと心配になるのはしょうがないな。

・・・妻を多く持つ旦那ってこんなに大変なんだな・・・

・・・ルチア・・・早く帰ってこい・・・

・・・あ・・・そう言えば・・・

ロード「??どうかいたしましたか?」

相良「ああ。俺昔さ、父さんと母さんを心配させたことがあってさ・・・

」

そう言って俺はロードにそのことを話し始めた。

回想

これは俺が小学1年生の頃・・・

学校の放課後にて・・・

相良「それ・・・どういうことだ？」

学校いる、女子の友達と話していると、女子は俺に話してくれた。

女子「私ね、実はいじめにあってるみたいで・・・」

相良「そうか・・・で、今日は何された？」

女子「……」

彼女は無言で俯いた。

下を見ると……

相良「……上履きか……」

彼女は無言で頷いた。

相良「もしかして……靴もか？」

そう聞くと彼女は涙を流しながら頷いた。

相良「しょうがないな。ちよつとここで待ってる。探してくる」

そう言つて俺は学校中を走り回つた。

相良「うーん・・・と、無いな・・・」

どこを探しても彼女の上履きと靴は見つからない。

・・・いや、待てよ。

相良「男子か女子専用の場所・・・女子の更衣室か男子の更衣室か・・・あとはトイレかな」

そう思いついた俺は男子のトイレと更衣室を探しに回った。

相良「畜生・・・見つからねえ」

いくら探してもない。

男子に無いなら女子なのだが、言わずもながら俺は男であるため、入ることができない。

なので一度教室に戻って俺は彼女と共に探すことにした。

相良「お〜い・・・あれ？」

彼女が教室にいない。

なぜ・・・だ？

相良「帰った・・・は無いか・・・」

裸足で帰るなんて難しいか・・・

・・・！！？

待て・・・まさか・・・

相良「くっ！！！！」

俺は一つの最悪の結果を考えてしまったため、急いで廊下を駆け出
した。

相良「あいつ・・・早まるなよ・・・」

俺が想像した最悪の結果。

それは・・・いじめによる自殺。

それだけは避けたかった。

小学1年生の俺でも、命の大切さは父さんと母さんから教えられてきた。

だから俺は彼女が死なないようにと祈りながら走って、ある場所に向かった。

それは 屋上

相良「はあ、はあ、はあ……」

気づくと空は暗くなっていて、街も暗くなっていた。

そして屋上の端に、彼女は今にも飛び降りそうになっていた。

相良「止める!!」

女子「……ごめんね。ありがとう」

涙を流しながら、笑顔を作り、俺にそう言った。

そして彼女は……

相良「! 待て!!」

飛び下りた。

相良「くっ!!」

俺も、一緒に飛び下りた。

女子「!どうして・・・」

相良「一人で勝手にさようならなんてふざけたことはさせねえ!!」
そう言って俺は彼女を抱きしめ、俺が下、彼女が俺の上にして、地面に落ちたときに彼女に被害が出ないようにした。

正直、怖かった。

でも、助けたいって気持ちで恐怖を消し去った。

後は・・・俺が彼女を守ればいいのだから・・・

.....

.....

.....?
.....

相良「は!?!」

俺は目を覚ました。

どうやら生きているらしい。

相良「ここは……」

右蕪「家だよ。心配かけるな」

父さんがいた。

つまり俺は家にいて……助かったのか。

相良「そんなことより、あの女子は!?!」

右蕪「今、火澄が家におくってる。安心しろ。あの子はお前よりもケガがなく無傷だ」

相良「そう……よかったあ〜!」

右蕪「よかったじゃない!?!!」

バキッ!!

俺は父さんに右頬を殴られた。

相良「うっ……」

ここで読者の中で「殴ったね……親父にも殴られたことないのに

！！」って言葉が出た人はちょっと空気読め（お前がな

右蕪「お前・・・人の心配するよりも、自分の心配しろ！俺たちが
お前の帰りをずっと待っていて気になって学校に行ってみれば屋上
から落ちている最中ってどれだけ心配したと思ってるんだ！」

相良「・・・ごめんなさい」

確かに悪いことをした。

・・・でも、何でだろう？

相良「でも、俺は
間違った事をしたとは思ってません」

そう思ったんだ。

すると父さんは何と笑顔に戻って言った。

右蕪「確かに、お前の顔は……どこか満足気だしな」

相良「え……」

俺は頬をぺたぺた触った。

満足気な顔ってどんな顔!?

右蕪「でもま、確かに翔は正しいことをしたと俺も思っよ。でも、次からは気をつけろよ」

相良「……はい」

回想終了

相良「誰かの為にって言つて、周りを見なかつたんだよな」

ロード「マスターのその悪い癖は小学1年生の頃からだったのですか・・・」

相良「それ、どういう意味だ？」

ロード「さあ？なんででしょうね」

うわ・・・こいつ、ジェイルの改造してもらおうかな・・・

相良「結局、その子のいじめは俺がいじめる奴全員ぶっ飛ばしたから無くなったんだけど、彼女が転校しちゃってな」

ロード「そうだったんですか・・・」

相良「でも、あの時帰りが遅くならなかったら後悔してたかもな・・・」

そう。結局ところ、俺が帰りを遅くしなかったら一人の命が無くなっていたんだ。

相良「だから、何があっても“間に合わない”って言うのは嫌なんだ」

ロード「だから、こんなにもルチア殿をご心配なされると?」

相良「ああ。ルチアだって、俺の家族だしな」

なのはもそうだ。フェイトも・・・はやても・・・アインも・・・

俺の家族は沢山いるけど、皆同じくらい大切なんだ。

相良「早く・・・帰ってこないかな・・・」

人の帰りを待つって・・・こんなにも不安だらけなんだな・・・

俺、いつも皆にただいまって言うてもらっているからわからなかつ

たけど・・・

待つって・・・こんなにも不安で、怖くて・・・辛いんだな。

でも・・・

ルチア「ただいま・・・あれ、翔」

相良「！お帰り・・・ルチア！」

「うやうや、帰ってきてくれると・・・」

相良「待ちくたびれた・・・」

ルチア「ごめんね。仕事が中々終わらなくて・・・心配かけてごめん」

相良「ううん。それより、一緒にご飯食べよう。今日はルチアの大好きなハヤシライスだぜ」

ルチア「うん！」

ただいまって聞くだけで・・・こんなにも嬉しいものなんだな。

二人の幸せは・・・（前書き）

物語は風の少年へと変わる。

彼と、彼の想い人との幸せな日々。

そこに訪れる小さな事件。

二人の想いが強いなら・・・きっと乗り越えられる。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty } 始まります。

二人の幸せは・・・

ヴァン Side

ヴァン「コロナ！」

コロナ「あ、ヴァン君。おはよう」

僕とコロナは朝、いつも通り二人で公園に向かった。

ヴァン「頂きまゝす」

そう言ってコロナが作ってくれた弁当を食べる。

コロナ「はい。あ〜ん」

ヴァン「あ〜ん・・・うん。美味しい！」

コロナ「えへへ／＼／＼／＼一生懸命作ったんだから当然だよお」

ヴァン「ありがとう。コロナ」

コロナ「うん！」

それからしばらく公園でのんびりしたあと、学校へ行く。

コロナ「それじゃこれ、お弁当」

そう言って僕に弁当を渡してコロナは自分の席に行く。

ヴァン「おはよう。ヴィヴィオ」

右隣の席に座るヴィヴィオに声をかけると・・・

ヴィヴィオ「んにゃ・・・」

え・・・寝てる？

ヴァン「ヴィ・・・ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「んにゃあ・・・もう食べれにゃい・・・」

お・・・おい・・・

ヴァン「起きろぉ〜じゃないと叩くぞぉ〜」

ヴィヴィオ「（・・）。。zzz...」

ヴァン「（イラッ）ほう・・・ぼk・・・“俺”に喧嘩を売るとはいい度胸・・・」

そう言って俺は右の親指と中指に力を入れ始めた。

要はデコピンである。

ついでに風の魔力を込めて当たった瞬間髪の毛の向きを一定にしよう。

芳乃「お前・・・黒いな」

零二の言葉も無視して、俺は放った。

ヴァン「喰らえ！」

ヴォヒユウウウ！！！！

ヴィヴィオ「ぐにゃ！？」

間抜けな声で悲鳴を上げると、ヴィヴィオはおデコを抑えながら起き上がった。

芳乃「ぷっ！」

ヴィヴィオの髪型に零二を始め、クラスメイトの全員が笑った。

ヴィヴィオ「え？何何！？・・・ふえええええ！？」

本人もようやく気付いたようだ。

ヴィヴィオ「何で私の髪型がリーゼントみたいになってるの!？」

みたいにではなく、リーゼントなんです。

ヴァン「学校で寝る+僕を怒らせたからだよ」

ヴィヴィオ「うえ〜ん!元に戻してえ〜」

ヴァン「どうしょ〜かな〜・・・どう思うコロナ?」

何となくコロナに任せてみた。

ヴィヴィオ「コロナあ〜助けてえ〜」

ヴィヴィオは優しい天使コロナに救いの手を求めた。

コロナ「ヴィヴィオ。よく似合ってるよ」ニコッ(」

・・・前言撤回。

優しい悪魔コロナに救いの手を求めてしまったようだ。

ヴィヴィオ「だ・・・誰か元通りにしてよおおお!!!!!」

ヴァン「あ、授業の時間だ。皆席に着け！」

全員「はい！」

ヴィヴィオ「……」

結局お昼までヴィヴィオの髪型はリーゼントでした。

それまでの教科の先生とシャツハさんやカリムさんに笑われていたのは言うまでもない。

ヴァン・芳乃・リオナ・リオ・コロナ「頂きます!」

ヴィヴィオ「頂きます……」

芳乃「えと……まあ元気出せよヴィヴィオ」

気を使つてか、零二はヴィヴィオを慰めていた。

コロナ「でも……似合つてたなあ」

ヴィヴィオ「(グサグサグサ!!!) ううう!?」

コロナの言葉にヴィヴィオは堪らずノックダウン!!

……以外にコロナって腹黒い?

ニコニコ天使の裏側は悪魔か……

コロナ「ヴァン君……変な事考えてないよね……」

コロナの全身からマイナスオーラが……

ヴァン「い、いえいえ何もありませんよはい!!」

俺は逃げるようにコロナの作った弁当を食べた。

ヴァン「うん……うまい」

取り敢えず時間は過ぎて放課後……

ヴァン「……」

教室も俺だけになり、帰りの準備を終えた俺は廊下にてた。

コロナ「一緒に帰る？」

するとコロナが下駄箱で待っていた……

ヴァン「……ごめん。先に帰って貰っていいかな？」

コロナ「え……何か用事でもあるのかな？」

ヴァン「ああ。ちょっと・・・大事な用がある」

コロナ「・・・うん。分かった。それじゃまた明日ね」

そう言ってコロナは先に帰っていった。

ヴァン「・・・」

僕の靴が入っているはずの下駄箱を開ける。

中は空っぽ。

ヴァン「だろっな・・・」

ニーナ「あんた！？これって・・・」

ヴァン「ああ。十中八九いじめだろっな」

にしても・・・靴を隠す程度のいじめって・・・

ニーナ「あんた・・・また何かやらかしたの？」

ヴァン「いや。今回は別だろう・・・多分、コロナと僕の間係を否定している奴等のしたことだろうな」

この程度のいじめなら別に何とも思わないけど・・・

ニーナ「調子に乗る奴らが出たら・・・この程度じゃ済まないわよ？」

ヴァン「だよな・・・」

全く・・・どうするかな・・・

ヴァン「1、上履きのまま帰る。2、本気で靴を探してみる」

考えなくてもわかるな。

ヴァン・ニーナ「後者・・・」

それしかない。

何故なら・・・

ヴァン「僕を背後に隠れてる奴の人数は5人・・・」

ニーナ「二人はカメラを持ってるわね」

何かの脅しで使う気か・・・

だとするなら、5人とも取り押さえないと・・・

ヴァン「人気の少ないのはどこだ？」

ニーナ「この学校内なら、屋上か体育館裏じゃないかしら？」

なら・・・やっぱり風が吹く屋上だな。

ヴァン「行くぞ」

そう言って僕は屋上に向かって走り出した。

ヴァン「・・・結界魔法『ストーム・ホーム神風の鳥籠』範囲は50」

そう言うとはぼ透明に近い緑色の魔力光が僕を中心に広がっていった。

ヴァン「出てこいよ。そこに隠れてるんだろ？」

そう言うと屋上の扉から5人組みの男子と女子が現れた。

ヴァン「取り敢えずそのカメラのデータのいくつか・・・いや、全

部消してもらおうかな？これは立派な犯罪だからな」

男子1「嫌だと言っただら？」

言っと思った・・・だからこの結界を張ったんだ。

ヴァン「嫌だと後1回言っただら・・・」

そう言っただけは指パッチンをした。

全員「ぐっ！？」

すると5人組みは喉を押さえて息苦しそうにしていた。

男子2「何を・・・けほっ！けほっ！・・・した・・・」

ヴァン「簡単だよ。僕を中心に結界魔法を発動した。条件は「この空間に閉じ込められた者は10分以内に使用者の支持従わない限り、酸素が徐々に結界から無くなり、息絶える」つまりお前らは僕の言うことを聞かないと死ぬ」

全員「！？」

この前師匠と訓練をして身に付けた新しい魔法なんだけど・・・まさか同じ学校の人が被害にあうとはな・・・。

ヴァン「さっさとデータ消せ。そして二度とほく・・・俺の友にも手を出すな」

全員「は・・・はい！！」

そういうので俺は結界を解除した。

男子3「(ニヤリ)今だ!」

ヴァン「・・・」

そう言うと5人はきつと自作であろう、銃の形をしたデバイスを俺に向けた。

ヴァン「・・・何のつもりだ?」

女子1「ごめんね」 私達あんたのこと嫌いでさあ」

・
そうかよ・・・全く、この程度で俺を追い込んだ気になりやがって・

ヴァン「撃ってみろよ。俺に当てればいけどな」

女子2「大丈夫。狙撃の練習を毎日やってたから・・・」

そう言つて5人は銃弾を俺に放つた。

ヴァン「それを努力の無駄遣い・・・」
「ダメエええええ!!!!!!!!!!」
「!?!」

俺の目の前に・・・一人の女子が庇うように飛び込んできた。

全員「!?!」

だが、銃弾は既に放たれた。

ヴァン「ストーム・ウイング神風の風装！！！」

俺はとっさに魔力を風のようにし、彼女に纏わせた。

これにより、彼女に当たるはずの弾丸は風によって阻止された。

全員「良かったあ〜」

ヴァン「良かったじゃねえぞてめえら・・・」

俺は魔力を全身に纏わせ、右拳に魔力を溜め、奴らにぶつけた。

ヴァン「ストームストライク神風討つ拳鳥の緑槍！！！」

全員「ギヤアアアア！！！！！！」

取り敢えず全員は上空に舞った。

落下までかなり時間がかかるだろうな。

いや・・・そんなことよりも・・・

ヴァン「どうして・・・ここにいるんだよ、コロナ」

僕を庇ってくれたのは家に帰ったはずのコロナだった。

コロナ「えへへ・・・何か、心配になっちゃって」

ヴァン「心配って・・・僕の方が心配したから・・・」

あの銃弾は非殺傷だろうけど、当たり所を間違えれば死ぬ。

ヴァン「僕は別に魔法を使えばあの程度の弾丸くらい回避できたから平気なのに・・・」

コロナ「うん。私も分かっていたんだけど・・・それでもやっぱ

りもしもの事があると怖くてしかたなかったなくて……気づいたら勝手に飛び出してた……」

……本当に優しい性格してるよな。コロナって……

ヴァン「ごめん。危険な目に合わせて」

コロナ「ううん。ヴァン君の隣にいるなこういうことにも慣れておかないと」

こういうことって……僕は絶体絶命男か何かですか？

コロナ「それよりも……ヴァン君。さっきの5人って隣のクラスの人だよな？」

さっきというか、今宙を舞っている最中の哀れな集団なのだが……まあいいや。

ヴァン「ああ。何か、僕に話があるみたいで来んだけど『嘘だね』……」

コロナ「ヴァン君の下駄箱を見たら、靴が無くなってた。明日も学校があるのにヴァン君が上履きを持って帰るはずが無いから……もしかしたらって思ったの」

鋭いな……

ヴァン「……ごめん」

素直に謝った。

コロナ「どうして相談してくれなかったの？」

ヴァン「コロナに迷惑をかけなくなかったから・・・」

コロナ「私は迷惑だとは思わないよ!？」

ヴァン「!」

コロナは怒鳴るように言った。

コロナ「私は・・・ヴァン君の助けになってあげたいの。いつも任務や訓練で怪我して朝会う時、私がどんな想いでいるか分かる!？ 凄く苦しいんだよ!私・・・ヴァン君にもしもの事があつたら生きていけないよお・・・」

涙を零しながら、コロナは言った。

コロナ「私は、ヴァン君の力になりたい・・・だから、何でも相談してよ。私達、恋人同士なんだから・・・ね？」

ヴァン「・・・ありがとう」

そう言って僕はコロナを抱きしめた。

コロナ「うん・・・うわああああん!!!!」

僕の胸の中で、コロナは大声で泣いた。

俺は右手で頭を撫で続けた。

ヴァン「それじゃ帰ろうか」

コロナ「うん・・・あ、でも」

そう言ってコロナは僕の右腕に抱きついてきた。

そして上目遣いで言った。

コロナ「今日は／＼／＼ヴァン君と朝まで一緒に良いな／＼／＼」

ヴァン「え／＼／＼そ、それって／＼／＼」

何となく察したのが、コロナは無言でコクリと頷いた。

コロナ「ヴァン君となら／＼／＼構わないかなって／＼／＼」

ヴァン「あ、ああ」

何とも言い難いこの感覚・・・幸せ・・・なんだよな？

そんなことを考えながら僕とコロナは僕の家に向かっていった。

その後、ヴァンの家の寝室で女の子の嬌声が響きわたっていたのは二人だけの秘密だ。

死の果ての世界（前書き）

休みも終わり、戦いの日々に戻る。

得たものと失うものがあつたこの休みの時間。

そして戦いが・・・始まる。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

死の果ての世界

相良 Side

場所は陸宙管理本部総裁室。

今、総裁室にはヴァン、リオナ、芳乃、サクラ、紗雪、なぎさ、アインハルト、イクスがいる。

相良「皆、今日は結果発表なんだけど、まあ別に結果は聞かずもわかるように合格」

全員「ほ・・・」

安心したそうだ・・・

相良「と言うことで、これから事件の捜査に更に力を入れて欲しい。とはいえ、事件はこの休暇中にも増えてる。だから、早速任務を初めて行く」

全員「はい!!」

と言うことで、今回はチームに分けて任務を行う。

前回の様にチーム任務だ。

Aチーム 相良、リオナ、芳乃、サクラ、アインハルト

Bチーム 谷島、ヴァン、イクス、紗雪、ナギサ

谷島「また俺か？」

相良「お前暇そうじゃん。そして総裁命令」

谷島「てめえ……権力をそんなところで使いやがって……」

谷島がぐぬぬ……と唸っているが、お前最近まともな仕事してないんだから偶には良いだろう。

相良「まあそんなことで頼む。取り敢えず今調べて欲しい事は「ヴァンとヴィヴィオを襲撃した謎の光」それと、「今まで現れた闇の正体の調査」俺達Aチームは後者を調べるから谷島達は前者を頼めるか？」

谷島「まあ別にどっちでも構わねえけど？」

相良「ありがとう。そんなじゃ皆、今一度気合を引き締めて頼むぞ！
！！」

全員「はい！！」

Bチームが先に任務に行き、俺たちも準備を整え、転送魔法陣に向かっていた。

その途中・・・

スバル「翔さん！」

相良「あれ？スバル・・・」

芳乃「スバルさん・・・」

サクラ「スバルだあ〜！」

リオナ「スバルンさん！？」

お前・・・「ン」つける必要なかったら・・・

アインハルト「……」

アインハルトは何かそわそわしてるが……

相良「アインハルトは初めて会うな。俺の妻のスバル・ナカジマだ」

スバル「スバルです。アインハルトの事は翔さんから聞いてるよ。よろしくね」

アインハルト「はい……よろしくお願いします」

相良「さて、スバルはもう仕事終わりか？」

スバル「いえ……その、翔さんがこれから任務に行くと聞いたんでお見送りに来たんです」

相良「……誰から聞いた？」

スバル「ギン姉からです」

ギンガの奴……そういうのは言っなくなっていつも言ってるのに……1週間ギンガに料理作るのやめよう。

相良「まあいいや。取り敢えずお見送りありがとう。ま、さっさと帰れるように頑張りますよ」

スバル「はい！」

そうやって俺はスバルの唇を奪ってから転送魔方陣に乗った。

スバル「//////////」

ロード「マスターは相変わらずやることが過激ですね」

相良「あはは……。ま、取り敢えず行くぞ」

全員「はい！」

そうやって俺達は光に包まれ、ある世界に移動した。

辿り着いたのは暗き世界。

地面は骸骨で出来ており、湖は血しかない。

まさに・・・死の世界。

アインハルト「・・・ここ・・・ここ、これは・・・」

アインハルトはガクガクしてますね。

案外オバケ系ダメそうだな・・・

相良「アインハルト、大丈夫か？」

アインハルト「だ、ただ、大丈夫です」

いやいや・・・それで大丈夫ってそりやないだろう。

相良「はあ・・・」

取り敢えず俺はアインハルトの右手を左手で握ってあげた。

アインハルト「あ・・・」

相良「安心しろ。皆いるから。無理はしないでくれよ」

するとアインハルトの顔色はもとに戻り、手の震えもなくなってきた。

相良「まあいいや。皆、この世界が今回の任務の場所『アンデット・ワールド』死者の成れの果てが集まる場所だ」

リオナ「こんな骸骨だらけの場所で何をするの？」

相良「ああ。実はここ最近、この場所のモンスターの出現数が増えているらしい。俺達はその原因を見つけ出し、出来るようであれば原因を破壊する。ま、こういう事件の場合犯人はモンスターなんだけどな」

芳乃「敵か・・・」

みんなは敵がどういふ奴かをイメージし始めていた。

相良「あ、言っとくけどここ周辺の敵は全てゾンビ系な」

全員「え……」

そう。まあ見てわかるよなとも思っがな。

相良「ま、現実を見れば全部わかる。行くぞ」

そう言って俺が先頭に、皆は歩きだした。

????「おや、相良翔さんではございませんか」

マントを羽織った骸骨が俺に話しかけてきた。

全員「ぎゃあああああああでああああああ……!!」

相良「すまん、ワイト。こいつらオバケの類に弱くて」

俺に話してきたのはこの世界の住人の「ワイト」

この世界で一番多い種族だ。

ワイト「おっほっほ。最近の若いのは脅かしようがありませんなあ」

相良「あはは・・・取り敢えず皆、大丈夫だ。この人（？）は俺の知り合いだ」

全員「は・・・はあ・・・」

それでもみんなは俺達と若干距離を置いている。

ワイト「はあ・・・そんなに怖いですかね？私は・・・」

ゾンビがすねてる・・・

相良「いやいや、まあオバケ系が苦手な人は秀囲気からまず駄目だからな・・・」

ワイト「そうですね・・・。それよりも相良翔さんはここに何の「用で？」

相良「ああ。ここのモンスターの数が増えているって情報があったきたんだけど・・・何かあったのか？」

ワイト「・・・恐らくそれは、復活してしまったからでしょう・・・」

相良「え？復活？」

俺がそう聞くとワイトはコクリと頷き、言い始めた。

ワイト「このアンデット・ワールドでは、馬頭鬼やゾンビ・マスターが何体か復活しておりまして今では新たなモンスターが生まれてしまう始末……」

相良「なるほど……それで、どこが発生源なんだ？」

ワイト「発生源なら、ここから北に1キロの場所に行くといいでしょう。私の様な弱いモンスターは進むことのできない場所ですが、あなた様なら……」

相良「弱いモンスターなんて言うなよ。この世界に来たときに俺に道を教えてくれたのはお前だ。感謝してる」

そう。一番最初にこの世界に来たとき、俺は道に迷って何もできずにいた。

そんな時に声をかけてきたのがワイトだった。

おかげでこの世界から脱出できたし、この世界の事も知ることができた。

ワイト「……とんでもございません。私は当然の事をしたまでです」

相良「そうか……。それじゃ、あとは任せてくれ。俺たちでこの事件を解決させるよ」

ワイト「武運を祈っております」

相良「ああ。．．それじゃみんな。行くぞ！」

全員「はい」

そう言っただけ俺達はワイトの言う通りの方向に進んでいった。

相良「．．．!?皆とまれ!!--!!」

全員「!?!」

突如、上空から青紫色の炎が降り注いできた。

相良「ロード!モード「刀」!」

ロード「了解です!」

ロードの形が刀に変形して、俺は刀身に魔力を込めて防壁を作った。

相良「スターダスト・ブロック!」

巨大な白銀の防壁は炎を防いだ。

相良「皆!敵はもう来てるぞ!」

全員「はい!」

リオナ「レイド!...!」

アインハルト「ティオ!...!」

リオナ・アインハルト「セット。アップ！！！！」

二つの光が二人を包み込んだ。

そして中からツーサイドの髪型でオトナモードになったアインハルト。

リオナは服装が真っ赤な和服に両手に刀を持っていて、髪がたは真っ赤なサイドテールになっていた。

相良「へえ。それがアインハルトの新しい姿か。かわいいじゃん」

アインハルト「あ／＼／＼ありがとうございます／＼／＼」

ロード「マスター。軟派している時ではないですよ」

相良「してるつもりなんてないんだが・・・まあいいや。行くぞ！」

そう言っつて俺達は分かれて戦いを始めた。

相良「白刀技・銀翔抜刀!!」

勢い良く迫り来る大量のゾンビ共を切り飛ばしていった。

相良「モード「二丁拳銃」!!」

そう言つて二丁拳銃の姿にロードを変え、更に速攻で銃弾を放つた。

相良「ソニック・スター・クラスタ瞬間の流星群!!」

全身をコマのように回転させながら銃弾を放ち、ゾンビ共を一掃した。

だが、数は減らず、全体にゾンビだらけになっている。

相良「おいおい・・・俺達がくるのを分かったのか!？」

ロード「その可能性はとても高いですね。狙いは私達の全滅。またはマスターが狙われるでしょうね」

相良「となると・・・来た来た・・・」

雑魚兵のゾンビ共が後ろに下がっている。

きつと強い奴がくるんだ。

その予想が当たるかのように、青紫の炎を纏った龍と獣が来た。

相良「おいおい・・・マジかよ」

俺・・・勝てるか不安になってきた・・・

相良「俺は相良翔。お前らの名前は？」

獄炎「我が名は邪神機 - 獄炎」

不死竜「レッドアイズ・アンデットドラゴン真紅眼の不死竜」

相良「えっと、お話で何とかならない？」

獄炎「不可能とこちらが判断した」

相良「いや、他の住人が困ってるんだけど・・・」

不死竜「関係ない。我々は陸宙管理本部総裁相良翔の抹殺を命じられている」

獄炎「だから殺す。それだけだ」

そう言つて2体は俺に向かつて青紫色の炎を吐いた。

相良「くっ！ロード！モード「凍結刀」！」

ロードの刀から冷気が出てきて、斬撃を放つと、炎を凍らせた。

獄炎「ほう・・・炎を凍らすか・・・」

相良「戦いは・・・始まつたばかりだろうか？」

絶望的な状況で見せる奇跡（前書き）

俺達は分断され、大量の敵が襲いかかってきた。

状況は絶体絶命。

だが、そんな中でも勝つことある。

それを人は奇跡と呼ぶ。

俺達は・・・その奇跡を掴めるのか・・・

そして危機的状況の中、俺は一筋の光を・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty） 始まります。

絶望的な状況で見せる奇跡

芳乃 Side

芳乃「神討つ拳狼の蒼槍!!」
フェンリスヴォルフ

アインハルト「霸王断空拳!!」

リオナ「雷討つ刀虎の一閃!!」
ライトニング・スラッシュ

3色の攻撃が周囲にいるゾンビ共をなぎ払っていく。

だが数は一向に減らない。

芳乃「サクラ!何発まで撃てる?」

サクラ「今日は3発までが限界なんだよ」

芳乃「分かった。リオナ!サクラの近くにいろ!サクラの攻撃の瞬間までサクラに敵の攻撃を受けさせるな!」

リオナ「分かった!」

サクラの攻撃は強力だ。

だが強力であるが故に、それが一つの弱点でもある。

サクラが使う技は最強故に魔力の消費が激しい。

魔力量はその日のコンディションや魔力回復の時間にもよるが、回数に限られている。

しかもこのへっぽこ兵器、強力過ぎる技しか覚えていないため、一つの攻撃のタイミングがかなり重要になる。

だから俺が考えて状況を作り上げてサクラの攻撃で一掃する戦法だ。

だが今回は数が多過ぎる・・・

一点に纏めて一掃するのは無理だ・・・

なぎさや紗雪がいてくれればどうにかなったかもしれない・・・

だからリオナの武器でサポートしてもらおうしかない。

しかも翔さんは強力な敵を一人で戦ってる。

俺たちもなんとかして助けねえと・・・

芳乃「アインハルト、行けるか？」

アインハルト「もちろんです。まだ始まったばかりですし」

芳乃「よし　　ならアインハルトは翔さんの方向に向かって攻撃を続けてくれ。俺達がその道を作る！」

アインハルト「はい！」

そう言っつてアインハルトは翔さんの方に向かって、ゾンビをなぎ払いながら行った。

俺もそれをサポートした。

だが、彼女に迫る刃があつた。

芳乃「！あぶねええ！」

アインハルト「え……」

アインハルトの首元に刃が近づいていた。

芳乃「

『ダ・カーボ復元する世界！！！！』

」

この一言で、アインハルトを“相良翔のもとに向かう前”の状況に戻した。

つまりアインハルトは翔さんのもとに行く前、つまり進む前の場所に転移させた。

そしてそのまま俺はアインハルトを狙った奴に向かって技を放った。

芳乃「グリモワール七つの大罪！！！」

7色の宝石をだし・・・

芳乃「レヴィアタン『i n v i d i a』」

橙色のレーザー光線を放った。

それを奴は受けたが、何も無かったように俺の方を向いた。

芳乃「てめえ……一体何ものだ!?!」

蒼い龍の上に乗る蒼い騎士甲冑を付けた騎士。

黒騎士「俺の名前はブラックナイト・オブ・ダークネスドラゴン「闇竜の黒騎士」。この世界の竜騎士だ」

芳乃「俺は芳乃零二。陸宙管理本部囑託魔導士だ」

自己紹介が終わったところで俺は拳を構えた。

芳乃「それで……俺達を襲う理由は?」

黒騎士「相良翔の抹消。そう“依頼”されている」

依頼……誰かが指示したってことか……

芳乃「だけど……そんな事はさせねえ。俺たちが阻止してやるよ!」

そう言っただけ俺は七つの大罪を展開させたまま、全身に蒼い魔力を込めた。

黒騎士「面白い……やってみろ!」

芳乃「言われなくても!?!」

そう言っただけ俺と黒騎士はぶつかりあった。

アインハルト Side

アインハルト「わ・・・私は・・・」

気づくと私は翔さんのもとへ向かう前場所に立っていた。

芳乃さんに助けられたようです。

ですが、敵の数は増えている。

私たちはそれを倒すしかない。

サクラさんが決める一撃を願い、私は拳を振るった。

アインハルト「霸王旋翔拳！！！」

拳から砲撃を放ち、ゾンビを一掃した。

アインハルト「このまま翔さんのもとまで届けb」皆俺に構わず、自分の戦いに集中しろ！！」翔さん！？」

翔さんが私たちに向かってそう叫んだ。

相良「俺の相手はお前らが勝てる相手じゃない！だから来ても邪魔だ！自分たちの戦いに集中するんだ！」

そう言っつて翔さんは戦いに戻った。

アインハルト「・・・なら」

ならば、私達のすることは一つになる。

全力で、目の前の敵を倒す

アインハルト「はああああ！！！」

私は更に力を込め、拳を振るった。

相良 Side

相良「ぐっ!?!」

俺は地面に叩きつけられた。

ロード「マスター!?!」

心配そうな声をかけてきやがって・・・

相良「大丈夫だって。この程度・・・」

そう言つて俺は立ち上がり、抜刀術の構えをとつた。

相良「氷刀技・銀翔抜刀!?!」

白銀の氷の斬撃が龍と獣に放たれた。

不死竜・獄炎「地獄の炎!?!」

青紫色の炎を2体が放った。

二つの攻撃はぶつかり合い、水蒸気を発生させた。

相良「く……何も見えないな……」

そう思った俺は上空に飛んだ。

不死竜「甘いな……」

相良「な……」

上空に上がると、竜が炎を放った直後だった。

防御が間に合わない俺はそれを直撃で受けた。

悔しいがその通り。

このままなら、俺は終わる。

『あなたは、勝ちたいですか？』

相良「……」

光が見える。

真っ暗な、地獄の世界で……一筋の光が見える。

そして……誰かの声が聞こえる。

『あなたが求めるのなら、私が手伝いましょう』

手伝ってくれるのか!?

『ええ。ですが、あなたを見極めます』

見極める?.

『あなたに、全てを任せて良いか・・・私自身があなたと
共にいることで、それを見極めましょう』

全てね……。正直、そんなものはどうでもいい。俺はただ、負けられない理由があるんだ!!

『……良いでしょう。ならば、私を召喚しなさい』

……分かった。

相良「集いし願いが新たに輝く星となる。光指す道となれ！！！」

全員「！？」

天空に、一筋の光が差し込んだ。

それはまるで、この世を明るく照らす一つの星のようだ……

そして光から、1体の龍がその姿を表した。

相良「飛翔せよ！！！！スターダスト・ドラゴン！！！！」

その白銀に染まる体に、大きく羽ばたくための翼。

そして星のように輝くその姿。

不死竜「貴様……“選ばれし龍”の使い手か!?!?”

相良「行くぞ……スターダスト・ドラゴン!?!!”

絶望的な状況で見せる奇跡（後書き）

絶望の淵から見つけ出したのは、一筋の光。

掴んだのは希望の光。

星屑の龍が、戦場を明るく照らす。

星屑の龍が舞い降りし時（前書き）

絶望的な状況に現れた一筋の光。

求めるは守る力。手にするは星屑の龍。

手にした彼が起こす星の奇跡とは・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

星屑の龍が舞い降りし時

相良「スターダスト・・・ドラゴン」

俺のもとに現れたその龍は、俺を見つめていた。

相良「お前が・・・俺の龍、なのか？」

そう聞くと、龍は何も言わずに不死竜の方を向いた。

説明するよりも、今は戦いに集中しろと伝えたいのだろうか・・・

相良「・・・ロード。モード『刀』」

ロード「了解しました」

そう言うとロードの刀から冷気がでなくなり、刀のフォルムに姿を戻した。

相良「行くぞ！」

そう言っただけ俺は走りだした。

スターダスト「 シューティング・ソニック 」

相良「トライアングル・スラッシャー!!!!!!!!!!!!!!」

俺の3色の斬撃と龍の星屑を集結させたかのような閃光が放たれた。

獄炎「何……ぐあああああああ！！！！！！」

獄炎を始めとする、一通りのゾンビ共が俺たちの攻撃で消えた。

相良「強い……」

正直な感想だ。

今の一撃はとても強力だった。

龍の力……と言えはいいだろうか。

不死竜「まさか……他にも”選ばれし龍の使い手がいるとはな……」

？他にも……

相良「どうする？大人しく降参するか？」

不死竜「ふん。我がそのような真似をするとても？」

相良「だろっな。……!?!」

俺が切り込みに行こうと思ったとき、龍が俺の前にいた。まるで、俺に任せてくれと言っているような感じだ。

相良「……決めてこい。スターダスト・ドラゴン星屑の龍」

そう言うと龍は小さく頷き、不死竜と戦い始めた。

不死竜「ポルカニックヘル地獄の獄炎」

スターダスト「シューティング・ソニック」

二つの炎と光はぶつかり合い、大きな衝撃波を起こした。

それは大地を揺らし、空気を変え、天候をも変えるものだった。

相良「ぐ……なんて戦いだ……」

俺はこんな巨大な戦いを見たことがない。

ましてやこんな巨大な龍達の戦いは初めてだ。

俺は……あれに追いつきたい。

そう……思った。

相良「……」

だが俺は首振って今までの思考を忘れ、周囲の敵に集中した。

相良「悪いなゾンビ共。俺の新たな相棒の戦いを邪魔しないでくれ
！」

そう言っただけ俺は刀身に魔力を込め始めた。

相良「記憶情報処理
魔力情報統一圧縮」
損傷条件削除
魔力吸収開始

詠唱の様にそう言うと、俺の全身から白銀の光があふれ出て、刀と俺を覆った。

相良「これが……俺の……全力だ!!!!!!」

大きく刀を振りかぶり、俺は全身に纏った魔力を一気に刀に溜め、放った。

相良「
スターダスト・ブレイカー
星屑の聖光斬
」

巨大な光の砲撃は俺の周りにいた敵全てを消し飛ばした。

そして残るは何もなし。

相良「後は相棒^{スターダスト}

決めろ!!!」

そう言っつて俺は星屑の龍の戦いをみた。

不死竜「ぐうう・・・まさか、ここまで強いとは・・・」

そう言っつ奴の姿はもはや負けと思っつほどボロボロだ。

だが龍は全く傷ついていない。

これが実力の差っつてことか・・・

そして龍は俺を見た。

相良「・・・本気で決めるんだ。それが礼儀だ」

俺は静かにそう伝えると、龍は静かに頷き、不死竜の方を向き・・・
口に白銀の光を集めた。

星屑の籠」

『シューティングソニック
超音速の流星』

「

その光が、不死竜を貫き

消滅させた。

相良「……」

倒し終えた龍は俺のもとに着て、俺を見つめた。

まるで俺の心の中を見ているかの様な……そんな感じ。

相良「俺は相良翔。こいつは相棒のロード・オブ・ディフェン」

ロード「初めまして。ロードとお呼びください。スターダスト殿」

相良「宜しく。相棒」
スターダスト

そう言って俺は龍の頭を撫でた。

そして 後輩達の戦いを見た。

相良「後は お前らだけだぞ」

芳乃 Side

芳乃「おおおおおおお！！！！！！」

俺は右手に蒼い魔力を集め、奴を喰らう様に放った。

芳乃「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍！！」

黒騎士「ナイト・スラッシュ！！！！」

蒼き閃光と黒き一閃がぶつかり合い、爆発を起こした。

俺は距離を置き、七つの大罪で攻撃をした。

芳乃「サタンira」

黄色のレーザー光線を奴の乗っている竜の両目に放った。

直撃した瞬間、竜は慌てた様子で地面に落下した。

黒騎士「ぐあ！！・・・何が起こった・・・」

芳乃「あいつの視覚を奪った。それがあいつに背負わせた罪だ」

そして俺は七つの大罪を円を作るように集め、円の中心に7色の魔力を集めた。

芳乃「我に仇なす罪、浄化してやる
断罪せし裁きの虹ひかりその身に受ける

そして俺はその光を放った。

芳乃「
極光ジャッジメントの断罪者

7色の閃光は音速をも超え、2体を消し飛ばした。

アインハルト Side

サクラ「OKだよ!!」

リオナ「充填 いつでも行けるよ」

私達女子達は両手に、両刀に、拳に魔力を込め、一斉に放った。

サクラ「穢レーヴァテインれなき桜光の聖剣！！！！！！」

リオナ「トル・スラッシュ全てを切り裂く雷！！！！」

アインハルト「はおうばじょうけん霸王拔翔拳！！！！！！」

3つの攻撃がゾンビ達を全てなぎ払った。

そして全てが消し飛んだ。

アインハルト「はあ、はあ、はあ、はあ……」

リオナ「終わった……」

サクラ「疲れたんだよ」

サクラさんはあまり戦っていなかったような……いえ、気にしたら負けですね。

相良「終わったみたいだな」

アインハルト「翔さん!？」

背後から翔さんが現れた。

そして翔さんの後ろにいる巨大な龍……

相良「お疲れ」

アインハルト「お、お疲れ様……です」

相良「?どうした?」

アインハルト「えと……その後ろにいる龍は一体……」

相良「ああ。こいつは俺の新しい相棒の「スターダスト・ドラゴン星屑の龍」だ」

リオナ「デカイい〜」

サクラ「カツコイんだよ!」

二人は眼を光らせている。

芳乃「終わったみたいだなあ〜」

サクラ「マスター!お疲れ様なんだよ」

相良「芳乃も終わったみたいだな」

芳乃「はい」

相良「さて、それじゃ中心部に向k・・・!?!」

全員「!?!」

突如、私達の目的地から巨大な紫色の光が表れ、私達を飲み込もうとしていた。

相良 Side

相良「何だ・・・あれは!?!」

ロード「解析完了。あれは先ほど倒した不死竜達の魂が集結して爆発する現象のようです」

おいおい・・・どんだけ危険な奥の手を隠してるんだこいつら・・・

相良「皆下がってる!?!」

そう言っスターダスト・プレイヤーて俺は今一度SDBの発射準備を始めようとした。

「何故そこまでするの？」

声……スターダストのか！？

「何故あなた一人でそこまで無茶をするの？」

別に無茶と思っただ事はないんだけど……つか俺一人じゃなくて、
ロードも一緒だ。

「だとしても、少女達の手も借りて良かったと思わないの？」

俺は総裁だ。皆を守る義務がある。

それに、俺は誰かに守って貰うのが嫌いだな。だから俺とロードでどうにかしたくなる。

「無謀だね」

確かにな。でも
んだけど？

それは“諦める理由”にはならないと思う

「！・・・あなたは本当に面白い人だね」

お褒めの言葉として受け取るよ。そんじゃ、頑張りますか！！！

相良「星屑の・・・」

「その必要は無いよ」

?

「私が

あなた達を護るから」

スターダスト」

ヴィクティム・サンクチュアリ

」

強い白銀の光が、俺たちを包み込んだ。

それはまるで
「絶望」から護ってくれる「希望」の様に・・・

そして俺はそこで意識を失った。

星屑の龍が舞い降りし時（後書き）

何かの始まりを感じた。

それは、新たな出会いと戦い。

そして 新たな物語の幕開けを伝える様に・・・

龍と龍使いの使命（前書き）

彼の新たな仲間との戦いが終わり、龍のもう一つの姿を見る。

そして聞かされる、龍使いの使命。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infin
ity） 始まります。

龍と龍使いの使命

相良「……ん」

眼を覚ますと、俺の視界には真っ暗な空と、一人の女性の顔が目に入った。

???「目を覚ましたようですね」

相良「君は……」

髪は白銀と翠が混ざった色。

髪型はロング。

風でふわっと広がるキラキラとした髪に見惚れそうになった。

胸は大体Dカップと言った所だろうが、まあ俺は興味ない。

スタイルが良いなとは思うな。

……?つか、俺って今その人に膝枕されてるのか?

相良「あ、ごめん」

そう言っただけ俺は起き上がった。

???「いえ、あなたの龍として当然のことです」

相良「……え!？」

龍「……って、まさか・

相良「君が・・星屑の龍!？」

そう言うと彼女は立ち上がった。

服装は巫女服で、白衣と青緑の袴を着ていた。

???「ええ。私が、先ほど戦った星屑の龍と呼ばれる者です」

相良「呼ばれるって、そう言う名前なんじゃないのか？」

そう聞くと彼女は無言で首を横に振った。

???「私には名前が存在しません。だから・・私に名前を下さい」

相良「お、俺が名付け親になるのか!？」

???「ええ。あなたは、私使いし者なものですから、当然です」

そ・・・そういうものなのか・

相良「でも・・俺、名前を付けるセンス0だからな・・」

ロード「大丈夫ですよマスター。評価は私も手伝います」

相良「お・・・おう」

何だこのプレッシャーは!?

名前か・・・うん・・・

スターダスト・ドラゴンって名前があるから離れたのは嫌だな・・・

・・・

・・・

うん。これしかないな。

相良「こんなのしか思い浮かばないけど、良いかな？」

?????「ロード」?

相良「『エトワール』……どうかな？」

ロード「『^{エトワール}星』ですか……マスター」

相良「何だ！？」

最悪とか言われるかな！？

エトワールとはフランス語で星と言う意味がある。

スターダスト・ドラゴンと言うのだからその星屑を使いこなす一つの星と言う意味を込めてなんだけどな。

ロード「マスター。最高じゃないですか！？」

相良「うえ！？マジ！？」

良かったな！！

……でも、後は本人だ。

相良「君は、どうかな？」

「……？」「あなたの付けた名前なら、私は嫌じゃないです。それに、私も良い名だと思います。ありがとうございます……私は、あなたを何と呼べば良いでしょうか？」

相良「えっと、普通に『ご主人様』・・・ロード。お前ジェイルに分解されたいのか？」

ロード「申し訳ございません!!!!!!!!!!!!!!」

こいつ・・・趣味持ち込み過ぎだ・・・

相良「みんなは俺を翔とか翔さんとか呼ぶから、それで良いよ」

エトワール「では／／／その／／／／ご主人様で／／／／」

恥ずかしそうにそう言った。

相良「・・・ロードの分解ショーをこれから行います」

ロード「私のせいですか!？」

相良「どう考えてもそうだろ!!!!!!!!!!」

「たたくこいつは・・・」

相良「えっと・・・本気でそうするのか!？」

エトワール「ええ。結局のところ、ご主人様と言うのも事実なので、すし、それで良いですよ」

相良「・・・ま、任せるけどな」

エトワール「私の事は、『エトワ』とお呼び下さい。ご主人様のみ、

そう呼ぶ事を許しましょう」

相良「ありがとう。これから宜しく、エトワ」

そう言っただ俺は右手を差し出した。

エトワール「？」

何故手を出されたのか分からないという表情をしていた。

相良「えっと、エトワも俺の手を握るんだよ。それを、「握手」って言うんだ」

エトワール「握手……」

そう言っただエトワは俺の右手を右手で優しく握った。

エトワール「宜しく……お願いします。ご主人様。ロード」

ロード「よろしくお願いします」

相良「ああ。宜しく」

アインハルト「ん・・」

相良「やっと起きたか」

アインハルトに続き、芳乃やサクラも眼を覚ました。

リオナ「!?!?その女性誰!?!?ちようカワウイ!?!?!?!」

そう言っつてリオナはルオン三世の様にエトワに向かって飛び込んだ。

エトワール「ふっ!」

そう言っつてエトワはリオナの懐に一瞬で回り込み、アッパーをした。

リオナ「がふっ!?!?」

5mほど飛ばされ、地面にキスをした。

相良「せっかく目覚めたのに・・」

レイド「申し訳ございません」

レイジング・ソードが謝っつてる・・・

相良「そんな事はさておき、さっきの光の爆発を防御したのはエトワカ？」

エトワール「ええ。私は「破壊」を無効、または阻止する能力があります」

相良「そんじゃさっきのは、俺たちが爆発による破壊・・・つまり死を護ったってことか・・・」

エトワール「いかにも。能力には限界がありますが、今の状態でも皆様をお守りできます」

護る龍か・・・

相良「あ、そういえば最初エトワは俺に見極めるって言ってたけどさ、何の為に見極めるの？」

エトワール「私達の力は強力故に、使用者の精神力や想いがとても大切なのです」

相良「なるほど。使用者が力に溺れて暴走しかねないからな」

エトワール「その通りです。だからこそ、私はご主人様との会話をすることで、ご主人様と共に生きること、それを見極めるのです」

相良「見極めて・・・どうするんだ？」

エトワール「龍^{わたし}と契約し、未来永劫を共に生きるのです」

相良「!?!」

それはつまり・・・

相良「俺とお前は・・・一つの繋がりを得るのか・・・」

エトワール「はい」

なんか・・・不思議な気持ちだ。

もしエトワが俺を認めれば契約し、最期まで一緒に生きる。

失敗すれば、きっとエトワは独りになる。

だとするなら、俺は頑張らないといけない。

相良「……めんどいなあ……」

全員「え!?!」

皆が驚いて俺を見た。

ロード「マスター、空気を読んでくださいよ……」

相良「いや、本当に面倒いんだもんよお……だってお前、俺はそんなに有能じゃないし、すごい人じゃない。なのに頑張ってるような人になれだど!?!……難しいだろ……」

ロード「とはいえ、マスターは頑張るしかないですよ」

相良「まあな。……ま、頑張るさ」

エトワール「軽い考えで言わないようにお願いします。契約とは、ご主人様と私を繋げると言うことなのでから」

全員「え!?!」

それは……つまり……(詳しくは18禁レベルなので言えませ

ん)

相良「な、なるほど……。でも、俺は軽い気持ちで契約なんてする気はないし、共にいるように努力するよ。せつかく出会えたんだからな」

そう。せつかく出会えて、別れなんてさみしいからな。

エトワール「……。そうですか。なら、頑張ってください」

相良「はいはい」

きつと、それが俺の使命なんだ。

出会ってしまったのは1体の龍であり、一人の女性。

俺は、彼女を幸せにする。

もし今まで独りぼっちでいたのなら……。それはとてもさみしい」とだから……

相良「さて、帰るぞ」

全員「はい！」

という事で、俺達は陸宙管理本部に戻っていった。

そして物語はヴァン達のもとへ・・・

キャラ+デバイス紹介

エトワール CV 青葉りんご

星屑の籠 (スターダスト・ドラゴン)

年齢が16歳ほどの女性。(実年齢はかなりあるらしい)

身長165cm程

服装は巫女。

白衣に青緑の袴を着ている。

髪型は白銀に翠を混ぜたような色のロング。

能力 『星屑の加護』

『破壊』を防ぐ・無効にできる。

契約者の体力と傷を癒せる。

契約者に能力を渡すことができる。ただし、能力には限界がある。
魔導士を見ただけでその能力やステータスが分かる。
覚えた情報を契約者に渡すことができる。

容姿

- ・病弱な女の子の様な細身の体をしている。
- ・ぼーっとしてそうな表情をしている。

デバイス紹介

ニルヴァーナ 使用者「ヴァン」スカイ」 CV 平野綾

形状 ガントレット グローブ

魔術形式 ベルカ式 ミッド式 ただし、組み合わせでの使用はできない。

不屈の刀 レイジング・ソード 使用者「リオナ」カミナ」 CV 右田彰

形状 刀

魔術形式 ベルカ式 ミッド式 ただし、組み合わせての使用は
できない。

過去の物語と、一つの決断（前書き）

相良翔が自らの新たな使命を知ったちょうどそのとき、もう一人の少年はある決断をする。

明かされる過去と、今しなければいけない少年の決断とは……

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

過去の物語と、一つの決断

ヴァン Side

僕たちは今「竜の渓谷」と言う谷にいる。

そこに着いたとき、何体もの竜や鳥獣が僕たちを襲いかかってきた。バラバラに別れ、僕は上空に上がり、機械の形をした鳥獣と戦っている。

ヴァン「ストームストライク神風討つ拳鳥の緑槍！！！」

上空に高く飛びながら僕は拳をぶつけていた。

クラウド・ソラス「イタクアの暴風！！！」

相手は翼を大きく羽ばたかせ、強い突風を僕に放った。

両者はぶつかり合い、僕が少しずつ押しして奴に拳を当てる。

ヴァン「はあああああああ!!!!!!!!!!」

クラウ・ソラス「ぐうう!・・・貴様、中々強いな」

そう言いつつも奴には傷ひとつついていない。

どれだけ頑丈な体をしているんだ・・・

ヴァン「ニーナ!」

ニーナ「わかってるわよ!」

そういうと拳ニーナから緑色の魔力が出てきて、僕の拳を覆った。(簡単
に言えば超死ぬ気モードのツナである)

ヴァン「いくぞ・・・」

そう言って僕は駆け出した。

「消えて」

クラウ・ソラス「ぐあああああああ！！！！」

ヴァン「！？」

僕が奴に攻撃しようとした直後、天空から緑色の光が奴に向かって降ってきた。

そしてその光は奴を食おうと言わんばかりに包みこんで、消し去った。

ヴァン「何だ……今のは……」

助かったといえば助かった。

だけど、あの魔力光の色・

ニーナ「あの魔力光・・・あんたと同じね」

そう。僕と同じ緑色なんだ。

理由はわからない。

ヴァン「誰だ！！誰が今の光を出したんだ！！出て来い！！」

そう叫ぶと・・・

「私だよお兄ちゃん」

ヴァン「は！？俺には・・・妹なんていないぞ！？」

ニーナ「あなたの趣味にしては酷いしね」

ちよつとニーナ！？今の状況分かってる！？

「・・・今、姿を見せるよ。そうすれば“思い出す”から」

ヴァン「・・・」

思い出す？

俺は・・・何を忘れてるんだ？

すると僕の前に緑色の光が集まってきた。

そしてどんどん光が晴れて来て、中から一人の女の子が現れた。

身長はだいたい150cmで胸はBカップ程。ほんとうはDカップ程。

服装は薄い緑のワンピース。

髪は僕と同じ緑色のポニーテール。

薄い緑と薄い碧色の目をしている。

その子が、デバイスも持たず、ただ宙に浮いて僕に話しかけた。

「???」「やつと会えた。お兄ちゃん」

ヴァン「君は誰だ？僕に兄妹はいないはずなんだけど？」

すると彼女は真剣なまなざしで僕に言った。

スイエル「・・・私はスイエル」スカイ。「お兄ちゃん（ヴァン」スカイ）の妹だよ」

ヴァン「!?!?!?・・・スイエル・・・」

その名前が、僕の頭を駆け巡り、記憶の奥に封印されていた扉を開けた。

そして僕の頭の中で始まったのは、ある物語

昔、一人の少年と一人の少女がいました。

二人は兄妹の関係で、いつも仲良く過ごしていました。

「絶対にいなくならない？」

少女がそう言うと少年はコクリとうなずいた。

「じゃ約束！」――

そう言って少年と約束した一人の小さな女の子。

それから数カ月後、少女は難病を患い、死にかけていた。

「私……死ぬみたいなんだ」

「今まで……ありがとね……お兄……ちゃん」

気づくとその子は病院で死んだ。

お兄ちゃんと最後まで言うことができずに……死んだ。

ヴァン「まさか・・・君が・・・」

その頃の女の子に、今日の前にいる女の子は瓜二つだ。

何も変わっていない・・・

スイエル「やっと思い出してくれた？」

ヴァン「それじゃ・・・本当に・・・」

スイエル「うん」

彼女は優しい笑顔でそう返事した。

ヴァン「だけど・・・君は死んだはずじゃ・・・」

スイエル「・・・うん。一度死んで・・・生き返ったんだよ」

ヴァン「どうやって・・・!」

言い切る前に、なぜか思い出した。

少女が亡くなったその日、少年は眠っている少女の前にいた。

強い決意を持って・

「僕が・絶対に助けるんだ!!大切な妹だから!!!!!!」

「はあああああ!!!!!!」

少年が死んだ少女の胸に両手をおいた。

すると少年の全身から緑色の光が出て、両手を伝って少女の全身を包み込んだのです。

そして少年はその場から姿を消しました。

そして物語は終わった。

ヴァン「まさか・・・俺が・・・」

スイエル「うん。そうだよ。お兄ちゃんが私の命を蘇らせてくれた。お兄ちゃんはその呪文発動後の衝撃で私のもとからいなくなったの」

ヴァン「それじゃ・・・僕は・・・」

次元漂流者になり、記憶を失っていた・・・

スイエル「だから私は、お兄ちゃんの迎えに来たの」

ヴァン「迎えて・・・僕の帰る場所は・・・」

コロナのもとしか、僕の帰る場所はない。

スイエル「お兄ちゃんには悪いけど、彼女……コロナはお兄ちゃんと一緒にいれば必ず殺されるよ」

ヴァン「!?それはどういう意味だ!？」

コロナが殺される!?!俺のせいだ!?!原因が分からない!!

スイエル「私たち「スカイ」の一族は禁術を幾つも持っている。それはお兄ちゃんも同じ。現に私を生きかえさせたからね。禁術を悪用する者は、どんな世界にもいる。だから彼女が^{コロナ}お兄ちゃんと一緒にいれば、人質に捕られることもあれば、命を狙われることだってあるの」

ヴァン「そんな……」

僕のせいだ……コロナが……死ぬ

スイエル「お兄ちゃん。帰ろうよ。私たちの住む世界に」

ヴァン「……」

全てが突然すぎて、頭では整理できない。

僕には妹がいて、妹を生き返らせて、妹は僕を連れ戻しに来て、戻らないとコロナの命が無い。

ヴァン「……俺がコロナから離れれば、コロナが救われるんだな？」

スイエル「うん。それは保障するよ。お兄ちゃんがみんなから離れれば、みんなが救われる」

ヴァン「みんなが……救える」

みんなが救えるなら、僕一人が消えても……問題ないよな。

ヴァン「分かった」

スイエル「うん。ありがとう……お兄ちゃん」

そう言って僕とスイエルは手を繋ぐと、光に包まれて消えた。

過去の物語と、一つの決断（後書き）

僕は誰も傷つけない。

それが、自分が原因なら尚更だ。

だから僕は、みんなから離れて、みんなを救うと決めた。

みんな・・・さよなら。

武偵憲章と信じれる仲間がいるから（前書き）

一人の少年が決断をしている最中、彼らは戦っていた。

絶望的な状況を仲間との力で切り抜け、勝利を手にするために・・・

信じれる仲間がいるから・・・信じれる相棒がいるから・・・

この全力を持って、戦う。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty } 始まります。

武偵憲章と信じれる仲間がいるから

谷島 Side

突如襲い掛かってきた敵と俺たちは分かれて別々で戦っている。

女子たちは雑魚共を一掃してくれている。

谷島「エルリヤ!!」

今読者の中に「イタリアじゃね?」と思った奴はぶったたくから覚悟してる!!

俺のデバイスであるエターナル・リヤンは「デザート・イーグル」
二丁になり、俺の両手に握られている。

俺は茶色の魔力を銃口に集め、銃弾にそれをまとわせながら放った。

谷島「ジャッジメント・アース大地が裁く罪の銃弾！！！」

その銃弾は茶色の光の道筋を残しながら、不規則な軌道を描いて三角形の3つのリボルバーがある巨大な機械竜「リボルバー・ドラゴン」に向かっていった。

リボルバー・ドラゴン「リボルバー・ショット！！！」

3つの銃口から巨大な3発の銃弾が放たれた。

リボルバー・ドラゴン「これで貴様のヘナチヨコの弾丸を破壊してくれる！！！」

・・・いまどきヘナチヨコって言葉はどうかと思うのだが・・・

谷島「お前・・・本当に馬鹿だな」

リボルバー・ドラゴン「何だと!？」

谷島「お前が弾丸を放つなんて誰でも分かるんだよ。そんな中で俺が銃弾を放ったかを何故考えない？」

そう言うつぶつかり合いそうだった銃弾は、俺の銃弾がかわして俺は飛んで奴の銃弾を避け、俺の銃弾は奴の左右の銃口の中に入って

爆発した。

リボルバー・ドラゴン「ぐあっ！！！！」

谷島「銃VS銃なら先に銃を破壊したものの勝ちだろ？」

リボルバー・ドラゴン「貴様・・・」

怒りに満ちた声で俺をにらんでいた。

まったく怖くないな・・・

谷島「お前は考えて銃を撃たないから俺に勝てないんだ」

そうやって俺は二つの銃口に魔力を集結させた。

リボルバー・ドラゴン「ほざけ！貴様など、わが銃弾で穴だらけに

してくれる!!」

そう言っつて奴も残った銃口に力を集め始めた。

谷島「ジャッジメント・フレイカー十字架の制裁弾!!!!」

リボルバー・ドラゴン「ラスト・リボルバー・ショット!!!!」

2色の砲撃が放たれ、ぶつかり合った。

だが、俺の砲撃は突如軌道を変え、二つに別れて奴をクロスするようにつつかった。

リボルバー・ドラゴン「何……ぐあああああ!!!!」

奴は十字架の砲撃に消し飛ばされた。

谷島「・・・マジか」

そんなことは、俺にとってはどうでもよかった。

なぜなら・・・その爆発の煙が消えたとき、煙の中から巨大な竜が現れたからだ。

しかもこいつからは・・・さっきの雑魚とは比べ物にならない強さを感じる。

この威圧感に、圧倒的存在感。

谷島「お前・・・いつたい何者だ！」

タイラント「俺はタイラント・ドラゴン。先ほどは俺の仲間が世話になったみたいだな」

谷島「・・・それで、どうしてこんなことをしてるんだ？」

そもそも俺たちがここに来た理由は最近頻発している竜同士のぶつかり合いの原因調査と解決なんだけども・・・

タイラント「理由はある者に“依頼”されたからだ」

依頼・・・つまりこれは・・・

谷島「俺たちを倒すための・・・買ってことかよ」

タイラント「察しが良くてなにより。それでは、死んでもらおう」

谷島「断る！」

そう言っただけは両足に魔力を集中、爆発させることによって高速で走る事を可能にし、その脚で奴の周囲をグルグルと高速で走り回った。

タイラント「ほう・・・目くらましか・・・」

そして俺は銃を構え、走りながら銃弾を何発も放った。

谷島「アトミック・スコール大地裁く銃雨！！」

大量の弾丸が奴に襲い掛かる。

タイラント「ぐっ・・・だが、この程度では・・・」

そう言っただけは奴は翼を折りたたんで、一気に広げ、その時の衝撃波を全体に広げた。

タイラントドラゴン・ショックウエーブ「巨竜の羽ばたき」

全体に広がる衝撃波は俺に直撃して俺は吹き飛ばされた。

谷島「ぐっ……」

俺は飛ばされ、崖のギリギリの所に倒れた。

今……. すごい痛いんだけど……

タイラント「まさに崖っぷちだな」

谷島「ドラゴンのくせにうまいこと言っなよ……」

そのとおりといえばその通りだけどな。

谷島「うっ……」

やべ、さっき吹き飛ばされたときに足の骨やられた。

動かねえ……

タイラント「さあ、ここで死ね」

そう言って奴は口に炎を溜め始めた。

もう・・・駄目か。

ここまできて、負けるのか・・・

力の差がある。俺の方が弱い・・・

なら、負けて当然か・・・

し

.
.
.

まだだ！！！！！

谷島「武偵憲章10条『諦めるな。武偵は決して、諦めるな』だから……諦めねえ！！」

俺は、武偵の人間でもあるんだ！！！！

タイラント「だが、この状況でどう勝つつもりだ？」

そう。あと少しで奴は炎を吐く。

下半身が動けない俺にできることは、狙撃しかない。

だからこそ

俺は“スナイパー彼女”のそげき登場を祈った。

?? Side

谷島芳樹からやく1キロ離れた場所で、ドラグノフのスコープを覗き、狙撃準備をしている一人の女子がいた。

緑色のショートにオレンジ色のヘッドホンを付け、黄金色の瞳をした無表情の少女は、1キロ先にいる彼を捉えていた。

??「（私は一発の銃弾、銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目的に向かって飛ぶだけ）」

自己暗示をした女子は銃弾に白っぽい魔力光を纏わせて放った。

?? 「フイーリング・ショット・ゼロ
無感情の銃弾」

そして2発の銃弾が放たれた。

谷島 Side

谷島「！・・・来た来た・・・」

背後から感じる2発の銃弾。

しかもこの魔力光・・・

タイラント「？どうした？命声でもするつもりか？」

谷島「違えよ。俺の・・・いや、俺たちの勝ちが決まったと思ってな。エルリヤ」

2丁拳銃は「バレットM82」へと姿を変え、俺は銃口を奴の額にある緑色の宝石に向けた。

タイラント「遅い！バースト・プレス！」

そう言っつて奴は俺に向かって炎を吐こうとした。

だが、奴の眼に向かって2発の銃弾がまるで流星のように向かって直撃した。

タイラント「ぬあああああ！！！！！！」

奴は炎を吐くのをやめ、両目を押さえた。

谷島「食らえ……」ジャッジメント・シューター「大地裁く罪の狙撃」！！！！」

茶色の銃弾は一直線に、奴の額の宝石に直撃して、その宝石を壊した。

タイラント「ぐあああああああ……!!」

そして奴は暴れまくった最期に、谷から見えない地上まで落下していった。

谷島「ふう……ありがとな。レキ」

遠くにいるであろう彼女にそう言った。

その後、全員で全ての敵を倒し、俺たちは集まった。

谷島「そんなじゃ紹介しとく。こいつがレキ。俺に狙撃を教えてくださいな奴だ」

レキ「……………」

彼女は黙って礼をした。

谷島「この通り無表情な奴だけど、根は優しいから安心してくれ。今日、念の為に呼んでおいて良かった……」

そう。ここに来る前、念のために狙撃科のレキを呼んでおいたのだ。

紗雪「そうですか……」

なぎさ「よろしく願いします」

イクス「・・・」

谷島「？イクス、どうかしたか？」

イクスの表情が優れない。

イクス「あ・・・ヴァンさんが・・・いないんです」

谷島「！」

あいつが・・・いない!？

レキ「先ほど、彼と同じ髪をした少女と共に消息をたちました」

珍しくレキがしゃべったことに驚く暇もなく、俺たちはあわてていた。

谷島「あいつ……いったい何があったんだ……」

俺たちはそのことを踏まえ、陸宙管理本部に戻っていった。

別れてでも守りたいもの（前書き）

ヴァンの謎の失踪に一同は驚くだけだった。

ただ一人を除いては・・・

彼が語る、ヴァン＝スカイとの出会いの日。

何故皆のもとからいなくなるのか・・・

それを知るのは、彼しかない。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y 始まります。

別れてでも守りたいもの

相良 Side

相良「えっと、取り合えず皆落ち着いて話を始めようか」

会議室に俺達AチームとBチームの全員と白雪、アリア、ルチア、ギンガ、ジエイル。そしてヴァンの恋人であるコロナがいた。

会議が始まる前から皆ヴァンの失踪に戸惑いを隠せずいた。

特にコロナは最初、顔を真っ青だった。

今でこそ落ち着いてはいるが、不安の色を隠せずいた。

相良「えっと、取り合えずヴァンの居場所はヴァンの持つデバイスであるーナにつけてある発信機を使って場所を特定する。だからすぐに見つかるぞ」

そう言うと皆の顔色が少しばかりよくなっていた。

・・・だが、皆が気にしているのはそのことではない。

そのことを言ったのは、イクスだった。

イクス「お兄様。ヴァンさんは・・・一体何故私達の元から離れたのですか？」

その質問をしたとき、皆の視線が一気に俺のもとに集中した。

相良「・・・はあ。取り合えず隠すことはできないな」

ジェイル「そのようだね。すべてを話しておくべきなんじゃないかな？」

ジェイルもそう言っているのなら・・・言つか。

相良「俺がヴァンを拾ったのは、3年前」

そして俺は、3年前のことを話し始めた。

回想

これは、俺とジェイルの2人とある次元世界の突如発生した次元震の原因の特定に向かったことだ。

相良「この辺だったよな？」

ジェイル「間違いないね。ここが次元震の発生地だ」

場所は何も無い砂漠。

ただあるのは、強い風と漂う血の臭い。

ロード「マスター。近くで生命反応があります」

相良「！場所は！？」

ロード「そちらを先に1000mです」

そう言っつて俺達はその先に向かった。

相良「いた・・・」

その時に俺とジェイルはヴァンにであった。

そのときは全身ボロボロだった。

相当酷い怪我をさせられたのだろうと思った。

だけど・・・不思議だった。

相良「どうして・・・笑顔なんだ？」

彼の表情は、何かに満足したような・・・そんな笑みだった。

ジェイル「それは後にして、取り合えず本部に連れて行くべきだと思うね」

相良「そうだな」

そう言っただけ俺は彼を背負って本部に戻った。

病室に運ばれ、彼は何とか一命を取り留めた。

だがシャマル達によれば、生きていることが奇跡らしい。

怪我の原因は禁術レベルの魔法の使用の代償らしい。

禁術を使って幸せな、満足な笑みを見せる・・・それって・・・

相良「こいつ・・・転生魔法を使ったのか!？」

「転生魔法」・・・文字通り死者を転生させる魔法だ。

魔法だけあってそう言うのも存在するが、その全てが大きな代償を支払い発動するという無謀な魔術で現在は転生系統の魔術・魔法の術式はトップクラスの「禁術」とされている。

・・・そもそも、死んだ命を復活させることそのものが間違っているけどな。

そして代償でもっとも大きいのは転生魔法。

死者を蘇らせる代わりに使用者を殺す魔法だって存在する。

だから少年が生きているのは・・・本当に奇跡なんだ。

相良「それで、こいつの名前とか分かるか？」

ジェイル「彼の血液系統から考えて・・・「スカイ」の一族だと思うね」

相良「！あの禁術を作り上げた一族か！？」

「スカイ一族」・・・その一族は今までにさまざまな禁術を作ってきた。

例えば「発動すればその使用者を不死身にさせる」または「不老不死の体にさせる」などだ。

もちろん「転生させる」も存在する。

禁術の開発や封印の二つを行うスカイ一族は、その高い知識と技術が原因で様々な組織に狙われるために土地を転々している。

確か現在はここクラナガンから5つほど星が離れた世界にいたって情報があつたけど・・・

相良「この歳で転送魔法なんて大技を使うなんて無理だろうしな・・・」

ロード「マスターのように、測定量オーバーの魔道士なら可能だと思えますよ？」

相良「まさか、こいつの魔力値は普通とは桁違いって言いたいのかな？」

ロード「いえ。ですが・・・考えられるのはそれしかないでしょう」

確かに・・・そう考えれば彼がこの世界に来たのも納得だ。

相良「でも・・・つまりこいつは次元漂流者ってことになる・・・」

そう。それはつまり、記憶の一部が消えている可能性があると言うこと。

次元漂流は人の脳に大きな刺激を与える時がある。

ま、次元漂流の衝撃による記憶情報への損傷・・・みたいなもんだ。

ようするに記憶が消えるんだ。

次元漂流で記憶を無くすことは良くあることだ。

でも・・・彼は禁術まで使用して助けた人の事を忘れている可能性がある。

もしそうだとしたら・・・とても悲しいことだ。

ロード「・・・彼が、眼を覚ましたみたいです」

相良「分かった」

俺は彼が記憶を無くしていない事を祈りながら病室に入った。

相良「起きたか？」

????「はい・・・それで、ここはどこですか？」

相良「ここは病院だ。お前が倒れていたから拾ってきた。俺は相良翔」

????「僕は・・・」

相良「・・・思い出せないか？」

そう聞くと彼は無言で頷いた。

相良「そうか・・・」

願いはかなわなかった。

叶わないから願いだと感じてしまっただけ、俺の願いは容易く崩された。

だとすると、願いを叶えられなかった俺がとる行動はひとつ。せきにん

相良「仕方ない。お前の記憶が戻るまで、俺が面倒見てやるよ」

????「え……」

突然のことですらどうしようとしていた。

相良「全てを思い出すまでだけど、俺のこと、兄貴でも何でもいいよ」

そう。俺は彼を一人にはしないようにする。

それから数ヶ月、ジェイルからとあう情報が届いた。

ジェイル「あの少年の名前が判明したよ。名前は「ヴァンンスカイ」
。失踪願いも出ているね」

相良「・・・そうか」

彼の情報は、すぐに分かった。

だから、彼がもとの場所にすぐ帰れると思っていた。

・・・だが、その考えもすぐに崩壊した。

ジェイル「彼の家族関係だが、彼の妹が失踪しているらしい。原因は不明」

相良「・・・そうか」

このとき、俺は確した。

ヴァンが禁術を使って助けたのは、妹だっということが……

それが分かったからこそ、この事をヴァンに伝えていいのか分からない。

もしヴァンの妹が死んでいたら……もし、一生会えないなんてことになったら……

そう考えたとき、ヴァンの努力が全て無駄に感じてならない。

そのせいもあり、俺は何もいえなかった。

それからしばらく、俺はヴァンの師匠になり、ヴァンを育てるなか、ヴァンの妹の捜索も続けた。

回想終了

相良「結局それからヴァンの妹への情報は0。やっと現れたと思ったらヴァンを連れて行くへを暗ますなんて・・・」

ま、ヴァンの妹の目的くらいは分かるけどな。

コロナ「どうして・・・私達に何も言わなかったんですか？」

相良「スカイ一族はその禁術の貴重さから、様々な組織に狙われているんだ。多分ヴァンは“俺達を巻き込みたくない”と考えて、決断したと思う」

あいつは責任感がとても高い奴だ。

だからこそ、自分のせいで大切な人が傷つくなんて・・・耐えられないことだろう・・・

相良「でも・・・ま、あいつはまだ分かってないよな」

そついうと、皆は真剣な表情で頷いた。

・・・よし！

相良「これからの活動方針を発表する。俺達はヴァン搜索と二つの謎の勢力の制圧。この二つを行う！意見がある奴いるか!？」

別にそんな質問はいらなかった。

なぜなら、皆の表情で全て分かるから。

相良「よし……始めるぞ!!」

全員「はい!!!!」

俺達は・・・最初から、彼を助けたいだけ・・・ただ、それだけ
なんだ。

3万PV突破!! (前書き)

今回はオリキャラと作者のIKAを混ぜた裏話的なことをします。

3万PV突破!!

IKA「なんとこの小説が3万PV更新いたしました!!!」

相良「たかが3万で喜ぶ必要あるのか？」

ルチア「作者しゅみが小説作る時間内から埋め合わせで作ったんでしょ」

IKA「おいこら！マジなことを言っんじゃないよ!!!」

ヴァン「マジなんだ・・・」

IKA「はっ！しまった！」

音使「普通に引っかかると言っね」

リオナ「哀れ哀れwwww」

谷島「ドンマイ」

IKA「あれ？俺作者なのにこんなにいじめられるってどっぴいっつ
と!？」

相良「これが現実だ」

ルチア「受け止めなさい」

IKA「納得いかん!!!」

ヴァン「駄々をこねないでください」

I K A「駄々こねてるわけじゃないんだけどな・・・orz」

音使「ドンマイ」

I K A「ドンマイって気にするなって意味なんだけど、わかって使ってる?」

音使「うん」

I K A「気にするなって言うけどさ、俺の使うオリジナルキャラたちに苛められれば誰だって気にしないわけにはいかないからな!!」

リオナ「ならいっそのこと、この小説を終わらせるといっ・・・」

I K A「それはだめだろ!!色んな意味でだめだよ!」

谷島「そんじゃ作者を別の人にするとか?」

I K A「とうとう俺の存在まで否定された!」

相良「これが現実だ」

I K A「さっきも同じことを言ったよね!」

相良「いや、事実だからさ」

I K A「ガーン!!!!!!」

ヴァン「あ、I K Aが体育座りで丸まって隅っこでぶつぶつ何か言ってる……」

I K A「どうせ俺なんてどうせ俺なんてどうせ俺なんてどうせ俺なんて……」

ルチア「あれに触れちゃだめよ！」

リオナ「穢れるもんね!!」

グサグサ!!

I K A「うつ……ガクッ」

ヴァン「あ、倒れた」

音使「哀れだなあ……」

谷島「死体^{あれ}どうするの？」

相良「取り合えず東京湾に捨てるか？」

ルチア「いや、いつそのことブラホの中」

全員「跡形もないな!？」

I K A「つか勝手に殺すな」

相良「何!？ “まだ”生きてたのか!？」

I K A「まだって何さ!？つか相良君？右手に持つその白銀の刀を仕舞おうか・・・俺に向けなくて欲しいな・・・ってか、魔力込めないでよ!！」

相良「大丈夫・・・すぐ、終わるから」

I K A「なんか色んな意味でやばいんですけど俺大丈夫か!？」

相良「大丈夫。I K A、ちよつと痛い・・・我慢できる?」

I K A「無理です!!!何がちよつとだよ!？あんた自分の力量わかってないでしょ!？」

ルチア「一々うるさいわね。取り合えず1回死になさい」

I K A「何でだよ!？」

ルチア「うざいから?」

I K A「何故疑問系?・・・あの・・・何故ルチアさんも刀に魔力集

めてるのかな？」

ルチア「え？おまけ」

I K A「それ収束砲のどこがおまけなんだよ！？おまけにしては危険すぎません！？」

ヴァン「ストームバインド風の拘束」

I K A「な！？・・・えと、ヴァン君も何で右拳に魔力を集結させてるのかな？」

ヴァン「僕のは・・・お釣りです」

I K A「全力全開が安っぽくなってることにいい加減気づけ！！あんたらマジで何考えてるの！？」

相良・ルチア・ヴァン「作者変更？」

I K A「だからどうして疑問形え〜・・・」

音使「それがお前の宿命なのだろう」

I K A「今俺はこの世に生まれたことを後悔したよ！！！！」

谷島「大丈夫。きっと良いことあるから」

I K A「ここまで甚振られてきたらもう信用できねえよ！！！！」

相良・ルチア・ヴァン「充填完了」

I K A「うえ……」

相良「スターダスト……」

ルチア「ブラックホールメテオ……」

ヴァン「風林火山・風神……」

相良・ルチア「ブレイカー!!!!!!」

ヴァン「抜刀!!!!!!」

I K A「ぎゃあああああ!!!!!!」

音使「お……結構とぶな……」

谷島「I K Aだからな」

IK A「そんな理由があるか・・・ガクッ」

相良「あつけないな・・・」

ルチア「作者だというのに・・・自覚なさ過ぎるんじゃないの？」

ヴァン「これはもうどうしようもないでしょう・・・」

IK A「そんなこんなで、私の作品のやって欲しい番外編を募集したいと思います」

全員「生き返ってるし・・・」

I K A 「募集内容は先ほど言いましたように「やって欲しい番外編」です。オリキャラ+原キャラの組み合わせ。または、「僕・私・俺の作品のコラボ」も募集しています。僕なりにがんばり、よい作品にしようと思いますんでアイデアを求めます」

番外編 白き修羅先生 + I K A II ? (前書き)

今回は前回から応募している番外編のアイデアやコラボで白き修羅先生からコラボのお願いがありましたので、挑戦しようと思います。

今回は「魔法少女リリカルなのはA・S」悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者」とのコラボ作品です。

白き修羅さん。ありがとうございます。もう一つの作品の方もつくりますので楽しみにしてください。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty + 魔法少女リリカルなのは A・S 悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者
者 始まります

番外編 白き修羅先生＋I K A II？

とある日、陸宙管理本部の総裁である相良翔は総裁室の自分の席でとある本を読み終えて一息ついていた。

相良「『もう一つの世界』か・・・中々面白い・・・」

ロード「どんな内容なのですか？」

そう聞かれた彼はその本をパラパラと思い返しながら捲り言った。

相良「この本は、自分の存在する世界。例えば俺は地球出身だから俺のいた地球。それは、もう一つ存在するという本だ」

ロード「それはつまり、鏡の世界の様なものですか？」

相良「そんな感じだ。でも、その世界には俺がいなかったらどうなるっていう物語だ」

ロード「パラレルワールド平行世界・・・もう一つの可能性みたいですね」

相良「そういう事。興味あってな」

夢があつて面白いというのが彼がその本にハマつた理由だ。

・・・この歳で子供の様な夢だなぁと少し考えつつ、彼はその本への想いを言った。

相良「この本は一人の男性が主人公んだけど、自分のせいで妹が死んで、もし自分がいない世界だったら妹は死なないのか？と想い、もう一つの世界に旅に出るっていう物語なんだ」

彼はその男性が、どこか自分に似ていると思ひ、深く考えているのだ。

相良「彼はその世界で妹を見つけた。だが勿論妹は主人公の事を知らない。そのことへの辛さと寂しさを主人公の男性を襲う。だったら妹は自分の事を覚えていれば良いのか？だが妹は死ぬ。だから男性は悩み続けた」

ロード「男性は、なんて答えを出したんですか？」

相良「・・・さあな」

ロード「え・・・」

相良「この本の最後のページ・・・つまり男性の最後のページが破けてるんだよ」

ロード「マスターの本・・・なのですよね？」

相良「ああ」

彼は基本的に本を破く、または破くような状況にはしない。

本だろうがなんだろうが大切な物として大切に扱うのが彼だ。

それにもかかわらず、この本の1ページを失ったのは彼にとっても初めてのことである。

相良「ま、最後が分からないってのも、ある意味面白いかな。自分だけの結末が作れる」

ロード「・・・そうですね」

そんな事を考えた彼は席を立ち、総裁室を出て、転送魔法陣に乗った。

ロード「どちらに行くのですか？」

相良「地球。俺だけの結末を作りに行こうかなって」

ロード「そうですねか・・・私も一緒にします」

相良「ああ。ありがとう」

???「総裁がサボリかな？」

もう一人、転送魔方陣に乗る一人の女性。

相良「ルチア!？」

ルチア「仕事さぼっちゃダメだぞ」

相良「っ／／／／／」

何か言い方に照れた彼は目を逸らして頬をポリポリかいて言った。

相良「さ、サボリじゃねえし・・・ただちょっと出したい答えがあつてだな・・・」

ルチア「要するにサボりたいってことでしょ」

相良「違つって」

そして彼らは転送された。

その頃、地球の海鳴と言う場所に、車椅子に乗る一人の少女とその車椅子を押す一人の男性が散歩をしていた。

???「今日も天気がいいな」

彼の言葉に、少女は空を見上げながら答える。

??「せやな。絶好の散歩日よりや」

そう言いながら二人は公園の芝生の上に座り、のんびり空を見ていた。

澄み切った綺麗な空を見つめていた。

???・???「あああああああ!?!?!?!?!」

????・??「!?!」

二人の真上から二人の男性と女性が叫びながら落下してきた。

????「はやて！」

男性は車椅子に乗っていた彼女を抱え、上空から落ちてくる二人から避けた。

そして上空から落ちてきた二人は地面にドスンと落下した。

そして砂煙が落下地点を覆った。

????「はやて。大丈夫か？」

はやてと呼ばれた少女は笑顔で答えた。

はやて「うん。大丈夫や。それよりも、今落ちてきた二人が大丈夫かな？」

そう。上空から、しかもかなりの高さから落ちてきたのだ。

普通の人間なら100%死亡だ。

はやてを抱えた彼は砂煙が風でなくなるのを待った。

?? 「ルチア・・・大丈夫か？」

砂煙の中から一人の男性の声と、ルチアと呼ばれる女性の返事が聞こえた。

ルチア 「な・・・なんとかね」

はやて 「嘘や・・・無傷!？」

?? 「ただ者ではないようだな」

彼ははやてを木の背をあずける形で置き、二人に接近した。

????「その者。一体何者だ？」

相良「え・・・ああ、俺は相良翔。こっちはルチア」

そう言うと二人は立ち上がって挨拶をした。

ルチア「私はルチア、ダルクよ。あなたは？」

ハクト「私は八神ハクトだ」

その名前に相良とルチアは「えっ・・・」と何か引つかかる様な声を出した。

ハクト「む・・・どうした？」

相良「いや・・・俺の家族にも、八神って人がいてな。同じ苗字だからもしかしてな・・・って思っただけだ。姉はいるか？」

ハクト「私には姉や兄はいない。義妹はいるか？」

ルチア「義妹？」

そう聞くとハクトははやての方を指指した。

ハクト「義妹の八神はやてだ」

相良・ルチア「そりゃそうだよ」

それにしてもこの二人は息ピッタリだなとハクトは思いつつ、それでも悪い者では無いと判断したのかはやてのもとに車椅子を持って向かった。

ハクト「はやて。この者は悪い者では無い。安心しろ」

はやて「うん・・・それで、お名前は？」

相良「相良翔」

ルチア「ルチア＝ダルクよ」

はやて「八神はやてです。せつかくやし、家にくるかぁ？」

相良「良いのか？」

はやて「ええよ。ハク兄はどうや？」

ハクト「私に聞く事ではないだろう？はやての好きにすればいい」

そういう事で4人は八神はやての家に向かった。

ルチア「（翔。これをどう見る？）」

移動中、相良とルチアは念話で会話をした。

相良「（今俺達の目の前にいるはやては俺が知ってる9歳の頃のはやてだ。これが現実だとすると、俺達は別世界の地球に転送されてしまったことになる）」

ルチア「（別世界？）」

相良「（世界は一つじゃない。一つ一つ同じ場所で違う現象が起きている世界があるとされている。要するに俺達は平行世界に迷い込んだってことだな）」

信じがたい事実だが、ルチアの柔軟な思考が相良翔の仮説を信じた。

ルチア「（だとすると・・・簡単には帰れないかな・・・）」

相良「（いや、時間が経てば戻れるだろ。今は・・・別世界のはやての幸せな姿が見れてるだけよしとさせてくれ）」

そう言う彼のはやてを見る目はとても優しくそうだった。

ルチア「（・・・はやての過去に、何があったの？）」

相良「（・・・そうだな。はやての過去をまだ、ルチアに話したのと無いもんな）」

そう言うて彼は自分たちの世界での八神はやての過去の話をしながら移動した。

相良「（はやては生まれてすぐに両親を失った。足はある理由で動かず、原因不明の難病にかかって、そう長生きできる体じゃなかった。はやては両親がいないため一人暮らしの生活をして、一人ながら笑顔を絶やさずに生きていた）」

ルチア「（嘘・・・はやては、そんな表情も、そんな雰囲気も一切見せてないのに・・・）」

相良「（そうだな。はやての悪い癖だ。自分の苦しみや悲しみは絶対に外に出さない。それは、周りに迷惑がかかるからとか、個人の

問題だからとか・・・そんな事ばっか思っていたからだ」

ルチア「（・・・そのあとに、闇の書に？）」

相良「（ああ。はやては闇の書・・・現在の夜天の書のプログラムだったシグナム達と共に過ごしたんだ。その後は・・・大体わかるな？）」

ルチア「（うん・・・でも、それまで・・・ずっと一人だったの？）」

相良「（ああそうだ。大きな家なのにたった一人で生活していた・・・悲しい運命の少女って感じだったな）」

ルチア「（・・・そうなんだ）」

二人はそんな時間を生きていた自分たちの世界のはやてを思い出しながら、今日の前にいるはやての幸せそうな顔を見て、心の底から安心していた。

ハクト「どうかしたのか？」

相良「・・・いや、こっちでは幸せなんだなって・・・それが嬉し

くてな」

ハクト「？」

ハクトは理解できないような表情をしながらも「そうか……」と返事をして家に向かった。

はやて「ここが私達の家や」

相良「うわぁ……」

相良翔は驚いていた。

何故なら家までそのまま同じだからだ。

そして更に……

ルチア「（翔。シグナム達の魔力を感じるんだけど……）」

闇の書の闇を体内に宿すルチアは、シグナム達の魔力を感じ取っていた。

無論、彼もそれは分かっていた。

相良「ああ。．．．なら、この世界でも闇の書の呪いはあるのか．．．。どんな世界でも、はやての運命は変わらないのか．．．」

そんな悲しみを想いながら、二人ははやての家に入った。

相良・ルチア「お邪魔します」

はやて「ただいまあゝ」

ハクト「戻ったぞ」

そう言う奥から赤い髪の少女とピンク髪のピニーテールの女性がこちらに向かってきた。

シグナム「お帰りなさいませ．．．」

ヴィータ「はやて！お帰り！．．．」

すると二人は相良とルチアを見つけ、二人を睨みつけた。

相良「（シグナムとヴィータに睨まれたの、凄く久しぶりだな．．．）
（どうも。相良翔と言います）」

ルチア「ルチア＝ダルクです」

シグナム「シグナムだ。二人とも、主はやてとどのようない関係で？」

相良とルチアが答えようとすると、はやてが答えた。

はやて「二人はさっきそこで知り合っただんや」

シグナム「そうですか・・・」

それでも二人が睨むのをやめない。その理由は簡単だ。

シグナム「(貴様ら、何故デバイスを持っている?)」

念話で話しかけられた。

そう。俺たちのもつデバイスがその原因だ。

相良「(魔導士だ。ちよつとした事故でこの地球に飛ばされたんだ。と言っても俺は地球出身なんだけどな)」

ルチア「(私は翔と一緒にいくときに巻き込まれたの)」

シグナム「(では、主はやてを狙った刺客ではないのだな?)」

相良「(ああ。でも・・・闇の書としてなら・・・いつかはやてを悲しませでしまつんだらうな)」

シグナム「(!お前・・・何故闇の書を知っている!?)」

シグナムに両親を一度殺されたから・・・なんて言えないよな。

相良「(ま、関係者・・・なんだよな)」

シグナム「（そうか・・・だが・・・）」

シグナムは自らの事情を話そうとした。

相良「（言わなくてもいい。ここで何かしようとも思わない。俺はただ・・・はやてが笑顔ならそれでいいんだ）」

そう言っただけで彼は強制的に念話を切った。

ルチア「（変わってないな・・・いつまでたっても、どんな世界にいても翔は翔だね）」

そう言っただけでルチアも念話を切っただけで家に入っていった。

それからしばらくして、はやては全員で夕食を食べ始めた。

全員「頂きます!」

相良「モグ・・・美味しいな（この味付け、変わらないな・・・）」
懐かしみながら食事をした。

はやて「美味しいかあ？」

ルチア「うん。はやては料理が上手だね」

はやて「ありがとうなあ」

ヴィータ「はやて。おかわり」

はやて「うん」

ルチア「私も！」

相良「お前は歳上だろう・・・」

相良のツッコミにルチアは舌をぺろつとだして苦笑いした。

いつもよりも活気のある八神家だった。

夕食も終わり、八神はやてとヴィータ、シャマル、ザフィーラは睡眠をとり、シグナム、ハクト、相良、ルチアの4人は海鳴公園にいた。

相良「シグナムとハクトの聞きたい事は分かる。俺とルチアが何者かってことだろう？」

ハクト「分かっているのなら、早々に答えてもらいたい。初めに会ったときから感じた感覚。ただ者ではないのだろう？」

相良「まあ、普通の魔導士・・・ではないんだよな。ロード、モード「刀」」

ロード「了解」

ルチア「ワルキューレ」

ワルキューレ「分かったわ」

ハクト・シグナム「!?!」

白銀と漆黒の魔力が二人を包み込み、出てきたのは刀になったデバイスとBJを着た二人が出てきた。

シグナム「なんて魔力量だ・・・」

相良「これが俺とルチアだ。化け物って言われても・・・仕方ないけどな」

ハクト「魔導士なのは理解した。だが、何故この世界に存在し、はやてを知るのが知りたい」

相良「簡単だ。俺の世界の八神はやては大人になって、俺と結婚しているからだ」

ハクト・シグナム「な・・・!?!」

もちろんのことながら二人は驚いた。

ルチア「ちなみに私も翔の妻ね」

ハクト「なん・・・だと」

シグナムとハクトは相良を睨みつけた。

シグナム「貴様・・・女たらしにも程があるぞ!」

相良「・・・」

ハクト「お前、良い奴だと思ったんだがな・・・」

相良「・・・」

ルチア「翔・・・」

心配そうな表情でルチアは相良を見つめていた。

するとハクトが聞いた。

ハクト「はやては・・・幸せにしてるのか？」

その質問にシグナムも反応して相良を見つめた。

義理でもありながらハクトははやての兄だ。

兄が妹の幸せを願うのは当然であり、それ故に別の世界のはやてであるうと幸せでいるのか心配だ。

その質問に相良は頭を上げ、真剣な眼差しで二人に告げた。

相良「もちろん。はやては、今も何も変わらずに笑顔で生きてる。そしてこれからも幸せにし続ける。この俺が」

ハクト「ふ・・・そうか」

ハクトは笑を見せ、相良に言った。

ハクト「相良翔。別の世界であれ、はやては俺の大切な妹に変わりはない。いつも・・・どんな時も、大切にしてあげて欲しい」

相良「ああ。絶対に！」

そう言うと相良とハクトはガツシリと握手した。

フォン

相良・ルチア「!？」

突如、相良とルチアの全身が透けてきた。

ハクト「!翔!ルチア!」

シグナム「何があつた!？」

相良「……この世界に、元々俺とルチアは存在しない。だとすると、俺達はイレギュラーの存在だ。イレギュラーは排除される。世界を安定させるためにな。だから……皆の記憶からも、俺とルチアの事は消えるかもしれない」

ハクト「何!？」

ハクトは勿論驚き、怒る。

何故忘れなければいけないのか？

大切な記憶を……消されなければならないのか？

どうにかしてそれだけでも阻止したい。

だが……それはできない。

そのことへの無念さと、無力さに苛立っているのだ。

相良「最後に一ついいか？」

ハクト「……覚えていないのか？」

相良「……はやての笑顔の裏には、必ず苦がある。あいつ、一人

で何でも抱え込む癖があるから、ちゃんと見てあげて欲しい。はやてには・・・正直に生きて欲しいからな」

ハクト「翔・・・お前・・・」

相良「そしてハクト！逆にお前もはやてにたまにでもいいから正直になれ。きつとはやては心配してるはずだ。何も言わないと・・・口で言わないと、不安に思うからな」

ハクト「ふ・・・言われなくてもそうする。それよりも翔も人の事を言えないのではないか？」

相良「あはは・・・そうかもな」

相良・ハクト「お互いに頑張れ」

そう言い終わると二人はほとんど消えた。

相良「あ・・・超最後に面白い情報」

ハクト・シグナム「？」

今一度、相良翔にはやてを任せてよかったのか不安になってしまったのは、言うまでもない。

・・・だが・・・

ハクト「相良翔。ルチア、ダルクか……。いつか、また会うことがあるといいな」

シグナム「//////////」

ハクト「？」

ハクトは顔が何故か真っ赤のシグナムに疑問を持ちながら家に帰っていった。

そして衝撃発言を残して去っていった相良翔とルチア「ダルクはと
いうと・・・」

相良・ルチア「よっと！」

着地した。

場所はと言つと・・・

相良「海鳴・・・みたいだな。しかも真夜中」

真夜中の海鳴公園・・・つまりハクト達と別れた場所についた。

ルチア「もとの世界に戻れたみたいだね」

相良「ああ。でも、さっさと帰らないとヴィヴィオ達が心配する」

ルチア「うん。それじゃ、帰ろっか」

相良「ああ」

そう言っつて相良とルチアは家に帰った。

俺とルチアは何となくはやて達の家に向かった。

相良・ルチア「ただいまあゝ」

はやて「お帰り。翔くん。ルチアちゃん」

シグナム「翔。ルチア。お疲れだったな」

ヴィータ「お帰り！」

シャマル「おかえりなさい」

ザファイター「お勤めご苦労だったな」

相良「ああ。ただいま」

笑顔で皆を見つめた。

はやて「??どうかしたんか？」

相良「あ……いや。今日は……はやてのご飯が食べたくてな」

はやて「うん……ちょっと待っててな」

相良「ああ」

懐かしい思い何故か感じながら、相良は奥に入った。

シグナム「翔に、何かあったのか？」

ルチア「うん……大切な事を知ったんじゃないかな……」

ヴィータ「大切な事？」

ルチア「うん……物語の、最後のページを……ね」

相良とはやて二人だけで食事をしていた。

はやて「はい。あ〜ん」

相良「あ〜ん。(´・`・´)モグモグ・・・うん。美味しい」

はやて「やった！どんどん食べてな！」

相良「ああ・・・本当に美味しい」

はやて「・・・翔くんに褒めてもらってほんまに嬉しいわあ」

相良「あはは・・・。いつも、本当にありがとう」

はやて「え・・・あ、ああ／＼／＼こちらこそなあ／＼」

相良「ああ」

相良・はやて「／／／／／」

二人はどこか温かな空気を醸し出しながら食事を続けた。

本のページの最後のページはきつと

奇跡が起こって、妹も兄も……幸せに暮らしているんだ。

一方、ハクト達は……

はやて「あれえく？なんや、洗い物の皿が2枚多いような？」

ハクト「……そうか」

相良翔の言つとおり、はやて達は相良翔とルチア「ダルク」の存在を忘れていた。

覚えているのはハクトのみ。

シグナム「むう……昨晚、何故私は熱をだしたのだろう？」

はやて「何か……誰か忘れてるような……」

それでも・・・どこかには残っている、大切な記憶。

絶対に忘れてはいけない、大切な人。

ハクト「はやて。洗い物だが、私も手伝おう」

はやて「え？ええよ。私一人でも」

ハクト「今日は私が勝つてにやらせていただく。拒否権は無しだ」

そう言ってハクトは少々強引に皿とって白い布巾で拭き始めた。

はやて「・・・ありがとうな。ハク兄」

ハクトには聞こえない声でそう言って、二人は洗い物を続けた。

どんな世界にいても、
想うことはただ一つ

相良・ハクト「はやてが

幸せでいられますように」

ただひとりの、孤独でいた少女の幸せを、いつまでも祈り続けた。

そして・・・

相良・ハクト「またいつか・・・会えると良いな」

また会う事を
から願うのだった。

彼らが出会った事を忘れず、
またの再会を心

番外編 白き修羅先生＋I K A II？（後書き）

I K A「どうでしょうか皆さん！（特に白き修羅先生！）」

ルチア「私の登場に意味があつたの！？」

I K A「闇の書関係なんで」

相良「なるほど」

ヴァン「僕たちの登場はまだですか？」

I K A「次回のコラボ番外編で出したいと思う」

谷島「俺も出せよ」

音使「俺もな」

リオナ「私も！！」

I K a A「・・・難しいな」

I K A「次は「魔法少女リリカルなのは」『紅き修羅の力を持つ者』」のコラボもやります。あと皆様。前回から引き続き番外編の

「要領お待ちしております。」

ヴァン外編 白き修羅先生 + IKA!!? (前書き)

今回は「魔法少女リリカルなのは」『紅き修羅の力を持つ者』の
コラボ作品になります。今回は白き修羅先生も好評だった様子
ですので、調子に乗らない様に慎重に作ります。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty + 魔法少女リリカルなのは 『紅き修羅の力を持つ者』
） 始まります。

ヴァン外編 白き修羅先生+IKA!!?

「ということで魔法少女リリカルなのはVivid World
Infinityの世界に行ってもらいます」

「???」ちよつと待て!!何がどうということだよ!??」

俺はもちろんツッコミをいれた。

・・・結構前に同じことをしたような気がするが・・・まあいいや。

「だ〜か〜ら〜魔法少女リリカルなのはVivid World
Infinityの世界に行けって言ってるの」

何故か見覚えがある女性は神様らしい。・・・こんな奴が神なんて
あんまりだろう・・・

「あんまりってこともないんじゃない?」

心が読まれた。

「神様ですから」

へッポコ神しんという烙印を押すよな。

「酷い!??」

取り敢えず無視して、俺が何故ここにいるのか不明だ。

はやての家において、寝たらここにいた。

・・・夢であることを心より祈りたいのだが、夢にしては現実味が
ありすぎる。

「ねえ〜話聞いている?」

???「ああ。聞いているよ。ようは転生しろってことだろう?」

「いいえ。ただ別世界に行っってってこと」

???「あ、そう」

なんか知らないけど慣れた自分がいる。

???「取りあえずどうして俺がその世界に行かないといけないの
か説明してほしい」

「私が楽しみたいから」

「????」本当に神様かお前……」

マジでこの世界が嫌になってきた。

こんな神様に世界を任せないといけないなんてあんまりだろう……

「あんた自分が酷いことを言っていること、気づいてる?」

「????」あなたに自業自得と言つ言葉を渡そう」

「うっ……否定できないところが悔しい」

「それじゃ送るわね!」

「????」誰も了承してないんだけど!」?

そう言つと俺の足元が消滅した。

……落ちるよな?

「……うわああああああ……!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

一歩その頃、「鈍感紳士」のヴァンと「女食らい」のリオナは二人で模擬戦をしていた。

ヴァン・リオナ「酷い別名……」

あまりにも酷い紹介に若干orzな状態になっていた。

ヴァン「取り敢えず今日はここまでにしよっか」

リオナ「うん。お疲れ、レイド」

ヴァン「ニーナもお疲れ」

レイド「お嬢様もお疲れ様です」

ニーナ「ええ。あんたもさっさと休みなさい」

二人はデバイスをしまい、訓練室を後にしようとした……その時

うわあああああああ!!!

ヴァン・リオナ「!?!」

男の悲鳴と突如訓練所の一部で爆発が起こった。

ヴァン「……誰かいる……」

ヴァンの一言にリオナも警戒した。

???「いつつゝ・・・あの糞神め・・・」

一人の男子が尻餅をつきながら頭を抱えていた。

ヴァン「え・・・つと、次元漂流者かな？」

リオナ「私に聞かないで」

ヴァン「えつと・・・君は誰？」

??「え?・・・ああ、俺は真崎龍牙だ。お前らは？」

ヴァン「僕はヴァンIIスカイ」

リオナ「私はリオナIIカミナ。あなた、ここがどこかわかる？」

龍牙「・・・さっぱり分かん」

ヴァン「そうか・・・そうなるか・・・」

こうなれば総裁の相良翔に報告するべきなのだが、実は相良翔はルチアと共に出かけているらしい（前回の番外編のせいです）。

総裁不在となると、他に報告する人は・・・谷島のみになる。

リオナ「私が谷島さんに話をしてくるよ」

ヴァン「うん。お願い」

そう言ってリオナは訓練質室を後にした。

そしてヴァンと龍牙は訓練室を出てフリースペースに移動した。

音使「お、ヴァン」

ヴァン「奏多さん」

フリースペースに着くと奏多さんが一人でコーヒーを飲んでいた。

音使「あれ？そっちにいる人は？」

ヴァン「今出会ったばかりの・・・」

龍牙「真崎龍牙だ。よろしく」

音使「俺は音使奏多。よろしく」

二人は握手して挨拶をした」

ヴァン「それで、どうして突然訓練所に現れたんですか？」

龍牙「いや、なんといえはいいか・・・（神様に行けって言われたからなんて言えないな・・・）」

龍牙はなぜか唸っていた。

ヴァン「えっと、取りあえず簡単に説明できるかな？」

龍牙「えと・・・取りあえずこの世界に行けつてある人に言われたんで来たんだけど・・・何すればいいのかわからない」

ヴァン「そうですか。詳しいことは何かいええますか？」

龍牙「えっと・・・どういえばいいのかわからない」

ヴァン「わからないんですか？」

龍牙「いや、説明の仕方がわからない」

ヴァン・音使「？」

何があったのかは二人は理解できないが、とにかく大変なこと。または面倒なことがあっただろうと勝手に判断した。（あながち間違っではない）

谷島「ヴァン。来たぞ？」

リオナ「お待たせ」

しばらくすると谷島さんとリオナが来た。

龍牙「えつと・・・誰？」

谷島「俺は谷島芳樹。お前のことは少し聞いてる。次元漂流者か？」

龍牙「いや、俺はある奴にこの世界に連れてこられたんだ」

谷島「ある奴？」

龍牙「（神様って言って信じてもらえるかな？）・・・信じて貰えますか？」

谷島「内容によるかな？」

その答えに龍牙は少し考え、説明することを選んだ。

龍牙「俺、神様にここに送られたんだ」

全員「……………へ!？」

やっぱりかというリアクションしかできない返事だったが、まあそれは龍牙本人も想定済みだ。

ヴァン「えつと……それはどういうことですか？」

龍牙「どうしたもこうしたも、神が勝手にこの世界に行けって言つて俺の了承なしで勝手にこの世界に連れてきたんだよ！」

若干キレながらそう言つと他のみんなは苦笑いしかできなかった。

そして、皆は思った。

全員「(この世界……大丈夫かな……)」

谷島「俄かには信じられない話だが、嘘をついている様には見えな
い。一応信じるとして、これからどうする？」

龍牙「できれば泊めていただきたいと思います」

谷島「そうだな・・・取りあえずこの管理本部の部屋を好きに使っ
ていい。総裁にもそう伝えておくからさ」

龍牙「ありがとうございます」

そう言って龍牙は谷島の指示に従って空き部屋を借りることができ
た。

龍牙「ありがとな。突然現れた俺に部屋をくれて」

ヴァン「いや、ここじゃ龍牙みたいな人は珍しくない。まあ大体が次元漂流者なんだけどな」

部屋に入り、ヴァンと龍牙は二人で話をしていた。

龍牙「俺見たいなのが珍しくないってどういうことだ？」

普通に考えて急に人が現れることが珍しくないと言うのは明らかにおかしい。

それは急に現れた龍牙本人も疑問に思っていた。

ヴァン「ここ、陸宙管理本部は事件・事故などの原因調査のみならず、次元漂流者保護も行っているんです。」

龍牙「へえ・・・次元漂流者ってどれくらいいるの？」

ヴァン「初めのころは数百人もいましたね」

龍牙「す・・・数百人・・・」

どんだけ多いのだろうか。いや、それ以前にどうしてそこまでの人数が今まで発見されなかったのが謎だ。

ヴァン「理由はさまざまで、旅行船のトラブルで漂流することもある。原因不明もある。次元漂流のせいで記憶を失う人だって少なくない。僕たちはその人たちの記憶を戻すことも仕事のうちにあるんです」

龍牙「！記憶が・・・取り戻せるのか!？」

龍牙は現在すべてではないものの、記憶をなくしている（理由は白き修羅先生の小説を読んでください）

その忘れた記憶を取り戻したいという想いがあり、ヴァンが記憶を戻すこともしていると知り、興味がでたのだ。

ヴァン「記憶が全員、全てを取り戻せる保障はありませんし、戻ったとき・・・忘れていた頃の記憶を逆に失うことだってありえるんです」

龍牙「な・・・」

龍牙も知らなかった。

ただ記憶が戻ればいいと思っていた。だが、記憶を取り戻してしまったとき、記憶を忘れていた頃の記憶を忘れてしまう。それは、今ヴァンと話していた記憶も・・・龍牙を拾ってくれた彼女の記憶も失くしてしまうということなのだから・・・

龍牙「それは、絶対じゃないだろう!？」

ヴァン「もちろん、全ての人が記憶を取り戻したときに戻す前の記憶を失くしているわけではありません。ですが、かなり高確率なのは確かです」

龍牙「そんな・・・」

ここで龍牙にはひとつの迷いが生まれることになる。

記憶を取り戻して良いのか？

もし取り戻せば、帰る本当の場所に帰れる。

だが、彼女との記憶が消えるのは嫌だ。

龍牙「どちらか一つを・・・選ばないといけないのかよ・・・」

ヴァン「・・・」

龍牙は頭をかかえ、苦しみだした。

龍牙「くそ！！！！どうして一つしか選べないんだよ！！！！俺は・・・俺は思い出したい！！！！でも、それであいつとの・・・はやてとの記憶を失うのも嫌だ！！！！俺は・・・俺は・・・」

彼の頭の中には、思い出せない大切な人と、今記憶に存在する大切な人の姿があつた。

“どちらか”を選ばないといけない。

そのことを、今の龍牙を襲っていた。

龍牙「ヴァン・・・俺は、どうすればいいんだ？」

決断できない彼は、ヴァンに聞くことしかできなかった。

ヴァン「記憶を、取り戻すべきだと思う」

龍牙「!？」

簡単に答えて見せた。

いや・・・すでに答えは決まっていたといえは良いだろうか。

ヴァンは龍牙の質問にすぐに答えて見せたんだ。

龍牙「何で・・・そんな簡単に答えられるんだ？どちらかを失うんだぞ!？」

ヴァン「だって、思い出したい記憶の中にいる人たちは、龍牙の帰りを待ってるんだろう?？」

龍牙「ああ。でも、あいつだって待たないといけなくなって・・・」

ヴァン「だったら迎えに行けばいい」

龍牙「そいつと過ごした記憶を忘れてるんだぞ!？」

勢いで怒鳴ってしまっていた。

龍牙「・・・わりい。怒鳴っちゃまって」

そう言うとヴァンは無表情で答えた。

ヴァン「・・・覚えてなきゃ、会っちゃいけないのか？」

龍牙「!？」

その言葉が、龍牙の脳内を駆け巡った。

ヴァン「違うだろ？覚えてるから会うんじゃないかって、会いたいから会うんじゃないのか？」

龍牙「ヴァン・・・」

ヴァンのその言葉は、確かにその通りだとそう思った。

言われてみれば確かに簡単なことだった。

覚えていなければ会えないなんて理論はない。

ましてや忘れるのは龍牙自身であって龍牙以外を忘れるわけではない。

なのに龍牙は「忘れたら会えない」と思っていた。

ヴァン「覚えている人は皆、龍牙の帰りを待っていると思うよ」

龍牙「・・・なるほどな」

別に記憶を思い出したとしても、きっと皆は覚えてる。

龍牙「ありがとうヴァン。お前のおかげで決まったよ。俺は・・・
記憶を取り戻すよ」

ヴァン「・・・ああ。応援する」

フォン

龍牙「!？」

突如、龍牙の全身が透けてきた。

ヴァン「!龍牙!？」

龍牙「ああ・・・やっと元の世界に帰れるみたいだな」

ヴァン「そうか・・・。そんじゃ、記憶・・・がんばって取り戻せな」

龍牙「ああ。お前も、これからもがんばれよ」

ヴァン「ああ！」

そう言っつて二人はハイタッチして、龍牙は消えた。

ヴァン「そういえば、今の家族って誰？」

龍牙「八神はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラだ」

ヴァン「え・・・」

そして消えた彼は・・・

龍牙「よっと！」

元の世界のはやての家の前で着地した。

龍牙「・・・戻ってこれたか・・・」

そう言っつて彼はドアを開けた。

龍牙「ただいま!!!」

そして彼は、自分の記憶を取り戻すために、また日々を過ごし始める。

そしてヴァンは・・・

ヴァン「・・・変わった人・・・だったな」

思い出しながら笑っていた。

リオナ「あれ？龍牙は？」

部屋にリオナと奏多さんと谷島さんが入ってきた。

ヴァン「帰ったよ。自分の記憶を・・・取り戻すために」

音使「・・・そうか」

谷島「次にある時は、ちゃんと記憶を戻しているといいな」

ヴァン「はい・・・」

記憶が無くても、想うことは一つ。

いつか記憶を取り戻して、皆とまた・・・今までどおりの日常に戻りたい。

ヴァン「大切な日々、ちゃんと思い出せよ」

彼はヴァン日常に戻っていく。

そして

彼も

龍牙「とまあ、色々あってな」

はやて「へえ」。ほな、また今度会えるとええな」

龍牙「・・・そうだな」

彼は静かに返事をした。

龍牙「次に会うときは

全ての記憶を取り戻したときだな」

そう誓った少年も

日常に戻っていく。

いつか人は、日常から非日常に戻る。

けれどその非日常も、日常に戻っていくだろう。

だからこそ人は

普通になってしまつ日常を大切にする。

それは

大切な記憶なのだから。

ヴァン外編 白き修羅先生＋I K A！！？（後書き）

I K A「さて時間がかかりましたが、完成しました！！白き修羅先生。今回はコラボさせて頂き、誠にありがとうございました！！」

相良「いやぁ楽しかった」

ヴァン「いい経験でしたね」

ルチア「またできると良いわね」

リオナ「楽しみい」

音使「ま、それはそれとして、またこれから物語が進むといいな」

谷島「そろそろ展開が大きくなりそうだな」

I K A「はい。大きくなります」

相良「頑張れよ」

I K A「今回は本当にありがとうございました白き修羅先生！」

俺にとっては大切な家族だから（前書き）

会議が終わり、相良翔は新たな相棒と共に家に帰る。

だが、新たな家族として、彼女は受け入れられるのか？

そしてこの日、一つの絆が壊れる

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty } 始まります。

俺にとっては大切な家族だから

仕事を終わらせ、俺はエトワを連れて家に帰ろうとした。

相良「エトワの事、皆にどう紹介しようかなあ」

いきなり「龍と仲間になった」と言っただけで信じてもらえるだろうか？

今俺の目の前にいるのは龍の姿では無く、人の姿でいるエトワだ。

これを皆に説明したとして「へえそれが龍なんだ」と言う奴はそうはいない。

だって・・・

相良「どう見たって可愛い女の子だからなあ・・・」

エトワール「？どうかしましたか？」

相良「いや・・・何でもない」

ま、その時にどうにかする・・・と言いたいけど、きっと怒られるだろうな。

なのは達は結婚してから俺が女性と仲良くなるのを嫌う。

これは余談だが、かなり前に同僚の女性局員と食事に行ってそれを

なのは達に言ったら1週間口を聞いてもらえなかったことがある。

・・・あれはマジでショックだった。

お陰様で仕事は全くできなかったからな。

だからできる限り女性と接するには注意してるんだけど・・・それで逆に何もしてあげられないのも嫌だなとか、色々と考えてるんだけどな・・・女心って本当に難しいよな。

エトワール「ご主人様？」

相良「ん？どうした？」

エトワール「ご主人様のご家族は何人ほどいらっしやるのですか？」

相良「え〜っと・・・確か40人・・・いや、エトワも加えて41人・・・だったかな？」

エトワール「・・・」

エトワは無言でフリーズしていた。

うん。色んな人と同じ質問されて同じ答えをしてきたけど、皆フリーズしてきているんだよな（そりゃそうだ）

相良「ま、人数なんて俺にはそんな意味は無いし、この陸宙管理本部の全員が俺の家族みたいなものだしな」

エトワール「・・・その中に、私は入って良いのですか？」

相良「もちろん。エトワが俺の相棒になった時点で俺の家族の一員だ」

エトワール「……そうですね」

その時、ほんの一瞬だけ……エトワの表情が笑顔になった気がした。

エトワール「エトワールです。よろしくお願ひします」

なのは・フェイト・アリサ・すずか・アイン・シュテル・レヴィ・
アーチエ「納得いかない！」

相良・ルチア「ですよね」

そりゃそうだとまあ分かっていただけの結果しか待っていなかった。

なのは「まずこの子が龍なわけないよね？」

フェイト「そして偶然出会ったっておかしいよね？」

アリサ「あんた私たちをバカにしてる？」

すずか「駄目だよ浮気は」

アイン「いくら主でも悪い冗談はお止めください」

シュテル「信憑性がありません」

レヴィ「普通の女の子じゃん」

アーチエ「塵芥もとうとう頭がくるりおったか？」

相良「酷い言われようだなおい……」

ルチア「まあ皆の意見にも一理あるのよね」

相良「まあな」

そう。龍と偶然出会って仲間になりました。

この文章を今、目の前にいる彼女で説明しても信じるのは容易ではない。

ましてや俺が連れてきたのは女性だ。

男が龍なら構わないと思うが女性が龍ってのは想定外であろう。

・・・俺の周りって女だらけだという現実が何とも重い。

相良「はあ。でも、実際に事実なんだ。エトワールは龍だし、俺の新しい相棒なんだ」

なのは「と言われても、私達には信じられないよ」

フェイト「うん。翔が嘘をつくのが好きじゃないのは分かってるんだけど、今回ばかりはね・・・」

相良「・・・」

ま、いきなり信じろってのは・・・無理だよな。

相良「・・・ま、そうだよな」

否定はできない。なのは達は悪くない。

もちろんエトワも悪いわけではない。

悪いのは俺だろう。

証明するのは簡単だ。

「龍になれ」その一言で良いのだから。

でも・・・俺は龍の姿にさせるのを少し恐れている。

それは、その姿はエトワールではなくて、スターダスト・ドラゴン星屑の龍だからだ。

俺はその区別をしつかりとつけたい。

それに、龍の姿を見せて皆が納得しても、それはエトワールを納得したのではなく、星屑の龍を納得したことになるだけだ。

結局、龍になってもエトワールの存在が否定されるだけだ。

相良「それじゃルチア。悪いけど、エトワの事・・・頼む」

ルチア「うん。任せて」

そう言っつてルチアはエトワを連れて転送魔法を使用して陸宙管理本部に連れてつていった。

エトワは陸宙管理本部に住むことになるだろう。

なのは「・・・ごめんね」

相良「え？」

フェイト「ちよつと・・・言いすぎたみたいだから」

相良「いや、謝らなくていいさ。なのは達の対応が一番正しいんだからさ」

そう。別になのは達が悪いわけじゃないんだ。

ただ悪いのは・・・俺だけなんだ。

相良「・・・って、またここに来ちゃったな」

俺は湖の水面に立っていた。

そして夜空を眺めていた。

悩み事があるたびに訪れる場所。

最近は来る回数がかなり減ってきたんだけどな・・・

ロード「エトワ殿は、少々残念そうでしたね」

相良「ああ。俺は・・・何もできなかったけどな」

受け入れて貰えないのは当然のこと。

だが、俺は受け入れて欲しいと思って努力した。

結果は惨敗。

おまけにエトワを傷つけてしまった。

相良「……………何やってんだよ俺は!!!!!!」

俺は自分を叱りながら転送魔法を使った。

傷つけて、エトワはさみしいに決まってるのに……

そんな時に

どうして俺がいてやらないんだよ!!!!!!!!

エトワール Side

ルチア「ここがエトワールの部屋だよ」

そう言っただけで彼女は私に畳と卓袱台があるどこか和の様な雰囲気漂う部屋を見せた。

どうやらここが私の部屋になるそう。

ルチア「使い方は色んな所に説明書があるからそれを見て。私はも

う帰るけど、部屋は好きに使っていいからね」

そう言っつて彼女は部屋を後にした。

そして残される私。

取り敢えず私は畳の上に仰向けで寝てみた。

布団を敷いてもいいはずなのに、何故かそれをしたくない。

そして瞳を閉じて、世界を闇に染める。

あれ・・・私は、独りなの？

先ほどまでは、たくさんの方がいて・・そして

ご主人様がいた。

エトワール「はっ!!」

私はまるで悪夢から目覚めたかのように起きた。

そして額から垂れる気持ちが悪いくらいの汗。

何故か荒い息。

私は・・・何かを恐れていた？

一体何を？

独りになること？

ご主人様がないこと？

エトワール「・・・あれ」

頬から、滴が垂れ始めた。

一度たれはじめ、それから量が徐々に増えていく。

エトワール「これは・・・何・・・」

鼻水も垂れてきたので鼻を吸った。

エトワール「ぐすん・・・これは・・・なみ、だ・・・」

何故、涙を流しているの？

分からない・・・分からない。

私は・・・初めて涙を流したから・・・

どうして涙を流したんか分からない。

でも、ただ一つ、言いたい言葉がある。

エトワール「……寂しい」

全身が凍えるように寂しく、世界が闇に染まり、何も見えず、息が苦しくなり、居ずらい。

これが・・・寂しいという感覚。

どうすればいいの？

私は・・・どうすれば・・・良いの・・・

エトワール「……ご主人様……」

無意識に、その名を呼んでいた。

理由は分からない。

けれど……

エトワール「ご主人様……ご主人様……」

流れる涙、そして呼び続けるご主人様。

呼ぶたびに少しずつ軽くなる感覚。

ああ……そうか。

相良「エトワ!!!!!」

エトワール「!・・・ご主人・・・様・・・どうして・・・」

ドアを勢いよく開け、肩まで息が上がっているご主人様が私の前にきた。

その瞬間、私に襲いかかっていた寒さも、寂しさも、息苦しさも、何もかもが消えた。

ただ・・・止まらない物ものが一つ。

エトワール「ご主人様・・・ぐすん。その・・・ぐすん・・・涙が・・・
止まりません」

相良「ごめん。寂しい思いをさせちゃったな」

そう言っでご主人様は私のもとに近寄り、力強く抱きしめた。

左手で抱きしめ、右手で頭を撫でてくれた。

相良「ごめんな。もう・・・大丈夫だから」

優しく言ったその言葉を聞いたとき、私の中の何かが外れた。

エトワール「ご主人様あ・・・ぐすん・・・寂しかった・・・です」

相良「ごめん。もう・・・独りにはしない。絶対にだ」

「エトワール」は……ありがとう、さよなら」

これが 人を求めると言うことなのだろう。

結局この日、私とご主人様は一緒に寝ることにした。

相良「あの・・・エトワ？」

エトワール「？」

相良「俺に抱きついて寝るの・・・やめてくれない？」

仰向けで寝ているご主人様に私は横から抱きついて抱き枕の様にしている。

エトワール「寂しかったので、これで許して差し上げます」

相良「・・・はあ。それなら・・・仕方ないか」

エトワール「ええ。仕方ないのです」

そして私はご主人様を抱きしめて、心地よく眠りに着いた。

相良 Side

相良「また・・・悲しませたな」

俺に抱きついてスヤスヤと眠っている彼女の頭を撫でながら、俺は悔やんでいた。

ロード「今回は、仕方なかったことです」

相良「だとしても・・・俺が悲しませた事実が変わらない。俺は・・・いつまで経っても、最低人間だな」

ロード「それは違います!!!」

相良「!」

ロードが少し大きな声で怒鳴った。

エトワは起きる様子は無く、すやすやと寝息を立てていた。

ロード「マスターは、最低な人間ではありません。それは、誰よりも側にいた私が自信をもって言えることです」

相良「・・・慰めか何かか？」

ロード「いえ。私の本当の想いです。これ以上、自分を悲観的に見ないでください!」

相良「楽観的に見ることでできないうさ。俺は・・・正しい事をしたわけじゃない」

そう。最初からこう言う結果が分かっていたのに、俺はこの結果を生んでしまった。

俺がエトワを傷つけたんだ。

どうしていつも・・・誰かが悲しまないと分からないのだろう・・・

ロード「マスター。あなたは、無茶をしすぎです」

相良「?どういうことだ?」

ロード「マスターは、神ではないのです。失敗などいくらだってします。その度に人は成長していくものだと私は思います」

相良「そうだ。それは俺も同じ考えだ」

ロード「では何故!?!」

相良「ロード。俺は・・・皆を幸せにしたい」

ロード「無理ですよ・・・」

相良「無理でもやるんだ。俺は・・・みんなを守って、みんなを幸せにしたい」

ロード「無理だと言ってるでしょう!?!」

相良「無理でもやるって言ってるんだろ!?!」

口喧嘩・・・そう言えば片付くこの会話は、簡単には互いに解決できないだろう。

ロード「……私は、あなたにはついていけない」

相良「……」

ロード「今のあなたには……一生ついていきません」

そう言ってロードは、自ら機能を停止させた。

相良「それでも……俺は」

過去に、みんなを傷つけてしまった彼だから、想うことがある。

過去に、みんなを傷つけてしまった彼だから、願うことがある。

相良「みんなを　　絶対に幸せにする。たとえそれが、かなり
の代価を支払うことになったとしてもだ」

俺にとっては大切な家族だから（後書き）

彼は誓った。

皆を必ず護る。そして幸せにする・・・と。

そのために失ったのは大切な相棒。

だけど彼は止まらない。

立ち止まってなんかいられないから・・・

彼は・・・大切な人の涙を、二度と見たくないから・・・

最高の相棒との別れと、受け継がれる道 前編（前書き）

彼の相棒は彼との別れを決意した。

それは彼を、新たな力と出会いに導く。

大切な別れになるだろう。

前に進むために・・・彼は・・・新たな流星と・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty 始まります。

最高の相棒との別れと、受け継がれる道 前編

・・・翌朝。

相良「・・・エトワ」

エトワール「・・・んん。」ご主人様？」

旋毛の当たりにびよこんと跳ねた寝癖が彼女を子供のように見せていた。

相良「シャワーでも浴びてこい。朝食は食堂だからのんびりでもいいから」

エトワール「・・・はい」

そう言ってエトワはフラつきながらも風呂場に向かった。

さて、俺は先に食堂に行くかな。

???・???「翔!」

相良「!?!」

背後から俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

しかもよく聞き覚えのある女性と男性の声。

相良「父さんに、母さんまで!?!」

廊下を歩く局員の注目の的になっている2人。

火澄「翔。元気そうね?」

相良「もちろん。それよりも、父さんと母さんは何の用?」

右蕪「ヴァンがいなくなったと聞いてな。お前がどうしてるか見に来た」

相良「元気に決まってるでしょう。俺だってもう子供じゃない。す
ぐに前を向くさ」

そう言うと二人は関心したように頷いた。

相良「それで、本当の事情は？」

火澄「・・・まあその話は、朝食を食べてからにしましょうか？」

相良「え？」

そう言うと俺の後ろから一人の女性がヨロヨロとこちらに向かって
きた。

エトワール「ご主人しゃま・・・」

相良「ああエトワ、寝ながら歩くなって！」

俺はボーツとしながらこちらに向かうエトワに近寄り、肩を押さえ
て倒れないようにした。

相良「ふう・・・」

朝に弱い所は女の子らしいというか・・・つか、まだ
寝癖（アホ毛）が直ってない。

相良「サイコキネシス
超能力」

俺はそのアホ毛に超能力でペタンと元に戻した。

右蕪「能力の無駄遣いにも見えるな」

火澄「というか、その子誰？」

相良「あ、こいつはエトワール。俺の新しい相棒だよ」

その発言を聞いた二人はふと・・・

火澄・右蕪「（もしかして・・・またフラグ建てた！？）」

相良「？」

そして俺と父さん、母さん、エトワールの4人で食事をしながら話をした。

エトワール「……」

相良「?どうした、食べないのか?」

エトワールの座るテーブルの上には焼きたてのロールパンが3つとホットミルクが置かれていた。

エトワール「これは……なんですか?」

相良・火澄・右蕪「え!?!」

相良家全員で驚いた。

まさか……ロールパンを知らない……だとう!?!?

相良「こつやって食べるんだ」

俺は両手でもって口でパクツと食べてみせた。

エトワール「……」

エトワは恐る恐る両手の指先でロールパンを縦に持ち、先端から口

を少しだけ大きく開けて・

エトワール「パクツ・・・」

少しだけ食べた。

やべ・・・なんかちょっと可愛かった。

エトワール「もぐもぐもぐもぐ・・・」

まるでハムスターがひまわりの種を食べるかのような食べ方。

ただその速度はかなりゆっくり。

動物好きな彼にとってそれはとても愛くるしく見えたりした。

そしてエトワはホットミルクの入ったコップを持って口につけて飲んだ。

エトワール「~~~~っ!!!」

両目を痛そうに瞑って下をぺろっただして熱そうにしていた。

相良「あはは・・・以外に猫舌？」

エトワール「？」

何を言っているのかを理解できない表情をしている

相良「猫舌つてのは熱い食べ物とか飲み物に弱い人のこと」

そう言つとエトワは舌が痛くて声を出しづらいのかコクコクと頷いた。

相良「ちょっと貸せ」

そう言つて俺はエトワの持っていたコップを持って息を吐いてホットミルクの熱をとった。

相良「ふう〜。ふう〜。ふう〜……ん、こんなもんだろ。ほれ」

そう言つてエトワはコップを持つてのぞき込み、自分でも息をかけてから飲んだ。

エトワール「……温かい……」

静かにそう答えた。

相良「今度は、少し温めの物を頼んどいてあげるよ」

エトワール「はい……ありがとうございます」

そう言つてエトワは再びパンをハムスターの様に食べ始めた。

……これは別にオヤジギャグじゃないかね？（エトワール＝^{スター}星
ハム「スター」）

火澄「翔、何かお兄さんみたいね」

相良「ふえ？」

不意にそんなことを言われた俺は変な返事をしてしまった。

右蕪「そうだな。エトワールは妹で、それを面倒見てる兄って感じにみえるな」

相良「あ・・・あはは。ってエトワ。頬に何故かパンの屑がついてるよ」

そう言っただけ俺は布巾で頬を拭いた。

エトワール「んん・・・ありがとうございます」

？今・・・エトワの頬が一瞬赤くなったような・・・

取り敢えず取り終え、食事を続けた。

火澄「翔」

相良「はい？」

食事を終え、フリースペースに着くと母さんと父さんが真面目な表情で話しかけてきた。

右蕪「今日ここに来たのは、お前のデバイスの事についてだ」

相良「！？」

全てを見透かされた様な感覚だった。

火澄「ロード、機能停止したでしょ？それで翔は前から“新型デバイス”の制作をしてたでしょ？」

相良「！？何で知ってるんだ！？」

右蕪「ジェイルから聞いた。使用者の個性とか、そういうのが分かるようにとな」

なるほどな・・・ジェイルは相当俺にぼこされるのが気に入ったみたいだな・・・

火澄「それで、その新型デバイスの制作に私と右蕪さんは協力してて、完成したから持ってきた」

相良「！本当ですか!?!」

そう聞くと二人は笑顔で頷き、二人は俺にデバイスを渡した。

デバイスは2つ。

二つとも勾玉の形をしており、向きを変えてくっつけると円の形になる。

ひとつは紅い勾玉でもう一つは蒼い勾玉。

相良「二つ・・・俺は、一つしか頼んでないはずだけど・・・」

右蕪「そのデバイスは特殊で、二つで一つなんだ」

相良「へえ・・・それじゃ、このデバイスは双子？」

火澄「そうよ。性能はロードを基に新たな機能をいくつか追加させたわ」

相良「・・・」

二つの勾玉が輝く。

これが・・・俺の新たな相棒。

右蕪「ロードの性能だけでは、限界があるからな」

相良「はい・・・」

そう。俺が様々な世界の魔法を見てきたからだけあって、その新たなフォルムを作ることになる。

だがロードは情報量に限界がきたらしく、機能が遅くなってきたんだ。

・・・!

相良「もしかして・・・お前」

俺は首にぶら下げてある機能停止しているロードを手のひらに乗せ

て見つめた。

相良「お前・・・わかってて・・・」

わざと・・・別れを告げたのか？

相良「・・・まったく、最後の最後でカッコつけやがって・・・」

最高の相棒だったぜ。ロード。

相良「それじゃ父さん。ロードを・・・頼みます」

そう言っつて父さんにロードを渡した。

右蕪「・・・ああ」

そう言っつて受け取り、ポケットにしまった。

火澄「翔は、ここからまたスタートするのよ。頑張っつてね」

相良「はい」

右蕪「エトワールも、息子の事を頼んだぞ」

エトワール「・・・はい」

少し強い力でそう返事した。

それを聞いた二人は笑顔で俺とエトワを見た。

右蕪「よし。それじゃ私と火澄は帰るとするかな」

相良「はい。またいつでも来てください。歓迎しますよ?」

火澄「うふふ・・・その時はちゃんと連絡するわよ」

相良「はい」

そう言っつて俺は“3人”と別れた。

相良「・・・じゃあな。相棒^{ロード}」

去りゆく相棒を想いだしながら・・・父さんと母さんの後ろ姿を見つめていた。

エトワール「ご主人様・・・」

そう言ってエトワは俺の手をギュッと握ってくれた。

相良「ありがとう。エトワ」

そう言って空いた手でエトワの頭を撫でた。

そして俺とエトワは手を繋ぎながら総裁室に向かった。

【緊急通信。緊急通信】

相良「？誰だ？」

そう言つて通信を繋ぐと、フェイトとティアナから通信だった。

フェイト「翔！今すぐ何人がこちらに送れない！？」

相良「何があつた！？」

ただ事ではないらしい。

側にいたギンガ、ルチア、エトワも通信画面を見つめていた。

ティアナ「現在、岩石地帯で巨大生物が出現して、私達の部隊のほとんどもが壊滅状態です！」

相良「何だと！？」

フェイトとティアナの部隊が壊滅！？

どんな敵だ！？

相良「分かつた！今から向かう！待ってる！」

フェイト「うん！待ってる！」

そう言って連絡を切った。

相良「ギンガ！今動ける人は誰がいる！？」

ギンガ「現在は私たちとアインハルト、音使、エトワールです！」

相良「分かった。ルチアはここで総裁代理の仕事を頼む。俺とギンガとアインハルトと奏多とエトワールでいく！」

ルチア「分かった。気を付けて」

相良「ああ。行くぞギンガ！」

ギンガ「はい！」

そう言って俺とギンガは総裁室を後にした。

相良「ロード……みててくれ。俺と、新たな相棒との戦いをな」

俺の首には、蒼と紅の勾玉がぶら下がっていた。

最高の相棒との別れと、受け継がれる道 前編（後書き）

別れと出会いで始まる戦い。

最高の相棒を失い、新たな相棒と作る物語の行くへは・・・

最高の相棒との別れと、受け継がれる道

後編（前書き）

今、彼の首には白銀の宝石がない。

それは、一つの別れ。

そして今、彼の首には蒼と紅の勾玉。

それは、二つの出会い。

新たな星を手にした彼が見せる力とは・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
t y } 始まります。

最高の相棒との別れと、受け継がれる道 後編

フェイト Side

フェイト「プラズマランサー・・・」

私は前方にいる黒く、翼の無く拳を振るう巨大な竜に向けて雷の矢を9つ展開させた。

フェイト「ファイアー!!!!」

その全てを放った。

雷の矢は竜の全身にばらまかれるように真っ直ぐ向かった。

だが、竜はそれを拳を横に流すことで全て破壊した。

フェイト「な・・・」

ティアナ「クロスファイヤー・・・」

私の後ろに立っていたティアナが展開させた大量の魔力弾を放った。

ティアナ「シュート!!!!!!」

大量の魔力弾は不規則な軌道を描きながら相手を覆うように当たり、爆発した。

ティアナ「やった？」

フェイト「ううん・・・まだみたい」

そう言うとおり、爆風の中から無傷の竜が出てきた。

ティアナ「今の、結構魔力込めたんですけど・・・」

フェイト「魔力弾がダメなら・・・バルディッシュ！」

私はバルディッシュをハーケンモードに変え、切り込んだ」

フェイト「ソニック・ムーブ！！」

高速で移動し、竜の背後に回り込んでバルディッシュを振るった。

フェイト「はああああ！！！！」

だが、竜の体は固く、切ることはできなかった。

フェイト「くっ！」

私は瞬時にティアナのもとに戻った。

ティアナ「手ごわいですね」

フェイト「うん。こんなに硬い生物は初めて見た」

そう。執務官の仕事として向かった次元世界で、ここまで巨大な生物は初めて見た。

しかも敵はこの竜1体じゃない。

ほかにも9つの蛇が一つに纏まった敵とか、岩石で出来た巨人。機械で出来た巨人。

この3体と、今目の前にいる竜。

勝てるか不安になってきたな・・・

すると岩石の巨人が地面に勢い良く拳をぶつけた。

フェイト・ティアナ「!？」

それが原因で強い地震が発生して私とティアナが立っていた場所で地割れが発生した。

ティアナ「きゃっ!!」

ティアナはバランスを崩して割れ目に落ちそうになった。

フェイト「ティアナ・・・!？」

ティアナを助けようとしたけど、目の前に立ち塞がる機械巨人。

そいつが私に向かって拳を振るってきた。

フェイト「プロテクション!!!!」

私はとつさに防御に徹した。

だが私の防御は容易く崩されて私は10mほど殴り飛ばされた。

フェイト「くっ!!!!」

ティアナ「きゃあああああ!!!!!!」

ティアナはそのまま割れ目に落ちていった。

フェイト「!!ティアナ!!!!!!!!」

私が呼んでも返事は無く、しかも割れた大地はまたくっつき始めた。

フェイト「・・・ティアナ!!!!!!!!!!」

私はティアナが落ちた割れ目が閉じる前に助ける為にソニック・ムーブで割れ目に向かった。

だが、間に合うことはなく、地面は完全に塞いだ。

更に私はその好きに3体の敵に囲まれ、3体全てに殴られそうになる。

ソニック・ムーブを使った直後だから、もう使えない。

そして防御も不可能。

フェイト「(翔……「めん!」)

私は目を瞑って自分の死を覚悟した。

だが

リフレクト・ムーブ

フェイト「え……」

絶望的な状況で目にしたのは

相良「大丈夫か？」

荒れ果てた戦場とはとても無縁の様に感じさせるほど正装な見た目でいて、綺麗な男性が一人。

相良「俺の女に・・・好き勝手やってくれたじゃねえかよ!!!あ
あ!!!!!!?」

そして雰囲気はガラッと変わって、気迫と殺気に満ちた全身。

一歩踏み込みを入れるだけで地面が揺れてしまうのではないかと思
う、圧倒的な存在感。

その登場はまるで

相良「フェイトは、ここで待ってる」

突如流れる、流星の様に・・・

そして私はその場に立って翔を見つめていた。

相良 Side

相良「さて・・・召喚魔法『スターライト・ロード』星の導き」

両手に白銀のミッドとベルカの魔方陣を重ね合わせたものを発現させ、前方に同じような魔方陣をだすと、その上から3人の女性と一人の男性が現れた。

相良「さて・・・初の実戦で悪いけど、よろしく頼むぜ。相棒」

俺は首にぶら下げてある二つのデバイスを右手で掴み、前に出した。

相良「マルス！！！！」

その名を呼べば、紅き勾玉が光だす。

相良「メルキユール！！！！」

その名を呼べば、蒼き勾玉が光だす。

相良「行くぞ・・・セツト・アップ!!!!」

そして二つの光が彼を包み込んだ。

相良「ロード……みててくれ。これが……俺の新たな力だ！！」

光の中から現れたのは白く短い髪に蒼と紅の瞳をし、紫色のジャケツトにしたは薄い紫色のズボン。

そして両手に持つのは紅き刀と蒼き刀。

相良「調子はどうだ？」

マルス「問題ありません」

メルキユール「私もです。主翔さん」

相良「分かった。それじゃ、メルキユール、モードシューズ靴」

メルキユール「了解しました。主」

そう言うと蒼き刀は二つの蒼き光になり、俺の両足を纏った。

足には蒼き靴が装備された。

そしてBJは色を変え、上も下も紅一緒に染まっていた。

相良「エトワとギンガはティアナの救助。奏多とアインハルトは俺とあいつらを倒すぞ」

音使「ああ！」

アインハルト「はい！」

フェイト「私も戦うよ」

相良「……大丈夫か？」

フェイト「うん。大丈夫！」

その目は真剣だった。

相良「……分かった。俺とひとつになるぞ！」

フェイト「……ふえ！？」

何故かフェイトは・・・いや、アインハルトもだがフリーズした。

相良「？俺今何か変なこと言ったか？」

マルス「あの・・・自覚無いんですか？」

相良「へ？何が？」

マルキュール「・・・」

マルス・マルキュール「(この人・・・もしかして凄く鈍感!?)」

相良「？」

相良「ああ〜もつめんどいな〜!」

フェイト「え・・・んん!？」

俺は強引にフェイトの唇を奪った。

するとフェイトは黄色の光となり、俺のを包み込んだ。

そして光の中から金髪のロングで紅いBJに紅いミニスカートで紅と黄色の瞳をした黒いマントを羽織った、かなり胸のある女性が現れた。

フェイト「(ちょ／＼／＼ちょっと翔／＼／＼い、いきなりキスするなんてえ／＼／＼)」

私の中で文句をいうフェイトさん・・・って、口調が変わってしまいました・・・

相良「すみませんね。フェイトさんが何故か悶えていたので」

フェイト「(悶えてないよお!!!)」

音使「お前・・・なんで女になってるんだよ？」

相良「え?・・・ああ、私はユニゾンデバイス以外ともユニゾンできるんですけど、人とユニゾンすると相手の性別になってしまっんです。そして口調もこんな感じになってしまっんです」

音使はなるほどと納得したらしいが、アインハルトは何故かムスツとしていいる。

相良「えと・・・アインハルトさん?どうしたんですか?」

アインハルト「・・・別に、何でもありません」

そう言っアインハルトさんは敵の方を向いた。

アインハルト「い、行きますよ!」

相良「え・・・ええ」

マルス「マスター。大変ですね」

相良「え・・・えっと、はい」

よくわかりませんが、一応返事してみました。

音使「ヴォイス・ブレイド、モード「玄刀」」

そう言うと奏多さんの右手に黒い刀が現れた。

相良「私とアインハルトさんで3体ほど相手をしますので奏多さんはあの蛇をお願いします」

音使「ああ。任せとけ」

そう言うと奏多さんは先に切りかかりに行きました。

私達の目の前には3体の巨人が立って私を殴ろうとしています。

フェイト「(ちょ……ちょっと翔！早く避けないと当たる!!!)」

相良「大丈夫です」

そう言って私は刀を構えて目を瞑った。

そして3体は同時に殴りかかってきた。

パシイイイイ!!!!!!

フエイト「(え!?)」

私は3体の拳を刀一本を片手で持って抑えた。

空いた右手にパイロキネシスと魔力を合わせた炎を出して3体には
らまいた。

そして3体は燃えた。

相良「やはり炎は聞きませんか。でしたら・・・!!」

私は全身に魔力を込めて爆発させ、全身の筋力を爆発的に上昇させて走り出した。

そして私は翼のない竜の背後に一瞬の中の一瞬で回り込んだ。

相良「烈火・・・一閃！」

左から右に切った刀は強力な炎を纏い、竜を切り燃やした。

フェイト「(す・・・すごい・・・)」

フェイトさんも啞然としている。

もちろんアインハルトさんも啞然としていた。

巨人は倒れはしたものの、立ち上がった。

アインハルト「しづとい……」

相良「大丈夫です。私に、ひとつ考えがあります」

アインハルト「？」

相良「それはですね……」

アインハルトさんに耳打ちで話した。

相良「準備はいいですね!？」

アインハルト「はい!いつでも!」

相良「サイコキネシス超能力!」

そう言うとアインハルトさんは宙に浮き、私はアインハルトさんを遙か上空に送った。

その間に2体の巨人は前方と背後で挟み撃ちで殴りかかってきた。

相良「先ほどと同じ状況ですね」

パシイイイイン!!!!!!

そうやって私は右手で前方の。左手で背後の拳を掴んだ。

フェイト「(すごい・・・こんなに力があるなんて・・・)」

相良「詳しい説明は後ほど。・・・さて、これでフィニッシュです
!.....」

そうやって私は機械の巨人を上空に投げ飛ばした。

そして空いた手に刀をだし、炎の魔力を込めて放った。

相良「ヴォルカニック・スター・ロード
炎龍討つ流星の一閃!!!」

その一閃は、大量の熱をだし、奴を切り裂くと、超光熱で奴は溶けていった。

そして上野では・・・

アインハルト「霸王……」

アインハルトさんは右拳に魔力を練り上げ、上空に向かってくる機械巨人に向かって拳を放った。

アインハルト「旋翔拳せんじょうけん!!」

拳から放たれた砲撃は敵の腹部を直撃し、脆くも壊れていった。

相良「よっと」

フェイト「ふえ!?!」

ユニゾンを解除し、俺はフェイトをお姫様抱っこの形で抱えていた。

フェイト「あ／／／／あう／／／／」

取りあえずトマトの様に顔を真っ赤にしているフェイトをおろし、上空から落ちてくるアインハルトをキャッチした。

相良「よっと。大丈夫か？」

アインハルト「ふえ!?!あ／／／／はい／／／／大丈夫、です／／／」

アインハルトも顔がトマトの様に真っ赤だ。

相良「マルス、マルキュール。お疲れ様」

そう言っつて俺は私服に戻った。

そしてマルスとマルキュールは勾玉の姿で俺の首にぶら下がってる。

フェイト「あれ？ロードは？」

相良「ロードは、卒業した。今は・・・こいつが新しい相棒だ」

フェイト「・・・そっか」

そう言って俺達は地割れで落ちたティアナの場所に向かった。

最高の相棒との別れと、受け継がれる道

後編（後書き）

見せたのは炎の力と高速の力。

だがこれはまだ全ての力の一部でしかない。

これから、また更に力を発揮していく2機。

彼の道の力となるのだろうか・・・

戦慄と旋律の使い手（前書き）

今だ見せたことのない彼の能力。

それが明らかになる。

使うのは音の力。

見せるは音の奇跡。

彼が奏でる旋律が、戦場に響きわたる。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

戦慄と旋律の使い手

音使 Side

音使「行くぜ。ヴォイス・ブレイド！」

そう言つて俺は地面に刃を刺すと地面から無数の赤い玄が出て、
9
つの蛇がくつついた様な大蛇に襲いかかった。

それは大蛇全体に巻き付き、縛り上げていた。

音使「おりゃああ!!!」

俺は刀を真上に向けて全力で持ち上げた。

そして空に上がった大蛇に向かって新たに玄を放つて貫いた。

そして刀を振動させ、やつを切り裂いた。

音使「音振斬」
おんしんざん

9つの大蛇は切り刻まれた。

……はずだった。

突如、地面が大きく揺れ、地面から倒したはずの大蛇が現れた。

だが蛇の数が1つ消えていた。

音使「くっ！」

8つの蛇の口から炎が放たれた。

それが全て俺に向かって放たれた。

だが炎は俺に向かう直前に、俺から逸れるように離れていった。

音使「ふう。危なかつたな・・・」

俺は刀に力を込めながら抜刀術の構えに入った。

音使「我、音使奏多の名において、音と刃の力をここに示せ」

そう言うと刀はソプラノとバスの音を響きわたらせた。

その音は徐々にその音量を上げていき、地面を俺を中心に破壊していき、俺は両足に音を集中させた。

そして両手に力を集中させた。

力と音のデュエット。

そして俺は奴に向かって切りかかった。

音使「サウンド・ブレイク・コーラス音と力の合唱」

刀を振ると斬撃と大量の玄が放たれ、奴をまっぴたつにした後、大量の玄が奴を斬りさいた。大

音使「・・・終わり」

そう言って俺は刀をしまった。

音使「さて・・・翔達のところに行くかな」

そう言って俺は翔のもとに向かった。

相良 Side

相良「奏多。終わったみたいだな」

音使「ああ。手応えが少ないけどな」

そう言いながら俺達はエトワとギンガが向かった場所へ向かった。

相良「エトワ！ギンガ！」

エトワ「ご主人様・・・」

ギンガ「翔さん！」

二人はティアナが落ちたであろう場所に立っていた。

相良「フェイト。ティアナはここに落ちたか？」

フェイト「うん」

とは言つものの、地面は周りとも何も変わらない。

しかも地面は完全に閉じてる。

・・・

相良「エトワ。俺の合図で龍になってほしい。頼めるか？」

エトワール「ご主人様がお望みとあらば」

相良「ありがとう。ギンガ、一緒に来てくれるな？」

ギンガ「はい！」

相良「よし！」

そう言つて俺はギンガを両手で抱き寄せ、唇を奪つた。

ギンガ「んむ／＼／＼／＼／」

心身ココロ・カラダの同調

ギンガは紫色の光となり、俺に纏った。

そして光の中から腰まで伸びた紫色の髪、すらりとした体型に身長が180ほど。

白と紫のラインが入った騎士服を着た女性が現れた。

相良「ふう。一々キスをしなければならないのは大変です・・・」

また口調が変わってしまいましたが、相良翔です。

ギンガ「（あ／／／あの／／／い、いきなりキスなんて／／／
／）」

私の中でギンガさんは慌てていた。

ふふっ。可愛いですね。

相良「すみませんね。女性とのユニゾン条件が「粘膜接触」なもので・・・」

全員「セキ〇イ!？」

何故そのタイトルを知ってるんですか？

ま、まあそんな事はさておき。

相良「作業を開始します」

ギンガ「(はい)」

相良「マルス、モードドリル・ナックル「貫く拳」」

マルス「はい」

右手にあつた紅き刀は紅き光となり左手を纏い、光から紅き螺旋状のドリルが出現した。

アインハルト「ドリルは男のロマンと言つ言葉を聞いたことがありますか?」

相良「・・・アインハルトさん? 一体誰からその言葉を聞いたんですか?」

アインハルト「はやてさんから・・・」

よおしはやてさん、後は絶対に高町式お話だよおし・・・

さて、そんなことはさておき・・・

相良・ギンガ「流星貫通・火流必倒!!!」

左手に真つ赤な魔力光が集まり、地面に向かって落下する隕石の様に拳が放たれた。

ドゴオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

そして地面は一気に大きく割れ、穴があいた。

ヨミゾン・ファウト
同調解除

そう言つと俺とギンガは別れた。

相良「エトワ！行くぞ！」

そう言つて俺はエトワの手を繋ぎ、穴に向かってダイブした。

相良「集いし願いが新たに輝く星となる・・・」

全員「!？」

奈落の底から指す一筋の光。

相良「光指す道となれ！！！」

そして眩い光が暗闇の奈落を輝かせ、奈落の底から光に包まれた龍が現れた。

全員「！？」

龍は空高く舞い上がり、その翼を広げた。

広げた瞬間、星屑が散りばめられた。

そしてその龍の背に俺と俺にお姫様抱っこで抱えられたティアナがいた。

相良「スターダスト・ドラゴン星屑の龍。俺達を下ろしてくれ」

そう言うと龍は無言で頷き、地面に着地し、俺達は飛び降りてティアナをゆっくりと地面に仰向けで置いた。

フェイト「ティアナ!!」

フェイトを先頭に皆がこっちに向かってきた。

アインハルト「やはり彼女が・・・」

音使「すげーな。あの女の子にこんな姿が・・・」

ギンガ「話には聞いていましたが・・・これほどまでとは・・・」

3人は龍のその姿に目を奪われていた。

フェイト「ティアナ！！！！ティアナ！！！！！！」

フェイトは必死にティアナを起こそうとしている。

だがティアナはピクリとも動かず、唇は青くなって、全身の体温はなくなっていた。

フェイト「嘘……嘘だよね！！ティアナ！！！！」

フェイトは涙を流しながらティアナの死を否定するように全力で揺すっていた。

音使「止める。もう……無意味だ」

奏多がフェイトの肩を掴んで止めた。

するとフェイトはティアナから手を離して泣き崩れた。

フェイト「うう……私……執務官失格だ……ティアナを……守れなかった……」

跪いて、地面に涙を流しながらフェイトは自分を責めていた。

相良「スターダスト・ドラゴン星屑の龍。エトワに戻れ」

そう言うと龍は光だし、光は徐々に小さくなり、エトワに戻った。

相良「エトワ。死者を蘇らせる力はあるか？」

そう聞くとエトワは無言で首を横に振った。

相良「・・・そうか」

皆がティアナを囲んだ。

アインハルト「これが・・・死」

エトワール「この、胸に穴が空いたような感覚が・・・人の死なのですね」

相良「そうだ。二人とも、絶対に忘れるな」

これは、一つの教えだ。

ティアナを使うのは申し訳がないけどな。

フェイト「翔！！何とかできないの！？」

フェイトは俺に縋り付いた。

フェイト「どんな代価でも払うから！！ティアナを生き返させて！
！！！！」

相良「・・・フェイト」

フェイトのその姿は、普段の綺麗で大人のようなフェイトとは違い、汚れていて、子供の様で・・・だけど純粋な想い。

相良「分かった。俺に……全て任せろ」

復元する星（前書き）

ティアナは死んだ。

泣き崩れる仲間達。

そして助けを求めるフェイト。

それに応える相良翔。

発動する魔法が・・・死うしを変える。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty） 始まります。

復元する星

相良「俺に、全て任せろ」

その一言で、皆の瞳に希望が見えた。

音使「どうするつもりだ？」

相良「そのままの意味だ。俺に任せろ」

フェイト「ティアナ・・・助かるの？」

フェイトは涙の量が減っていた。

それは、俺の言葉に希望を持ったからだろう。

相良「絶対に助ける」

そう言っただけ俺は全身に空気中の魔力を集め、それを自分の魔力と混ぜ合わせた。

相良「すうっ・・・はぁっ・・・すうっ・・・はぁっ・・・」

深呼吸をしながら、全真に魔力が馴染むのを待つ。

相良「・・・よし。始めるか」

俺は全身に集めた魔力を両手に纏め始めた。

そして俺の全身に白銀の魔力が放出され、放出された魔力は両手に集まり両手は白銀の魔力で覆われ、徐々にその大きさを増す。

相良「ぐううう！！！！！」

全員「！？」

両手に魔力を大量に溜めることで腕に負担がかかり、俺は苦痛の声を上げた。

相良「が・・・ああああ！！！！！！ぐ・・・ぐううううう！！！！！！」

全身から大量の汗が流れる。

激痛と戦いながら、俺は魔力を吸収、放出、そして更に両手に吸収を続ける。

そのたびに両腕と全身に来る激痛。

フェイト「翔！！」

アインハルト「翔さん！！」

音使「翔！！」

ギンガ「翔さん！！」

マルス「マスター！！」

マルキュール「主！！」

皆が心配そうに声をかけてくる。

相良「だいじょ……うぶ……絶対に、助けるから……」

俺がこれから使う魔法の発動の為に、全身への激痛が無ければいけないんだ！！

確かに痛い。けれど、ティアナはもっと辛いはずなんだ！！！！

だから

相良「俺が諦める訳には
あ……………」

行かねえんだああああああ

エトワール「ご主人様」

そう言ってエトワは背後から俺を抱きしめた。

相良「どう、した？」

エトワール「私の力、今ここで見せましょう」

そう言つとエトワの背中から白銀の翼が生えた。

すると徐々に俺の全身を襲う激痛がなくなってきた。

相良「これは・・・!?!」

エトワール「私は、加護や守護の力を持つ龍。ご主人様に襲いかかる激痛も、私の力で取り除いて差し上げましょう」

相良「・・・ありがとう。エトワ」

エトワール「いえ。ただ、このままで終わりたくないだけです」

相良「・・・十分だ!」

そして俺は魔力を溜め終え、両手に二つの魔方陣を発現させた。

相良「

正義ソレイユ

」

右手に古代ベルカ式の魔方陣。

相良「

悪リュスウ

」

左手にミッド式の魔方陣。

フェイト「翔……二つの魔法が使えるの？」

アインハルト「そんな人、初めて見ました」

ギンガ「私も・・・いえ、それ以前に、そんな“人”が存在することすら聞いたことがない・・・！」

3人は、俺が起こしている現象に疑問を抱いた。

相良「あはは・・・後で色々と説明するからさ、今は・・・俺に全て任せてくれ」

魔法陣は正方形になり、角の全てに丸い魔法陣がある。

相良「見せてやるよ……これが俺の、真の魔法だ！……！」

そして重ねた両手をティアナの胸に向かって振り下ろした。

相良「

オバー・スター・ロード
新たな星の誕生

!!!」

そして俺は

唱えた。

相良「

ダ・カーポ・ザ・スターダスト
復元する七つの星屑

」

そしてティアナの胸を中心に、全身にその光が送られていった。

ティアナは眩しく光りだし、そして光が消えると

ティアナ「……う……ん？」

相良「……大丈夫か、ティアナ？」

ティアナ「翔さん……それに、私は……」

フェイト「ティアナ!!」

ティアナは目を覚ました。

ティアナは何が何だか分からないみたいだけどな。

ティアナ「私は……一体？」

フェイト「良かった……良かったよお……」

フェイトは大号泣である。

アインハルト「良かったです！」

ギンガ「ティアナ！良かった！」

音使「翔・・・お前」

相良「ちよっつっつと無茶しただけさ」

やべ・・・視界が霞む。

音使「おい！翔！！」

うるせえ……ちょっと………寝させてく………れ

エトワール「ご主人様！」

音使「翔！！！！！！」

良かった・・・ティアナが・・・生き返って・・・

そこで俺の意識は無くなった。

復元する星（後書き）

俺はティアナの死を消した。

死を無かったことにしたのだ。

それは決して正しいことではない。

けれど、俺は決断していた。

誓っていた。

皆を、絶対に幸せにする……守るって。

彼の生きる世界と自分の生きる世界（前書き）

彼は一人の大切な女性を救った。

だが、その代償は大きい。

何も知らない彼らは、その代償と彼が使う力の真実を聞く。

そして決断する彼女達。

その先に待つものとは・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
t y } 始まります

彼の生きる世界と自分の生きる世界

ティアナ Side

ここは陸宙管理本部の中にある病室。

個室のベッドで酸素マスクを付けられ、頭や腕や足など、至る部分に包帯を巻かれて眠っている男性。

私達の夫の相良翔さん。

病室には私とフェイトさん、エトワール、スバル、ギンガさん、アインハルト、シュテルさん、アーチェさん、はやてさん、シグナムさん、ヴィータさん、シャマル先生、ルチアさん、芳乃、音使さんがいる。

シャマル先生が翔さんの容態を説明した。

シャマル「翔くんの容態は今の所命に別状はないわ」

そう聞いた皆が安堵の息を吐いた。

シャマル「ただ、意識だけを取り戻さないの。後は、翔くんが意識を取り戻して、怪我を治してくれれば万全なんだけど・・・」

そう聞くとまた皆の表情が悪くなった。

ティアナ「すみません。私が・・・私が翔さんを・・・」

フェイト「！違う！それは・・・違うよ」

私が謝ると、フェイトさんが否定した。

フェイト「私が翔に無茶を頼んだから・・・こんなことに・・・」

フェイトさんも、自分を責めていた。

ルチア「二人とも、悪くないよ。翔は元々、こうなる事は予測して
たはずだもの」

ティアナ「？それは・・・どういふことですか？」

予測していた。

ということは・・・私が死ぬのも分かっていたっていふこと？

そしてルチアさんは、翔さんが私を蘇らせた魔法についての説明を始めた。

ルチア「皆ももう既に気づいていると思うけど、翔はベルカ式の魔術とミッド式の魔術の両方を使うことができるの。そしてその中で翔がたどり着いた魔術 オーバー・スター・ロード 新たな星の誕生。これは、ミッド式とベルカ式の魔術に翔独自の魔力を使って発動することができる、翔だけしか使うことのできない魔術なの」

その説明に、私達は驚いた。

翔さんは・・・いつのまにそんな凄い魔術を開発したんだろう・・・シグナム「そう言えば昔、翔が言っていたな。『これから・・・色々と変わっていくさ。変わらないものなんて無い。全ては変化していかないといけない。いつか・・・ベルカとミッドと違う、新しい魔法も生まれるはずだ』・・・まさか、翔自身がそれを生み出すとはな・・・」

シグナムさん、いつのまにそんな話しをしたんだろう・・・

何か、私の知らないことばかりだな・・・

ティアナ「あの、それで今翔さんに起こっていることと・・・何が関係あるんですか？」

ルチア「翔がティアナに使ったのは、『転生魔術』いわゆる、禁術の類の魔術なの」

全員「!？」

禁術・・・それを聞けば、誰だって翔さんの今の状態に納得が出来る。

禁術を使った。禁術はその魔法を使った代償が大きいため禁術になっている。

それを翔さんが使ったということは・・・

ティアナ「翔さんは・・・禁術の代償で、今この状態なんですね？」

そう言うとルチアさんは無言で頷いた。

ルチア「ティアナに使った禁術の代償は『発動前に術者に激痛を与える』そしてもう一つが『発動後、術者の意識は閉ざされる』……だったはずだよ。激痛はエトワールが吸収してくれたから良いものの最後の代償だけはどうにもならなかった」

最後の代償により、翔さんは意識をすぐには取り戻せない。

それは私のせい……翔さんは……

ティアナ「翔さんは……いつ目覚めるんですか？」

ルチア「分からないの。すぐに目覚めるかもしれないし……一生起きないかもしれない」

その言葉は、最初にシャルマル先生が言った命に別状はないと言つ言葉を打ち砕くようなものだった。

シュテル「一生……目覚めない……ですか」

アーチエ「塵芥の分際で、この我を侮辱しているつもりか!？」

アーチエさんは完全にキレている。

ルチア「ううん。侮辱なんかしない。私はただ、事実だけを言うてるの」

ヴィータ「ふざけんなよ……どうして……どうして翔なんだよ

!?!?どうしていつもいつも、あいつだけ傷つかねえと行かねえんだよ!?!?!?!?!」

はやて「ほんとや!?!?どうして・・・何年経っても、何をしても・・・必ず傷つくのは翔くんや。なんでや!?!?納得いかへん!?!?!?!」

もちろん、誰だって納得はいかない。

私だって・・・納得できない。

私を助けてくれた人が、こんな目に会わなければいけないなんて・・・
・納得できない!!

ティアナ「私達・・・どうして、こんなに後悔するんでしょうね」

不意にそう思った。

私達の駄目な部分を、翔さんは補ってくれる。

そんな翔さんの背中を守りたくて、ここまで来たのに・・・結局こ

の始末。

私たちは守られてばかり・・・

私たちは・・・翔さんの足で纏いになるばかりか、傷つけてしまった。

音使「それほど、翔の生きる世界は危険でレベルが高いつてことだろ」

私たちは、知らなかったんだ。

音使さんの言うとおり、翔さんの生きる・・・戦う世界は違う。

私達の戦いとは全く違う次元にいる。

「
芳乃「俺達が少しでも足を引っ張れば、こつなるってことかよ・・・

私達が弱いから、こんなことになってしまった。

アインハルト「これが・・・翔さんの生きる世界」

誰も知らなかった。

いや、知ろうとしたけど、知ることができなかった世界。

紙一重の世界で、些細なミスがそのまま死に直結する。

いつ死んでもおかしくない世界。

そんな世界に翔さんは総裁の仕事をこなしながらやっていた。

もう、十分休んでもいいような人で、十分に役目を果たしたのではないかと疑うような人。

ティアナ「私たちは、何が出来るんですか？」

それが、今の私達の疑問だった。

??・?? 「強くなるか、翔から離れるかのどちらかでしょ？」

全員「!？」

病室のドアが開くと、二人の大人が入ってきた。

スバル「翔さんのお父さんとお母さん……」

そう。地上本部総裁と管理局総裁の二人であり、翔さんの両親の右蕪さんと火澄さんが現れた。

フェイト「どうして……ここに？」

右蕪「息子が倒れて心配しない親なんていないよ」

火澄「ルチアちゃんから大体の説明は受けてるわ。……使ったの

ね。転生魔術」

ルチア「はい。意識が目覚めない状態です」

右蕪「そうか・・・相変わらず、自分の命だけは無駄にする息子だな」

火澄「私たちはいつもヒヤヒヤするもの。早く私たちを安心させてくれないかしらね」

苦笑いしながらそう言う二人は翔さんに近づいて言った。

右蕪「皆は、翔のいる世界がどんなものか、今回で十分に分かったと思う。だからこそ皆には今一度考えて欲しい」

火澄「選択しは2つ。1、翔の世界から離れる。2、翔の世界に入る。どれを選んでも大丈夫よ。自分が世界に入っても役に立つわけではない。迷惑をかけたくないのなら1を選ぶ。それでも翔の側にいたいのなら2を選べばいい。どれを選んでも、誰も責めない」

それは、究極の決断。

私達は翔さんと別れるか、一緒に命がけの世界に行くか。

芳乃「俺は行く。翔さんの世界に行く」

音使「俺もだな。こいつには借りがある。それに、こいつには興味がある」

ルチア「私も行くよ。翔の支えになりたいから」

アインハルト「私も、翔さんの側で戦いたい」

ギンガ「私もです」

シグナム「私は全てを翔に捧げると誓っている。もちろん進もう」

ヴィータ「それはあたしもだ！」

シュテル「私も、助けてくれた翔さんを助けになりたい」

アーチエ「ふん！この塵芥には、我がいなければ何もできんからな！」

次々と皆は名を上げる。

シャマル「私は・・・1番にするわ」

全員「！？」

この中でシャマル先生は1番・・・つまり、翔さんから離れる道を選んだ。

シャマル「私の力は・・・翔くんを守ることもできないし、手助けにもならない。ただ足を引っ張るだけだから・・・ごめんなさい」
頭を深く下げて謝った。

はやて「ええよ。シャマルが決めたことなら、誰も文句は言わへん」

シャマル「・・・ありがとう。はやてちゃん」

きっとシャマル先生は後悔している。

でも、自分の実力を誰よりも理解しているからこそ、身を引く決意をした。

悔しいはずだと思う。

だって、大好きな人を守れないから・・・救うこともできないから・・・

私は・・・どうすれば良いのかな・・・

火澄「まだ決まらない人は、時間をあげる。今日一日、今一度自分がどうするべきか、何をしたいかを考えて・・・またここに来ること。他の皆にはこちらから伝えて置くわ。それで良い？」

全員「はい」

そう言って、私たちは解散した。

火澄
S i d e

私と右蕪さんは皆が帰ったあと、病室に残って翔の様子を見ていた。

火澄「皆、どう決断するのかな？」

右蕪「翔の認めた人達だ。自分たちにとって、正しいと思う決断をするはずだ」

火澄「ええ・・・そう、信じてるわ」

そう言って私と右蕪さんは、翔の寝ている姿を見ていた。

彼の生きる世界と自分の生きる世界（後書き）

結婚して、今まで以上に側にいられると思った彼との距離。

けれど彼は、私達の想像したよりももっと先の世界にいて、私たちはまた選択の時がきた。

私は・・・どうすればいいのだろうか？

決断の時　くその時、彼女達はく（前書き）

私たちに、決断の時がきた。

どれを選んでも間違いではない。

けれど、後悔するかもしれない。

だから分からない。

私は・・・どうしたいんだろう・・・

魔法少女リリカルなのはVivid　}　world　Infini
ty　}　始まります。

決断の時　↳その時、彼女達は

スバル　Side

シャマル「・・・」

その日の夜、私は翔さんのいる病室に向かった。

ドアを開けようとしたけど、中に別の人が入っているのが分かったから、少し開けて覗くようにした。

するとそこにはシャマル先生が、翔さんの頬を触っていた。

そして・・・

シャマル「・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

涙を流して・・・そう言った。

シャマル「私が・・・守れなくて・・・ごめんなさい・・・」

凄く後悔している表情。

私は、ただそれを見つめていることしかできなかった。

シャマル「ごめんなさい・・・本当に・・・ごめんなさい・・・」

流れる涙が、翔さんの頬に当たって下に垂れていく。

私は、シャマル先生の・・・悔やんでいる姿が見ていられなくて、その場から逃げるように離れていった。

スバル「はあ・・・」

私はフリースペースの椅子に座って溜息をついた。

はやて「あれ？スバルやないか」

スバル「はやてさん・・・」

はやてさんは私の隣の席に座った。

はやて「なんや溜息なんてついて……って、まあ当然やな」

スバル「はやてさんは、何でここに？」

はやて「私は翔くんの様子を身に行こうとしたんやけど、シャマルが……な」

スバル「あ……」

はやてさんも、見ていた。

シャマル先生が……悔やんでいる姿を……

はやて「何や、入りずらいし、入ったら泣けないやろうしな」

スバル「そう……ですね」

スバル「はやてさん。私、どうすれば良いんでしょうか……」

私は、救助隊の仕事にも誇りをもってやっている。

けれど、翔さんの力にもなりたいと思う。

・・・でも、それで迷惑をかけるんじゃないかって不安がある。

私は・・・だから迷っている。

はやて「・・・スバル。ちょっと、目を瞑ってみい」

スバル「え・・・あ、はい」

そう言っって私は目を閉じた。

はやて「今から二つの選択を言っよ。まず一つ、救助隊でいたい。
2、翔くんの側にいたい」

スバル「はい・・・」

はやて「先に思い出した選択しはどれや？」

スバル「先に思い出した・・・ですか？」

私は、翔さんの側にいたい

！！

スバル「……ありがとうございます……」

はやて「決まったみたいやな」

スバル「はい……私、決めました」

はやて「うん。頑張つてな」

スバル「はい！」

そう言つて私は家に帰つた。

はやて」・・・せやけど私は・・・翔くんの・・・敵にならなあ
かんよ

ティアナ Side

ティアナ「私は・・・どうすれば・・・」

何も分からず、自分の部屋でただ考えていた。

私は・・・どうしたいんだろう・・・

翔さんの世界に入りたい。

けれど・・・それで翔さんに助けられたら・・・今までと何も変わらない。

だから・・・足を引つ張るのが怖い。

ティアナ「・・・・・・・・」

私はクロスミラージュを右手で持って見つめた。

ティアナ「私は・・・私の銃弾は・・・大切な人を・・・守れるのかな？」
ラシスター

クロスミラージュ「出来ますよ。マスターなら、きっと」

ティアナ「クロスミラージュ・・・」

クロスミラージュは、私の背中を押している。

私は、絶対に・・・同じことをしたくない!!!

ティアナ「ありがとう。クロスミラージュ。私・・・決めた！」

はやて Side

はやて「それで、私はこれからどないすればええんや？」

誰もいない場所で私はある人と話していた。

????「君には、俺達とともに来てもらう」

男性の声。身長は私よりも上の長身の人。

はやて「それで・・・皆は助かるんやな？」

????「ああ。少なくとも、君がいる時よりは安全だ」

はやて「そうかあ。そら良かったわ」

????「・・・それでは、行くとしよう」

はやて「うん」

はやて」「ちよつなら・・・翔くん。皆「

そして一人、静かに・・・誰にも別れを告げず、陸宙管理本部から消えた。

そのことについて。

決断の時 彼の背中を追うために (前書き)

決断をくだす時がきた。

消えゆく仲間も決断し、彼女達は前に進む。

そして眠りにつく彼の両親が行うことは・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
t y } 始まります。

決断の時 彼の背中を追うために

右蕪 Side

翌日になり、陸軍管理本部のフリースペースに何名か集まった。

いるのはルチア、ギンガ、ティアナ、スバル、フェイト、レヴィ、アーチエ、シグナム、ヴィータ、キャロ、エリオ、ルーテシア、アインハルト、ヴィヴィオ、イクス、コロナ、ノーヴェ、チンク、デイエチ、デイド、セツテ、音使、芳乃、サクラ、紗雪、なぎさ、ナギサ。

俺と火澄の二人は皆の前に立ち、話を始めた。

右蕪「何名か来ていない者がいるが、その者達は参加しないと
言う方針でいく」

フェイト「あ……はやてがいなんですけど」

火澄「え……」

ほう……彼女が……それは意外だな。

右蕪「だが、今は気にしている時間がない。すまないが、無視して
進める。今回集まってくれた皆が戦いの道を選んだものと判断する。

そして今日から『特殊訓練』を始める！」

そう言うと皆は何が起こるのかよく分からない表情をした。

火澄「簡単に言えば、厳しい訓練を受けてもらう・・・それだけよ」

そう言うと質問が入った。

ノーヴェ「その訓練ってどのくらい厳しいんだ？」

右蕪・火澄「失敗すれば、油断すれば死ぬ」

全員「!？」

一瞬、ほぼ全員の全身が震えた。

音使と言う奴やイクスや芳乃達は震えなかったみたいだな。

フェイト「ちょ、ちょっと待ってください!!このメンバーの中には、ヴィヴィオ達がいいます！」

右蕪「それがどうかしたか？」

フェイト「どうかしたかって・・・子供にそんな命懸けなんて・・・」

「

・・・フェイトは分かっているいな。

右蕪「いいか？ここにいるのは翔の後を追う者達だ。それは差別も偏見もない、皆平等に扱う」

フェイト「・・・」

まだ、どこか納得いかない様な表情だな・・・

右蕪「・・・ちなみに、ヴィヴィオ達と同年代の・・・ヴァンは既に翔の背中に追いついている。ヴァンが全力をだせば、翔だって本気をださないといけなくなるほどにな」

全員「!?!」

もちろん全員が驚くだろう。

右蕪「彼は自分の意思で強くなりたいと願い続けた。そして精一杯の努力をしてきたんだ。そして今の彼は強くなった。・・・翔の背中を守る程にな。・・・だが、彼は優しい故に本気を普段から出さないのだから」

そう言うと皆は驚きを隠せずにいた。

右蕪「俺は、君たちに彼と同等かそれ以上の覚悟と決断をしたからここにいると思ってる。ないのなら今すぐここから立ち去って欲しい」

そう言っても、誰もいなくなるはない。

流石、息子が選んだ人達だけある。

火澄「それでは、皆と共に訓練する教導官を紹介します。でてきて」

そう言つと俺達の後ろから何名が入ってきた。

全員「!？」

みんなは驚いていた。

なのは「皆の教導をします、高町なのは一等空尉です」

シユテル「シユテル・ザ・デストラクター一等空尉です」

谷島「同じく谷島芳樹一等陸士です」

アリア「神崎・H・アリア一等陸士よ」

ギンガ Side

右無さんたちの話しが終わり、私達はグループに分かれて訓練を始める。

私はティアナ、スバル、ヴィータさんがいた。

ギンガ「それにしても驚きました。なのはさんが教えてくれるなんて」

なのは「にやはは・・・私もちょっと驚いてるんだ」

ヴィータ「あたしがなのはに教えられるのがなんか納得いかねえ！」

なのは「そ、そんなこと言われてもおっ！」

分かってはいたけど、やっぱりヴィータさmmはなのはさんから教えられるのが嫌みたい。

スバルとティアナは久しぶりだからなんともないみたいだけど・・・

フェイト「わ、私もなんか・・・変な感覚だな」

スバル達と一緒に言うのが少し不思議だな・・・

なのは「私は既に翔くんと何度も任務に行ってるから、経験者としての教え・・・みたいなんだ」

ギンガ「え!？」

なのはさんは・・・いつのまに翔さんとそんな危険な任務に行ってたの!？

ティアナ「か・・・体は大丈夫なんですか!？」

なのは「翔くんととの任務の後は、必ず入院してたかな・・・」

全員「・・・」

もはや啞然するしかなかった。

どれだけ翔さんは危ない世界にいたのか・・・

そして私たちは、その世界に入ろうとしている。

なのは「それじゃ、訓練を始めるよ。することは簡単に戦つ事。ただ・・・一つだけ条件がある」

スバル「条件？」

なのは「・・・この訓練では」

そしてなのはさんの口から、恐ろしい訓練の内容を話される。

シュテル Side

レヴィ「何でシュテルが僕達の先生？」

アーチエ「解せぬ！！何故貴様の様な塵芥なのだ！？」

シュテル「黙りなさい雑魚共。これは命令です。大人しく言うことを聞きなさい（怒り）」

レヴィ・アーチエ「はい」

シグナム「・・・」

全く、面倒な二人が生徒に入りましたね・・・

シグナムのみ、唯一まとも人ですから・・・

シグナム「最初に聞いておきたいのだが、翔の戦い戦場とは・・・

どんな世界だ？」

その質問に、他の二人も興味を示したようです。

シユテル「……はつきり言えば、地獄です。翔さんと敵がぶつかり合えば、大地は揺れ、天候は変わる。そして戦いが終われば、荒れ果てた土地へとなり変わる」

レヴィ「え……それって……」

アーチエ「命懸け……などと言う言葉では説明しきれんな」

シグナム「いや、それ以前に……今までそんな世界で戦いながらも、よく私たちには笑顔でいてくれたものだ」

そう……翔さんの心から尊敬する理由の一つ。何があっても笑顔が無くならない。

でも……今は……

シユテル「私はこれから、あなたがたを死ぬ気で強くします。気を抜けば死ぬのは、先ほどの説明でありました。ですから、覚悟を決めてください」

レヴィ「もちろん！」

アーチエ「言われんでも分かる」

シグナム「もとより覚悟は出来ている」

その眼差しは、嘘をつく目ではありませんね」

シュテル「いいでしょう。ただし・・・貴方がたには、条件があります」

谷島 Side

谷島「そんじゃまずは軽く説明な」

俺のところには音使と芳乃とサクラがいる。

谷島「俺がお前らに叩き込むのは『戦場で速攻で敵を殺す方法』だ。正直、かなり危険な殺人技だから覚えさせるのには抵抗があるんだが、頼まれてるから仕方ないな」

音使「速攻・・・か」

芳乃「面白そうだな」

サクラ「私の攻撃で一撃だと思っただよ」

谷島「サクラの攻撃は撃てる回数が限られてる。もし外す、または耐えられた場合があれば役たたずだぜ？」

そう言うとサクラの余裕な表情が消えた。

谷島「悪いが俺達の世界は常に最悪の結果を想定しなければ生き残れない世界だ。だからこそ、確実に倒す戦いを覚えなさいいけない」

芳乃「ま、俺達だって・・・そう簡単に死ぬつもりはないからな」

谷島「・・・上等だ。なら、早速始める。条件はただ一つ」

アリア Side

チンク、ノーヴェ、ディエチの3人を私がかけもつことになった。

アリア「それじゃさっさと始めるわよ！」

そう言って私はデバイスを出してそれをコルト・ガバメント・クロ
ーン2丁にした。

チンク「ま・・・待て」

アリア「何よ？」

デイエチ「そ・・・それを使うの？」

アリア「もちろんよ。私は基本的にみんなには風穴を空けるつもりで戦うもの」

ノーヴェ「お・・・おっかねえな・・・おい」

アリア「何怖がってるのよ。これくらい戦場に入れば当たり前だよ！」

全員「・・・」

その言葉を聞いた瞬間、3人の目付きが変わった。

いい度胸ね・・・

アリア「分かった所で、始めるわよ。条件は」

白雪 Side

私の所にはセツテ、なぎさ、ナギサがいる。

なぎさ・ナギサ「同じ」なぎさ・ナギサ「って……」

セツテ「大変ですね……」

大丈夫かな……この人たち……

白雪「え……えつと、私が教えるのは簡単な剣術じゃなくて、命を切り裂く剣術を教えるよ」

なぎさ「命を切り裂く剣術……」

セツテ「難しそうですね」

白雪「うん。甘く見ちゃ駄目だよ。間違えたら死んじゃうから・・・」

私も、戦いの中で何度も死にそうになったことがあって・・・そのたびに助けられて・・・

だからこれからも、もっと強くなるように・・・皆も、強くなれるように・・・

そのためには・・・

白雪「私の教える剣術での絶対条件。それは」

キヤロ Side

私とルーちゃんとエリオ君の3人はメガーヌさんに教えてもらうことになりました。

メガーヌ「まさか3人とも本気とはね・・・」

キヤロ「翔さんの役に立ちたいんです！」

ルーテシア「私も」

エリオ「僕もです！」

メガーヌ「そう・・・なら、言うことは一つ。死ぬ気で頑張って」

全員「はい!!」

メガーヌ「それじゃ始まるわ。条件は一つ」

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「驚いたあゝ。リオナが私達の教導なんて」

アインハルト「私・・・先輩なのに・・・」

アインハルトさんが若干orzな状態になりながらも、話を聞いていました。

リオナ「えつとね。私が教えるのは“勝つ戦い”じゃなくて“殺す

戦い”になっちゃうんだ」

全員「!?!」

私たちは体を一瞬震わした。

コロナ「それって・・・血がいっぱいであるの?」

震える声でコロナはそう言った。

リオナ「うん。大量にでるよ。ヴァンと私は、ずっとそんな世界で戦ったきた。みんなにも、その覚悟があって戦って欲しいの」

その問いに、私たちは少し迷った。

けれど

ヴィヴィオ「私たちは、ヴァン君も助けるし、お兄ちゃんの役にも
たいたい」

コロナ「うん！私も・・・ヴァン君を助きたい！」

アインハルト「私は、翔さんの背中に立ちたい」

その想いに、嘘はないから・・・

リオナ「・・・うん。なら、みんなにはこれを守ってもらおうよ

」

イクス Side

私は紗雪さんと一緒にお兄様のお母様に戦術を習いにきた。

イクス「お願いします!」

火澄「ええ。イクスちゃんの話は、翔からよく聞かされていたわ。可愛い妹だったね」

イクス「はう／／／／／」

な、なな／／／／／なんてことをお兄様／／／お母様にそのよ
うな事を言っていたのですか／／／／／

紗雪「ふふっ」

紗雪さんはクスクス笑ってる／／／

イクス「うう／／／／／」

火澄「うふふ。愛されてるわね。そんな翔の役に、あたいたいんですよ？」

イクス「はい！」

紗雪「私は、兄さんと一緒に戦っていきたいから……」

火澄「ええ。その思いがあれば、きっと乗り越えられる。だから二人に出す条件は、重いわよ」

ルチア Side

私はフェイトと共に右蕪さんのもとにいた。

右蕪「二人は刀を使うから、俺が担当する。教えるのは命懸けの戦い」

ルチア「はい」

フェイト「・・・」

フェイトはヴィヴィオ達の方をチラチラと見ていた。

本当に過保護と云うか・・・なんというか・・・

右蕪「フェイト。悪いけど、そんなことをしていると、翔と同じ運命をたどるよ」

フェイト「!?!」

翔と同じ運命・・・目を覚まさず、深い眠りにつく翔の運命。

翔と同じ苦しみを味わうなら・・・それでも良いけど、それじゃ意味はない。

右蕪「始めるぞ。この戦いで二人は飛躍的に強くなる。翔が起きたときに驚かせるといい」

フェイト・ルチア「はい!!」

右蕪「そして条件が
」

そして明かされる、この訓練の本当の恐怖。

なのは・シュテル・谷島・アリア・白雪・メガーヌ・リオナ・火澄・
右蕪「デバイスの設定に、非殺傷を解除して、殺傷モードに行
います」

そして

始まった。

死の恐怖から見せる真価（前書き）

彼の世界に入るために課せられた条件。

死と隣り合わせになること。

仲間同士で繰り広げる死闘と言うなの訓練が、今・・・始まる。

命懸けの戦闘の中、彼女達が見出す真価とは・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity
ty） 始まります。

死の恐怖から見せる真価

フェイト「Side」

フェイト「え……」

右蕪さんから言われた条件。

非殺傷設定の解除。そして殺傷設定にする。

フェイト「それって……訓練じゃなくて殺し合いじゃないですか！？」

右蕪「そうだ。最初に言っただろう？命懸けの訓練だと」

た……確かにそうだけど……

ルチア「私たちは、あなたに命を奪う勢いで戦わなければいけないんですか？」

右蕪「そうだ。では、早速始めるがいいか？」

フェイト「……はい！」

ルチア「お願いします！」

ルチア「ワルキューレ！」

フェイト「バルディッシュ！」

右蕪「アパラジタ！」

ルチア・フェイト・右蕪「セット・アップ！」

私達はB」と武器と化したデバイスを持った。

右蕪さんは新撰組をイメージさせる青い羽織を纏い、白いハチマキをしている。

そして右手に持っているのは右蕪さんの顎まであるだろう刀があった。

その刀の姿は、まさに日本刀。

右蕪「行くぞ！油断すれば、ただでは済まないからな！」

ルチア・フェイト「はい！」

そして戦いが始まった。

フェイト「ソニック・ムーブ！！」

私は高速で動いて右蕪さんの背後をとった。

そして鎌になったバルディッシュで切りかかった。

右蕪「ソニック・ムーブ・・・その程度の速度では、何もできないぞ」

フェイト「！？ぐううう！！！！！！！！！！」

突如、私の全身から凄い重力が襲ってきた。

そして蹴り飛ばされた。

フェイト「うっ!!!」

蹴りだから非殺傷がどうか関係ないけど、痛い・・・

ルチア「ふっ！」

私が飛ばされた瞬間、ルチアがさらに右蕪さんの背後から切りかかった。

右蕪「背後を取れば勝てるなんてものじゃないぞ！」

ルチア「!?!」

そう言うとルチアは何もされていないにもかかわらず、地面に叩きつけられた。

きつと、私と同じことをされたんだと思う。

右蕪「武器を使うまでもないな。魔力値がどれほど高くても、使用者がこれでは意味がない」

そう言うのと私とルチアは更に地面に強く押されるような感じで叩きつけられる。

フェイト・ルチア「ぐうううううう!!!」

右蕪「俺の魔力変換資質は「重力・引力」の二つだ。俺が今二人にかけているのは重力」

そうか・・・右蕪さんの周囲に行った時にあつた押される感覚は、重力だつたんだ!

そして今、地面に押しつぶされるような感じは、重力の影響を強く受けているから・・・

右蕪「最初から切りかかる時点で既に二人は駄目だ。最初は敵を知る事が定石だ。二人はそのまま死に行くような攻撃しかしていない」

そう言うのと私達を襲つた重力はなくなつた。

フェイト・ルチア「はあ、はあ、はあ・・・」

これだけで息が上がってる・・・このままじゃ、強くなるなんてできない。

右蕪「二人への条件はまず、この重力と引力を攻略して貰わないとな」

フェイト・ルチア「・・・はい！」

そして私とルチアは再び立ち上がって、戦いを続けた。

ルチア Side

ルチア「キャ！」

フェイト「ぐっ!!」

私とフェイトは右蕪さんに蹴り飛ばされた。

右蕪「まだまだ!もつと素早く!もつと繊細に!かつ大胆に!!」

難しいことを言ってるな・・・でも、翔は普通にそれをこなしてきた。

そして・・・闇の力で暴走していた私も、その一人だった。

過去に翔と戦った時、暴走していたとはいえ、翔を追い詰めていたことがある。

結局、翔の奥の手で負けたけど・・・あの時の感覚、出来れば思い出したい。

きつと・・・何かの役に立つから!!

ルチア「もつと・・・深く・・・深く・・・」

闇は、光と違う。

光は、天よりも高く。

闇は、地よりも深く。

これが理りなら・・・私は、もっと深い闇を使いこなさないといけない。

ルチア「IS・ダーク・インフェルノ！」

私の全身から闇の魔力が出てきた

右蕪「ほう・・・なるほどな」

闇になら、重力は効かないはず！

ルチア「ダークネス・サイス！」

私は刀に魔力を集め、先端で魔力を曲げて鎌の様な形にした。

そして闇の鎌を持ち、全身に闇を纏いながら切りかかった。

右蕪「正解だ。闇なら、重力の影響も、引力の影響も受けない。さて・・・ここからだ！」

右蕪さんは刀を出した。

私は真正面からぶつかりあった。

ルチア「はああああ！！！！！」

右蕪「はっ！」

私は下から上に振り上げ、右蕪さんは上から振り下ろした。

二つの刃はぶつかりあった。

ルチア「！？きゃああああ！！！！！！！」

私は上から降りおろされた斬撃の強さに負けて吹き飛ばされた。

ルチア「嘘……何で……」

力負けした……いや、それ以前に、人じゃないってぐらいの強靭なパワーだった……

ルチア「一体・・・何が・・・」

右蕪「俺の魔力変換資質はさっきも言ったっが重力と引力。刀に重力の魔力を与えることで下に振り下ろす時、恐ろしいパワーがかかるんだ」

ルチア「な・・・なるほど」

ようは私が刀に闇の魔力を纏わせることと理論は同じ。

これであれが刀じゃなくて槌だったらどうなっていたんだろう・・・

フェイト「オーバードライブ！真・ソニックフォーム！！」

フェイトのBJが薄いフォルムになって、両手剣になったバルディッシュがあった。

そしてフェイトも全身に雷の魔力を纏って切りかかった。

フェイト「はあああああ！！！！！！」

右蕪「（一つ目の試練。魔力変換資質への対応はこれでOKだな。では・・・次だ！！！！）はあああああ！！！！！！！！！！」

フェイト「！？」

ルチア「危ない！！ブラックホール・ワープ！！」

私は危険を感じたから右蕪さんとフェイトの間に小さなブラックホールを発生させた。

フェイトはその中に入ると、右蕪さんから大分離れた位置に転移された。

右蕪「ほう……やるな」

ルチア「ふう……」

フェイト「……」

フェイトは両手を震わせていた。

きつと、あと少しで死ぬかもしれないという恐怖に襲われているんだと思う。

ルチア「今……凄い殺気を放つてた……」

そう。右蕪さんから、冷たく、暗い……そして恐ろしいまでの殺気が漂っていた。

あと少しで、フェイトは右蕪さんの一閃で切られていたとおもっ。

これが……本当の戦い！

右蕪「次は、本物の死を乗り越えることだ！行くぞ！」

フェイト・ルチア「!?!」

とうとう、右蕪さんの方から切りかかってきた。

私とフェイトは刀を構えた。

死ぬ

!!

ルチア・フェイト「!？」

私たちは反射的に左右に別れた。

右無「まだまだだ・・・この程度の殺気で押されるようでは、何もできないぞ」

とは言われても・・・これは!？」

呼吸するのが辛い。

ズットとらりと纏わりつくような殺気。

そして

迫る死への恐怖

ルチア「これが・・・死^{げんじつ}!!」

右蕪「俺一人だけの殺気で恐れるな！戦場は、俺のような奴らが山ほどいる！」

山ほど・・・こんな、呼吸するのも辛くて、生きてる実感を無くしてしまつような殺気を放つ敵が何体も・・・

翔は・・・いつもそんな戦場で戦ってきたんだ・・・

私は、ただそれを見ていることしかできなくて・・・

翔が傷ついて帰ってくる姿しか見ることができなくて・・・

でも・・・

ルチア「ワルキューレ！！！！行くよ！！！」

ワルキューレ「ええ！」

右蕪「（纏う空気が変わった・・・もう、恐怖に打ち勝ったのか！
？）」

もう・・・そんな道、
一人歩かせないよ・・・翔。

ルチア・フェイト「魔力全開!!!」

私たちは全身に纏う魔力を全開にした。

右蕪「うお・・・これは・・・（成長速度が異常なまでに速い・・・これが・・・）」

ルチア「漆黒の闇・・・今ここに現れよ。我が刀に現出させ、その真価を魅せよ!!!」

そう言うと全身からあふれた闇はワルキューレを大きく纏い、刀の形を作り、大きな刀になった。

フェイト「疾風迅雷の名に置いて、ここに新たな姿を魅せよ!!」

そう言うとバルディッシュはその姿を変え、1本の剣となった。

刃は雷の魔力で出来ていて、まさに雷刃。

右蕪「(何・・・もう、真価したのか!?)」

ルチア「ワルキューレ・・・行くよ」

フェイト「バルディッシュ・・・私たちも行くよ!!」

ワルキューレ・バルディッシュ「了解!!!!」

ルチア「ブラックホールメテオ・・・」

フェイト「雷光一閃・・・」

右無「俺も・・・本気で行かないと駄目か・・・。はああああ・・・」

右無さん刀に重力を集結させていた。

今度は

ルチア「ブレイカー！！！！！！！！！！」

フェイト「雷光翔雷斬！！！！！！！！！！」

右蕪「グラヴィティ・スラッシャー重圧の斬撃！！！！！！！！！！」

巨大な砲撃と斬撃がぶつかりあった。

今度は、
私たちも一
緒だからね。

そして大爆発が起こった。

死の恐怖から見せる真価（後書き）

強くなるのは、大好きな人に追いつくため。

一人にさせたくないから、今度は絶対に・・・

私たちが、守るから。

祈り

ルチア「・・・んん」

目を覚ますと、真つ白な部屋にいた。

消毒液つばい臭いから、きつと病室だ。

???「目を覚ましたみたいね」

私に声をかけてくれる一人の女性。

青つばい短髪で血の様に赤い瞳。

ルチア「あなたは・・・？」

レイ「相良レイよ」

ルチア「・・・へ!？」

相良!？ちよつと待って!？

まさか・・・翔が、浮気!？

ゆ・・・許せないわ・・・

寝ている今の内にブラホへ連れていかないと・・・

レイ「ふふふっ・・・冗談よ。私は綾波レイ。相良翔さんの義妹・・・
みたいな感じよ」

・・・翔って、本当にロリコンだね。

・・・翔のツッコミが欲しいなあ・・・

ルチア「あ、私はルチア＝ダルク。よろしくね」

レイ「ええ。話は翔さんからよく聞いています」

へえ、そうなんだあ・・・。

何で翔はこの娘の説明を私達にはしないんだろう？

レイ「私は翔さんの担当医でもあるの」

ルチア「え？」

いつのまにそんなの用意してるんだらう・・・

レイ「翔さんはよく怪我して任務を終わらせてきていたから、その度に私が治癒魔法をしてあげてきたの。私の治癒魔法は特殊で回復力がずば抜けているの」

ルチア「え・・・」

今、初めて知ったことがある。

翔が・・・怪我をして任務から帰ってくる・・・

私の記憶が正しければ、いつもかすり傷とか痣程度で帰ってくるのに・・・

ルチア「いつも・・・どのくらいの怪我をしてくるんですか？」

レイ「普段だったら肋や肋骨などの骨は必ず折れてくると、出血多量でくるかな・・・ほぼ瀕死の場合も時々ある・・・かな？」

ルチア「!？」

ほぼ・・・瀕死・・・

なんで・・・どうして!？

ルチア「どうして・・・今まで教えてくれなかったの・・・」

レイ「それは、ルチアさんがよくわかっているんじゃないのかな？」

・・・そう。確かに、分かってる。

翔が無茶をしても、それを誰にも言わない理由。

ただ、私達を心配させないために言わないんだよね・・・

分かってる。そんなこと、誰にも言われなくたって分かる。

でも……けれど

！！

ルチア「私たちは、何も知らないままなんて……嫌だよ……」

「ただ、翔はきっと何も言わないでいるだろう。」

・それは、翔の優しさであり……彼自身の想いでもあるのだから……

レイ「そう言えば、金髪の女性が先ほどまで寝てたけど、もう行ったよ？」

ルチア「あ、フェイトが・・・」

早いなあ・・・それじゃ、私も行くのかな・・・

ルチア「ありがとうございます」

レイ「それじゃ行ってらっしゃい」

ルチア「えっと・・・」

早速道に迷ってしまった。

私、こんな方向音痴だったっけかな？

ルチア「ワルキューレ。現在地の特定頼めるかな？」

ワルキューレ「ええ。分かったわ」

そういつてワルキューレは現在地の特定を始めた。

ワルキューレ「……検索完了。現在地は陸宙管理本部の内部なのは分かりますが、ここは登録されていない場所です」

ルチア「え……それって、ここが秘密基地ってこと？」

ワルキューレ「ええ。簡単に言えばそういうことになるわね」

うわぁ……翔ってやっぱり冒険心忘れてないよね……

ルチア「とりあえずここから出たいんだけど、ルート検索できる？」

ワルキューレ「わかったわ。ちょっと待っててね」

そういつてワルキューレはルート検索を始めた。

ワルキューレ「……位置特定完了。今から教えるからその通りに動いて」

ルチア「うん」

そういつて私はワルキューレの説明を受けながら道を歩き続けた。

ルチア「な、何とか出れた」

とりあえずため息。

もう4年くらいここにいるのにわからない場所があるなんて・・・

って言うか・・・レイはどうしてあそこにいたんだろ？

まあそれよりも、訓練室に戻ろつと。

ルチア「あ……れ」

また道に迷ったのかな？

私は翔のいる病室にたどり着いてしまった。

ルチア「……ちょっと、挨拶でもしよっかな」

そう言って私は病室に入った。

ルチア「・・・まだ、目を覚ましてないんだね」

真っ白な病室に、一人眠っている翔。

一体、どんな夢を見ているんだろう・・・

せめて、夢の中だけでも、平和で何も背負わないでいてほしい・・・

相良「・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・みんな」

ルチア「!?!」

翔は、そう言った。

意識は取り戻さないけど、寝言だけど、そう言った。

ルチア「なんで・・・・・・・・どうして謝るのよ!?!」

私は涙を流して怒鳴った。

ルチア「謝るんだったら・・・・・・・・起きてよ・・・・・・・・翔お・・・・・・・・」

翔のベットの前で泣き崩れる私。

ただ・・・私は・・・私たちは、翔の笑顔がみたいだけだよ・・・

私たちは、それだけでいいのに・・・

ルチア「早く・・・起きてよ・・・」

流星に願い事をするように、それほど重要な願い。

ただ純粋な^{ねが}い。

私達の大切な人が、笑ってくれますように

ルチア「・・・私、行ってくるよ。翔が・・・これ以上私達を守らないで済むように・・・ね」

そう言っつて翔の唇にキスをして、私は病室を出た。

ルチア「訓練。お願いします」

右蕪「体は大丈夫か？」

ルチア「はい」

フェイト「私も大丈夫です」

私は訓練室につくと右蕪さんのもとに行き、訓練続行を願った。

・・・ただ一つ驚いたのは、訓練室がもはや戦場と化していたこと。

砲撃の痕や斬撃、狙撃、打撃・・・様々な痕が残り、みんなものすごい激しい戦いをしていた。

私も、負けてられない。

右蕪「・・・分かった。それじゃ始めるぞ!」

ルチア・フェイト「はい!!!」

そう言って私とフェイトは再び全身に魔力を纏いながら、戦いを始めた。

待
っ
て
ね。
翔。

キャラ紹介・・・一体何回やればいいのやら・・・

「翔・高町・ヴォルケンリッター・T・ハラオウン・アルピーノ・ル・ルシエ・ナカジマ・ランスター・バニックス・月村・八神・相良・ヌエラ・グラシア」 24歳 AB型

名前が長いので、皆は「相良翔^{さからしやう}」と呼んでいる。

陸宙管理本部「総裁」

魔力値 Unknown (一度記憶をなくしているので魔力値が断定できない)

技数現在進行形で増えている。

・『リフレクト・ムーブ』 空気中の魔力を自らの魔力と組み合わせ、それを爆発させて移動する。これは「ソニック・ムーブ」よりも速い。

・『スターダスト・ブレイカー』 相良翔を代表する技とも言える。なのはの「スターライト・ブレイカー」と同じと思う人も多いであろうが、相良が放つスターダスト・ブレイカーは空気中の散らばった自分の魔力と相手の魔力を集めるため、威力は高い。

魔力変換資質 『光・凍結・炎・粒子』

生まれつき相良翔には『サイコキネシス超能力』 『パイロキネシス』の二つを使用できる。

希少技能レアスキル

・ 『オーバー・スター・ロード新たな星の誕生』 古代ベルカと近代ミッドの魔術を同時に発現させ、二つの能力を組み合わせ新たな魔法を作り出す能力。ただし発現させる魔法は転生魔法などの場合、術者は代償を払わなければならなくなる。

デバイス

「マルス」

紅い勾玉のデバイス。

「メルキュール」

蒼い勾玉のデバイス。

二つに共通するのは、どちらも様々な装備に変化する。

ルチア＝ダルク 24歳 160cm

階級 陸宙管理本部副総裁及び補佐官

魔力ランク EX（測定不能）

魔力変換資質『闇』

希少技能 「暗黒ノ遺伝子」 ルチアはプロジェクトF・闇の書・人造魔導士素体び3つの技術で作られているため、その3つの能力を使うことができる。

デバイス

「ワルキューレ・クリステイナ」長さ180cm

谷島 芳樹 24歳 RH-A B型 身長182cm 体重67キ
ロ 3月2日

階級 1等陸空士

魔力ランク 総合SSS

戦闘スタイル 近接・中距離戦闘。

性格

- ・ 普段はガサツ。戦闘時“のみ”繊細
- ・ 考えるより体が先に動くような感じ
- ・ 売られた喧嘩は買うほう
- ・ 基本的には手加減しない・・・多分・・・
- ・ 書類作業があまり得意ではない
- ・ すぐ諦めない・・・多分。

趣味

- ・ 以外に料理
- ・ 酒を飲むこと
- ・ 武器の手入れ
- ・ 軟派!!!!!!!!!!!!!!
- ・ 白雪遊び
- ・ アリアに風穴を空けられること（基本的にはすぐ回復するので慣れている）

・喧嘩

デバイス 「エターナル・リヤン」 意味『永遠の絆』

モード

・警棒 ホワイトウルフ

・ドラグノフ

・アルマゲドン

・ヤマハ・VMAX

・・・その他にもさまざまなモードがある。

技

・桜花 自身の加速にヒステリアモードの加速を追加することによって1236キロの速度を出して突進、そのまま手に持ったナイフで攻撃を繰り返す。音速を超える速度ゆえにナイフを持った腕が負担に耐え切れず、桜が散るように出血を起こしてダメージを受けてしまう。

学科

・強襲科

・狙撃科

・諜報科

・尋問科

・探偵科

・鑑識科

・装備科

・車輛科

・通信科

・情報科

・衛生科

・救護科

・超能力捜査研究科

その他

師匠はレキ、アリア、白雪、ジャンヌ、理子でありそれぞれから各学科の訓練を10年間受けてきた。・・・つまり谷島は10年間風穴を空けられた上にヤンデレ白雪にヤンデレされていましたwww
まあなんだかんだで強い・・・はず。

デバイス情報追加。

銃弾は魔力で作られているので無限（使用者の魔力量）。

音使 奏多 年齢18歳 血液型O型 身長165cm

能力

『絶対音感特定』 絶対音感で音を聞き取り、更にその音の位置と距離まで特定できる。

『音感操作』 音を操ることができる。これにより、相手が聞き取

る音を変化させ、相手を混乱させることができる。

武器 『ヴォイス・ブレイド』 音程でその斬撃の音を変えることができる。さらに刃の中には玄が入っている。その玄はとても硬いため、様々な者・物を切り裂くこともできる。

キャラ紹介 相良家両親

相良 右蕪（さがら うかぶ） CV 千葉進歩

出身 地球『日本』

年齢 34歳 11年間彼の時は止まっていたため、年齢があまりとっていない。血液型B型

魔力ランク SSS+（全力時の場合のみの為、基本的にはSSである）

戦闘スタイル 空中戦 武器が刀なので基本的には場所は問わず戦える。

デバイス 『アパライジタ』刀にしかない。 非人格のため、喋らない。

魔力変換資質 「重力・引力」自分の周囲の重力を変更することができる。一部だけを変更させたり対象に引力を与えることができる。発動距離は右蕪の魔力量と体力によって変化する。

・サイコネシス超能力が使用可能。物体を操る事ができる。魔力を練って発動することで魔力をも操ることが可能になる。

相良翔が超能力を使うことができるのは彼の遺伝である。

容姿

- ・目の色は緑色（緑茶の色に近い）
- ・髪は焦げ茶色で短髪（髪がしっとりとしている）
- ・身長195cm
- ・体重57キロ
- ・服装は基本的に和服（茶色）
- ・基本的にはモテるような感じ

特徴

- ・真面目
- ・恐ろしいほど鈍感（相良翔の鈍感さ父親似である）
- ・人の瞳を見るだけで、その人の考えや想いを捉えることができる（だが、恋心は分からないらしい）
- ・結構な努力家
- ・諦めが悪い

・情報収集能力が高い（PCに残されていたデータが非常に多いのはその為）

・身体能力が高い

・恋愛に対してウブだったらしい

・正義感が強いらしい

・冷静沈着

・かなりの実力者だが、火澄には頭が上がらなかつたりするらしい。

相良 火澄（さがら かすみ） CV 平野綾

出身 不明

年齢 33歳 右蕪と同じく時が止まっていたため年齢をそれほどとっていない。 血液型 A型

魔力ランク SSS（全力時の場合のみの為、基本的にはSである）

戦闘スタイル 地上戦

デバイス 銃を使う事は判明している。

魔力変換資質 「炎・光」

・パイロキネシスが使用可能。 相良翔がパイロキネシスが使えるのは火澄の遺伝である。

容姿

- ・目の色が夕焼色
- ・髪の色は蒼色
- ・髪型はシグナムと同じ
- ・凜としている
- ・すらつとしていてスタイルが良い
- ・右蕪に同じく、モテるらしい。
- ・身長160cm
- ・体重は秘密だが、超軽い
- ・私服は白いワンピースらしい

特徴

- ・友達想い
- ・積極的で、意外に大胆
- ・恋愛に対してウブだが、好きな人には本気
- ・恥ずかしがりや
- ・料理が上手
- ・超優しい
- ・誰にでも優しく接する
- ・気が利く
- ・基本的には怒らないが、怒ったときの恐ろしさは魔王化したなのはや暴走状態のジエイルをも上回る

見えてくる真価（前書き）

気合を入れ直し、更に力を入れて訓練に挑む彼女達。

そして彼女達には、徐々にその力の真価が現れてくる。

その力は、彼女達の戦いをどのように変化させるのか・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty } 始まります。

見えてくる真価

勝手で悪いですが、訓練開始からなんとなく1週間が経ちました。

それまでの間、大変でした。

まずヴィヴィオ達は骨折や出血で丸一日動けなくなったり、なのはがSLBをバンバン放つし、右蕪さんは容赦ない重力・引力攻撃の連続。火澄さんは炎を中心とした銃撃で燃やしまくったり、シユテルはなのと同じく収束砲を放ち続け、すっきりとした表情でいたり・・・まあ、カオスでした。

翔は相変わらず起きる事は無く、点滴を刺して眠っている。

ただ心配なのは、食事ができないから徐々に痩せ細っていくこと。

先ほど翔の体重を測ったところ、40キロジャストでした。

・・・女性の平均より痩せてる？

そんな危機を感じながらも、シャマルの話だと点滴を付けているので問題はないと言っています。

でも、やっぱり心配・・・

だけど、まだ私は弱いから・・・もっと強くなってから翔に会いた

いな・・・

右蕪「行くぞ！」

ルチア・フェイト「はい！」

私たちはそれぞれの魔力光を全身に纏い、デバイスを持って戦った。

フェイト「プラズマランサー・・・ファイア！！！」

フェイトは右蕪さんから距離をとって雷の矢を9発放った。

右蕪「グラヴィティ・スラッシュ重力の一閃！」

右蕪さんは左から右に向かった切り裂いた。

ルチア「シャドー・インフェルノ闇の影斬！」

右蕪「!？」

右蕪さんの影から私が表れ、頭上に向かって切り裂いた。

右蕪「グラヴィティ・スラッシュ重力の一閃！」

二つの一閃はぶつかり合い、大きな爆発が発生した。

そして爆風の中から二人が距離を取って現れた。

右蕪「一度休憩するか？」

ルチア「はあ、はあ、はあ……はい」

右蕪「今日はとりあえずこのくらいでいいだろ」

ルチア「はい。ありがとうございました」

今日の訓練は終わり、私達は自らの仕事に戻っていく。

ルチア「ふう・・・疲れたあ」

食堂にいる私は一人でシチューを食べていた。

火澄「あら？ルチアちゃん？一人で食事？」

私の隣に火澄さんがうどんが入った皿を持って現れた。

ルチア「あれ？右蕪さんは？」

火澄「右蕪さんは午後の訓練のスケジュールの製作してるよ。たぶん、午後はもつと難しくなってると思うよ」

ルチア「げ・・・マジですか？」

火澄「マジよ」

うふふと笑いながら火澄さんは言って隣に座った。

流石右蕪さん・・・鬼畜だな・・・翔の鬼畜さは右蕪さん譲りみた
いだな・・・

そういいながら霞さんはニコニコした様子でうどんを食べ始めた。

火澄「うーん。おいしい。日本食はやっぱりいいわね」

ルチア「・・・そういえば火澄さんって地球出身じゃないんですよね？どこ出身なんですか？」

そう聞くと火澄さんは箸の動きを止めて話し始めた。

火澄「右蕪さんしか知らないんだけどね、私は人造魔道市素体らしいのよね」

ルチア「そうなんですか？」

私と同じ生まれ方をしているなんて・・・

火澄「右蕪さんが私を拾ってくれたのよ。それで私は出生のことは隠して地上本部に入隊したのよ。そして働いてきたら総裁になっちゃったのよね」

うわーすごい。すごい努力したのかな？

相良家って本当にみんなすごい人達だな・・・

・・・あれ？

ルチア「そういえば子供のころの翔ってどんな子だったんですか？」

火澄「5歳の時点ですごい自立してたわ。一人で家事の大体をできるようになっていたもの」

ルチア「え・・・えええ・・・」

本当に翔って何者！？

火澄「翔って昔からなんでも一人でやる性格だから私や右無さんに家事の仕方とか戦い方とかを教えてくださいませんか？」

ルチア「えええ・・・」

子供のころから何でもしようと思っただけ・・・

ルチア「本当にすごいなあ・・・」

あれ？私ってそんなにすごい人と結婚したんだ

ルチア「私は、追いつけるかな・・・」

小さな不安があった。

翔に追い付けるかどうか不安になってきたなあ・・・

火澄「大丈夫よ。翔が認めた人だもの。絶対に追い付けるよ」

ルチア「・・・ありがとうございます」

火澄さんの励ましで少し元気が出た気がする・・・

そして私は食べ終わり、皿を持って席から立った。

ルチア「ありがとうございます。先に行かせていただきます」

火澄「ええ。また跡で」

ルチア「はい」

私は先に訓練室に向かっていった。

火澄「やっぱり元気になったのは翔のおかげだね」

火澄の背後から右蕪が現れた。

右蕪「ああ。翔は早く目を覚まさないものか・・・」

火澄「転生魔法を使うなんて・・・本当に無茶するのが好きな息子ね・・・」

そんなことを言いながら二人は食堂を後にしていった。

午後の訓練が終わり、突如通信が入る

【緊急通信！緊急通信！】

全員「！？」

全員に緊張感が漂った。

とつとつこの時が来た。

右蕪「よしみんな！今から出動する！訓練で身につけた実力を発揮させるんだ！」

全員「はい！！！」

そしてみんなは転送魔方陣の上ののった。

そして光が皆を包み込み、別の世界に飛ばした。

氷河に潜む生物

場所は極寒の氷河世界。

地球の北極や南極よりも広く、寒く、冷たい世界。

そこを走る2本の曲がった角が特徴の生物『ポポ』

小さいポポが大きなポポに囲まれながら進む。

だが、そんな彼らの背後から迫る生物。

それはまるで鯨が海から徐々に獲物に迫る様に・・・

ポポ「!？」

ポポの家族は背後から迫るその背びれに恐れをなし、全力で避難して行った

だが、それよりも早く動くその生物は除じよにその距離を詰めていき、そしてとうとう追いついたその生物はポポの1匹を食らった。

その光景はまさに鯨が獲物を食らう光景そのもの。

そしてその生物は次々とポポを食らっていく。

そしてその生物は氷の地面からその姿を現した。

その姿は大きく、鯨よりも鋭い鯨肌。

まるでそれは巨大な鋸のような……

そしてその生物は一度大きく咆哮し、氷の地面に潜って行った。

そのころ、ルチア達陸宙管理本部と管理局と地上本部の精鋭達は氷河の世界に辿り着いた。

ルチア「ここが・・・氷河の世界・・・」

火澄「ここは様々な生物が冷凍保存されているから冷凍庫の世界みたいなものよ」

ルチア「・・・」

冷凍庫・・・にしては寒すぎる気がする・・・

右蕪「とにかく皆、デバイスをだせ！」

そういつとそれぞれが自分のデバイスをだして空に掲げた。

全員「セット・アップ!!!」

皆はB-Jを着用して、武器を構えて戦闘準備を整えた。

右蕪「それじゃ行くぞ！」

全員「はい！！！！」

そういつて飛べる者は飛行魔法で空にとび、各自で別れた。

チーム

なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム

谷島、アリア、白雪、レキ

ヴィヴィオ、コロナ、リオナ、アインハルト

チンク、ディエチ、デイド、ノーヴェ

芳野、サクラ、紗雪、なぎさ

音使、ナギサ、エミリア、ルミア

シュテル、レヴィ、アーチエ、

キャロ、エリオ、ルーテシア、メガーヌ

スバル、ティアナ、ギンガ、ルチア

右蕪、火澄

なのは

「レイジング・ハート。生物探査お願い」

そういつと赤い宝石は一度輝き、返事をして、探査を始めた。

フェイト「バルディッシュもお願い」

そういつと黄色い宝石も一度輝き、返事をして探査を始めた。

なのは・フェイト「ヒット！」

そしてなのはたちは速度を上げて発見現場に向かった。

谷島 Side

谷島「レキ。目標発見直後に狙撃地点に転送するから陣形フォーメーションで一番後ろに下がってる」

レキ「わかりました」

そういつてレキはダイヤモンドの形の陣形をとって俺達は進んだ。

そして俺は移動しながら集中してこの範囲の敵がいるかをサーチした。

谷島「・・・！？皆！くるぞ！！」

全員「！？」

その時、地面が大きく揺れ出した。

何かが・・・近づいてくる・・・!

谷島「エルリヤ。モード『コルト・パイソン』!」

アリア「レチタティーヴォ、セット・アップ!!」

白雪「イロカネアヤメ色金殺女」

レキ「・・・ドラグノフ」

各々銃と刀を取り出した。

谷島「・・・行くぞ!!」

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「さ……さみゆい……」

コロナ「そ……そうだね」

アインハルト「こ……これは予想以上に……」

リオナ「3人ともだらしなさ過ぎ……」

な、何でリオナは落ち着いてるの……さみゆいよ……

アインハルト「り、リオナさんは……どうして平気なのですか……」

リオナ「……慣れ？」

な……何で疑問形!?

ま、まあBJを着ればどうにかなるんだけどね……

ヴィヴィオ「と、取り合えず……セット・アップ!」

全員「セット・アップ！」

そして私達はBJを着て、準備をした。

リオナ「取り合えず、私が教えた事を生かすように頑張ってね」

ヴィヴィオ「うん!!」

そうやって私は、自分の拳を見つめた。

この拳で、絶対にお兄ちゃんを守るんだ。

そして、ヴァン君を助けるんだ。

私の魔法は、大切な人達の為に使うんだから

そして各々の場所で、大きな揺れが発生し、全てが始まる。

そして、
各々の戦いは始まった。

愛しき彼を追った先に見える世界（前書き）

彼女達の実力が試される場所。

そこで本当に知ることになる、彼のいた世界。

彼は・・・何故その世界で生きるのか・・・

今一度考えさせられ、そして・・・決断したり迷ったりする。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity
ty） 始まります。

愛しき彼を追った先に見える世界

???? Side

ここは・・・真つ暗な世界。

俺はきつと、夢の世界にいるんだ。

・・・確か、ティアナを生き返らせて・・・それで・・・

・・・そつだ。意識を失つて、今か。

と言つことは・・・皆、今戦っているんだ。

俺は・・・どうしてまだ寝てるんだ!?

早くしないと・・・皆が傷つく!!!

速く・・・早く起きろよ!!!!!!!!!!俺!!!!!!!!!!

相良翔!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ルチア Side

ルチア「きた！」

私の一言で、皆は武器を構えた。

そして一番最初に気づいた私は斬りかかった。

ルチア「そこ！！」

そしてその場所に向かって一閃！

狙ったのは、氷の地面。

そこに闇の魔力を込めた斬撃を放つと、海中から巨大な生物の影が見えた。

私は後ろに下がり、その生物の出現を待った。

ワルキューレ「あれは確か・・・『ウカムルバス』だったはずよ」

ウカムルバス・・・初めて聞く名前。

翔は・・・倒したことあるのかな・・・

でも、こんなデカイ生物と戦う世界にいるのは、紛れもない事実。

だったら、逃げることはない。

ルチア「スバル。ティアナ。ギンガ。行くよ！」

全員「はい！」

そう言って皆は全身に魔力を纏わせ始めた。

まず必要なこと。

それは、自分の魔力を纏い、武器だけでなく自分も強化する。

そしてその上がった能力で戦う。

ルチア「ダイクネス・クラッシュ闇の牙!!!」

闇の魔力は形を変え、獣の牙のような形へと変わった。

それを鎌の様に持ち、下から上に振り上げた。

だが斬撃は途中で泊まることになる。

ルチア「硬い・・・くっ!!」

私は敵の体の硬さに攻撃をやめると、後ろに下がった。

そして左右からスバルとギンガが青い魔力を纏った拳と紫色の魔力を纏った拳をぶつけた。

スバル・ギンガ「はあああああ!!!!」

放たれた拳。

だが、それは奴には効かなかった。

こんな恐ろしい敵と戦わないといけないなんて……

翔……私……がんばるから！

翔のお父さんの訓練を受けたんだから、大丈夫だって信じてるから！！

ルチア「ワルキューレ。行くよ！」

ワルキューレ「分かったわ！」

私は刀に闇の魔力を込めた。

ルチア「行くよ……私が、翔の為に出来ること……それは……」

私は抜刀術の構えをとった。

そしてウカムルバスは口から氷を噴射してきた。

それは徐々に私に迫る。

でも、避けない。

そして

一瞬
だった。

ルチア「ブラックホールネス・スラッシュャー闇より深き暗黒の一閃」

巨大な闇の斬撃がウカムルバスを包み込んだ。

ルチア「・・・ふう」

私が溜息を着くと、爆風が晴れ、中からウカムルバスが現れた。

全身傷だらけで血も大量にでている。

でも、まだ生きてる。

今ので私の魔力はほとんどない。

けれど、私がするのはここまで。

ルチア「後は・・・3人が倒して」

そう言うと、左右から青と紫の光がウカムルバス目掛けて向かってきた。

スバル・ギンガ「はあああああ!!!!」

スバルとギンガは全身に魔力を纏い、そのまま突撃していたのだ。

スバル「デイバイン……」

ギンガ「リボルバー……」

スバル・ギンガ「クラッシュャー!!!!!!!!!!!!」

二つの魔力はウカムルバスに直撃し、貫通した。

ティアナ「行くわよ・・・」

そしてティアナの銃の銃口に溜められる大量の魔力。

そう　　収束砲。

ティアナ「スターライト……ブレイカー!!!!!!」

放たれた砲撃はウカムルバスを包み込み、消し飛ばした。

ルチア「・・・倒せた」

スバル「やった・・・」

私達は集まってその場に座り込んだ。

止めの攻撃は、大量の魔力を消費したみたい・・・

ティアナ「翔さんは・・・こんな世界にいたんだ」

ギンガ「そうね・・・凄いわね。こんな、体力をすごく使うなんて・・・」

ルチア「翔は男だしね・・・でも、流石に体力ありすぎだね」

こんな危険な任務の後、仕事して家族の世話して・・・本当にす

いよ。

さて・・・帰ろうかな・・・

~~~~~

全員「!?!」

だが、私達は再び窮地に陥る。

全員「きゃあああ!?!?!」

真下からウカムルバスが突進してきたのだから・・・

私達はそれを避けきれず吹き飛ばされた。

そして氷の硬い地面に叩きつけられた。

ルチア「う・・・うう・・・」

スバル「い……つつ……」

ギンガ「うそ……まだ……」

ティアナ「一体……何体いるの……」

私達は起き上がることができなかった。

しかも背後から更にもう一体のウカムルバスが現れた。

つまり私達は、2体のウカムルバスに囲まれているということになる。

さっき倒したウカムルバスよりも一回り大きいところを見ると、親と行ったところだろう……

子供であれだけの強さって……ふざけないでよ……

そして2体は口から氷を噴射した。

物凄い速度で迫るそれは、私達は避けることができない。

ルチア「(翔……ごめん……せつかく、役に立とうとして強  
くなったのに……)」

私達は目を瞑った。

全てを諦めたんだ。



そしてそんな中、ある場所から

一人の男性が移動していた。

白銀の閃光を纏い、氷の屑・・・ダイヤモンド・ダストを纏いながら進む彼は、一つの目的の為に全速力で走っていた。

??「リフレクト・ムーブ!?!」

そしてルチア達へ放たれた攻撃は爆発した。

## 怒りの業火（前書き）

私達が必死に頑張った結果、勝ったのに今は危機的状況になっている。

私達は、彼を追いかけてここにきたのに・・・結局、何もできず無力だった。

いつも、あの人に迷惑ばかりかけて・・・今回も、迷惑かけないようにしたのに

結局、迷惑をかけてしまうことになる。

・・・ごめんなさい。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 怒りの業火

ルチア「・・・え？」

大量の水蒸気。

もはやそれは霧だ。

その真つ白な霧の中から現れる、一人の男性。

紅い鎧を纏い、紅い刀を持つ彼の全身には炎の翼がはえていた。

それはまるで、『炎の天使』のような姿。

ルチア「翔……どうして……」

そこにいたのは、眠っていたはずの相良翔の姿。

スバル「翔さん……」

ギンガ「翔……さん」

ティアナ「起きたん・・・ですか・・・」

皆も翔に気づいて涙を流していた。

相良「泣くなよ。可愛い顔が台無しだ」

そう言う優しさを忘れないところは、私達の知ってる翔だ。

相良「ちょっと、ここで待っていてくれ。俺が・・・」

そして翔の表情は、怒りに満ちた。

相良「あいっら全部……灰以下にしてやるよ……!!」

相良 Side

俺は病室で目を覚ますと、すぐにデバイスを持って氷河世界にきた。

そして空気中の魔力を追って皆のもとにきた。

するとウカムルバス2体がルチア達を攻撃しようとしていた。



相良「てめえら・・・俺の大切な家族に、好き勝手してくれたな・・・  
はあああああ！！！！！！」

刀に大量の炎を纏い、1体のウカムルバスに向かって走った。

ウカムルバスは巨大な尻尾を俺に向かって振ってきた。

俺はそれを側方宙返りで綺麗に避け、尻尾から奴の背中に向かって走った。

相良「まずは・・・1体目！！！！！！」

そして俺は勢い良く刀を振り下ろした。

相良「ヴォルカニック・エターナル・ロード炎神討つ炎龍の一閃！！！！！！！！」

巨大な炎の一閃が、ウカムルバスをまっふたつにして燃やし尽くした。

相良「次！！」

俺は残りのウカムルバスを見ると、もう一体は俺に向かって氷噴射をしてきた。

相良「その程度の攻撃が、今の俺に効くと思うな雑魚！！！！！！！！」

そう言うと放った氷を俺は片手で受け止めた。

相良「マルス！決めるぞ！！！」

マルス「はい！」

俺は放ち続けるウカムルバスの攻撃を受け止めながら切りかかった。

相良「ヴォルカニック・エターナル・ロード炎神討つ炎龍の一閃！！！！！！！」

そしてもう一度放たれた炎の一閃がウカムルバスを切り裂いて燃やし尽くした。

ルチア「凄い・・・なあ」

相良「何やってんだよ。お前ら」

そう言つて俺は皆に回復魔法をした。

スバル「すみません・・・役に立ちたかつたんですけど」

役に・・・か。

ティアナ「いつも助けられてばかりなのが・・・嫌なんです」

助けられてばかり・・・

ギンガ「だから・・・私達で翔さんを・・・」

相良「守りたかつた。そうだろ？」

そう聞くと皆は無言で頷いた。

相良「・・・馬鹿だな」

全員「!?!」

俺の発言に4人は驚いていた。・・・そんな驚くことか？

相良「俺はもう・・・十分守られてる。助けられてる。俺の役にたってるよ」

ルチア「え・・・」

相良「いつも俺が任務から帰ってくると、俺のする仕事を終わらせてくれる。いつも笑顔で迎えに来てくれる。いつも笑顔で帰ってきてくれる。それだけで俺は救われる。助けられてる・・・守られる。だから・・・十分だよ」

そう言っただけ俺は魔法をかけ終えた俺は立ち上がった。

相良「だから・・・先に戻ってきてくれ。俺が帰ったときに笑顔でた  
だいまって・・・聞きたいからさ」

ルチア「・・・だったら、絶対に帰ってきて。お願い」

相良「・・・絶対に帰ってくる。星に誓って」

そう言っただけ4人にキスをして、俺は走り出した。

相良「リフレクト・ムーブ」

相良「にしても・・・ウカムルバスがこんなに大量発生しているなんて・・・」

マルス「何者かが・・・ここに集中させている可能性がありますね」  
相良「つまり、誰かがルチア達をここに来るように仕向けて倒すつもり・・・だったわけか」

父さんと母さんの魔力を感じる・・・父さんと母さんも予想外だっただろうな。

・しかもこれを仕向けた奴は俺が寝ている事を知っていることになる。

・急がないと・・・皆が危ない！

そして俺はチンク達のもとに向かった。

チンク達のもとに着くと1体のウカムルバスは倒れていて、残りの2体と戦っていた。

・・・皆、あれを1体倒せるくらいに強くなったんだな。  
でも・・・まだまだなんだ。

まだ・・・あれと戦ってはいけない。

相良「さて・・・マルス。マルキュール。皆を守るぞ」

マルス・マルキュール「はい！」

そして俺は刀になったマルスに大量の炎を纏わせ、ウカムルバス1  
体を切り裂いた。

チンク「翔兄・・・良かった・・・」

チンク達は俺を見るやいなや涙を流した。

相良「悪いけど抱きついたりするのは後な。今はあれを倒さねえと  
・・・な！！！！」

チンク・デイエチ・デイド・ノーヴェ「!？」

俺を中心に大量の水蒸気が出てきた。





俺は炎に包まれながら、1体の龍を思わせる姿で突っ込んだ。

相良「ビックパン・オーバー・ドライブ獄炎貫く怒りの業火！！！！！！」

その炎はウカムルバスを燃やし尽くし、消し去った。

相良「はあ、はあ、はあ・・・」

ノーヴェ「翔兄！！」

4人は俺のもとにきた。

デイド「お怪我は!?!」

相良「大丈夫。まだ、やらないといけないことがあるから……」

そう言っつて立ち上がった。

相良「4人は先に管理本部に戻つてろ。ここからは総裁おれの仕事だ」

そう言っつて俺は走り出した。

チンク「凄い……怒りを感じる」

ディエチ「戻つてきたら、また謝ろう」

ノーヴェ「ああ」

デイド「だから……無事に帰ってきて」

そう祈ってみんなは管理本部に戻った。

そして彼は

怒りに満ちながら進んでいた。

二人の決断と王を従えし騎士（前書き）

俺は怒りに満ちていた。

それは、大切な人が命がけの世界に入ってしまったからだ。

そして俺は、彼女たちの想いを背負う。

それは・・・お互いのことを想い合うため・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 二人の決断と王を従えし騎士

アインハルト Side

アインハルト「霸王……断空拳!!!」

リオナさんの情報から、私達のもとに現れたのはウカムルバス。

ウカムルバスと私達は今戦っています。

私はウカムルバスの懐に入って断空拳を放った。

そしてすぐにウカムルバスから離れて様子を見る。

ですが、ウカムルバスは何ともない様子に見えます。

リオナ「あの一発じゃ終わらないのは分ってたでしょ?」

アインハルト「ええ。それはわかっていましたが……ここまで反応が無いなんて……」

リオナ「これが戦場に入りたての皆が経験する壁よ。どこかで思い上がっているからこう言う結果に驚いちゃう。だから、順応性を高めて。今起こった事実を受け入れるの」

アインハルト「……はい!」

そして私は今一度気を引き締めて攻めた。

アインハルト「ヴィヴィオさん！コロナさん！リオナさん！」

ヴィヴィオ・コロナ・リオナ「はい！！！」

私達は4方向に別れて攻撃を開始した。

コロナ「ゴーレム創成クリエイト！！！」

コロナさんは魔力を込めると氷が集まり、巨大な氷の巨人を作り出した。

コロナ「行くよ！ゴライアス！！！」

そして巨人は背後からウカムルバスに殴りかかった。

ヴィヴィオ「閃必中！！！」



アインハルト「はああああ！！！！！」

リオナ「行くよ……」

そして私達4人の攻撃は、同時に放たれた。

そしてそれはウカムルバスに大ダメージを与え、ウカムルバスは倒れた。

ヴィヴィオ「や……やった……」

アインハルト「はあ……はあ……はあ……はあ……凄く強かったです……」

リオナ「こんなの、いつもの事だよ」

コロナ「い……いつもって……」

4人は勿論へばっている……

だが・・・もちろんそれほど簡単に終わるほど、  
戦場は甘くなかった。

そして私達の背後から、一体のウカムルバスが突進してきた。

全員「!?!」

皆はすぐに構える。

ですが、私達に迫ってきたウカムルバスの体長は今倒したウカムルバスの比では無かった。

リオナ「一撃を一点に集中して攻撃するよ!!」

全員「!!」

私達は無言で頷き、各々技を溜め・・・放った。

アインハルト「霸王……旋翔拳！！！！」

ヴィヴィオ「アクセル・スマッシュ！！！！」

コロナ「ギガントナックル！！！！」

リオナ「ライトニング雷切り裂くサンバー刀虎の斬撃！！！！」

4つの技は突進してくるウカムルバスに真正面からぶつかりあった。



そ．．．それは、相当の実力者となりますね。

?? 「その考えは正しいぞ！リオナ！」

全員「!?!」

その時、男性の声と共に地面からウカムルバスがまた姿を表した。

相良「ヴォルカニック・エターナル・ロード炎神討つ炎龍の一閃！！！！！！！！」

俺の一閃はウカムルバスを2体一気に切り裂いた。

ヴィヴィオ「お兄ちゃん！！！！」

アインハルト「翔さん！！！！」

相良 Side

二人が俺に声をかける。

俺は二人のもとに近づいて話しかけた。

相良「お前らどうしてここにいるんだ？」

ヴィヴィオ「ごめん・・・でも、力になりたかったから・・・」

ヴィヴィオたちもかよ・・・つか、父さんと母さん。どうして何だよ・・・

相良「ヴィヴィオたちは今すぐ帰れ。俺が全部やっつける。後は俺の仕事なんだよ」

アインハルト「嫌です」

相良「何？」



俺はアインハルトの反応に驚いた。

ヴィヴィオ「私は・・・お兄ちゃんの役に立ちたいよ。その為に私は・・・うん。私達は努力してきたの」  
相良「・・・」

そしてヴィヴィオとアインハルトは俺の手を握った。

アインハルト「私の力を使ってください。私は、そのために強くなつたんですから」

ヴィヴィオ「私も手伝う。私も・・・<sup>ただ</sup>純粹その為に強くなつたんだもん」

相良「ヴィヴィオ・・・アインハルト・・・」

二人の決意は固かった。

俺はそんな二人が羨ましかった。

俺には無いものだから・・・

相良「わかった。二人とも・・・俺に、力を貸してくれ」

ヴィヴィオ・アインハルト「はい!!!!!!」

そして俺はアインハルトの頬を抑え・・・唇を重ねた。

ヴィヴィオ「ん／＼／＼」

ヴィヴィオは光となってを俺を包み込んだ。

相良「アインハルト・・・悪いな」

そういつて俺はアインハルトの唇に自分の唇を重ね合わせた。

アインハルト「ん／＼／＼／」

心身ココロ・カラダの同調

そしてアインハルトも光となって俺を包み込んだ。

そして光の中から出てきたのは翠色のサイドポニーの髪で身長は180で3サイズはどつでもいいので無視。すらっとした女性が姿を表した。

相良「うくっ……くううう……!!!!」

私の全身から激痛がはしつてきた。

相良「こ……これは……まさか……」

魔力の拒絶反応!?

霸王の魔力と聖王の魔力が、私の魔力と混合することを拒んでいる。

・

アインハルト「翔さん!?!大丈夫ですか!?!」

ヴィヴィオ「お兄ちゃん!?!」

二人が中で私を心配している……

相良「大丈夫……私は、こんなことでは負けません……!!」

私は、絶対に勝つんです!!

聖王と霸王が私を拒絶しても、絶対に従えてみせます!!!!

だって……

相良「私は

決断したのだから!!!!!!」

その決断に反応するかのように、私の全身から虹色の魔力光と緑色の魔力光が翼となって出てきた。

そして徐々に全身の激痛が無くなってきた。

相良「聖王と霸王・・・二人の想いに、感謝します。行きますよ！  
ヴィヴィオ！アインハルト！」

ヴィヴィオ・アインハルト「はい!!！」

そして私は両手に白銀の魔力を纏い、走り出した。



ウカムルバスはそんな私に対抗するべく、氷を噴射してきた。

私は右足を強く踏み込み、左拳に魔力を溜めて構えた。

相良「星王……断空拳!!!!!!」



そしてそのままウカムルバスに向かって駆け出し、右拳に大量の魔力を集めた。

相良「スターダスト・スマッシュ星屑の聖拳！！！！」



ユニゾン・アウト  
同調解除

そして俺の中から二人が出てきた。

ヴィヴィオ「はあ、はあ、はあ……」

アインハルト「中々……ハードでした……」

相良「そうだな。それなら、二人は帰れ。後は俺が終わらせるさ」

ヴィヴィオ「で……でも……」

アインハルト「……分かりました。これ以上は、足で纏いになるだけですから」

ヴィヴィオが納得いかないなか、アインハルトだけは冷静に判断した。

ヴィヴィオ「……お兄ちゃん。一つだけ約束して」

相良「ん？なんだ？」

ヴィヴィオ「帰ってきて……ぎゅってさせてね。お兄ちゃん成分をチャージさせたいから」

何だよ？お兄ちゃん成分って……

んまあいいや。

相良「分かった。いくらだけ吸収させてやる」

ヴィヴィオ「うん。ありがとう……お兄ちゃん」

アインハルト「お気をつけて」

相良「ああ。ありがとう」

そう言っつて俺は移動を開始した。

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「行っちゃいましたね」



アインハルト「はい。結局私達は・・・まだまだだったようですな」

お兄ちゃんの小さくなっていく背中を見届けながら、そう言った。

ヴィヴィオ「もっと・・・もっと、強くなりましょう!」

アインハルト「はい!」

そう言って私達は先に管理本部に戻っていった。

決断の一撃 親と子の一閃（前書き）

分かったことがある。

皆は、決断したんだ。

戦う道を

そして・・・命懸けの世界に入ることを・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World In infinity  
ty） 始まります。

## 決断の一撃 親と子の一閃

相良 Side

相良「やっと見つけた」

右蕪「翔・・・」

火澄「やっと・・・目覚めたのね」

俺は二人のいる場所にたどり着いた。

そして俺は二人に刃を向ける。

相良「答えてください。何で・・・どうして皆がここにいるんですか!？」

そう。ヴィヴィオ達が・・・いや、皆がこの世界にいる理由は、皆さん達がこの世界の説明をしたからだ。

相良「俺は、そんなことを望んでいません。俺はただ、皆と平和に生きていたかった!!」

右蕪「それを望んでいるのは“お前”だ。“皆”はそれを望んでいない。皆が望むのは、お互いの痛みを分かち合って、お互いに助け合う未来だ」

相良「痛みなんて・・・とっくに分かち合ってるさ。だからこそ俺は、これ以上皆に与える痛みを少なくするために戦ってきたんだ！  
！！！」

右蕪「それは・・・お前の勝手に過ぎない」

バツサリと、静かにそう言った。

相良「確かにその通りだ。俺の言動は全て、エゴなのかもしれない。でも、俺は『決断』したんだ！誰も傷つかない・・・平和をな！！」

右蕪「今の翔に、そんなことはできない」

またしてもバツサリと言った。

相良「いや、やってやるさ！！！！」

右蕪「ならば・・・証明してみせる！」

そう言って父さんは俺に刃を向ける。

俺は全てを察して、父さんと同じく刃を構えた。

右蕪「翔の背負う想いが  
! !」

どれほど小さいものを

相良「小さくても構わない。最初から大きいとか小さいとか考えていたわけじゃない。ただ俺は『決断』した・・・ただ、それだけだ」

火澄「翔・・・右蕪さん・・・」

母さんは俺と父さんの決意を察してくれたのか、その場から少し離れて、空間魔法を張った。

右蕪「行くぞ

翔！！！！」

相良「ああ！」

そして俺と父さんは己の相棒やいばに魔力を乗せて、切りあつた。



相良「

スターダスト・レーヴァテイルヴィンゲ  
汚れなき星屑の聖剣

! ! ! ! !

右蕪「

グラヴィティ  
万物切り裂く重引力の一閃  
グングニル・スラッシュヤー

」



ぶつかり合うのは、  
お互いの正義や思いじゃない。

お互いの

決意

ただ、それだけだ。

その戦いに、正義も悪も無い。

もしかしたらお互いのエゴの為なのかもしれない、決意はただエゴを隠すための想いに過ぎないのかもしれない。

……だが!!

相良「俺は・・・いや、「俺達」はもう  
！！はああああ！！！！」

決断したんだ！！

右蕪「そうか。それが翔の決断か・・・良いだろう！！俺も本気で行くぞ！！！！はああああ！！！！」

二人の攻撃は更にその威力と規模を上げ、気づいた時には地面の氷は無くなり、水も無くなり俺と父さんを水が包み込む形になった。

相良・右蕪「はあああああああああああああ……!!」

更にその攻撃は大きさを増し、徐々にその地面さえも消していった。

相良「俺は・・・これ以上、誰も傷つけない！！！！！」

右蕪「その為なら、翔が傷ついて良いのか!？」

相良「ああそうだ！！！！傷つくのは  
俺だけで十分だからな  
！！！！！！！！」

右蕪「違うな。そんな思い出は・・・誰も救われない。彼女達も  
翔もな」

相良「な  
！！！！」

その時、俺は一瞬・・・ほんの一瞬、瞬きよりも一瞬の間だけ・・・  
油断した。



右無「

超能力サイコキネシス

」

相良「ぐああああ……!!」

俺は地面に叩きつけられる。

そしてそのまま父さんの一撃が、俺を直撃する。

右蕪

ケラウイテイ  
万物切り裂く  
グングニル・スラッシャー  
重引力の一閃

」



そして俺は暗闇の世界をさ迷う。

決断の一撃 親と子の一閃（後書き）

何かを見失っている気がした。

けれどそれは何か気づけなく居る自分がある。

それはなぜかは分からない。

けれど・・・何か、気づかないといけないことが・・・ある気がする。

本当の決断と気づくこと（前書き）

父の一閃に敗北した俺は、暗闇の世界にはいる。

今のままじゃ、何も救えない。

その事実だけが、今の俺を苦しむ。

だが、そんな俺は

大切な事に気づく。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
t y 始まります。

## 本当の決断と気づくこと

ここはどこだ？

俺は気づくと、真つ暗な世界に一人ぼつんと突っ立っていた。

確か俺は父さんに負けて・・・

相変わらず父さんは強い。

生まれてこのかた、父さんを倒せた事は一度もない。

俺はまだまだ・・・弱いんだな。

何も守れない・・・救えない・・・か。

その言葉を聞いて、一撃を喰らったとき、分かった。

俺は自分の力を過信し過ぎていたんだ。

俺の力なら、皆を救える・・・そう思っていたんだ。

全く、いつまで経ってもガキだな。俺は。

そんな自虐的な事を言いながらも俺は、考える。

思考を停止させず、ただ考える。

どうしたら・・・守れるんだ？



どついたら・・・皆を守れるくらい強くなれるんだ？

そのことばかりを考えた。

俺は、本当に成長していない。いつまで経っても誰かを傷つけて・・・  
傷ついて・・・

もうウンザリだ………全部………全部………！

どうして目の前で起こっている事実を全て受け入れて生きていかな  
いといけないんだ!?

もう 懲り懲りだ!!!!!!!!!!!!!!

いつもいつも、目の前の起こったことを受け入れて生きて・・・何  
も変えずにいるなんて嫌だ!!!!!!

俺は父さんと母さんが一度殺された日、全てを受け入れて強くなる  
ことだけを考えて生きてきた!!!

でも、それは本当に辛かった!!!

心が張り裂けそうになるくらい・・・苦しかった!!!

そして前にティアナが死んだときだって!!!

もしフェイトが助けを求めなかったら、生き返さなかった。

そう

ティアナげんじつの死を受け入れたんだ。

相良「ふぞけるなよ・・・クソ野郎!.....!」

右蕪「!？」

俺は意識を覚まし、再び二つの刀を手を持つ。

右蕪「・・・どうやら、気づいたようだな」

そう言うと父さんは再び刀をこちらに向ける。

なんだ・・・わかってたのかよ。こつなること・・・

相良「ああ。分かったんだ……。俺にとって、何が決断か……」

俺一人が苦しむ事で、未来が掴める訳がない！



だって俺は

相良「俺は

“人間”だからだ！……！！”

人は一文字ではその文字は存在しない。

二つ書く事で、その存在を形にする。

俺の決断は、存在はするが、形にはなっていないかったんだ。

形なきモノに、意味なんてない。

相良「俺の“未来”<sup>きらい</sup>はいつだって  
この手の中にあるんだ！  
！！！！！！」

だからこそ  
俺は  
俺は  
！！！！！！

俺は2本の刀を両手の拳に纏わせ、手の甲に刃が付いた形になり、  
両手にミッド・ベルカの魔方陣を発生させて

唱えた。

相良

新たな星の誕生  
オーバー・スター・ロード

「

それは

新たな奇跡<sup>ほし</sup>の誕生。

俺が作り出すのは  
！！

大切な日常を“皆”で取り戻す世界！！



そして俺の全身は白銀の魔力で包まれていた。

相良」

オーバーロード・スターダスト  
覚醒する星屑の誕生

」

俺の髪は白銀に染まり、  
B Jは白銀に染まり、  
その瞳は黄金に輝いていた。

だがその光は、決して眩しすぎる訳ではない。

強すぎる光りでなければ、  
弱すぎる光でもない。

右蕪「翔……いい光だな。まるで、全てを照らす光そのもの」

相良「いや、これは全てを照らすものじゃない。眩しいだけじゃ、逆に霞んで何も見えないからな。足下も眩むほどの光より、闇でも道標になる小さな光があればいい。俺の“希望”<sup>ひかり</sup>は、それだけあれば十分なんだ！！そしてその光も、闇も、全て守ってみせる！！！！」

右蕪「……いい眼をしている。流石は、俺の息子と言ったところか……」

そう言うと父さんは心無しか嬉しそうにしながら刀身に最大出力の魔力を込めた。

右無「こい翔！お前のこれから描く未来を俺に見せてくれ！俺を超えてな！！」

相良「上等だ父さん！！それがもしそれが俺の死だつてんなら、ぶっ飛ばしてやるよ！全部・・・全部な！！俺が覆してやるよ！！！！！！！！！！」

そう言って俺は右手に全ての魔力を込める。

それはただ、守りたい・・・大切な人たちの為。

そして纏うのは、守る為のちから。

右蕪」

オーバーリミックスケニル スラッシュ  
総て切り裂く超重力の一閃

!!!」

父さんが放つのは、その銀河の軌道すらも変えるほどの重力と引力を纏った最強の一閃。

相良」

総てを<sup>オーバーロード</sup>守りし<sup>スターダスサレイカー</sup>星屑の聖斬拳

!!!」



されど向かい討つは、背中に守るべき者達の姿が見えるほどの強大な流星の力を纏った最強の拳。



そして二人は再びぶつかり合う。

そして父さんの刀が、先に粉碎した。

右蕪「何

！？」

そして粉碎と同時に、魔力が爆発して、俺と父さんは吹き飛ばされた。

相良「くっ！」

右蕪「っ……」

俺と父さんはなんとか地面に着地すると、お互いの武器を仕舞った。

すでに決着は付いているからだ。

右蕪「まさか・・・とうとう翔に負けるとはな・・・」

相良「俺は、決断したんですよ。大切な人達の大好きな日常を、俺達の手で手に入れるって」

右蕪「ふ・・・翔も、やっと大人になったみたいだな」

相良「はい」

こうして二人の決断の戦いは幕を閉じた。

そしてその後、ウカムルバスは全滅して俺達は陸宙管理本部へ帰還した。

めでたしめでたさ『ちよつと待ってね』・・・え？

火澄「二人とも……そこに正座……死なさい（ニコッ）」

相良・右蕪「は、はい！！！！」

俺と父さんはびしっと正座した。

そして母さんの全身から流れる恐ろしいマイナスのオーラ。

それはまさに恐ろしいの一言に尽きる。

だが表情は笑顔だ。





距離はゼロ。

火澄「二人が全力でぶつかり合ってたんだから、私にも全力で放つ権利くらい……あるわよね……」





その日、陸宙管理本部内で二人の総裁の叫び声と一人の総裁のスキリしたような声が響き渡ったのは言うまでもない。

火澄「めでたしめでたし！」

風がたどり着いた答え（前書き）

相良翔の物語が進む間、彼の物語も進んでいた。

彼の心中に秘めたその想いと決断とは・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 風がたどり着いた答え

ヴァン Side

僕は妹と共にとある小さな家に辿り着く。

場所はクラナガンよりも離れている場所。

家の周りは何もない。

そこに家がぼつりと建っているだけ……

周りはまるで戦争の跡のように荒れ果てていたからだ。

ヴァン「ここで……何があつたんだ？」

スイエル「聞かなくても分かるでしょ。戦争だよ。私達の力を求めて狙ってきた者達が私達を襲撃した結果、この有様なんだよ」

スイエルは悔しそうに拳を握ってそう言った。

そこで僕は全てを悟った。

ヴァン「まさか……僕たちの親は……」

スイエル「うん。この戦いで命を落として、今は灰になって風になつたよ」

ヴァン「……」



分かっていた現実<sup>じじつ</sup>。

けれど受け入れられないのもまた現実<sup>じじつ</sup>。

再会できると思った僕も、この現実にはショックを隠せなかった。

ヴァン「それで・・・その組織ってどこのだか分かるのか？」

スイエル「うん。とっくに分かってるよ。でも・・・その中で陸宙管理本部は邪魔なの」

ヴァン「な!？」

納得いかなかった。

何故なら、狙われているのなら師匠達に助けを求めた方がより安全なはずだからだ。

それでも師匠達を頼れない理由・・・それはなんだ？

ヴァン「僕には理解できない。少なくとも、師匠達は僕よりも強い。だからこそ頼るべきだと思う」

スイエル「・・・わかってないよ」

ヴァン「え!？」

何を言ってるんだ……スイエル……

何が……分かってないんだ……

スイエル「相良翔……いや、相良の苗字を持つ者が、私達を滅ぼしたんだよ」

ヴァン「!？」

嘘だ・・・師匠が・・・僕の家族を・・・

スイエル「お兄ちゃんが理解に苦しむのは分かるよ。それだけ、共にいた時間が長かったから・・・」

ヴァン「・・・ごめん」

僕は素直に謝った。

それは、妹が今まで苦しんできたから・・・

なのに僕はそれを分かってあげられてない。

兄妹なのに・・・僕は、彼女の兄なのに・・・妹を救えない。

その現実が、僕を・・・そして、妹を苦しめていた。

スイエル「ううん。ただ、順応性を高めて・・・今起こっている現実だけを受け入れて・・・そして夢を見るの。それが・・・人の生き方だから・・・」

ヴァン「・・・」

僕は、妹にそんな事を教えられた。

ヴァン「それじゃ・・・師匠が・・・本当に・・・どうして・・・」

スイエル「私達の力を求めて・・・って考えたら納得できる?」

ヴァン」・・・なるほど」

師匠の事は、今も信じている。

それは、妹を助けて死にかけていた僕を助けてくれた。

そして・・・ここまで鍛えてくれた。

だからこそ、師匠が僕の家族を殺した事が信じられない。

だが・・・スイエルが嘘を付いているとは思わない。

だとするなら・・・師匠は・・・

ヴァン「……僕は、何をすればいい？」

スイエル「お兄ちゃん……じゃ、私と一緒に戦って」

ヴァン「師匠とか？」

スイエル「うん。私は……復讐して、それでもう二度と狙われないようにするの」

なるほど……最強の魔導士と呼ばれるほど師匠の力は強大だ。

だが、それは逆に利用できる。

もしも師匠を倒すことができれば、僕たちは狙われない。

妹を守ることもできる。

待てよ・・・僕は、  
師匠と戦うのか？

妹を守るために・・・

出来るのか？僕に・・・

否。

ヴァン「僕は決めたよ。スイエルを・・・守る」

スイエル「お、お兄ちゃん・・・」

僕は真剣な眼差しでスイエルを見つめた。

ヴァン「もし戦わなきゃ、大切なものが守れないなら・・・僕は大切な者の為に戦う。たとえそれが、僕を育ててくれた師匠だとしても・・・仲間だとしても・・・」

スイエル「お兄ちゃん・・・ありがとう」



僕は決断した。

必ず

大切な人いもつとを守ってみせる。

そしてその為に

師匠を倒す!!!

コロナ・・・じゅん。君のこと、守れそうもない。

だって僕は、不器用だから。

大切な人を、二人も救えないし、守ることはできない。

僕にできるのは、自分が守れる、守りたいと思う近しい人を優先することだけ。

ヴァン「いつに行く？」

スイエル「お兄ちゃんがなくなったことで、きつと相良翔は動き出していると思うの。お兄ちゃんが魔力を放出し続ければ・・・きつと・・・」

なるほど・・・僕の魔力に反応してこちらにくる・・・というわけか。

かなり危険なかけだけど・・・それしかないか。

ヴァン「スイエル。僕が必ず守るから・・・信じてくれ」

スイエル「うん。大好き・・・お兄ちゃん」

そう言って僕とスイエルは抱きしめあった。



そして

決戦の時は近づいていった。



風がたどり着いた答え（後書き）

僕の決断は、大切な妹を守ること。

その為なら、大切な者をいくらだって犠牲にしてみせる。

だって・・・そう決断したんだから・・・

## 友情と愛情の決断（前書き）

風の騎士は決断した。

大切な妹を、守る決断。

そしてその為に、星の騎士と戦う決断。

そして想いと決断は・・・彼女達を動かす。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinite  
ty } 始まります。

## 友情と愛情の決断

ウカムルバスとの決戦が終わり、3日が経ったある日、とうとう彼が動き出した。

ギンガ「翔さん。ヴァンの魔力反応を発見しました」

相良「・・・とうとう来たか。ルチア、皆を集めてくれ」

ルチア「分かった」

そう言って総裁室に皆が集められた。

相良「皆聞いてくれ。ヴァンが見つかった。これから向かおうと思  
う」

リオナ「ヴァン・・・」

コロナ「ヴァン君・・・」

二人の表情が安心と不安に満ちていた。

相良「だが、多分ヴァンは俺たちの敵になる」

全員「!？」

俺の発言に皆は驚いた。

ヴィヴィオ「ど・・・どうして戦わないといけないの？」

相良「ヴァンの魔力にはメッセージがあった。『決着をつける。皆  
は僕の敵だ』・・・そうあった」

コロナ「どうして・・・どうしてヴァン君が私達の敵になるの!？」

相良「さあな。俺は何も分からない。だが・・・ヴァンもヴァンで  
決断したんだと思う」

芳乃「あいつ・・・」

芳乃の表情も変わっていた。

親友同士であり、ライバルでもあるからだろう。

相良「俺はこれからヴァンのもとに向かう。弟子あいつの始末は師匠おれがつける」

そう言って俺は話を終わらせてその場を後にしようとした。

「待ってください！……！」

その声の本人達と俺は話をすることになった。

ヴァン Side

ヴァン「・・・」

魔力を放出し続けて既に5時間。

魔力は少量だけをだしているため、消費は少ない。

スイエル「・・・！来た」

ヴァン「そうだな」

そう言うと、白銀の魔方陣が二人の目の前に現れる。

師匠が来たか・・・





ヴァン「なんで・・・お前らなんだよ!!!!!!」

そこ立っていたのは、親友・恋人・戦友の3人だった。

芳乃「ようヴァン。来てやったぜ？」

ヴァン「僕は零二を呼んだ覚えはない。用があるのは師匠だ」

芳乃「相良さんと戦つてきたあ、俺とも戦わねえとならねえってことだろ？だったら先に俺が相手をしてやるよ！」

ヴァン「・・・コロナ、リオナ。二人も何故ここにいる!？」

コロナ「もちろん、迎えに来たからだよ？」

リオナ「私も、ヴァンがいないとつまらないからさ。だから・・・  
迎えに来たよ」

ヴァン「どうして・・・3人なんだ・・・」

話は遡る事2時間前。

相良 Side

俺は出発しようとする、3人が俺に声をかけた。

相良「なんだ？」

芳乃「翔さん。ヴァンは・俺達が相手をしてえ」

相良「・・・何故？」

コロナ「翔さんには大切な弟子であるのと同じように・・・私にとつては大切な人で、助きたい人なんです！」

相良「コロナ・・・」

リオナ「私も・・・今日まで一緒に生きてきたヴァンを、私の力で助きたいんです」

相良「・・・」

3人の想いは揺るがないだろう。

そしてその想いはきっと、俺の想いを超えている。

相良「3人が決断したのなら、好きにすればいい。俺はここでお前らの結末を見届けてやる」

芳乃「ありがとうございます」

コロナ「必ずヴァン君を取り戻してきます!」

リオナ「行ってきます!」

相良「ああ。行ってこい」

そう言って3人は俺の代わりにヴァンのもとに向かっていった。

ヴァン Side

そして現在

ヴァン「・・・」

芳乃「どうしたヴァン！翔さん呼んだのは誘うためだろ？戦う為に・・・だったらその前に俺が相手をしてやるよ！！！！」

そう言つと零二はファイティングポーズをとる。

スイエル「お兄ちゃんの・・・私達の邪魔はさせない！！！！」

そう言つてスイエルは左手に緑色の魔力光を集めて前方に小さな砲撃を放つた。

スイエル「

ライトエンド・パニッシュ  
風纏う光の聖剣

」

リオナ」

ライトニング・フィールド  
雷見せる防壁

」

スイエルの砲撃はリオナの雷の盾が防いだ。

コロナ「ゴーレムクリエイト創成!!!」

そしてその際にコロナが地面の砂を使って1体のゴーレムを創り出した。

リオナ「芳乃ん。ヴァンの事・・・任せたよ」

コロナ「私達はあの子を止めるから」

芳乃「・・・任せろ」



S i d e e n d

芳乃「始めようぜ                    ヴァン！」

ヴァン「・・・分かった。どのみち、こつなる運命だったんだろ  
うからな」

そう言ってヴァンもまた、拳を構える。

芳乃「てめえが何を決断したかなんてどうだっていいけどな、俺は誰かを巻き込まなきゃなせねえことなのか！？そんなもんに意味はねえんだよ！」

ヴァン「知ってるさ。意味なんて・・・最初から求めていない。僕は・・・いや、「俺」はただ、過去に救えた妹を・・・二度と失わない為に戦うんだよ！！！」

芳乃「・・・いいぜ。それじゃ、着けようぜ・・・この戦いの決着を」

そしてお互いに全身に魔力を纏わせる。

芳乃「この勝負に、正義も悪もねえ。ただあるのは

」

ヴァン「どちらが勝者で、どちらが敗者なのか

」

そして二人は拳に魔力を纏わせながら走り出した。

芳乃・ヴァン「ただ

」

そして拳がぶつかり合う。

芳乃・ヴァン」

それだけの決着を………!!」



## 友情と愛情の決断（後書き）

この戦いにかける想いはそれぞれ違う。

そして、その想いのぶつけ合いに意味なんてない。

だが、意味なんていらぬ。

だって最初からこの戦いに正義も悪もないからだ。

だったら振るうのは、全力の拳だけだ！！！！

## 交わる拳（前書き）

fortissimoの主人公とVividの主人公の戦いが始まる。

それは誰もが願ひし戦いであったのかもしれない。

そしてその戦いは誰もが予測不能。

未だ全力を見せぬ二人がとうとう、その全てをかけて戦う。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 交わる拳

No Side

芳乃「おらぁぁ!!!!!!」

ヴァン「はぁぁぁ!!!!」

まるで二人の意思に呼応するかのように空気を切り裂き、左足が大  
地に爆ぜる。

気合一閃。先手必勝とばかりに拳を振り抜く。

それに応えるようにヴァンもまた、拳を振り抜いた。

ヴァン「やるな。零二」

芳乃「お前もな」

お互いの拳は引けを取らず、相打ちとなった。

芳乃「おおおおおおお！！！！！！！」

ヴァン「はあああああああ！！！！！！」

そして二人は全身に魔力を込め、再び走り出す。

芳乃「

フェンリスヴォルフ  
神討つ拳狼の蒼槍

!!!!!!」

ヴァン「

ストームストライク  
神風討つ拳鳥の緑槍

!!!!!!」

その二人がぶつかり合う前、世界が揺らぐかのように大気が揺れた。

対峙するお互いの魔力が、唸りをあげる。

交差はおそらく一瞬。

その一瞬で決まる。

芳乃「おおおおおおおおおお!!!!」

ヴァン「はあああああああ!!!!」

激突する、神大なる一対の魔力。

お互いに一步も譲ることなく、眼前に存在する敵を討つ為に咆哮を放つ。

その光景は、古くにあった神話を超え、新たな神話を創り出しているかのようにも思える。

そして二人は爆発した煙の中から距離を置いて出てきた。

芳乃「やっぱりお前、いい仲間になりたかったぜ」

ヴァン「俺もだ零二。もしお互いに決断することがなかったら、もっと仲良く出来ただろうな」

そんな、どこか自虐的な発言をして、お互いにまた魔力を練り上げ

る。

ヴァン「でも、もう戻れない！」

そう言って今度はヴァンが先手をうった。

ヴァン「はあああああああ！！！！！！！！！！」

ヴァンを中心に龍巻が発生し、それを右手に纏わせた。

ヴァン「

ストーム  
神風息吹く神鳥の翼  
トルネード

」



竜巻ごと拳を放った。

芳乃「戻してやるさ……俺の力は、ただ『戻す』ことしかできねえからな」

そう言いつと零二は左手を前方に出す。

芳乃「

復元ダ・カーポする世界

術式アインハルト固定

」

ヴァン「な　　！！」

ヴァンの拳は確かに零二を直撃した。

だが零二は傷一つしていない。文字通り無傷だ。

芳乃「

フェンリスウォルフ  
神討つ拳狼の蒼槍

「!!」

ヴァン「しまっ

「!!」

ヴァンは防御出来ずにアッパーを喰らった。

ヴァン  
コ

ストーム・ウィング  
鳳凰の風装

ル

だが

芳乃「なっ

」

ヴァンもまた、無傷だった。

そしてヴァンは地面に着地した。

芳乃「それがお前の防御ってやつか・・・」

ヴァン「ああ。ストームストライク風討つ拳鳥の緑槍の防御形態。拳に纏うのではなく、全身に纏うことで、相手の攻撃を風の力で逸らす」

芳乃「なるほどな。厄介なもん持ってんじゃねえか」

ヴァン「まあな！師匠が強すぎたもんでな」

芳乃「はっ！上等！これくらいじゃなきや張合いがねえ！！！！！」

そう言いながら零二は拳に魔力を集め、もう一度放つ。

芳乃「

フェンリスヴォルフ  
神討つ拳狼の蒼槍

「！！」

ヴァン「どうやっても同じことだ！」

その言葉通り、零二の拳はヴァンには当たらず、逸れた。

芳乃「まだだ！……！！！」

そう言つと何発も何発も同じことを繰り返す。

ヴァン「無駄だ！どうやろうと、俺に拳は届かない！！！」

そう言つとヴァンは零二の拳をひらりと避けて懐に入るとアップパーで零二を殴り飛ばした。

芳乃「ぐあ……あ……」

零二はフラつきながらもしっかりと立った。

芳乃「はあ、はあ、はあ……やるじゃねえか！」

零二は口から垂れている血を右手で吹きながらそう言った。

ヴァン「零二の戦いは極端だからな。そして、我武者羅だ」

そう言いながらヴァンは右手に魔力を集結させ、翼の形を作りあげる。

ヴァン「そして……拳を振るうこととできない!!」

そう言つてヴァンは、その翼を放った。



ヴァン」

ストリーム・スラッシャー  
神風纏う翼の斬撃

「!!!」

芳乃「それは違つぜ。ヴァン  
とだけじゃねえ。俺は  
」

俺が出来ることは拳で殴る」

そして零二は右手を掲げ、巨大な魔方陣をだして前方に突き出した。

芳乃  
「

復元する世界  
ダ・カーポ

術式固定  
アインハルト

!!  
」

そして爆発の煙の中から、無傷の零二が現れた。

ヴァン「な・・・また防がれた!？」

芳乃「お前の防御は風なら、俺は『戻す』防御だ」

芳乃零二の能力は『ダ・カーボ復元する世界』万物を戻す能力だ。

24時間以内に出会った人物を強制的に召喚したり、怪我を負った場合はその部分を復元できる。

まさに『ダ・カーボD・C』の名に相応しい能力。

どちらかという戦闘向けではなく、補助専門系の魔術だ。

だが零二には『フェリスフォルフ神討つ拳狼の蒼槍』がある。

あれはシンプルに言えばフルスロット魔力パンチ。ただ純粹に膨大な魔力を拳に纏わせ放つ。

ただそれだけのはずだが、零二の規格外の魔力量が、その純粹な拳を最強の拳へと変えた。

その攻撃に加え、そもその能力の復元する世界が存在すれば攻撃

も防御も完璧だ。

そしてヴァンの攻撃で発動した『ダ・カーボ復元する世界 術式固定』とは復元する世界を発動させ、それを維持させる事によって相手の攻撃を無かった事にし続けることができる、まさに最強の防御技。

これによってヴァンの攻撃は全て、ただ発動する前に戻される。

ただ間違えなくて欲しいのは、あくまで戻すと言ったことが零二の能力であって、決して破壊をしたわけではないということ。

ヴァン「なるほど。俺たちが知らない治癒魔法に、魔力をただの拳に纏わすことができること・・・そして俺の攻撃を防いだ・・・いや、戻したこと。全て納得したよ」

芳乃「俺の力は拳だけじゃない。ただ純粹に『戻す』ことだ！」

そして零二は再び殴りかかった。

ヴァン「だが、実力は俺の方が有利だ！その結果は変わらない！！」

そう言つとヴァンは零二より速く走り、懐に飛び込んだ。

芳乃「  
復元ダ・カーポする世界  
!!」

ヴァン「な……ぐあ!!!!」

懐に飛び込んだはずのヴァンは零二の3歩手前に何故か立っており、事態を理解できないヴァンはそのまま零二の拳を顔面に喰らう。

ヴァン「い……今は……まさか!？」

芳乃「ああ。復元する世界でお前を3歩前の場所に戻したんだ。言っただろ、俺は『戻す』力を持つってな」

ヴァン「なるほど。だが、まだ解せない」

そう。ヴァンが納得いかないのは復元する世界ではなく、“何故攻撃が懐で起こると分かっていたか”

先に動いていたのは間違いなく零二だ。

そしてその後にはヴァンは素早い速度で懐に入った。

だが、懐に入った瞬間に復元する世界が発動された。

まるで最初から攻撃を予知されていたかのように……

ヴァン「まあ、その理由もすぐに教えてもらおうかな!!」

芳乃「上等だ!!来いよ　　ヴァン!!!!」

そして二人は再びその拳を振るう。

まだ戦いは、始まったばかりだ。



大好きな人の為に（前書き）

男同士の拳がぶつかり合う中、女同士の想いもぶつかり合う。

大切な男性の為、大好きな男性の為、大好きな兄の為にその武器を振るう彼女達。

その戦いで、3人の想いは放たれる。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
ty } 始まります。

## 大好きな人の為に

No Side

リオナ「

ライトニングスラッシュ  
雷討つ刀虎の一閃

」

雷を纏った一閃が緑色の髪の子の首元に向けて放たれた。

スイエル「

アイギス・サンシャイン  
拒絶の緑光壁

！！」

だが彼女の攻撃は緑色の光の壁に阻まれた。

リオナ「くっ！！」

リオナは素早く彼女との距離をとる。

コロナ「ゴライオス！！！」

コロナの巨人がその子を殴り飛ばす為に殴りかかった。

スイエル「

アイギス・サンシャイン  
拒絶の緑光壁

」

その巨人の拳さえも、光の壁が拒絶するかのよう弾いた。

コロナ「硬い……」

リオナ「ううん。硬いって言うよりも・・・“返された”って言うたほうがいいかな？」

スイエル「頭良いね。そうだよ。私の能力は『反射』。そのものをはじき返す」

光とは固形としての形状を保たず、簡単に言えば水のように自在にその形状を変えられる。

ただ固める事ができない事が何よりの問題点。

だがスイエルは光を壁と言う形状にした。

光は形状を作っても爆発する。

それは水でボールを作るのと同じこと。

だがここで反射を使う。

反射と言う魔力の膜を張り、そのなかに光を入れれば光はその中で永久的に反射し続ける。

反射し続ける光は徐々にその力を増していく。

スーパーボールがバウンドするのと同じ原理だ。

そしてその凝固なる壁はどんな攻撃をも通さない。」

スイエル「お兄ちゃんの邪魔は・・・絶対にさせない」

リオナ・コロナ「お、お兄・・・ちゃん？」

突然の衝撃発言にリオナとコロナは驚いていた。

スイエル「私の名前はスイエル」スカイ。ヴァン」スカイお兄ちゃんの妹だよ」

コロナ「そ・・・それじゃ、どうして・・・こんなこと・・・」

スイエル「相良翔・・・あの人は、私達の家族を殺した本人だから」

リオナ・コロナ「!?!」

スイエル「あの人は・・・お兄ちゃんを利用して・・・私達の家族を壊したの!?!」

リオナ「嘘だ・・・」

コロナ「あの人が、そんな事をする訳がない!!」

スイエル「そうだね・・・皆はあの人の“おもて光”しか見たことがない

んだね。でもね、私は見た。まるで大量の隕石が流星群となつて襲いかかってくるかのようだった・・・」

思ひだしながら彼女はそう言った。

だが、もしスイエルの話しが本当であればリオナ達の行なっていることが正しいか否か・・・

それはもはや考えるまでもない。

だが

リオナ「そんなこと

どうでもいい」

スイエル「な・・・！？」

コロナ「別に私達は、スカイの一族がどうなるうと関係ない」

スイエル「・・・」

リオナ・コロナ「ただ  
大切なあの人の為に。その人以外の  
ことなんて、どうでもいい」

スイエル「・・・どうでも・・・いい・・・」

そう言ったスイエルは全身から大量の光を出した。

スイエル「何も知らないくせに・・・好き勝手言っなああああああ  
ああああ！！！！！！！」

リオナ「・・・私達の事も、あんただって知らないでしょ。だから、  
お互いに語り合おうよ。この武器で。この技で。この能力で。そし  
て・・・この想いで！！！！！！」

スイエル「そんなお涙頂戴なんて私は望まない！ただ、私は復讐が  
したいだけ！！そして手に入れたいの！！本当の平和を！！！！そ  
して　お兄ちゃんと幸せに生きること！！！！」

そう言うとスイエルはリオナを指さして言った。



スイエル  
」

オ  
ラ  
ク  
ル  
・  
バ  
ス  
タ  
ー  
神託の星光

!!  
」

リオナ「な・・・上!？」

上空から巨大な緑色の閃光がリオナ目掛けて放たれた。

リオナ「くっ！」

その光はそのままリオナを飲み込んだ。

コロナ「リオナ!？」

スイエル「余所見してる場合!？」

そう言うとコロナの上空からも光が向かってきた。

コロナ「っ!ゴライオス!!!!」

そう言うと巨人はコロナを守る様にコロナを包んだ。

そして光が直撃し、光の中から無傷のコロナが現れた。

スィエル「防御には成功したみたいね」

コロナ「・・・」

無言でコロナはスィエルを見つめる。

コロナ「・・・ゴーレム・・・」

スィエル「させない!!」

コロナがゴーレム創成を始める前にスィエルは左手に緑色の光を集結させ、砲撃を放った。

スイエル

闇撃ち抜く緑光砲

ストーム・ブレイカー

┌

その光はコロナを喰らわんとばかりに迫る。

だがコロナは驚かない。

平然としていた。

別に目の前の光を怖がっているわけではない。

周りから見ればどう考えても絶望的な状況。

そんな中でもコロナは落ち着いているのだ。

まるでそれは、自らを犠牲にしているように……

??? 「<sup>ライトニング</sup>雷切り裂く<sup>ザンパー</sup>刀虎の斬撃!!!!!!」

スイエル「何?!」

背後から雷の刃がスイエルを喰らわんと切り裂いた。

スイエル「がああ!!!!!!」

そしてコロナもスイエルの砲撃を受けた。

コロナ「うぐううう!!!!!!」

そして二人が倒れ、一人の少女だけがそこに立っていた。

スイエル「あ……あんだ……」

リオナ「ごめんなさい。私は、どんな手段を使っても、負けるわけにはいかないの」

スイエル「……さっきの光を喰らって……どうして無傷なの……」

リオナ「……ライトニングドール雷の導き」

『ライトニングドール  
雷の導き』

雷の光を屈折させて自らを消した。

先ほど、スイエルが放った光を喰らったのは光の屈折でいたリオナ。

本当のリオナは既にスイエルの背後に移動していた。

それをバレないようにコロナは自らを犠牲にすることでリオナの  
撃に託したのだ。

コロナ「わ・・・たしは・・・弱い・・・から、リオナ・・・奈良・・・  
決めてくれる・・・」

ポロポロの体でそう言ってコロナは意識を失った。

スイエル「く・・・そ・・・」

リオナ「!？」

だが、スイエルは立ち上がった。



スイエル「私は・・・負けない!!」

そう言っつてスイエルは全身から光を出して体に纏った。

リオナ「・・・私だつて負けない。負けられない・・・理由があるから!!!!」

そうやって二人は再びぶつかりあった。

誰もが望まぬ最期（前書き）

男同士の戦いも女同士の戦いも、いよいよ大詰め。

お互いに隠す必要もない。

ただ全てをぶつけ合う。

戻す力の芳乃零二と進む風のヴァンスカイ。

二人の強力な一撃同士のぶつかり合いで、決着が着く。

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
ty } 始まります。

誰もが望まぬ最期

No Side

ヴァン「はあ、はあ、はあ……」

芳乃「はあ、はあ……どうした？もう終わりか？」

ヴァン「はあ……うるせえ！」

二人は全身ボロボロになりながらも尚、殴りあっていた。

ヴァン「ストームストライク神風討つ拳鳥の緑槍　　！！！」

芳乃「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍　　！！！」

お互いの魔力は大気を揺らし、大地を削りあっていた。

ヴァン「まだだ！！！」

芳乃「来いよ！！！」

その光景はまるで、戦いでは無く、喧嘩だった。

ただ決着を着けるため、お互いの体が果てるまで、その拳はぶつかり合う。

芳乃「っく！」

ヴァン「っが！」

お互いの拳は相打ちとなり、吹き飛ばされ、着地した。

芳乃「・・・まだ、やり直すって考えはねえのか!？」

ヴァン「・・・どうやって戻れって?俺はもう戻れねえよ。全てを知っちまったからな」

芳乃「全てを知った?・・・ふざけんじゃねえぞ!!!ティミルの気持ち、考えたことあんのかてめえ!!!あいつが・・・お前がいねえ間どんな苦しい日々を送ったと思ってるんだ!!!!!!」

そう。コロナはヴァンがいない間、成績が落ち始めていた。

学年トップの位置にいたコロナの成績が突然下がりはしたのと同級生の零二にも、ヴィヴィオにもわかるものだった。

更に授業中はボーツとして先生から怒られる日々。

学院に遅刻することだって増えていた。

芳乃「あいつが今日、てめえを見つけてやっとあいつらしくなってきたんだ!!!あいつにはてめえが必要なんだよ!!!そんなことも知らなかったのか!？」

ヴァン「・・・知ってたさ。コロナは、きっと苦しんでいるだろうってことくらい」

芳乃「分かってんな」でも、もう戻れねえんだよ!!!」・・・  
「どういうことだ!？」

ヴァン「・・・俺は、不器用だからな。妹と彼女のどちらを選べば  
良いか、分からなかった。でも、やっぱり家族が一番大切なんだ」

その言葉に、零二は怒りを露わにした。

芳乃「・・・つざげんじゃねえ・・・」

ヴァン「？」





芳乃  
「

セカンドアクセス・  
高次領域展開・  
ゲート・オープン  
魔術兵装

」

ヴァン「な・・・なんだ・・・その力は!？」

ヴァンは驚いていた。

それもそうだろう。

零二の背中には、コロナが立っていたからだ。

芳乃「行くぜコロナ!お前の思い、俺と一緒に放つぜ!!!」

コロナ「うん!私と一緒に、ヴァン君を止めて!!」

そして背後にいるコロナと零二は同じ構えをとった。

芳乃・コロナ

未だ果てぬゴーレムオーバーロード創成クリエイション

□



ず直撃を受けた。

ヴァン「ぐ……コロナのゴーレムより、強い……」

芳乃「そりゃあそつだ。このゴーレムには、俺の魔力も注ぎ込まれてんだからな！」

ヴァン「……なるほどな……」

コロナ「零二君！行くよ！！」

芳乃「ああ！！！！行くぜ！！！！」

そして零二とコロナは同じ構えを取る。

右拳を後ろにググツと下げて魔力と力を溜める。

ヴァン「コロナ・・・零二・・・二人の攻撃、俺の全力を持って返してやる！！！」

そう言うとヴァンは抜刀術の構えをとった。

ヴァン「

風林火山・風神抜刀

!!!!!!!!!!!!!!」

芳乃・コロナ「

想い果てぬ拳狼ネフィリムの蒼槍ヴォルフ

!!!!!!!!!!」

3人の想こがしいはぶつかり合い、大気・地面・空をも揺らした。

ヴァン・芳乃・コロナ「はあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

想いはぶつかり合い、巨大な爆発を起こした。

芳乃「ぐっ！！！！」

ヴァン「がああっ！！！！」

二人はあまりの衝撃に耐え切れず、地面に叩きつけられた。



芳乃「はあ、はあ、はあ……」

ヴァン「ぐう……ああ……」

恐らく、ヴァンの魔力は尽きただろう。

零二にはあと一撃分の魔力が残ってる。

芳乃「どうしたヴァン！これで……本当に終わりか!？」

零二は立ち上がってそう言うと、ヴァンはその質問に答えるかのよう  
に立ち上がる。

ヴァン「舐めんなよ。魔力尽きたってなあ……関係ねえんだよ！  
！！俺は……負けねえ！！負けられねえんだ！！！」

芳乃「それだけ吠えられりや十分だぜ！！こつからは魔法だか守るなんて関係ねえ　　サシで決着だ！！野郎のケンカなんざあ、そんな大層なもんは必要ねえんだよ！！昔からな！！！」

ヴァン「もっとクールな奴だって最初は思ってたのに……予想以上に熱い奴じゃねえか零二！！！」

そう言うとお互いにファイティングポーズを取る。

芳乃「これが互いの想いを賭けた戦いだってんなら　　最後は、  
拳こいつで決着をつけるのが男ってモンだろ！！！！！」

ヴァン「そうだな……確かに……その通りだぜ！！！！零二！！！！！！」

そう言って二人は魔力を一切使わず、ただ素手で殴りあう。

芳乃「ぐっ!!！」

ヴァン「がつ!!！」

お互いの拳が鳩尾や顔面、腹や拳同士でぶつかり合うことさえある。

芳乃「はあああ!!！」

零二は勢い良く回し蹴りをする。

ヴァン「ぐっ!?!はああああ!!！」

ヴァンは両手をクロスさせて防御し、そのまま殴りかかりに行く。

芳乃「おらああああ!!！」

ヴァンの拳に、自らの拳を放つ。

そんな、魔法使いとしての戦いではなく、ただガキとして・・・男としてのケンカをしていた。

芳乃「おおおおおおお！……！」

ヴァン「はあああああああ……！」

そしてそれから、何度も殴り合った。

お互いに顔面は腫れ上がっていた。

よろよろ、今にも倒れてしまいそうな体を、ただ気合と想いで立ち上がらせている二人。

芳乃「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

ヴァン「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

だがお互いにお互いを睨む事をやめず、そしてお互いに最後の力を振り絞ってぶつかり合う。

芳乃「行くぜヴァン！！！！」

ヴァン「ああ！零二！！！！！」

そして二人は最後の、本当に最後の魔力を右拳に全て集め、走り出  
した。

ヴァン「俺の……」

芳乃「これが……」







最後の最期に放たれるは、お互いの新たな技にして、最強の技。

芳乃・ヴァン「はああああああああああああああああああああ  
ああああ！……！！……！！……！！……！！……！！……！！」

そして二人は思い出す。

初めて出会ったあの日の事を。

初めて戦ったあの日の事を。

初めて一緒に戦ったあの日の事を。

初めて笑いあったあの日の事を。

初めてケンカしたあの日の事を。

全てが全て、この最期の拳に注がれる。

芳乃・ヴァン「おらあああああああああああああああああああああ  
あ！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」



そしてこの拳同士のぶつかり合いは、相打ちとなって終わる。



ヴァン「コロナー!？」



「コロナ」うつん。私も・・・一緒に逝く。ヴァン君と一緒に」

そう言つとコロナは零二を突き飛ばし、魔力同士の爆発から離れた。

芳乃「!? コロナ!!!!!! ヴァン!!!!!!」

コロナ「ごめんね零二君。そして・・・ありがとう」

ヴァン「コロナ……」

コロナ「もう……独りにしないから……私も、一緒だよ」

そう言ってコロナはヴァンを抱きしめ、それに応える様にヴァンはコロナを抱きしめる。

ヴァン「俺……コロナの事……好きだった

」

そして二人は、爆発に飲み込まれた。



芳乃「・・・ヴァン・・・コロナ・・・」

そしてそこに呆然と立ち尽くす芳乃零一。

芳乃「嘘……だろ……なんで……どうしてだ……どうしてなんだああああ……!!!!!!」

零二の怒りの咆哮が、天高く響きわたった。

誰もが望まぬ最期（後書き）

決着は着いた。

最悪の・・・誰も望まない結果を生んで・・・決着は着いたんだ。

ヴァンとコロナ。

二人の死で・・・決着は着いた。

その結果に、誰も納得がいかなかった。

## 決着と死（前書き）

男同士の決着がつき、後は女同士の戦い。

二人の一撃がもたらす最期とは・・・

そして物語は、衝撃の展開を迎える。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 決着と死

No Side

リオナ・スイエル「はあああああ……!!」

光の拳と、雷の刃がぶつかり合う。

そしてすぐに距離をとり、またすぐに攻撃を開始する。

リオナ「

トール・スラッシュ  
総てを切り裂く雷

!!!!」

スイエル「

アイギス・サンシャイン  
拒絶の緑光壁

!!!!」

スイエルは壁を張った。

だがそれはとうとうリオナの一閃によって切り裂かれた。

スイエル「な・・・」

リオナ「舐めないで。私の一閃は総てを切り裂くの。でも、流石ね。総てを切り裂くのに、あなたは切り裂かれていない。そこまでは防  
御できたみたいね」

スイエル「くっ・・・調子に・・・乗るな!!!」

そう言うとスイエルは光を左手に集結させ、翼の形を作った。

リオナ「!?!?それ・・・ヴァンの・・・」

その形状は光で使うヴァンの奥義『ストリームスラッシャー  
神風纏う翼の斬撃』と同じ。

スイエル

神ライトエンド光纏スラッシュャーう翼の斬撃

!!!



リオナ「ふざけないで。ヴァンの相手。何年やって来てると思ってるのよ」

そう言うところオナは刀身に紅い雷の魔力を纏わせると、姿勢を限界まで低くしてそのままスイエルに向かって突進した。

スイエル「な・・・！？」

スイエルの技の弱点は、“攻撃が真っ直ぐ”であること。

威力と範囲は広くても、攻撃そのものが真っ直ぐに来るといっなら対処は簡単。

ただ攻撃範囲が広いから、この攻撃そのものが単純だと言っことに相手は気づけないだけ。

だがリオナは、何年も前からヴァンと戦っているため、対処は簡単だった。

リオナ「

総て切り裂く超電磁斬

!!」



リオナが止めを刺すその瞬間、突如一人の少女の叫び声が響きわたる。

リオナ「コロナン!?!?!?!?!」

スイエル「お兄ちゃん!!!!!!」

ヴァンとコロナの方を向くと、コロナがヴァンを抱きしめ、ヴァンも抱きしめ返して……

巨大な魔力が爆発した。

芳乃「嘘……だろ……なんで……どっしてだ……どっして  
てなんだあああああ……！！！！！！」

零二の咆哮が響きわたる。

リオナ「嘘……ヴァン……コロナ……」

スイエル「お兄……………ちゃん……………」

リオナの手にもたれた刀が地面に落ちる。

そして二人の目から光が消える。

リオナ「何で……………何でえ……………いや……………いやああああ  
ああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

スイエル「お兄ちゃああああああああん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

二人の叫び声もまた響きわたる。

誰も認めたくない・・・大切な人の死。

そしてリオナは思い出す。



ヴァンと初めて出会った日。

ヴァンと初めて笑った日。

ヴァンと初めて料理を食べた日。

ヴァンを初めて好きになった日。

ヴァンと初めて戦った日。

ヴァンと初めて学院に行った日。

全てが遠くなっていく……

リオナ「嫌だ……嫌だよお……ヴァン……ヴァンう……」

気づくとリオナの瞳からは大量の涙が流れていた。

それはスイエルも同じ。

零二も同じ。

誰も……誰も望んでいなかった死。

???「やっと彼は死んだか」

芳乃・リオナ・スイエル「!?!」

突如、彼女達の前に漆黒の闇を纏った男性が現れた。

リオナ「え……相良……翔さん……」

そう。色は黒だが、相良翔本人だった。

芳乃「相良さん!!ヴァンが……ヴァンが……」

相良?「……ようやく、邪魔者が死んだか」

芳乃・リオナ「!?!」

二人は驚く。

相良翔が・・・ヴァンの死を喜んでいる。

何故？

スイエル「あなたは・・・相良翔!!!!!!!!!!!!!!」

そう言うとスイエルは全身の魔力を左手に込めて前方に放った。



スイエル」

ストーム・ブレイカー  
闇撃ち抜く緑光砲

!!!!!!」

相良？」

オーディン  
隕石切り裂く漆黒の一閃  
ダークネス・スラッシュ

」

刹那　　スイエルが放つ緑の星光は漆黒の一閃によって切り裂かれ、そのままスイエルを切り裂く

スイエル「ぐあっ!？」

スイエルはそのまま地面に落ちた。

相良？「ふん。魔力を殆ど持たぬ貴様など、塵芥以下に過ぎん。身の程を弁えるんだな」

そう言つて彼はスイエルの目の前まで近づき、漆黒の刀をスイエルの喉元に突きつける。

スイエルは意識を失っているため、そのことも分からない。

相良？「これで・・・スカイ一族は終わりだ！！！！」

そう言つて切り裂こうとした。



相良？」

ステイオール・  
隕石巻き込む嵐のトルネード一閃

」

芳乃「ぐあっ！！！！」

リオナ「きゃっ！！！！」

二人は切り飛ばされて倒れた。

相良？「魔力が殆どない貴様らに、私は倒せない。絶対にな！」

芳乃「ちく……しょう……」

リオナ「く……そ……」

相良？「終わりだ！！！！」

そうやって彼は刀をスイエルに向かって振るった。

「????」

トライアングル・スラッシュヤー  
三つの理りを切り裂く星屑

」

闇の一閃は、紅・蒼・白銀の3色の光の一閃によって相打ちになった。

相良？「!？」

そして彼はスイエルから離れた。



そしてスイエルをかばう様に立つ一人の白きBJを着た男性。

芳乃「よかつ……た……」

リオナ「しょ……うさ……ん」

そう言って二人は意識を失った。

???。「二人とも。よくやったな」

相良?。「貴様は・・・」

戦場に立つのは白銀に染まる男性と漆黒に染まる男性。

二人はまるで瓜二つ。

武器以外は全て瓜二つ。

色が逆と言っただけの・・・二人。

相良？」「まさか・・・自らに自らの行動を邪魔される日がこよつと  
は・・・な」

相良「……偽物は、黙ってる。今の俺は……怒ってるんだよ  
」

戦場に立つは、星屑の騎士と隕石の騎士。

二人の内に秘める思いとは・・・

明かされる本当の敵 砕かれる絆（前書き）

いよいよ姿を現した真の敵。

その正体はもう一人の相良翔だった。

二人の出会いが・・・物語を加速させる。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 明かされる本当の敵 砕かれる絆

相良 Side

俺はヴァンの死を見た瞬間、居ても立ってもいられずに転送魔法陣の上ののって芳乃達のもとに向かった。

そしてたどり着いた時、漆黒のBJと漆黒の刀を持ったもう一人の俺がいた。

それはまるで・・・俺の逆の存在。

その存在に俺は驚いたが、ヴァンの死を喜ぶあいつが許せずに切りかかった。

そして今、俺と奴は向き合っている。

相良「俺は陸宙管理本部総裁、相良翔。お前は？」

オーディン「俺も相良翔・・・だが、今はオーディンと名乗らせて貰おう」

相良「オーディン・・・決してお前などが呼んで良い名前ではない。最高神の名を持つ事を許さねえ」



そう言うと奴は少し笑い、言った。

オーディン「ははは・・・貴様には分からぬだろうな。私が最高神の名にどれほど相応しい存在か」

そう言うと奴の背中から漆黒の翼が生えた。

それはまるで・・・俺が使う翼と同じ・・・

相良「名前はどうでもいい。お前は・・・ここで倒す！！！！」

そう言うと俺の全身から白銀の光が溢れ、背中で翼になった。

オーデイン「行くぞ!」

相良「ああ!」

そして俺と奴はぶつかり合う。

その光景はまるで

天使と悪魔のぶつかり合い

一閃がぶつかり合うと即座に距離を取り、刀を構える。

オーデイン「いい太刀筋・・・流石は私か・・・」

相良「お前・・・一体何者なんだ・・・」

オーデイン「・・・良いでしょう。話そう、お前と私の真実を」

そつじつして話をする、真実。

オーディン「私はお前から生まれた、闇の相良翔」

相良「闇の……相良<sup>おれ</sup>翔……」

オーディン「お前の妻にいるであろう？マテリアルと言われる存在が……」

相良「な……お前は……俺のマテリアルだって言つのか!？」

確かになのは、フェイト、はやてのマテリアルは既に出会っている。

だが……まさか俺のマテリアルまで存在するなんて……しかもここまでデカイこととしてたとはな。

オーディン「そう。私はお前のマテリアルであり、お前を超える者だ」

相良「超える?」

オーディン「もはやお前は私の紛い物に過ぎないのだ」

紛い物・・・ね。

相良「・・・で、お前は どうしてヴァンの家族を殺した？」

オーディン「あの一族は潜在能力が高い。そしてあの禁術の使い・・・あれはこの世界には存在してはいけないと判断した」

相良「・・・まさか・・・ “その程度” の理由でヴァンの家族を消したのか!？」

オーディン「その程度・・・お前にはその程度としか思えないのか・・・」

こいつ・・・狂ってやがる!!!!!!

相良「ふざけんなよ!!!この世に存在してはいけない者なんていない!!!どんな生きる者は生きる権利があるんだよ!!!それはお前<sup>おれ</sup>が一番よくわかってるんだろ!？」

お前が俺のコピーなら、わかるはずだ!!

オーディン「・・・お前は甘い」

相良「な・・・!？」

オーディン「世界とは、弱者が生きるためには強者を破壊するしか

ないのだ。だから強<sup>わたし</sup>き者が彼らを殺した・・・それだけだ」

こいつ・・・なんて思考だ・・・

相良「・・・確かにこの世界は、弱肉強食の世界なのかもしれない。でもな!!! だった強者が弱者を守ればいいだけの話だ!!! 決して破壊の道には進まず、ただ守ると言う道に進むべきなんだ!!! 破壊は破壊しか生まないんだよ!!! 昔からな!!!」

オーデイン「だからお前は甘いと言っているのだ」

相良「何だと!？」

こいつ・・・なんだよ・・・本当に俺なのか!？

こいつは・・・俺じゃない!!

相良「お前・・・一体何なんだよ!? どうしてこんなに命を小さく見るんだ!? 命の大きさは人それぞれ違うかもしれない!! でもな!! その者の存在だけは、大小関係ない!! なのにお前は・・・全てを否定している!!! 甘い? それなんだ!? 紛い物? それがどうだってんだ!? 俺は所詮“墮天使” 天使にはなれない。天使のような翼もない!!! でもな!!! どんな命にも翼はあるんだよ!!!」

オーデイン「翼・・・か」

何故かオーデインと名乗る俺は懐かしそうな表情をした。

相良「その翼で、俺達は徐々に強い翔きを見せるんだよ！！その翼を、強引にもぎ取るあんたは許さねえ！！！！例えそれが・・・俺の影だとしてもな！！！！」

オーデイン「影・・・か。“私とお前は”やはり合わないようだな」

相良「・・・まるで俺以外なら合うつて言い方だな」

オーデイン「ああそうだ。私に合う女性がいたのだよ」

相良「それって・・・」



『ミストルティン!!!!!!』

相良「な・・・!?!」

石化の槍が俺に向かって放たれた。

俺はバツク宙をして避けた。

狙われた場所は石の小さな山ができていた。

相良「この石化の魔法・・・まさか!?!」

この攻撃は上空から放たれた。

つまり“敵”は上空にいる。

そして・・・もし俺の予想が当たっているとしたら・・・事態は最

悪だ！！

相良「何で・・・  
“お前”なんだよ！！！！！！」

空にいたのは、黒い翼を生やし、金の十字架の杖を持ったミニスカ  
ートと白い帽子の女性。

そして足元にある古代ベルカ式の魔方陣。

相良「

はやて………」

俺の妻・・・八神はやて。

オーディン「彼女は、私と理外が一致しているね。私と共に行動させてもらっている」

そう言うとはやては奴の隣に着地した。

相良「……はやて……本気なのか!？」

はやて「……」

はやては無言で頷いた。

相良「……嘘だろ……どうして……はやてなのだよ!!!」

オーディン「何度も言わせるな。理外が一致したのだ」

はやてが……あいつなんかと理外が一致した……だと!?

はやてはそんな奴じゃない!!!はやてはそんな命を小さく見る奴じゃない!!!

相良「はやて……一体何があつたんだ!？」

はやて「翔くん……ごめん。私にも“守りたい者”があるんや。せやから翔くん……」

はやては薬指についている俺との結婚指輪をとって真上に投げた。

は  
や  
て  
「  
私  
と

別  
れ  
て  
「

はやてのデバイスが、俺とはやての結婚指輪つながりを砕いた。



相良「は……やて……」

オーディン「今日の所はここまでとしよう。さらばだー!!」

そう言うと奴とはやての足元に漆黒の魔方陣が現れて消えた。

はやて「行ってきます。  
“相良翔”」

そう言うてはやては消えた。



キオクノナカデ（前書き）

失ったのは、大切な人。

救えなかった・・・守れなかった後悔。

二つと、どうにもならない怒り。

様々な想いが放たれて・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## キオクノナカデ

ヴァンとコロナの死から2日後・・・

俺は芳乃がいる病室に向かった。

相良「よっ！元気にしてつか？」

芳乃「翔・・・さん」

聞くまでもなかったな・・・芳乃の雰囲気、あまり元気ではないと言っているような感じだった。

相良「・・・ヴァンの事は、すまなかった」

芳乃「いえ・・・俺こそ、すみません。自分で行くって言うておきながら、あいつを助けることが出来なかった・・・」

お互いに謝る。

これは当然だと、最初から分かっていた。

相良「・・・ヴァン、最後に・・・なんて言ってたんだ？」

芳乃「あいつ・・・『コロナの事・・・好きだった』・・・そう言いたかったはずなんだ・・・」

そう言つと芳乃はベットの毛布を強く握り締め、悔しそうに言った。

芳乃「あいつ・・・最期の言葉を最後まで言えずに死んだ!!そんな・・・そんな悲しいことあるかよ!?あいつは!!心からコロナを愛してたんだ!!そのコロナに・・・最期の言葉を言えずに死んじまつた!!そんな・・・そんなことってありかよ・・・くそつ!!!!!」

相良「・・・そう、だったのか」

俺は・・・自分に苛立っていた。

魔法使いなのに・・・どうして誰も救えなかつたんだ!?

俺の魔法で、死者を生き返らせる事が出来たじゃないか!!!

ティアナの様に・・・

俺がどうなつても構わないから・・・あいつらを救えば・・・

なのに俺はしなかった・・・そのせいで、多くの人が泣いた。

昨夜、ヴァンとコロナの葬式が行われた。

列には二人の同級生や親しい人間。この事件の関係者など、多くの人が訪れた。

皆が泣いて・・・泣いて・・・泣いた。

二人の死を受け入れなくなくて・・・でも、受け入れないといけなくて・・・

相良「芳乃。お前・・・今、どんな気持ちだ？」

芳乃「え・・・」

俺はそんな質問をした。

すると芳乃は真剣な眼差しで言った。

芳乃「背負っちゃまったもんの為に……もう一度、立ち上がりてえ！！！！」

相良「……そうか」

なんだ、思ったより……心配なさそうだな。

こいつの翼は、相当固く強い者だ。

さて……そんじゃ頼むか。

相良「芳乃。お前に頼みがある」

芳乃「？」

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「・・・」



私は俯きながら、陸宙管理本部の道を歩いていた。

考えるのは、ヴァン君とコロナの事……

二人は死んだ。

死んだ？

どうして？

それは……相良翔と芳乃零二が殺した



ヴィヴィオ「あ……れ？」

気づくと私は訓練室の前にいた。

すると中で戦っている音が聞こえた。

ヴィヴィオ「誰か戦ってるのかな……」

怖る怖る私はその扉を開けた。

ヴィヴィオ「え・・・」

相良「トライアングル・スラッシャー 三つの理りを切り裂く星屑

芳乃「フェンリスヴァイルフ 神討つ拳狼の蒼槍

3色の斬撃と蒼き拳がぶつかり合う。

相良「はあああああああああ……!!」

芳乃「おおおおおおおおお……!!」

そして大きな爆発が起こり、爆風の中から二人が距離をとって現れ

た。

相良「ふう……ここまで動きが読まれるなんてな……」

芳乃「俺の『ウルザブルン対人戦略予知視』は、相手の動きを予測する事が出来るんです。それは相手の事を知れば知るほどその精度は増す！」

相良「なるほどな。つまりお前と長期戦するのは辛いつてことか……」

ヴィヴィオ「お兄ちゃん……零二君……」

私は二人の戦いを見て……思い出してしまった。

回想

相良「行くぞ！ヴァン！！！」

ヴァン「はい！！今日は負けませんよ！！！！！」

ヴィヴィオ「頑張れお兄ちゃん！！！」

コロナ「ヴァン君！！負けないで！！！」

お兄ちゃんとヴァン君はいつも戦っていた。

私とコロナで二人を応援して、二人の戦いを見ていた。

相良・ヴァン「はあああああああああ！！！！！」

二人は大量の汗をかいて、それでも清々しそうな表情で楽しく戦っていた。

ヴィヴィオ「コロナ。悪いけど、今日もお兄ちゃんの勝ちだよ！！！」

コロナ「今日はヴァン君が勝つよ！！！」

そう言って私とコロナがどっちが勝つかで戦ったこともあった。



相良「よしっ！俺の勝ち！！」

ヴァン「ま・・・負けたあ・・・」

ヴィヴィオ「やった！！」

コロナ「ああ・・・負けちゃった」

そう言って私はお兄ちゃんの所に行って、コロナはヴァン君のもとに向かった。

コロナ「大丈夫！？」

ヴァン「コロナ・・・ごめん。負けちゃったよ」





気づくと二人の戦いは終わった。

相良「ふう・・・」

芳乃「やっぱり強い・・・」

相良「お前もな、色々と“視せて貰ったぜ”」

お兄ちゃんが、現在いまでも勝った。

この結果、この勝負、この激しさ・・・

全部・・・ヴァン君がいたときと変わらない・・・

い  
な  
い

で  
も  
・  
・  
・  
も  
じ  
び  
マ  
ン  
君  
は  
・  
・  
・

ヴィヴィオ「う……ああ……ああ……」

相良「！ヴィヴィオ……」

芳乃「お前……」

二人は私に気づいて、私のもとに来た。

ヴィヴィオ「なんで……どうして……」

私は泣いていた。

そして苦しそうにしていた。

相良「ヴィヴィオ!?大丈夫か!?!」

芳乃「怪我してんなら、魔法で治すぜ!?!」

ヴィヴィオ「っだったら……どうして……」

そして私は言った。





そして私は

とつとつ言ってしまった。

ヴィヴィオ「二人が……」

ヴィヴィオ「二人がヴァン君とコロナを殺したんだ!!!!!!」



キオクノナカデ（後書き）

苦しい想い。

それを放つと、誰かを傷つけてしまう。

分かっていた。頭の中でなら、いくらだって分かっている。

けれど爆発してしまう想いがある。

そして爆発したから・・・壊れてしまう。

爆発した悲しみや苦しみが・・・二人を動かす。

新たな風（前書き）

後悔した。

自分の想いを伝えたのに、凄く後悔した。

何でこんなに苦しいんだろう？

ただ、何もスッキリしなくて・・・むしろモヤモヤが増した。

その想いはきつと・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty 始まります。

## 新たな風

相良 Side

相良「ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオが俺たちがヴァン達を殺したと言った。

相良「……確かに、その通りだな」

芳乃「！翔さん！？」

相良「……芳乃は仕方ない。魔力が無かったからな。だが俺は違った。魔力には余裕があつたし、全然動けた」

ヴィヴィオ「だったらどうして助けなかったの！？」

相良「……生きるって事は、いつか死ぬんだ。そして一度死んだ命は復元してはいけない」

ヴィヴィオ「そんな綺麗事はもうウンザリだよ！！！！！！」

相良「！？」

ヴィヴィオの怒りが、俺に向けて放たれた。

ヴィヴィオ「そんな綺麗事、もい十分だよ！！！！そんなもののせいで、ヴァン君とコロナが死んだ！私はそれが許せないの！！！！お兄ちゃん……」

そしてヴィヴィオは言った。

「ヴィヴィオ「お兄ちゃんなんて・・・大っ嫌い」

そう言ってヴィヴィオは訓練室を走り去った。

芳乃「！ヴィヴィオ！！」

芳乃はヴィヴィオを追いかけようとした。

相良「いや、行かなくていい」



芳乃「でもよ！！それでいいのか！？嫌われたままで・・・」

相良「いや、事実だ。もし謝ったとしても、あいつは許してくれないし、納得してくれない」

芳乃「・・・すみません」

相良「何で謝る？お前が謝ることなんてないさ」

芳乃「でも・・・俺が助けられたら・・・こんなことに・・・」

相良「ならないなんて言い切れないさ。もし俺が行って戦ったとしても、ヴァンが死んだかもしれないし、逆に俺達以外の人がいつても同じ結果になったと思うさ。まあ、もし俺達よりしっかりしてる奴がいればどうにかなったかもな」

そう。それは「IF」の話し。

叶いもしない想いと願いだからこそ――IFに逃げ込む。

だから俺達は弱いんだ。

相良「さて、今日の訓練はこのくらいにしとこう。戻るぜ、芳乃」

芳乃「・・・そろそろ、零二って呼んでもいいですよ？」

相良「そうか・・・分かった。そんじゃ零二って呼ぶよ」

そう言って俺と零二は中に戻っていった。

ヴィヴィオ「う……ぐすんっ……ううう……」

私は家に戻ると真っ直ぐ布団の中に潜って泣き出した。

嫌だ……どうして私、あんなこと……お兄ちゃんに言ったの!?

本当に辛いのは、私よりも長く一緒にいたお兄ちゃんに決まってる筈なのに!!!

なのに……なんで……

最低だよ……私……嫌われたかな……

ヴィヴィオ「嫌だ……嫌われたくないよお……」

ヴァン君がいなくなっ……コロナがいなくなっ……そしてお兄ちゃんも……

ヴィヴィオ「嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ!!!!!!嫌だよ……嫌われたくないよお……」

お兄ちゃん……お兄ちゃああん……

ヴィヴィオ「嫌だ・・・嫌わないでえ・・・」

そうして泣きつかれて私は眠りについた。

相良 Side

相良「よし！仕事終わり！！！！」

ギンガ「お疲れ様でした、翔さん」

そう言っつてギンガは俺の席にお茶を置く。

俺はそれを飲んでホツと一息。

相良「ふう……」

ギンガ「今日はどちらに泊まりますか？」

うん……今日は久々に疲れたからな……

相良「……カリム達の所に泊まるよ」

ギンガ「そうですか」

相良「ああ。そんじゃ先に帰るな」

ギンガ「はい。おつかれさまでした」

相良「ただいまあ〜！」

リニス「翔さん！お帰りなさい」

アリシア「お兄ちゃん！お帰り！！！」

アリシアが俺の飛びついてくる。

相良「あはは・・・ただいま。アリシア」

そう言っつて俺達は部屋に入った。

相良「あれ？メガーヌやエリオ達は？」

部屋に入るとカリムとシャツハしかいなかった。

シャツハ「メガーヌさんは火澄さんと右蕪さんと飲みに行くのとです。エリオ達は保護団体のテントで野宿だそうです」

相良「へえ・・・」

メガーヌさんは相変わらずだな・・・つか、父さんと母さんもよくメガーヌさんについていけるな・・・俺なんてドンペリ3杯で乙だぞ？

ま、まあそんなことはさて置いて・・・

相良「カリム。紅茶いれて貰えるか？」

カリム「ええ。もちろん」

そう言うときカリムは台所に立った。

聖王教会のトップの人間が台所に立つ姿を見れるのは俺くらいだな。

そう考えるとこの光景も結構レアなんだよな。

カリム「？どうかしましたか？」

相良「あ、いや・・・綺麗だなんて思ってたさ」

カリム「ふふっ・・・ありがとうございます」

アリシア「ぶう〜！！お兄ちゃん！！私は私であ〜！？」

相良「ああ、はいはい。可愛いよ」

そう言って頭を撫でてやった。

しばらくするとカリムは紅茶をもって俺のもとにくる。

シャツハとリニスとアリシアは先に就寝した。

今は俺とカリムが隣同士に座って紅茶を飲んでいる。

相良「・・・ふう・・・カリムの紅茶、やっぱ落ち着く」



カリム「ありがとうございます。そう言ってもらえると、やりがいがあります」

相良「うん。ほんとにありがとう」

それから、無言の時間が流れた。

俺もカリムも、何もしゃべらず、ただ紅茶が冷めない内に飲んでいただけだった。

そして先に口を開いたのはカリムだった。

カリム「何か・・・あったみたいですね。だから、ここに来たんでしょ？」

相良「・・・まあな。ちょっと、困ったなって・・・」

頬をポリポリ掻きながらそう言った。

カリム「ふふ・・・」

相良「な、何で笑うんだよ!？」

カリム「いえ・・・翔さんから困ったって聞いたの、初めてだったような気がしまして」

相良「ああ・・・そう言えばそうだな」

あまり人に頼ったり相談するのとか好きじゃなくてこういうのも初めてか？

カリム「私でよければ、相談に乗りますよ」

相良「・・・ありがとう」

そう言っただけ俺は今までに起こった事を話した。

ヴィヴィオの事・・・ヴィヴィオの気持ちなら分かる。

相良「あいつはきっと・・・凄い我慢してたんだ。好きだった人が死んでしまったから・・・それでも胸の内に秘めてた想い・・・それを全て、俺達に向けて放った事・・・」

そう・・・あいつは、俺達を恨んでいる訳ではない。

ただ、どこかにぶつけたかっただけなんだ。

失った悲しみを・・・溜めきれない怒りと悲しみを、ただ誰かに、何かにぶつけたかっただけなんだ。

そう思うのは、ヴィヴィオが優しいからだ。

優しくすぎるからこそ、失った事への傷も大きいんだ。

相良「そんなあいつに、俺は何ができるかって・・・わからないんだ」

俺には・・・何もできない。

今の俺は、無力だ。

妹一人、笑顔にできなのだから・・・

カリム「大丈夫ですよ」

相良「え・・・」

カリム「きつと今は、考える時間が必要なんだと思います」

相良「考える・・・時間」

カリム「はい。ヴィヴィオはまだ若いです。ですから、今起こった現実を受け入れるのも速いとは言えません。だから、彼女なりに纏める時間をあげるべきじゃないかと思えます」

時間・・・か。

・・そうだな。

相良「答えを急ぐ必要なんて、無いんだからな」

なんか、少し吹っ切れた気がする。

カリム「はい」

相良「でもま、俺は何かをしないと気が済まないバカだからな」

そう言っつて俺は残った紅茶を一気に飲み込んで立ち上がった。

相良「ありがとうカリム。参考になった。ようはあいつは決断をしないといけないってことだ」

カリム「・・・私、ほんとに役に立てたんですか？」

相良「ああ。十分。カリムに相談して正解だった。ありがとう」

カリム「い、いえ／＼／＼お役に立てたのなら良かったです／＼／＼」

相良「ああ。じゃあな」

そう言っつて俺は外へ出た。

そしてその日の深夜

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「・・・あ」

深夜になって私は目を覚ました。

ヴィヴィオ「泣きつかれて・・・寝ちゃったんだ・・・」

夢から覚めると、やっぱりヴァン君が死んだという結果は変わらない。  
い。

そして・・・お兄ちゃんと喧嘩したことも・・・

ヴィヴィオ「いつまで・・・引きずってるんだろ・・・私・・・」

いつまで否定すれば気が済むんだろ・・・

誰も望んでないよね。

ヴァン君も・・・コロナも・・・

ヒユウウウウウ

ヴィヴィオ「!?!」

突如、風が吹いた。

少し空いた窓からなぜか懐かしい感じの風が吹いた。

・・・風・・・風！？

ヴィヴィオ「ヴァン・・・君・・・」

そう言った時には、私の体は既に動いて、家を飛び出していた。

そして辿り着いたのは近くの公園。

ヴァン君の好きな場所だった芝生のもとに着いた。

そこには一人の男性の後ろ姿と一人の少年と一人の少女の姿があった。

ヴィヴィオ「え……お兄ちゃんに………コロナ………  
ヴァン……君」

3人が、話しをしていた。



相良 Side

相良「・・・よし。始めるか」

ヴァンのお気に入りであった公園の芝生に辿り着いた俺は、深呼吸をして魔力を練り上げた。

相良「

オバー・スター・ロード  
新たな星の誕生

」

相良「

スターダスト  
復元する星

カーテンコール  
蘇りし記憶

」

そう言っていると俺の隣に一人の少年と二人の少女が現れた。

ヴァン「師匠……」

コロナ「あれ……ここは……」

二人は幽霊の様に、実態がしっかりとせず、透けた状態で現れた。

相良「よ。俺の力で一時的にここに呼んだ。生き返った訳じゃないから」

ヴァン「分かってますよ。死者は生き返ってはいけない。それは、この世の理りですから」

二人はその事を理解しているみたいだ。

俺が発動した技は、零二がヴァンと戦った時に発動した『ダ・カ復元する世界』カーテンコール蘇りし記憶』を、俺独自のプログラムで創り出した。

これによって俺の記憶に存在する人間なら誰だつて一時的に復元できる。

相良「まあ二人を呼び出したのは他でもない。ヴィヴィオなんだ」

ヴァン「ああ・・・やっぱり」

コロナ「ヴィヴィオには、悪いことしちゃったもんね」

相良「それでこれからヴィヴィオに会って、二人からヴィヴィオと話しをしてもらいたい。きっとあいつは、それを望んでる」

そう言うと二人は心良く了解してくれた。

相良「さて・・・って・・・本人から来たか」

ヴァン・コロナ「・・・ヴィヴィオ・・・」

後ろを向くと、ヴィヴィオが立っていた。

こんな時間で外でるとは・・・まあいいや。

相良「俺は少し離れたところにいる」

ヴァン「はい。ありがとうございます。師匠」

そう言って俺は3人のもとから離れた。

ヴィヴィオ Side

ヴィヴィオ「あ……ああ……」

ヴァン「泣くなよヴィヴィオ」

コロナ「そうだよ。せつかく少しだけの間戻ってこれたのにい」

ヴィヴィオ「だ……だつでえ……」

私は大泣きして二人に慰められている・・・うん・・・

ヴァン「あはは・・・ごめんなヴィヴィオ。出来ればこんな再会はしたくなかったんだけどな」

ヴィヴィオ「うん・・・ありがとうお・・・」

私は涙を拭き取り、話しを始めた。

コロナ「ヴィヴィオ・・・大丈夫？私達が死んでまだ少ししか経っていないけど、そろそろケジメを付けて欲しいの」

ヴィヴィオ「え・・・」

ケジメ・・・って・・・もしかして・・・

ヴィヴィオ「二人が死んだって、認めないといけないの？」

コロナ「うん。そうだよ」

ヴィヴィオ「・・・そんなこと・・・できん』出来るよ』え・・・」

ヴァン「ヴィヴィオ。お前は師匠の義妹だ。師匠の意思を持つヴィヴィオなら、乗り越えられる」

ヴィヴィオ「でも・・・でもお・・・」

また涙を流してしまふ。

その涙を、ヴァン君が拭いて話した。

ヴァン「ヴィヴィオ。今のヴィヴィオは、もっと強くなれる。それは僕たちを失ったから・・・大切な者を失った人は更に強くなる。それは乗り越える強さを持つからだ。だからヴィヴィオ。もっと強くなるんだ」

ヴィヴィオ「・・・良いの？二人が死んだの認めて・・・二人は平気なの!？」

コロナ「うん。だって、皆がずっと前に進めないなんて嫌だから・・・だから、皆にしっかりと解決させてくれるのがいいの」

ヴァン「大丈夫。だって、皆の中にはいつだって僕たちがいる。だから立ち止まるな」

ヴィヴィオ「・・・ありがとう」

やっと・・・はつきりした。

私は、二人を超えて・・・前に進みたい!!!

ヴァン「・・・新しい風が、吹き始めたな」

ヴィヴィオ「え・・・」

そう言うと無風だった芝生から、新しい風が吹いてきた。

ヴァン「この芝生の上はな、近くの湖から吹く風と反対方向から吹

く風がぶつかり合う場所で、それが原因でここは一時的に無風状態になる。だが、また新たな風は吹き始める。何もかも、止まっていられないように・・・風はまた進む。ヴィヴィオ、お前と言う新たな風の道・・・俺は楽しみにしてる」

コロナ「ふふ・・・私も」

ヴィヴィオ「・・・うん。ありがとう。二人とも」

そう言うと二人は魔力の粒子に変化して徐々にその姿を消し始めた。

ヴィヴィオ「!?!」

ヴァン「はは・・・師匠、無茶し過ぎですよ・・・こんなに魔力消費して・・・」

ヴィヴィオ「どういうこと?」

コロナ「この力は今ここで発動したんだって。翔さん、初めて発動した魔法は使いこなせないから魔力を大量に消費するから、こんな長い間会話できるのは相当頑張ってる証拠なの」

・・・お兄ちゃん・・・またそんな無茶して・・・

ヴァン「さて、それじゃ僕達もそろそろ逝こうかな」



コロナ「うん」

そう言つとヴァン君とコロナは手を繋いで私に言った。

ヴァン「ヴィヴィオ。また・・・ここからが始まりだ。止まるなよ」

コロナ「私達は、いつでも近くにいるから・・・たまたに翔さんの魔法で生き返るしね」

ヴィヴィオ「うん」

ヴァン「だから、さよならは言わない」

ヴァン・コロナ・ヴィヴィオ「またね」

そう言うと二人は魔力の粒子となって姿を消した。

「ヴィヴィオ、ありがとう。ヴァン君。コロナ」

そう言って私はお兄ちゃんのもとに行った。

新たな風（後書き）

またねは、また会う為の約束。

決して別れではない。

また会うことを約束して、彼女はまた歩き出す。

それを後押しするように、彼女の後ろから、懐かしい風が吹く。

番外編 Rewrite + IKA!!? (前書き)

今回はRewrite先生の作品「魔法少女リリカルなのはStriker's」誰もが願いし平和」とのコラボです!!

番外編 Rewrite + IKA!!?

相良「ふう。疲れたあ・・・」

ルチア「お疲れ様」

陸宙管理本部総裁室では総裁と副総裁兼補佐官の二人が仕事を終え、まったりとしていた。

相良「さて・・・これからどうするか・・・!?!」

すると突如アラートが鳴る。

ルチア「事件・・・みたいね」

相良「休んでる時間があったもんじゃねえな」

そう言つて相良とルチアは共に転送魔方陣の場所に向かう。

音使「俺も手伝う!」

相良「助かる!」

途中、音使奏多にも会い共に向かうことになった。

事件が発生したのは別次元の世界。

『過去と変化の世界』と呼ばれる場所だ。



そこに俺、音使、ルチアの3人は着地した。

ルチア「嘘……ここって」

俺達がたどり着いたのは昔、俺達の始まりの場所。

### 機動六課

相良「なるほど、『過去と変化の世界』か……納得だな」

過去のここに来たんだ。

何が変わってるんだ……

それもコミで調べるか……

相良「取り敢えず中に入るか」

ルチア「うん」

音使「分かった」

そう言つて俺達は六課の中に入った。

ルチア「取り敢えずはやての所に行く？」

相良「いや、この時間帯だと皆訓練してるからなのは達の方に行つた方が良さだろう。何か情報があるかもしれない」

音使「なるほどな」

そう言つて訓練場に移動する。

一方その頃、神話の神、ロキ・トール。そしてオーディンの3人は訓練場でのんびり訓練している後輩達の姿を見ていた。

蒼騎「皆頑張り屋だなあ・・・」

アリシア「そうだねえ」

蒼騎「アリシアはのんびりしすぎだ」

アリシア「むう！！大きなお世話だもん！！」

真道「お前らこんなところで何喧嘩してんだよ・・・」

ロキとトールの喧嘩を呆れながら見ているオーディン。

そんな光景をよそに、3人の人影が現れる。

真道・蒼騎「!?!」

二人はとっさに反応し、アリシアをかばう様に立って戦う構えに入

る。

相良「あの……ちょっと良いか？」

真道「？」

これが星屑の騎士とオーディンの出会いだった。

場所は変わって六課のロビーのソファに座りながら話し始めた。

相良「俺は相良翔」

ルチア「私はルチア＝ダルク」

音使「音使奏多だ」

真道「俺は真道創世」

蒼騎「俺は蒼騎零二」

アリシア「私はアリシアだよ！」

相良・ルチア「（あ・・・アリシア!?!）」

この世界でアリシアに会えたことに驚き、更にはトールの名を持つことに二人は驚いていた。

音使「俺達は調査でここにきたんだ」

真道「調査？何の捜査か教えてもらえるのか？」

相良「この世界に強力な魔力反応を感じたんだ。しかも3つ。ま、その理由はもうすでに判明したけどな」

そう。強力な魔力量とは真道達のことである。

相良「初めてだ。そんな変わった魔力。お前らは一体何者なんだ？」

真道「俺達は神話式の魔法使いだ。俺がオーディン。アリシアがトール。蒼騎がロキとなっている」

ルチア「神話式・・・私達の世界じゃ聞かない魔術ね」

音使「別世界では、別の魔法が生まれているってことか・・・」

そんなことを言っていると蒼騎もまた相良達の事を聞いてきた。

蒼騎「俺達も異質だが、お前らもまた異質だろ？他の魔導士とは違うように見えるが？」

相良「俺は『オーバー・スター・ロード新たな星の誕生』って言う新たな魔法を創り出す魔導士なんだ」

ルチア「私は生まれ方が変わってて、闇の力の質が高いの」

音使「俺は特に無いさ。皆より戦闘スキルが高いただけであって別に強い訳ではない」

真道「ほお・・・つまり3人もまた、異質と言うことか？」

相良「そうかもな」

そう言っつて自虐的に笑う真道と相良。

真道「相良翔だったな。気に入った。俺の事は創世って呼んでくれ」

相良「俺の事は翔で構わない。よろしく」

そう言って握手する。

そして何の流れがよく分からないが二人は武器を構えて訓練室にいた。

真道「本気で行くぞ！」

相良「了解！」



ルチア・蒼騎「何で戦うんだよ……」

音使・アリシア「二人らしいよな……」

そして何故かこの4人も息ピッタリである。

そんなこんなで二人は刀を構えて戦いを始めた。

相良「マルス。メルキュール。炎と氷の力を見せるぞ！」

マルス「了解です！」

メルキュール「お任せ下さい！」

そう言って相良は紅の刀と蒼の刀を両手に持って切りかかった。

真道「ほう……2刀流とは珍しい……楽しめそうだ!!」

そう言って真道はその場で構え、カウンターを狙った。

最初から一騎打ちとなる。

相良「

ヴォルカヘル・ブリザード  
氷炎の対する斬撃

」

紅き炎と蒼き氷の斬撃が混ざり合う様にして放たれた。

その相対する二つの斬撃はお互いの存在を消すこともなく、一つの斬撃となる。

真道「

エクスカリバー  
全てを斬り裂く刀

」

蒼き閃光が真道の刀から放たれた。

二つの斬撃と閃光はぶつかり合う。

相良「はああああああああああ！！！」

真道「おおおおおおおおおお！！！」

二人の咆哮と共にその威力をあげる攻撃。

威力は徐々に上がり、更に大きなぶつかり合いになっていった。

蒼騎「すげえな・・・翔つて奴」

アリシア「うん。創ちゃんと互角に戦ってる・・・」

ルチア「それは私達のリーダーだからね」

音使「つか、あいつが負ける姿を想像したこともないな」

二人の驚きとそれを納得する二人。

ルチア「でも、まだ戦いは始まったばかりよ」

相良「行くぜ!!」

真道「ああ!!」

相良は蒼き刀を足に纏わせ、両手で紅き刀を持ち、全身を回転させながら切りかかった。

そして炎が現れ、龍巻の様な斬撃へと変化した。

相良「

火斬紅流真

!!」

真道「

戦死者を選定する者

!!」

巨大な炎の龍巻の様な一閃と3人に分身した真道の斬撃がぶつかり合う。

そして爆発が起こり、爆風の中から距離をとった二人が現れた。

相良「おお・・・強いな」

真道「お前も、予想以上の剣術。お前のような本気で戦える相手に出会えて嬉しい」

相良「そうかよ・・・それじゃ、この一撃で決めるぜ!!」

そう言っただけは刀身に空気中の魔力と自分の魔力を混ぜ合わせて集めた。

真道「なんて魔力量・・・なら俺は・・・」

そう言っただけは武器を刀から剣に変えた。

そして剣に膨大な魔力を集める。

蒼騎・音使「あ、あいつ・・・あれを使うか・・・」

ルチア・アリシア「何この危険な予感!？」

まさに何か不吉な予感がすると想われるほどハモリまくりの4名。

咄嗟にシールドを張ってこの後起るであろう大爆発にそなえた。

相良「スターダスト・ブレイカー!!!!!!」

真道「

穢レイヴァテインれなき炎の聖剣

……!」

二人の放つ二つの閃光は、まるで新たな神話を創るかのように超巨大な爆発を起こす。



相良・真道「はあああああああああああああああああああ……！！！！！！」

二人はそのありったけの魔力でお互いを倒す勢いで放つ。

しばらくして爆発は終わり、煙のなかからは守り切れずに焦げたルチア達とボロボロになって倒れる相良と真道だった。

相良・真道「す、すみませんでした」

ルチア・アリシア「ふん！！二人して私達を殺す気！？」

相良・真道「いえ・・・滅相もございません」

相良と真道は哀れにも正座状態で完全に怒っているルチアとアリシアに絞られていた。

しかも逃げられないように二人から頑丈なバインドをかけられている。

ルチア・アリシア「取り敢えず・・・私の全力、受けてください」

太陽の様な笑でそう言った。

だがそれは死刑執行合図だった。

相良・真道「い、命だけはあああああ!!!!!!!!!!」

ルチア・アリシア「運が良かったら命は残るよ。・・・」

相良・真道「何この間!?!」

そんな二人のツツコミをお構いなしでルチアは左手に漆黒の闇の魔力の球体を。

アリシアは右手に雷の魔力を大量に集めてる。

ルチア・アリシア「二人とも・・・ちょっと痛いので、我慢できる?」

(ニヤリ)「

相良・真道「いえ。無理です(涙)」

ルチア・アリシア「全力全壊!!!!!!!!!!!!!!」

相良・真道「待てええええええええええ!!!!!!全壊の“壊”の字を間違えてる!!!!それはそれで怖いから!!!!!!!!!!」

ルチア「ブラックホールメテオ・ブレイカー!!!!!!!!!!!!!!」

アリシア「

トールハンマー  
総てを射抜く雷光

!!!!!!!!!!!!!!」

二人のツッコミもはや意味も無く、二人の雷とブラックホールによって消し飛ぶ。

相良・真道「ぎゃああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

音使・蒼騎「……」

そして機動六課で、二人の男性の叫び声と二人の女性の清々しい声  
と二人の男性の呆れた声が響くのだった。

さて、そんな時間も程なくして終りを告げる。

相良「そんじゃ俺達は帰るよ。原因の調査は終わったからな」

真道「そうか。ありがとな。楽しかった」

蒼騎「また来いよ。いつでも歓迎だぜ？」

ルチア「ありがと。暇だったらまた来るわ」

アリシア「待ってるよ！」

音使「ああ。のんびり待ってる」

そう言つて3人は飛びだつた。

相良「じゃあな！頑張れよ！素晴らしき3人の神々！」

真道「お前たちもな。星屑の騎士に闇の魔女に音の戦士達よ！」

そう言つて二人の主人公の不思議な出会いはこれで一度終わった。

それからしばらく、真道達は神々の事件を解決させていく。

相良達は死んだ戦友達の想いを背負い、更に翔く。

それでも忘れないことがある。



相良「つつ．．．まだあの時の傷が痛むか．．．」

ルチア「大丈夫？」

相良「ああ。大丈夫だ」

真道「やっぱり無茶しすぎたか・・・」

蒼騎「どうする？戻してやるっか？」

真道「いらないよ。だって・・・」

そして二人は自分たちに出来た掌に出来た切り傷を見ながら言った。

相良・真道「これは、あいつとの絆なんだよ」

そう。この傷があれば、二人はまた会うことになるだろう。

だって想いは、どこか分かる所にあつたりするものなのだから・・・

番外編 パワード・マウンテン+IKA!!? (前書き)

今回はパワード・マウンテン先生の「元神魔王リリカルなのは外伝<sup>デルタソウルタイバース</sup> Episodeシリーズ」とのコラボになります。

正直色々と難しい部分がありましたが、何とか完成させました。

うん……パワード・マウンテン先生の期待通りになったかどうか……

と、取り敢えずどうぞ！

番外編 パワード・マウンテン+IKAII?

相良「はあ・・・やっと仕事終わったあゝ」

ルチア「お疲れ様」

あれ？デジャブ？

いやいやそんなことはない。

俺はいつも通り仕事を終え、ルチアにブラックコーヒーを出してもらった。

ルチアが好きなだけであって決して俺がブラックコーヒーが好きなのわけではないのであしからず。

相良「さて、この後どうすっかなあゝ」

ルチア「私と今日はやるんでしょ／＼／＼」

もじもじしながらそう言うルチア。（あれとはパヤパヤと言えば分かるだろうからそこまで）

相良「なんだったら帰るのめんどいしここでやるか？」

そう言っつてルチアを優しく抱きしめる。

ルチア「ちょ／＼／＼誰かくるかもしれないからあ／＼／＼／＼」

相良「大丈夫。総裁室は俺の許可なしでは誰も入れないからさ。だから、ここでも相手出来るぜ？」

そう言いながらルチアを見つめる。

ルチア「~~~~っ／／／／／」

ルチアは俺にじっと見つめられるのが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして目を逸らした。

ルチア「や、やるなら／／／／い、いえで／／／／／」

小さな声で家だと答えた。

相良「あはは・・・可愛いな。ったく」

ルチア「か、可愛くなんか／／／／んむ!？」

あまりにも可愛かったので唇を奪う。

と言ってもルチアは家でやりたいと希望なのでただ重ねるだけのキスをして離す。

相良「さて、帰るぞ」

ルチア「／／／／／う／／／／／うん／／／／／」

そう言ってルチアはふやけ顔で俺についてきた。



????「へえ〜見せるねえ〜」

相良「!?!」

男性の声が聞こえたのでデバイスを構える。

相良「誰だ?」

姿はまだ隠している。

背後から狙う気が・・・または下から・・・真上って可能性もあるか・・・

・・・あ、いた。

しかも前から堂々と・・・スコープアイの男

リッパ―「ヒヤハハハハハハ!!!!!!」

相良「す、凄い堂々とでてきたな・・・」

リッパ―「俺様はクレイジー・リッパ―様だ!!!!!!」

相良「おお・・・絶滅危惧種の『様だ!!』と言う人種か・・・これは貴重だ」

現在、自分の事を様を付けてなんの恥じらいもなく言う奴なんてそうはいない。

・・・いや、はやてのマテリアルは自分の事を「王」って名乗ってたな・・・

にしても自分の名前に様は付けないよな・・・うん。付けないよ今どき。

相良「古いって」

リッパ―「今心で思った事がとうとう口で出たな!？」

相良「あ……しまった……」 棒読み

リップパー「き、貴様あ……」

なんか怒ってる。まあいいや。

相良「お前……何しにここに来た？別に俺と俺の女とのイベント  
シーンを見に来たって訳じゃねえだろ？」

リップパー「あゝそうだな」

そう言っ出て出っ歯……じゃなくてリップパーは俺に告げる。

リップパー「待て。俺様の事を今「出っ歯」って言いやがったな？」

相良「あ……しまったあ」 棒読み

リップパー「(俺……こんな奴と戦うのかあああああ!?)」

さて、おふざけもこの辺にしてそろそろ真面目に話しますか……

相良「ちゃんと話せよ。俺と俺ルチアの女に何の用かをな」

そう聞くとリップパーはそれに答えた。

リップパー「俺様と一緒に逝かねえか？」

相良「……」

軽く殺す気満々に見えるな……それなりに殺気もある。

何か・・・新手のギャングみたいだな・・・

相良「取り敢えず断る。まだ死ねないんでね」

リッパー「まゝ、そう言わずに・・・」

相良「な!?!」

奴は既に俺の肩の前にいた。

相良「くっ!?!?!」

俺は瞬時に奴と距離を置く。

相良「召喚魔法『スターライト・ロード星の導き』」

そう言っただ俺はルチアを別の場所に転送した。

召喚魔法を逆向きにして使ったってことだ。

俺の位置が呼ぶ場所とするなら、それを変えるだけでいい。

リッパー「あゝあ、逃げられちゃったなあ・・・」

相良「知らん。お前に俺の女を触られるのは、嫌なんでな!?!?!」

そう言っただ俺はデバイスを再び構えた。

リッパ―「まあいい。どうせてめ―は、俺にぶっ殺されるんだからなあ……」

相良「!？」

ゾクツと、自分に鳥肌が立つのが分かる。

俺は目の前の敵を恐れている。

相良「……でもま、逃げねえし……行くか!!!!」

奴はキーホルダーをだす。

俺は二つの勾玉をだす。

リッパ―「D・アームズ」

相良「マルス・メルキュール」

相良・リッパ―「セット・アップ! ! ! ! !」

そして俺と出っ歯・・・じゃなくてリッパーとの戦いが始まった。

相良「ふう……面倒い!!!!」

リッパー「おらおら!!」

そう言っつて奴は弾丸を何発も放っつてくる。

俺はそれを紅と蒼の刀で切り裂く。

リッパー「おらどうした!? そんなんじゃお前が先に逝くぜ!?!」

相良「……わっつてるよ」

そう。刀で切り裂くという行動に対し、奴はただ撃つと言っつことだけだ  
けで済む。

このままじゃ俺の体力が持つてかれて先にやられる。

しかも刀だから近づかないと奴に攻撃ができない。



でもこいつの弾丸・・・それなりに威力がある。

相良「・・・でもま、“慣れてる”」

そう言っただけ俺は左手に持っている紅い刀だけで弾丸を切り裂いた。

リッパ―「!?!」

そして俺は右手の刀に魔力を込める。

リッパ―「無駄だぜ!!!その距離で刀が当たるわけねえじゃねえか!!!ばっかじゃねえの!?!」

うわ・・・散々な言われよう・・・

相良「うっさい出っ歯!。確かに刀は届かねえよ。でもな、斬撃は届くよ」

そう言っただけ俺は右手の刀を左から右に力強く振った。

相良」

『スターダスト・星屑果てぬ蒼き聖約ティルウイング』

」

リッパ―「ぐあっ!？」

蒼き閃光を纏った一閃は約10mもの距離があった奴を切り裂いた。

相良「浅いか・・・」

奴は右腕が切り裂かれた。

だが奴は俺の攻撃を恐れてかまたは対処するためか、体を後ろに一歩分程下げて致命傷を外させた。

リッパ―「ちよっと油断しちゃったかなあ」

って・・・全然余裕そうなのは何故え・・・

リッ  
パー  
」

スト  
ライ  
ク・  
ア  
ク  
セ  
ラ  
レ  
ー  
シ  
ョ  
ン

」

相良「おいおい・・・お前・・・利き手逆か？」

奴の左手に着いていた武器は右手に装着され、俺に突進してきた。

相良「へえ・・・突っ込んで来るか・・・なら」

俺は2本の刀を交互に逆手にもって鞘にしまい、2刀流の抜刀術の構えをとった。

リップパー「おらあああ！！！！」

相良「こころ紅蒼技・ぎんしょう銀翔抜刀はつとう」

奴の一撃と俺の二つの抜刀術がぶつかり合う。

相良「ふう・・・」

リップパー「やるじゃねえか！！！！」

何と相打ち。新技なのにな・・・

リッ  
パー  
コ

シュー  
ティ  
ング  
・ア  
クセ  
レラ  
レー  
シ  
ョ  
ン

相良「な・・・!?!」

こいつ、また武器を左手に付けた。

しかも次はレーザーキャノンだと!?

相良「間に合わねえ!!」

今からあのレーザーキャノンを相殺する技を出すことができねえ!!

相良「でも・・・諦めるか!!!!!!!!」

俺は二つの刀に間に合うだけ大量の魔力を込める。

リップー「無駄無駄無駄!!!!!!アマチャンなんだよおおおおお  
おおお!!!!!!」





☐

ハンディンググバスター

☐

相良「!?!」

リップパー「何!?!」

突如、俺を手助けするかのような弾丸が俺の一閃と混ざりながら放たれた。

相良「行ける……はあああああああああああ!!!!!!」

リップパー「つく!?!」

そして俺は押し返し、奴の目の前で爆発した。

相良「はあ、はあ、はあ・・・危なかったあ・・・」

俺は刀をしまい、俺を助けた弾丸を放った人の方を向く。

場所は俺の後ろから約4m。

相良「ありがとう。助かった」

そこにいたのは一人の女だった。

???「ううん。リッパーは私が追いかけてきた敵だし」

相良「そ、そうなんだ。俺は相良翔」

日向「私は日向。早乙女日向だよ。よろしくね」

そう言っつて俺と彼女の挨拶は終わる。

相良「で、リッパーって何者？」

既に心配がない。

逃げたな・・・

日向「私達の世界でよく邪魔する奴って言ったらわかるかな？」

相良「なるほど……って、『私達の世界』？」

日向「あ〜えっと……私はリッパーを追いかけてたらこの世界にいたんです」

相良「ほう……次元漂流者……か何かかな？」

日向「多分……はい」

でも記憶は失って無いみたいだな……まあそれはそれでラッキーか。

相良「本当にありがとう。助かったよ」

日向「うん。それじゃ私急ぐから行くね？」

相良「ああ。またいつでもここに来ていいよ。総裁の俺が許すから」

そう言つと彼女はくすくすと笑いながら答えた。

日向「はい。またそんな日があったらまた来ます」

そう言つて彼女は走つてその場から消えた。

相良「さて・・・帰るかぁ・・・」

不思議な戦いをする人たちに出会った気がする・・・

そう言っつて俺は家に帰るのだった。

??「いやいやいやいやちよっち待って!?!?!?!?!」

相良「ん?」

何故か背後からツツコミを入れてくる男。

相良「あ・・・えと、誰?」

ミヤ「シシロウキ・ミヤだ!?!?!」

相良「誰だ!?!?!」

ミヤ「いや・・・大声で返されても・・・」

いきなり現れ、いきなりorzになっている……

ミヤ「何で分からないの……一応主人公なのに……」

相良「いや、この小説の主人公は俺だ」

そうなのだ。

何だかんだでこの小説、Vividのくせして主人公が俺とヴァンなのだ。

まあヴァンは現在乙してますので登場しませんが、俺とヴァンが主人公なのです！！

相良「そんなことは良い。えっと……取り敢えずミヤ。何の用だ？ 出っ歯ーなら先ほど逃げたぞ？」

ミヤ「いや、出っ歯ーに用があるわけじゃなくてね、この世界の主人公のお前に興味があったんだ」

相良「俺に？」

ミヤ「まあねえ〜」

相良「それはなんとまあ……主人公が主人公に出会いたいって……」

聞いたこと無いな……変わってる奴だな。

・・・あれ？案外普通の奴って日向だけか？

ミヤ「まあとにかく出会えて良かったよぉ～サインして！」

相良「え・・・あ、まあ・・・ああ」

どこから取り出したか不明だが色紙とサインペンを出された。

俺は過去に何度もサインを求められた事があったのでそれなりのサインはできる。

相良「えっと・・・なんて書けばいい？」

ミヤ「『シシロウキ・ミヤ&相良翔夢のコラボ？』でよろしく！！」

相良「あ・・・っと、了解」

？マークに何か感じる・・・まさかそつちの気が・・・いや、それは失礼だな。

相良「はい。どうぞ」

そう言っただけ俺は別作品の主人公にサインした色紙を渡した。

ミヤ「それじゃ次は写真撮ろ！！！！！！」

またどこからか取り出したカメラ。

相良「まあここまで来たら最後まで付き合っよ」



別に悪い奴じゃなさそうだしな。

そう思い、俺はミヤと写真を取る。

ミヤ「はいチーズ!!」

パシャッとシャッターの音。

そしてカメラからとった写真が出てくる……って古いカメラだな……  
……画質いいのに……

ミヤ「はいこれ!あげる!!」

そう言っただけにその写真を渡す。

相良「え……良いのか?」

ミヤ「サイン貰ったから、後は翔さんに共演した記念の物と思って思  
って!!」

ああなるほど……

相良「ありがと。大切にする」

ミヤ「そつれじゃ!!!」

そう言つてミヤも消えた。

相良「・・・なんか・・・色々あつたなあ・・・」

まあ短い人生だ。これくらいの変つた人生の方が面白いよな。

相良「つて・・・何かそんなことを教わつてるし・・・」

苦笑いしながらミヤから貰つた写真を見ながら家に向かった。

相良「……あれ？リッパーに日向……」

俺とミヤが写っている写真をよく見ると奥にリッパーと日向がピースして写っていた。

……ミヤの奴、俺に皆を写っているのを見つけたから俺に渡したのか。

本当に面白いやつだ。

そんなことを考え、俺は転送魔法陣に乗って家に転送された。



そんな光景を、ミヤ達が写っている写真が見つめていた。

そんな中ミヤはというと、機動六課でスバル達に自慢ごとをしていた。

ミヤ「見よ!!なんとあの相良翔のサインを手に入れたぞ!!!」

スバル・エリオ「な・・・なんだってええええええええ!!?!?!?!?!?!」

ティアナ・キャラ「は・・・はあ・・・」

スバルとエリオの喜びようにティアナとキャラは呆れていた。

ミヤ「喜んでくれたかなあ・・・取り敢えず皆が写ってる写真を

上げたけど・・・あの人なら気づいてるよね」

そう言ってミヤは自分の部屋にそのサイン色紙を見やすい位置に置く。

二人が出会った証がここにあるのなら、二人はまた出会うだろう。

日向も・・・リッパも・・・

またいつか、いつになるかわからないけど・・・また再会できるだろう。



番外編 パワード・マウンテン+IKA#? (後書き)

IKA「と・・・取り敢えずどうぞじょっ。」

ルチア「10点」

ヴァン「5点」

音使「5点」

谷島「2点」

IKA「厳し!？」

相良「0点」

IKA「もはや点数無し!？」

コラボ再び！ 白き修羅＋I K A ！！（前書き）

今回は前回もやりました白き修羅先生の『魔法少女リリカルなのは』、『紅き修羅の力を持つ者』とのコラボ再び。今回は龍牙＋相良＋ヴァンの組み合わせになると思います。

コラボ再び！ 白き修羅 + IKA ！！

No Side

神様「ということで再び『魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity』とコラボしてあっちの世界に行ってもらおうわよ！！」

龍牙「ちよつとまで！！！何か懐かしいなって思うが何故またお前なんだ！？」

神様「そりゃ・・・神様だから？」

龍牙「こいつ・・・んまあ良いや。今回はお前の言うことを聞く。  
(ヴァンに久しぶりに会えるしな。約束通り、記憶も取り戻したし・・・会う権利はあるだろ)」

だが、そんな考えもすぐに崩壊した。

神様「あ、一応言っとくけどヴァン＝スカイはとっくに死んだわよ？」

龍牙「・・・は！？」

龍牙は血が引いていく感覚が自分でも分かるくらいだった。

顔は青ざめ、絶望したような表情だった。

龍牙「あ……あいつが……死んだ……だと？」

龍牙は想う。

あいつのおかげで記憶を取り戻すことへの決意がついた。

なのに俺は、あいつに何も出来なかった。

あいつに助けられただけで、俺は何も……何も出来なかった。

あいつに……ありがとうも言えずに、さよならも聞かずに別れか！？

龍牙「……つぎけんな……！……ふぎけんな……！……どうしてそんなことに！？」

神様「それはあっちの世界に行つて主人公の相良翔に聞きなさい。  
わかるわよ」

そして再び龍牙は考える。

龍牙「（確かに……俺は、親友ウァンの死の理由を知りたい……）……  
分かった」

神様「それじゃ送るわよ……！」

そう言つて龍牙の足元に穴があく。

龍牙「……」

彼は無言で落下していく。

彼の中で……燃え上がる何かを抑えきれずに……

その頃、陸宙管理本部総裁の相良翔は音使奏多と谷島芳樹の2名と共にヴァン＝スカイの墓場に来ていた。

墓は陸宙管理本部に作られている宇宙船にある墓。

相良翔を前にそして二人は3角形の形で並んでヴァンの墓を見ていた。

その右隣にはコロナ・ティミルの墓もある。

相良「速いもんだな。ヴァンが死んでもう一週間だ」

音使「コロナとヴァン・・・幸せに死ねたんだよな？」

谷島「さあな？あいつらに聞かねえと分かんねえよ」

そんなことを言いながらも3人は二人の死を悲しんだ。

別に泣いた訳ではないが、心に深い傷を負った。

だが3人は既に決断している。

前を向くと・・・

相良「さて、長居したら二人のイチャイチャを邪魔しちゃうから行くぞ」

そう言うと二人は苦笑いしながらその場を後にした。

??「待てよ！」

相良「マルス!!!」

相良は背後から恐ろしいまでの何かを纏った拳を放つ男の拳を紅い勾玉のマルスを右手に纏わせ、そこに魔力を集め、炎の強力な盾を作って防いだ。

相良「ぐう!?!」

音使・谷島「翔!?!」

二人は遅れて二人の戦いに気づく。

そして谷島はデザート・イーグルを出す。

音使は剣を出して構える。

??「つち!」



そして彼は距離をとり、3人を睨みつける。

音使「誰だ!？」

谷島「何で俺と音使は気づけなかったんだ!？」

相良「そりゃそうだ。あいつの使っている能力は魔力ではなく、「  
覇気」って言われるものだからな」

現れた人物は、谷島も音使も知っている人物。

だがそれよりも相良は気づき、対応した。

谷島「・・・翔。お前どうしてそれを知ってるんだ?あいつは・・・  
どう見ても・・・」

谷島・音使「・・・龍牙」

龍牙「・・・」

そこにいたのは、怒りに満ちた龍牙だった。

相良「まあな。（ヴァンの記憶の中の情報を貰ったからな）」

相良は全身に紅い炎を纏い、龍牙と睨みあっていた。

音使「・・・翔。俺達は離れてた方が良いか？」

相良「ああ。多分龍牙は俺に用があるはずだ。だから頼む」

谷島「・・・分かった」

そう言うと谷島と音使は武器をしまった。

相良「初めまして・・・ヴァンの師匠の相良翔だ」

龍牙「・・・真崎龍牙だ」

睨みつけながらもそう答えた。

相良「聞きたいことは分かってる。ヴァンのことだろ？」

龍牙「・・・」

相良「ヴァンは・・・事件の中で色々あつて戦つてな。最期は最愛の彼女と一緒に逝つたよ・・・!？」

最後まで言い切る前に相良は龍牙に殴られ、倒れる瞬間に胸ぐらをつかまれる。

龍牙「俺が聞きたいのはそんなことじゃない!!なんで師匠のあんたがヴァンを助けられなかった!?!あんた師匠なんだろ!?!弟子くらい・・・守つて見せるよ!?!?!?!」

相良「・・・」

相良は何も言い返せない。

龍牙の言うとおりなのだ。

確かに師匠なら、最後まで責任もつて弟子を守つてやらないといけない。

相良自身もそれが分かっているからこそ、龍牙の発言を否定できないんだ。

龍牙「あんたが・・・あんたがヴァンを殺したんだ!?!?!?!」

相良「・・・そうだな」『違う!?!?!?!』!?!?」

その瞬間、相良の紅と蒼の勾玉が輝き出した。

「  
マルス・メルキュール」

『  
スターダスト  
復元する星』

『  
カーテンコール  
蘇りし記憶』

相良「な・・・!？」

相良の持つ技を相良のデバイスが強制的に発動した。

????「龍牙。止める」

龍牙「な!？」

そして二人の間に現れたのは、死んだはずのヴァン＝スカイだった。

ヴァン「龍牙。久しぶりだな」

龍牙「ヴァン・・・どうして・・・」

相良「おい、マルス。メルキュール。何で俺の魔法を強制発動させたんだ……」

マルス「このままでは平行線で終わるか、主が恨まれて終わるだけですから」

メルキュール「それに主はこのまま使うつもりはなかったでしょう」

相良「……まったく、余計な事をしゃがって……ま、ありがとな」

そう言つて相良はデバイスを待機モードにすると魔力をヴァンの出現という結果に注ぎ込むことに集中した。

そして3人の話は始まった。

ヴァン「久しぶり。その様子だと、記憶が戻ったみたいだな」

龍牙「ああ。お陰様だな。あの時は、ありがとな」

ヴァン「いや、龍牙の役に立てたのならそれで十分だ」

龍牙「そうか……」

言い終えると3人は墓から移動してフリースペースに移動してソファに座つて話を始めた。

相良「俺の能力『スターダスト復元する星 カーテンコール蘇りし記憶』は記憶に存在する人を一定の範囲内で復元することができるんだ。そして今ここにいるヴァンは死んだヴァン本人で俺の能力であの世から呼び出したんだ」

龍牙「おいおい……神の領域にまで干渉するってお前ただけチートなんだよ……」

あまり人のことは言えないと皆が思ったがそれはそれで言わないで置いた。

相良「まあ軽い説明はこれくらいにして、積もる話があるだろ？俺は離れてるから好きなだけ話してていいぞ」

そう言うと相良は席から立ち上がってその場を離れた。



ヴァン「・・・それで、記憶はどこまで取り戻せたんだ？」

龍牙「・・・最初に戻ったかな」

最初・・・それはつまり、はやてや守護騎士達と出会う前のなのは達との記憶だった。

ヴァン「・・・そうか」

そのことに、ヴァンは何も言い返さない。

龍牙「ま、無くなったのは俺の記憶だけであって、他は全部取り戻したし、また新たに得た。だから別に後悔も何もしてない」

すっきりとした笑顔でそう答える龍牙。

ヴァンはその笑顔を見て笑で応える。

ヴァン「そうか。それが・・・龍牙の本当の笑顔か」

龍牙「本当の笑顔？」

ヴァン「記憶をなくした人は、そんな笑顔はできない。記憶は、人生の中で命とほぼ同等・・・いや、それ以上の価値がある。それを失った人は、笑顔にならない。でも龍牙は恵まれてるから、そんな何も変わらない笑顔でいられるんだ」

龍牙「恵まれてる・・・か（確かに・・・失った過去があつたわりには、笑顔で居る時間の方が多いような気がする・・・それはやつ

ぱり・・・」

そして龍牙が思い出すのは、名前で呼んでくれる仲間達の姿。

いつの間にか名前でも呼んでくれる、彼女達の人数が増えていった。

そしていつの間にか、両親を失った悲しみの傷すらも・・・忘れはしないが、乗り越えられた。

それはやっぱり全て・・・目の前にいるヴァンも含めて、なのは達のおかげなのだろうと龍牙は改めて思うのだった。

龍牙「これからは、また色々な記憶おもいでを作っていくさ」

ヴァン「ああ。あの世で応援してるよ」

龍牙「それはちょっと勘弁。オバケ嫌いな奴がいるんだ」

ヴァン「俺はオバケ扱いか!？」

龍牙「事実だろ」

ヴァン「そ・・・そこまで言うなよ・・・orz」

凹んでしまうヴァン。

龍牙「くすっ・・・」

笑うのを必死に堪える龍牙だった。

龍牙「それで、俺の事はいいとして・・・お前のことだ」

ヴァン「！」

ヴァンはドキッと反応した。

龍牙「俺はヴァンが戦いで負けたなんて思わない。だからこそ、ヴァンが死んだ理由を教えて欲しい」

ヴァン「・・・分かった」

そしてヴァンは自分の死の原因を話した。

ヴァンは妹に再会する。

妹から教えられる、妹とヴァンの過去。

そして告げられる、ヴァンの両親の死の理由。

それは相良翔だったと言われ、ヴァンは相良翔を殺す為に動き出す。

だがそれを止めるべく、ヴァンの彼女のコロナ、ヴァンの幼馴染の

リオナ、ヴァンの戦友の零二の3人と戦う。

ヴァンは戦友である零二と激しい激闘の末、コロナと共に暴発した自らの魔力に飲み込まれて死に至った。

そして本当の真実は、ヴァンの両親を殺したのは相良翔では無く、相良翔のマテリアルのオーデインと名乗る男だった。

ヴァン「ま、こんな感じだ」

龍牙「……ってことは、ヴァンもまた……両親を失ったのか」

ヴァン「そうなるな。まあ妹はまだ入院してるけどな」

龍牙はヴァンの明かされた事実にはショックを受けた。

それは、自分自身も理由は違えど両親を失っているから。

その悲しみも苦しみも理解できる人だからこそ……ヴァンの傷も分かるのだ。

龍牙「お前は……失って辛くないか？」

ヴァン「辛くない・・・かな？」

即答だった。答え方が若干曖昧だが、即答だった。

龍牙「・・・本当か？」

ヴァン「ああ。実は、両親と生きた時間の記憶・・・ほとんどないまま死んじゃってな。おかげさまで両親といた幸せだったかもしれない時間を覚えずにあの世に逝っちゃったわけよ」

自虐的な笑でそう答えるヴァン。

龍牙「そうか・・・何かあったら相談してくれ」

ヴァン「どうした？そんなに優しくして」

そう。龍牙の態度は余りにも優しすぎる。

龍牙「いや、寂しくないかって思ってな」

そう。家族とは「父・母・兄妹」の存在で成り立つものだ。

だが龍牙やヴァンはその中で自分を生んだ母と父を同時に失った。

残された悲しみと寂しさが龍牙にはあったからこそ、それがヴァンにもあるのではないかと不安だったのだ。

だがヴァンは笑顔で応える。

ヴァン「いや、僕は全く寂しくない」

龍牙「!?!」

何の迷いもない言葉で、何の曇りもない澄んだ瞳で答えた。

ヴァン「僕さ、大切な彼女と一緒に死ねたんだよ」

龍牙「・・・」

ヴァン「きつと両親は最期は最期で不幸じゃなかったんだと思うん

だ。残していったものへの後悔はあるけど、隣には好きで大切な人がいる。それだけで幸せなんだと思う」

龍牙「だからヴァンも・・・幸せってことか？」

そう聞くとヴァンは無言で頷く。

それが、ヴァンにとっての幸せだった。

ヴァンの求める幸せとは周りからしたら余りにも小さいものなのかもしれない。

人は幸せと言えば「お金」や「大豪邸」や「王様」や「ハーレム」とか様々な大きなものだ。

だがヴァンの求めたのはただ「好きな人一人といること」だった。

たった一人だ。

そのたった一人で彼は幸せになったのだ。

龍牙「お前、もつと貪欲になっても良いんじゃないか？誰もお前を責めることは無いはずだ」

そう。これだけ不幸な人生でもたった一人の幸せしか欲しない彼はどこまで不幸なのだろうと龍牙は思う。

ヴァンの様な人にこそ、最大の幸せを与えるべきなのだと思うからだ。



だがヴァンは首を横に振る。

ヴァン「僕は……たった一人……大好きな彼女が僕の隣で笑顔でいてくれるだけで幸せなんだ。それに、僕は色んな人と出会えたんだ。龍牙。お前も含めて……師匠やリオナ、ヴィヴィオに音使さん……谷島さん……知らない内に僕の世界は皆によって広がっていった」

龍牙「……ふ……そうか」

龍牙は思う。

龍牙「（こいつの心配するだけで、こんなに無駄だったなあ〜って思うくらい疲れるなんてな。結局こいつは謙虚過ぎて、優し過ぎて、正しすぎる。だからこそその答え……か）」

そして龍牙は笑で言う。

龍牙「だったら、あの世で見てるよ。まだまだ幸せはいっぱいあるってことをな」

ヴァン「ああ。そうだな。龍牙や師匠達の幸せを……見届けてみるのも良いな」

そして　　ヴァンは徐々に魔力の粒子になっていく。

龍牙「!?!?ヴァン!?!?」

ヴァン「あ、師匠の魔力が限界なんだ。僕がここにいられるのは師匠が僕を魔力で復元しているからなんだ。魔力を解けば僕は消滅する」

龍牙「そうか・・・翔さんに言ってくれ。さっきはすまなかった」

ヴァン「分かった。・・・ってことは、龍牙も消えるんだな」

そう言うと龍牙もまた、魔力の粒子となってきた。

龍牙「ま、ここにはもう用は無くなったしな」

ヴァン「また来いよ。いつだって僕らは待ってる」

龍牙「そうだなあ。そんなときはなのは達と来るかな」

ヴァン「ああ・・・小学生の頃のなのはさん達には興味あるな・・・」

それを聞いた龍牙はニヤリと笑いながらいった。

龍牙「おやおやヴァン君はコロナと言う彼女をよそに9歳の頃のなのは達に浮気かな??？」

ヴァン「ち、違う!!!!!!どんな人たちが気になるだけだ!!!!!!」

「!!」

龍牙「焦って言うところを見ると、少しはその気があるってことかな？」

ヴァン「違い〜し!!!何言ってるんだし!?!ありえねえし!?!!!」

龍牙は新しい玩具を見つけたかのように楽しんでた。

龍牙「・・・ま、これならまたここに来るのもありかな」

ヴァン「やっぱり来んな!?!」

龍牙「はっはっはあ〜考えておこっつ」

ヴァン「こ・・・こいつ・・・あの世で呪ってやるう!?!!!」

龍牙「はは・・・」

そしてお互いに別れをした。

ヴァン「それじゃ、またな」

龍牙「ああ。また」

そう言って二人は粒子となって天に帰った。

相良「はあ、はあ、はあ……ふう……」

音使「大丈夫か？」

相良「あ、ああ」

二人の挨拶が最後まで出来て良かった……

そして龍牙はなのは達のもとに向かう。

なのは「どこ行ってたの？」

龍牙「ちよつと幽霊にあつてきた」

なのは・フェイト・はやて「え・・・」

そう言つとなのはとフェイトの背後から風が吹く。

なのは・フェイト・はやて「ぎゃあああああ！……！……！……！……！……！」







そんな下らないオヤジギャグが海鳴に響きわたるのだった。

めでたしめでたし。

コラボ再び！ 白き修羅+IKA!!！（後書き）

相良「最後が龍牙の叫び声って・・・」

ヴァン「はっはっは。僕の呪いです（´・`・´）（´・`・´）」

IKA「今回もコラボありがとうございました白き修羅先生!!!」

失う怖さ(前書き)

二人の死を乗り越えて行く皆。

だが、それでも・・・

失う事への恐怖がある人がいる。

それはその人の事が・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
ty } 始まります。

## 失う怖さ

相良 Side

ヴァンとコロナの死から一週間。

それまでの間は意外にも特に大きな事件は無かった。

まるで俺達の心の準備と決断を待っているかのように・・・

そしてこの日、俺は皆を集めた。

理由は、まだ決断出来ていない奴がまだいるから、そのために俺は一度みんなを集めた。

相良「皆、聞いてくれ。今日からまた皆に休暇を与えたいと思う」

全員「!?!」

もちろん皆驚く。

音使「良いのか?“こんな時”に・・・」

相良「こんな時だからこそ、今のみんなには休む時間・・・考える時間が必要だと思う。今一度自分を見つめ直す・・・時間がな」

そう言つと何人かは考え始める。

すでに考えが決まっている人は問題無さそうだ。

相良「休暇期間は自由だ。自らもう動けるつて奴は俺に声をかける。まだつて奴は自分の中で全てが解決したらまた声をかけてくれ」

全員「はい！」

そう言つて解散される。

ルチア「翔。私はいつでも出れるよ。もちろん今日でも」

先に声をかけてきたのはルチアとなのはとフェイトだった。

フェイト「私も手伝えるよ」

なのは「私も」

相良「いや、せめて明後日までは休んでくれ。3人は働き詰めだったからな、明後日からまた手伝ってくれ」

そう言つと3人は澁々了解してくれた。

リオナ・芳乃「翔さん」

ヴィヴィオ「お兄ちゃん」

次にこの3人。

相良「若い奴の方が決断速いんだな。まあ良いや。3人も仕事は明後日からだ。それまではコンディションを最高にする努力をしてくれ」

リオナ・芳乃「はい」

ヴィヴィオ「うん。分かった」

その後も何名かは俺に声をかけてくれた。

今動ける人たちが仕事を始めるのは明後日。

それまでに更に動ける人が増えると良いけど・・・

エトワール「あの、ご主人様」

相良「ん？どうしたエトワ？」



後ろから袖の端を引っ張って声をかけてきたまるで病弱な女の子の  
ような子はエトワール。

エトワール「あの、今から良いですか？」

相良「ああ。別に構わないよ」

そう言っただけ俺はエトワに連れられて行った。

谷島 Side

谷島「ふう。休みかあ〜」

相良の判断は正しいと思う。

何だかんだで皆若いから、ヴァンとコロナの死が重い現実になっているだろうしな。

ここで仕事詰めにしたら多分もたない。

まあ俺はそんなことで苦しんだりしないから明後日から仕事だな。

と考えていると俺の部屋にノックがかかる。

谷島「おう。誰だ？」

白雪「わ、私」

白雪・・・何の用だ？

しかもまた巫女服での登場。

取り敢えず俺は扉を開けて白雪を中に上がらせた。

谷島「お茶持ってくるからちょっと待ってる」

白雪「あ、お構いなく・・・」

谷島「いや、これはマナーだからな」

そう言っ隣の台所でお茶をコップに入れる。

そして持って白雪の前に置く。

白雪「ありがとう」

そう言っってお茶を一杯飲んで話を始めた。

谷島「それで何の用だ？」

そう聞くと白雪は俯きながらもじもじでした。

まあいつもの事なんだが・・・これだと少し待ち時間がある。

そんな時は俺が勝手に話題を出す。

谷島「それで、白雪はすぐにまた戦えるのか？」

白雪「え……っと……その……ごめんなさい。まだなんです」

理由は家庭の教育事情だろうが、白雪はよく敬語になる。

もう何年もの付き合いなんだからいい加減タメ口でも良いと思うの  
だが……

谷島「なんだ？悩みでもあるのか？」

白雪「えっと、その……私の中でちょっと迷っちゃって……」

……迷いか。やっぱ白雪なりに悩みつてあるんだなあ。

谷島「俺でよければ話し聞いてあげるけど？」

白雪「だ、大丈夫！！自分で解決させるから！！！！」

慌ててそう言った。

ほんと、周りを巻き込むの嫌いな性格も治らないかな……心配で  
しょうがないぜ。

谷島「……ま、いつでも相談に乗るからな。こんなときだ、悩み  
を一人で抱え込むのは良くないからな」

白雪「う……うん。そ、それじゃ……その……一つだけ  
……」

谷島「なんだ？言ってみろ」

そう言つと白雪はまたもじもじでした。

しかも頬が何故か妙に赤い。

巫女服でそんなことすると妙に色っぽく見えるな・・・

白雪「あ、あの、その、わ、わわ、わ、わ、」

な・・・なんだこの片言は!?

白雪「わた、わたし、私を警護してください!!!!!!」

何か進化したポケ○ンの名前みたいだな・・・って!?

谷島「け、警護!?俺が、お前をか!?!」

白雪「は、はい//////」

何が恥ずかしいのか不明だが顔が真っ赤である。

といつか俺が白雪の警護か・・・

白雪「お、お願いします、24時間体制で私の警護////////」

・・・ま、逆にこんなときだから、白雪の安全の確保も大切か・・・

谷島「良いぜ。白雪の依頼、俺が引き受けた」

そう言うと白雪は花が咲いた様に笑顔になった。

白雪「ありがとう！芳ちゃん！！」

谷島「っ・・・」

一瞬、白雪の笑顔にドキツとしてしまった。

それがバレない様に俺は話しを進める。

谷島「24時間体制となると、白雪の部屋に俺が泊まるか白雪が俺の部屋に泊まるかだけど？」

白雪「で、出来れば芳ちゃんの部屋で／＼／＼」

確かに、白雪自身マルチの部屋に何か仕掛けられている可能性も高いし、狙われる時は基本的に部屋だしな。

谷島「了解。基本的には衣食住の大半を俺と行うけど、期間はいつまでだ？」

そう。流石に警護と言えど期間を決めておかないといけない。



く。それで良いか？」

白雪「うん／＼／＼お願いします／＼／＼」

と言うことでなんかんやで俺と白雪のある意味同居が始まる事になった。

だが、これはこれでありがたい事もある。





白雪「そ、そそそ、そんなことないよ／＼／＼／＼」

何恥ずかしがってるのやら。

谷島「でも……ま、そんな白雪が俺の中では……憧れだったんだけどな」

白雪「え……」

俺はそう言うところ飯を食べ終え、その場を後にする。

谷島「ご馳走様。美味しかったよ。先に風呂貰う」

そう言って風呂場に向かった。

谷島「ふう・・・生き返る」

湯に浸かると俺は盛大に溜息する。

谷島「やっぱり白雪はスゲーな・・・」

そう。家事は何でもこなせて、頭良くて、皆から信頼されて・・・  
頼られて、その上美人だ。

そんな白雪と幼馴染の俺は結構ラッキーな奴なのかもしれない。

・・・だけど、『白雪の幼馴染』と言う立ち位置が、偶に重荷になるときがある。

白雪は星枷ほしづかと言う家柄に生まれた人で、将来が期待されていた。

もちろんその理由やその他の理由もあつて神社から外に出たことがなかった。

そんな白雪を俺は外の世界に内緒で連れていったことが何度かあつた。

それは、白雪にも同じ世界を見て欲しかった気持ちがあるからだつた。

・・・いや、それだけじゃ、無いな。

本当は、白雪が遠い存在になることを拒んだんだ。

俺はその時、成績は悪く、ただ武器を持って何かをすることが好きだった。

まあ簡単にいえば悪ガキだった。

そんな中で俺はいつの間にか白雪と出会っていた。

白雪の事を最初はただの女の子としか考えたことはなかった。

・・・だが現実とは違って、白雪は俺たちの想像もつかない世界で生きていたんだ。

その現実が、今まで生きていた俺の人生を変えるきっかけだった。

谷島「ま結局、何やってもあいつには追いつけなかったけどな」

テストの成績でも、実技試験でも、学園の人たちからの人望も・・・  
何もかも、白雪に届く事はなかった。

谷島「ほんと、そんな奴と今もこうして警護とかの理由で同僚やっ  
てるのって不思議だな・・・」

そう。そこまで俺よりも上の世界にいらながらも俺は白雪の側にいた。

・・・いや、白雪から俺の傍にすることを望んだのか・・・

理由は分からない。けれど、俺にとってそれは一つのプレッシャー  
でもあった。

白雪と言うトップの人間の役たたずでいたくないから・・・だから  
ただ我武者羅に努力した。

無駄だろうがなんだろうが、やらなきゃ何も始まらないからって理  
由で、ただ本当に我武者羅に足掻いた。

そして今だ。

谷島「・・・ふう。体洗うか」

白雪「それじゃ背中洗いますね」

谷島「おう。助かるぜ・・・・・・・・・・って、は!？」

背中をゴシゴシと洗われている俺。

そして洗っているのは白雪・・・・は!？

谷島「いや待て!!!何故白雪が居るんだ!？」

白雪「だ、だって／＼／＼芳ちゃんと入りたかったから／＼／＼」

谷島「だってじゃない!!!絵的にまずいから!!!」

白雪「だ、大丈夫だもん／＼／＼タオル巻いてるから／＼／＼」

そう言う問題じゃねえええええええ!!!!!!

・・・そう。何故か幼馴染の付き合いで、小さい頃はよく一緒に風呂に入っていた。

いやだがしかだ!!!俺達はもう十分の年齢をとっているからして!!!これ以上は危険だ!!!

谷島「タオル巻いてりゃ良いって問題じゃねえんだよ！お願いだから離れてくれ！！」

白雪「・・・嫌だ」

谷島「は！？」

嫌だってこいつ・・・

白雪「嫌・・・だよ」

そう言っつて白雪は後ろから俺に抱きついてきた。

谷島「っ／＼／＼ば、バカ！！離れろつて！！！！」

白雪のヨロシクなく、けしからんその胸やムツチリとした体が当たる・・・やべっ・・・ヒステルかもしれない・・・

・・・？

白雪「・・・ぐすん・・・や・・・離れたく・・・無い・・・」

白雪が・・・泣いてる・・・

白雪「私・・・芳ちゃんを・・・失いたくない・・・」

谷島「！！」

ああ・・・やっぱりそうか・・・

でも、これで確信した。

何で白雪が俺に警護の依頼をしたのか・・・をな。

谷島「白雪。お前本当は、俺を警護しに来たんじゃないのか？」

白雪「...」



反応した……ってことは当たりか。

白雪自身が俺に向かって「芳ちゃんの警護する」って言った所で断られるのが目に見えていたから白雪はあえて俺に警護の依頼をして傍にいられるようにしたんだ。

谷島「別に、こんなことをしてでも守る必要なんてないだろ……」

白雪「だって……芳ちゃんが……死んじゃうのが……嫌だからあ……」

谷島「!？」

俺が……死ぬ……か。

んまあいつ死ぬかもからないからそう思うだろうけど……

谷島「別に俺じゃなくていいだろ……死ぬのは俺じゃないかもしれない。だったら俺に構うよりそいつの方に付けばいい。俺にこだわる理由だって……」

そう。俺よりも命が危ういのは……間違いなく相良翔だ。

あいつを狙った奴がいる。

白雪「違う……違うの」

谷島「え……ん!？」

突如、俺は背後から白雪に唇を奪われた。

やべ……もう……

谷島「なるほどね。俺の事、好きなんだね」  
ヒステリアモード……まただな。

白雪「うん。芳ちゃんの事・・・好きだから・・・ヴァン君やコロナちゃんみたいに失いたくないから・・・だから!!!・・・ん!?!」

俺は白雪の唇を自分の唇と重ねることで塞いだ。

そして離す。

白雪「へ////////あ////////あう////////」

谷島「俺だって、白雪の事は大好きで・・・失いたいなんて考えたことない。むしろ大切にしていきたいと思っているよ」

白雪「そ////////それって////////」

ああ〜そういう事ね・・・

ヒステリアモードになって、やっと分かった。

どうして俺が白雪に勝てないのか・・・

どうして白雪を外の世界に出させたかったのか・・・

どうして白雪を追いかけたきたのか・・・

俺は・・・そう。俺は



ヒステリアモードが解け、俺は本性の自分で話した。

谷島「俺は・・・白雪の事が、好きなんだ」

白雪「つゝゝゝ／／／／／／／／」

そう。白雪の隣に立っていたくて・・・白雪の傍にいられる存在でいたくて・・・

そして努力して、いつか白雪に見合う人になりたかったんだ。

谷島「俺だって白雪を守りたい。白雪は、俺の大切な女だから」

白雪「／／／／／／」

谷島「・・・俺は、白雪の答えが聞きたい」

そう。あとは、白雪に認められるかどうかだけだ。



白雪「私は・・・芳ちゃんの事、大好きだよ」

谷島「・・・ありがとう」

そう言って俺と白雪は唇を重ねて・・・風呂場で体を重ね合わせた。

アリア「・・・バカ」

だが、俺はまだ知らなかった。

アリアだって、俺の守るべき人だって……分かっていたのに……  
・忘れていたんだ。

そしと

アリア「お願い……私の為に、死んで」

谷島「アリア……」

俺とアリアは、ぶつかり合う事になる。

その未来を予知するかのように、翌日、神崎・H・アリアは行方不明になった。

失う怖さ（後書き）

全ての始まりは、二人が結ばれた事。

それが、波乱の始まりとなったんだ。

そして俺と白雪・・・そしてレキとアリアの未来は・・・決まりだしたんだ。



## 音との別れ（前書き）

この与えられた時間は、全ての始まりをより加速させるものとなる。

それは、皆の想いと決断が全て決めることになるのだから・・・

その選択が正しいか否か、それがわかるのは少し先の話し・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 音との別れ

音使 Side

休みか・・・俺はどうするかな・・・

芳乃「奏多さん」

音使「お、零二。俺に何か用か？」

芳乃「ジェイルが修理終わったから来てくれって呼んでましたよ」

音使「お、分かった。サンキュ」

そう言っつて俺はジェイルのもとに向かう。

修理と言っつのは、俺達がここに来る時に乗ってきた飛行船だ。

結構修理長かったな・・・

俺が着くと、そこには既にナギサとエミリアとルミアがいた。

ルミア「遅いですよ！」

音使「悪い。それで、もう動かせるのか？」

エミリア「バツチリ！もういつでも帰れるよ！」

音使「そうか。良かったな」

そう。よかつたんだ。

・・・でも、翔達と別れ・・・になるのか・・・

ルミア「早速帰りましょう。私やエミリアはあちらでやらないといけないことが山ほどありますし」

エミリア「そうだよね〜はあ・・・ちょっと憂鬱〜」

ナギサ「文句ばかり言わず、しっかりとしたらどうだっ」

ルミア「ほら言われてますよ」

音使「あはは・・・」

取り敢えずエミリアとルミアは真っ先に帰らないとまずいらしい。

まあ忙しいしな。俺と違って。

エミリア「それじゃ帰るっ！〜！〜」

このまま帰って良いのだろうか・・・

もしこのまま、翔の解決させようとしている事件の結末を  
見ないで帰るのか？

・・・

・・・

いや、  
まだだ！！

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

音使「悪い。俺は帰らない」

全員「!？」

音使「ここに残って、今の事件の結末を・・・F i n eを見ないと  
いけない」

エミリア「でも、私達が戻ったら奏多は戻れないんだよ!？」

そう。俺達のいた世界に戻るには俺たちの飛行船を使わないといけ  
ない。

それが無くなれば俺は戻ることは出来なくなる。

・・・それでも・・・

音使「それでも、俺はこのまま終わりなんて嫌なんだ。演奏は、最  
後まで聴きたいからな」

きつと、始まりは小さかった。

ただ飛行船の事故でここに泊めて貰って、そしてこの陸宙管理本部  
って所で事件に巻き込まれ、そして共に解決させてきた。

全てが相良翔一人の影響で始まって、きつと終も相良翔の存在で終  
わるのだらう。

俺は、あいつの奏でる素晴らしい演奏を最後まで聴きたい。



あいつの音は、俺を魅了した。

あいつの音を、最後まで聴かなかつたら一生後悔する。

音使「だから、俺はこの世界に残って全てを見ていく。この世界が・  
・・気に入っちゃってな」

ルミア「奏多さん・・・」

ナギサ「・・・どう言っても、奏多はこの世界に残りたいんだな？」

音使「ああ。ナギサ、エミリア、ルミア。3人には感謝してる。俺  
は、この世界でもっと色んなものを見ていきたい」

そう、これが俺の新たな目標なんだ。

ナギサ「奏多がそうしたいなら、そうすればいい」

音使「ナギサ・・・」

エミリア「まあ私達がここに迎えに来ればいいだけだしね」

ルミア「私は忙しいので難しいですよ」

おお・・・流石ルミア。手厳しいな。

音使「ありがと。皆、ありがとだな」

そう言つて、3人は別れる。

ナギサ「最後に・・・ん」

音使「!?!」

エミリア・ルミア「!?!」

ナギサは俺の唇を奪つた。

・・・あれ・・・力が・・・流れ込んでくる・・・

そして唇が離される。

ナギサ「私の力を与えておいた。役に立てて欲しい」

音使「っ・・・あ、ああ。ありがと」

そう言つとナギサ達は飛行船に乗り込む。

そして飛行船は、宇宙の穴に入って去っていった。

音使「はぁ・・・別れってやっぱりあつさりとしてんな」

出会いと別れはまるで一瞬の様に感じた。

全ては長い様に感じて一瞬だ。

音使「さて、俺は俺なりに進むか・・・」

そうやって俺はまた歩き出す。

最後の最後の結末まで、あいつの全てを見届けるまで……

## 龍の想いと騎士の想い（前書き）

旅立つ仲間と決意新たに進み出す音の少年。

そして話は変わり、相良翔の物語となる。

龍の少女に連れられた相良翔を待つものとは……

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。

## 龍の想いと騎士の想い

相良 Side

相良「それで、俺に話してなんだ？」

エトワに連れられ、俺はエトワの部屋に来た。

エトワール「この前現れたご主人様のマテリアルと言う存在ですが・・・彼の实力は・・・」

相良「分かってる」

オーデインの实力はかなりのものだ。

俺と戦って互角か・・・それ以上。

エトワール「今のままでは恐らく・・・」

相良「俺が負けるとでも？」

エトワール「はい」

うわ・・・はっきり言われた。

相良「それは無いな。俺はあいつになんか負けない。絶対にな」

エトワール「八神はやてが相手になっても・・・ですか？」



相良「っ！」

それは・・・そうだな・・・

相良「無理だな・・・俺は、はやてを傷つけることなんてできないな・・・」

そう。俺は甘いから、いくら裏切ったはやてと言えど戦う事はできない。

エトワール「敵はご主人様の弱点をよくご存知です。ですから私が八神はやてを、そしてオーデインをご主人様が」

相良「・・・それは出来ない。エトワだって俺の大切な相棒だ。二人が戦うことなんて・・・俺がさせない」

エトワール「ですが、八神はやてはご主人様の最大の弱点です。弱点は私が補います。ですから」

相良「だからエトワとははやてを戦わせて良い理由になると思うなよ！...！」

エトワール「!?」

相良「戦う理由は、ただお互いの想いのぶつけ合い。喧嘩はただのぶつけ合いだ。エトワは何の為に戦う!?俺の弱点だからって理由だったら俺はエトワを戦わせない!!それは、はやて自身の想いまでも否定する行為だ！」

エトワール「……じめんなさい」

しゅんとして謝った。

相良「あ……悪い。ちょっと怒りすぎだな」

エトワール「いえ……その、こちらこそ生意気言いました。すみません」

お互いに謝ってしまう。

相良「……それで、そうなる俺ははやてとオーディンと戦わないといけないんだが……」

参ったな……理由が知りたい。

はやての目的。

夜天の主としての責任か……はたまた何か魔法をかけられて洗脳されているか……

何はともあれ、あの2人が一度にかかってきたら俺は……

……いや、それでも勝つんだ。

勝たないといけないからな。

エトワール「……一つだけ、ご主人様を今以上に強くする方法が

あります」

相良「え……」

エトワール「私と……契約を結べば、あなたには星屑の力に龍の力が加わります」

相良「な……!?!」

エトワに初めて出会った時に言われた。

契約すれば未来永劫を共に生きることになると・・・

そして契約の方法は・・・

相良「駄目だ!!」

エトワール「ですが、ご主人様が戦うには・・・それしか」

相良「勝つ負けるの問題じゃない。これはエトワ自身の問題だ」

エトワール「私・・・」

相良「ああ。俺は軽い気持ちでエトワと契約するつもりは無いと言った。だがそれはエトワも同じでいてほしい!!」

そう。契約とは、俺とエトワを結ぶこと。

そんなこと、軽い気持ちでやっていいことじゃない。

エトワール「……私は、軽い気持ちで契約をするつもりはありません」

相良「え……」

両手を祈る様に重ね、自分の胸に当てながらエトワはそう言った。

エトワール「私は、ご主人様との契約を軽い気持ちで行おうなどと考えてはいません」

相良「エトワ……」

その瞳からは力を感じた。

そして彼女の決意、想い、願い。

俺はそれを否定することができない。

だって俺は・・・弱いから。

エトワール「ご主人様・・・いえ、相良翔。汝と我、共に生きよう」

そう言って差し出された右手。

相良「エトワ・・・」

普段のエトワからは想像できない発言だった。

これが・・・もしかしたら本当のエトワなのかもしれない。

だからと言って、俺はエトワを嫌いになったりはしない。

後は、俺が決断するだけなんだ。

相良「俺は、今日までエトワと共に過ごして、分かったことがある」

エトワール「・・・」

エトワは無言で、ただ俺の話を聞いてくれる。

相良「初めて出会った日、俺は君がそんな龍だと言うことが信じられなかった。助けてくれた龍と君は全く違って、弱々しくて、頼りなくて、不器用で、失敗が多くて、いつも心配でしょうがないような、そんな“娘”の様な存在だったんだ」

エトワール「娘・・・ですか？」

相良「ああ。だからそんなエトワを娘の様に接している時間は、俺にとってまた違う感覚だったんだ」

そう。初めて一緒にエトワと食事をしたとき、エトワは食べ物の食べ方すら分からなくて俺が教えてあげてた。

その後も、恥じらいが少ないエトワに色々注意してやっと人並みになった。

でも他の皆には無口な性格は改善されなくて、きつと不器用なんだと思った。

その後も人との接し方を教えたりして、その日々がちょっとずつ楽しくなっていた。



そう。いつの間にか俺は、エトワを一人の娘として見てきていたんだ。

相良「俺の、大切な娘なんだって・・・いつの間にか、龍とか契約とか、そんなことどうでも良くなってきたんだ。ただ俺の大好きな娘で、俺の守るべき大切な娘ひとになっていたんだ」

いつの間にか、エトワは本当の家族になっていた。

それは、俺が勝手にそう決めつけているだけであって、エトワ自身はそう考えていないかもしれない。

それはそれで構わなかった。

俺は、ただ純粹にエトワを大切な人だと思ってるから。

相良「だから契約は、そんな大切なエトワとならしても良いと思うけれど、エトワも決断して欲しいんだ。契約とは、そういうことなんだと俺は思う」

エトワール「決断・・・」

そう。どんなことも、最後に・・・絶体絶命の逆境の中、自分自身の命を取るか、周りの命をとるか決断しなければならぬ。

そしてエトワは、一生を俺の為に使うか、自分の為に使うか・・・決断しないとイケない。

エトワール「それでも、我は汝との契約を選ばう」

相良「!?!?え・・・エトワ」

エトワは、決断した。

俺の為に一生を使うと。

相良「良いのか・・・地獄を歩く事になるかもしれないんだぞ？それに、エトワ自身が俺の為に一生を使う必要だって・・・」

エトワール「違います。我は汝と共に生きることそのものが我の為でもあり、汝の為でもある」

相良「俺の為でもあり・・・エトワの為でもある・・・か」

そうか・・・エトワは、俺の為に生きることそのものが自分の為になるのか・・・

だったら決断する選択肢は一つしかなかったってことか・・・

相良「  
・  
・  
」

後は

俺の決断だけだ。

相良「分かった。我、相良翔は汝、エトワール……  
契約を行う」  
スターダスト・ドラゴン星屑の龍との

エトワール「よかろう。我、スターダスト・ドラゴン星屑の龍は汝、相良翔と未来永劫の命と力を約束しよう」

相良「我、相良翔」

エトワール「我、スターダスト・ドラゴン星屑の龍」

相良・エトワール「ここに契約の誓いと儀式を行う」

そう言って、俺とエトワは夜、ベットで何も纏わない状態で抱きしめあった。

相良「ん・・・」

エトワール「んちゅ……ん……ん……」

お互いの唇を重ねることから始め、だんだんその濃厚さを増す。

そして俺の手は、エトワの様々な部分へ……

そしてエトワはただその行為に身を委ねていた。

相良「それじゃ、行くぞ」

エトワール「はい……“パパ”」



そしてこの日の夜、俺とエトワは契約を結んだ。

|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||  
|| ||

### 龍と契約の方法と条件

龍と出会った使用者は龍との了承の上、契約をすることが可能。

ただし契約とは、お互いの体を重ね合うことなので生半可な想いで行うことは許されない。

そして契約は一度行うと解除することはできない。

契約者と龍は永遠の寿命を手にし、永遠に死ぬことは無い。

ただし契約そのものを何らかの方法で解除した場合、両方が死ぬ。

そして契約を終えた後、契約者は以下の能力を得る。

- 1、契約者と龍は二心同体のパートナーとなり、どちらかが死ねばもう片方も死ぬ。
- 2、契約者と龍は同じ能力を使用できる。
- 3、契約者と龍は永遠の命を得る。
- 4、契約者と龍は新たな能力を得る。それは契約者と龍の関係が深まれば深まる程レベルが上がるか能力が増えるかする。
- 5、契約者と龍の身体能力が大幅に上昇し、魔力量も増える。

ただし、この契約を終えた契約者と龍は一定の期間に必ず以下のことを行う。

1、お互いの魔力供給や体力回復などを目的とするため、一週間に一度、契約と同じ行為を行う。

2、一日一度以上は必ず唇を交わすこと。

行わなかった時、それすなわちお互いの死を意味する。

龍の想いと騎士の想い（後書き）

契約を結んだ星屑の騎士と星屑の龍。

二人の契約もまた、全ての始まりの1頁になる。

## 二人の変化（前書き）

星屑の龍と星屑の騎士は契約を終える。

幸せとを感じるか、不幸とを感じるかは、二人の絆による。

そう。試されるのは絆。

二人の絆が、新たな奇跡を生むのだから・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
ty } 始まります。

## 二人の変化

・・・翌日。

相良「・・・んん」

全身にある気だるさがありながらも俺は体を起こす。

相良「あれ・・・裸・・・って、そりゃそうか」

昨夜はエトワとの契約で全身の体力を使い果たした・・・

相良「なのは達の相手をいつもやってんのに・・・エトワはやっぱり違うか・・・」

さて、そろそろ話題を変えないとこの小説がR - 18になりかねないので終わり終わり。

・・・え？既に18禁だと？

・・・違う！！！！R - 17だ！！！！

相良「・・・俺、何に怒ってるんだ？」

そんなことを考えつつ、俺は服を着てからスヤスヤと幸せそうな表情で眠っているエトワに毛布をしてやって台所に向かう。









相良「さて、こんなことは今後一切やらないっ」と

好きな料理も何となく分かった。

取り敢えず俺が作れば何でも嬉しいらしい。

そうと分かればやることはひとつだ。

相良「心のそこから喜んでくれるのを作らないとな」

そう言って俺は長袖の腕をまくって気合を入れて料理を作り始めた。

エトワール Side

エトワール「・・・は」

私は眼を覚ます。

契約は無事完了。私とパパは結ばれた。

エトワール「あ・・・れ」

一緒に寝ていたはずのパパが居なくなっていた。

朝早くから仕事と考えるが正しいと判断した私は布団を畳んで一人でしまつて台所に向かう。

エトワール「あ・・・パパ」

相良「お、エトワ。おはよう」

台所に着くとパパが料理を作っていた。

相良「つか何でパパ？」

エトワール「娘が言うのはパパだと聞いたことがあります」

相良「せめてお父さんな。とういうかその話はきつと子供の使う言葉の話だ」

なるほど・・・覚えておきましょう。

相良「あ、ご飯あと少しで完成するから待ってる」

エトワール「ありがとうございます・・・お父さん」

相良「敬語も止める。敬語って相手の事を意識して行うことだ。それは信頼関係を築くには必要かもしれないが、完成している信頼関係に対してはそれは逆効果だ」

エトワール「うん。分かった、お父さん」

確かめるようにそう言った。

相良「ああ。それでいいよ」

そう言うとお父さんは会話中に完成させた料理を持って歩きだした。

相良「一緒に食べよう。腹減ってるだろ？」

あ・・・お父さんの料理・・・

エトワール「うん。空いてる」

相良「軽い物だけど、食べよう」

エトワール「うん」

相良 Side

食事を終えた俺とエトワは部屋で今一度契約の事の説明を受ける。

エトワール「契約、それは契約者と私を『未来永劫の命』即ち『不老不死』を一番最初に得ます。説明は・・・知らない・・・よね？」  
大分馴れ馴れしく話してきてくれるようになってきた。

物わかりとその順応性の高さに驚きだな。

相良「説明は確かにいらぬ。不老不死。まあ俺は不死身になっちゃったわけだ」

エトワール「そうだよ。この世の数多くの人々が望む・・・不老不死。これのせいでお父さんは年齢をいくつとっても姿は変わらない」

相良「!?!?ってことは・・・俺の姿って一生このままなの!?!?」

おお・・・年齢とっても変わらないなんて世の女性が喜ぶだろうなあ・・・

エトワール「うん。そしてお父さんと私はこれから、永遠に生きるの・・・地獄を見てね」

地獄・・・ああ、そうか。

『不老不死』

一生病気にかからない。どんな攻撃を受けても死なない。

簡単に言えば『死』と言う結果そのものを否定できる。

そして年齢をいくつとっても死なない。

更に年齢をいくつとっても姿容姿は一切変わらない。

だが、相良翔にとって『永遠』とは一つの地獄になりえる。



何故なら、相良翔には・・・大切な家族がいるからだ。

愛すべき・・・永遠にを約束した家族。

だが家族は不老不死ではないから、いつか死ぬ。

そう。相良翔は不老不死になった瞬間から、なのは達の死を視ると言う運命を背負う。

更に妹達・・・ヴィヴィオ、イクス・・・ナンバーズの皆・・・

弟子たちのこともそうだ。

リオナ・・・アインハルト・・・零二・・・

そして大切な仲間達。

音使奏多・・・谷島芳樹・・・

相良「ま、分かってる。そのくらいの覚悟は出来てるわ」

エトワール「……これでいいんだよね？」

相良「いや、きつと駄目だ。俺は最悪な選択をしたんだ」

そう。決してこの選択は正しくない。

だって、不老不死は選んではいけない。

それは、人が人で無くなってしまうから。

相良「でもな、俺は……人でいる必要はないと思う」

エトワール「どうして……そんなことを……」

確かに、人を捨てる事に対して否定しない部分に、エトワは気になつたんだろう。

相良「だって相良翔は相良翔じゃなくても相良翔だから……何も恐ることなんてない。希望が無くなった訳じゃない。逆に希望が生

まれたんだ」

エトワール「未来が・・・生まれた？」

相良「ああ。俺はこの先、様々な奴の希望みぞいを見ることが出来る。俺はそいつらの師匠として生きたい。何百代目・何千代目・何万代目・  
・・・全てを見ることが出来るなんて嬉しいじゃないか」

そう。全てを見てやるよ。

相良「エトワール。俺と・・・一緒に見ていこう」

エトワール「うん。私とお父さんは、一心同体だからね」

エトワール「それと、1日一回私とキスしないと私とお父さんが死にます」

相良「!？」

え・・・何いきなり危険な発言を・・・

エトワール」なので今のうちに口づけを……

そう言っていてエトワは可愛らしく唇を前に出す。

相良「……しゃあない。俺はそう『決断』したんだからな」

そうやって俺とエトワは口づけを交わす。

ただ、エトワが突然舌を入れてきたので俺も対応した結果、大人のキスになってしまったのは余談である。



全く・・・朝から疲れた気がする・・・

気分転換にデートでもするか？（前書き）

龍と男性の想いは一つとなり、ともに永遠を過ごし始める。

そして少女の中で変化する想い。

焦り・・・それを見破る彼はある行動に。

その行動の本当の目的とは・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
ty } 久しぶりに始まります

気分転換にデートでもするか？

相良 Side

相良「ほらどうした！？もう終わりか!？」

ある日の訓練室では、俺が訓練をしていた。

アインハルト「はあ、はあ、はあ・・・まだです!!!」

相手は霸王の名を持つ若き少女、アインハルト。

彼女は俺の弟子となり、陸宙管理本部に入隊した。

と言うことで師匠である俺がいつも通りの訓練をする。

・・・なのだが・・・

アインハルト「はああああ!!!!」

相良「!？」

アインハルトは普段より歩幅は短く、細かく足を動かして拳を振るった。

俺はそれを左手でいなす。

アインハルト「そこ!!!!」

だがいなした勢いをすぐに踏み込んで耐えて更に俺に拳を振るう。

なるほど・・・細かい動きはいなされたときの対策か・・・

相良「だけど・・・」

相良「ちよつとストップ!」

そう言つて俺は勢いよく殴りかかってきたアインハルトをひらりとかわして足を出して引っ掛けて転ばせた。

アインハルト「うっ・・・」

いきなりの事で驚き過ぎて対応できないアインハルトを俺は抱きとめた。

相良「ストップだってば」

アインハルト「す、すみません／＼／＼／＼」

相良「・・・どうした？」

アインハルト「え・・・」

強くなりたい人は自分の戦闘スタイルを少々変える人が多い。

今の細かいステップだってきつとそつだ。

・・・だが、アインハルトの場合は少し違和感があった。

相良「細かいステップ。それは俺もよくその動きになる。だけどあれは“俺だから”できるんだ。アインハルトがやるとそれは弱点のある動きだ。そのくらい、自分自身が一番わかるはずだ」

アインハルト「・・・はい」

そう。細かい動きは見切りられにくい、それは見切りられにくいと言っわけであっていつかは見切られる動きになる。

何故なら、どんな高速な動きでもそこには一定のリズムが存在するからだ。

人の体にはそんな特徴があるから、アインハルトみたいにいきなり使い始めの人は必ず一定のリズムの動きになってしまう。

まあ熟練者や経験を積んでいる人は自らのリズムすらも自在に変更できるんだがな。

相良「どうしていきなり俺の動きをしようって考えた？まだ初めて数日って所に見えたが？」

理由はわからんでもないが、取り敢えず聞いておこう。

アインハルト「・・・強くなりたいたいです」

相良「嘘だな」

アインハルト「え・・・」

相良「ふざけるな。そんな揺れた瞳で言われても俺は信じない。そんな偽りの想いで俺と戦おうなんてお前らしくない。お前はもっと純粋な拳を振るう奴だと思ってたんだが・・・違ったのか？」

アインハルト「・・・」

それからアインハルトは何も言わなかった。

・・・やっぱり、緊張してんのかな・・・

ただ霸王の拳の証明の為に生きてきたアインハルトにとって、俺が巻き込んでしまった世界は、彼女にとって大きな影響を与えた。

それは強くなるきっかけでもあったが、それと同時に命をいつ失うか分からない・・・そんな緊張感のある世界。

そして目の当たりにした・・・ヴァンの死。

今一度死について全力で考え始めたんだ。

その焦りの結果、彼女は俺と肩を並べたいと思った・・・最後のは俺の仮説なんで本人に聞かないと分からないな。

・・・だとすると・・・

相良「なあ、今日この後空いてるか？」

アインハルト「え・・・あ、はい」

相良「だったらこの後、デートでもするか？」





くそれからしばらくしてく

ここはクラナガンにあるとあるショッピングモール。

数多くの店があり、多くの人を利用する場所である。

ここにいるのは陸軍管理本部総裁である俺。

そして・・・

アインハルト「あ、あの／＼／＼本当に良いのでしょうか／＼」

私服でもじもじと恥ずかしそうに俺の隣を歩くアインハルト。

相良「何を今更・・・まあ気分転換だ。今日は買い物でもなんでも付き合っぜ？」

アインハルト「え・・・で、ですが・・・」

相良「そう言う語つ苦しいのもし。今日は総裁も何も関係なし。ただの男性と女子学生。それで十分だ」

そう言うアインハルトはクスッと笑で言った。

アインハルト「まるで犯罪者みたいですよ」

相良「言うな。言った後に少し後悔してたんだから・・・」

そう言うアインハルトは更にくすくすと笑った。

どうやら緊張が少し解けたらしい。

相良「さてと、今日は遊ぶぞー！」

アインハルト「はい！」

そう言う俺とアインハルトはショッピングモールを歩き始めた。

相良「……！」

アインハルト「どうかしましたか？」

あれ……何か凄い殺気……というか気配……

……ああ、あいつらが。

だったら丁度いい。ちょっと話もあるしな……

相良「何でもない。早くいこうぜ！一日はすぐに終わってしまっ  
かな」

アインハルト「はい！」

No Side

相良翔とアインハルトの2名が二人仲良く街中を歩く光景を上空で殺気立てながら見ている女性達。

なのは「翔君・・・呪うぞ!!!!!!」

フェイト「なのは・・・それ違うアニメ・・・」

アリス「翔・・・帰ったらデツカイ風穴空けてやるんだから!!!!!!」

すずか「アリス・・・それも違うアニメ・・・」

早速相良翔の死刑執行が近づいた。・・・いや、死亡フラグが建った。

ルチア「翔・・・後でブラックホールに送ってあげる・・・」

シグナム「ほう・・・私達と言うものがありながら、よもやこのような・・・我がレヴァンティンの鎧にしてくれる・・・」

ヴィータ「ぶっ潰してやる・・・」

シャマル「ちよつと治療の必要があるようね・・・」

アイン「主・・・闇に屠りましょう」

スバル・ギンガ「取り敢えず殴る」

ティアナ「ランスターの弾丸・・・自ら受けたみたいですね・・・

」

キャロ・ルーテシア「支援は任せて・・・」

メガーヌ「流石にこれはちよつと・・・ねえ・・・」

シュテル「滅ぼす必要がありますね・・・」

レヴィ「容赦しないよ」

アーチエ「塵芥の分際で他の女に手を出そうとは良い度胸・・・」

アリシア「もう・・・帰ったらお仕置きだもん！」

リニス「動けなくする必要がありませんね・・・」

ヴィヴィオ「お兄ちゃん・・・私を無視してアインハルトさんを・・・

・うつ・・・」

全員「絶対に許さない!!!!!!」

右蕪「恐ろしいな・・・」

火澄「乙女の嫉妬ほど怖いものは無いわよ」

エトワール「覚えておきます」

ジェイル「決して覚える必要は無いよ？」

サクラ「マスター・・・あれ、凄く怖いんだよ・・・」  
。。。。。。

芳乃「あれを見てると、一夫多妻制つてのも考えようだな」

音使「つか・・・何で俺まで？」

リオナ「面白そう・・・だからじゃないの？」

谷島「翔の場合は欲張りすぎた結果だろ？」

何人もの怒りと南院もの哀れみの声が聞こえる。

右蕪「にしても・・・翔が自ら人を誘うとはな・・・何か考えて・・・  
だろうが・・・一体・・・」

火澄「?どうしたの?」

右蕪「・・・いや、何でもない。それより俺達は彼女達が暴走しすぎないよう<sup>ぎ</sup>に監視してよう」

アインハルト Side

アインハルト「あの、どこに行くのですか？」

相良「え？ああ、どこでも良いよ。服買ってもいいし、飯食っても良いし、どこでも」

ど……どこでもと言われましても……

といえますか、無計画でしたか……

相良「あ、ホテル系は駄目な」

アインハルト「え、選ぶわけないでしょう！！！！……あ……」  
しまった……ついたため口になってしまいました。

相良「あはは……アインハルトって、そんな喋り方になるんだ」

アインハルト「え……ってことは……」

図られた！？

相良「ま、本音は吐けっつてな」

そう言っつて翔さんは私の手を握る……っつて！？



アインハルト「しょ、しょしょ／＼／＼翔さん!？」

相良「行くぞ。ここから先は人がいっぱいいるから、はぐれないようにしないとな」

そう言っつて翔さんは私を引っ張る。

何だろう・・・どうしてこんなに温かいんだろう・・・

あんな・・・生きてるのかすら分からなくなるような場所で生きて、こんなに温かい手をしてる。

慣れているから？

もう、ずっと倒し続けているから？

だとしたら・・・翔さんは・・・

相良「おい、なにボケくっとしてるんだ？腹でも減ったか？」

アインハルト「あ……いえ、その……」

相良「まあ良いや。取り敢えず甘い物でも食べに行くか」

そう言つて翔さんは人混みの中を、私を離さないようにしっかりと手を握つて歩き出す。

相良「（なんだ……すげー殺気を感じる……しかも物凄い大きな……つたく）甘い物食べた後に話があるんだが……良いか？」

アインハルト「え……あ……はい」

そう言つた時の翔さんの表情は、どこか真剣でした。



相良 Side

相良「うお・・・これ上手いなあ・・・」

アインハルト「本当ですね」

俺とアインハルトはクラナガンでも有名な店『Sweet home』に来て、ケーキを食べていた。

なのは家の翠屋程ではないが、味は絶品と言える。

しかも客の大半はカップルか・・・

アインハルト「／／／／／」

ケーキ食ってるのに顔が赤いって事は・・・まあ意識してるんだろ  
うな。

俺はまあ慣れたからいいとして、次は何食べようかな・・・

アインハルト「あの・・・翔さん」

相良「ん？どした？」

フォークを皿に置くとアインハルトは話した。

アインハルト「本当に、今日は休んでもよろしいのでしょうか・・・  
こんな時に・・・」

相良「何言ってるんだ？こんな時だからこそ、アインハルト“達”  
には休みが必要なんだよ」

アインハルト「え・・・」

相良「俺が巻き込んだのは、命懸けの世界だ。いつ死ぬかも分からない、どんな絆もいつ消えるか分からない世界、育まれた想いも一瞬で消えてしまう世界に俺はアインハルト達を巻き込んだ。それは俺の責任だから・・・だから今日みたいに、解放してやりたいんだよ」

いつの日からか、敵は殺すか倒すかしないと生きていけなくなっていた。

そのたびに俺の武器には大量の血がつく。

洗い流しても、洗い流しても……落ちない血。

その世界にアインハルト達も染めてしまった。

けど……偶には皆を、本当の日常に戻したい。

アインハルト「そう……でしたか。ありがとうございます」

相良「感謝する必要ない。別に感謝されるためにしたんじゃない。いいところ、偽善だろ」

アインハルト「……」

相良「さて、そんじゃ他に何食べようかな……アインハルトは何か食べるか？」

アインハルト「え……えつとお……（チラチラ）」

アインハルトは何かを言いたそうだ。

取り敢えずアインハルトの視線の先にあるものを見た。

相良「……ああ……なるほどね……」

その時アインハルトは恐ろしいデザートを見ていた。

相良「さて……皆にどう説明するか……」

そんなことを考えつつも俺はそれを注文する。

相良「すみません。あれください」

店員「はい。畏まりました」

アインハルト「い、良いんですか!?!」

相良「ま、アインハルト女の子のお願いじゃ断れないさ」

No Side

ヴィータ「あ……あれってこの前出来たばっかのギガウマなデザ  
ートショップだ」

なのは「よく知ってるね……」

フェイト「翔……いつの間にそんな場所調べたんだろう？」

シグナム「あいつは何でも知らないうちに色んなことを知っていた  
だろう。今まで通りだ」





相良 S i d e

相良「へえ……こりゃすい」

アインハルト「そう……ですね」

俺達のテーブルに置かれたのはピンク色のハート型のケーキ。

しかもそこには右半分に俺の名前、左半分にはアインハルトとチヨコペンで書いてある……

だからここに入るときは自分の名前をかくのか……

そして何故かこのケーキが来たときに、『食べ方』が書いてあるメモを渡された。

取り敢えず従ってみる。

二人はメモを見ながらやっているので、最後まで何が起っているか整理できません。

1、二人とも、向かい合って座るのではなく、隣同士距離5センチ程まで近づきましょう。

相良・アインハルト「できました」

2、ケーキを切る包丁を二人で一緒にもってケーキを切ってください。

相良・アインハルト「できました」

3、フォークをもって食べれる分とって相手にあぐんしてあげましよう。

相良「はい。アインハルト。あぐん」アインハルト「あぐん・・・  
パクッ」

相良・アインハルト「できました」

4、これで二人の愛は育まりました。

相良・アインハルト「・・・!？」

ん？待て待て!!!今まで何があった!？

相良「えっと・・・!!？」

アインハルト「はう／＼／＼／＼／＼／＼／」

は・・・図られた・・・

これ・・・結婚式風にケーキ食わせてやがる！！！！

つかアインハルトが爆発してる！？

つか近！？いつの間にこんな近くなってた！？

相良「悪い。ちょっと待ってる・・・」

さて・・・店長に全力全壊で俺とお話。

うん。お話だよ・・・お話・・・お話・・・あはは・・・

その後、店の奥で白銀の光が発生して店長が何かトラウマを持ったとか持たなかったとか……

時間は過ぎて、夜。

相良「ふう・・・何だかんだでのんびり出来たる？」

アインハルト「はい」

帰りに俺とアインハルトは公園に来た。

ヴァンとコロナがよくデートで来ていた・・・この公園。

アインハルト「本当に今日はありがとうございました。知らないことだらけで面白かったです」

相良「そうか・・・そうだよな」

アインハルトって中等科にいるのに友達がいるとか聞いたことがない。

・ まあ日々格闘技で友達なんて考えもなくなっていたんだろうけど・・・

相良「それじゃ、さっき言った話を・・・聞いてもらう」

アインハルト「はい」

そして俺はアインハルト“達”に話をする。

相良「もうすぐ、俺は皆のもとからいなくなる」

アインハルト「……え？」

アインハルトは何かあったか分からないかのような感じだった。

アインハルト「どういう……ことですか？翔さんが……いなくなるって……」



相良「ああ。そろそろ“皆”に教えようと思う。『俺の力の真実』をな」

アインハルト「翔さんの・・・力の真実？」

そう・・・誰も知らない、俺の力の真実。

星屑の真実 霸王の想い（前書き）

明かされる星屑の騎士・白銀の墮天使の名を持つ彼の真実。

何故彼はいなくならなければならないのか？

そして真実を聞き、霸王の子は何を想う？

伝える霸王の子の想い。

魔法少女リリカルなのは Vivid World In  
finity 始まります。

## 星屑の真実 霸王の想い

相良 Side

相良「まず、俺の力は知ってるな？」

アインハルト「はい。空気中の魔力を自らの魔力と混合して使えたりすると」

相良「そう。星屑の名に相応しい能力だ。けれど、この能力は皆のとはちよつと違って特殊だ」

魔力変換資質とは元々の生まれつきで持っていたりするのが多い。

けれど俺の魔力変換資質は生まれつきだが、少し違う。

相良「実はこの『星屑』の魔力変換資質って                   アインハルト  
の中にもあるんだよね」

アインハルト「!？」

相良「星は一つじゃない、無限に存在する。人の数存在し、人が増える事に星の数も増える。今もアインハルトのなかにも、ヴィヴィオのなかにも、なのは達やヴァン達のなかにもある。俺はその星屑の真の力を使えるようになった特殊な存在だ」

アインハルト「特殊・・・」

相良「そうだ。この世の全ての人が持つ星屑。それを覚醒させる事が出来る人はまだ俺しかいないらしいがな。俺は覚醒した中でも一番この能力を使いこなせるらしい」

アインハルト「それでは、私たちも・・・もしかしたら・・・」

相良「ああ。『星屑の覚醒』をすることも出来ない。しないかもしれない」

アインハルト「どうすれば・・・」

相良「悪いがそれは不明だ。素質なのかもしれないし、その人の想いなのかもしれない。人の力つてのは様々なところから湧き出るものだからな」

嫉妬・怒り・悲しみ・苦しみ・喜び・憎悪・・・

他にも恋愛感情・殺意などの想いからも様々な力が生まれる。

そんな様々なものを持つ人から星屑が覚醒するのはほぼ不可能。

相良「まあその話は後にして、俺が説明するのはこの能力を使う俺の体が今、どうなっているかだ」

アインハルト「え・・・」

そして俺は明かす。

10年以上前から発動し続けていたこの力の代償を



だが俺の記憶は何度も何度も消滅して、今はもう・・・最初の時の俺ではない。

相良「俺は戦う度に記憶を失う。まあ普段の魔法でなら数分間の記憶程度しか消滅しないけどな」

アインハルト「そんな・・・大切な記憶なんですよ!？」

アインハルトも怒りを露にする。

アインハルト「私は、今日のこの日の記憶を一秒たりとも忘れたくないです!!翔さんもそうなんじゃないんですか!？」

相良「ああ。俺だって、失いたくはない」

アインハルト「でしたら・・・記憶に『程度』なんて・・・言わないでください」

アインハルトの瞳から滴が垂れる。

相良「・・・ごめん」

一秒たりとも・・・か。

アインハルト「・・・お話しを続けてください」

深呼吸して落ち着いたようだ。

俺も一度深呼吸して話を始めた。

相良「記憶を失う・・・その量は技の使い方によってまた変化する。  
『スターダスト・ブレイカー』だと一割が消える。失ってもまた新たに作れば問題はないんだ。ただ・・・な」

そう。記憶を失う・・・だけじゃないんだよな・・・

アインハルト「？」



相良「オーバー・スター・ロード新たな星の誕生を使うと・・・アインハルト達の記憶の中から『相良翔おれ』と言う存在の記憶が消滅していくんだよ」

アインハルト「そ・・・そんな・・・」

『オーバー・スター・ロード新たな星の誕生』は元々中にある星屑の力を外に出して発動するのだが、普段中で使用するから中にある記憶が消えるのであって、それが外に出ると言うことは俺の存在そのものの記憶が消えていくことになる。

アインハルト達は無意識だろうが、俺という存在と過ごした記憶が少しずつ消滅していつている。

しかもタチが悪いと言うべきか、記憶喪失のように、記憶の部屋に鍵が掛かった訳ではなく、文字通り消滅する。

相良「だから・・・もうすぐ訪れる決戦で俺の記憶から皆が、アインハルト達の記憶から俺との記憶が消えるんだ」

アインハルト「そんな・・・」

涙を流し、血の気が引いたかのように真っ青な顔をするアインハルト。

相良「だから俺は戦いが終われば、皆のもとにはいなくなる。まあそんなことも忘れてるだろうけど」

そう・・・かなり辛い決断だ。

・・・だが、これは仕方ない。

運命がどうか、そんなんじゃないかって・・・ただ、俺達は世界とか守りたい者とか、そんなものがあるからこそ、決断するしかない。

そしてこれが・・・俺自身の決断だった。

相良「今日は、一緒にいられて本当に楽しかった。せめて消える前に・・満足したかったからさ」

アインハルト「翔・・さん・・」

そうやって俺はアインハルトの頭を撫でる。

相良「それじゃまた明日。いつも通りの日常で待ってる」

そうやって俺は一人で帰ろうとした。

「アインハルト」待って……待ってください……翔さん！  
「……………」

相良「何だ？」

アインハルトは俺を呼んだ。

そしてアインハルトは俺に駆け寄ると、俺に抱きつく。

相良「ちよっ!?!」

離そうとしたがアインハルトはガッチリとくっついて離れない。

それに・・・服が湿ってきた。

きつとこれは・・・涙。

アインハルト「いなくならないで・・・ください」

相良「何で？ 忘れたら、お互いにお互いを知らないんだぞ？」

アインハルト「大丈夫・・・ですよ」

相良「何で？」

アインハルト「私は、  
翔さんに  
れした人ですから」

あなたに、  
一目惚

霸王の想いが、俺に届く。

相良「アインハルト……」

それは

残酷な言葉<sup>おもひ</sup>

。



いつかは忘れてしまっ、お互いの関係。

だったら生み出さなければいい筈だ。

想い出は・・・その大きさが大きければ大きいほど、失った時の悲しみも大きい。

だったら何も作らず、ただ失えばいい。

俺は、ずっとそうしてきた。

けれど、みんなはそれを拒んだ。

失うのなら  
消えてしまっのなら、せめて夢だけは見せて欲しい。

その想いから、俺といることを望んだんだ。

そして今、俺の目の前にいる、この一人の少女も・・・それを望んだ。

アインハルト「これから・・・最期まで私は翔さんを愛し続けます。霸王の拳に誓って」

相良「アインハルト・・・」

愛し続ける・・・か。

いつの日も、俺を好きになる人は皆そういうな。

相良「・・・俺だって、アインハルトの事、大切な人だと思ってる。だけど・・・俺の事、いつか忘れるんだ。だったら・・・別の人を・・・」

アインハルト「嫌です・・・嫌ですよ！！そんなの、絶対に嫌です！！！！」

俺を抱きしめる力が更に増した気がする。

これが・・・想いで強くなる人なんだ。

アインハルト「翔さんと初めて出会った日の事、まだ覚えてます。だから、私が教えます。翔さんが忘れていること、私が全部教えます。私が・・・翔さんのもう一つの記憶になってあげますから」

もう一つの・・・記憶。

真っ直ぐな、純粋な瞳が、俺を見つめる。

まるで吸い込まれそうだ。

だったらいっそ、吸い込まれてみよう……そう思う。

相良「ありがとう。“アイハ”俺の側に……俺の側から、絶対に離れるな。俺が離さない限りな」

そう言ってアイハを強く抱きしめる。

アインハルト「翔さん・・・嬉しいです・・・」

俺は決めた。

一人の霸王の子を、心から愛すると。

そしてアイハだけじゃなく

相良「でも、俺には妻がいる。あいつらのことだって大切だ。だから、アイハだけを愛する事はできない。良いな？」

アインハルト「はい。私を好きでいてくれる。それだけで十分です」

相良「っ・・・そ、そうか」

その時のアイハの笑に不覚にも少しドキッとしてしまった。

アイハはそれを見抜いたのか妖艶な笑を浮かべて俺の右腕に抱きつく。

相良「な、なんだ？」

アインハルト「今日は、一日中一緒に居てください／＼／＼／」

相良「っ!?!」

いつもの落ち着いた雰囲気とは違い、積極的なアイハにドキドキしている自分が悔しかった。

誘っていることくらいは容易に察した。

相良「ま、まあ・・・せつかくだしな」

そう言っただけ俺は半ば強引にアイハの家に向かった。

その日の夜、アイハの家でアイハの嬌声が響きわたったのはノクタ  
ーンの話である。

そして翌日、予想通りと言っかなんというか、相良翔の公開処刑が行われた。

相良「うん・・・分かってました・・・」

右蕪・火澄「流石に今回は助けられない」

相良「うん・・・分かってます」

全身を様々な色のバインドでグルグル巻きにされ、正座で座る俺。

そして目の前に広がる、妻達の膨大な魔力を集結させた砲撃。



全員「今日一日中、相手してくれるよね？」

い……一日中!？」

相良「断らせていただきます」『拒否権は無いよ』……」

さあ、俺は死ぬのか。

いや、死なないから良いけど……痛みは味わうんだよね……

全員「非殺傷設定解除」

マジっすか……

全員「「「「「「全力！！！！！！！！全壊！！！！！！！！」  
！！！！！！！！」

あ……皆、漢字一文字間違ってることに気づいてないな……

そしてこの日、一日中相良翔の悲鳴が響きわたったのは、ここだけの話し。

コラボ番外編 サイエス+パワード・マウンテン+IKA!!? (前書き)

今回はサイエス先生の『魔法少女リリカルなのはstriker』と『元神魔王リリカルなのは外伝』デルタソウルダイバースとのダブルコラボに初挑戦します!!

本気で初挑戦なので、お二人の先生には感想とご指摘を頂きたいです。

それではどうぞ!!

コラボ番外編 サークェス+パワード・マウンテン+IKAII?

No Side

相良「・・・了解。今すぐ向かいます」

とある日、相良翔は通信を受けて陸宙管理本部を出ていく。

向かう場所はクラナガンのとある荒野。

何故かそこが騒がしいとのこと。

相良「騒がしい・・・ね」

何となく知ってる人物を思いだしながら彼は走り出す。

音使「お、翔……どこ行くんだ？」

相良「これからちよつと外に出る。来るか？」

音使「面白そうだから行く」

相良「そうか……だったらこい！」

谷島「俺も行くぜ！」

相良「嫌だ」

谷島「何で!？」

相良「いや、流れるに」

谷島「はiiiiiiii!?!?!?!?!?」

さてそんなこんなでメンツはそろい、男子3人で行ってきます!!

一方その頃、二人の男性達も相良翔達と同じ場所に向かっていた。

フォルカ「フェルナンド。確かここだよな？」

フェルナンド「そのはずだ。別に俺達が行く必要も無い気がするけどな」

フォルカ「ま、地上本部も管理局も人で不足だからな」

そんな愚痴をこぼしながら搜索を始める。

ヒヤーツハツハツハツハア!!!!!!!!!!

フォルカ・フェルナンド「え……ええええええ……」

早速見つかった。

しかも堂々と現れた。

まさに自分が犯人ですよと宣言しているかのよう。

フォルカ「で、お前誰？」

リッパ「絶望の化身、リッパ様だ!!!!!!!!!!」

フェルナンド「出っ歯……ぷっ!!」

リッパ「リッパ様だ!!!!!!!!!!」



フォルカ「フェルナンド、この世の出っ歯の人がかわいそうだぞ。明石家と名のつく人とか」

リッパ「貴様ら！！俺様はリッパだ！！いい加減覚える！！！！」

出っp・・・もとい、リッパは怒っていた。

フェルナンド「どうでもいいけど、お前は何がしたくてここにいるんだ？」

リッパ「俺様と一緒に逝かねえか？」

フォルカ「・・・（纏う気が変わった・・・）」

フェルナンド「（殺意溢れ出てるな・・・）」

二人はアイサインをかわして意識を変える。

おふぎげ無しの、真剣な状況。

フォルカ「俺達は死なない。まだ・・・まだ死ぬわけにはいかないんだ」

フェルナンド「お前となんか逝かねえよ」

リッパ「まあまあそう言わずに」

フォルカ・フェルナンド「!?!」

気づくとリッパーは二人の背後に回っていた。

フォルカとフェルナンドは拳に“何か”を纏い、素早く振るった。

リッパー「うおっと!」

バック宙でそれをかわす。

リッパー「まあいい。どうせためーは俺にぶっ殺されるんだからなあ……」

そう言って3人は戦う。

そして相良翔達も現場にたどり着いた。

ヒヤーツハツハツハツハツハア!!!!!!!!!!

谷島・音使「!? 敵か!？」

二人は構える。

相良「あ、やっぱり・・・」

相良は呆れながら頭を抱えていた。

相良「出っ歯の野郎・・・はぁ・・・あまり会いたく無かったなぁ・・・」

谷島「何だ翔、知り合いか？」

音使「変わった知り合いだな」

相良「まぁ・・・な・・・」

谷島「つか・・・あいつ・・・」

リップパーと闘う2名の男性に目をやった。

音使「龍牙？・・・いや、龍牙にしては音が違っし容姿が違いすぎる・・・」

相良「ああ。取り敢えずあの二人の援軍に行くぞ！」

谷島・音使「了解！」

相良「メルキュール、前のリベンジだ。行けるな？」

メルキュール「はい。任せてください！」

相良「マルスは補助だ。良いな？」

マルス「分かってます」

そう言っただけ俺は二人の援護を距離100mから行う。

蒼い刀を鞘に納め、抜刀術の構えをとる。

相良「

スターダスト・テイルウイング  
未だ果てぬ蒼き聖約

! ! ! ! !  
」

俺は距離100mの敵を切り裂く! ! ! ! !

リッパ―「ぐはあっ!?!」

フォルカ「何!?!」

フェルナンド「斬撃!?!どこから!?!」

3人は今起こった現象に驚きを隠せずにいた。

リッパ―「この斬撃……あの時の!?!」

そう言つてリツパーは斬撃を放つた人の方向を向いた。

リツパー「久しぶりじゃねえか！」

フォルカ「・・・あいつは・・・」

フェルナンド「強そうだな・・・」

相良「久しぶりだな出つ歯ー。元気そうだな」

リツパー「出つ歯ーじゃねえリツパー様だ！」

フェルナンド「援軍・・・か？」

フォルカ「管理局か・・・地上本部か・・・」

フェルナンド「いや・・・管理局とか地上本部にあんな強者はいないはずだ」

そんなことを考えていると白銀のBJを着て、紅きシューズを履き、蒼い瞳に蒼い刀を持った男性が二人のもとに来る。



相良「始めまして。相良翔と言う」

フォルカ「俺はフォルカ・ナカジマ」

フェルナンド「フェルナンド・アルドウクだ。よろしく」

そう言うのと更に二人の男性が来た。

相良「紹介する。こっちが谷島芳樹。そんでこいつが音使奏多」

谷島「よろしく」

音使「初めまして」

フォルカ「ああ」

フェルナンド「よろしく」

そう言うって4人は握手をかわす。

相良「さて・・・出っ歯。さっさと決着つけんぞ」

そう言うって抜刀術の構えをとる。

リップパー「お前から先に殺してやるよ！」

そう言ってお互いに武器を構える。

リッパ―」

シューティング・アクセラレーション

」

相良」

オーバースタージェスト  
新たに生まれし蒼き星の聖約

」

二つはぶつかり、巨大な爆発を起こす。

相良「くっ!?!」

巨大な爆発が収まるとそこにリッパはいなくなっていた。

フォルカ「勝った……のか?」

相良「いや、逃げられた。……あいつ、お前らと戦ってたから体力無くてバトル続行やめたっばい」

フェルナンド「凄い一撃だったな・・・今の」

相良「まあな。そりゃ、違う意味で生きてる世界が違いすぎる」

フォルカ「へえ・・・」

音使「んで？そちらはどんな事情でこっちに？」

フェルナンド「俺達はここが五月蠅いから迷惑してるって奴がいたんできた」

谷島「・・・それってえ・・・」

相良「まさか・・・出っ歯の野郎・・・」

5人は呆れていた。

相良「出っ歯ーは・・・わざと俺たちをここに集めたんだな」

音使「理由はどうでも良いにして、俺達だって忙しいのにな」

フォルカ「何か事件でも？」

相良「ああ。俺達は俺たちで追ってる事件がある。あと少しで終わりにするつもりだけだな」

そう言うと相良はデバイスを待機モードに戻し、宙を見上げる。

相良「取り戻して、いつか　　幸せな日常を手に入れる。変化するかもしれない。失うかもしれない。けれど、それで構わない。失ってでも手に入れたいものが、俺にはあるからな」

フォルカ「!？」

その瞳を見たフォルカは、過去の自分に似ているものを感じた気がした。

同じように、何かを背負って生きてきた人の瞳。

フォルカ「・・・頑張れよ。俺は応援してる」

フェルナンド「何かあったら、いつでも連絡くれ。いつでも助けてやる」

相良「はは、それは助かる。なにせ敵は強大だからな」

フォルカ「それでも、勝つんだろ？」

相良「ああ。もちろんだ」

相良「そんじゃ、俺達は帰るよ」

フォルカ「もう少し話しをしたかったがな」

相良「俺も総裁やってな。忙しくてしょうがないんだ。今日は本当に良い出会だった」

フォルカ「俺もだ。また“今度”会った時は手合わせ願いたいが良いか？」

そう聞くと相良は一瞬、表情を歪めたがすぐに戻し・・・

相良「ああ。もちろん」

そう言った。

音使「そんじゃ！」

谷島「またな！」

フェルナンド「ああ。またな！」

そう言って相良達は宙を飛んでいった。

フェルナンド「またな・・・か。また会えると良いな」

フォルカ「会えるさ。・・・会えるって、信じるさ」

そう。また・・・会うのだと。

フォルカ・フェルナンド「・・・」

彼らが去っていった宙を、二人はただ見つめていた。



相良「さつて、仕事再開だ！」

ルチア「はいこれ今日の書類！」

そう言うとまさにスカイツリーを思い出すかのような巨大な書類。

ゴゴゴオオオとサウンドが聞こえてきそうな、おぞましい書類。

相良「くそお！！！！出っ歯ーの野郎！！！！」

ルチア「？出っ歯ー？」

相良は八つ当たりして仕事を行い、ルチアは明石家の人を何故相良が恨むのか、原因を考えていた。

そして機動六課にフォルカとフェルナンドは複雑な心境で戻った。

スバル「フェル兄！お帰り！！」

スバルが勢い良く抱きつく。

フォルカ「あ、ああ。ただいま」

スバル「？どうかしたの？」

フォルカ「あ……いや……。何でもない」

優しい声でそう言い、スバルの頭を撫でてあげていた。

フェルナンド「そう……だな。何でも……無いよな」

その光景を見たフェルナンドもまた、そう思っただった。

きつとこれから、何かが起こる。

それは相良達にも、フォルカ達にも……

そんな中で、今ある日常がどれほど大切で……どれほど失いたくないか、今一度考えさせられたような気がする。

『幸せな日常を手に入れる。変化するかもしれない。失うかもしれない

ない。けれど、それで構わない。失ってでも手に入れたいものが、俺にはあるからな』

相良が言ったその言葉が、二人の心に深く刻まれたのだから。

フォルカ・フェルナンド「俺達だって幸せな日常くらい、どんなことがあっても手に入れてやる。これからどんな事件が起ころうとも・・・日常を・・・絶対に！！」

そして二人は再び決意を新たに機動六課の人として、事件に立ち向かう。

そう。この出会いは  
・・大切な出会いだった。

日常がどれほど大切か、今一度考える・

コラボ番外編 サーシエス+パワード・マウンテン+IKA II? (後書き)

相良「うわ・・・めっちゃ最後シリアス風・・・」

IKA「リッパーさんはやられキャラでしたね・・・」

音使「俺らの中でそう言うキャラが定着してるのか？」

谷島「その可能性は高いな」

コラボ番外編 勦b + I K A II? (前書き)

今回は『魔法少女リリカルなのは』転生者殺しの転生者』とのコラボです。

相良翔の過去も見ることができます。

それではごっご。

コラボ番外編 勳b + IKAII?

No Side

相良「さて……どうしてもんかなあ……」

今、陸宙管理本部総裁の相良翔は海鳴市の海鳴公園にて、頭を抱えていた。

相良は何故かここにいたのだ。

相良「えっと確か……仕事終わって家に帰ろっと思ったんだけどなあ……」

そう。相良は普段通り家に帰るために転送魔方陣に乗ったのだ。

だが相良が訪れたのは遙か遠く、地球にある海鳴市だった。

相良「全く、よりによってここになるなんて……な」

まるで運命を感じるようだ、相良は自虐的な笑を浮かべる。



??「ここに何かあるのか？」

相良「!?!」

突如、背後から聞こえた冷たい声に……ゾクツとする殺気。

相良は即座に反応してデバイスを構える。

だが、背後にいたのは鞘に収められた刀を持つ一人の少年だった。

相良「おいおい……小学生でそんな殺気だせんのかよ……」

小学生ながらも、彼が放つ殺気は熟練者の相良ですら恐るほどだった。

??「お前は、転生者か？」

相良「転生者？」

転生者・・・簡単にいえば何かの事情で死んだ人が再び世界に転生すること。

相良「生憎、俺は転生者じゃない」

??「何・・・だが、お前の存在はこの世界の者じゃない」

相良「そうみたいだな。どうやら俺は、別次元の海鳴市に転送されてしまったらしい」

??「・・・どういう意味だ」

相良「まあ、ちよつとな」

そう言うと相良は今までに至る経緯を話した。

??「なるほど・・・なら、俺が殺す相手じゃないな」

そう言つと少年は殺気を放つのをやめた。

相良「だとするなら、お前は一体誰を殺す存在なんだ？」

??「俺は  
転生者を殺す転生者だ」

相良「転生者を殺す・・・転生者・・・」

相良は今まで転生者に出会つてきた。

その中で今出会つた彼はまた異質だった。

相良「転生者を殺す理由はなんだ？」

??「転生者の存在が、『物語』<sup>みらい</sup>を無かつたことにするかもしれないからだ」

相良「・・・ああ、なるほどな」

その説明だけで相良は全てを理解した。

それを確かめるように、相良は自分の中で出来た結論を言う。

相良「つまり転生者は、悲しい現実・・・」  
『こんなはずじゃなかった未来』を修正できる。だが、それと同時に『無かった』事にする  
ことも出来るからか・・・」

??「その通り。下手をすれば物語そのものが無くなり、世界は大きく変化する。俺はその修正を行う為に、転生者を殺す」

相良「なるほど・・・」

だが、相良はどこか腑に落ちない点があるようで、それを聞いてみた。

相良「お前、他に・・・もっと大事な理由があるんだろ？」

??「・・・どうだろうな」

相良「俺に聞くな。分かってるんだろ？」

??「価値があるものではないかもしれないぞ？」

相良「嘘付け。お前が命と人生張ってやってることだ、価値がないわけないだろ。・・・命張って、全てかけて・・・何も手に入らないわけ・・・ないんだから」

??「・・・」

突然、相良の声に何かを感じた少年は、聞くことにした。

??「・・・何があったんだ・・・お前に」

相良「・・・俺は、海鳴市と言う、一つの世界に否定された存在だ」

これは、相良翔が魔法使いになるまでだ。

相良翔は小学2年生までは魔法も知らない、地球出身のただただ平凡な小学生だった。

高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかの3名とは幼馴染でいつも仲よしだった。

成績優秀、スポーツ万能、人望も厚い……まさに完璧少年だった。

だが、そんな日常を壊す事件が起こった。

なのは達がトラックに轢かれそうになったとき、相良翔は力を覚醒させた。

そう、超能力で彼女達を助けた。

だが、3人の人生を助ける為に、彼は自分の人生を捨てた。

超能力を使った事は知れ渡り、相良は独りになった。

更にその翌年、相良翔は両親を失う。

相良の両親は翔に内緒で別次元に向かっていた。

だがそれを知らない翔は悲しみに暮れるが、魔法の力を手に戦う事を誓う。

そしてその後、様々な事件を経て、今に至る。



相良「かなりざっくり説明すると、こんな感じだ」

??「つまり、お前の力は・・・」

相良「ああ。この世界には受け入れてもらえず、今まで築き上げてきた信頼とか、全部壊れたってことさ」

その言葉に、少年は自分に似た何かを感じた。

ただ普通に生きてきたとしても、人生はほんの一瞬の出来事や、小

さな出来事、たった一つの出来事で壊れてしまつのだと・・・相良も、そして彼もそれを痛い程経験している。

だからこそ、似た何かを感じたのだろう。

??「お前は、その世界の奴らを殺そうとは思わなかったのか？」

相良「?なんでだ？」

??「正しいことをして、それでも何も得ることは出来ずに失つてばかり・・・」

相良「だから殺すってか？」

そう言つと相良は笑う。

??「何がおかしい？」

相良「ま、そう考えたことが無かつた・・・って言つと嘘になる」

結局の所、人は感情を持つ生物だ。

雑念だらうが何だらうが、感情を持つ生物である以上、こんな殺意を持ってしまつのも仕方ない。

相良「でもな、俺は自分の不幸を、誰かを殺すことで無くす事ができるとは思わない」

??「・・・なるほど。それがお前の生き方か」

相良「ああ。別にお前の生き方を否定する訳じゃない。殺す事が正しいとも思わないが、お前自身が背負ってる、その重たい荷が降りるまでは・・・正当化することも出来ないし、否定することも出来ないさ」

??「・・・」

ここで少年は不思議な感覚を覚える。

今まで殺すと言つことに関して、否定されたり受け入れられたりがあるが、彼の言葉はその全てではない。

二択の問題で、三択目を選んだかのように・・・

三択目は、自分自身の答え。

誰も用意しない、自分自身が創り出した・・・導き出した答え。

それを聞いた少年の中で、何かが変わったのではないかと感じた。

??「不思議だな。最初、殺そうと思っていた奴に色々話してしまつたな・・・」

相良「それはこっちのセリフだ。俺だって殺されそうになったんだ。そんな奴にベラベラ喋るなんて思ってなかったさ」

??「・・・鳴海湊だ」

相良「え？」

湊「俺の名前・・・湊でいい」

相良「・・・相良翔だ。翔でいい」

そう言うと二人は握手をする。

友情が芽生えた？

違う。

お互いに仲間意識を持った？

違う。

ただ

相良・湊「何となく教えた」

ただ、それだけ。

すると相良の体は魔力の粒子となってきた。



湊「・・・帰るのか？」

相良「みたいだな。まあ元々この世界に関して俺は受け入れてもらえる様なやつじゃないし、タイムパラドックスみたいなのが起こさなくても困るから別に構わないがな」

全てを受け入れたように相良はそう言った。

湊「・・・じゃな」

相良「ああ。また会えるとき、出来ればお前の全ての重たい荷が降りてるといいだけだな・・・」

湊「それは俺のセリフだ。お前も、何か重荷を背負ってる。さっさと降りせばいいはずのものをな」

そう言うとお互いが笑い合う。

相良・湊「お互いに、重荷が降りることを

「  
「

そう言って相良は消滅した。

湊「・・・さて、転生者殺しの続きだ」

そう言って湊は再び血腥い世界に入る。

相良「全ての荷なんて・・・降りるわけがないのにな」

自分の世界に戻った相良は、自虐的な笑でそう言う。

相良「・・・」

相良はそのまま、家に戻る。

相良「ただいま」

皆「お帰り！！！！」

そして相良も、戦いの日々に戻っていく。

それは  
ろすために

お互いが担いでいる余りにも重たい荷を、いつか降

コラボ番外編 勦b + I K A II? (後書き)

I K A「どうだ!？」

相良「0点」

I K A「相変わらず低評価過ぎません!？」

I K A「ええ、湊さんの登場ですが、本人とは性格が変わってしましたね」

相良「だから0点。0点・・・貴様は0点だ!!!!!!!」

I K A「あれ・・・気のせいが存在まで点数付けられてる気が・・・」

他にもコラボした人は感想などに書いて送ってください!!

お願いします!!!

コラボ番外編 白き修羅 + Rewrite + IKA!!?

No Side

相良「……」

真道「……」

龍牙「……」

この小説の開始早々から3作品の3名の主人公がお互いの顔を見合っている。

取り敢えず原因を振り返る。

1958

俺達はポケっと休みを使い、街中を歩いていると突如、穴に落ちた。

……え？何故穴に落ちたって？

相良・真道・龍牙「知らんがな」

ファンの皆さん、何ということでしょう（ビフォーアフター風）  
3  
人の主人公が同時にツッコミをいれたではありませんかあ。

相良「えつとお・・・取り敢えずこの場所を検索するかな・・・マ  
ルス」

マルス「既に開始しております」

相変わらず相良の考えが分かるデバイスは検索を既に始めていた。

メルキュール「くっ・・・わ、わたしだってそのくらい・・・ぶっ  
ぶっ」

相良「？」

真道「デバイスにまで嫉妬されてるのか・・・」

龍牙「大変だな」

ここでファンの何人かは思うはず。



『お前らが言える立場じゃないよ!?!?』

『てかお前ら3人の鈍感野郎が嫉妬やらをよく言えたな!?!?』  
・  
・  
・

マルス「検索完了。現在地は私達のいる世界とは別の『フュージョン・ゲート』と呼ばれる場所です。」

相良「融合の門……」

真道「なるほど。俺達の物語も、この次元のせいで混ざったってことか……」

龍牙「全く迷惑な話だ。どうやって脱出すればいい？」

マルス「すみません。それは不明です」

マルスは凹んだ様な声で謝る。

相良「いや、マルスは悪くない」

真道「まずはこの世界を調べてみる必要があるみたいだな」

龍牙「そうだな。この世界の事を知ってから対応するしかないな」

メルキユール「同感です。現状で最善の選択かと」

相良「なら、行くか」

そう言っただけで彼らは何があるか分からない道の世界を歩き始める。

相良「・・・!?!」

真道「なんだ・・・これ」

龍牙「凄い威圧感・・・」

三人は進んでいる途中、突如強大な力を感じ取った。

その強さと威圧感は相当なものだった。

相良「・・・来る！」

真道・龍牙「!?!」

3人は即座にお互いの背中をあずける形で3角形をつくるような陣形をとった。

そして各々の武器と力をだす。

そして3人の前に現れたのは巨大な炎の鳥獣。

相良「あれは・・・確か、『ボム・フェネクス』だ」

真道「知ってるのか？」

相良「ああ。機械兵と炎の魔人などが混ざった結果として生まれた融合体」

龍牙「なるほど。融合の門って場所だけあって、融合した生物が沢山いるって訳か」

そう言いながら3人はフェネクスに武器と力を向ける。

相良「さて・・・行くか」

そう言っただけで彼らは攻撃を始める。

相良の手には紅と蒼の二挺拳銃。

真道の手には蒼き刀。

龍牙は覇気を纏う拳。

相良は後ろに下がり、二人の援護に回った。

真道「

全てを斬り裂く刀

」

龍牙「いでよ

覇龍

!!!」

真道の刀からは蒼い閃光が、龍牙の右手からは覇龍が現れ、飛翔するフェネクスに直撃する。

真道「やったか？」

相良「いや・・・まだだ！」

そう言つて相良は白銀の魔力の弾丸をいくつも自分の周辺に展開させた。

そしてフェネクスの体は二人の攻撃で炎となつてバラバラに散らばつた。

真道「手応えが無い・・・」

龍牙「奴の体は炎そのもの・・・だから適用する攻撃が限られてくる訳か・・・」

相良「そうだ・・・二人とも！伏せろ！！！！」

そう言うと二人は伏せ、相良は展開した白銀の弾丸を散らばった全ての炎目掛けて放つ。

相良「

スターダスト・クラスタ  
星屑の流星群

」

放たれた銃弾は綺麗な流星群となり、炎全てに当たって破壊した。

相良「手応え有り・・・さて、進むかな」

そう言ってデバイスを待機モードにして二人のもとに向かう。

真道「すごいな・・・」

龍牙「全てを正確に打ち抜いた・・・お前の本領は刀ではないのか？」

相良「確かに一番は刀だけど、俺のデバイスは俺の求める全ての武器に変化することができてな。銃も使える。もちろん杖でもなんでもなれる」

真道「全てか・・・俺のデバイスでも3つが限界だが」



龍牙「羨ましい・・・」

そう言いながら龍牙は若干orzな様子だった・・・

相良「ちょ・・・うえ」

真道「なに嘔吐した様な声出してるんだ？」

相良「いや、あれは・・・」

龍牙「おいおい・・・この世界は強い敵多すぎないか・・・」

そう言うと今度は鎧と槍を持った騎士とそれが乗る鎧を着た馬が現れた。

龍牙「翔。あれがなんだか知ってるか？」

相良「『ガイドレイク』地天の騎士と呼ばれている。悪いがかなり強いぞ」

龍牙「どれくらい？」

相良「ヴァンが相打ちになった・・・って言えば分かるか？」

龍牙「!？」

過去に相良とヴァンが二人で向かった任務でガイドレイクは現れたことがある。

その時はまだ未熟ながらもヴァンは相打ちとなってしまった。

そのことに龍牙も真道も驚いていた。

相良「ま、だからって俺達が怯える必要はない。龍牙と真道と俺、3人がいればあんな奴・・・苦戦することもない」

真道「翔・・・」

龍牙「……」

相良「それに、俺達は帰らないといけない。帰らないといけない場所が……あるだろう?」

真道・龍牙「!?!」

その言葉で二人の目から力が戻る。

相良「マルス・メルキュール。モード『刀・鎧』」

そう言うと相良の全身に蒼い鎧が着けられ、紅い刀が手にもたれた。

相良「力を貸してくれ。俺と二人で『ユニゾン』をするんだ」

真道「な……!?!」

龍牙「ユニゾン……だがそれは、ユニゾンデバイスとすることだろ?」

相良「いや、俺の能力は相手のリンカーコアと俺のリンカーコアと繋げてユニゾンができるんだ。今はそれしかない。まだ試したことないメンバーだけど、やる価値はあると思う」

そう言っている最中にも、ガイアドレイクは3人を見つけ、槍をこちらに向けて突進してきている。

真道「・・・分かった」

龍牙「俺達の力。お前にあずけた」

相良「ありがとう」

そうやって3人は拳と拳を重ね合う。

心身ココロ・カラダの同調

白銀の光が3人を包み、光の中から相良の白銀、真道の黒、龍牙の赤が混ざり、夜桜をイメージする髪色となり、髪型はボサボサした感じでBJは紅と黒が混ざった服になり、手にもたれたのは白銀の刀。

相良「調子はどうだ？」

真道《不思議だ・・・輝いている世界なのに・・・眩しすぎなく、丁度いい》

龍牙《なるほど・・・これが相良翔のユニゾンなのか》

二人とも高評価だった。

相良「さて・・・行くぜ！」

そう言っつて両足を強く踏み込み、ガイドレイクの槍の先端と刃の先端をぶつけ合った。

相良「モード『修羅拳』」

そう言っつと彼は目にも止まらぬ高速拳の連打を浴びせ、最後は空円脚と言っつ回転蹴りで締める。

その技の名は

相良・龍牙  
☐

機神拳

☐



その拳はガイドレイクを吹き飛ばした。

相良「モード『最高神剣』」

そう言つと今度は右手に黄金の剣がもたれた。

そして剣に膨大な魔力が溜まる。

相良・真道」

穢<sup>レイ</sup>れなき<sup>ヴァ</sup>炎<sup>ティ</sup>の<sup>イン</sup>聖劍

」

その一撃で前方の全ての物は破壊された。

だがガイアドレイクは槍での一撃で防いだようだ。

その分傷は大量に与えてある。

龍牙《これで

》

そして彼らは白銀の刀を持ち、  
覇気・神の魔力・白銀の魔力を収束  
させる。

相良・真道・龍牙「」

最期だ!!!」

そして放たれる、最強の一閃

相良・真道・龍牙 『 『 『 『 『  
『 星屑果てぬ最高神の覇 スターダスト・プレイヤー 『  
龍一閃 『 ..... 『 『 『



放たれ白銀の覇龍が敵を裁くかのように眩き砲撃となり、ガイドレ  
イクを包み込み・・・消し飛ばす。

ユニオンアウト  
同調解除

そう言うと3人は元通りに戻った。

真道「ふう・・・疲れた」

龍牙「ユニゾンはここまで体に負担がかかるのか・・・」

相良「いや、初めてだから体がなれないだけだ。ま、これが最初で最後になってくれることを祈るけどな」

そう言うと世界にヒビが入り、徐々に崩壊してくる。

相良「お、そろそろ戻れるみたいだな」

真道「さっきの一撃で世界の概念に影響を与えたみたいだな」

龍牙「はあ・・・妙に疲れる一日だったな」

3人は苦笑いする。

相良「でもま、貴重な経験だったことには変わらない。それに、お互いに大技が出来たしな」

龍牙「ああ。感謝するぜ。また・・・今度な」

真道「また会う時は、いつになるか分からないが、お互い頑張ろう」

相良「ああ。二人も、頑張れな」

龍牙・真道「ああ！」

そう言って世界は崩壊して、俺達は光に包まれた。

相良「……ここは……戻ってきたのか」

目を覚ますと俺は陸宙管理本部の総裁室にいた。

相良「……夢……じゃないみたいだな」

そう言って彼は立ち上がって宇宙を眺める。

龍牙「ふう……やっとこれたあ……」

なのは「あ、遅いよ龍牙君！」

フェイト「待ってたんだよ！」

はやて」「あと少しで帰るといっちゃったわ」

アリシア「とか言いつつ最後まで待とうって言ったのははやてだけ  
どねっ」

そう言っただけ彼は彼女達と過ごす。

真道「スバル。大丈夫か？」

スバル「は、はい。私は大丈夫ですけど・・・創世さんは体大丈夫ですか？」

真道「ちょっと疲れた。でもま、休めばどうにかなるさ」

そう言ってまた彼も日常に戻る。



相良「・・・さあ、仕事だ！」

そう言っても・・・戦いの世界に戻る。

『フュージョン・ゲート』そこは、全ての想いや体が共に混ざり合  
い、一つの奇跡を生む場所。

絶望も、希望も生み出すことができる

奇跡の世界

相良・真道・龍牙「「だけでもう一生行きたくない！！！！！！！！」」

そつ心に誓つる人であつた。

コラボ番外編 白き修羅 + Rewrite + IKA!!!? (後書き)

IKA「ふう・・・疲れたぜ」

相良「 - 100点! 」

IKA「低すぎてもはやマイナス!？」

ルチア「当然ね。私が登場してないし」

ヴァン「僕もいませんよ」

相良「ヴァンは死んでるから仕方ない」

ヴァン「( ;( )! 」

あなたの真実に立ち向かう（前書き）

相良翔は自らの全てを明かした。

それによって、彼女達の中で様々な物が変わる。

その変化は彼と彼女達をぶつけ合わせる。

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
t y } 始まります。

## あなたの真実に立ち向かう

相良 Side

相良「・・・本当にやるのか？」

ある日、俺は訓練室に呼び出された。

呼び出したのはなのは、フェイト、ルチア、シグナム、ヴィータ、シャマル、スバル、ティアナ、ギンガ、アイン、アリシア、リニス、キャロ、ルーテシアだ。

客席・・・の様な場所には父さんと母さんとメガーヌとヴィヴィオとアイハとイクスの6人がいた。

皆が呼び出した理由は他でもない。

なのは「これ以上、戦わないで」

そう。前回のアイハとのデートで俺は俺自身の真実を述べた。

それを聞いていた彼女達は俺を止めに来んだ。

フェイト「これ以上戦えば・・・全部失う・・・そんなの嫌だよ！」

相良「なのは・・・フェイト」

訓練所に呼び出したって事は・・・

相良「これしか、俺達に分かり合う道は無いのか？」

俺は私服。

だが彼女達はすでにBJを装着、更に武器を手に俺と話し合う。

ルチア「非殺傷設定で、殺すつもりで戦うよ。そうすれば翔は戦わないで済むから」

相良「・・・」

いつの世も、戦いしか物事解決させることができないなんて・・・  
どれだけ皮肉な話なんだろう。

ティアナ「翔さんが抵抗しなければ、すぐに終わります」

スバル「ただ、覚悟してください！」

そう言って皆、俺に武器を向ける。

「相良」

これが、俺の選んだ道なのか



誰にも聞こえない声で、ぼそつと言って俺は彼女達の方を向く。

相良「……」

なのは「行くよ・翔君!!!!!!」

そう言って皆は、俺に攻撃を始めた。

右蕪 Side

右蕪「翔・・・」

火澄「私・・・こんな未来の為に、翔を育てた訳じゃないのに・・・」

火澄は涙を流す。

それは、母親としての責任なのだろう。

だが・・・

右蕪「火澄は、何も悪くない。これは、翔自身が創り出した結果だ。俺達がとやかく言える状況じゃないんだ」

火澄「分かってる・・・けど、こんなの・・・」

メガーヌ「火澄・・・」

周りにいるヴィヴィオ達もそうだろう。

きっと同じ気持ちでこの戦いを見ている。

右蕪「いつの間にか・・・俺達よりも、大きな荷物を背負うようになってしまったな。翔」

メガーヌ「私達が、あんなに若い彼に追い越されるなんてね」

本当は、ここで俺と火澄で止めることだって可能だ。

だが、翔達はそれを拒むだろう。

邪魔になるだけだろう。

止めることが、親として正しい選択なのは分かっている。

だが、翔達を止める事はしない。

もう、俺達の問題では無いからだ。

俺達はただ、この勝負の結末を見届けるしかできないのだ。

No Side

なのは「デイバイン・・・」

フェイト「トライデント・・・」

二人は魔力を集める。

なのは「バスター!!!!」

フェイト「スマッシュャー!!!!」

相良「・・・」

二人の砲撃は彼に直撃して爆発する。

スバル「リボルバーキャノン!!!!!!」

ギンガ「ストームトウース!!!!!!」

リボルバーナツクルのナツクルスピナーを回転させて発生させた衝撃波を、ナツクルに纏ったまま繰り出した。

相良「ぐっ!?!」

彼はそれを防ぐことができずに殴り飛ばされ、壁にめり込む。

ティアナ「クロスファイアー・・・」

相良「!?!」

ティアナは大量に出したオレンジ色の魔力弾を不規則な軌道を描きながら放った。

ティアナ「シュート!!!」

相良「・・・」

放たれた弾丸を彼は避けずに受けた。

相良「・・・がはっ!?!」

今までの攻撃が効いてきたのか、彼は口から大量の血を吐き出した。

ルチア「なんで・・・何でデバイスを出さないの!?!」

相良「・・・」

彼の首元に血のように紅い刃を向けるルチアは怒るように言った。

ルチア「今、翔は私達に殺されかけてるのに・・・どうして!？」

そう聞くと彼は無表情で答える。

相良「俺は“死なない”よ。少なくとも、ルチア達に俺は“殺せない”」

そう言うと彼はルチアが動揺している隙にルチアを蹴り飛ばし、地面に一步、強く踏み込んで走り出した。

フェイト「速い!？」

その速度は皆の予想を大きく上回るほどだった。

シグナム「はあああ!?!?!」

相良「っ!？」

だが、誰よりもそれに冷静に対応したシグナムが横から彼を切り裂こうと刀を振った。

それに反応した彼は右足の踵を地面に付けそこに魔力を集中させ爆



発させると後ろに素早く移動した。

シグナム「ふむ・・・流石に対応が早いな」

相良「シグナムもな。流星は烈火の将」

シグナム「・・・何故、武器を出さない？」

相良「・・・」

彼は無言で答えず、両手に白銀の魔力を纏わせてファイティングポーズをとる。

シグナムは刀を構え、先に切りかかった。

相良「・・・!?!」

だが、彼が戦っている相手は一人ではない。

ヴィータ「おらああああ!!!!」

背後からヴィータが槌を振るった。

前方からはシグナムの一閃。

相良「ふっ！！！！」

シグナム・ヴィータ「！？」

そこで彼がとつた行動は、地面を強く殴り、地面に亀裂を入れてシグナムとヴィータを怯ませた。

相良「そこだ！」

ヴィータ「！？」

その隙に彼は素早くヴィータに殴りかかる。

ヴィータはとつさにプロテクションを張るが彼はそのまま押しこみ、今度はヴィータを壁にめり込ませた。

ヴィータ「ぐあ！？」

ヴィータは右手で腹部を押さえてしゃがみこむ。

シグナム「はあああああああ！！！」

相良「せいっ！」

背後から勢い良く切りかかったシグナムの刀と魔力を纏った拳はぶつかり合う。

シグナム「くっ！」

相良「・・・」

二人は距離をとって再び構える。

スバル・ギンガ「はああああああ！！！！！」

彼が着地した瞬間に二人が両サイドから殴りかかってきた。

相良「・・・」

彼は左右の二人を見たが、両手を両サイドに向け、大の字の形をとる。

2010

そして二人の拳は彼の片手に止められる。

スバル「嘘！？」

ギンガ「そんな・・・私達のを片手で！？」

そして彼は両手をクロスさせて二人をぶつけさせる。

スバル・ギンガ「きゃ！！！」

二人同士の拳がぶつかり合ってしまった影響で二人は吹き飛ばされる。

アイン「ディアボリック……」

相良「！？」

その際に天井近くからはアインが右手に漆黒の球体を完成させた。た。

そしてその球体は膨張するように勢い良く広がった。

アイン「エミッション!!!!!!」

相良「・・・」

彼は右手に神経を集中させると、右手に纏われた魔力が形状を変え、一本の刃となる。

そして作られた白銀の刃を彼は迫り来る闇を切り裂く。

アイン「!?!」

まるで薄い膜が切れたかのように、彼は闇を切り裂き、攻撃を受けなかった。

アイン「流石は・・・我が主」

相良「主に逆らうなんてな・・・今からお仕置きだ」

そう言つて彼は右手にある魔力刀を薄く、長いフォルムにしてアインに向かつて切りかかった。

アイン「ブラッディー・・・」

相良「!?!」

彼は動きを止める。

なぜなら、全方向に真つ赤な刃が展開されていたため。

そしてその刃は全方向から彼に向かつて来た。

アイン「ダガー!!!!!!」

相良「

白銀の翼

」

アイン「な!？」

突如、彼の背中から白銀の翼が生え彼を包み込み、迫り来る刃を防いだ。

そして翼を広げた光景は、まさに天使。

アイン「主・・・」

相良「アイン。これ以上、戦う意味があるのか？」

彼は、この戦いを望んでいない。

それを証明するように、彼は先ほどから彼女達に対して拳を使っても体自体には当てていない。



それほど彼は、この戦いを否定していた。

アイン「主。私達は、主の・・・その真実を知ったからこそ、その真実と戦うのです」

相良「・・・真実？」

真実とは、彼の記憶と能力。

既にいくつもの記憶を失っている彼をこれ以上戦わせない為に、それでも戦う道を選ぶ彼を止める為に彼女たちは、戦いの道を選んだ。

アイン「これ以上戦う事は、主にとって不利益かと思えます」

相良「だが、俺がここで諦めると、俺は戦わせなくさせられるんだろ？」

アイン「はい」

最初から彼はそれを理解していた。

けれど最初は抵抗があった。

大切に、守りたい彼女達と戦う事を・・・心より否定していた。

だが彼は、それでも成し遂げないといけないことがある。

相良「悪いがアイン。皆、俺は・・・負けない」

アイン「・・・そうですか。なら」

相良「・・・」

アインは空から紫色の雷を放つ。

アイン「撃ち抜け、夜天の雷！！！」

なのは「デイベインバスター！！！」

ティアナ「クロスファイアー・フルバースト！！！」

3人による同時攻撃が、彼に向かって放たれた。

アイン「ならば私達は、主を倒します！」

その決意と魔法が、彼に当たり爆発した。

その想い、その記憶（前書き）

武器を携えて戦う妻達。

そしてただ拳と魔力だけでぶつかり合う翔。

一人の彼の為に、力を合わせた戦いをする彼女達。

彼の胸の内にある想いと、彼女達にぶつける、その大切な想いとは

- ・
- ・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
ty 始まります。

## その想い、その記憶

相良 Side

アイン「・・・何!？」

爆風の中から無傷の俺が翼を羽ばたかせながら現れた。

相良「悪いな。俺はまだ・・・最強でいないといけないんだ。・・・だから!」

そう言っつて俺の両手には白銀の魔力光が纏われた。

相良「ここで皆に負ける訳には・・・いかないんだ!」

そう言っつて俺はアインに殴りかかった。

アイン「主・・・打撃戦なら、劣りません!」

そう言っつてアインは拳に紫色の魔力を纏わせ、俺と殴りあった。

相良「はっ!」

アイン「くっ!そこです!」

俺の拳を右で受け止め、左で殴る。

それを俺はかわして更に一撃を入れ、それをアインが防ぐ。

ティアナ「クロスファイアー・・・」

なのは「アクセルシューター・・・」

なのは「ティアナ」「シュート!!!」



相良「守れ！白銀の翼！」

そう言うと二人が放った魔力弾を翼が弾き返した。

なのは・ティアナ「！？」

そして二人は自らの魔力弾に飲み込まれる。

アイン「！？」

相良「余所見は油断と同じだ！」

アイン「何！？ぐはっ！？」

アインが二人に目を取られている間に俺はアインの右腕を掴んで空中で背負投をして地面にそのまま叩き込んだ。

アイン「ぐ……あ……」

アインはそのまま気絶した。

相良「さて……後は……」

シグナム・フエイト「……」

二人は刃を構えて俺を睨みつける。

相良「……そうだよな。まだまだ、終わらないよな」

しかもこの二人、キャロとルーテシアのブーストがかかっているから……相当強いぞ。

キャロ「我が乞うは、疾風の翼」

ルーテシア「雷刃の翼と烈火の騎士に更なる翼を」

キャロ・ルーテシア「アクセラレーション！！」

そう言うとフェイトとシグナムの身体能力が上昇したのが俺の目で判断できた。

フェイト「ありがとう、キャロ、ルーテシア」

シグナム「これでお前との差も無くなっただろう・・・」

相良「・・・それでも、俺は負けられない」

そう言っただけ俺は再び拳を構える。

フェイト「ソニックムーブ!!!」

相良「リフレクト・ムーブ!!!」

黄色い閃光と白銀の閃光が目にも止まらぬ速度でぶつかりあった。

フェイト「はああああああああ!!!」

相良「おらあ!!!」

二つの閃光は交差する度にぶつかる合い、天井に辿り着くと更に二人は拳と刃をぶつけ合う。

フェイト「翔……今からでも遅くないから、諦めて！」

相良「フェイト……俺が諦めるのを諦めてくれ！」

そう言つて翼を大きく羽ばたかせ、その衝撃波をフェイトのぶつける。

フェイト「ぐっ！！」

フェイトは吹き飛ばされ、地面に着地する。

シグナム「はあああああ！！！」

相良「！？」

その瞬間、背後から刃で突いてきた。

相良「ぐっ！？」

俺はそれを防げず、背後から刃が俺を貫いた。

相良「ぐ……が……」

シグナム「後ろががら空きだったぞ」

相良「……シグナムらしく、無いな……不意打ちに、2体1……」

俺の知ってるシグナムは集団戦を好まず、一対一を望む誇り高き騎士だ。

シグナム「大事な夫の為なら、騎士の誇りなど・・・いくらだって捨ててみせよう。私は騎士である前に、一人の女なのだからな」

そう言っただけ俺の背中から胸を貫いた刃を抜いた。

相良「がはっ！！」

俺は右手で胸を抑えた。

相良「・・・それが、シグナムの決断か」

シグナム「そうだ。そのために、“私達”はここでお前を倒す！」

私達・・・か。

相良「ふ・・・変わったな、シグナム」

俺は笑をこぼした。

シグナム「・・・お前は、何も変わらないのだな」

相良「・・・俺だけ、何も変われずにいる。俺は・・・いつだってシグナム達に追い抜かれていく。追いかけても・・・追いかけても、いつまで経っても追いつけずに、今になってしまった。シグナム達と結婚して、近くにいてことで・・・少しは変化するんじゃないかって・・・どこかで期待している自分がいた。けど、けれど俺は何も変われなかった。俺自身、変わることが望んでいなかった。だから・・・だから俺は、ここで全てを変えるんだ！！！！」

シグナム「な・・・！？」





シグナム「剣閃烈火・飛竜・・・」

そしてシグナムの一閃が、俺に放たれる。

シグナム「

一すまない閃

」

相良「・・・馬鹿やろう」

シグナム「!？」

爆風の中から、俺はシグナムを抱きしめていた。

相良「俺が・・・さようならなんて言うわけ無いだろう? いったって別れは『またな』って決まってるんだよ。だから」

シグナム「がつ!？」

俺はシグナムの腹部を殴って気絶させた。

相良「  
ありがとう。  
最愛シグナムの妻  
」

シグナムが気絶する瞬間、シグナムに唇を重ねた。

フェイト「シグナム!!」

俺は地上にお姫様抱っこで抱いたシグナムを下ろした。

相良「さて、後は・・・」

残るはフェイト、キャラ、ルーテシア、リニス、アリシア、ルチア・  
・・・か。

ルチアは後ろに下がって3人にブーストをかけてもらっているとこ  
ろをみると、最後の布陣・・・みたいなものかな。

相良「フェイト。俺は絶対に忘れない」

拳と刃をぶつけ合いながらそう言う。

フェイト「嘘・・・力を使えば記憶は消えるんでしょ!!」

相良「それでも忘れない!俺は・・・絶対に!!」

そう言っつてフェイトの刃を素手で掴み、フェイトを自分のもとに引  
き寄せるとフェイトの唇を奪う。

フェイト「んん!?!」

そして離すを俺は言った。

相良「こんな綺麗な女を嫁にしたんだ。誰一人として忘れない。絶  
対にな」

フェイト「翔・・・がっ!？」

俺はフェイトの腹部を殴って気絶させた。

ルチア「翔……」

翔の戦いは、いつ見ても凄い。

一人で私達を相手して……倒している。

でも、私達は負けられない。

ルチア「ねえアリシア」

アリシア「……分かってるよ」

珍しくアリシアが真剣な表情をしている。

私はルチアに、あるお願いをする。

ルチア「私と、ユニゾンをして」

アリシア「・・・良いの？」

ルチア「うん。翔を・・・倒さないといけない理由があるから・・・だから」

アリシア「・・・うん。分かったよ、私の力・・・ルチアちゃんにあげる」

ルチア「・・・ありがとう」

そう言って私とアリシアは額を重ねた。

ルチア・アリシア」

ユニゾン・イン

」



そして漆黒の稲妻を、私は纏った。

相良「・・・ルチア、アリシア」

ルチア・アリシア「行くよ！翔（お兄ちゃん）！！！！！！」

そして、決着をつける、最後の戦いを始める。

一つの約束 結末に向けて（前書き）

ぶつかり合うは、光と闇。

過去に一度対決した二人が、再びその刃をぶつける。

その胸に秘めし想いは、戦いの結末に向かって変化して・・・

魔法少女リリカルなのはVivid World Infinity  
ty） 始まります。



ルチア「

『ダークホール闇の落とし穴』

」

俺の放った拳はルチアの懐へは入らず、俺は闇の穴に飲み込まれ、ルチアから離れた場所に落下した。

相良「ぐっ!?!」

更にルチアはその隙に刃に漆黒の魔力を纏わせ、斬撃を放つ。

ルチア

『  
月牙天衝  
』

」



相良「

『レディアント・ブルガシオン  
龍討つ星屑の拳槍』

!!!  
」

俺の放つ、新たな拳の一撃。

俺の持っている膨大な魔力で放つ拳。

これは芳乃零二の放つ「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍」を俺なりに作った技だ。

それを使って俺は、ルチアの放つ強力な斬撃を拳でぶっ壊す！



相良「いけ！！！！！！！！！！！」

ルチア「な！？」

そして俺の拳でルチアの斬撃が破壊された。

ルチア「嘘……純粋な魔力で、私の斬撃が壊された！？」

相良「はあ、はあ、はあ……流石に、疲れるな……」

実はこの技は今、初めて使った。

魔力を上手く使いこなせないから、無駄に魔力を使ってしまった。

だから余計に疲れる……

さっさと決着つけないと……俺の魔力が尽きるか……

だが、ルチアはアリシアとユニゾン＋3人のブースト。

今のルチアを速攻で倒すのは無理……か。

しかも俺は

デバイスを持っていない。

だけど・・・ここが俺の『境界線』になると思う。

ここを諦めて弱くなるか。

諦めず、何かを掴むか。

相良「・・・違う」

ルチア「え・・・」

違うな。そんな答えじゃない。

2 択しかないだと？ふざけんな。

相良「勝手に選択肢を作ってるじゃねえぞ・・・クソ野郎」

アリシア「お兄ちゃん・・・」

ルチア「・・・」

二人は俺を心配そうな表情で見つめる。

相良「選択肢なんていらぬ。俺は・・・ただ、超える！」

ルチア・アリシア「!？」

そして白銀の光が俺を包み込み、瞳は黄金色になった。

相良「さあ、決着だ！！！！！」

俺は全身から溢れ出させた魔力に形をイメージさせ、巨大な白銀の拳を創り出した。



相良「なあルチア、ちょっと……頼み事があるんだ」

ルチア「え……」

攻撃はぶつかり合ったまま、俺はルチアに言う。

相良「俺がもし、記憶を失った時  
相良<sup>おれ</sup>翔の傍にいてくれな  
いか？」

ルチア「ふえ！？」

ルチアは驚いた結果、攻撃が止み、俺はルチアの顔面すれすれの距離に拳を構えた。



キャラ「こ、降参です」

ルーテシア「勝てませんよぉ」

リニス「私達は前線向きではないので・・・」

相良「正しい判断だと思うよ」

こうして・・・って、かなり卑怯な戦いは終わりを迎えた。



その後、なのは達気絶組みは病室で眠っている。

ルチア達起きている組みは父さんやヴィヴィオ達と共に話しを進める。

相良「実はこの戦いは、俺が仕組んだものだ」

ルチア「え．．．でも、この戦いはなのは達が翔を止めるために．．．」

相良「ああ。だから、俺はそれを利用させてもらった」

その発言に、父さんと母さんはどこか安心したような顔になった。

俺はそのまま話しを続ける。

相良「なのは達が俺を止めに来るのは、まあ何年も一緒だったからわかってた。だからこそ俺は、なのは達と戦った」

右蕪「解せない。翔はそれが分かっているながら、彼女らと戦う理由があったのか？」

確かに、俺はなのは達が戦いを挑んでくることを知っていて、それでも俺は戦う道を選んだ。

相良「俺は、なのは達の魔力を吸収するために、なのは達と戦ったんだ」

全員「!？」

右蕪「なん・・・だと・・・」

相良「俺は、近づく最終決戦の為に・・・なのは達の魔力を俺の能力で吸収するために。この戦いをしたんだ」

元々俺の能力である星屑の力は、バラバラに空气中に存在する魔力を自分の魔力に加えることができるが、それは戦闘で得ることしかできない。

そこで俺はなのは達と戦う事で、大量の魔力を一気に手に入れようと考えたんだ。

右蕪「・・・お前、それが正しいと思ってるのか！！！！」

相良「・・・」

父さんは、怒りを露わにした。

それも、分かっていた。

右蕪「大切な人を傷つけてまで、力を求めるのか！？それは、敵と同じだぞ！？」

相良「・・・」

父さんの意見はごもつともだ。

俺だって、こんなマネはしたくない。

・・・だが、俺はすでに決断した。

相良「俺は、もうすぐ全ての記憶を失う。そうすれば、父さんも含めて、なのは達の記憶が全て消えるんだ。想い出の全て・・・今まで生きてきた人生の記憶全てを。この力を手にしてから、分かっていた結果だ。だから・・・今皆にどう思われようとも・・・いつか消えてしまっ」

火澄「翔・・・」

結局、俺はこの世界から拒絶される力を手に入れてしまったんだ。

強くなる代償は、俺自身が否定され続けること。

つまり・・・独りぼっちの王様って所だ。

ただ権力だけはある。

だけど、独りぼっちで、皆から否定されている存在。

相良「だからルチア。この戦いが終わって、もし俺が生きてたら・・・  
・相良<sup>おれ</sup>翔の面倒みてやってくれないか？」

ルチア「あ・・・わ、私？」

相良「ああ。ルチアにしかお願いできない。最初から、俺の真実を知っててくれて・・・ずっと皆にバレないように尽くしてくれた、

ルチアにしかお願い出来ないんだ」

ルチア「……」

するとルチアは、涙を流した。

ルチア「……なんで……なんで失うことしかないのよ……なんで……」

相良「ルチア……」

ルチア「私は……大好きな翔と一緒に、まだ笑っていたいよ！！！」

悲しみが生んだ、その儚い願い。

相良「俺だって……大好きなルチア達と、まだ笑いあっていたい。でも、俺はもう……十分幸せを手に入れたんだ」

ルチア「え……」

そう言うと俺はルチアを抱きしめて、耳元で囁くように言う。

相良「ルチアが俺と出会ったのは、戦った時。もう、あまり覚えてないけど・・・俺達の出会いから今日まで、いつも一緒にいてくれたルチア達は、俺の大切な存在なんだ。だから、空っぽになったとしても、俺はルチア達と共に生きていたいんだ」

ルチア「翔・・・翔お・・・」

ルチアは俺の胸の中で声を殺して泣いた。

それは、周りに父さん達がいるからなのだろう。

・・・だとすると、この後本格的に泣くだろうな。

相良「ルチア、今日は・・・二人きりで寝ようか？」

ルチア「・・・ずるい。そんなこと言われたら・・・断れないじゃん・・・」

そう言っつてルチアは目元を赤くしながらも、涙を拭いて俺に言った。

ルチア「翔の約束、私守るよ。翔が記憶をなくしても、私が傍に居てあげる」

相良「ああ。ありがとう」

だが、このことは今話に参加していた父さんやアイ八達以外は誰も知らない。



そして決戦の 때가

近づいてきたのだった。

一つの約束 結末に向けて（後書き）

彼がした約束は、あまりにも残酷な約束。

全てを失っても、傍にいてほしい。

それは、余りにも辛すぎて・・・理不尽な約束。

だが、それでも彼女は誓う。

約束を 必ず守るのだと。

## 一日目 シグナム編（前書き）

静かに近づく決戦の日。

それまでの間、彼は大切な人、一人一人と時間を過ごす。

・ その時間は、忘れてしまいかもしれないけれど、大切な今だから・・・

魔法少女リリカルなのは Vivid World Infinity  
ty } 始まります。

## 一日目 シゲナム編

相良 Side

相良「さて・・・マルス・メルキュール」

マルス「はい？」

メルキュール「なんでしょう？」

俺は皆の怪我が回復した日、相棒の二人に話しをした。

相良「今日から皆との日々を過ごし終わるまで、機能停止状態にさせる」

マルス「・・・そうですね」

メルキュール「私達がいては、二人きりが台無しですからね」

相良「悪いな、気を使わせて」

そう。俺はこの残りの時間を、全て彼女達との日々に使っ

仕事？どうでもいい。

俺は世界中の人の命より、大切な彼女達の日々を選んだ。

間違っけていても構わない。

俺は、愛している皆と過ごしたいとおもってしまったから。

マルス「ご主人様のご幸せを」

メルキュール「心よしお祈りしています」

相良「ああ。ありがとう」

そう言っけて俺は首ぶら下げている二つの勾玉を外して机の上に置いて、外に出た。

すでに彼女とは待ち合わせをしている。

待たせるわけにはいかないな。

相良「ごめん。遅れた」

シグナム「女を待たせるとは、お前もなかなか良い度胸をしてるな」

そう。今日の俺はシグナムと一日を過ごします。

ランダムなんで誰とと聞かれても困るが・・・

そう考えているとシグナムが俺の右腕に抱きついてきた。

シグナム「今日はたっぷり引っ張ってやるから覚悟するんだな」

相良「おお・・・それは恐ろし」

そう言ってお互いに笑い合いながらクラナガンの街を歩き始める。

相良「へえ・・・クラナガンも変わったなあ・・・」

シグナム「ふむ・・・これは中々」

俺とシグナムは和菓子店に寄った。

てかクラナガンに和菓子の店ってあったんだあ。

シグナムは地球に来てから和菓子にはまっけてからは大好物。

まあ見た目からして『和』ってイメージ強すぎな人だから当然と言えは当然だな。

ちなみに今シグナムが食べてるのは抹茶餡蜜。

俺は普通の粒あんのたい焼き。

いやあ〜たい焼きうまい。

シグナム「んぐ・・・翔は、たい焼きは尾から食べるのか？」

相良「え・・・まあな」

シグナムから意外な質問がきたな。

シグナムが頭からとか尻尾とかからと言つとは・・・

折角でた話題だし、俺も乗ってみるか。

相良「シグナムはどっちから食べる？」



シグナム「私も尾からだ」

相良「お、一緒だな」

シグナム「ふむ・・・そうだな／／／」

ん？なんだ？どこからか『このリア充め！』とか『リア充爆発しろ！』とか聞こえる・・・

いや、俺もう結婚してっからな！？

相良「あ、シグナム。口に抹茶付いてるぞ」

そう言っただけ俺はシグナムの唇についた抹茶の粉を人差し指で拭き取って口に運ぶ。

シグナム「っ／／／／」

相良「お・・・美味しい」

抹茶だけあつて程よい苦味。

シグナム「な／／／／き、貴様！！な、ななな、何をして／／／／」

相良「お、おいシグナム！？落ち着け！お茶を飲め！」

そう言っつて俺はお茶を渡す。

シグナムは慌てながらもお茶を一気に飲み干す。

シグナム「すうゝ・・・はぁゝ・・・」

なんとか落ち着いていた様子。

相良「大丈夫か？」

シグナム「き、貴様があ、あんなことをしたから」

相良「え？」

な、なんだ？何で俺は怒られてるんだ？

シグナム「わ、私の唇を指で触った上に口に含むとは！！！！」

相良「え・・・あつ」

そうでしたね。すみません。

相良「って、俺達はとっくに結婚してんだからこのくらいで動揺してどうする？」

シグナム「う、五月蠅い！こう言うものは慣れない方が良いに決ま

っている!」

相良「……」

言い訳にも聞こえたその言葉は、なんとなく俺の心に響いた。

相良「そう……だな。ははっ……そうだよな」

シグナム「?どうした?」

相良「いや、確かに……慣れない方が、幸せだなんて思ってさ」

恥ずかしい事も、好きな事も、面白いことも、全部全部、慣れてしまふより新鮮であるべきだと思う。

慣れたな……つまらないもんな。

そう思った俺は無意識にシグナムの頭を撫でた。

シグナム「な、何を////////」

相良「いや……綺麗な髪だなんて思ってな」

シグナム「……そうか」

不思議と俺は数分間、シグナムの頭を撫で続けていた。

相良「ふう・・・なんか、色々と変化してたな。クラナガン」

シグナム「そうだな。私達が仕事に明け暮れている間に、変わっていた」

俺とシグナムは公園の芝生の上に転がって夜空を眺めていた。

相良「やっぱ、夜空にある星は綺麗だなあ」

シグナム「お前は昔から、星が好きだったからな」

あれ？そうだったか？

・・・ま、記憶に無いから分からないのも当然か。

相良「ありがとうな。今日は付き合ってもらって」

シグナム「なに、私とお前の仲だ。今日は私も嬉しかった」

相良「・・・ありがとう」

そう言っただけ俺はシグナムの頬にキスをする。

シグナム「・・・頬だけでは、物足りない」

相良「え・・・ん!？」

そう言っただけ俺はシグナムの頬の上に覆い被さり、俺の唇を大胆に奪った。

そして唇を離すとシグナムの顔がすぐ目の前にあった。

相良「し……シグナム……」

シグナム「……ここまでしても、消えてしまうのだな」

相良「っ!?!」

シグナムの表情が、悲しそうになった。

消えてしまう……それは、俺の記憶から消えてしまうと言ったこと。

相良「……じゅめん」

シグナム「謝ることじゃない。むしろ謝るのは私達のほうであろう？」

相良「え……」

シグナム「私達は、お前を苦しめた。お前に、更に重荷を背負わせてしまった」

相良「そんな……そんなわけない。俺は、好きで背負ったんだ。」

背負わせた・・・なんて思ったことはない」

そうだ。俺は、俺の責任や償いも含めて、シグナム達を愛すると決めたんだ。

それが重荷だなんて・・・絶対に思わない。

俺はシグナムを抱きしめて耳元で言った。

相良「俺・・・仕事とか任務終わった後にシグナムたちに会うとき、疲れとか全部吹っ飛ばんだ。笑顔で声をかけてくれて、優しくしてくれて・・・そんな日々を手に入れることができたのはシグナム達がいいたからだ」

10年以上前、俺は俺自身の能力で、孤独になった。

そして両親を失った日、俺はいつか死ぬ時は一人なのだと悟った。

けれど今はどうだ？

一夫多妻制のおかげもあるが、こんなに綺麗な彼女達と過ごせる。

笑顔でいられる。

それって最高に幸せじゃないか？

一人で死ぬなんて未来が無くなったと思った。

相良「だから俺は、最高に嬉しい。だからシグナム」

シグナム「？」



これが、今の俺がシグナムに言える、精一杯の感謝の言葉。

相良「ありがとう、そして

愛してる」

カッコつけだって言われても構わない。

渋いとか言われても構わない。

これが、今の俺の精一杯だから。

シグナム「私も

翔を愛してる」

そして俺とシグナムは月明かりの中、影が一つとなり・・・俺達は  
体を重ね合わせた。

一日目 シゲナム編（後書き）

忘れてしまつ。けれど俺は絶対に忘れたくない。

今日の様な日々がこれからも続いて欲しいから。

皆を、幸せにしたいから・・・

## 二日目 ヴィータ編

相良 Side

相良「よし、行くか」

ヴィータ「おう！」

今日はヴィータと一日を過ごすこととなる。

相良「ヴィータはどこか行きたい場所あるのか？」

ヴィータ「翔は行きたい場所とかねえのか？」

相良「俺はヴィータが行きたい場所に行きたいかな」

そう。出来れば皆の自由な場所に行ってみたい。

昨日のシグナムの様に・・・な。

ヴィータ「そ、それじゃ・・・」

そうやって俺はヴィータの行きたいと言っていた場所に向かうのであった。

相良「へえ……ヴィータはここに来たかったんだあ」

ヴィータ「み、みんなには内緒だかな／＼／＼／」

相良「分かってる」

俺とヴィータがきたのは玩具売り場。

その中にあるぬいぐるみコーナーに来た。

ヴィータ「ほわぁ……」

な……なんて幸せそうな表情なんだ……

ぬいぐるみに囲まれてヴィータが天国に!?

ヴィータ「あたし……この戦いが終わったら、このぬいぐるみ全部にギョツしてもらうんだ」

相良「何だその新手の死亡フラグ!？」

別の意味で戦いに行かせたくないな……

相良「あれ……あのぬいぐるみ……」

ヴィータ「?」

片手サイズのくまのぬいぐるみの山に紛れ込んでいた小さな白いうさぎのぬいぐるみを取ってあるべき場所に戻した。



相良「これでよし」

綺麗に並べると、そのぬいぐるみは『ありがとう』と言っているように見えた。

ヴィータ「翔は、ぬいぐるみにも優しいな」

相良「別に、ぬいぐるみだからとかどうとかじゃなくて、単にかわいそうだなって思っただけ」

ヴィータ「？」

相良「熊は熊で仲間が周りにいる。けれどうさぎは寂しく一匹。俺は手を差しのべる事が出来るんだから、迷う必要も、考える時間も必要ない・・・そうだろ？」

そう言うとヴィータは静かに俺が戻したうさぎのぬいぐるみをおるべき場所の、中心・・・つまり、他の仲間のうさぎに囲まれるように置いた。

ヴィータ「次に買われるまでは・・・一人じゃねえからな」

そう言ってヴィータは別のぬいぐるみを見始めた。

相良「・・・お前の方が優しいっての」

ヴィータには聞こえない声で、そう言って俺はヴィータの後を追った。

相良「なんか買ってくか？」

ヴィータ「うん・・・だったらこれとあれと・・・」

相良「ど・・・どんだけ買っただよ・・・」

総裁なんで金には困らんが・・・流石に買いすぎだろーと思っほどヴィータはぬいぐるみを買っただった。

相良「・・・あ、すみません。これを二つください」

俺は追加で同じぬいぐるみをヴィータに内緒で購入した。

相良「お……重い……」

ヴィータ「くく」

何とか買い物を終え、俺は俺自身の身長と同じくらいあるであろう袋（中身は全てぬいぐるみ）を持って街を出た。

相良「ヴい、ヴィータ」

ヴィータ「どうした？」

どうしたって……気づいてくれよ……

相良「ど、どっかで休まないか？」

ヴィータ「なんだ？疲れたのか？情けねえな」

相良「悪かったな」

からかうようにヴィータが言つとムスつと俺も言い返した。

ヴィータ「冗談だ。どっか休める場所は〜・・・」

そう言つてヴィータは休めそうな場所を探した。

結局また昨日と同じ公園になるのだが・・・

相良「（　、　、　） 3 フウ・・・疲れたア〜〜」

芝生の上で大の字で倒れる俺。

ヴィータ「情けねえなあ〜！体鈍つてんじゃねえか？」

相良「そんなはずは・・・って、アイゼンを出すなヴィータ」

今軽く『セット・アップ』と聞こえた気がする。

ヴィータ「てのは冗談で、今のまんまじゃ、あたしが訓練してやらねえといけなくなりそうだ」

相良「それは勘弁。スバル達から聞いたぞ、『ヴィータ隊長は半殺しの訓練しかない』ってな」

ヴィータ「ほう・・・あいつらにはまだ訓練が足りなかったみてえだな」

あら・・・ヴィータさんの全身から殺気が・・・スバル達、すまん。

相良「・・・あ、そうだ」

ヴィータ「？」

俺は買い物袋から小さな箱をヴィータに渡した。

相良「はいこれ、俺からのプレゼント」

ヴィータ「っ・・・あ、開けても良いか？」

相良「もちろん」

そう言つとヴィータは目をキラキラさせながら期待に胸を膨らませながらその箱を開ける。

ヴィータ「え……」

そこにあつたのは、先ほど戻してあげたうさぎのぬいぐるみだった。

相良「ヴィータ。本当はお前、これが欲しかったんじゃないのか？」

ヴィータはぬいぐるみの買い物の中で、何度も何度もうさぎのぬいぐるみを視ていた。

だから俺はそれを買った。

ヴィータ「でも……これ……一つしか……」

相良「いや、もう一つ……買ってあるんだ」

そうやって俺は左ポケットからヴィータにプレゼントしたのと同じぬいぐるみを出した。

ヴィータ「あ……」

相良「ヴィータと俺、お揃いの持っておいて、また会ったびにこの二匹も出会えるってわけ」

ヴィータ「……そうか」

そう。俺とヴィータを繋ぐ物になるってことだ。

ヴィータ「それは、翔が覚えていたら・・・だろ」

相良「っ・・・。そうだ」

俺が忘れなければ、必ず会える。

覚えていれば・・・な。

相良「安心しな。俺は忘れないし、忘れるつもりもない」

そう。例え能力を極限まで使ったとしても、俺は忘れない。

忘れる運命なんて・・・変えてやればいい。

ヴィータ「・・・ホントか？」

相良「ああ。俺が嘘ついたこと、あるか？」

ヴィータ「ある」



相良「即答!？」

あれ・・・カッコイイ場面でまさかの即答!？

相良「お、俺がいつ嘘ついた!？」

ヴィータ「いつもだ馬鹿!いつも・・・あたしたちのために嘘ばっかついてる」

相良「・・・」

・・・覚えてない。

もしかしたら・・・ヴィータたちについた嘘の記憶すらも消えている。

相良「悪い・・・思い出せない」

ヴィータ「思い出せないんじゃないやなくて、記憶にねえんだろ？」

相良「っ・・・ごめん」

凶星だった。

簡単に見切られた。

ヴィータ「ほらな。今だって嘘ついたら?」

ほんとだ・・・はは、嘘が下手な男だ・・・全く・・・

相良「そつだな。そんじゃ・・・信用されないな」

ヴィータ「だったら・・・取り戻せよ」

相良「え・・・」

ヴィータ「信用を失ったんだっいたら取り戻せって言ってるんだ。それしかねえだろ？」

・・・確かにその通りだ。

はあ・・・ヴィータに教えられるなんてな。

相良「確かにその通りだ。そんじゃ・・・」

ヴィータ「え・・・あ／＼／＼／」

俺は起き上がってそのままヴィータを抱きしめた。

相良「約束する。絶対に忘れない、今日の日を  
を」

今日の約束

ヴィータ「・・・忘れたら、ぶっ飛ばすからな」

相良「ああ。望むところだ」

そう言って、俺とヴィータは唇を重ねる。

そのたびに、ヴィータの想いが伝わってきた。

そして俺とヴィータは、体を重ねるのだった。

### 三日目 シャマル編

相良 Side

俺は陸宙管理本部の医務室に向かう。

今日はシャマルと一日を過ごそうかと思ったのだが、シャマルは俺達陸宙管理本部の名医だ。

いつも必要とされているシャマルは今日も大忙しのご様子。

てなわけで今日はお手伝いをしようかと思えます。

これはちょっとした自慢話だが、俺は医師系の免許を持っている。

まあなんでも免許を持つてると色々活動出来るからな。

治癒魔法も使える俺にとって医師系の免許は、救う事ができる幅を広げられるからな。

さてさてそんな事はさておいて、俺は医務室についた。

相良「シャマル、失礼するぞ」

シャマル「あ・・・翔君」

？どっした？

シャマル「ちょ、ちょっと手伝ってえ」

なんかシャマルが忙しそうだ。

相良「なんだ？」

シャマル「実はさつき男性職員がきたんだけど、私を見た瞬間鼻血を出して倒れたの！」

相良「……(イラッ)」

なんだと？

シャマルを見て……鼻血だと？

俺の女見て……鼻血とは……良い度胸。

相良「任せるシャマル。今の俺なら、奴らを元気に出来る。ちょっと痛いかな」

そうやって俺は倒れた奴等の部屋に入り、シャマルにバレない様に音遮断の結界魔法をした。

シャマル「……痛いって……どゆこと?」

そう思ったシャマルは俺が何をしているか、結界を少し破つてのぞき込んだ。



男性職員「あ．．．あの．．．」

相良「おお．．．君らか．．．俺の女見て鼻血吹き出した汚い奴らは．．．」

俺はマルスとメルキュールを二刀流で両手に持つ。

現在の俺はお怒りモード全開である。

男性職員1「ぼ、僕らはただ、シャル先生の美しさに興奮しただけにして．．．」

相良「ほお．．．俺の女に興奮か．．．悪いがシャルは俺のだ。絶対に譲らん。シャルは今とても忙しい。お前らの無駄な興奮のせいで仕事が増えてしまった。その責任は．．．取らせてもらうぞ」

男性職員「ひ．．．ヒイイイイイ!!!!!!」 ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
( ) ( ) 「」

相良「さて．．．お話、始めようか？」



シャマル Side

シャマル「／／／／／／／／／／／／／／／」

あ、あんなに私の事を／／／／／

と言っか、『俺の』って／／／／／／／／／

私・・・翔くんのものって／／／／／

あれ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／  
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

とっくに結婚してるのに／／／／／

あ・・・でも、あの人達にはあとで治療をしないと・・・

そんな事を考えながらも仕事に戻る私でした。



え！？何！？消毒液がそんなこと言ったの！？

相良「しゃ・・・シャル・・・さん？」

恐る恐る声をかける。

シャル「ふあ・・・翔くん・・・」

相良「だ・・・大丈夫か・・・って!？」

シャルは消毒液のビンを落としてしまう。

相良「くっ!!!」

俺は走ってそれを拾う。

相良「よしっ・・・って・・・」

シャル「きゃ!？」

俺とシャルは体勢を崩して倒れる。

相良「あ……」

シャマル「え……」

形としては俺がシャマルを押し倒したような感じになっている。

しかも俺は両手に消毒液のビンがあって立てない。

ど……ど……ど……

相良「悪い。ちょっとどろろすればいいか分からない」

シャマル「あ……えと……」

シャマルも混乱している様子だ。

相良「……」

シャマル「……」

俺はシャマルを見つめていた。

シャマルの頬は少し赤くなり、目を潤っている。

そして俺は唇に吸い込まれるように、自分の唇を合わせる。

シャマル「ん／／／／／」

そして10秒程数えて離すと今度はシャマルから俺の唇を奪いに来る。

シャマル「ん／／／／／んちゅ／／／／／」

気づくと俺とシャマルは、今の状況を見捨ててキスをしていた。

気づいたら吸い込まれていた。

俺はシャマルの事・・・やっぱり好きなんだって、今一度思った。

何度記憶を失っても、好きと言う感情だけは消えなかった。

そして何とか今日まで保てた。

決戦が来たとき、きっと俺は全てを失うであろう。

失わない努力はするが・・・もしも・・・

いや・・・いいか。

相良「・・・」

シャマル「・・・」



相良・シャル「……」

それから数分して何とか問題は解決して、俺はシャルの仕事を手伝っていた。

ただ、妙に空気が悪く、会話がない。

普段はそんなことないのだが・・・今回は状況が状況だったために、お互いの同様は半端なかった。

うん・・・やっぱり結婚してもこのドキドキ感があるっていいな。

シグナムやヴィータについても思ったことだけだな。

相良「なあ・・・シヤマル」

そう言うとシヤマルはドキッと驚いたかの様に大きく反応した。

シヤマル「な・・・何？」

相良「シヤマルは・・・どこか痛い場所とか・・・治して欲しい傷とか、無いか？」

シヤマル「え・・・」

不意に俺はそう言うとシヤマルは驚いた様子で質問した。

シヤマル「なんで・・・そんなこと聞くの？」

相良「俺・・・シヤマルにいつもいつも治療させてもらってたから

さ、だから・・・今度は俺がさ」

シャマル「ううん。翔くんはその必要・・・無いわよ」

相良「え・・・!?!?」

シャマルはそのまま俺を抱きしめ、俺はシャマルの胸に顔を埋めつくされる。

相良「しゃ・・・シャマル!?!?」

シャマル「翔くんは・・・今まで治療してきた人で、一番救いたくて・・・救えなかった人だから」

相良「え・・・」

何を言ってるんだ・・・シャマル。

シャマル「翔くんの記憶・・・取り戻す事が出来なかった。私・・・  
医者なのに・・・」

相良「シャマル・・・」

シャマルの泣き声が聞こえる。

全身が震えているのが分かる。

冷たい肌。

震える体。

俺は・・・シャマルをこんなにも傷つけていたのか・・・

シャマル「だから・・・翔くんは私を癒してくれなくて良いの・・・  
なのに・・・」

癒す・・・か・・・

相良「　　違うんだ」

そう言っつて俺もシャマルを抱きしめる。

シャマル「え・・・」

相良「俺は、シャマルに感謝してる。俺の事知っつて、それで精一杯に助けてくれた。いつも俺が無茶して大怪我したとき、いつも助けて・・・笑顔を見せてくれた。その笑顔に、俺はどれだけ救われて癒されたことか・・・だから、俺はその分の幸せを、幸せをくれたシャマル自身に分け与えたいんだ」

シャマル「翔・・・くん・・・」

俺はシャマルの頭を撫でて、今度は俺の胸にシャマルの顔を埋める。

相良「だから　　ありがとう、シャマル」

シャマル「・・・ぐすん・・・うん・・・」

そう言っていてしばらくの間、シャマルは泣き止むまですこのままでいた。

シャマル「ね、ねえ翔くん」

相良「ん？なんだ？」

シャマル「今日は……一日中、私の傍にいてくれる？」

医務室の白いベットに、俺とシャマルを一緒に入っている。

相良「もちろん。今日一日は、シャマルに捧げるよ」

シャマル「うふふ・・・ありがとう」

そう言って俺とシャマルは朝まで共に過ごしたのだった。



### 三目 シャマル編（後書き）

いつも癒してくれたあなたに、私はこれからも癒やしを与えたい。

例え私の事を忘れたとしても、私は一生忘れないから・・・

## 四日目 アイン+リイン+アギト編

相良 Side

相良「あ……あのさ……」

アイン「なんででしょうか？」

相良「なんで……3人なの？」

リイン「です？」

アギト「別にいいじゃん」

いや、まあいいけどさ……

そんなわけで本日の俺は予定を変更されてユニゾン3姉妹と一日を過ごすこととなった。

相良「んで？どこに行きたいんだ？」

アイン「私は主が行きたい所へならどこへでも」

いや……そう言うことではなくて……

アギト「あたしもどこでも」

欲がないな……（お前が言うな

リン「私は行きたい場所があるですぅ〜!!」

いたよここに欲張りさんが・・・はやて譲りか？

相良「ど〜?」

リン「それはですねえ〜

です!~!」

相良・アイン・アギト「

!~?」

え!~?~!~?~!~?~!~?~!~?~!~?

そんなこんなで俺たちはとある場所のとある店の試着室にいる。

俺たち全員』とある服』を試着している。

相良「え……なにこの服!？」

アイン「むう……胸がきついな……」

アギト「こ……これでいいのか?!?!?!?!?!」

リン「これを着てみたかったんですぅ〜!!!!」

これが試着室から聞こえる俺たちの感想だった。

それから10分・・・

全員同時に試着室から出た。

相良「・・・」

アイン「あ／＼／あの、どういたしましたか／＼／」

いや・・・アインよ・・・お前・・・

相良「一応聞いておくが、お前は『デュランダル』と言う聖剣を持つてはいないよな？」

アイン「じぎいませんか？」

良かった。

アインの服装・・・は銀色の騎士の鎧。

そして髪は結んである。

あのさ、それでデュランダル持ってたらアインの名前がジャンヌとつくあのキャラになるんだが？

アギト「あ、あたしのは何でこれなんだ!？」

相良「恋姫にそんなキャラいた気がする」

赤い髪の左の方に虎の顔がついてて赤いマフラーつけて腹部だして  
いるロリの槍使いを俺は知っている気がするならない。

相良「言い出しっぺのアインは？」

アイン「私はこんな感じですよ!」

相良・アイン・アギト」……」

俺達は哑然した。

一言で言えばシスターが着る様な服。

物凄く見覚えがある。

確か『とある』がつく大食らいの少女が……

相良「似すぎだろ……」

さて皆さん。

そろそろお気づきになっていただけたらだろうか？

俺たちがいるのは『コスプレ店』である。

まあ色んなアニメの服が揃っているため、こうして俺達は様々なコ

スプレをしているわけだ。

・・・え？俺は誰のコスプレしてるかって？

・・・いや、最近のアニメの全裸野郎ですよ。

・・・え？まだ分からない？

大ヒント 『境界線上』と『全裸主人公』と『愚弟』で分かるでしょう。

それでも分からないのであればこの3単語で検索しようね。

あ、でもちゃんと制服の時の彼なんで大丈夫です。

相良「何で俺がこれなの？」

リン「似合ってるですよぉ〜！」

アギト「いいんじゃないか？」

相良「うん・・・」

微妙・・・



アイン「主。一応聞いておきますが・・・この後全裸になったりは  
しませんよね？」

相良「・・・」

相良「・・・」

相良「・・・orz」

俺・・・妻達に色々な意味で信用無いな・・・(´；；´)

さてさてこの服はお買い上げでその服装のまま俺達は外へ出る。

相良「……いや待て！！！！アインとアギトは武器を持つな！！！！」

アインが何故かデュランダルを。

アギトが槍を持っていた。

あれ？あの店にあっただっけ！？

そんな感じで歩くと、周りの男性女性が見てくる見てくる。

中には写真をとる奴もいる。

相良「はぁ・・・歩きづらい」

アイン「私は胸がキツイです・・・」

でしょうね。あの騎士服ですからね。

アギトとリインはノリノリだな・・・

相良「ま、たまには面白いこともありかな・・・」

ぼそつとそつ言っって俺は歩き出す。

相良「つ……疲れた……」

アイン「私も……です」

その後、リインとアギトは俺とアインを振り回し続けた。

アインと俺は服装を私服に戻して帰っている。

リインとアギトの二人はコスプレのまま俺とアインの背中で爆睡している。

アイン「主。今日は、とても充実した一日でした」

相良「そうか。それは良かった」

でも、アインの笑顔は、どこか濁っているように見えた。

相良「……ごめん。はやてのこと……」

アイン「……良いです。主はやては自分自身の道を選んでしまっただけです。私はそれを見届けるのみです」

相良「……」

それは、心のどこかで納得のいかない自分自身を納得させる言葉。

アインはきつとまだ、はやての事を諦めずにいる。

近づく決戦ではやては俺たちの敵となるだろう。

その時に迷いがでるからこそ、アインは自分自身を強引に納得させようと必死なのだろう。

アイン「それより問題は、主のほうです」

相良「俺？」

アイン「はい。この戦いが終われば、主の記憶もただではすまないのは分かっております」

・・・  
たたく、皆その話ばっかだな。

相良「大丈夫だって。俺は忘れないさ」

アイン「誓えますか？」

相良「え？」

アイン「この  
誓えますか？」  
夜天の空に、主は私達を忘れないと

相良「・・・」

夜天の空に・・・か。

そうだな・・・誓いか。

相良「俺、相良翔は夜天の空に誓う  
失わないと」

我が大切な者を、必ず

アイン「主……んむ!？」

俺はそのままアインの唇に自分のを重ねた。

アイン「ぶは・・・あ、主!?!」

相良「この口づけにも誓おう。必ず帰ってくる。必ず忘れないと・・・な」

そう言って俺はリインを背負ったまま家に向かった。

アイン「・・・忘れてたら、容赦しません」

そう言ってアインはアギトを背負って俺の後ろを歩くのだった。



四日目 アイン+リイン+アギト編（後書き）

夜天の空に誓うは、結末。

何も失わない結末。

取り戻すものを取り戻す結末。

その結末を、この夜天の空に・・・そして、祝福の風達に誓うのだ  
った。

## 五日目 チンク+ディエチ+ノーヴェ編

相良 Side

相良「お前らホント集団行動好きだな」

チンク「いやなに、この二人といるほうが安心するからな」

相良「なるほどね」

てなけで今日も3人だった。

まあそこは皆に任せるけどな。

ノーヴェ「それで？今日はどこ行くんだ？」

相良「皆は行きたい場所あるか？」

ディエチ「私はどこでもいいよ」

皆そう答えるから困るぜ（・・）

チンク「決めてなかったのか？」

相良「まあな」

ノーヴェ「まあなって・・・」

皆に呆れられている俺・・・悪かったな・・・

相良「ま、そこらへんをのんびりとウィンドショッピング風にするか？」

ノーヴェ「うん。それでいいんじゃないか？」

チンク「それじゃ決まりだな」

ディエチ「うん」

そう言っつて俺達は街に出る。

相良「てか女性用の服って増えるの早くないか？」

チンク「いや、普通だろ」

相良「え(；。)(！？」

デイエチ「うん、普通」

相良「は(；。)(！？」

ノーヴェ「普通じゃねえか？」

相良「そ、そうなんだ(；。)(！？」

お、女って凄いな・・・

相良「そんで男の服があまり目立たないような・・・」

チンク「ここの街は基本的に女性が多く通るから、その影響だろうな」

相良「あ・・・そうか」

そう言われると街中は女の割合がクソ高い。

ある意味百合状態である。

ノーヴェ「なんだったら翔兄は女装でもしてみるか？」

相良「やめとく。似合わないだろうから」

しかも昨日コスプレしたばかりだし。

チンク「なるほど。女装か」

ディエチ「面白そう」

相良「いやいや待て待て!!!俺が女装?!ありえないから目をキラキラさせるのは止めてくれ!」

チンク「・・・駄目か？」

相良「うっ・・・」

ディエチ「見てみたい」

相良「ぐっ・・・」

ノーヴェ「今日だけ・・・良いだろ？」

相良「・・・」

男だこの人達。

全員が上目遣い+涙目で俺を見るんだが？

それから2時間後・・・

試着室のカーテンが開く。

相良「うう／＼／＼」

チンク・デイエチ・ノーヴェ「え……」

え！？何！？そのリアクション！？

相良「やっぱりダメじゃんかあ／＼／＼」

ああ……昨日今日で着替える事多いな……

チンク「い、いや……これは……」

ノーヴェ「すげえ意外に……」

デイエチ「き……綺麗」

相良「……え！？」

何で！？

あ、一応俺の服装を説明しよう。

ヌードカラーのレースの美しいミニドレス・・・になってます。

普通男が着たらキモイのだが、よくよく自分の顔を見ると魔法の影響で女性の顔になっていた。

相良「ちよつと待て！誰だ俺に女装魔法かけた奴！？」

チンク・デイエチ・ノーヴェ「さ・・・さあ？」

相良「・・・」

もう・・・どつどつでもいい。



そんなこんなで女子3人+ のメンバーで歩く街中。

相良「うう・・・下が寒いなあ・・・」

チンク「ズボン慣れしてるからな」

デイエチ「頑張ってる慣れて」

相良「断る」

ノーヴェ「何で!？」

相良「何故女の服に慣れないといけないんだよ!？」

つか街中の女性達が今だに俺が男と言うことに気づかない件について。

魔法ってすごいな。

さてさてそんなことはさて置いて、腹が減ったなあ・・・

相良「飯食いに行くか」

ノーヴェ「よっしゃ！！！！」

チンク「うむ。丁度良いな」

ディエチ「行くぞ」

そう言っつて俺達は近くの店で昼食を摂るのだった。



相良「はぁ・・・恥ずかしかったぁ・・・」

チンク「面白かったか？」

相良「恥ずかしかったと言ったはずだが？」

ノーヴェ「ほんとは？」

相良「恥ずかしかったって！！」

デイエチ「喜んで欲しかった」

相良「それは無理な相談だな」

何で女装で喜ばないといけないんだ？

俺はそっちの気はないぞ？

デイエチ「また・・・着て欲しい」

相良「マジ？」

なにこの人たち。俺を百合の人間に改造するつもり！？

チンク「まあ冗談だ」

うん。そうでなきゃ困るの俺だ。

ディエチ「でも・・・またこうやって皆で遊びたい」

相良「・・・そうだな」

ノーヴェ「翔兄。絶対に、勝ってくれ」

相良「言われるまでもない。俺は負けるつもりなんて一切ないからな」

チンク「うん。頼もしい夫だ」

そう言って3人は俺に抱きつく。

相良「ちよっ!?!」

ノーヴェ「約束破ったら、命無いから」

相良「(´；；；)(ウツ：分かったよ。絶対に帰ってくる」

そう言って俺は3人に抱きつかれながら家に帰るのであった。

## 六日目 デイード+ウエンディ+オットー編

相良 Side

相良「な、なあ?」

デイード・オットー「?」

ウエンディ「どうかしたっすか?」

相良「いや、最近多数での一日が増えてるなって思ってた」

デイード「嫌でしょうか?」

相良「んや、俺は構わないけどさ。皆の好きなようにしてもらえば良いし」

デイード・オットー「では・・・」

相良「うを!?!」

二人は俺の腕に抱きついてきた。

ウエンディ「しまったっす!!遅れたっす!!!!」

デイード・オットー「(ニヤリ)」

相良「はぁ・・・喧嘩すんなよぉ」

そう言いながら俺たちは街を歩く・・・って、俺ほぼ毎日街中歩いてるなぁ・・・

相良「ん・・・うまい」

デイド「確かに・・・れる・・・」

オットー「中々・・・れる・・・れすね」



ウエンディ「ん……うまいっすう」

てなわけで俺達は地球で有名な抹茶アイスを食べながら街中を歩く。

ただ妙にこの3人のアイスの舐めかたがいやらしい。

いやらしすぎる為、その描写は無しで展開していきます。

相良「どうだ？地球の味なんだが？」

デイド「良いものですね」

オットー「今度は非地球に遊びに行きたいです」

ウエンディ「私もっす!!」

相良「あはは……そう、だな」

俺としては、まあそれは微妙だった。

知ってる人も多いと思うが、俺は地球の海鳴市出身。

そしてそこで発動した超能力のせいもあって、俺は化け物扱いされている。

まあそんなわけで俺は地球へはあまり行きたくない。

でも・・・ま、彼女達が行きたいのなら、俺も行こうと思う。

・・・いや、行こうと思えるんだ。

相良「・・・」

デイド「ど、どうなさいました？」

オットー「見つめられると、なんか困る」

ウエンディ「惚れたっすか!？」

相良「いや最初から3人には惚れてるから」

デイド・オットー・ウエンディ「//////////」

赤くなるのはいいんだけど、折れが人を見つめていた理由はそれじゃないからな!？」

相良「あのさ、今度・・・地球行かないか?皆で・・・一緒に」

デイド「・・・よろしいのですか?」

ウエンディ「無理する必要ないっすよ?」

相良「いやそっじょなくってさ、皆と行けば・・・俺は幸せに行けるからな」

地球で皆から化け物として見られていたとき・・・俺は孤独だった。

独りで生きることしか出来なくて、誰かと何かをする喜びを失っていた。

でもなのは達と結婚して、皆でいることの喜びを感じるようになった。

独りでいた頃の自分を破壊するような・・・そんな感じ。

・・・ま、その時の記憶すら、もうほとんど無いから・・・俺が地球に行くことを嫌がるのはトラウマみたいなものだろうな。

でも、きっとみんなで行けば・・・最高に幸せな毎日になるだろう  
と思う。

だから俺は、必ず地球に戻る。

相良「皆と一緒に、ワイワイはしゃぎたいしな」

オットー「そうですね」

ウェンディ「そうと決まったら、絶対に戦いに勝つっすよ?」

相良「分かってる」

デイド「勝利を信じています」

相良「安心しな。相良翔は負けない」

そう言っって俺達は再び街中を歩く。

相良「そう言えばセツテ達は今どうしてるんだ？」

ウエンディ「皆今だに任務に明け暮れてるっすね〜」

相良「そうか・・・」

セツテやトーレ達は現在ミッドから離れた次元世界で活動している。

リンディさん達が手伝っているから心配は無いが、出来ればまた会いたいな。

デイド「早めに帰ると報告を聞いていますが、目処はたっていないようです」

相良「そっか」

まあ皆忙しいのは同じだ。

だから俺は、絶対に記憶を失わない。

そして彼女達が帰ってきて『おかえり』と言っんだ。

相良「さて、帰るか」

デッド・オットー「はい」

ウェンディ「おうっす!!」

そう言っって俺達は家に帰る。



デイド「絶対に、何も失わずに帰ってきてください」

相良「ああ。任せろ」

その願いを、俺はまた背負って一日を終えるのだった。

## 七日目 カリム＋シャツハ編

相良 Side

本日は聖王教会のお二人と共に一日を過ごします。

相良「どこ行きたい？」

カリム「あの・・・遊園地と言う場所に行ってみたいです」

相良「遊園地行ったことがない？」

カリム「は、はい／／／」

そう言えば聖王教会からあまり外に出なかつたんだつたな。

全て写真などで終わっていたのだろう。

相良「シャツハもそれでいいか？」

シャツハ「もちろんです。どこへだってお付き合いたします」

相良「よし。決まりだな」

そう言つて俺達は遊園地に向かつていった。

相良「うわぁ・・・人多・・・」

カリム「これが遊園地ですか！」

シャツハ「行きましょう！」

そう言って家族連れが多い遊園地に入ってしまった。

相良「カリムは何か乗ってみたい乗り物あるか？」

カリム「はい！色々あります！」

相良「そんじゃ今日一日で制覇するか！」

そう言っ<sup>て</sup>まず<sup>は</sup>と<sup>言</sup>っ<sup>て</sup>いきなりジェットコースターに向かった。

・・・だが、流石は魔法の世界のジェットコースター。

長さが地球のドド〇パとか富〇急とかのレベルじゃない。

相良「一体何mあるんだよ・・・」

シャツハ「説明には『3キロ』と書かれていました」

相良「長！？何その拷問！？」

だからさつきから『キヤー』だったり『ギヤアアアア！！！！！』とか聞こえるのか。

カリム「（（（；。〇）））」

相良「カリム？大丈夫か？」

怖そうに体をガクガク震わせているぞ？

カリム「な、何事も、経験・・・ですよ」

別にジェットコースターは経験しなくてもこの先の人生で後悔することはそうはないだろ？

相良「さ、行くぞ！」

俺たちの番が来て、俺達はジェットコースターに乗る。





そして俺の妻達の叫び声は終了するまで続いた。



相良「う……耳があ……」

シャツハ「怖い……」

カリム「あれが……ジェットコースター……」

ああ怖かったあ……カリムとシャツハが。

ジェットコースターの長さ半端ないっすはいマジで。

相良「二人とも体大丈夫か？」

カリム「はい……少しクラクラします」

シャツハ「私もです・・・」

二人は必死に笑を作りながらそう言った。見るからに辛そうだ。

相良「分かった。二人は椅子に座ってまってる。飲み物買ってくる」

そう言って俺は二人を近くの椅子に座らせると近くの店に飲み物を買いに行った。

カリム Side

カリム「はぁ・・・中々スリリングな乗り物ですね」

シャツハ「そうですね。私も予想外でした」

翔さんは何とも無かったようですね。

流石と言いますが、実際翔さんが怖いものってなんなのでしょう？

カリム「シャツハ、翔さんは何が怖いと思う？」

シャツハ「さぁ？そう言われるとわかりませんね」

うーん・・・やはりオバケでしょうか？

相良「二人ともお待ちせ」

そう言っつて翔さんは私たちに紙コップに入った紅茶を渡しました。

カリム「ありがとうございます」

相良「いや。それよりも二人はこの後どこに行きたいか決まった？」

カリム「はい！」

ちよつと翔さんの怖い所、探してみましようか。

相良 Side

相良「へえ・・・お化け屋敷かぁ」

カリムのご要望で俺達はお化け屋敷に来た。

お化け屋敷とか人生初か・・・いや、アンデット・ワールドに行っ  
たことがあつたか。

相良「楽しみだな」

カリム「そうですね」

シャツハ「どんなものなのでしょうか？」

相良「行けば分かるだろ。行くぞ！」

そう言っつて俺達は中に入っつていく。



確か俺達はちゃんと手を繋いで歩いていた。

それは現在進行系だ。

シャツは手をつないではいるが気絶していた。

シャツ八つて意外とオバケ駄目なんだな。

カリムはまあ大体の予想はついてたらからあまり驚かないな。

カリム「(1111。)。ヒイイイ！！イイイイイイ！！！！！！！！」

そう言っただけでカリムは俺の腕にギュッと抱きつく。

相良「っ／／／／／」

そのせいでカリムのけしからん胸が当たって恥ずかしい。

はぁ……さっきまで寒かったのに……

そんなこんなでお化け屋敷から脱出した俺達は再び椅子に座った。

シャツハは俺の膝を枕にして目をクラクラして寝ていた。

相良「はぁ・・・ダメならダメっていわば良いのに・・・」

カリム「あはは・・・えと、その・・・知りたい事があったもので」

相良「知りたいこと？」

カリム「はい・・・その、翔さんの怖いものって何かなって・・・」

相良「俺の？」

怖いものね・・・うん・・・



カリム「あの、無いのであれば無いで構いませんから」

相良「あ……いや……」

俺は皆に隠していた事の一つを言う。

相良「実は俺

お化けとか、駄目なんだよね」



相良「別にお化けは何度も会うわけじゃないから大丈夫だよ」

そう言つてカリムの頭を撫でてあげた。

カリム「うう／＼／＼卑怯です／＼／＼これ以上何も言えないじゃないですかあ／＼／＼」

相良「あはは。これで俺に文句言つた奴なんて一人もいないぞ？」

カリム「胸張つていうことじゃないんですう／＼／＼」

とか文句言いつつも頬は真っ赤で嬉しそうです。

相良「はあ・・・さて、もう暗くなってきたし、帰ろうか」

カリム「あ、あの／＼／＼」

相良「ん？」

カリム「今日は／＼／＼ホテルに泊まっていきたいです／＼／＼」

相良「・・・」

頬を紅くしながらつて事は・・・あっちの方のホテルか。

相良「ま、いつか。行くか」

そう言っつて俺はシャツハを背負つてホテルに向かうのであった。

## 八日目 アリサ+すずか編

相良 Side

相良「おお・・・」

やべ・・・目が痛い。

あ、どうも。相良翔です。

本日の俺はアリサとすずかの2名と共に宝石店内にいます。

クラナガンの中で一番広く、その宝石の種類も豊富な店で俺は宝石の光で目を痛めています。

アリサ「情けないわねこのくらいで！」

え？このくらいとは？

すずか「私達の家もこんな感じなんだから」

嘘付けええええええ！！こんな眩しい場所あったら困るわあああああ  
あ！！！！！！

相良「冗談はよせ。そんでどれ買うんだ？」

アリサ「別に買わないわよ？」

相良「え？そんじゃ何しにきた？」

すずか「ウィンドショッピングだよ」

なるほど・・・てかこの二人は金持ちの一家だし、宝石なんてたくさんあるか。

・・・ん？それじゃほんとにこの二人の家には眩しい部屋があるのか？

相良「まあでも・・・綺麗だな」

傷一つな宝石。

澄んだその姿は、穢れなき美しさ。

見ているだけで自分の穢れた心が浄化されるような感じだ。

アリサ「何よ？興味あるの？」

相良「え？あ・・・いや、綺麗だなって思ってたさ」

すずか「どれが一番綺麗？」

相良「うん・・・」

そう聞かれた俺は周囲に飾られる宝石一つ一つを見た。

相良「……」

アリサ・すずか「どれ？」

相良「……多分、全部」

そう言うと二人は苦笑いしながら俺に言った。

アリサ「あ、あなた……ほんとに自由ねえ」

すずか「なんか……翔君らしいけど」

なんでだろ、俺も驚いた。

何で一つだけを選べないのか……

何度見ても、一つだけを選ぶ事が出来なかった。

どれもこれも値段や価値は違うのに……どうして……

……ああそうか。

俺が……欲ばりすぎるんだ。

なのは達の中で誰が一番好きかと聞かれて分からないのと同じように、宝石もどれが一番にすればいいのかわからないんだ。

相良「……」

アリサ・すずか「？」



帰り、俺は公園に寄って二人に話す。

相良「ごめん。今まで、結局誰かなんて選ばないで……皆を選んだままで」

アリサ「べ、別にいいわよ！」

すずか「そうだよ！謝ることじゃないよ！」

二人に謝ると二人は驚いた様に言う。

でも……

相良「でも……俺は……」

優柔不断で欲張りだ。

そんな俺に今までついてきてくれた皆に悪い。

アリサ「最初は驚いたわよ？でも、それがあんなだつて私達は知ってる」

すずか「うん。翔君は優しいから、だから一つに選べなくて……でも、それが翔くんなんだよ」

相良「優しいから……」

優しい……か。

俺は、優しいのかいつも分からない。

ただ何かをしないといけない、それだけが俺を動かしていた。

それだけのことをしただけで俺は皆から好かれた。

そう。誰でもやれることをして、俺が選ばれたんだ。

相良「俺は優しく何か無いさ。ただ……手を差し伸べたいだけだ」

アリサ「だから、それが優しさなのよ」

相良「……」

すずか「翔くんは、すごく優しいよ。でも、皆に優しさを与えすぎて、自分への優しさを望んでないんだよ」

相良「・・・良いの・・・かな」

俺なんかが、優しさや幸せを求めて・・・

俺がこれからやるであろう決戦は皆のためであって、俺のためにやるんじゃない。

アリサ「良いに決まってるでしょ」

すずか「翔くんに幸せになってもらわないと・・・私たちが困るよ」

そうか・・・二人は、俺に望んでるんだ。

幸せを・・・

相良「・・・そうか。ありがとう」

だったら、その優しさを素直に受け止めても  
いかな。

良いんじゃない

その後、俺は一人と共に夜を過ごしたのは余談である。

## 九日目 メガーヌ・ルーテシア編

相良 Side

本日俺は、メガーヌとルーテシアと共にクラナガンから少し離れた動物園へとやってきた。

平日にも関わらず家族連れが多い所を見ると、相当有名らしい。

メガーヌ「動物園なんて何年ぶりかしら？」

相良「俺は・・・あれ？」

よくよく考えると・・・父さんと母さんとガキの頃に行った時以来は・・・行っていないか？

相良「俺も特にないな・・・」

ルーテシア「私は初めて！」

メガーヌ「そうね。それじゃ今日は色々な場所を見ましょ！」

相良「そうだな」

そう言っただ俺は二人と手を繋いで動物園の中に入っていった。

相良「うわぁ・・・すげえ・・・」

入って歩くと、左右には様々な動物がいた。

ルーテシア「あ、ひよこだ!!」

ルーテシアが最初に目にしたのは、ひよこの大群。

一般客が持っていたりしていると、ころを見ると、どっちら触れるらしい。

相良「触るか？」

ルーテシア「うん！」

そう言っただけ俺達はひよこの群れに向かって、ひよこと戯れる。

ルーテシア「うわぁ・・・可愛いー！！！」

そう言っただけ一羽を両手に乗せて頬でスリスリしてる。

メガーヌ「可愛いわねえ。和むわ」

相良「痛っ!?!」

二人が笑顔の中、俺はひよこの軍勢に襲われていた。

メガーヌ・ルーテシア「うわぁ・・・」

全身にひよこが乗っかかり、くちばしで突いてくる。

相良「いていていていていていていて！！！！！！！！！！へルプ！！！！へルプ！！！！！！！！！！」

メガーヌ「意外に楽しんでない？」

相良「楽しんでないわ！！！！！！！！！！」



それからしばらくして群れから救助された俺は、二人の治癒魔法を  
かけないといけないほどまでの刺さり傷が出来ていた。

傷も癒え、再び奥に進むと、麒麟と象を見つけた。

相良「へえ・・・こんなに首長いんだあ・・・って、見上げてたら首が痛くなってきた（-\_-;）」

ルーテシア「象さんって尻尾ながーい!!」

メガーヌ「そうねえ（・・）ニヤニヤ」

相良「め、メガーヌ？何で俺をそんなチラチラ見るの？」

メガーヌ「え？単に象と翔のどちらが大きいかを比べてただけよ」

相良「下ネタ！？いやいや、それ以前になに比べてんの!？」

ルーテシア「あう／＼／＼／＼／＼／」

ルーテシアもそれとなく理解したようで、頬を赤くして両手で抑えて悶えていた。

相良「ていうか、娘の前でなんて教育に悪い発言してるんだよ!？」

メガーヌ「あら、ルーテシアはもう大人よ？十分に階段も登ったし」

ルーテシア「うう／＼／＼／＼／」

相良「いや、大人のリアクションじゃないよな!？どう見てもルーテシア恥ずかしがってるから!!」

メガーヌ「んもう、まだまだ教育が必要みたいね」

相良「いや、別にいらなと思うけど？」

メガーヌ「いえ、この程度の話しで赤くなっては駄目よ!!」

いや、そこで威張らなくても・・・

その後、メガーヌがこれ以上暴走しないようにとその場をリフレクト・ムーブを使って離れた。

さてさて歩いて歩いて最終的にはやっぱり皆、あの動物に合わない  
いと動物園に来た意味がないと思ったので、最後にやってきたのは・  
・

相良「ライオンだ!!」

ルーテシア「カッコイイ!!」

メガーヌ「私はあまり好きじゃないんだけど・・・」

相良「え？」

メガーヌ「だ、だって・・・噛み付かれたら痛いじゃない？」

そりゃ犬や猫だって痛いと思っただけど・・・

相良「ライオンの雄はやっぱり良いよな・・・王の風格って言うかさ・  
・なんか憧れるなあ・・・」

メガーヌ「お土産売り場に着ぐるみあつたわよ？」

相良「それで満足しろと!？」

折角の空気が台無しである。(、、)

その後、俺は何故かライオンに目をつけられ、ライオンに襲われたのは余談である。

相良「（、）、（ハア…疲れた（いろんな意味で）」

メガーヌ「お疲れ様」

ルーテシア「でも、楽しかった」

相良「ホントか？」

ルーテシア「うん。今度は・・・皆で行きたい」

相良「・・・」

皆・・・か。

相良「なあルーテシア」

ルーテシア「？」

俺は、思ったことを聞いてみた。

相良「その“皆”の中に

俺は入ってるか？」



俺はいつか、皆の記憶から・・・そして、俺の記憶から消える。

だけど消えるのは俺だけであって、他のみんなは消えない。

この世界の中で唯一・・・俺という存在だけが削除される。

今まで出会ってきた、様々な事情を持つ仲間。

出合いがあれば別れがあるのはこの世の成り立ちそのものだ。

されど出合いは一期一会。

だから俺は・・・出来れば忘れたくないし、皆から消えたくない。

ルーテシア「いるよ。翔さんは、私達の記憶の中心なんだもん」

相良「え……」

素直に、純粋な瞳で……彼女はそう言った。

ルーテシア「私は、翔さんに助けられて……今ここにいます。母さんがここに居るのも、翔さんが助けてくれたから。そんな……命の恩人が、私の……私達の記憶の中心なの」

相良「ルーテシア……」

メガーヌ「そうね。私達の日常を取り戻して、新しい日々を作ってくれたのは……間違いなくあなたよ」

相良「メガーヌ……」

二人は、俺の前に立って、言った。

メガーヌ・ルーテシア「絶対に忘れない。だから、あなたも忘れないで 私たちを」

相良「・・・」

それを、その約束は一人にする約束じゃなくて、皆にする約束。

相良「……もちろん。俺は、絶対に忘れない」

必ず勝って、皆でまた・・・楽しい日々を送るんだって。

相良「だから、俺は皆と一緒にこれから生きるよ」

メガーヌ「うん！」

ルーテシア「ありがとう…！」

そう言って俺達は、家に帰っていった。



九日目 メガイヌ・ルーテシア編（後書き）

久しぶりの更新ですね。

相良「ホントだな。あつという間に年越ししてしまっぞ。」

IKA「そっすね」；、、（「

## 十日目 スバル・ティアナ・キャラコ編

相良 Side

相良「おお・・・懐かしいなこの揃い方」

スバル「そうだね」

ティアナ「六課以来ですよね」

キャラコ「エリオ君がいないけど・・・」

相良「あいつはあいつなりに配慮してくれたんだろうな」

あいつ・・・優しいからな・・・なんか土産でも買ってくかな。

相良「んで？今日はどこいく？」

スバル「ゲームセンターとかは？」

相良「うん・・・キャラコがOKなら良いかな？」

そう言っただけ俺はキャラコを見る。

キャラコは一度もゲームセンターに行ったことがない。

まあ大自然での生活や都会離れた生活が影響しているんだけどな。

キャロ「行ってみたいです！」

相良「んゝそんじゃ行くか」

そう言っつて俺達はクラナガンの中で一番広いゲームセンターに向かった（未成年は気をつけようね！）

ゲームセンターに到着した俺達は最初にティアナがやりたいと言っ

ていたシューティングゲームをやっていた。

相良「お・・・おい・・・」

俺は啞然としていた。

基本的にシューティング・ガン系のゲームは1P一挺の銃を使うのだが、ティアナはデバイスと同じように二挺拳銃でゲームをこなしていた。

ティアナ「翔さんもやってみますか？」

そう言う隣に同じゲームがあり、俺とランキング勝負を挑んできた。

ランキングを確認すると10位から1位まで何故か『ティアナ・ランスター』と書かれている。

・・・一人でどんだけ記録たたき出してるんだよ・・・

相良「ってあれ？スバルは？」

基本的にスバルも同伴のはずだが・・・スバルがいたような感じがない。

スバル「わ、私はこういうの駄目なんで・・・」

そう言うスバルが指さしたのは『バイオハザード』だった（これはR-18）

相良「そりゃそうだ」

いくらスバルでも怖いものと怖くないものがあるからな（例えばなのはとか）

ティアナ「やりますか？」

相良「・・・そんじゃ折角だから、その挑戦を受けてたとうかな」

そう言っただけ俺も二挺拳銃（2P）で挑戦した。

スバル「あの・・・翔さん」

相良「ん？」

スバル「ここの言うゲームの経験は？」

相良「ないけど？」

そりゃ父さんと母さんからきつく駄目だっって言われてきたからな。

ティアナ「初めてで二挺拳銃って・・・（；\_；）」

相良「まあやってみるよ」

そんなこんなで俺とティアナはコインをいれてゲームを開始した。



ポイントもお互いに同じ分増えている。

つまり現在のポイントは両者同じ。

敵も同じように倒れていく。

ティアナ「翔さん……ゲーム初めてで、こんなに強いなんて……」

相良「お前もな。本気じゃないと辛い!!」

そう言ってお互いに一步も譲らない銃撃戦は続いた。

相良「ふう……」

ティアナ「引き分け……」

てなわけで俺とティアナは同点と新記録更新の二つの結果に終わった。

相良「これでティアナだらけの結果を破壊したな」

そう言つて俺はゲーム記録に名前を書く。

『白銀の星屑』

スバル「あれ？名前を書かないんですか？」

相良「いや、俺総裁だからフルネームとか書いたらあれだろ？」

キャロ「あ……そうですね」

なんとなく理解してくれた。

でも……まあ理由はそれじゃないんだけどな。



相良「よし、次のゲーム行くか！」

次はスバルが得意なパンチ力を測るゲームである。

用意されている的に全力の拳を叩き込んで、どのくらい強いかを測ると言うゲーム。

面白いことにこのゲームの開発は管理局と地上本部合同らしい。

理由とすれば魔力を使ってやってしまう人が増えてしまったため、Sランクの人が殴っても壊れないらしい。

スバル「うおおおおおおお!!!」

スバルの強力な右拳が放たれ、的が大きく凹んで煙をだす。

キャロ「凄い……」

ティアナ「相変わらずのバカ力（――）」

相良「ま、まあそれがスバルだしな（――）」

結果、『ランキング第3位』

スバル「あれえ……まただあ（；；）」

意外にもスバルが3位と言う結果だった。

相良「……あれ？」

2位と1位の名前をよくよく確認すると……

第2位、2名『風神』・『ロキ』

第1位、2名『風神』・『ロキ』

相良「あれ・・・この名前・・・」

物凄く心当たりがある。

しかも物凄い身近にいる人・・・

相良「（ヴァンと零二じゃないよな・・・）」

あの二人は拳の技が強いから・・・ありえなくはないけど・・・

相良「スバルを超えている・・・のか・・・ふ」

自然と笑が溢れた。

ティアナ「？どうかしたんですか？」

相良「いや・・・成長って、目に見えない場所で起こってるんだなって・・・思っただけさ」

ティアナ「？」

あいつらは、俺の知らないところで競い合って、お互いの意地とかプライドとか賭けて戦ってきたんだよな。

その結果は、報告書やデータベースだけじゃなくて・・・いろんな場所に残される。

例えば・・・そう、俺たちの記憶の中・・・とかな。

相良「よっし！俺もやってみるかな〜!!」

ティアナ・キャロ・スバル「（。　。　llll）」

相良「え・・・何その驚き顔？」

スバル「い、いやぁ・・・そのお・・・（^。^；）」

ティアナ「翔さんの力だと・・・」

キャロ「壊れるかと思いますが・・・」

相良「ま、魔力を込めないんだから壊れないよ！　多分」

ティアナ・キャロ・スバル「（（総裁からなんて弱気な発言!?!）」

「

いや、そこで総裁関係ないって。

相良「・・・」

俺は取り敢えず普通に構える。

魔力を込めないでただ普通に右手に力を込めて・・・放つ。

相良「あ……」

スバル・ティアナ・キャロ「「「やっぱり!？」」「」

的の中心に直撃した瞬間、予想通り、壊れてしまった。

相良「あつちやあ……」

取り敢えずこのゲームのランキングの1位になりましたとき。

相良「そんじゃ次は・・・やっぱりあれか？」

そう言つて俺達はプリクラに挑戦した。

ティアナ「やりかた知ってるんですか？」

相良「いや、最近のプリクラは分かん」

スバル「私が教えますよ！」

そう言つて俺はスバルにプリクラの知識を少しずつ叩き込んだ。

相良「そんじゃ取り敢えず撮るか」

そう言つて俺達は並んだ。

右にスバル。左にティアナ。俺の前にキャラダ。

キャラ「（、）ハア…」

相良「ん？どうかしたか？」

キャラ「私・・・子供ですよね（、；；；）」

スバル・ティアナ「（；^ ^）」

スバルとティアナは苦笑い。

相良「そつだよなあ・・・」

キャラのコンプレックスのひとつだ。

エリオは男だから成長が速い。

ルーシアもそれなりに成長してきているのだが、キャラはあまり背が伸びない。

牛乳も飲んでるからとか魚食べてるなどと努力はしているのだが・

まあ小さい可愛さがキャラなのだが・・・コンプレックスなんだよね。

相良「・・・それじゃ」

キャラ「え・・・キヤッ!？」

スバル・ティアナ「え!？」

俺はキャラをお姫様抱っこで持ち上げた。

キャラ「あ、あう／＼／＼／」

キャラは何故か顔が真っ赤だ。

相良「ど、どしたの？」

スバル・ティアナ「（いい加減気づこうよお・・・）」

てなわけでキャラはお姫様抱っこの状態でプリクラを撮ったのだっ  
た。



スバル「ん〜！楽しかったあ！！！」

ティアナ「あんなに遊んだのも久しぶりね」

キャロ「面白かったです！」

相良「そうかあ」

俺も初めてゲームセンター行ったけど、中々面白かったな。

スバル「また行きたいですね！」

相良「そうだな。また・・・行きたいな」

日々、皆と様々な所に出かけて・・・様々な想いがこみ上げる。

失いたくない。消えたくないって・・・心のそこから、思い始めてきた。

相良「また、絶対に行こうな」

スバル・ティアナ・キャロ「はい！！！！」

固まり出した決意が、徐々に増えていったのを実感して、俺達は帰った。

十一日目 フェイト・レヴィ・アリシア・リニス編（前書き）

今回は4人と言う異常なまでに多いメンツで挑戦！！

さて、そろそろ最終章に突入するかな？

十一日目 フェイト・レヴィ・アリシア・リニス編

相良 Side

相良「あ……あれ……」

俺……何で今、総裁室にいるんだっけ？

ルチア「翔……どうかしたの？」

相良「え……」

あれ……なんでルチアが俺の隣に……って、ああそうか。

相良「いや、なんでもないよ」

俺……また記憶が消えたのか……

ルチア「でも……顔色悪いよ？」

相良「……」

って、今日は仕事するためにここに来たわけじゃないのに……

日課するのは怖いもんだ。記憶が無くても体が勝手に行くんだからな。

相良「悪い。今日は帰るよ」

ルチア「う、うん。お疲れ・・・様」

ルチアも、無理をしたような笑でそう言って、俺は総裁室を後にする。

ルチア「・・・翔・・・もしかして・・・」

そんなルチアの不安そうな声は、俺の耳には届かなかった。

相良「おいフェイト」・・・って「

フェイトを探しに管理局に来た。

今日は管理局に提出する書類があるとかなんとかでいるはず。

総裁である俺はもちろん注目される。

まあ総裁だから当然と言えば当然だけど・・・

父さんや母さんも仕事柄、周りの目とか・・・色々気にしてるのかな・・・

相良「・・・ふう」

いつか・・・静かに生活したいな。

自由・・・とまではいなくていい。

けれど、この戦いが終わったら・・・“魔法使い”から引退でもするかなあゝ

・・・ま、それは“全てが終わった俺”が決めることか。

相良「って、フェイトはどこだ？」

かれこれ30分程歩き回っているけど見つからない。

?????「あ、お兄ちゃん？」

相良「ん？」

?????「お兄ちゃんだ！」

?????「翔さん！」

俺を呼ぶ3人の声。



相良「アリシア・・・レヴィにリニスまで・・・」

何故か3名が管理局に来ていた。

アリシア「お兄ちゃんを探してたらルチアから管理局に来てるかもって言われたからきたんだよ」

相良「何故？」

リニス「何故って、今日私達とお出かけの約束をしたのは翔さんですよ?」

相良「え・・・そうだったっけ?」

レヴィ「うわぁ〜お兄ちゃんさいてえ〜!」

レヴィにまで怒られる。

えっとお・・・あ、そうだそうだ。

相良「悪い悪い。フェイトを探してたらすっかり忘れてた!」

そうだそうだ。俺は今日、フェイトだけじゃなくてアリシア、レヴィ、リニスとも一緒に過ごそうと考えてたんだっとな。

・・・たく、記憶が減っていく運命も、あまりいいもんじゃないな。

・・・って、俺はいつ魔法を使った?

最近使ったっけな・・・覚えてない。

そんな記憶すらも忘れるなんてな・・・

リニス「どうかしました？」

相良「え・・・いや、何でもないよ」

アリシア「顔色悪いよ？」

レヴィ「僕の髪と同じくらい」

相良「そんな訳ないだろ（；^ ^）」

そんなツツコミをするが、実際・・・あまり体の調子が良いほうじゃない。

まあ記憶がなくなったりすることで起こる混乱だらうけど、俺の脳が記憶が無くなるということに対しての処理をしてるから・・・だと思っ。

俺もよく毎日皆と付き合えてるよな。

相良「それで、フェイトがどこにいるか分かったか？」

アリシア「うん。こっち」

そう言っ俺たちはアリシアを先頭に歩きだした。

アリシア「あ……」

リニス「フェイト……」

相良「……ったく」

俺達は今のフェイトを見て、驚き、そして不安になる。

フェイトは疲れた表情をしながらも、モニターと向き合って力チカチとキーボードを慣れた手つきで入力していた。

確か管理局には今日の早朝から向かっていたはずだから・・・

相良「かれこれ10時間程か・・・あいつ」

ほんと、自分の体の事は気にしないのかね・・・

レヴィ「・・・」

レヴィは何かを感じたのか、自分の胸に手を当てていた。

相良「・・・どうかしたか？」

レヴィ「・・・僕は、あんなに辛そうな表情で生きてた」

相良「え・・・」

レヴィ「僕の生きてきた世界・・・マテリアルの世界って言えば分かる?」

相良「ああ。シユテルやアーチエの世界ってことだろ?」

そして・・・あいつの世界。

レヴィ「うん。僕は、誰とも出会わなくて・・・プレシアの言いな

りになり続けた成れの果て。それまでの日々は・・・絶望だった。疲れて、疲れて・・・でも、弱音は吐いている時間が無かった」

相良「・・・」

そう、だよな。

レヴィは言わばバッドエンドのフェイトだ。

相良「なあレヴィ？今のフェイトってさ・・・幸せ、だよな？」

レヴィ「え？」

相良「レヴィは言わばもう一人のフェイト。だから、気持ちは分かるはずだ」

そう言くとレヴィは頷く。

相良「だから・・・あいつの気持ち、俺は知りたいんだ」

フェイトは、プロジェクトFによって作られた生命。

その事が原因で、様々な事件で辛い思いをしてきた。

存在と言うだけで・・・悲しい人生を送らねばならなくなっていた。

でも、それでも必死に生きるフェイトの事・・・俺は好きで。

だから俺は、そんな必死に抗うように生きるフェイトの味方になり  
たかった。

俺は・・・フェイトの味方でいられるのか？

フェイトの事、幸せに出来てるのか？

レヴィ「聞いてみたら？」

相良「あ・・・えと・・・まあ、そうだな」

確かにそうだけど・・・聞きづらいな。

相良「・・・でも」

俺はフェイトのもとに歩きだした。

フェイト「はぁ・・・」

相良「お疲れ様」

フェイト「翔・・・」

俺はフェイトの肩に手を置いて声をかけた。

相良「仕事はこれで終わりにしろ」

フェイト「え・・・でも」

相良「でもじゃない。そんな疲れた顔で仕事してるとこ見せられたら心配だ」

そう言っつて俺は強制的にモニターを消して、フェイトをお姫様抱っこで持ち上げ、歩き出す。

フェイト「え／／／／／／／／あ／／／／／／／／」

相良「今日は俺たちと付き合え。拒否権無しで」

フェイト「うう／＼／＼／＼／＼今日の翔は、なんか意地悪／＼／＼／  
」

相良「知らん」

そう言ってアリシア達の前に連れてきて、フェイトを降ろした。

アリシア・レヴィ「ぶづう〜!!!!」

リニス「むう」

相良「えと・・・どうかいたしましたかな？」

3人の機嫌が悪い。

アリシア「フェイトだけずるい〜!!!!」

フェイト「え、ええ!?!」

レヴィ「お兄ちゃん!僕もお姫様抱っこしてえ!!」

相良「はい!?!」

二人とも駄々っ子モードである。

リニス「わ、私は別に／＼／＼／」



とか言いつつリニスもして欲しいらしい。

相良「……、ハア…後でな。取り敢えず管理局出るぞ」

そう言っただけ俺達は管理局を後にした。

フェイト「うう／／／／／／／／」

家に戻った俺とフェイトは庭に出て、俺は胡座で座り、フェイトは



相良「悪いが母さん直伝だ。ちょっと熱いぞ」

母さん遺伝のパイロキネシスを若干指に込めて放つ。

昔、何度も何度もくらって火傷をした。

いやあ、あれは中々痛かった。

フェイトにはほんの少しの力を込めて放ったので少し熱いくらいだ。

フェイト「熱すぎだよ!!!」

・・・人によって違うらしいです（；^ ^）

相良「あはは、ごめんごめん」

そう言っつて俺はフェイトの額に両手を添えて魔力を込める。

相良 ㊦

㊦ スターダスト・ヒーリング  
白銀の加護 ㊦

㊦

両手が白銀に光だし、フェイトの怪我を治していく。

フェイト「翔……」

相良「安心しろ。俺の治癒魔法はあまり魔力を使わないから記憶もほんの数分間消えるだけだ」

フェイト「でも……」

まあそれでも消えることへの不安だよな。

相良「大丈夫。皆の存在を忘れたわけじゃない」

まだ……皆の記憶があるのなら……

フェイト「でも……やっぱり心配だよ……」

相良「全く、その心配性はいつになったら良くなるかなあ？」

それがフェイトの良さと言えば良さだけどな。

フェイト「だったら翔が私たちに心配をかけないようにしてよ」

相良「うっ……」

確かにその通りか。

相良「ったく……敵わないな」

そう言つて俺はフェイトの頬に手を添える。

フェイト「ん／＼／＼」

ビクツト震えたフェイトの体。

相良「俺さ、父さんと母さん以外の人には負けない自信があつた。けれど、フェイト達には全く勝てないな」

フェイト「え・・・でも、私たちに勝つたよね？」

相良「それは戦闘でな。戦うことしか強くない俺は、それ以外は全然だ」

そう。俺よりも必死に働く人。

必死に仕事する人。

鍛錬する人。

学んでいる人。

悲しんでいる人。

笑っている人。

そう。俺は・・・最強じゃない。

フェイト「・・・皆、翔が目標だから」

相良「え？」

フエイト「翔って強いし、若いのに総裁やってる。そんなすごい人は皆にとって目標で、一番追いかけるべき人なんだと思うよ？」

相良「・・・」

俺が・・・目標。

前にも、そんなことを誰かから聞いた気がする。

俺にも、目標の人がいる。

その人は真面目で、努力家で、弱い部分を他人には見せなくて、いつも笑顔でいる人。

その人を追いかけて・・・追いかけて、今ここにいる。

誰しもが、誰かを目標に生きてる。

目標と言っなの理想を求めて・・・日々、頑張ってる。

相良「フェイトは、誰を目標に生きてるんだ？」

フェイト「・・・」

フェイトは俺の頬に手を添えて顔を寄せて・・・

相良「んむ！？」

俺の唇を奪って、こっぴいった。



フェイト「いつも傍にいてくれる、大切な人だよ」

相良「・・・」

なんの迷いもない瞳で、俺にそう言った。

相良「・・・そうか」

俺はその瞳に、笑顔で答えた。





その日、俺とフェイトの悲鳴だけが空に響きわたったような・・・

クリスマス番外編！！（前書き）

最多コラボになりますね（#^・^#）

長い内容になりますのでご注意ください！

## クリスマス番外編！！

相良 Side

相良「・・・寒い」

冬、クラナガンの夜は雪が降り、極寒状態だった。

街を歩けばカップルばかり。

え？俺は？

・・・俺は一人で寂しく一人で両手に重い買い物袋を持って街を歩いていた。

ああ・・・寒い。

相良「温もりが欲しいなあ・・・」

そんな事をボヤきながら俺は黒いコートを羽織って寒さを凌ぐ。

・・・って、一切凌げてないのですが（-\_-;）

相良「・・・でも、折角のクリスマスだしな」

そう言って俺は頑張って陸宙管理本部に向かう。

今回は特別にメチャメチャ人を招待したからな。

・・・あれ、何でこんなに不安なのでしょう？

胸騒ぎを抑えられずにいた俺はその胸騒ぎの正体を考えながら歩くのだった。

その後、俺は何とか頑張って陸軍管理本部に戻るのだった。

そして広い厨房に移動して買ってきた食料をしまっ。

相良「はあ、はあ、はあ……なんでこんなに体力ないんだ俺……」

マルス「お、お疲れ様です」

メルキユール「ご苦労様でした（――）」

デバイスに言われる俺って……

相良「さて……後は準備をするか」

そう言って俺は一人（+デバイス2機）で寂しく『準備』を行うのであった（；；；）



ルチア Side

ルチア「うん・・・」

私はクラナガンの宝石店にて、私は色とりどりの宝石を見つめていた。

それは、彼にプレゼントするため。

ただ・・・どんな宝石をプレゼントしていいのかわからない。

ルチア「うん・・・難しいなあ・・・」

ワルキューレ「だらしのないわね。ビシッと決めちゃいなさいよ」

ルチア「うっ・・・ワルキューレが厳しいよぉ（；；；）」

そんな感じで涙目になっていると、店員の大人の女性が私に声をかけてきた。

店員「お客様、本日はどのような宝石をお探しですか？」

店員さんに聞いた方が早いのかな・・・

ルチア「えっと、クリスマスに・・・その、夫にプレゼントしよう  
とって・・・」

店員「でしたらこちらはどうぞでしょうか？」

ルチア「・・・」

そして私はその宝石を買って、外へ出た。

相良 Side

相良「さてさて・・・そろそろかなあ」

そう言つて俺は父さんと母さんを呼んで、転送魔法陣の場所に向かった。

右蕪「何人くらいくるんだ？」

相良「取り敢えず今日・明日で21人」

火澄「多いわね」

相良「まあ交流は大切だよ」

右蕪「お前は少し変わつて、別次元・別世界の住人とも交流がある。それは誰よりもすごいことだ」

相良「・・・ありがとうございます」

まあそれも忘れなければ良いんだけど・・・

「……翔」

相良「……ようこそ」

こうして陸宙管理本部に、様々な世界の、様々な事情を持つ住人がやってくるのだった。



そうやって俺は白ワインをグラスに入れて香りを楽しみながら口に含んだ。

相良「どうしよ？今日は飲みまくって酔うか・・・ほろ酔い程度で済みますか・・・」

??「お前が飲み倒れたらここの片付けが難しくなるんだ。ほどほどにしとけ」

相良「ん？」

背後から声をかけられた。

相良「お、龍牙じゃないか」

龍牙「よっ！招待してくれたありがとう」

相良「世話になってるからな・・・って、お前まだ酒飲める歳じゃないだろ？」

そうやって俺は龍牙の右手にもたれた酒の入ったコップを取り上げる。

龍牙「待て！それが無いと楽しめない！！」

相良「何歳だよお前（-|-）ダメなものダメです！」

俺はこいつの保護者なのかと心の中でツッコミをいれながら龍牙にオレンジジュースの入ったコップを渡す。

相良「お子様にはこれで満足していなさい」

龍牙「解せぬ！！！！」

相良「それがルールだ」

総裁の身であるが故にこれだけはちゃんと守らないとな。

龍牙「俺は中将だぞ！！！」

相良「俺は総裁だぞ？」

龍牙「畜生おおおおお！！！！！！！」

相良「あ、おい！！！」

龍牙は男泣きしながら走り去ってしまった・・・って、（、（  
ハア…

相良「酒くらいもう少し歳をとれば飲めるだろうに」

????「同感だな」

相良「！？？」

再び背後から俺に声をかけてくる男性。

相良「あのさハクト。何故気配を消して俺に話しかけてくる？」

ハクト「すまない。忘れていた」

忘れてたって……何で俺は気を抜くことができないだ……パー  
ティーなのにい……

ハクト「そんな事はさて置いて」

相良「さて置かれた（――；）」

「一応重要なことだと思うよ？友達出来ないよ？『はがない』になる  
よ？

ハクト「む……何か悪い事を考えたな？」

相良「な、ナンノコトヤラ？」

ハクト「ほう……良いだろう。後で覚えておけ」

相良「……」

そう言っつてハクトは殺気を立たせて去っていった。

相良「あいつに友達が出来ますように」

南無。



相良「あ……そう言えば……」

俺は一人、こつ言う場所が好きそつじゃない奴を思い出して探した。

相良「……つて、ここにいた」

湊「……何か用か？」

会場の端っこ……しかもライトが余り当たっていない暗い場所に湊は一人、腕を組んで周りを見ていた。

相良「いや、誰とも話さないのかって思ってさ」

湊「・・・なあ翔」

相良「ん？」

湊「あの中にいる転生者全て・・・殺していいか？」

相良「駄目です」 即答。

湊「何故？」

相良「パーティーだから」

湊「納得がいかないな」

いや、殺すことが一番納得いかん！！

相良「パーティーっていう祝い事に存在は関係無いんだよ」

そう言つて俺はバイキングの様に連なる料理を白い皿にいくつつか盛る。

そしてフォークを持って湊に渡す。

相良「ま、今日のこの時間、この場所では転生者も転生者殺しも悪魔も天使も神も無しだ。全てが平等で、等しい存在だ」

湊「・・・」

湊は無言で俺の渡した料理を食べた。

湊「これは、翔が作ったのか？」

相良「まあな」

湊「・・・久しい味だ」

相良「・・・そうか」

懐かしそうに、静かに、そして小さく微笑む湊。

そんな彼の姿に、俺の頬も緩む。

相良「あれだったら俺が良い奴紹介するぜ？」

湊「その程度は自力でどうかする。それ以前に友人の類は必要ない」

相良「・・・ったく」

俺はそんな彼の態度に苦笑いし、頭をぼんと叩いて去っていった。

相良「あ、料理と飲み物はおかわり自由だからな」

そう言っつて俺は別の奴に会いに行く。

湊「・・・今日だけは・・・な」

相良「・・・っておい〜！」

少し進むと、早速乱闘が発生していた。

??「てめえ！！俺の最後の肉をとりやがったな！！！」

??「勘違いするな。別にお前のではない」

?? 「んだとてめえ!!!」

そう言つて二人は殴り合う・・・

相良「（、、）ハア…」

?? 「うるさい。ここは喧嘩する場所じゃないんだが？」

と、ストロベリーサンデーを食べながら二人に声をかける一人の男。

?? 「他人は黙つてろ！俺はこいつと決着をだな!!!」

?? 「別にここでやる必要ないだろ。それとも」

相良「!?!」

そいつから放たれるのは、殺気。

普通のパーティーがとんだことになるのは嫌だな・・・

?? 「二二二で一気に終わらせるか?」

右蕪『

いい加減にしろ!!!

』

???・???・???「「「つ!?!?!?!」

突如、3人は強力な重力によって地面に倒れて起き上がれなくなつた。

相良「父さん・・・」

父さんは3人に向かって魔法を発動したのか。

右蕪「全く。若い者達は皆そうなるんだな」

相良「いや、皆が皆そうじゃないって(･･････)」

そう言いながら俺は3人に手を差し出す。

相良「悪かったな。創世、零二。それに････衛宮恭二」

真道「すまない」

蒼騎「お前の父さん強いな」

衛宮「悪かった。もう覚えてくれたのか」

相良「ま、20人ちよつとだ。その程度なら覚えてみせるぞ」

衛宮「そうか。恭二でいい。これからよろしく」

相良「俺は翔でいい。こちらこそよろしく」

そう言っつて俺と恭二は握手した。

右蕪「それで翔」

相良「はい？」

右蕪「火澄を知らないか？」

相良「母さん？いや・・・知らないけど？」

右蕪「そうか・・・まさか・・・な」

そう言っつて父さんは不安そつな表情でその場を後にした。

真道「どうかしたのか？」

相良「・・・いや、母さんの事だからな・・・（――）」

真道・蒼騎・衛宮「？」

俺は若干の不安を覚えつつ、他の人に会いに行った。



相良「って……、ハア…」

あれ……今日何回目だろう？

何故かパーティーにあまり乗り気じゃない人が数名いらっしやる  
（――；）

相良「……まあ、俺がどうにかしろってことかな……」

そう言っただけ俺は一人だけで飯を食べる奴に声をかける。

相良「どうも。確か……銀だったよな？」

銀「……何か？」

相良「一人で何わびしく食べてんだよ。もっと明るく行こうぜ？」

銀「……」

彼は無言で食べ物をお口に運ぶ。

相良「……、ハア……」

銀「それで、どうして俺を誘ったんだ？」

相良「まあ色んな奴と知り合いたくてさ。それよりもお前もよく参加したな？」

銀「別に。参加してくれと言われたから来ただけだ。別に来たかったわけじゃない」

相良「・・・ふうん」

なんだ・・・こいつ、見た目程悪い奴じゃないらしい。

つてか、ただのツンデレか何かか？

まあアリサやアリアには勝てないけどな。

銀「・・・まだ何か用か？」

相良「いいや。これからもよろしくなって・・・それだけさ」

銀「・・・」

俺は銀に手を差し出す。

銀は俺の手を見つめながら考え、手を差し出して握手する。

銀「勘違いするな。差し出されたから返したただけだ」

相良「ああ。そうだな」

ま、こつこつ奴と知り合うのも悪くないか。

相良「俺の事は翔と呼んでくれても構わない」

銀「……」

彼は無言で頷いた。

相良「あ、飯どうだ？」

銀「……悪くない」

相良「……そうか」

正直に言わない所がツンデレの象徴みたいだな。

相良「……そんじゃ、また後でな」

銀「別に後で会う必要はない。ま、翔がどうしても会いたいなら考えておく」

相良「そうかい」

そう言っただ俺は去っていく。

相良「おお」

溜息ばかりかと思っていた俺にも、ラッキーな事が。

既に4人程グループで会話を楽しんでいる人もいた。

相良「どうも4人共、楽しんでるか？」

ゼロ「ああ。楽しませてもらってるぜ」

ノエル「たまにはいいもんだな」

結城「この料理、全部お前が作ったのか？」

相良「まあな」

ラング「よくこれだけの量を作れたな」

相良「ま、慣れだよ慣れ」

そう言つて4人と会話を楽しむ。

ゼロ「そう言えばクリスマスつてなんだ？」

相良「おゝい待て。何故そこから説明しないといけない？」

ゼロ「知らねえから」

相良「うわぁ単純（――）」

ゼロ「悪かつたな」

ノエル「二人とも、喧嘩はするなよ？」

相良「してない。まあ仲良くするつもりだよ」

ラング「まあここで喧嘩しても・・・な？」

相良「そうだな」

ここで喧嘩すると大抵のものが壊れる。

そして父さんからの地獄の重力攻撃が襲い来るぜ（――）

結城「というか、翔はよくこれらを一人で作るうと思ったな。両親とかを頼りにしなかったのか？」

相良「いや、自分で企画しておいて周りに頼りっぱなしなのがちょっとな」

頬をポリポリ掻きながらそう言うと皆、頷く。

相良「まあそんなわけで一人でぼちぼちやってたわけだよ」

ノエル「それにしてもこの量は……」

相良「まあうちの家族には、大食らいの人が多いからな」

スバル・ギンガ・ノーヴェ・レヴィ・ヴィータ・アリシア「……」

「」( < > ) ∙ ∙ ∙ イクシツ「「「「「

俺はその後、他の人とも交流していくと、再び集団で食べてる人達  
がいた。

相良「どうも。楽しんでるか？」

リュウト「ああ。楽しくやってる」

カエデ「でも私はリュウトの料理食べたい！」

リュウト「って言われてもな・・・」

相良「まあ厨房なら空いてるし、道具の場所とかなら教えるから出来るけど？」

カエデ「やった!!!」

リュウト「悪いな」

相良「別に。妹だろ？」

リュウト「いや・・・妹と言うか・・・なんというか・・・」

相良「？」

曖昧でしつかりと答えられないところを見ると、まあ色々事情があるのだろう。

相良「まあいいや。えと、レグルスだよな？よろしく」

何故か俺の視界の端っこにいたので声をかけるとビクッと震えてからおずおずと手をだした。

レグルス「は、はい。よろしくお願いします」

ライガ「恥ずかしがり屋なんだ。初対面だし、緊張してるんだろう」

相良「なるほどね」



恥ずかしがり屋な人ね・・・やべ、フェイトとリニスくらいしか  
頭に出てこない。

フェイト・リニス「くく」<>「い」：イクシツ・・・風  
邪かな・・・「」



ハクト「……」

ハクトが無言で俺の肩をぽんと叩いた。

相良「そ、そんな哀れみの目で俺を見るなよ……」

隊長「まあそんなもんだろ」

相良「いや、名前がはつきりしてないあんたに言われても……」

隊長「大きなお世話だ」

桜内「マアマア（（ノ、ー、（ノ」

アポロ「喧嘩は駄目だよ」

相良・隊長「「いや、男の娘wが何を言う?」「」

アポロ「それは言わない約束だろ!?!つか男の娘の後にwを付ける理由は!?!」

相良「面白いから」

隊長「だって面白いじゃないか?」

アポロ「畜生!!」

ハクト「仲いいな」

アポロ「良いように見えるのか!?!」

ハクト「ああ」

相良「確かに、仲良く見えるぞ？」

隊長「たしかにな」

アポロ「あれ・・・さっきまで二人が喧嘩してたのに仲良くなって俺が孤立してる気が（、；、；、）」

相良・隊長・桜内・ハクト「（あれ！？なんか泣いてると本物の女にしか見えないだとう！？）」「」

この時のあまりの衝撃に自分の目を治療しようかと考える4人だった。

さてさてそんなことはさて置いて、

アポロ「さて置かれた（、；、；、）」

あ、アポロさんはもう用済みなので終わりです」

アポロ「解せぬ！..」

相良「勝手すぎるだろ作者（、|、、；、）」

スマソ。

ハクト「反省の色無しだな」

そ、そんなことはありません!!

桜内「仲間外れは駄目だな」

してません!!

隊長「しようとしてたよ」

まだしてません!!……あ。

相良・アポロ・ハクト・桜内・隊長「」「」「」やろつとしてたのだな!!……!!」「」「」

（……）

相良「あ、朝我もいたのか？」

朝我「久しいな。元気にしてたのか？」

相良「まあな。あれ、そちらの方は？」

朝我「黒河想夜と創神リヨウだ」

黒河「黒河想夜。朝我とは先ほど知り合ったばかりだ」

創神「リヨウと呼んでくれ。俺も先ほど知り合ったばかり」

相良「そうか。どうだ朝我は？」

黒河「良い奴だと思うけど？」

創神「いい奴じゃないか？」

朝我「本人の前なんだが？」

まあ本人の目のまで悪い奴なんて言わないよな普通。

相良「夜我は？」

朝我「あいつは家で鈴々達の相手をしている。俺か夜我しか相手できないのでは」

相良「あっはは・・・」

大変だな夜我・・・

黒河「それよりも翔。何でこんな大きなパーティーを用意したんだ？」

相良「そりゃ皆で楽しくしたいからだよ」

クリスマスは毎年なのは達とだからな。

一度くらいは違うクリスマスを用意したいと思ったからな。

創神「そうか・・・」

相良「どうした？不服か？それとも、楽しくないか？」

黒河「どれも無いな。楽しいさ」

創神「そうだな。楽しくさせてもらってる」

相良「そうか。んじゃ、楽しくしてろ」

相良「はぁ・・・」

龍牙「おい」

相良「ん？」

俺は一息つくと龍牙が俺に声をかけてきた。

龍牙「先ほどから、大分無理をしているんじゃないか？」

相良「・・・いや、別に」

龍牙「悪いが俺にそんな嘘は効かない」

相良「・・・」

龍牙「俺はお前の事、仲間だと思ってる」



相良「ああ」

それは、俺も同じだ。

龍牙「仲間ってのは、悩みを共有することも出来るのだと思うが、俺では役不足か？」

相良「・・・そんなことは・・・ない」

龍牙とは、一番長い付き合いだからな。

何度も戦ったり話したりしてるし、それなりに世話になってる。

だからこの中で一番話せるのは龍牙だよな。

相良「・・・そんじゃ、ちょっと悩み・・・聞いてもらっていいか？」

龍牙「俺で良ければな」

そう言っつて俺は龍牙に悩みを話す。

相良「俺さ、皆と結婚して4年くらいになるけど、その間で・・・  
想いに変化があっただ」

龍牙「それは、皆の中で誰か一人、本気で好きになっただ人が出来た  
ってことか？」

相良「ああ。それで俺はこの想いを、本人に伝えるべきか迷ってて  
な」

龍牙「何故？」

相良「既に結婚してる。この時点で想いは伝えてるだろ？今更伝える  
必要があるかどうかで迷ってるんだ」

龍牙「・・・」

気づくと時は経っていた。

色んな人と出会い、色んな事情を知り、色んな真実に立ち向かってきた。

そして様々な想いを伝えて・・・今に至るわけだ。

そんな中でこの好きと言う想いだけは、伝えるべきなのかどうか・・・分からない。

龍牙「・・・」

龍牙は無言で俺の前に立って聞く。

龍牙「翔。お前、そいつの事・・・どのくらい好きだ？」

相良「・・・」

俺は恥ずかしいけど、正直な想いを彼に言った。

相良「多分、この無限に広がる世界のどの女性の中でも……一番の好きな女だと思う」

カツコつけない言葉かもしれない。

でも、それは正直な想い。

今、残り少ない時間で……そう思ったよ。

龍牙「……、（ハア……」

相良「え？」

何故か溜息をつかれた。

龍牙「お前さ、考え過ぎなんだよ」

相良「何が？」

龍牙「難しく考えすぎだ。どんなに難しいことも、実は案外シンプルで単純な答えだったりするもんなんだよ」

相良「……」

龍牙「お前はもう、とっくに気づいてるだろ？何をすればいいくらい、もうとっくにわかってるんだろ？」

相良「……」

龍牙「ま、俺はここまでしか介入できない。後はお前自身で決めることだろうからな」

そう言っつて龍牙は去っていった。

相良「……」

龍牙の言つとおり、何をすればいいか……何となく分かっていった。

いや、これしかないと分かっている、それを否定し続けてきた。

それは、怖いから。

今の関係を壊したくないから。

今のままでいれば、誰も傷つかないから。

相良「分かっている。だけど……」

????「失うのが怖いか？」

相良「……」

お前の前にハクトが再び現れた。

相良「聞いてたのか？」

ハクト「聞こえた」

相良「そうか……」

ハクトは無言で俺の瞳をのぞくように見た。

相良「な、なんだよ……」

ハクト「……少し、歯を食いしばれ」

相良「え?!」

次の瞬間、視界が衝撃で揺れ、俺は一瞬何が起こったかわからなかった。

俺・・・殴られたのか？

頬に走る痺れにも似た熱さより、先ほどまで大人しかったハクトの暴力に驚いた。

ハクト「気分はどうだ？」

相良「最悪だ。いきなり何すんだよ？」

赤く腫れた頬を右手で摩りながらそう言うとハクトは今までにないほど真剣な表情で俺を見る。

ハクト「後悔するぞ」

相良「え？」

ハクト「何も壊したくなければ、何もしなければいい。そう生きれば必ず後悔する」

相良「何故だ？」

ハクト「どんなものも、変わっていかなくてはならない。進化するもの、退化するもの。二つに一つ。お前はそのどちらも選ばず、ただ朽ち果てる道を選んでいるに過ぎない」

相良「なっ・・・別に、そんなこと・・・」

ハクト「無いとは言えないだろ？」

相良「っ・・・」

悔しいが、ハクトの言つとおりだ。

俺は進化も退化もせず、ただそのまま朽ち果てるのみの道を選んでいる。

ハクト「悪いが俺は進化の道を選ばせてもらっ。白銀の墮天使よ、お前はどつするっ。」

相良「・・・」

ハクト「・・・答えは俺に言わず、想い人に言っんだ。では」

そう言っつてハクトも姿を消した。



相良「・・・」

何となく、分かった気がした。

俺は、好きにすればいいと思う。

好きに生きればいい。

けれど好きに生きるっていうのは、そのままいろいろって意味ではない。

変化しつつも、自分の生きたい様な道に進むこと。

進化するか退化するか。

そんなもん、ひとつしかないだろ。

相良「俺だって、進化したいさ」

そう言っただけ俺は会場を走って出ていこうとした。

湊「翔」

相良「湊……」

出ていく途中、湊が声をかけた。

湊「迷うなよ」

相良「……ああ」

そう言っつて俺は走る。

真道「翔」

相良「創世・・・」

次に創世だった。

真道「急ぎか？」

相良「ああ。ちょっと、大切な事忘れてた」

真道「そうか。なら、行くが良い。頑張れ」

相良「ありがとう」

そう言っつて俺は会場を後にした。

龍牙「やっと行ったか」

真道「彼なりに悩んでいたのだろうか」

ハクト「一夫多妻制というのも、考えようだな」

湊「興味ないな」

龍牙「というかハクトは一夫多妻制なんて単語よく知ってるな？」

ハクト「はやてがそのタイトルの雑誌を読んでいてな」

龍牙・真道・湊「」（それって『同』じ『人』の雑『誌』じゃな  
いか!？）「」

ハクト「？」

相良「……」

俺は走りながら、陸宙管理本部を後にしよつと転送魔法陣の前に来た。

朝我「行くのか？」

相良「……まあな」

そこには朝我が一人、俺を待っていた。

朝我「会場の事は俺たちに任せておけ」

相良「助かるよ」

そう言っつて俺は魔法陣の上に乗る。

朝我「皆、お前の成功だけを祈ってるよ」

相良「・・・そうか。行ってくる」

朝我「ああ」

そうやって俺は転送される。



クリスマス番外編！！（後書き）

IKA「疲れた」

相良「長い」

朝我「俺も参加できたな」

IKA「皆さんのキャラの口調と性格がなんか違うなと思いつつ書いていました（；；）」

相良「ダメじゃん」

IKA「いや、なんかうまくいかない」

朝我「というか白修羅先生と勦つち先生とRewrite先生のキヤラをよく使ったな」

IKA「まあお世話になってる回数が違う」

今回は糖分高めでお送りいたしますのでめっさ苦いコーヒーをご用意してください

クリスマス番外編！！ 2（前書き）

今回は前回の続きです。

クリスマス番外編！！ 2

相良 Side

相良「・・・」

俺は転送魔法陣に乗って、自宅に転送された。

相良「ただいま」

そう言っただけ扉を開ける。

相良「・・・誰もいないのか？」

そう言っただけ真っ暗な家の玄関の明かりを点けて真っ暗な家の中を歩き出す。

相良「おい！誰もいないか？」

そう言っただけリビング格に向かう。

家の中は、ひっそりと静まり返っていた。

誰もいないか・・・寝てるか？

そう思いつつも念の為に居間を覗いてみた。

相良「・・・ルチア・・・」

真つ暗な居間の中で、ルチアは一人、座り込んでいた。

暗闇に一人、ぽつんと座り込むその姿は、とても小さく見えた。

その肩が、微かに震えている。

相良「ルチア・・・待ってたのか？」

ルチア「・・・約束、忘れてたんだね」

俺と目を合わせず、うつむいたまま、感情のこもらない空虚な声で、そうつぶやいた。

コタツの天板の上は、一つのケーキが置かれていた。

俺の好物の・・・苺のショートケーキ。

きっと、ルチアが手作りで作ったのだろう。

少々不恰好だけど……一生懸命に作ったのが伝わってくる。

相良「なにを言っても……言い訳になるだろうけど……約束は、忘れていた。何の約束をしたかを忘れていて……今日は俺の勝手で過ごした。ルチアの事……忘れてたんだと思う」

ルチア「いいよ。分かってたから……」

切りつけるような鋭い言葉が、俺の胸にグサツと刺さる。

俺に何も期待をしていない……そもそも、信じていないとそんな感じ。

ルチア「翔にとって、私との約束なんて……その程度のもものだもんね」

相良「違う！！！！！！俺はルチアの約束を軽んじていた訳じゃない！！！！」

ルチア「でも・・・忘れてたんだよね？」

相良「っ・・・」

確かに俺は・・・忘れていた。

ルチアの約束・・・一体、どんな約束をするか・・・その答えは、天板の上に置かれたケーキを見て分かった。

相良「・・・クリスマス・・・だよな」

これは、クリスマスケーキ。

ルチアはきつと・・・俺とクリスマスを過ごす約束をしていたんだろう。

ルチア「分かってるなら・・・どうして・・・」

・・・

相良「俺は・・・皆との時間を、大切にしたかった」

俺は、自分の正直な理由を話した。

相良「皆って言うのは、仲間達で・・・毎年ルチア達と過ごしてきたから、今年は違う人達と過ごしたかったんだ」

ルチア「・・・」

相良「ルチアの約束を忘れたのは、否定しない。それは事実だから・・・ごめん」

ルチア「・・・」

相良「約束を破って・・・すまなかった」

深々と、俺は頭を下げた。

どんな理由があろうとも、ルチアを悲しませたことには変わらない。



ルチア「また・・・仲間なんだ・・・」

冷たく閉ざされたルチアの口が動き出した。

ルチア「いつも、そうやって仲間ばかり・・・」

ルチアの声は、震えていた。

どこかで、泣いているようにも聞こえる声・・・

ひどく、孤独を感じさせる声・・・

その孤独を感じさせてしまったのは俺で・・・

だから・・・

相良「遅れてごめん。でも・・・今から」

今日と言つ時間は、まだ終わってないのだから。

相良「クリスマス、一緒に過ごそうよ」

残りの時間を、ルチアのために精一杯使おうと思った。

相良「今日はルチアの言うこと、なんでも聞いてやるよ!」

それを罪滅しにしようってのは都合が良すぎる話だけど・・・

相良「だから・・・機嫌、直してくれよ」

そう言って微笑む。

ルチア「もういいよ・・・」



ルチアの悲痛な叫びが響いた。

相良「ルチア……」

ルチア「結局翔は私よりも仲間が大切だったことじゃない」

相良「そ、そんなことはない！」

ルチアだって、大切な存在だ。

相良「仲間といえることが、これからの俺たちに必要なと思ったから  
優先して……仲間の皆……龍牙やハクト……湊や創世達に……  
凄く世話になったから……だから!!」

ルチア「分かってるよ」

相良「ルチア……」

ルチア「そんなの……わたしだって分かってる。翔が間違っていないって、そんなことは分かってるよ」

堪えていた涙が筋となって零れ落ちた。

ルチア「間違ってるのは……私だから……」

相良「え……」

ルチア「ばかみたい……一人ではしゃいで、楽しみにしてて……  
・浮かれてケーキまで作っちゃって……」

相良「ルチア……」

ルチア「分かってたのに……全部、分かってたのに……」

俺は・・・なんて信用の無い人なのだろう・・・

ルチアを・・・不安にさせて、傷つけて・・・

ルチア「なんで・・・こんなに期待しちやっただらろう・・・」

自嘲気味に響いたその言葉は・・・暗闇に吸い込まれていった。

ルチア「おやすみなさい」

そう言つてルチアは逃げ出すように立ち上がると、廊下を駆け出す。

相良「ルチアっ！！！」

びくりと立ち止まる。

顔は向こうを向いたまま。

小さな背中が・・・更に小さく見えた。

このまま消え去ってしまいそうなくらい・・・

ルチア「じゃあね。翔」

ポツリと零れ落ちた言葉は……何を意味するのだろうか……それを理解するよりも早く……ルチアは走り去っていくのだった。

相良「……」

俺は一人、楽しくなったであろうパーティーの舞台に置かれたケーキを、置いてあったフォークで一口分取って……口に含んだ。

相良「……美味しい」

口の中にゆっくりと広がっていくクリームの甘さ。

時折甘酸っぱく、そして食感をだす苺。



相良「……ほんとに……美味しい……」

きっと俺は、ルチアと一緒に食べる事が出来ただろう。

この……記憶が消える……星屑の力さえなければ……

魔導士でなければ……きっと今頃、ルチアと共に、楽しいクリスマス  
マスを過ごせただろう。

相良「これが……俺の現実なんだな」

いつか・・・俺の記憶は全て消え、皆の中からも、俺が消える」

そして今・・・現実に一人の少女が消えた。

じじちって・・・徐々に、全てが消えていく。

それはまるで・・・散りゆく桜の花の様に。

降り積もった雪の様に・・・

ゆっくりと……でも確実に、その姿は無くなっていく。

相良「……………つく……………」

俺は右手で左胸を握りしめる。

なんで……………こんなに苦しいんだ？

なんでこんなに・・・寂しいんだ？

なんでこんなに・・・

相良「・・・これ・・・」

ルチアが座っていた椅子の上には・・・忘れ物だっただろう小さな箱が置いてった。

相良「・・・」

俺は失礼ながら、その箱を開けた。

相良「っ!?!?」

そこには、一つの宝石が入っていた。

相良「スター……サファイア……」

確か……9月の誕生石の筈……

なんで12月に……そんな宝石……

相良「……いや……まさか!？」

確か……スターサファイアの宝石言葉って……



気づいた時には、俺は走り出していた。

ルチア Side

ルチア「・・・」

私は一人、何も考えずに歩いていた。

ワルキューレ「どうして・・・あんな態度をとったの？」

私のデバイスであるワルキューレが声をかけてくる。

ルチア「・・・」

私は答えず、歩き続ける。

ワルキューレ「そもそも・・・あなた、彼と今日の約束なんてしてないでしょ？」

ルチア「っ……」

そう。私は約束なんてしていない。

私が勝手に約束と言っただけ。

ワルキューレ「どうして……あんな態度、とる必要なんて……」

ルチア「……わかんないよ」

ワルキューレ「え……」

ルチア「もう……わかんないよ」

私は足を止め、俯きながら言う。

ルチア「私、翔が仲間の為に頑張ることは、良いことだと思っ」

ワルキューレ「……」

ルチア「ほんとだよ？でもね・・・だからこそ、翔には・・・遠慮してほしくないの」

ワルキューレ「あなた・・・」

ルチア「翔が気をつかってくれることは嬉しいけど、そうじゃなくて・・・わたしだって翔のちからになりたくて・・・翔と一緒に頑張りたい！妻だもん。二人でいたい。それなのに・・・本当の気持ちを誤魔化して、翔を困らせたくないからって、嘘までついて・・・いつだって自分を抑えて、翔の欲しい言葉ばかり探して・・・こんな私じゃない！ほんとの私じゃないよ！」

ワルキューレ「ルチア・・・」

ルチア「翔の真実を知る前は、こんなことなかったのに・・・強くなって、翔の隣に入れるくらい慣れたと思ったのに・・・どうしてこうなるの・・・なんでこんなに苦しいの・・・」

そして私は、本心を言った。

ルチア「翔と一緒にいるの・・・苦しいよ。このままじゃ私・・・自分のことが嫌いになっちゃう」

そして・・・

ルチア「翔の事　　嫌いになっちゃう!!!!」

ワルキューレ「ルチア・・・辛かったのね」

ルチア「私達・・・もう、ダメかもしれない・・・」

ワルキューレ「・・・」

??「だったら、家に来ないか？」

ルチア「え……」

私に声をかけてきたのは、翔の父親の

右蕪「元気そうだな。ルチア」

ルチア「右蕪……さん……」

火澄「話し……聞かせてもらったわよ」

ルチア「……」

私は二人に見つかったことに驚きながらも、表情を変えず、話しを聞く。

右蕪「二人に何かがあったからは聞かない。だが、一人で行く宛も無いのは見過ごせないからな」

火澄「翔には内緒にしてあげるから……家にいらっしやい」

ルチア「……」

私は二人を見て、翔が羨ましく感じた。

家族がいる・・・両親がいる。

作られた私は、両親なんていないから・・・

だから・・・この人達に甘えようと思った。

ルチア「・・・お願いします」

私は・・・感じてみたい。

翔と言う、私の理想が生まれるような家庭は・・・どんなところなのか。

火澄「それじゃおいで」

ルチア「あ・・・」

私は火澄さんの手に引かれて、夜道を歩きだした。

その時、真っ暗だった道に、小さな光が見えたのは・・・なぜだろ

う？

相良 Side

相良「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」



それから俺は2時間程、ルチアの魔力をたどるように走った。

相良「はあ、はあ、はあ・・・あれ・・・」

だが途中でルチアの魔力の反応が無くなった。

真っ暗な夜道の途中で、何故か無くなった反応。

相良「・・・くそっ」

どこにぶつけていいのかわからない怒り。

俺は・・・どうしてこんなに・・・

『分かってたのに・・・全部、分かってたのに・・・』

『なんで……こんなに期待しちゃったんだろう……』

相良「……っ」

俺は再び、胸を押さえる。

苦しい。

また……胸が痛い。

今まで、様々な痛みを感じてきたけど……こんなに痛くて……  
寂しいのは初めてだ。

??「あれ・・・翔？」

??「こんなところで何してるんだ？」

相良「あ・・・桜内・・・黒河・・・」

何故か二人が俺のもとにやってきた。

相良「な、なんで二人が？」

自分の状態を悟られない様に平然と振舞う。

桜内「お前の父がな」

黒河「翔の迎えに行つて来てくれと言つて、俺たち全員でくじ引きで当たつたから来た」

くじ引きつて・・・父さん（・・・）

相良「別に来なくてもよかつたのに・・・」

桜内「そういうわけにもいかなかったんだ」

そうわけにも・・・ね。

まあ父さんが言ったことだしな・・・

相良「・・・ま、ありがとな」

黒河「別に、感謝されることじゃない。行くぞ」

相良「え……でも……」

ルチアを探さないといけないのに……

黒河「あと、お前の母さんが言ってたけど、奥さんは任せとけっさ」

相良「へ!？」

な……ま、まさか父さんと母さん……

・ ……な、なんとなくわかった気がする。ルチアがどこにいるか……

桜内「まあそんなわけで、残り少ないクリスマスだ。クリぼっちは嫌だろ?」

相良「……そうだな」

そう言っつて俺は二人に連れられ、再びパーティー会場に向かった。

残り少ない……クリスマスか。

これが……最期にならなきゃいいけどな。

相良「さて〜飲むぞ〜！」

会場に着いて俺は早速ワインを飲み始めた。

龍牙「おい・・・飲みすぎるなよ？」

心配そうに俺に声をかけてくる龍牙。

相良「まあパーティーなんだから飲み明かそうぜ・・・って、龍牙は子供だからお酒はダメだろ！」

そう言って再び龍牙の手に持たれる酒を取り上げる。

龍牙「おい待ってくれ！！それだけは勘弁してくれ！！！」

相良「あほ！龍牙は子供！俺は大人！！酒は大人が飲むものだ！！」

龍牙「くっ！！こら！渡せ！！！」

そう言ってぴよんぴよん跳ねながら俺が持つ酒を取ろうとする。

だが身長差があり、龍牙は届かずにいた。

龍牙「くっそ……」

相良「分かったらおとなしくオレンジジュースでも飲んでろ」

そう言って超能力で近くのテーブルからオレンジジュースの入ったコップを持ってきて龍牙の手に置いた。

龍牙「くっ……シャマルにでも頼んで年齢を上げる薬を作ってもらうか……」

相良「止めとけ。シャマルの腕は治療以外は信用出来ない」



相良「まあなんだ。そのうち酒も飲める歳になるんだ。短い間だけだよ」

龍牙「むう……」

なんだ……何故そこまで考え込むんだ！？

相良「それにほら、もしお前が酔って帰ったらなのは達がその際に何かする可能性」

龍牙「よし！ジュースにしよ！！！！！！」

相良「……」

ど、どんだけなのは達を恐れてるんだよ……。



なのは・フェイト・はやて・シグナム・ヴィータ・シャマル「  
「  
」<>、∴∴イクシツ∴∴風邪でもひいた  
のかな・のか・かな???」「  
「  
」

相良「んゝ何食べようかな・・・」

若干酔ってきたなと思いつつも俺は食事を摂ろうと考える。

とはいえ作ったのは自分で、何があるか分かるわけで・・・

相良「・・・つまらん」

分かりやすく言うなら、攻略の仕方が分かるゲームの10周目を初めからでやるくらいつまらない。

相良「・・・シヤマルでもここに呼ばっかな・・・」

全員「「「「「「「「「「

え「「「「「「「「「「

今、この会場の空気が固まった。

グラスを持つ何名かは俺の発言に驚き、手からグラスを落としてしまっ。

そして皆、驚いた表情で俺をガン見する。

相良「……あ……えと……」

全員「……………お前は俺たちを殺す気か!!!!!!!!!!!!!!」

「シャマル」( ) ; ; (ウツ)な、なんか心に刺さる事を言われ  
たよつな気が . . . づ . . . 「

相良「あ、あの、ほんの冗談だから」

焦りながら俺は弁解する。

全員「ooooooooooooそりやそつだ。クリスマスに死人が出るのは嫌だな」「」「」「」「」「」

相良「そうだな。すまんなかった」

皆・・・シャルルの恐ろしさをどこまでも体験してるんだな・・・

・・・ん？待てよ・・・

それってつまり・・・どの世界に行ってもシャルルは料理が・・・

相良「・・・あ、あはは・・・」

・・・乙。

相良「・・・うう」

やべ・・・少し飲みすぎたかも・・・

衛宮「大丈夫か？」

そう言つて恭二が水の入ったコップを渡す。

相良「ああ、サンキユ」

そう言って俺は水を一気に飲む。

衛宮「……どうかしたのか？」

相良「っ……いや、何にも」

何もないと装う。

銀「何も無かった……って事は無いだろ？」

相良「うを……」

再び背後から人が……って銀か。

創神「最初の時と比べて、かなり元気がなくなってるように見える」

相良「……」

気づくと3人の気にされてる。

……いや、ほんとは……皆が気にしてるのか。

まったく俺は、何でこんな人に心配ばかりかけるかな……

相良「……ありがとな、みんな。でも、大丈夫。俺がちやんと解決させるから」

銀「……」

創神「・・・そうか」

衛宮「何かあったら協力する」

相良「ありがとう」

なんか、恵まれてるな・・・俺。

相良「よし……！今日は最後まで飲むぞ……！」



そう言って朝まで飲み続けるのであった。

・・・翌日。

相良「・・・うわぁ（――；）」

朝になり、酔った連中の何人かはその場で眠っている。

酔っていない人は壁に背中をあずけて寝てたりしていた。

あれ・・・結局龍牙は酒飲んだのか!?

相良「・・・もういいや」

そう言いながら俺はモップを持って掃除を開始した。

結城「手伝うよ」

ゼロ「俺も手伝うぜ」

リュウト「多いほうがさっさと終わるからな」

相良「3人とも・・・」

3人もモップを持って掃除を始めた。

相良「・・・あれ？リュウト。ライガ達はどうした？」

リュウト「ああ、カエデとレグルスがダウンしたから先に帰らせた」

相良「まああれだけはしゃいだりすれば疲れるよな」

何だかんだで盛り上がりまくったパーティー。

たまには、こういうのもありだと感じる。

ゼロ「今日は楽しかったぜ」

ノエル「ああ。たまにはいいものだな」

相良「ノエルと同じこと、俺も考えてた」

結城「事件ばかりだし、こうやってはしゃげる日があるのはラッキ―だと思う。ありがとう」

相良「な、なんだよ・・・」

なんか照れくさいな。

リュウト「翔がパーティーをやらなかったら、俺達はいつもと変わらない日常っぽい日常を過ごしたと思う」

相良「嘘付け。非日常だろ?」

リュウト「まあな。けれど、こんな色んな世界の人が集まる機会なんて滅多にない」

相良「・・・そうだな」

ゼロ「感謝してるぜ」

ノエル「俺もだ」

相良「ああ。また・・・いつかやりたいな」

こうして俺たちのクリスマスは幕を閉じた。

相良「……来年も……できると良いな……」

な。 叶うかどうかは不明だけど、  
まあ年明けパーティーとかもやりたい

クリスマス番外編！！ 2（後書き）

IKA「はい！これでクリパ番外編お終いです！！！」

相良「ありがとうございました！」

朝我「また今度は年明け番外編があります。お楽しみに！！！」

十三日目 シュテル・アーチエ編（前書き）

今回の物語りはクリスマス番外編の翌日のお話です。



### 十三日目 シュテル・アーチエ編

相良 Side

相良「はあ、はあ、はあ・・・重っ」

現在、俺は両手いっぱい買い物袋を手に、シュテルと横にならんで歩いている。

前にはアーチエが楽しそうに歩く。

そう、今日の俺は二人でショッピングモールを歩き回って買い物をしていた。

シュテルはそれなりに考えてくれるのだが、アーチエは容赦ない。

買いたいだけ買いまくる。

まあ総裁なんで金はかなりあるのだが、買ったら買ったで荷物が重いこと・・・

シュテル「少し、お持ちいたしましょうか？」

相良「いや、女の子に持たせるくらいだったら、我慢するよ」

荷物持ちは男の仕事だから・・・まあ女は手加減して欲しいくらいだが（・・・）

アーチエ「ふん。我の下僕なら、このくらい問題なかるっ?」

相良「このくらいってお前なあゝゝ少しは自重しろって」

アーチエ「ほう、我に命令するか。下僕の間際で」

シュテル「そのくらいにして下さい。この方は下僕ではありません。私達の婿です」

相良「婿ってゝゝ既に結婚してるんだから夫で良いだろゝゝ」

アーチエ「どちらでもよい。とにかく、我の下僕ならばもっと働け  
」!

相良「いや、ちゃんと働いてるから」

アーチエ「では何故今宵は我らと共にいる?総裁であるっ」

相良「そりゃアーチエとシュテルと一緒にいたかったからに決まっ  
てるじゃないか?」

アーチエ「っ／／／／／」

シュテル「あう／／／／／」

相良「え?どうかしたか?」

何故かいきなり二人が顔を真っ赤にしていた。



それからしばらくし、俺は頬が少し赤くなる程度まで回復したシュテルを連れて次の店に入る。

・・・また荷物が増えそうだ。

相良「ま、また増えたあ……」

もはや両手では収まりきれず、両腕・両肩にぶら下げて歩いていった。

うん。服だけで良かったと心の底から思う。

シュテル「あの、ほんとに少しお持ちしましょうか？」

相良「いいって。その気持ちだけで荷物が軽く感じるからさ」

ほんと、こつやって声をかけてくれることの嬉しさと言ったらもう・  
・

アーチエ「……」

するとアーチエは俺の右に寄り添い、右にある荷物の半分を持った。

相良「お、おい……」

アーチエ「つ、辛いのであろう?」

相良「だからってアーチエに頼るつもりは……」

アーチエ「ふん。持とつが持つまいが我の自由であるつ？」

相良「……」

そつぽを向きながら、照れくさそうにそう言ったアーチエ。

相良「……全く」

俺はアーチエの頭を右手で撫でた。

アーチエ「っ／／／／な、何をするっ／／／／」

相良「……ありがとう。でも、大丈夫。アーチエ達に苦勞を与えるつもりはないからさ」

アーチエ「……」

アーチエはゆっくりと俺の顔を見て見つめてきた。

相良「ん？」

俺は笑顔で返した。

アーチエ「っ／／／／し、知らん！！／／／／」

そう言つて結局アーチエは荷物の半分を強引に取つて先を歩いた。

相良「……はあ」

勝手なんだから……って、俺はあいつの母かよ（……）

シュテル「……あなたは、卑怯ですね」

相良「え？」

一体何がだ!？

シュテル「そんな風に接しられては、いくら統べる王と言えど、一人の乙女になつてしまつ」

相良「……」

俺は軽くなった右手に左にある荷物の半分を持ち、左手でシュテルの頭を撫でる。

シュテル「あう／＼／＼／＼／＼／」

相良「アーチエは、もう王じゃない。一人の女の子だ。それはシュテルも同じ……皆、マテリアルじゃなくて、一人の女の子だ」

そう。もう、マテリアルとしての呪いは解いた。

だから……殲滅者、襲撃者、統べる王なんて名は無い。

相良「それともシュテルは、マテリアルでいたほうが良かったのか？」

シュテル「いや……その様な言い方は、ほんとに卑怯です／＼／＼／」

そう言つてシュテルは俺の左腕に抱きつくように腕を絡め、手を握つて言つ。

シュテル「ずっと……この幸せを……マテリアルとしては手にできなかつた、闇の欠片よりも大切な幸せを……大切にしていきたい」

相良「……そうか」

確かに、さっきの言い方は卑怯だつたかもしれない。

けれど、やっぱり本音は聞きたかつた。

夫として、一人の魔導士として。

大切な人の本音を聞きたかつたんだ。

相良「だったら、これからもっと大切だと思える幸せな時間を増やしていこうか？」

シュテル「……はい」





アーチエ「う、五月蠅い！！げ、下僕を盗られぬ様に我が捕縛しておるのだ！！」

相良「捕縛つてお前・・・」

アーチエ「五月蠅い！！我に文句を言うな下僕！！！」

シュテル「と言いつつ内心では嬉しいアーチエでした」

アーチエ「う、五月蠅い五月蠅い五月蠅くくくくい！！！！！！」

そう言いながら賑やかに街中を二人と手を繋いで歩き続けるのだった。

これはこれで二人の胸が当たって辛かったがな。

相良「はあゝ歩いたゝ」

シュテル「心踊る、良き時間でした」

相良「戦った訳でもないのにそんな事を言つとは……」

アーチエ「だが、何故ファミリーストランに来たのだ？」

そう。今俺達はファミレスに来ている。

普通にお腹が空いたからである。

相良「まあいつか子供が生まれたときの為にファミレスというのを  
経験しておこうかと」

シュテル「こ、子供ノノノノノノ」

アーチエ「げ、下僕との子かノノノノノノ」

な、何故に二人は顔を真っ赤に悶々としてるんですか!?

相良「と、取り敢えずなんか食べよう。アーチエには悪いが、高い物はないからな」

アーチエ「言われんでも分かる。我はドリアが食べたい」

相良・シュテル「よく分かってますね」

アーチエも意外に常識人だった。

その後、俺はカルボナーラ。シュテルはハンバーグを注文し、テーブルに並んだ。

相良「頂きます」

そう言っただけで食べ始める。

相良「ん・・・美味しい」

シュテル「たまには外食も良いものですね」

基本的には家族一緒に家で食べているので、外食は滅多にしない。

アーチエ「ふむ。中々良いものだ」

相良「そうだな。って、アーチエの口に付いてるぞ」

そう言つて俺はアーチエの口に付いた米粒を取つて口に含んだ。

アーチエ「~~~~~つ//////////」

相良「ど、どうした!?!」

アーチエの顔がポフツと爆発して煙を出した。

現在、顔が真っ赤で両手を押さえていた。

シュテル「羨ましい……」

相良「え?」

な、何が何が!?!

アーチエ「むうう//////////」

それからしばらく、アーチエは真っ赤なまま食事続ける。

シュテル「翔さん」

相良「ん？」

シュテル「あ〜ん」

相良「あ〜ん」

そう言うとシュテルは俺の口に一口に切ったハンバーグを入れた。

相良「（…）モグモグ・・・美味しい」

シュテル「私の食べた痕なので更に美味しいですよ」

どういふことだ？

相良「まあ、うん。美味しいな」

シュテル「少々恥ずかしいですが、これはこれで楽しいですね」

相良「はは・・・そうだな」

そんなこんなで楽しい食事は終わった。

相良「ふいゝ。今日は重い一日だったあゝ」

シュテル「お疲れ様です」

相良「ああ。そんじゃ俺はアーチエの部屋に荷物置きに行くよ」

シュテル「ええ。私は先に湯に行きます」

相良「ああ」

そう言っただけ俺はシュテルに口づけをして、アーチエの部屋に向かった。

相良「アーチエ。荷物を持ってきたぞ」

そう言つてアーチエの部屋に入ると、アーチエは茶色の半袖に下着だけの姿になっていた。

アーチエ「じ、ジロジロ見るでない!」

相良「あ、悪い。可愛かつたからさ」

アーチエ「うっ／＼／＼／＼／＼／」

アーチエは再び顔を赤くし、俺に抱きつく。

相良「・・・どうした?」

アーチエ「黙れ。少し・・・このままでいる」

相良「・・・うん」

俺は静かに、アーチエを抱きしめ返して・・・体温を確かめあつた。

アーチエ「何故・・・我を・・・嫁に選んだ?」



相良「・・・好きだからに決まってる」

アーチエ「そうではなく、その『好き』の全てを聞きたい」

相良「・・・」

俺は、正直にアーチエを好きになった理由を話した。

相良「不器用なのにさ、俺を頼ってくれる。生意気言いつつも、命令口調しつつも、ほんとに甘えん坊で寂しがりな所、俺は知ってるからさ。だから、いつも威張ってるアーチエが好きで、今みたいに甘えてるアーチエが好きなんだ」

アーチエ「あ、甘えてなど／＼／＼／＼」

そう言いつつも、抱きしめる力が強くなっていた。

俺の胸に顔を埋め、体温を感じている姿はまるで子供のようだった。

相良「俺といる時くらいは、嘘で染めなくていい。俺と一緒にいるときくらいは、正直でいて欲しい」

アーチエ「我に、命令してるのか／＼／＼」



今まで以上に顔が真っ赤で言う。

耳まで真っ赤つかだ。

相良「……ああ。それじゃ……」

アーチエ「……んむ／＼／＼／＼／」

そして俺とアーチエは朝になるまで夜の営みをするのであった。

## 十三日目 シュテル・アーチエ編（後書き）

今回はなのは編と言うわけで休日編Lastです。

それが終わりましたら、残りのキャラと様々な話をし、とつとつ最終決戦に入ります。

## 十四日目　なのは編（前書き）

いよいよ最後の一人となりました。

・・・え？ルチアを忘れてる？

番外編に登場してますよね。

その後に関係するので忘れずに。

## 十四日目　なのは編

相良 Side

相良「ん……」

朝、目を覚ました時に感じるのは、眠気と怠け。

後なぜか寒い……って、

相良「俺裸じゃんか……」

冬でこれは流石に寒い……

アーチエ「すう……すう……」

相良「アーチエ……あ」

そうか、俺はアーチエと……だからか。

相良「……楽しかったよ」

そう言っつてアーチエの頬にkissをして、俺は服を着て部屋を出ていくのだった。

なのは「あ、翔くん。おはよう」

相良「おはよう、なのは」

居間に来ると、なのはとアリサとすずかが3人でコタツに入ってミカンを食べてた。

アリサ「しっかり眠れた？」

相良「まあまあかな」

すずか「昨日は激しかったみたいけど？」

うっ・・・聞こえてたか・・・

相良「悪いがアーチエには見なかった事にしておいて欲しいんだ。あいつ困るはずだからさ」

なのは「・・・優しいね」

相良「別に」

そう言っただけ俺もコタツに入る。

相良「（ ー、 ）フー・・・冬はコタツに限るな」

なのは「にやはは・・・なんか翔くん、おじさんみたい」

相良「ほっほっほ。年寄りにこの冬はちと厳しいのお」

なのはの要望に答えるかのようにおじさんのマネをする。

アリサ「あんたうまいわね」

すずか「うん！おじさんみたい！」

相良「なんか傷つくな・・・」

まだ20代だぞ。全然若いって。

なのは「それで翔くん。今日はどうするの？」



相良「あ、そうそう。なのはは今日空いてる？」

なのは「うん。空いてるけど？」

相良「そんじゃこれからデートでも行かない？」

なのは「ふえ！？良いの！？？」

勢い良くコタツからでたなのは。

相良「ああ。今日はそうしようと思ってたしな」

なのは「うん！！！！行く行く！！！」

そう言っつて俺もコタツからでた。

相良「そんじゃアリサ。すずか。留守をよろしくな」

アリサ「任せなさい！」

すずか「二人とも、楽しんできてね」

なのは「うん！」

そう言っつて俺となのはは冬の外に出た。



相良「おっと・・・行くか」

なのは「うん！」

俺となのはは恋人繋ぎをして再び歩き出す。

向かうのは、真冬の公園。

ヴァン達が何度も来ていた・・・あの公園へ。

なのは「なんで公園に行くの？」

相良「ちょっと見せたいものがあったな」

そう言って公園の奥にある湖に向かう。

相良「よし。到着」

なのは「うわぁ・・・」

そこに広がるのは冬の冷たさに凍りついた湖。

そこでスケートの様に遊んでいる人達。

相良「行くぞ！」

なのは「ええ！？」

俺はなのはの手を引いて氷の湖に足を運んだ。

なのは「ひゃうっ！！！！」

相良「おっと！」

だが、早速なのは氷の地面に豪快に滑った。

俺はなのはを抱きとめ、なんとか大きな事故にならずに済んだ。

相良「だ、大丈夫か？」

なのは「にゃはは・・・ごめ〜ん」

舌をぺろっと出して謝るなのは。

相良「俺が手をもってやるから、行くぞ」

なのは「うん！」

そうやって俺はなのはの手を引いてスケートの様に遊び始める。

なのは「……………」

なのは Side

なのは「……………」

懐かしいな……………翔くんに近づいて、手を引っ張ってもらっの……………

幼い頃・・・

『ほら“なのちゃん”!!行くよ!!』

幼い頃は、私の事をなのちゃんって呼んで、手を引っ張ってくれた  
な・・・

『見つけた、なのちゃん。行こ!家族が待ってるよ!!』

私が迷子で泣いてたとき、一番最初に見つけてくれて、泣いてる私の手を引いてくれたなあ・・・

『ほら、そんな所でぼつんとしてないで、俺たちと遊ぼうぜ!!』

そう言って独りぼつちで公園のブランコで遊んでいた私の手を引いて、いっぱい遊んでくれたなあ・・・

そして現在。

なのは「……」

相良「ん？どうかした？」

なのは「……懐かしいなって思って」

相良「何が？」

なのは「……ううん。なんでもない！！ほら、もっと引っ張ってよ！！」

相良「……OK。行くぞ！！！！」

そう言って翔くんは私を更に勢いを上げて引っ張ってくれた。



あの時・・・私は翔くんの事・・・なんて呼んでたっけ・・・

キヤー！！！！！！！！！！

相良・なのは「「!?!?」

突然、女の人の叫び声が・・・

なのは「あ・・・！！！！！！！！！！」

声の方を向くと、小さな男の子が氷の間に出来た穴に落ちて、凍った湖に溺れていた。

なのは「っ！！！！！！」

私は湖に沈んでいった男の子がいる湖に飛び込んだ。

なのは「くっ……うっ……」

全身の体温が一瞬でなくなっていった。

でも……せめてこの子だけは……

……

……

お兄  
・  
・  
・  
・  
ちゃん  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

相良 Side

相良「なのは・・・なのは！！！！！！！！」

なのはは一人、沈みかけていた男の子を助け、力なく湖に沈んでいく。

相良「っ！！！！！！」

俺はそのままなのはを追う様に湖にダイブする。

運が悪いことに、俺となのははデバイスを持ち合わせていない。

だが・・・絶対に助ける。

〈回想〉

『うう……うええええええん!!!!!!』

草むらで、泣いている女の子がいる……

栗色の髪の毛、幼稚園児。

確かこの子は……

『見つけた、

ちゃん。行こ！家族が待ってるよ!!!!!!』

彼女の兄らしき男の子が、彼女を見つけて声をかけた。

『うう・・・お兄ちゃん!!!』

そう言って女の子は大泣きしながら彼に抱きついた。

『よしよし。もう大丈夫だよ。ほら、帰ろ？家族が待ってるよ』

『・・・うん！お兄ちゃん!!!』

気づけば女の子は泣き止み、笑顔で手を繋いで帰っていった。

～回想終了～

相良「・・・」

水中は極寒だった。

視界は霞み、見える距離は大体3m程か・・・

ここは念話を使うのが一番か・・・

相良《なのは……！返事しろ……！なのは……！……！》

だが、なのはの返事はない。

相良「（まさか……意識を失ってるのか！？）」

俺は焦る。

視界が狭い状態で、なのは一人を探すのは至難の技だ……！！

相良「……！」

待てよ……一つだけ方法がある……！！

『反響定位』これを応用すれば……



『はんきやうてい反響定位』とは、音の反響を受け止め、それによって周囲の状況を知らることだ。

鯨なんか水中の獲物などを探す時に用いる方法だ。

これを使えば、例え視界がゼロの状況になっても、物体を探り当てられる。

これを音ではなく、魔力を使えたらどうだ!?

念話は、魔力を使う事でその届く範囲の人間、または届きたい相手に声を届けることができる。

これを応用して、魔力を音の様に飛ばし、その反響でなのは位置を特定出来れば……

相良「……」

俺は神経を集中させ、右手と左手に、ベルカとミッドの魔法陣をだす。

相良「・・・っ！！！！！！！」

そして両手を重ね、発動する。

相良「

オバー・スター・ロード  
新たな星の誕生

!!!」

周囲の人間が俺と言う存在を忘れていく代償を支払い、俺は一人の大切な人を助ける!!

相良

スターダスト・エコーケーション  
星屑の反響探査

☐

そう言うと、白銀の粒子が俺を中心に円を作る様に広がっていき、  
物体の位置情報を俺の脳内に伝達していく。

相良「（距離5m圏内・・・10m圏内・・・ヒット！！！！）」

見つけた・・・そこだ！！

俺は見つけた位置に向かって全速力で泳ぎ出した。

もう・・・あまり体力が残っていない・・・もってあと10分か・・・

俺は必死にその場所に向かう。

絶対に見つけてやる・・・絶対に!!!

〜回想〜

『どっこだー!!』

ちゃん!!!!!!!!!!どこだ!!!!!!!!!!』

さっきの、女の子の兄が走って必死に人を探していた。

ああ・・・これはさっきの兄が、妹を探す光景か・・・

『絶対に・・・絶対に見つけてあげるから・・・待っててよ!!』

そうって彼は一心不乱に探していた。

街中。

住宅街。

学校。

保育園。

幼稚園。

様々な場所を探し、彼は公園の原っぱにたどり着いた。

あれ・・・ここ、海鳴市か！？

公園を見ると、そこは海鳴市の海鳴公園だった。



『あ…… ちゃんの泣き声……そこか!』

そう言っって彼はようやく、妹を見つけたのだった。

〜回想終了〜

あれ・・・あの男の子・・・それに、あの女の子・・・

どこかで見ることがある・・・

いや、それは後でいい。

今は、なのはを・・・

なのは「・・・うう・・・」

相良「なのは・・・なのは!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

湖の中で、必死になのはに声をかけ、手を伸ばす。

なのは「・・・」

なのははゆっくりと、目を開ける。

相良「なのは・・・」

俺は念話でなのはに声をかけた。

そう・・・あの、夢に出てきた男の子の様に・・・

相良「

なのちゃん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

なのは「・・・お兄・・・ちゃん」

そして、俺と彼女の手は

繋がった。

なのは  
Side

私は・・・夢を見ていました。

翔くんと一緒にいた頃の夢。

私が迷子になったとき・・・必死に探してくれて、必ず見つけてくれた。

相良「なのちゃん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

え・・・

今・・・なのちゃんって・・・

なんで・・・忘れてる善なのに・・・

なのは「……お兄……ちゃん……」

私は必死に手を伸ばした。



昔から、私を引っ張ってくれた・・・最愛の

義兄おにいちゃんに

相良 Side

なのは「・・・ん」

相良「あ、目を覚ました？」

なのは「……」

俺はずぶ濡れのなのはを姫様抱っこして歩いていた。

なのは「ひゃ／＼／＼／＼」

相良「暴れるな。落ちるぞ?」

なのは「い、ごめんなさい／＼／＼」

そうやってなのはは頬を紅くしながらも、暴れるのは止め、上目遣いで俺を見つめていた。

2417

なのは「あの……あの……その……」

相良「言いたいことがあるなら言えば?」

なのは「あ……うん」

なのはは人差し指と人差し指でモジモジとしていた。

何かを言おうとすると再び口が塞ぎ、また言おうとするとまた塞ぐ

の連続。

相良「……早く言えよ。」

なのちゃん「」

なの「う、うん………って……え？」

ん？どうかしたのか？

相良「どうかしたか？」

なの「え……あ……いや……その……」

再びモジモジしだすなの。

珍しいな……なのはらしくない。

相良「……まあいいや。帰ってさっさと風呂入る  
やん」

なのち

なの「……うん！」

お兄ちゃん！

そうやって俺となのはお姫様抱っこのまま、家に帰っていくのだ  
った。

その夜

「全員」「」「」「」「」「」「」「」  
「なんでなのはと翔の呼び名が変わってるの!?!?」  
「」

皆がそう言って追求してくる。

相良・なのは「」「昔から”ずっと”って呼んでるん？」

## 十四日目　なのは編（後書き）

### 追加情報

『スターダスト・エコーレーション  
星屑の反響探査』

反響定位を応用した独自の探索魔法。

使用者を中心に半径10万キロ以上の距離の存在を捜査する。

魔力量によって、距離が変化する。

視力・聴力などが不自由になっても、代わりに使う事ができる。

## 兄妹の約束（前書き）

今回から決戦準備の日常編から陸宙管理本部の方に向かい、話しを進めます。

アインハルトやヴィヴィオなど。

更にはヴァンの妹の彼女も・・・

## 兄妹の約束

相良 Side

陸軍管理本部に着いた俺は、いつも通り訓練しているアイハとヴィ  
ヴィオを見つける。

相良「お〜い！二人とも！」

ヴィヴィオ「あ、お兄ちゃん!!！」

アインハルト「翔さん・・・」

二人は体操着フルマありで俺のもとに来る。

相良「二人とも、お疲れ。リオナってどこにいるか分かるか？」

ヴィヴィオ「リオナなら・・・」

アインハルト「リオナさんならスイエルさんの病室に向かいました」

相良「そうか・・・ありがとう」

そうやって俺は訓練室を後にした。



相良「そう言えばスイエルは……目を覚ましたのか……」

ヴァンの死後、オーディンによって生死をさ迷っているスイエルはスカイ。

あの子には……ほんとかわいそうな人生を送らせてしまった。

両親は失い、最愛の兄までも……目の前で失ってしまう。

折角再会出来たのに、失ってしまった。

相良「土下座だけじゃ・・・すまないことなのはわかってるけど・・・」

それでも、何もせずにはいられない・・・

そう言っつて俺はスイエルの病室に辿り着き、中に入った。

相良「失礼します」

リオナ「あ・・・翔さん」

相良「リオナ。怪我・・・治ったか？」

リオナも、あの時の戦闘で負傷していた。

リオナ「はい。シャマル先生の治療がよかったですから」

相良「そうか・・・」

俺はベットを見る。

スイエル「・・・」

スイエルは無表情で、俺を見つめていた。

相良「安心しろ。相良翔だ。本物のほうのな」

スイエル「・・・そう」

そう言う表情を変え、俺を優しい表情で見つめる。

スイエル「あなたが・・・お兄ちゃんが尊敬していた・・・師匠さん」

相良「尊敬かどうかは分からないけど、まああいつの師匠をしてたよ」

スイエル「・・・あの時は、申し訳ございませんでした」

予想外にも、彼女は俺を許している様だ。

優しい表情で俺と接してくる。

俺は・・・彼女はきつと怒っているのではないかと思った。

相良「・・・いや、謝るのは俺の方だ」

そう言う俺はスイエルに向かって頭を下げた。

相良「すまなかった。ヴァンを、すぐに君のもとに還さなくて・・・もし還していたら・・・こんなことには・・・」

スイエル「……いいえ。良いんです」

彼女は優しい笑で、俺にそう言った。

スイエル「……お兄ちゃんが死んだのは、やっぱり許せない。けれど……お兄ちゃんだって分かってたんですよ。死闘だったんですから、死んでも仕方ないです。だから、頭を上げてください」

俺は言われた通り、頭をあげた。

相良「……君は、俺を許すのか？」

スイエル「……分かりません」

彼女はそう答えた。

そして右手に緑色の光を集めて、それを見つめた。

スイエル「私は、お兄ちゃんを育ててくれた貴方を尊敬しています。そして、お兄ちゃんを頼もしい人に成長させてくれました。還してくれなかったのは許せないけど……それでも、それでよかったんだと思います」

相良「……」

それで良かった……か。

別れの挨拶も出来なくて、良かったなんて……そんなの……  
そんなの、理不尽過ぎるだろ……

だけど、その理不尽を生んだのは俺で……スイエルを悲しませる  
原因となったのが、俺だったんだ。

2428

相良「スイエル。ヴァンに……少しだけ会わせてやる」

リオナ・スイエル「っ!?!?」

二人は目を見開いて俺を見る。

相良「ちょっとだけなら、会わせられる」

スイエル「ほんとですか!?!?」

相良「ああ」

リオナ「でも……そんなこと……」

相良「できるんだよ。俺には、それが出来る」

リオナ「……それって、あなたが神にでもならないと出来ない筈・  
」

相良「確かに、死者に干渉出来るのは神くらいだな。だけど、存在しないなら、創ればいい。俺は作ったんだよ。悲しみを……理不尽を否定する魔法を」

そう言っつて俺は右手に正方形の魔法陣を展開し、天に掲げた後、前  
に向ける。

相良  
☐

復元する星  
スターダスト

蘇りし記憶  
カーテンコール

☐

そう言うと、皆の目の前に死者であるヴァン＝スカイが具現化して現れた。

リオナ「ヴァン!?!」

スイエル「お兄ちゃん!?!」

ヴァン「し、師匠。呼ぶときはちゃんと合図下さいよ」……「……」

相良「いや、合図とか知らないし。あの世からお前を呼ぶだけだったし」

ヴァン「むう……まあいいです。それよりも……」

ヴァンはスイエルの方を向くと、スイエルはビクツと反応し、少し恥ずかしそうにヴァンを見つめる。

ヴァン「えっと……久しぶり。スイエル」

スイエル「うん。お兄ちゃん」

相良「リオナ。俺達は退席しよう。ここは兄妹水入らずでさ」



リオナ「・・・はい」

そう言って俺とリオナは退室する。

No Side

病室に残された兄と妹は話し始める。  
ヴァン スイエル

ヴァン「・・・傷、大丈夫か？」

スイエル「うん。体が丈夫に出来てるから」

そう言っただけで彼女は両腕をみせる。

ヴァン「・・・ん。良かった」

安堵の溜息をつくヴァン。

それは、兄として妹が心配だったから。

過保護な兄、ブラコンな兄。

そんな兄だからこそ、妹の状態には心配になってしまつのだ。

スイエル「それよりお兄ちゃん。お兄ちゃんに聞きたいことがあるの」

ヴァン「ん？」

それは、スイエルと言う一人の少女のこの先に大きく影響する質問。

スイエル「私はこの先の戦いで、相良翔に協力してもいいよ。だけど、真に信用に足る存在なのか・・・私はそれを知りたいの」

ヴァン「それは・・・つまり・・・」

スイエル「うん。相良翔は、お兄ちゃんから見て  
信用出来る？」

その質問に、ヴァンは全く揺るぎない瞳で、そして即答する。

ヴァン「もちろんだ」

スイエル「っ・・・お、お兄ちゃん・・・」

その時、ヴァンの纏う空気が変わり、それを見たスイエルはキュンと乙女の様なりアクションをとってしまふ。

だがそんなことはお構いなしにヴァンは話しを続ける。

ヴァン「僕は師匠と長年武術を磨いてきた。何度も拳をぶつけ合ってきたから分かる」

ヴァンは最高の笑で、正直な想いを伝えた。

ヴァン「師匠は 僕の出会って来た全ての人の中で、最高の人だ！あの人以上に良い人なんていやしないと、胸を張って言えるような・・・そんな人なんだ」

スイエル「・・・そうなんだ」

ヴァンのその満足そうな笑に、スイエルの頬も緩む。

スイエル「・・・うん。分かった。良い人・・・なんだね」

ヴァン「うん。スイエルも、あの子の傍にいれば分かるよ」

スイエル「そうしてみる。私の目でも見定めたいから・・・」

ヴァン「・・・そうか。なら、僕はもう用が無くなったかな」

スイエル「逝っちゃうの？」

ヴァン「うん。あつちでコロナが待ち焦がれてるだろうからね」

と、いきなり惚気に入るヴァン。

ヴァン「いや、毎日毎日膝枕してくれたりご飯食べたりあ〜んしたらお風呂一緒に入ったり・・・」

スイエル「ちよつと待って!!!お風呂一緒ってどういうこと!?!私だってお兄ちゃんと一緒に入ったことないのに〜!!!」

ヴァン「それはまあ、ドン)。。(マイ」

「スイエル「・・・許さない・・・あの女だけはあ・・・」

と、ヴァンのせいであの世にいるコロナが呪われてしまつたという事態に陥るのだった。

ヴァン「あつはは・・・そ、それはいいや。最期に一つ」

スイエル「ん？」

ヴァン「師匠の事　　頼む。あの人は、人の全てを受け止めてくれるけど、自分の全てには弱すぎるから・・・だから、沢山の人  
が支えにならないと、師匠の背負う者は軽くないんだ」

スイエル「……うん。分かった。お兄ちゃんの最後の約束、だも  
んね」

ヴァン「ありがとう、最愛の妹<sup>スイエル</sup>」

そう言つて、ヴァンは魔力の粒子となつて消えていった。

相良「失礼する。ヴァンは逝つたみたいだな」

スイエル「はい」

リオナ「良いなあ〜私も話したかつたな〜」

相良「とか言つて、毎回毎回二人きりになるとオドオドしてるじゃないか？」

リオナ「うっ／／／／／／／／／／」

スイエル「翔さん」



相良「なんだ？」

スイエル「お兄ちゃんから、あなたの事は聞きました。だから私は、決断します」

相良「・・・」

スイエル「私、スイエル、スカイは、あなたの味方に・・・陸宙管

理本部に入隊します」

これで、相良翔に、また一つの“絆”が生まれるのだった。

## 兄妹の約束（後書き）

久しぶりにスカイ兄妹の登場ですね。

スイエルはまあブラコンでお兄ちゃん大好きっ娘と言っ子である。

そう考えると流石相良翔の弟子。

見事にハーレム小規模で制作中である（死んでるにも関わらず）。

ちなみにヴァンはヴィヴィオのいる学院で一番有名で一番モテる人だったのだが、これはいずれ番外編でお話しようと思う。

旋律・戦慄と白銀の星屑 決戦に向けて（前書き）

今回はチートVSチートです。

相良翔は2週間程戦っていなかったため、動きのキレなどを取り戻すために戦います。

まあ練習やりハビリであっても、彼は手を抜きませんがね（＃＾  
＾＃）

旋律・戦慄と白銀の星屑 決戦に向けて

相良 Side

相良「マルス・メルキュール。起動」

そう言うと俺の両手に持たれる紅と蒼の勾玉は小さく光る。

マルス「準備は整いましたか？」

相良「ああ。十分だ」

メルキュール「では・・・」

相良「・・・明日、決戦だ」

マルス・メルキュール「・・・はい！」

そう心に決め、俺は総裁室に向かう。

相良「……ルチアは、来てないか」

ギンガ「はい。ここ数日は無断欠勤です」

相良「……そうか」

ギンガも心配そうな表情でルチアのデスクを見つめる。

相良「……ま、俺たちは俺たちの仕事をするだけだ。あいつだつてそのうち来るさ」

ギンガ「……はい」

そう言ってギンガを励まし、俺は書類に目を向けた。

相良「……」

それでもやっぱり、ルチアの事は気になってしまっわけ・・・  
でも、父さんと母さんが知っているようだから、心配はいらないだ  
ろっと思っ。

・・・さっさと書類を終えて、訓練室にでもいくか・・・

音使 Side

音使「よし・・・こい!!」

アインハルト「行きます!」

訓練室にて、俺とアインハルトは戦っていた。

アインハルトにいきなり戦いを申し込まれ、断る理由もなかったの  
で、受け入れた。

俺は久しぶりに“ある武器”を使ってみた。

音使「奏龍刀・曲」  
そうりゅうとうまきよく

アインハルト「!?!」

俺の右手には、雪の様に真っ白な指揮棒が持たれる。

棒の先はナイフの様に刃になっていた。

アインハルト「それは?」

音使「俺の持つ武器で一番お気に入りだよ」

そう言っただけ俺は棒を振る。



音使  
『

『  
無フリーメンガメンに還った少女  
』

』

アインハルト「っ!？」

その瞬間、アインハルトは身動きが取れなくなった。

アインハルト「な……にが……?」

音使「あ、ごめん。“縛り過ぎた”」

そう言っつて俺は技を解除する。

アインハルト「っつ……はあ、はあ……」

アインハルトは何が起こったか分からないようで、両腕を触っていた。

アインハルト「・・・何をしたんですか？」

音使「それは  
」

??「目に見えない極細のピアノ線がその棒の先から何本も出てるんだよ」

音使・アインハルト「!?!」

俺の技のタネをさらっと答える男性の声。

相良「よ！仕事が終わったから来た」

俺は翔の姿を見て、納得した。

確かに彼ならば俺の武器に気づけて当然だろう。

まあそれでも驚くけどな。

アインハルト「翔さん……どういうでしょうか？」

相良「音使は名前通りの音使いの戦士。その特徴的な部分があるとするれば、その視覚での確認がほぼ不可能のピアノ線だ。その上ただのピアノ線の強度の比ではない」

音使「その通り。俺はこの能力は『フリーシンガメン無に還った少女』と名付けてる」

相良「なるほどね。まあ詳しい能力は分からないけど、アイハの目には入らなかったと言っつのは凄いことだな」

確かにそうだ。

だが……この系は、ナギサですら肉眼で捉えられない程の細さだ。

それをも見切るお前は……何者なんだ……

……だったら

音使「ありがと。どうだ？俺と一戦でも」

一戦で、見切るか。

相良「……そうだな」

彼は自分の体をチラチラと確認しながらそう言った。

相良「取り敢えずさ、俺の全身に“それ”を絡めようとしなくてくれないか？」

音使「・・・すまん」

俺は慎重に慎重に彼に糸を巻きつけておこうかと思ったが・・・バシたな。

相良「まあいい。始めよう」

音使「ああ」

相良 Side

相良「1、2、3、4……」

準備体操をしていると、アイハが声をかけてきた。

アインハルト「あの……翔さん」

相良「ん？」

アインハルト「その……頑張ってください」

相良「……ありがとう」

小さな応援に、俺は頭を撫でてあげて返した。

アインハルト「っ／／／／／／／／／／」

アイハは頬を赤く染め、俺が手を離すと名残惜しそうな表情をする。

相良「また後でいっぱい撫でてやるから」

アインハルト「べ、別に撫でて欲しいなどと／＼／＼／＼／＼／  
とか言いつつ、内心は求めているのだろう。

年頃なのでまあ正直に言えないだろう。

音使「準備は？」

相良「OKだ！そんじゃアイハ」

アインハルト「はい」

相良「・・・行ってきます」

普段、妻であるルチア達に使っている言葉。

一人の大切な人にも、その言葉を使った。

アインハルト「はい／＼／＼行ってらっしゃい／＼／＼／」

そう言われた俺は心の中が熱くなるのを感じながら奏多の前に向かう。

音使「女神様のお言葉でも預かったかな？」

相良「・・・最高の女神の言葉を貰ったよ」

そう言って俺は右手に紅い勾玉。

左手に蒼い勾玉を持ち、前でクロスせる。

相良「マルス！！！！メルキュール！！！！」

「

セツト・アップ



紅と蒼の光が竜巻の様に俺を囲み、光が放たれた時、中から紅いジヤケットに縦に蒼いラインが入った姿になる。

そして右手には光を当てると紅みがかかる蒼い柄の刀がもたれた。

音使「新しい服だな。作り直したのか？」

相良「まあたまにはな」

そう言いながら俺は久しぶりの戦いになるので刀を握って感覚を取り戻そうとする。

相良「・・・よし。行くぞ！」

音使「ああ！」

俺は両足の裏に魔力を集め、瞬間的に爆発させる。

爆発させた勢いにより、俺の移動速度は上昇していく。

音使「・・・」

奏多は冷静に、右手に持たれる指揮棒を左から右にゆっくりと振る。

相良「っ！」

俺は右から迫る無数のピアノ線に気づき、刀に凍結の魔力変換資質を纏わせ、振るった。

相良「はああ！！！！！」

放った一閃は、ピアノ線が見えない者には空気を凍らせた様に見える光景になった。

音使「・・・凍らせ事も出来るのか・・・なら」

相良「っ！？」

だが、凍らせた線は一瞬で氷をまるでバターを切るかのように切り裂いた。

そしてそのまま俺に迫る。

相良「なんて切れ味だよ・・・なら！！！」

俺は久しぶりに抜刀術の構えをとる。

相良「・・・」

一呼吸し、そのまま勢いよく抜刀術を放つ。

相良「

「白刀技・銀翔抜刀」

」

刹那、白銀に染まる斬撃がピアノ線に直撃した。

相良「やったか!？」

音使「まだだ!」

相良「ぐあっ！！！！」

だが、俺に右腕を3本のピアノ線が掠めた。

まるで日焼けで皮を向いた様な痛み・・・

いや・・・それ以前に・・・

相良「何故・・・斬撃が効かない！？」

音使「翔のちからが少し鈍っているのも一つの理由だろうけど、大きな理由は俺のこの能力にある」

相良「能力・・・だと？」

音使「ま、種明かししたらつまらないからこのまま続けるけど・・・  
な！！！！！！」

そう言つと奏多は地面に向かって指揮棒を振る。

相良「なっ！？」

俺は反射的にバック宙で後ろに下がる。

相良「地面から・・・線が・・・」

音使「そうだ。俺は隙間があれば、どんな物でも通す程の細さまで線を細める事が出来る」

なんて厄介な武器だ・・・

抜刀術をも無効化する上に、液体以外の隙間なら完全に通す事が出来る線。

・・・距離の限界もなさそうだ。

・・・なら・・・

相良「マルス・メルキュール。モード『二挺拳銃』!!」

そう言うと俺の右手に紅い拳銃。左手に蒼い拳銃が持たれる。

相良「行くぞ!!」

そう言つと俺は自分の真上に紅と蒼の魔力弾を何発も出し、弾幕を張る。

相良 『

スターダスト・クラスタ  
星屑の流星群

!!!  
』

俺の放った無数の弾丸は、放物線を描く様に、そして流星群の様に  
上空から奏多に襲いかかる。

音使「・・・」



弾丸は奏多に迫り、爆発して大きな爆風を起こした。

アインハルト「今度は……」

アイハは次は当たっているだろうと思う。

相良「……なるほど……そういうことか！」

俺は二挺拳銃となっていた武器を再び刀に戻し、構える。

アインハルト「えっ!?!」

爆風からは、服も汚れず、無傷の奏多が姿を表す。

音使「気づいたか？」

相良「ああ。分かったよ、お前の……その武器の正体がな！」

先ほどの弾丸の爆発の瞬間を、俺は見ていた。

相良「さっき、弾丸が何故か軌道を変えた。それは“何か”によって方向を変えられたからだ。そこでお前のそのピアノ線がタネだ」

そして俺は、奏多が使う武器の正体を言う。

相良「お前の能力は  
能力だ!!」

運動エネルギーを自在に操る事ができ

つまり、真っ直ぐ向かっていた弾丸に、あのピアノ線が触れると、  
運動エネルギーを操作されてしまって、その軌道を変えられてしま

ったのだ。

更に先ほど、凍結で凍らせた時も、運動エネルギーを増加させてその強度を無限に上昇させて切り裂いたんだ。

抜刀術だって、運動エネルギーを零にして斬撃そのものの力を無効化したんだ。

音使「よく気づいたな。だけど、気づいた所でどうかできるか？」

相良「どうかしてやるさ！方法が無いなら 作ればいいだけだからな！！」

そう言っつて俺は刃に白銀の魔力を込め、切りかかる。

音使「どんな“力”でも、俺に攻撃を当てるのは不可能だ！！」  
そう言っつて奏多は更に線の数を増やし、四方八方から俺に襲いかかる。

相良「まだまだ・・・これくらいで苦戦するわけにはいかない！！」

そうやって俺は左手を前に掲げる。

相良  
☐

超能力  
サイコキネシス

☐

音使「なっ!？」

俺に迫っていた無数の線は俺に操られ、天井に張り付く。

相良「はあああああ!?!?!?!」

そのまま俺は白銀の一閃を放つ。

相良「そこだあああああ!?!?!?!」

音使「がっ!？」

一閃は奏多を若干切り裂いた。

相良「くっ……見切られたか」

奏多は当たる直前に3歩程後ろに下がっていた。

だから斬撃はあまり強く当たらなかった。

音使「……何が……一体……」

相良「超能力……俺の持っている能力で、一番嫌いな能力だ」

そう……この技は、俺を苦しめるきつかけとなったから……

俺を……独りぼっちにした能力だった。

相良「でも、これも俺なんだから……受け入れないとな」

そう言っつて、俺は再び刀を構える。

音使「……なら、もうこの技は使えないな」

そう言っつと無数の線は指揮棒に集結し、一本の血の様に赤い刀になる。

音使「この武器の、真の姿だな」

相良「良いだろう。受けて立つっ!!」

そう言っつてお互いに刃をぶつけ合う。

相良・音使「「てりゃああああああ！……！！」」

1 撃、2 撃……何度も何度もぶつかり合い、地面には無数の切り後が残る。

相良「くっ！……はああ！……！！」

音使「はっ！！！！ぐっ！！！！そこ！！！！」

両者互角の剣撃勝負。

相良・音使「「はあああああああ！……！！！！」」

最後の一闪をぶつけ合った所で、俺達は一度刀を納める。

相良「はあ、はあ、はあ……」

音使「はあ、はあ、はあ……、流石、総裁つてところだな」

相良「まあな。お前も、さすがだ」

剣術なら俺と互角。

これほど強い人間が別世界にいるとはな……



音使「お前は、これからどうするつもりだ？」

相良「明日、決戦になると思う」

音使「！？・・・そうか」

奏多は武器をしまい、アイハもこちらに駆けつけた。

アインハルト「お二人とも、お疲れ様です」

相良「ああ。引き分けちゃったけどな」

アインハルト「いえ・・・その、かつこよかったです」

少し恥ずかしそうにそう言う。

音使「はあ。まあいいや。取り敢えず翔、お前にお願いがある」

相良「ん？」

音使「俺を、陸軍管理本部に入れてくれないか？」

相良「え・・・」

それって・・・ナギサやエミリア達を・・・

相良「良いのか？ナギサ達は・・・どうするんだ？」

音使「大丈夫。別に会えなくなるわけじゃない。ただ、俺はこの世界をもっと知りたいんだ。この世界は、俺のいた世界とは違う。もっともっと見て・・・もっと新しい何かを得たいんだ」

相良「・・・」

その純粋な言葉、純粋な想い。

聞いていると、俺も似たような感覚を覚える。

相良「・・・良いよ。お前が入ってくれば助かる」

そう言って俺は右手をだす。

相良「今日から、また宜しくな」

音使「・・・ああ」

そう言って、俺と奏多は握手をする。

その後、奏多は部屋に戻り、俺とアイハはロビーでくつろいでいた。

相良「取り敢えず今日はお疲れ様」

アインハルト「はい。ありがとうございます」

アイハの動き、最初に出会った時よりも格段によくなっている。

無駄な動きも少しずつ無くなり、彼女の言う霸王流っていうのもその精度を増していった。

アインハルト「あ……翔、さん」

相良「ん？」

アインハルト「明日・・・決戦と言っていましたか・・・その時、他の戦力も攻めてくるかもしれません」

相良「・・・そうだな」

最近ではモンスターなどの大量発生は出現は無くなった。

エンディミオンで見つけた・・・あの2人組の男女・・・

あの二人が攻めてくるかもしれない。

ダークファルスの欠片も・・・どこかでまた・・・

・・・でも・・・

相良「大丈夫。父さんや母さん。それに奏多や零二やスイエル達がいる・・・それに」

そう言っただけ俺はアイハをギュッと抱きしめていった。

アインハルト「あつ／＼／＼／＼／＼」

相良「アイハがいる。・・・強くなったな」

アインハルト「あ・・・ああ・・・」

肩が湿っていくのを感じる。

きつと、泣いているのだろっ。

声を殺しながら・・・

アインハルト「（強くなった・・・そう褒められる事が、これほどまで嬉しかったのは知りませんでした。それは・・・翔さんだからこそ・・・なのかもしれません・・・）・・・ありがとうございませす」

相良「・・・ああ」

それからしばらく、俺はアイハの傍にいてあげた。

決戦の 때가、近づいてきた。

オーディン」…そろそろか」

はちて」…」

様々な想いと野望

それぞれが背負うものなどが揃った。



翌朝

決戦が、始まる。

旋律・戦慄と白銀の星屑 決戦に向けて（後書き）

次回より最終決戦編に入ります。

戦い＋過去話し＋別Sideのお話があり、そしてendストーリーに入ります。

・・・年内には終わりそうもございませぬね（ー・ー・ー）

開戦

(前書き)

さてさていよいよ最終決戦編に突入します!!

長かった・・・ほんとに長かった・・・(5ヶ月くらい)

このまま最終回に向けて頑張っていきます!!

応援宜しくお願い!!

## 開戦

・・・翌朝。

相良「・・・」

今、陸宙管理本部総裁室に、俺が呼び揃えた者が集結している。

谷島芳樹、エトワール、スイエル、リオナの4人が揃う。

相良「よし・・・このメンバーで行くか」

谷島「少くないか？」

確かに、何十人もいる中で俺を含めて5人メンバーは少ない。

相良「敵が逃げる可能性もあるからな。それに、もし俺がいない間に陸宙管理本部や地上が狙われたらまずいからな。そのためにメンバーは少数で更に実力がある4人にしたんだ」

父さんと母さんにも声をかけたけど、二人は地上本部や時空管理局のほうに行くらしいからな・・・

エトワール「・・・ルチアさんは？」

相良「・・・」

ルチア・・・結局、連絡がつかないままで今になった。

相良「まあ、あいつなら・・・別の場所に行ってるんだろ」

適当にごまかし、俺は転送魔法陣に向かった。

相良「行くぞ皆。決着つけて・・・さっさと平和な日常に戻ろう」

そう言つと、皆返事を返し、俺たちは転送される。

そう

奴のいる場所は、  
“知っている”。

何故なら、敵は

俺自身なのだから。

谷島「っ！？な・・・なんだこっ！？」

スイエル「これは・・・」

リオナ「さつきまで、晴れてる世界だったのに・・・」

エトワール「・・・」

相良「あの野郎・・・本気で神様気取りみたいだな・・・」

俺たちが転送された世界は、まるで銀河の中にいるような感じだった。

空は晴れていた俺たちの世界とは逆で、宇宙の星達が様々な色を出し、俺たちが立っている地面は、まるで水面の様に、空の景色を投影した様な姿になっていた。

俺達は宇宙の中を立っているかのような錯覚に陥りそうだった。

??」「よっこそ。我が・・・いや、神々の戦いの終着点へ」

相良「っ！！！」

そして俺たちの前に現れるのは、オーディンとはやて・・・そして

谷島「アリア!？」

何故か、神崎・H・アリアが奴の味方となっていた。



相良「お前……アリアに何をした!？」

オーデイン「……我らの目的に賛同したものだ」

谷島「てめえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

芳樹は両手にデザートイーグルを持ち、魔力を込めた銃弾をオーデインに放った。

アリア「……」

だが、芳樹の放った銃弾をアリアが自らの二挺拳銃で打ち返す。

谷島「なっ……アリア……お前……」

相良「オーデイン……お前……」

俺と芳樹はオーデインを強く睨みつける。

リオナ「でも、数は私達の方が多いよ。あんたたちの方が不利なはず!」

確かに現状では、相手が3人で俺たちは5人いる。

オーデイン「……」

だが、オーデインは動揺せず、何故かエトワを指さした。

相良「……」

オーデイン「相良翔。 “お前も” 龍と契約を結ぶことが出来たのだな」

相良「何……まさかっ!？」

まさか……あいつも……

オーデイン「龍を呼び出せるのは、お前だけではない」

そう言うと、突如として空間が揺れ始める。

そして感じる……強力な力。

谷島「なんだ……この……重さは……」

スイエル「何が……一体……」

リオナ「くう……」

重庄にも感じるそれは、何かが現れる余兆に感じる

オーディン「王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を見る  
がいい！」

相良「まさか・・・龍召喚の詠唱!？」

そして上空から、巨大な紅と黒の龍が現れる。

オーディン『我が魂

真紅レッド・デーモンズ・ドラゴンの悪魔龍

！  
』

相良「こいつ……」

流石は俺……か。

エトワの守護の力と逆で、破壊の力を感じる。

オーデイン「やれ！レッドデーモンズ！！！」

そう言つと、龍の口から黒にも近い紅い炎が放たれる。

相良「エトワ！頼む！」

そう言つと、エトワは無言で頷き、俺は詠唱する。

相良『集いし願いが新たに輝く星となる。光指す道となれ!!!飛  
翔せよ』  
星屑スターダスト・ドラゴンの龍  
!!!』

そう言うと、エトワは姿を変え、巨大な星屑の龍となる。

オーデイン「良いだろう・・・レッド・デーモン!! やつを焼き尽くせ!!!!」

相良「迎え撃て!!!!!!」



レッド・デーモンズ・ドラゴン

『

『クリムゾンヘルフレア  
地獄の真紅炎

スターダスト・ドラゴン

』

『シューティングソニック  
超音速の流星

』

二つの龍が放つ真紅と白銀の炎と光はぶつかり合い、巨大な爆発と衝撃波を起こす。

相良「行くぞ!!」

オーデイン「来い!!」

そして、この2体の龍のぶつかり合いが、この戦いの始まりを告げた。

## 開戦

(後書き)

レッド・デーモンズ・ドラゴン・・・とうとう出ましたね。

IKA「いつだそうかなって考えてたらこのタイミングになりました。次回から本格的に最終決戦ですね。そしてルチアや右蕪達の行動のほうや、更に更に別の場所でも物語りが・・・と、最終決戦は異常に長くなりそうです」

それぞれの決戦

(前書き)

今回は別sideの話し。

ラスボスはオーデイン達・・・だけではない。

## それぞれの決戦

・・・相良翔達が決戦の中、陸宙管理本部に新たな通信が入る。

音使 Side

音使「・・・なっ!?!」

ミッド上空より、漆黒に染まる一体の龍が地上に向かって攻撃をしていた。

音使「あれは・・・ダークファルス!?!」

なんで・・・まさか、欠片が揃ったっていつのか!?!

芳乃「奏多!」

音使「零二・・・」

零二が紗雪、なぎさ、サクラを連れてここに来た。

更にアインハルト、ヴィヴィオやシュテル達もこちらに来た。

シュテル「強い闇を感じます」

アインハルト「あれはなんでしょうか?」

音使「あれこそ、この前アインハルト達を襲った奴らの目的さ。あれはダークファルス。欠片108個揃えた時に現れる筈……だが……」

まさか……この世界でたった20人の中にそれだけの欠片があったのか!?

……いや、魔力の心臓とも呼べる、リンカーコアが、欠片の変わりになっているのか……

音使「いずれにせよ、早々に対処しないと……」

だけど、奴の実力は計り知れない。

更に厄介なのは、この世界の“魔力”を取り込んでいること。

俺たちの世界には魔力なんて存在しないからな。

今まで戦ってきた敵の中で……一番かまな……

……いや、それは違うか。

音使「とにかく、俺は奴を倒しに行く」

芳乃「なら、俺たちも」

だが、アラートはもう一っせうてくる。



【緊急報告！！ミッド北部に、未確認生物多数出現！！更に、召喚魔導士と思われる男女2名を発見】

音使「何・・・」

芳乃「あの時のか!？」

シュテル「こちらとしては、何とタイミングの悪いことでしょうか」



そうやって俺たちは転送魔法陣に乗り、2手に別れて向かうのだ  
た。

音使「・・・遅かったか」

俺たちが現場に駆けつけた頃には、既に半径10キロは焼け野原と

なっていた。

確かここ周辺には、ショッピングモールがあつたな・・・

アインハルト「酷い・・・」

ヴィヴィオ「なんで・・・こんな・・・」

シュテル「現代では、滅多に見られない光景ですね」

各々想う事があるだろう。

けれど、目的は一つだ。

音使「・・・行くぞ！」

そう言うと、ヴィヴィオとアインハルトは大人の姿へと変わり、シュテルは上空に上がった。

シュテル「私が上空から援護致します」

音使「アインハルトとヴィヴィオは行ってくれ！俺も援護しながら戦う」

ヴィヴィオ・アインハルト「はい！」

そう言つて、俺はシュテルとヴィヴィオ達の丁度間あたりの距離に立ち、指揮棒をだす。

音使「さあ・・・演奏の始まりだ」

俺は静かに、指揮者の様に棒を振る。

ヴィヴィオ「やあ!!!!」

アインハルト「はあ!!!!」

ヴィヴィオとアインハルトは龍の腹部を同時に殴る。

ヴィヴィオ「つつ・・・」

アインハルト「硬い・・・」

だが、二人の拳はびくともせず、弾かれてしまつ。

シュテル「ならば・・・」

シュテルは朱い魔力弾を3発放つ。

放った弾丸は奴の頭部に直撃する。

シュテル「!?!」

だが、シュテルの弾丸は爆発まではするものの、ダメージを与える程ではなかった。

音使「こいつは・・・一筋縄じゃ行かない見たいだな・・・」

それでも、ダークファルスは進行を止め、俺たちの方を向いた。

これで被害が拡大するのを防げる筈だ。

音使「皆!ここからが本番だ!!」

そう言っつて、戦いを続けるのだった。

芳乃 Side

俺たちは転送された場所に着く頃、既にそこには大量の生物によって街などは崩壊していた。

なぎさ「酷い……」

紗雪「戦争みたい……」

サクラ「……」

芳乃「取り敢えず、術者を探そう。そいつらを倒せば、こいつらも

きつと・・・」

そう言うと、俺たちの前に現れる、二人の男女。

??「初めまして。そしてようこそ、終わりの始まりの場所へ」

真っ黒な刀と髪をした少年と・

??「それでは、ここで全てを終わらせましょう」

真っ白なポニーテールの髪とライフルを持つ少女。

芳乃「させるかよ・・・絶対にな!!」

そう言って、俺は拳に蒼き魔力を纏わせる。

芳乃「おおおおおおおおおお!!.....!!」



芳乃  
☐

フェンリスヴォルフ  
神討つ拳狼の蒼槍

!!  
!!  
!!  
☐

??  
□

地獄へ導く一閃  
ヘル・スラッシュ

□

蒼き拳と漆黒の一閃がぶつかり合い、巨大な爆発を起こす。

紗雪・なぎさ「」

『ゲイト・オープン  
魔術兵装  
』

「!!」

二人は剣と二挺拳銃を手に、攻撃を始める。

??「二人の相手は

私」

そう言つて白き少女は紗雪達に銃弾を放つ。

紗雪・なぎさ「「っ!?!」」

その一発の銃弾は放たれた瞬間、2つ・・・4つ・・・8つと、徐々に徐々に数を増やし、気づく頃には100を超えた。

紗雪「!」

紗雪は自分たちに当たるであろう弾丸のみを光速で撃ち抜く。

なぎさ「っ!?!」

なぎさはその大きさとはい裏腹に素早く振り回し、全ての銃弾を切り裂く。

芳乃「さくら！」

サクラ「わかってるんだよ！」

サクラの能力は、見た魔導士のステータスを作り出す能力。

俺にその情報を伝達することができる。

サクラ「!？」

芳乃「どうした？」

サクラ「・・・情報が、作成できないんだよ。きっと、情報が少なすぎるから・・・」

だとすると、もっと戦って見ないと分からないってことか・・・

芳乃「上等じゃねえか。行くぞ、さくら！」

サクラ「うん！」

「サクラと俺は、黒き剣士を、紗雪となぎさは白き狙撃手と戦うのだ  
った。」

ルチア Side

ルチア「・・・」

私は、右蕪さん達の家のモニターで、今の地上を見ていた。

徐々にその姿を荒れ果てた土地に変えていく。

戦いは徐々にその激しさを増し、そのたびに街が壊れたりしている。  
ている。

ルチア「私は・・・何してるんだろ・・・」

こんな所で、何をのんびりしているのだろうか？

右蕪「見ていて、何とも思わないか？」

ルチア「右蕪さん・・・」

右蕪さんは私に声をかけてくる。

右蕪「今、俺の息子が戦ってる。誰かのためにな」

ルチア「それは・・・」

きっとそれは、翔の仲間達の為。

私もその中であると嬉しいけど、ホントのところ、翔の事を思うと、  
辛い。

右蕪「・・・」

ルチア「・・・その、私・・・翔に頼られたりするの、嬉しいんです」

私は気づくと、右蕪さんに本心を話していた。

ルチア「翔の事が大好きで、いつも翔に甘えっぱなしだけど、そんな翔に頼られるのが嬉しくて・・・今回も、もし何かあったときには傍にいてって頼まれて・・・嬉しかったです」

そう・・・ほんとに、嬉しかった。

ルチア「でも・・・好きなのに、嬉しいのに・・・苦しいんです」

あのクリスマスの日・・・思ってしまった。

ルチア「翔の事を想うと、辛くて・・・苦しくて・・・だから、傍に  
いることが怖いんです」

そう・・・翔の事が嫌いになった訳ではない。

けれど、想えば想うほど、心が締めつけられる様な痛みがする。

だったら・・・

右蕪「嫌いになったわけじゃないのだから？」

ルチア「当然です。私が・・・翔の事を・・・」

嫌う訳がない。命の・・・恩人だから。

右蕪「・・・」

右蕪さんは、私の目をのぞき込む様に見つめてきた。

ルチア「あ、あの・・・なんですか？」



右蕪「……いや、何を言ってるんだろうなって思ってた」

ルチア「え……」

次の瞬間、右蕪さんは無表情のまま、言った。

右蕪「今、そんなくだらない事を考えてる暇があるのか？世界が、仲間が、大切な人が必死で頑張る中で、想うだのなんだのって……そんなどうでもいいことを考えてる暇がどこにあるんだ？」

ルチア「っ……」

普段、優しい右蕪さんからは想像もつかないような、鋭く……冷たい声。

右蕪「翔は間違いなく、ルチアの事が好きだ。そして待ってる。な  
のにお前はここでうじうじと・・・待ってる人がいるのに、お前は  
無視するのか!？」

ルチア「右蕪・・・さん」

私は・・・無視してるの？

翔を・・・

大切な人を・・・

ルチア「・・・」

私は、左薬指にはめてある、黒いダイヤが付いた指輪を見る。

翔が、私と結婚すると気にくれたもの。

今思うと、あの時から・・・ううん。もっと前から、翔は星屑の代  
償に苦しんできていたはず。

だって、忘れてしまうなら、幸せを手にしない方がいいと想うはず  
だから。

少なくとも翔は、誰かを傷つけてまで幸せを手にしよつとは考えない。

そんな翔は、呪縛があるにもかかわらず、私達と幸せになる道を選んだ。

私は・・・こんな所で、そんな立ち向かっている翔を否定するの？

・・・違う。

違う、違う・・・全然違うよ!!!

ルチア「私は・・・翔の支えになりたい!!」

右蕪「・・・」

右蕪さんは、そっと微笑み、私の足元に魔法陣をだす。

右蕪「ならば、行ってこい。お前しか、今の翔を助けられない」  
ルチア「・・・はい」

そう言って、私は転送された。

右蕪「行つたか」

火澄「そうね・・・あの子が、“運命の女”になるなんてね」

右蕪「・・・“男を破滅に導く運命の女”か・・・」

そして、様々な想いがぶつかり合う戦いは、この3つの場所で行われるのだった。

## それぞれの決戦

(後書き)

右蕪と火澄には様々な秘密があると思わせるlastでした。

この二人の会話が、後の物語りに大きく影響します。

今回は再び色々なsideストーリーを繰り広げ、戦いが進みます。

## 見えぬ勝機

リオナ Side

はやて「バルムンク!!!」

扇状に魔力の刃が放たれる。

私達はそれをバツク宙で避ける。

リオナ「ライトニング・スラッシュ雷討つ刀虎の一閃」

私は紅き雷を纏わせた一閃を放つ。

はやて「っ!!!」

ただどはやてさんはそれをシュベルトクロイツとぶつけ合って防ぐ。

はやて「ブリューナク!!!」

スイエル「アイギス・サンシャイン拒絶の緑光壁  
!!!」

はやてさんが放つ無数の魔力弾をスイエルの緑色の光の壁が防ぐ。

リオナ「スイエル……」

スイエル「お兄ちゃんの約束だから守るだけ。ほんとはあんたなん



か嫌いなんだから」

リオナ「・・・うん」

そう言っつて私とスイエルは背中合せではやてさんの方を向く。

はやて「遠き地にて、闇に沈め

」

え・・・この詠唱は・・・!?

リオナ「スイエル!!! 防御!!!!」

スイエル「わ、分かった!」

そう言っつて私とスイエルは両手を合わせて二人の防壁を組み合わせる。

はやて「デアボリック・エミッション！！」

はやてさんを中心に漆黒の魔力球が広がっていく。

リオナ・スイエル  
☐  
☐

拒絶の雷光壁  
ライトニング・アイギス

!!  
☐  
☐



はやて「響け

終焉の笛

」

リオナ・スイエル ♪ ♪

ライトニング・アイギス  
拒絶の雷光壁

♪  
♪

はやて「ラゲナロク……!!」

そして放たれた強大な砲撃は、  
私たちに迫って

芳乃 Side

戦闘開始から早くも2時間が経過していた。

芳乃「おおおおおおお!!!」

俺は黒騎士に向かって魔力を纏わせた拳を放つ。

芳乃「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍!!!」

??「ヘル・スラッシュ地獄へ導く一閃」

黒と蒼の光がぶつかり合い、大地が削れる。

相手が刃でくるため、俺は全身に魔力を鎧の様に纏わせて戦う。

それは、切られないため。

サクラ「マスター!!!」

サクラが俺を呼ぶって事は・・・

芳乃「よし・・・行け!!!」



「? ?」  
「! ?」  
「?」

サクラ  
ラ

穢<sup>レイ</sup>れ<sup>ヴァ</sup>なき<sup>ティ</sup>桜<sup>イン</sup>光の聖劍

!!  
」

光速で放たれる桜光の閃光。

強大なその閃光は、全てを焼き尽くすかのように彼に向かっていく。

??「・・・ならば」

芳乃「・・・」

俺はその場から離れる。

だが・・・なぜだ？

何故・・・奴は冷静でいられるんだ？

・・・まさか・・・



芳乃  
□

復元する世界  
ダ・カーポ

術式固定  
アインハルト

□

その瞬間、世界が漆黒に染まった。

これは・・・斬撃か!?

芳乃「ぐあっ!!!!!!」

俺の腹部に、浅く斬撃が通った。

芳乃「くっそ・・・」

俺の技が・・・

サクラ「マスター!？」

サクラが俺に肩を貸す。

芳乃「悪い・・・だけど、何だ・・・あれは!？」

奴の右手に持たれるのは、禍々しく、闇の龍を模した様な柄に滅刻と書いてある一本の巨大な剣。

??  
□

ギャラクシーフレード  
超銀河剣

T H E  
F I N A L

□

その剣は、俺の復元する世界の力をも切り裂いた。

不味いな・・・



芳乃「サクラ、今まで以上に覚悟するぞ」

サクラ「……うん!!」

出来れば、もう一人くらい実力者が欲しい。

だが、紗雪もなぎさも無理そうだしな……

サクラ「マスター。私、全力を出すんだよ」

芳乃「……分かった」

だけど……それまでの間、奴を足止め出来るか……

芳乃「そんじゃ、俺は大怪我覚悟で行くか……」

死ぬ気でやるしかないようだ。

芳乃「……」

だが、足が震えて動かない。

あの剣から放たれる巨大な殺気に、俺は動けずにいた。

先ほど切られた傷が痛む。

??「どうだ？この破壊に満ちた剣は？」

芳乃「破壊しか出来ない剣なんて・・・ぶっ壊してやるよ」

そう言っつて俺は気合を入れ直し、再び全身に魔力を込める。

??「ふ・・・所詮その場しのぎの技しか持たぬお前では勝てないぞ！」

そう言っつて奴はその刀を振るおうとする。

芳乃「っ・・・」

正直、どんな手段を考えても・・・勝てる方法が無い。

こんなこと、何度も何度もあった。

だからこそ、諦めず・・・何か手段を探した。

??  
□

銀河一閃  
ギャラクシー・スラッシュ

□

迫り来る絶望の一閃。

紗雪 Side

紗雪 『

ヴァイス・シユバルツ  
福音の魔弾

!!!』

十字架を描くように光速で彼女に弾丸は迫る。

?? 『

ヘブンス・ショット  
天国へ誘う弾丸

』

そう言っ放たれたのは、純白の弾丸。

その弾丸は私の弾丸を全体的確に撃ち抜く。

なぎさ「はあああああ!!!」

その隙になぎさが背後から切り込む。

??「っ!!!」

彼女は自分の足もとに弾丸を放ち、その反動でジャンプしてなぎさを一閃を避けた。

??」

↑  
フンス・ストライク  
天国へ誘う魔弾

」

なぎさ「っ!?!」

上空から彼女はなぎさに向かって純白の弾丸を3発連続で放つ。

なぎさは剣で防ぐけど、その威力に吹き飛ばされる。

なぎさ「ぐっ……」

紗雪「大丈夫?」

なぎさ「うん。でも、彼女強い」

確かに、ライフルで剣と二挺拳銃の二人を相手出来るなんて……  
相当な実力者だ。

??「戦いが長く続くのも飽きるから、そろそろ終わらせるよ」

そう言うと、ライフルの銃口が変化し、魔法陣が現れる。

そこに集結する巨大な力。

紗雪・なぎさ」「っ!?!」「」

私達はすぐに武器に力を込める。

紗雪『

ヴァイス・シユバルツ  
福音の魔弾

!!!!!!」





??  
☐

超銀河弾  
ギャラクシーショット

H  
E  
L  
L

☐

放たれた弾丸は、私達が今まで見てきた弾丸の域を恐ろしい程上回り、眼前を埋め尽くす『絶望』。

私達の武器の攻撃は全て破壊され

音使 Side

音使 『

フリーシンガメン  
無に還つた少女』

』

地面から、そして左右から目に見えないピアノ線を出し、ダークフアルスを縛る。

音使 「つつ．．．切れない．．．」

俺の使う線は運動エネルギーの入れればなんでも切れるのだが．．．  
ダークフアルスは切れない。

相手の動きを止めることで精一杯だ。

シュテル 「ブラストファイアー！！」

夕焼色の砲撃が連続で3発放たれる。

ヴィヴィオ 「ソニックシューター！！」

アインハルト 「霸王空破断！！」

二人は拳から魔力弾と衝撃波を放つ。

3人の攻撃は直撃するが、それほど大きなダメージとはならない。

音使「なんて硬さだ・・・」

俺たちは集まり、構える。

ヴィヴィオ「どうすればいいの!?!」

アインハルト「このままでは、こちらの魔力がもっていかれます」

シュテル「大技を無理に使ったとしても、相手の体力では追い込むのは難しそうですね」

音使「くそ・・・力が足りないな・・・」

だが・・・ここで諦めるわけにもいかない。

ダークファルス「諦める」

音使「何・・・」

ダークファルスが喋れるのか？

ダークファルス「この姿は、様々な人間の影が集まった結果だ。それを貴様らは否定するのか？」

音使「・・・どうでもいい。そんなこと  
俺たちにとっては  
どうでもいいことだ。人の影が集まったから何だ？それは破壊の理由にはならないし、ましては人の人生を奪う理由になんて、なれやしないんだ」

そう言っただ俺はピアノ線を一点に集める。

音使「シュテル。お前の砲撃を俺に放て」

シュテル「！？どういうことか、説明をお願いします」

音使「お前の砲撃を、俺の武器で反射させ、それによって威力を上昇させてヴィヴィオとアインハルトの同時攻撃を組み合わせる」

ヴィヴィオ「な、なんか難しそうだね」

アインハルト「それに、私達の息が合わない・・・」

音使「大丈夫。俺は指揮者だ。音を合わせるくらい、どうってことない」

そう言っただ俺はシュテル達を中心に立つ。

シュテル「・・・」

シュテルは俺の後ろで詠唱を始める。

シュテル「走れ赤星

すべてを焼き消す炎と変われ！」

そう言ってシュテルは収束砲を放つ。

シュテル『真・ルシフェリオン・ブレイカー!!!!!!!!!!!!!!』





シュテルの砲撃を俺のピアノ線が反射させ、ヴィヴィオとアインハルトの魔力砲と混ざり、ダークファルスを飲み込んだ。

音使「やったか!？」

俺たちは爆風が消えるのを待つ。

ダークファルス「舐めるな!!」

全員「……っ!?!」「……」

だが、ダークファルスは煙の中から姿を表す。

音使「ダメージは大分あるみたいだ」

シュテル「ですが、今ので魔力は多く失いました。出来ても後

1発  
」

音使「1発か・・・」

相手も次は対応するだろうからな・・・

ヴィヴィオ「ヴィヴィオ、もう1発なら、頑張れるよ」

アインハルト「はあ、はあ・・・私も、後1発なら・・・」

そうか・・・くそ・・・

ダークファルス「諦めろ」

そう言っただークファルスは俺たちに向かった漆黒の炎を吐いた。

音使「まずい・・・っ！！！！」

シュテル「手伝います!!」

そう言っただシュテルは砲撃を1発放つ。

俺はピアノ線を網状にして、壁を作った。

シュテル「ブラスト・・・ファイアー！！！」

音使「フリーシンガメン 無に還った少女  
！！！！」

二人の技で炎を防ぐ。

だが、徐々に押され・・・

音使「ここまでか・・・」

そして炎は俺たちを包み込んだのだった。

見えぬ勝機

(後書き)

戦いの描写が苦手なのですぐに終わる気がする)――(;

まあそんななかでも物語りは続くのでね)――(;

次回もお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8747s/>

---

魔法少女リリカルなのはVivid ~World Infinity~

2011年12月30日01時47分発行